

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106

## 百間川原尾島遺跡 5

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 XI

1996

建設省岡山河川工事事務所  
岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106

# 百間川原尾島遺跡 5

旭川放水路(百間川)改修  
工事に伴う発掘調査 XI

1996

建設省岡山河川工事事務所  
岡山県教育委員会



1. 製塩炉（西から）



2. 39・40C区弥生時代後期末水田・水路（北西から）



1. 18・19C・D区溝35(北から)

$\times \frac{1}{4}$



935

S98

2. 同上遺構出土遺物



1. 16~19C・D区中世遺構全景（北西から）



2. 土墳墓3（南から）・出土湖州鏡



1. 全調査区出土玉類



2. 土壙89一括出土石器

## 序

旭川放水路（百間川）の築造は、寛文9年（1669年）岡山藩士津田永忠によって手がけられ、その後いく度かの改修を加えられ現在に至っています。

昭和49年度から着手した抜本的な改修では、沿川住民の方々をはじめとする関係者のご協力のもとで、現在までに百間川本川の堤防は最下流端部を除きほぼ既成し、治水機能の向上がはかられ、河川内道路の橋梁架け替えも今年度の中島・竹田橋の開通により全て完了いたしました。

また、改修事業により新たに生み出された河川敷は、スポーツ・レクリエーション・自然観察の場として岡山市民の憩いの場を創出し、多くの方々に利用されています。

百間川の遺跡調査は改修工事に先立ち、工事の影響する部分について記録保存するため、岡山県教育委員会に委託し実施しているところです。

百間川遺跡群は、通称大曲がりと呼ばれている岡山市米田の百間川中流部（江戸期以前の海岸線）より、岡山市原尾島にある国道2号百間川橋梁の上流まで広い範囲に点在しており、その規模は発掘調査の進捗に伴い、昭和51年度の確認調査時点での予想を上回る大規模なものとなっております。

また、今年度も稀にみる大規模な貝塚が発掘されるなど、調査開始以来19年を経てなお新たな発見が続いています。

本書は、百間川遺跡群のなかで最上流部に位置している百間川原尾島遺跡について、平成2年度までに実施した調査の最終報告にあたるもので、過去に発刊された4分冊を含めた全体を通じてのまとめも収録したものであり、学術および文化の振興に大きく寄与することを願うものです。

最後に、発掘調査並びに本書の編集にあられた岡山県教育委員会を始めとする関係各位に対し、河川改修に対する御理解と御協力をいただき心より感謝申し上げます。

平成8年3月

建設省岡山河川工事事務所

所長 佐 合 純 造

## 序

岡山平野のほぼ中央部を南北に貫流する旭川は、その下流域に沖積平野を形成し、肥沃な穀倉地帯を生みました。そして、平野の各所と周囲の各丘陵部には、この地域の歴史を物語る遺跡が数多く残されています。この旭川の東岸から分岐し、操山の北裾から東端をめぐる南下して児島湾に注ぐ百間川が、江戸時代に岡山城下を洪水から守るために造られた人口の河川であることは、広く知られているところです。

この旭川放水路（百間川）の本格的な改修工事が、建設省によって昭和50年から着工されることになり、岡山県教育委員会は河川敷内に所在する遺跡の取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所と協議を重ね、やむをえず破壊される部分については記録による保存処置をとることになりました。

発掘調査は、昭和51年度の確認調査に引き続いて昭和52年度から本調査に着手し、本年で19年目を迎えています。この間、3km以上もの広がりをもつ弥生時代後期の水田跡をはじめ、縄文時代後期から中世にいたる集落の一端が明らかになるとともに、それらの各時代に伴う貴重な遺物も多く発見され、全国的にも注目される複合遺跡として知られるようになってきました。

これらの発掘調査の成果については順次報告書にまとめ、刊行・公開しているところですが、本書は百間川遺跡群の報告書としては11冊目、百間川原尾島遺跡では5冊目に当たります。本書に収録した調査区では、縄文時代後期の集落や弥生時代後期の製塩炉などの遺構、それに奈良～平安時代の祭祀に伴う人形・斎串や鎌倉時代の土塋墓に伴う青磁椀・皿・湖州鏡などの遺物が発見されており、それぞれ県下でも例が少ない遺構・遺物として特に注目されます。そして、本書は百間川原尾島遺跡全体の当面の区切りにも当たることから、5分冊全体を通じてのまとめも収録しました。

この報告書が、文化財の保護・保存、さらに今後の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成に当たっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々の御教示と御指導を得、また建設省岡山河川工事事務所をはじめ関係各位から多大な協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩之助



## 例 言

1. 本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局の委託を受け、岡山県教育委員会が1983（昭和58）年度から1988（昭和63）年度に発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は百間川原尾島遺跡の報告書としては5冊目にあたり、報告書名の「百間川原尾島遺跡」は、岡山市原尾島に所在する原尾島遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる範囲をさす。
3. 発掘調査は1984年10月以前を岡山県教育庁文化課が、1984年11月以降を岡山県古代吉備文化財センターが担当し、本報告書掲載の発掘調査の地区・担当者・期間は、本文表1に示す通りである。
4. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元岡山市立犬島中学校校長）

鎌木義昌（岡山理科大学教授）〈1993年2月まで〉

近藤義郎（岡山大学名誉教授）

角田 茂（元岡山市立岡輝中学校教諭）

出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課）

水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）

山本悦世（岡山大学埋蔵文化財研究センター助手）〈1993年4月から〉

5. 本報告書の作成は、1994年度に岡山県古代吉備文化財センター柳瀬昭彦・高田恭一郎が担当して行い、遺物の実測・トレース・写真撮影などについては文中に明記した方々の協力を得た。
6. 本文の執筆は、調査を担当した井上 弘・柳瀬昭彦・岡本寛久・平井泰男・高田恭一郎が分担し文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。また、本書の編集は柳瀬昭彦が担当した。
7. 本報告書に關係する遺物のうち、一部について鑑定・同定あるいは分析を下記の諸氏ならびに機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのうちのいくつかについて報文をいただいた。記して厚く御礼申し上げる。

土器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

ガラス小玉およびガラス滓 苅谷道郎（株式会社ニコン・相模原製作所）

管玉の産地分析 藁科哲男・東村武信（京都大学原子炉実験所）

木製品樹種同定・種実同定 パリノ・サーヴェイ

赤色顔料の蛍光X線分析 魚島純一（徳島県立博物館）

獣骨鑑定 松井 章（奈良国立文化財研究所）

墨書鑑定 狩野 久（岡山大学文学部）

人骨鑑定 川中健二（岡山理科大学理学部）

8. 出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

## 凡 例

1. 百間川原尾島遺跡は小字名で調査区を分け、本報告書の第3章では基本的に調査区ごとに時代の古い順に遺構を取り上げ、説明を加えてある。また、調査区とは別に20m方眼を組み、上流（北西）から下流（南西）へのびる軸線にA・B・C……のアルファベットを、それに直交する軸線には1・2・3……の算用数字を付し、最小グリッドの表現方法として、軸交点に区を付けた例えば10C区は、その南側（右下）の樹目の範囲を示す。
2. 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏6°30′を測る。
3. 本報告書に使用した高度は、すべて海拔高度である。
4. 土層断面図等の土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものもあるが、各調査者の記述に従った。
5. 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は下記のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

### 遺構

堅穴住居・建物 1/80、井戸・土壇・土壇墓・溝断面 1/30、遺構配置図 1/300

### 遺物

土器 1/4、石器および石製品・金属器および金属製品・土製品 1/2、木器および木製品 1/3、玉類 1/1

6. 遺構配置図に示す遺構名は、原則として下記に示すように略称を用いた。  
堅穴住居：住、建物：建、井戸：井、土壇：土、焼土面：焼
7. 土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径の推定が困難なものである。
8. 遺物番号のうち、土器以外のものについてはその材質を示すため、下記に示すように頭に略号を付した。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号を用いた。  
石器および石製品：S、金属器および金属製品：M、木器および木製品：W、玉類：J
9. 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土地理院の1/2500地形図の和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小し、加筆したものである。
10. 本報告書で使用した弥生時代から古墳時代前半期の時期区分は、「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39において採用した、次頁に示す土器編年に基づいている。なお文中では、百間川前期Ⅲは百・前・Ⅲ、百間川後期Ⅱは百・後・Ⅱ、百間川古墳時代Ⅰは百・古・Ⅰなどのように略称を用いた。

編年対比表

時代		遺跡	百問川	雄町 <sup>(註1)</sup>	上東・川入 <sup>(註2)</sup>	
弥生時代	前期	津島	百問川前期Ⅰ			
			百問川前期Ⅱ	雄町 1		
		門田	百問川前期Ⅲ	雄町 2		
	船山 3					
	中期	南方	百問川中期Ⅰ	高田		
				雄町 3		
		菰池	百問川中期Ⅱ	船山 5		
				菰池		
				雄町 4		
				前山Ⅱ		
	前山Ⅱ	百問川中期Ⅲ	前山東			
			雄町 5			
	仁伍		雄町 6		上東・鬼川市 0	
	後期	上東	百問川後期Ⅰ	雄町 7		上東・鬼川市Ⅰ
				雄町 8		
百問川後期Ⅱ			雄町 9		上東・鬼川市Ⅱ	
			雄町 10			
グランド上層		百問川後期Ⅲ	+	上東・鬼川市Ⅲ		
酒津		百問川後期Ⅳ	雄町 11		才の町Ⅰ	
					才の町Ⅱ	
古墳時代	前期	玉泊六層	百問川古墳時代Ⅰ	雄町 12	下田所	
			百問川古墳時代Ⅱ	雄町 13	亀川上層	
			百問川古墳時代Ⅲ	雄町 14	—	
			百問川古墳時代Ⅲ	雄町 15	川入・大溝上層	

註1 正岡陸夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年

註2 柳瀬昭彦他「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査および報告書作成の経緯	7
第1節 発掘調査の契機	7
第2節 調査および報告書作成の体制	8
第3節 調査の経過	11
第4節 報告書作成の経過	13
第3章 調査の概要	15
第1節 三股ヶ・丸田調査区	15
1. 調査区の概要	15
2. 縄文時代の遺物および弥生時代前・中期の遺構・遺物	17
(1) 旧河道	17
(2) 土壌	29
(3) 溝	32
3. 弥生時代後期の遺構・遺物	35
(1) 竪穴住居	36
(2) 建物	47
(3) 井戸	50
(4) 土壌	61
(5) 溝	105
(6) 水田・水路	109
(7) 土器溜り	111
4. 古墳時代の遺構・遺物	112
(1) 竪穴住居	113
(2) 建物	118
(3) 井戸	120
(4) 土壌	126
(5) 溝	127
5. 古代の遺構・遺物	137
(1) 溝	137
6. 中世の遺構・遺物	145
(1) 建物・柱穴列	146

(2) 井戸 .....	154
(3) 土壌 .....	157
(4) 土壌墓 .....	157
(5) 溝 .....	161
7. その他の遺構および包含層の遺物 .....	167
第2節 三ノ坪・横田調査区 .....	171
1. 調査区の概要 .....	171
2. 縄文時代の遺構・遺物 .....	172
(1) 土器溜り .....	172
3. 弥生時代前・中期の遺構・遺物 .....	175
(1) 竪穴住居 .....	175
(2) 土壌 .....	176
(3) 焼土面 .....	208
(4) 溝 .....	209
4. 弥生時代後期の遺構・遺物 .....	215
(1) 井戸 .....	215
(2) 土壌 .....	216
(3) 製塩炉 .....	217
(4) 溝 .....	219
(5) 水田・水路 .....	221
(6) 土器溜り .....	222
5. 古墳時代の遺構・遺物 .....	222
(1) 竪穴住居 .....	222
(2) 井戸 .....	222
(3) 溝 .....	223
(4) 土器溜り .....	224
6. その他の遺構および包含層の遺物 .....	224
第3節 小結 .....	226
1. 遺構について .....	226
2. 遺物について .....	228
付載 .....	232
1 百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析 .....	232
2 百間川原尾島遺跡出土ガラス小玉およびガラス滓 .....	238
3 百間川原尾島遺跡出土の管玉の産地分析 .....	241
4 百間川原尾島遺跡出土の木製品樹種同定、種実同定 .....	251
5 百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料の蛍光X線分析結果 .....	260
6 百間川原尾島遺跡出土の獣骨鑑定結果 .....	262
第4章 百間川原尾島遺跡のまとめ .....	263

第1節 弥生時代の集落	263
第2節 古墳時代の集落	269
第3節 古代の遺構・遺物	272
第4節 中世の村落	276
出土遺物一覧(観察)表	281
1. 土器観察表	283
2. 石製品一覧表	306
3. 玉類一覧表	309
4. 木製品一覧表	310
5. 金属製品一覧表	311
6. 土製品一覧表	312
新旧遺構名称対照表	313
報告書抄録	316

## 目 次

第1図 遺跡位置	1	第12図 旧河道 出土遺物(2) …土器	20
第2図 百間川周辺遺跡分布 (1/50000)	2	第13図 旧河道 出土遺物(3) …土器	21
第3図 設定グリッドと調査区位置 (1/4000)	12	第14図 旧河道 出土遺物(4) …土器	22
第4図 2～4区断面 (上. 縦1/50、横1/500) (下. 1/60)	15	第15図 旧河道 出土遺物(5) …土器	23
第5図 10・11区断面 (縦 1/50、横 1/500)	16	第16図 旧河道 出土遺物(6) …土器・他	24
第6図 16～19区断面 (上. 縦1/50、横1/500) (下. 1/60)	16	第17図 旧河道 出土遺物(7) …石器	25
第7図 旧河道 遺物出土状態	17	第18図 旧河道 出土遺物(8) …石器	26
第8図 旧河道 断面	18	第19図 旧河道 出土遺物(9) …木器	27
第9図 対象調査区位置および周辺遺構配 置(弥生時代前・中期、1/1000)	挿頁1	第20図 旧河道 出土遺物(10) …木器	28
第10図 16～19区遺構配置(弥生時代前・ 中期)	挿頁1	第21図 土壌1、同出土遺物	29
第11図 旧河道 出土遺物(1) …土器	19	第22図 土壌2、同出土遺物	30
		第23図 土壌3、同出土遺物	31
		第24図 土壌4、同出土遺物	31
		第25図 溝1 断面	32
		第26図 溝3 断面、同出土遺物	32
		第27図 溝4 断面	32
		第28図 溝5・6 断面	33
		第29図 溝7・8 断面、溝8 出土遺物	33
		第30図 溝9 断面	33
		第31図 溝9 出土遺物	34
		第32図 溝10 断面、同出土遺物	34

第33図	溝11 断面	34	第67図	井戸 4 出土遺物(3)	58
第34図	9～11区遺構配置 (弥生時代後期)	35	第68図	井戸 5、同出土遺物	59
第35図	竪穴住居 1、同出土遺物(1)	36	第69図	井戸 6	59
第36図	対象調査区位置および周辺遺構配置 (弥生時代後期、1/1000)	挿頁 2	第70図	井戸 6 出土遺物	60
第37図	16～19区遺構配置 (弥生時代後期)	挿頁 2	第71図	土壙 5、同出土遺物	61
第38図	竪穴住居 1 出土遺物(2)	37	第72図	土壙 6、同出土遺物	62
第39図	竪穴住居 2	37	第73図	土壙 7、同出土遺物	63
第40図	竪穴住居 2 出土遺物(1)	38	第74図	土壙 8、同出土遺物	64
第41図	竪穴住居 2 出土遺物(2)	39	第75図	土壙 9、同出土遺物	65
第42図	竪穴住居 3・4	40	第76図	土壙10	66
第43図	竪穴住居 3 出土遺物	41	第77図	土壙11、同出土遺物(1)	66
第44図	竪穴住居 4 出土遺物	42	第78図	土壙11 出土遺物(2)	67
第45図	竪穴住居 5、同出土遺物	43	第79図	土壙12	67
第46図	竪穴住居 6、同出土遺物	44	第80図	土壙12 出土遺物	68
第47図	竪穴住居 7、同出土遺物	45	第81図	土壙13	68
第48図	竪穴住居 8	45	第82図	土壙13 出土遺物	69
第49図	竪穴住居 9、同出土遺物	46	第83図	土壙14、同出土遺物	69
第50図	建物 1	47	第84図	土壙15	69
第51図	建物 2	47	第85図	土壙15 出土遺物	70
第52図	建物 3	47	第86図	土壙16、同出土遺物(1)	70
第53図	建物 4	48	第87図	土壙16 出土遺物(2)	71
第54図	建物 5	48	第88図	土壙16 出土遺物(3)	72
第55図	建物 6	49	第89図	土壙16 出土遺物(4)	73
第56図	建物 7	49	第90図	土壙16 出土遺物(5)	74
第57図	建物 8	49	第91図	土壙17、同出土遺物	74
第58図	井戸 1、同出土遺物(1)	50	第92図	土壙18・19・20・21	75
第59図	井戸 1 出土遺物(2)	51	第93図	土壙18・19 (上)、20 (下) 出土遺物	76
第60図	井戸 1 出土遺物(3)	52	第94図	土壙21 出土遺物	77
第61図	井戸 2、同出土遺物	52	第95図	土壙22	77
第62図	井戸 3、同出土遺物(1)	53	第96図	土壙22 出土遺物	78
第63図	井戸 3 出土遺物(2)	54	第97図	土壙23	78
第64図	井戸 3 出土遺物(3)	55	第98図	土壙24、同出土遺物	79
第65図	井戸 4、同出土遺物(1)	56	第99図	土壙25、同出土遺物	80
第66図	井戸 4 出土遺物(2)	57	第100図	土壙26、同出土遺物(1)	81
			第101図	土壙26 出土遺物(2)	82
			第102図	土壙27、同出土遺物	83
			第103図	土壙28、同出土遺物	84

第104図	土壙29、同出土遺物(1)	85	第142図	溝14 断面、同出土遺物	106
第105図	土壙29 出土遺物(2)	86	第143図	溝15 断面	107
第106図	土壙29 出土遺物(3)	87	第144図	溝16～18 断面、溝16・17 出土遺物	107
第107図	土壙30・31、同出土遺物	88	第145図	溝19～21 断面	108
第108図	土壙32、同出土遺物	89	第146図	溝20 出土遺物	108
第109図	土壙33	89	第147図	対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代後期末水田、1/1000)	挿頁 3
第110図	土壙33 出土遺物	90	第148図	16～19区遺構配置(弥生時代後期末)	挿頁 3
第111図	土壙34、同出土遺物	91	第149図	水田1、水路1・2(1/250)	109
第112図	土壙35、同出土遺物	91	第150図	水田・水路連結部微地形、水田層出土遺物	110
第113図	土壙36、同出土遺物	92	第151図	水路1・2、同3 断面	110
第114図	土壙37	92	第152図	水路1～3(洪水砂層)出土遺物	111
第115図	土壙38	92	第153図	9～11区遺構配置(古墳時代)	112
第116図	土壙38 出土遺物	93	第154図	対象調査区位置および周辺遺構配置(古墳時代、1/1000)	挿頁 4
第117図	土壙39	94	第155図	16～19区遺構配置(古墳時代)	挿頁 4
第118図	土壙40、同出土遺物	94	第156図	竪穴住居11、同出土遺物	113
第119図	土壙41、同出土遺物	95	第157図	竪穴住居12	113
第120図	土壙42、同出土遺物	95	第158図	竪穴住居12 出土遺物	114
第121図	土壙43、同出土遺物	96	第159図	竪穴住居13、同出土遺物	114
第122図	土壙44、同出土遺物	96	第160図	竪穴住居14、同出土遺物	114
第123図	土壙45、同出土遺物	97	第161図	竪穴住居15、同出土遺物	115
第124図	土壙46	97	第162図	竪穴住居16、同出土遺物(1)	115
第125図	土壙47、同出土遺物	98	第163図	竪穴住居16 出土遺物(2)	116
第126図	土壙48、同出土遺物	98	第164図	竪穴住居17、同出土遺物	116
第127図	土壙49、同出土遺物	99	第165図	竪穴住居18・19・20、同20 出土遺物	117
第128図	土壙50	99	第166図	建物9	118
第129図	土壙50 出土遺物	100	第167図	建物10	118
第130図	土壙51	100	第168図	建物11	119
第131図	土壙52、同出土遺物	100	第169図	建物12	119
第132図	土壙53、同出土遺物	101			
第133図	土壙54、同出土遺物	101			
第134図	土壙55、同出土遺物	102			
第135図	土壙56、同出土遺物	103			
第136図	土壙57、同出土遺物(1)	103			
第137図	土壙57 出土遺物(2)	104			
第138図	土壙58、同出土遺物(1)	104			
第139図	土壙58 出土遺物(2)	105			
第140図	溝12 断面	105			
第141図	溝13 断面	106			



第170図	井戸7、同出土遺物(1)	120	第202図	2～4区・9～11区遺構配置(中世)	145
第171図	井戸7 出土遺物(2)	121	第203図	建物13	146
第172図	井戸8、同出土遺物(1)	122	第204図	建物14	146
第173図	井戸8 出土遺物(2)	123	第205図	対象調査区位置および周辺遺構配置(中世、1/1000)	挿頁6
第174図	井戸9	123	第206図	16～19区遺構配置(中世)	挿頁6
第175図	井戸9 出土遺物	124	第207図	建物15・16・17・18	147
第176図	井戸10	125	第208図	建物19・20	148
第177図	井戸10 出土遺物	126	第209図	建物21	149
第178図	土壇59	126	第210図	建物22	150
第179図	土壇59 出土遺物	127	第211図	建物23	150
第180図	溝25・26 断面、同25 出土遺物	127	第212図	建物24	151
第181図	溝27 断面	127	第213図	建物25	151
第182図	溝28 断面、同出土遺物	128	第214図	建物26	152
第183図	溝29 断面	128	第215図	建物27	152
第184図	溝29 遺物出土状況(1/150)	129	第216図	建物28	152
第185図	溝29 出土遺物(1) ……土師器…	130	第217図	柱穴列1	153
第186図	溝29 出土遺物(2) ……土師器・須恵器…	131	第218図	柱穴列2	153
第187図	溝29 出土遺物(3) ……土師器・玉類…	132	第219図	柱穴列3	153
第188図	溝29 出土遺物(4) ……木器…	133	第220図	柱穴列4	153
第189図	溝29 出土遺物(5) ……木器…	134	第221図	井戸11	154
第190図	溝30 断面	136	第222図	井戸11 出土遺物(1)	155
第191図	溝31 断面、同出土遺物	136	第223図	井戸11 出土遺物(2)	156
第192図	溝32・33	136	第224図	井戸11 出土遺物(3)	157
第193図	溝34 断面、同出土遺物	136	第225図	土壇墓1 出土遺物	157
第194図	17～19区遺構配置(古代)	137	第226図	土壇墓1	158
第195図	溝35 断面	138	第227図	土壇墓2、同出土遺物	158
第196図	溝35 遺物分布、同断面(1/100)	挿頁5	第228図	土壇墓3、同出土遺物	159
第197図	溝35 井堰2(1/30)	139	第229図	土壇墓4、同出土遺物	160
第198図	溝35 出土遺物(1) ……須恵器・土師…	141	第230図	土壇墓8、同出土遺物	160
第199図	溝35 出土遺物(2) ……鉄器・木器他…	142	第231図	土壇墓9	161
第200図	溝35 出土遺物(3) ……木器…	143	第232図	溝36 断面、同出土遺物	161
第201図	溝35 出土遺物(4) ……木器・土製品…	144	第233図	溝37・38 断面	161
			第234図	溝39 断面	161
			第235図	溝39 出土遺物(1)	162
			第236図	溝39 出土遺物(2)	163

第237図	溝39 出土遺物(3) .....	164	第270図	土壙73、同出土遺物 .....	184
第238図	溝40・41 断面 .....	164	第271図	土壙74 .....	184
第239図	溝42・43・44 断面 .....	165	第272図	土壙74 出土遺物 .....	185
第240図	溝45 断面 .....	165	第273図	土壙75、同出土遺物 .....	186
第241図	溝46 断面 .....	166	第274図	土壙76、同出土遺物 .....	187
第242図	溝47 出土遺物 .....	166	第275図	土壙77、同出土遺物 .....	187
第243図	溝48・49・50 断面 .....	166	第276図	土壙78・79、同出土遺物 .....	188
第244図	包含層等 出土遺物(1) .....	167	第277図	土壙80、同出土遺物 .....	189
第245図	包含層等 出土遺物(2) .....	168	第278図	土壙81、同出土遺物 .....	190
第246図	包含層等 出土遺物(3) .....	169	第279図	土壙82、同出土遺物 .....	191
第247図	包含層等 出土遺物(4) .....	170	第280図	土壙83、同出土遺物 .....	191
第248図	37～40区 断面（縦 1/50、横 1/500） .....	171	第281図	土壙84・85、同出土遺物 .....	192
第249図	対象調査区位置および範囲（縄 文時代後期、1/500） .....	172	第282図	土壙86 .....	193
第250図	土器溜り3 遺物分布（1/80）	173	第283図	土壙87 .....	193
第251図	土器溜り3 出土遺物 .....	174	第284図	土壙88 .....	193
第252図	竪穴住居21 .....	175	第285図	土壙88 出土遺物 .....	194
第253図	竪穴住居22 .....	175	第286図	土壙89 .....	194
第254図	竪穴住居23 .....	176	第287図	土壙89 出土遺物(1) .....	195
第255図	土壙61 .....	176	第288図	土壙89 出土遺物(2) .....	196
第256図	対象調査区位置および周辺遺構 配置（弥生時代前期・中期、 1/1000） .....	挿頁7	第289図	土壙89 出土遺物(3) .....	197
第257図	37～40区遺構配置（弥生時代前 期・中期） .....	挿頁7	第290図	土壙90・91、同出土遺物 .....	198
第258図	土壙61 出土遺物 .....	177	第291図	土壙92 .....	198
第259図	土壙62、同出土遺物 .....	178	第292図	土壙93、同出土遺物 .....	198
第260図	土壙63、同出土遺物 .....	179	第293図	土壙94、同出土遺物 .....	199
第261図	土壙64、同出土遺物 .....	179	第294図	土壙95、同出土遺物 .....	199
第262図	土壙65、同出土遺物 .....	179	第295図	土壙96、同出土遺物 .....	200
第263図	土壙66、同出土遺物 .....	180	第296図	土壙97 .....	200
第264図	土壙67、同出土遺物 .....	181	第297図	土壙98 .....	200
第265図	土壙68、同出土遺物 .....	181	第298図	土壙98 出土遺物 .....	201
第266図	土壙69、同出土遺物 .....	182	第299図	土壙99、同出土遺物 .....	202
第267図	土壙70、同出土遺物 .....	182	第300図	土壙100 .....	203
第268図	土壙71、同出土遺物 .....	183	第301図	土壙100 出土遺物 .....	204
第269図	土壙72、同出土遺物 .....	184	第302図	土壙101、同出土遺物 .....	204
			第303図	土壙102、同出土遺物 .....	205
			第304図	土壙103 .....	205
			第305図	土壙103 出土遺物(1) .....	206
			第306図	土壙103 出土遺物(2) .....	207
			第307図	土壙104、同出土遺物 .....	207

第308図	土壙105、同出土遺物	208	第330図	対象調査区位置および周辺遺構配置（弥生時代後期末水田、1/1000）	挿頁 9
第309図	土壙106、同出土遺物	208	第331図	37～40区遺構配置（弥生時代後期末水田）	挿頁 9
第310図	焼土面 1	209	第332図	畎畝と水田の相関断面	221
第311図	焼土面 2	209	第333図	水田と水路の相関断面	221
第312図	溝52 断面	209	第334図	竪穴住居24	222
第313図	溝52 出土遺物(1)	210	第335図	井戸13、同出土遺物	222
第314図	溝52 出土遺物(2)	211	第336図	対象調査区位置および周辺遺構配置（古墳時代、1/1000）	挿頁10
第315図	溝52 出土遺物(3)	212	第337図	37～40区遺構配置（古墳時代）	挿頁10
第316図	溝52 出土遺物(4)	213	第338図	井戸14、同出土遺物	223
第317図	溝52 出土遺物(5)	214	第339図	溝63・64・65・66 断面	223
第318図	溝53 断面	214	第340図	溝66 出土遺物	224
第319図	井戸12、同出土遺物	215	第341図	包含層等 出土遺物	225
第320図	土壙107、同出土遺物(1)	216	第342図	広片口鉢の比較（1/6）	230
第321図	対象調査区位置および周辺遺構配置（弥生時代後期、1/1000）	挿頁 8	第343図	弥生時代後期集落の変遷（1/2500）	265
第322図	37～40区遺構配置（弥生時代後期）	挿頁 8	第344図	弥生水田の変遷（1/5000）	267
第323図	土壙107、同出土遺物(2)	217	第345図	古墳時代集落の変遷（1/2500）	270
第324図	製塩炉周辺 出土遺物	217	第346図	溝35の杭列と杭穴概念図	272
第325図	製塩炉、同周辺出土製塩土器	218	第347図	原尾島中世村落周辺現存条里坪割（1/5000）	277
第326図	溝54・55 断面	219			
第327図	溝57・58・59 断面	219			
第328図	溝60 断面、同出土遺物	219			
第329図	溝61・62・水路4 断面、溝61・62 出土遺物	220			

## 表 目 次

表1	百間川原尾島遺跡調査一覧	11	表2	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査 報告書一覧	14
----	--------------	----	----	-----------------------------	----

## 図 版 目 次

- 田・水路（北西から）
- 巻頭図版2—1. 18・19C・D区溝35  
（北から）
2. 同上遺構出土遺物
- 巻頭図版3—1. 16～19C・D区中世遺構全景  
（北西から）
2. 土壙墓3（南から）・出土湖州鏡
- 巻頭図版4—1. 全調査区出土玉類
2. 土壙89一括出土石器
- 図版1—1. 2～4C区土層断面（北から）
2. 17C区土層断面（南から）
3. 39C区土層断面（南西から）
- 図版2—1. 9・10B～D区弥生時代後期遺構全景（北東から）
2. 10・11B・C区弥生時代後期遺構全景（南西から）
- 図版3—1. 16～19C・D区中世遺構全景（北から）
2. 37～40B～D区弥生時代前・中期遺構全景（南西から）
- 図版4—1. 旧河道（南西から）
2. 旧河道断面（南から）
3. 旧河道出土遺物
- 図版5—1. 土壙1（南東から）
2. 土壙4（西から）
3. 17～18C・D区弥生時代前・中期遺構（北東から）
- 図版6—1. 竪穴住居1（北東から）
2. 竪穴住居2（北から）・同柱穴2（西から）・同3（南東から）
- 図版7—1. 竪穴住居3・4調査風景（北西から）
2. 竪穴住居3（南西から）
3. 竪穴住居4（北西から）
- 図版8—1. 竪穴住居4床面炭化物・同中央穴と貼床断面（北東から）
2. 竪穴住居5（北西から）
3. 竪穴住居6（北東から）
- 図版9—1. 竪穴住居7（東から）
2. 竪穴住居8（南西から）
3. 竪穴住居9（北東から）
- 図版10—1. 建物2（南から）
2. 建物5・7（南から）
3. 建物8（南東から）
- 図版11—1. 井戸1断面（南から）
2. 井戸1（東から）・同遺物出土状況（北西から）
3. 井戸2断面（北西から）・同（南東から）
- 図版12—1. 井戸3（南東から）
2. 井戸4（南西から）
3. 井戸5断面（南から）
4. 井戸6（南東から）
- 図版13—1. 土壙5（北西から）
2. 土壙6（北西から）・同出土勾玉（南西から）
3. 土壙8（北西から）
- 図版14—1. 土壙10断面（西から）
2. 土壙11（北から）
3. 土壙12断面（南から）
4. 土壙13断面（南西から）
- 図版15—1. 土壙16（南から）・同（東から）
2. 土壙18～21（南西から）
3. 土壙23（南東から）
- 図版16—1. 土壙24（南西から）
2. 土壙25（南東から）
3. 土壙26（南から）
4. 土壙27（南東から）
5. 土壙28（東から）
- 図版17—1. 土壙29（南から）
2. 土壙30（北西から）
3. 土壙31（北東から）
4. 土壙38（南東から）
- 図版18—1. 土壙43（東から）
2. 土壙44（北から）

- 3. 土壇45 (北から)
- 4. 土壇53 (南東から)
- 図版19—1. 土壇55 (北から)
- 2. 土壇57 (北から)
- 3. 土壇58 (東から)
- 4. 溝16~21 (北から)
- 図版20—1. 水田1 全景 (北から)
- 2. 水路1・水路2・水田1 (北東から)
- 図版21—1. 水路1と水田1の連結部 (水口) 微地形 (北東から)
- 2. 水路2 (溝21) 断面 (南から)
- 3. 水路3 (溝23) 断面 (南西から)
- 図版22—1. 土器溜り1 (南東から)
- 2. 土器溜り2 (南東から)
- 3. 竪穴住居11 (北東から)
- 4. 竪穴住居12 (南西から)・同の竈部分 (東から)
- 図版23—1. 竪穴住居14~16 (南西から)
- 2. 竪穴住居14の竈部分 (南西から)
- 3. 竪穴住居17 (南から)
- 4. 竪穴住居20・土壇墓5・土壇墓6 (南東から)
- 図版24—1. 建物10 (西から)
- 2. 建物12・同柱穴の礎盤 (西から)
- 図版25—1. 井戸7・同遺物出土状況 (上 4層上位・下 5層中位) (西から)
- 2. 井戸8・同遺物出土状況 (南から)
- 図版26—1. 井戸10 (南東から)・同出土井側
- 2. 溝29・同断面 (南から)
- 図版27—1. 溝35 調査風景 (南から)
- 2. 溝35 (北から)
- 図版28—1. 溝35南堰 (北から)
- 2. 溝35南堰 横断面 (西から)
- 3. 9・10B・C区中世全景 (南西から)
- 図版29—1. 建物23・25・土壇墓9など (北から)
- 2. 建物26 (北から)
- 3. 建物27・28など (南から)
- 図版30—1. 井戸11 (南西から)・同遺物出土状況 (南東から)
- 2. 土壇60 (西から)
- 3. 土壇墓1・同底面の織物痕跡 (西から)
- 図版31—1. 土壇墓2 (北から)
- 2. 土壇墓3 遺物出土状況 (南から)
- 3. 土壇墓4 (東から)・同遺物出土状況 (西から)
- 図版32—1. 土壇墓8 (北から)
- 2. 土壇墓9 (東から)
- 3. 溝39・同断面 (東から)
- 図版33—1. 溝45 (北から)・同断面 (南から)
- 2. 土器溜り3北西半 (南東から)
- 3. 土器溜り3南東半 (北西から)
- 図版34—1. 竪穴住居21 (南東から)
- 2. 竪穴住居22 (北東から)
- 3. 竪穴住居23 (東から)
- 図版35—1. 土壇64 (南から)
- 2. 土壇62 (南東から)
- 3. 土壇65 (南から)
- 4. 土壇69 (東から)
- 図版36—1. 土壇73 (西から)
- 2. 土壇74 (西から)
- 3. 土壇75 (東から)
- 4. 土壇76・78・79 (東から)
- 図版37—1. 土壇80 (西から)
- 2. 土壇84・85 (南西から)
- 3. 土壇89 (南西から)・同石器出土状況 (北から)・同作業状況
- 図版38—1. 土壇98 (南西から)
- 2. 土壇99 (南から)
- 3. 土壇100 (北から)
- 4. 土壇103 (北西から)

- 図版39— 1. 焼土面 1 (南西から)  
2. 焼土面 2 (北西から)  
3. 溝52・53 (東から)
- 図版40— 1. 井戸12 (西から)  
2. 土壙107 (南西から)  
3. 製塩炉 (西から)
- 図版41— 1. 溝57～62 (西から)  
2. 水田 2 北半・同南端 (南西から)  
3. 水路 4・水田 3 (北から)
- 図版42— 1. 土器溜り 4 (西から)  
2. 竪穴住居 24 (北東から)  
3. 井戸13 (南東から)  
4. 井戸14 (北から)  
5. 溝63～66 (南東から)  
6. 土器溜り 5 (南西から)
- 図版43 旧河道 出土遺物(1)
- 図版44 旧河道 出土遺物(2)
- 図版45 旧河道、竪穴住居 1～6 出土遺物
- 図版46 井戸 1・2 出土遺物
- 図版47 井戸 3 出土遺物
- 図版48 井戸 4・6 出土遺物
- 図版49 土壙 5～9・14 出土遺物
- 図版50 土壙16 出土遺物
- 図版51 土壙17・18・20～22 出土遺物
- 図版52 土壙24～28 出土遺物
- 図版53 土壙29 出土遺物
- 図版54 土壙33・38・42・44 出土遺物
- 図版55 土壙45・49・53・58、溝14・17、  
水田層、水路 3 出土遺物
- 図版56 水路 1～3、竪穴住居12～14・16、土  
壙59 出土遺物
- 図版57 井戸 7～9 出土遺物
- 図版58 溝29 出土遺物
- 図版59 溝35 出土遺物
- 図版60 土壙墓 1・3・4、溝39 出土遺物
- 図版61 土器溜り 3、土壙65・66・69・73・74  
出土遺物
- 図版62 土壙81・89・94・95・100～105 出土  
遺物
- 図版63 溝52 出土遺物
- 図版64 溝52、井戸12 出土遺物
- 図版65— 1. 製塩炉、土壙107、溝60・井戸13  
出土遺物  
2. 旧河道 出土石製品
- 図版66 旧河道、土壙 2 出土石製品
- 図版67— 1. 竪穴住居 2 出土石製品  
2. 38～40区土壙 出土石製品
- 図版68 土壙75・77・89、溝52・62 出土石製  
品
- 図版69 木製品 (弥生時代～古墳時代)
- 図版70 木製品 (奈良時代～中世)
- 図版71 金属製品
- 図版72 刻骨・土製品

## 第1章 地理的・歴史的環境

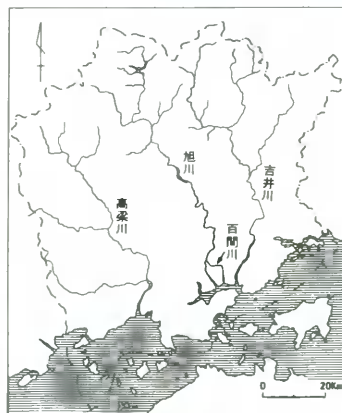
百間川は、江戸時代初め頃の寛文9年（1669年）から貞亨4年（1687年）にかけて造られた、旭川の放水路である。岡山城は旭川の一部を堀に見たてて築城されており、また城下町がその周辺に広がっているところから、水害には弱い面を持っていた。そのため旭川の水量調節が必要となり、上流部から増水時に分岐して放水できる水路、つまりバイパスを造ったわけである。この事業は、岡山藩主池田光政の命を受けた津田永忠が、熊沢蕃山の治水論「川除けの法」を取り入れて工事の指導・指揮にあたり、城下の東側に広がる操山丘陵の北麓を右岸側の堤防に見立ててその裾部を東流させ、丘陵の東端を回って南流させて海に注がせる、流程約8～9km（現在では約13km）にわたる間の一大河川改修事業であった。

この百間川の上・中流部は、中国山地に源を発し吉備高原を深く削って流下する旭川が、高原の端部でどっと吐き出される土砂の沖積によって形成された、広義の岡山平野の南東部に位置し、旭川東岸の平野（以下旭東平野と呼ぶ）の南端にあたる。旭東平野は北に竜の口山丘陵、南に操山丘陵、さらに東を芥子山および山王山丘陵によって区画された、比較的まとまりのある水田地帯を形成している。しかし、この平野の微地形を、市街化の進む以前の大正年間発行の地図によって詳細に観察すると、旭川が平野に至る入口、つまり岡山市中原付近から、南南東方向へ祇園・新屋敷・清水・藤原、南東に振って赤田・兼基・神下・長利にかけてと、祇園から南東方向へ賞田・国府市場・雄町・乙多見・長岡・長利にかけての二ルートに、条里区画の及ばない水田・水路地形の乱れが看取される。これは、旭川の一部がこの平野の形成過程において、大きく二ルートの河道として存在していたものと思われ、その後200～300m幅の範囲で蛇行を繰り返し、土砂の堆積作用と相俟って三角州の形成や周辺の沖積化を促し、やがて河道自体も埋没してわずかに中小の蛇行する用排水路に姿をとどめて現在に至っている。また、旭東平野の北東部にあたる四御神と市場出村の間の周辺は、旭川の堆積作用が及ばないため、広範囲にわたってバックマッシュ（後背湿地）であった可能性が高い。

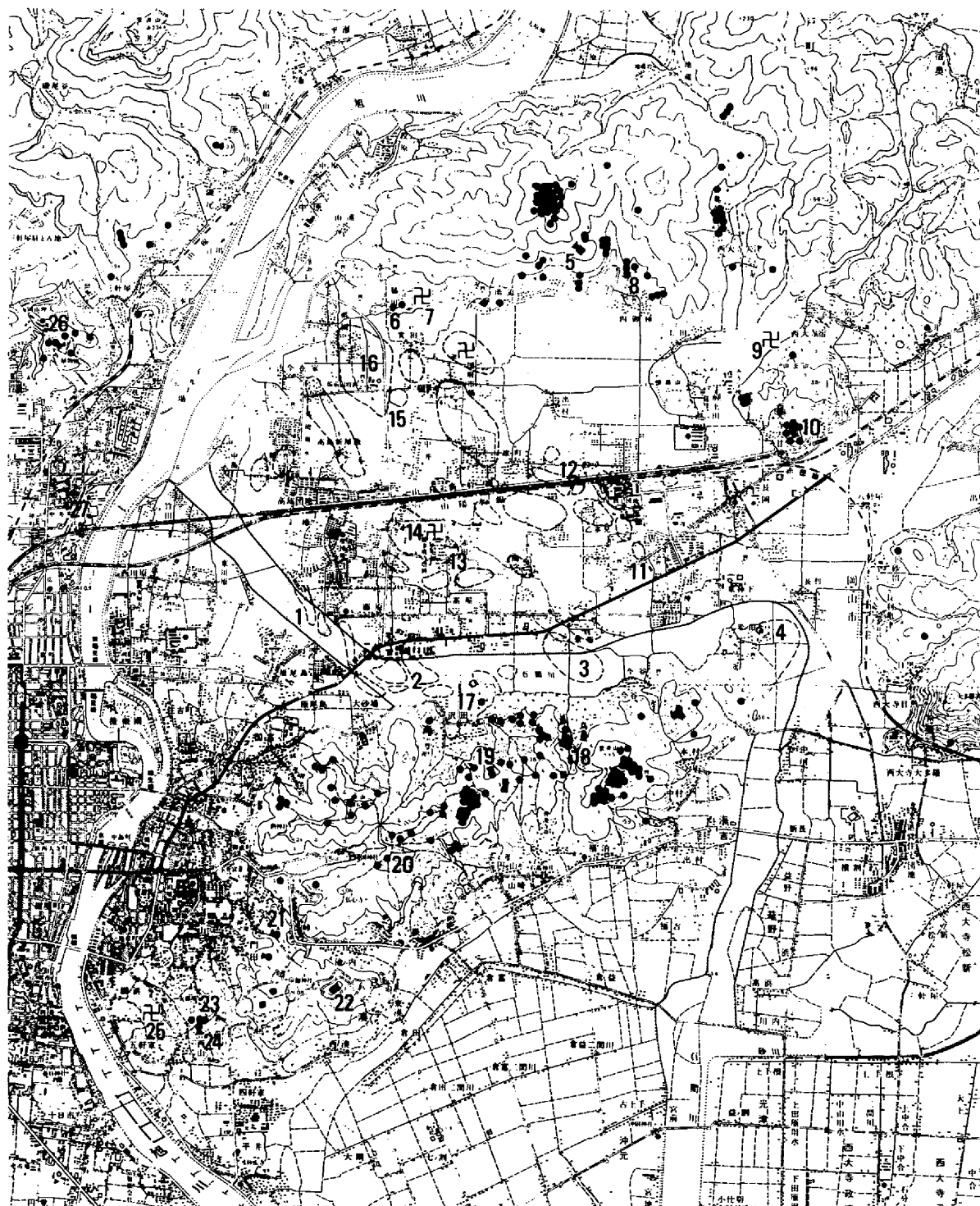
この旭東平野を中心とし、それを望む丘陵をも含めて、先土器時代の足跡はほとんど知られていない。唯一、操山丘陵の旗振台古墳北部遺跡（註1）でナイフ形石器、サスカイトの剥片が少量表採されているに過ぎない。

縄文時代の遺構・遺物は、今のところ平野部のみ認められている。発見の発端になったのは、1959年に国道2号線百間川橋の橋脚部の工事に伴って出土した土器が、近藤義郎氏によって縄文晩期であることが確認されたことに始まる。その後、山陽新幹線建設工事に伴い調査された雄町遺跡（註2）でも晩期土器の出土を得て、沖積平野への縄文人の進出が十分予測されるに至った。

百間川改修工事に伴う発掘調査が開始された1977年以



第1図 遺跡位置



- |               |             |               |              |
|---------------|-------------|---------------|--------------|
| 1. 百間川原尾島遺跡   | 8. 四御神山の上古墳 | 15. 中井・南三反田遺跡 | 22. 湊茶白山古墳   |
| 2. 百間川沢田遺跡    | 9. 井寺廃寺     | 16. 備前国府推定地   | 23. 網浜茶白山古墳  |
| 3. 百間川兼基・今谷遺跡 | 10. 山王山古墳   | 17. 沢田大塚古墳    | 24. 操山109号古墳 |
| 4. 百間川米田遺跡    | 11. 乙多見遺跡   | 18. 兼基鳥坂銅鐸出土地 | 25. 網浜廃寺     |
| 5. 備前車塚古墳     | 12. 雄町遺跡    | 19. 金蔵山古墳     | 26. 一本松古墳    |
| 6. 唐人塚古墳      | 13. 赤田遺跡    | 20. 旗振台古墳     | 27. 神宮寺山古墳   |
| 7. 貫田廃寺       | 14. 幡多廃寺    | 21. 操山103号墳   |              |

第2図 百間川周辺遺跡分布 (1/50000)



降、百間川原尾島遺跡や同沢田遺跡の微高地上あるいは端部、旧河道からも縄文土器の出土が相ついで。そのうち、現在までに最も古い時期を示しているのは百間川沢田遺跡の旧河道から出土した中期の土器片（註3）である。これらは摩滅が激しいため、上流域あるいは丘陵部からの流入の可能性はあるが、少なくとも旭東平野周辺を大きく外れて存在していたとは考えられず、当遺跡周辺の沖積化の進行に伴う微高地の核の形成が、以外と早かった可能性も捨てきれない。いっぽう、中期までは遡れないものの、百間川沢田遺跡の微高地縁辺部から、比較的大形で摩滅の少ない後期末の突帯文土器片（註3）が出土したことにより、後期末段階での居住は推測されていた。そして、その後百間川原尾島遺跡の微高地上（弥生前期の基盤層下約50cm）から、後期後半の条痕文土器片の散布と火どころが見つかり（本報告書に掲載）、さらに操山丘陵の裾部から微高地上にかけての百間川沢田遺跡で、ほぼ同時期の多量の土器片の散布とともに火どころやドングリ貯蔵穴なども発見される（註4）など、沖積地の一部が少なくとも縄文後期には、キャンプ地あるいは定住地に近い形で利用されていたことが明らかになってきている。

縄文時代晩期の遺物は、雄町遺跡をはじめ百間川遺跡群のすべてから見つかっており、地形からその存在が予測される三角州状の微高地のほとんどは、生活の場であったと推察される。しかし、出土遺物が確実に遺構に伴って出土した例が少なく、すでに水稻農耕を行っていたことを想起させる太形蛤刃石斧や打製石鍬さらに石包丁形石器（註4）などの、遺物として良好な資料もあるが、遺構配置等から導かれるところの具体的な集落のあり方は、今一つ不明である。ただ、1993年度の沢田遺跡の調査で、弥生前期の基盤層下の微高地上の撓み（幅7～8m、長さ20mの範囲）に、厚さ10cm程の縄文晩期土器包含層が認められており、畦畔は確認されていないが晩期水田の可能性もある（註5）。

弥生時代前期の遺跡は、縄文時代晩期から続いて同様の遺跡に認められているが、前期前葉の時期がいずれも欠けている。遺構の残存状況は比較的良好で、とくに百間川沢田遺跡で見つかった環濠はおよそ90×100mの規模で、内側に竪穴住居が4軒、円形周溝遺構2基等で集落が構成されており（註4）、前期の段階でこの地にも防禦施設の必要な緊張関係が顕在していたとみられる。そのほか、環濠とは旧河道を挟んで隣の微高地上の撓みには、前期後半とみられる小区画水田が2面（註4）、百間川原尾島遺跡でも同様の水田が1面（註6）検出され、立地・規模・形態などの初期水田のあり方に新見を得ている。

弥生時代中期の遺跡は、前出の遺跡のほか赤田遺跡（註7）、乙多見遺跡（註8）などがある。調査された面積にもよるが、そのうち百間川兼基・今谷遺跡が遺構・遺物の量・質ともに他を圧倒しており、この時期の母村的位置を占める（註9）。とくに、20数棟にもものぼる掘立柱建物群は、規模・配置等からしても、単に倉庫群というより住居群の性格が強いと考えられ、最近西日本各地でも類例が増加しつつある。ただ、周辺から多量のガラス溶滓が出土していることから、ガラスそのものあるいは溶滓を副産物で排出するようなモノを製造した工房址の可能性も捨てきれない。関連するかどうかかわからないが、この遺跡を北に望む操山丘陵の谷部から3口の銅鐸が出土していて（註10）、注目される。そのほか、この時期の水田は百間川沢田遺跡から同原尾島遺跡にかけての、微高地の端部あるいは低位部にかけて比較的狭い範囲に認められ、小区画ながら細長く部分的に五角形が混じる形態を示す（註4・11）。さらに、微高地上には用水路や一部に井堰も検出されていて、灌漑技術も完成されていたとみられる。

弥生時代後期になると、旭東平野に散在する三角州状の微高地の核は安定し、微高地を分断してい

た大小の河道や低位部も堆積作用によってある程度埋没し、その条件下で中期とは比較にならないほど、集落の大規模化や飛躍的な水田の拡大化が認められる。本報告書にも掲載した百間川原尾島遺跡の微高地は、とくに遺構密度が高く後期を通じての母村的集落である。そしてその周辺は言うに及ばず、約3kmも離れた今谷遺跡の東端までの微高地間に、ほとんど隙間なく展開する水田は、各微高地の縁辺部に沿って掘削された灌漑水路と有機的に結ばれ機能している。その様は、確かに自然環境に恵まれた地勢にもよるが、経済的自立を背景として社会的にも技術的にも成長が急激に進んだ結果だと思われ、後期段階での共同体内部の成熟度をうかがわせる。しかしながら、後期末には旭川の兩岸を含む広範囲にわたって大洪水に見舞われ、水田のほぼ全域が洪水砂で埋没しただけに留まらず、微高地上にも及び、生産基盤を失っただけでなく集落構成の上でも壊滅的な打撃を被ったことは、想像に難くない。そして、埋没した水田はその後は改修されず、少なくとも百間川遺跡群の調査のおよぶ部分では古墳時代を通じて水田化された形跡はない。ちなみに、洪水砂の上面に形成された包含層あるいは土器溜り出土の土器型式は百・古・Iの時期を示し、あたかも洪水から立直った時にはもう古墳時代が始まっていた感さえある。

古墳時代の集落遺跡は、今のところ丘陵部には認められておらず、弥生時代までの微高地にほぼ継続されて分布するようであるが、この時代を通じて弥生後期との比較においてはかなり希薄である。平野を取り巻く丘陵上には、第2図のように多くの古墳が存在する。古墳は竜の口丘陵に約90基、山王山丘陵に約20基、操山丘陵に約120基を数え、その多くは後期の小円墳であるが、前半期の円墳も約30基ほど含まれる。

最古級の出現期の古墳として、備前車塚古墳(註12)・宍甘山王山古墳(註13)・操山109号墳(註14)などの中規模前方後円(方)墳がそれぞれの丘陵に存在し、とくに操山丘陵ではそののち、網浜茶臼山古墳(註14)・湊茶臼山古墳(註15)・金蔵山古墳(註16)と続く首長墳の系譜がたどれる。これらの首長墳は、当時では南に海を望む尾根上に立地しており、海浜集団との関係も無視できない。金蔵山古墳以降、この地域では5世紀代には前方後円墳は構築されておらず、操山山頂の旗振台古墳(註17)、竜の口山裾の四御神上の山古墳などの中小規模の方墳が、調査例で知られるに過ぎない。ただし、最近行われた中井・南三反田遺跡の調査(註18)で、5世紀後半から6世紀初めの時期の数基の古墳が沖積平野の真中に確認されるに至り、百間川原尾島遺跡などで検出されているほぼ同時期の竈付き住居群や掘立柱建物群などで構成されるような一集団との、とくに古墳の立地を視野にいれての集団関係の検討が必要になってきている。

後期古墳は、前述のように丘陵尾根や山裾に群集するが、そのうち竜の口山丘陵の山裾の唐人塚古墳(註19)・四御神権藤塚古墳、操山丘陵裾の沢田大塚古墳(註20)や操山11号・51号墳のように、比較的大形の横穴石室をもつ古墳も数基混じる。ともあれ、古墳時代後期についても微高地上の集落構成は今一つ明らかでなく、終末期の古墳あるいは集落についても不明な点が多い。

飛鳥時代から白鳳時代にかけては、この平野に賞田廃寺(註21)や幡多廃寺(註7)、井寺(居都)廃寺が建立されている。とくに前二寺は奈良時代には壇上積基壇で整備され、中央寺院に匹敵するほどの内容をもつ。また、これらの三カ寺は上道氏の氏寺とされ、さらにそれぞれの造営・修復の時期に補完関係がある(註7)とされる。いっぽう、備前国府はこの平野の中では、前二寺をつなぐ位置の国府市場を中心とした範囲に想定されているが、いまだ確実な証拠はない。しかし、当時の海に近い百間川米田遺跡では建物群が検出され、さらにほど近い溝や包含層から出土した「上三宅」の墨書

須恵杯や「官」印の須恵器、銅製の帯金具（丸柄）などの遺物から、建物群は公的な倉庫群（倉院）の可能性が強く、国府の外港として機能していた可能性も指摘されている（註22）。ほかに百間川原尾島遺跡の奈良時代から平安時代にかけての溝から、人形・刀形・斎串などの木製品が多く見つかり（本報告書に掲載）、詳細は本文ならびにまとめに譲るが、「祓」の儀式が執り行われた可能性も強く、祓が公のまつりであるところから近くに国府が所在する蓋然性は高い。

平安時代以降のこの平野の状況はあまり明確ではないが、百間川遺跡群の調査では、平安～鎌倉時代の施釉陶器・瓦器・土師質土器・輸入陶磁器などの遺物が、各微高地から数多く出土している。遺構的には比較的大形の条里方向に沿った溝が各遺跡で見つまっている。とくに、鎌倉～室町時代の百間川米田遺跡の大溝は、東西方向に約90m離れて並走する2本の溝が、南北溝でつながれた形の「工」字状を呈し、幅約7mの大規模なものである。大溝の両岸には、一段下がったところに1m幅程の平坦部が見られることから、その部分を船曳き道と考え、さらに規模や地理的条件などから運河の可能性が指摘されている（註23）。この大溝の北側には、ほぼ同時代に何期かにわたって営まれた集落も検出されているが、建物の規模や種類、同時期の集落構成などから、港町的な海浜集落というより海に近い農村集落と考える向きもある（註24）。また、この集落の北方に約200m離れた地点の最近の調査（註25）で、ほぼ同時期の集落と河道にかかる橋梁（橋脚部分）が見つかっており、前述の運河状の大溝とともに当時の土木・建築技術の一端を知る手がかりとなっている。ほかに、百間川原尾島遺跡でも鎌倉～室町時代の建物群が検出されていて（註26）、隣接する調査区の本報告書に掲載分を含めると、集落の構成がかなり明確に判明しつつある。規模からすれば百間川米田遺跡の集落と大差はないと思われるが、周辺に見つまっている数基の土墳墓のうち2～3基には、青磁や白磁の椀や皿が副葬され、そのうちの1基には湖州鏡が副葬されているなど、単なる一農村集落とは思えない面もある。

中世の遺構は、この平野に限らず遺存状態は良くない。これは、とくに県南部の沖積平野のほとんどの調査で確認されていることであるが、現代の集落にほぼ重なることと現代水田に至る地下げなどの影響と思われる。また、同様にとくに奈良時代から平安時代にかけての遺構が希薄であることが知られつつあり、その要因として中世の初め頃にかなり大規模な構造改善（これは条里制に関連すると思われる）が行われたためと推測される。これは今のところ、1993年度の百間川兼基から同沢田遺跡にかけての調査で検出された、ほぼ重複する3本の溝のうち、平安時代の2本の溝がほぼ東西方向ながら蛇行するのに対し、鎌倉時代の溝は正確に東西方向の直線であり、さらに端部で直角に屈曲して北に向かうなどの状況から推測するしかなく、具体的にはほとんど捉まれていない。

以上、この章については註6文献の同章岡本寛久の稿および註26下文献の同章平井 勝の稿を基調にして、柳瀬昭彦が推敲・加筆した。 (柳瀬昭彦)

## 註

- 註1 鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市 1962年  
 註2 高橋 護・正岡陸夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年  
 註3 岡田 博他「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1985年  
 註4 平井勝他「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会・建設省岡山河川

第1章 地理的・歴史的環境

工事事務所 1993年

註5 この地区の調査報告は1996年度発行予定で、土壌分析の結果待ちである。

註6 宇垣匡雅他「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1994年

註7 出宮徳尚・根木 修他『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市遺跡調査団 1975年

註8 正岡陸夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』3 岡山県教育委員会 1973年

註9 正岡陸夫他「百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1982年

註10 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂出版 1961年

註11 中野雅美他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1984年

註12 近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年

註13 宇垣匡雅「吉備の前期古墳一Ⅱ 宍甘山王山古墳の測量調査一」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会 1988年

註14 宇垣匡雅「竪穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—」『考古学研究』第34巻第1・2号 考古学研究会 1987年

註15 近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986年

註16 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959年

註17 鎌木義昌「岡山市域の古墳時代遺跡」『岡山市史・古代編』岡山市 1962年

註18 桑田俊明「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 岡山県教育委員会 1994年

註19 出宮徳尚「唐人塚古墳」『岡山県大百科辞典・上』山陽新聞社 1980年

註20 出宮徳尚「沢田大塚古墳」『岡山県大百科辞典・上』山陽新聞社 1980年

註21 出宮徳尚他『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1971年

註22 井上 弘他「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1982年

註23 平井 勝「百間川米田遺跡3—中世の遺構について・大溝—」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1989年

なお、百間川米田遺跡は註22報告書までは百間川当麻遺跡と呼称していたが、一連の遺跡である。名称変更の経緯については、当報告書の凡例を参照されたい。

註24 岡本寛久「百間川米田遺跡3—中世米田遺跡の構造と変遷—」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1989年

註25 岡田 博「米田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』101 岡山県教育委員会 1995年

註26 註11に同じ

平井 勝他「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97 岡山県教育委員会・建設省岡山河川工事事務所 1995年

## 第2章 調査および報告書作成の経緯

### 第1節 発掘調査の契機

百間川が旭川の放水路として江戸時代の初め頃に造られた人工河川であることは、第1章でも触れた。その百間川の大規模な改修工事の計画構想は、昭和の初め頃からあったらしいが、建設省が本格的に改修計画を打ち出したのは1968（昭和43）年のことである。当時、百間川の河床下に遺跡（散布地）が存在することは、1950（昭和25）年頃から周知され、1965（昭和40）年度に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』にはA・Bの両地点の範囲が記載されている。地名表の遺跡名は、それぞれ百間川A遺跡・同B遺跡となっており、前者は国道2号線の百間川橋を含み上流の祇園用水路付近まで、後者は百間川橋の下流で河道が東方向へわずかに屈曲する付近が示されている。

改修工事計画を知った岡山県教育庁文化課は、直ちに建設省岡山河川工事事務所に対し工事計画の説明を求め、以下の要望を行った。

1. 改修工事計画予定地には文化財保護法に基づいて周知されている「百間川遺跡」が所在する。
2. 事業者である建設省は、文化財保護法に基づく措置、特に1957（昭和32）年6月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって、事前に文化財の保護に遺漏のないように計らうこと。

以上、大略二点である。

これに対して建設省は、当時河川内の土地買収交渉および工事施工の調査計画を進めている段階である、との回答であった。

岡山県教育委員会は、実情の聴取を行うとともに、改修事業に伴う百間川遺跡の取り扱いについて協議した結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することに合意した。また、岡山県教育委員会は建設省に対して文化財保護法第57条の3に先だつ事前協議の文書の提出を求める一方、この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を提出した。その後1976（昭和51）年4月になって、建設省中国地方建設局岡山河川工事事務所長名で事前協議の文書が岡山県教育委員会に提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして、同年9月1日付けで建設省中国地方建設局長より確認調査の依頼文書が提出され、同年11月1日から岡山県教育委員会が確認調査を実施するに至った。

確認調査（第1次調査）は、低水路部分の遺跡の確認および古地形の復原と新田サイフォン（百間川A遺跡の北側に隣接する祇園用水を切り替えて、低水路に直交させてその下を潜らせる施設）部分の一部について、翌年3月31日まで実施された。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3箇所に遺構・遺物が多く認められる大規模な微高地が広がり、その部分が遺跡であることが判明した。

翌年度からは、確認調査の成果を基に建設省の工事計画に先だつかたちで本調査を進め、現在も継続中である。この間、各微高地間にも弥生時代後期の水田が存在することや、新たに岡山市米田一帯

も遺跡であることが判明し、発掘調査の対象範囲は当初より増加し、現在に至っている。(柳瀬)

## 第2節 調査および報告書作成の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受け、1977(昭和52)年度から実施しており、現在も継続している。調査開始から発掘調査の主管課は文化課であるが、発掘調査の実施については、1984(昭和59)年11月から岡山県古代吉備文化財センターが担当している。

本報告書に掲載した百間川原尾島遺跡は、1983・1984・1988(昭和58・59・63)年度に調査を実施した範囲(第3図参照)を対象としている。調査員は1983年度は6名の3班、1984年度は8名の4班、1988年度は3名の1班体制で組織されている。また、報告書の作成は調査員2名で1994(平成6)年度に行った。

岡山県教育委員会は、発掘調査と報告書の作成にあたって、遺跡の保護・保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路(百間川)河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

以下に、調査体制を記す。

### 旭川放水路(百間川)河川改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員

- 池葉須藤樹 (元岡山市立犬島中学校校長)
- 鎌木義昌 (岡山理科大学教授)〈1993年2月まで〉
- 近藤義郎 (岡山大学名誉教授・岡山県文化財保護審議会委員)
- 角田 茂 (元岡山市立岡輝中学校教諭)
- 出宮徳尚 (岡山市教育委員会文化課)
- 水内昌康 (岡山県文化財保護審議会委員)
- 山本悦世 (岡山大学埋蔵文化財研究センター助手)〈1993年4月から〉

### 発掘調査

1983(昭和58)年度

岡山県教育委員会		課長補佐(埋蔵文化財係長事務取扱)
教育長	佐藤章一(～6月30日)	河本 清
	宮地暢夫(7月1日～)	主任 遠藤勇次
教育次長	石原奂治(～7月15日)	文化財保護主査 柳瀬昭彦(調査担当)
	肥塚 稔(8月1日～)	文化財保護主事 平井 勝(調査担当)
岡山県教育庁文化課		文化財保護主事 古谷野寿郎(調査担当)
課 長	早田憲治	文化財保護主事 江見正己(調査担当)
課長代理	橋本泰夫	文化財保護主事 山本明雄(調査担当)
課長代理	吉本唯弘	主 事 岩崎仁司(調査担当)
文化財主幹	高原健郎	

## 1984（昭和59）年度（4月1日～10月30日）

岡山県教育委員会  
 教育長 宮地暢夫  
 教育次長 肥塚 稔  
 岡山県教育庁文化課  
 課長 松元昭憲  
 参事 橋本泰夫  
 課長代理 逸見英邦  
 課長代理 吉本唯弘  
 文化財主幹 佐々木 清  
 課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）  
 河本 清

主任 古瀬 宏  
 主任 遠藤勇次  
 文化財保護主査 井上 弘（調査担当）  
 文化財保護主査 柳瀬昭彦（調査担当）  
 文化財保護主事 平井 勝（調査担当）  
 文化財保護主事 岡本寛久（調査担当）  
 文化財保護主事 江見正己（調査担当）  
 文化財保護主事 山本明雄（調査担当）  
 文化財保護主事 平井泰男（調査担当）  
 主事 宇垣匡雅（調査担当）

## 1984（昭和59）年度（11月1日～3月31日）

岡山県教育委員会  
 教育長 宮地暢夫  
 教育次長 肥塚 稔  
 岡山県教育庁文化課  
 課長 松元昭憲  
 課長代理 逸見英邦  
 課長代理 吉本唯弘  
 課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）  
 河本 清  
 主任（兼） 遠藤勇次  
 岡山県古代吉備文化財センター  
 所長（兼） 松元昭憲  
 次長 橋本泰夫  
 総務課

総務課長 佐々木 清  
 主任 古瀬 宏  
 主任 遠藤勇次  
 調査課  
 調査課長（兼） 河本 清  
 文化財保護主査 井上 弘（調査担当）  
 文化財保護主査 柳瀬昭彦（調査担当）  
 文化財保護主事 平井 勝（調査担当）  
 文化財保護主事 岡本寛久（調査担当）  
 文化財保護主事 江見正己（調査担当）  
 文化財保護主事 山本明雄（調査担当）  
 文化財保護主事 平井泰男（調査担当）  
 主事 宇垣匡雅（調査担当）

## 1988（昭和63）年度

岡山県教育委員会  
 教育長 竹内康夫  
 教育次長 前 亮治  
 岡山県教育庁文化課  
 課長 吉尾啓介  
 課長代理 河野 衛  
 課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）

伊藤 晃  
 主任 藤川洋二  
 岡山県古代吉備文化財センター  
 所長 水田 稔  
 総務課  
 総務課長 佐々木 清  
 総務主幹 藤本信康

第2章 調査および報告書作成の経緯

主 任 花本静夫  
主 任 岡田祥司  
主 任 片山淳司  
調査課  
第一課長 河本 清

第二係長 柳瀬昭彦（報告書担当）  
文化財保護主任 平井 勝（調査・報告書）  
文化財保護主任 岡本寛久（報告書・調査）  
主 事 高田恭一郎（調査担当）  
主 事 阿部泰久（調査担当）

報告書作成

1994（平成6）年度

岡山県教育委員会

教 育 長 森崎岩之助  
教育次長 岸本憲二

岡山県教育庁文化課

課 長 大場 淳  
課長代理 松井新一

課長補佐（埋蔵文化財係長事務取扱）

高畑知功

主 任 若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 河本 清  
次 長 葛原克人

総務課

課 長 丸尾洋幸  
課長補佐（総務係長事務取扱）

杉田卓美

主 査 石井善晴  
主 任 三宅秀吉

調査課

第三課長 柳瀬昭彦（報告書担当）  
課長補佐（第一係長事務取扱）

山磨康平

文化財保護主事 高田恭一郎（報告書担当）

報告書作成協力者

大山知子 山本千恵子 丸山啓子 村岡雅子 三垣佐知子 阿部典子 中野晴美 米戸典子  
江尻泰幸 遠藤七都子



### 第3節 調査の経過

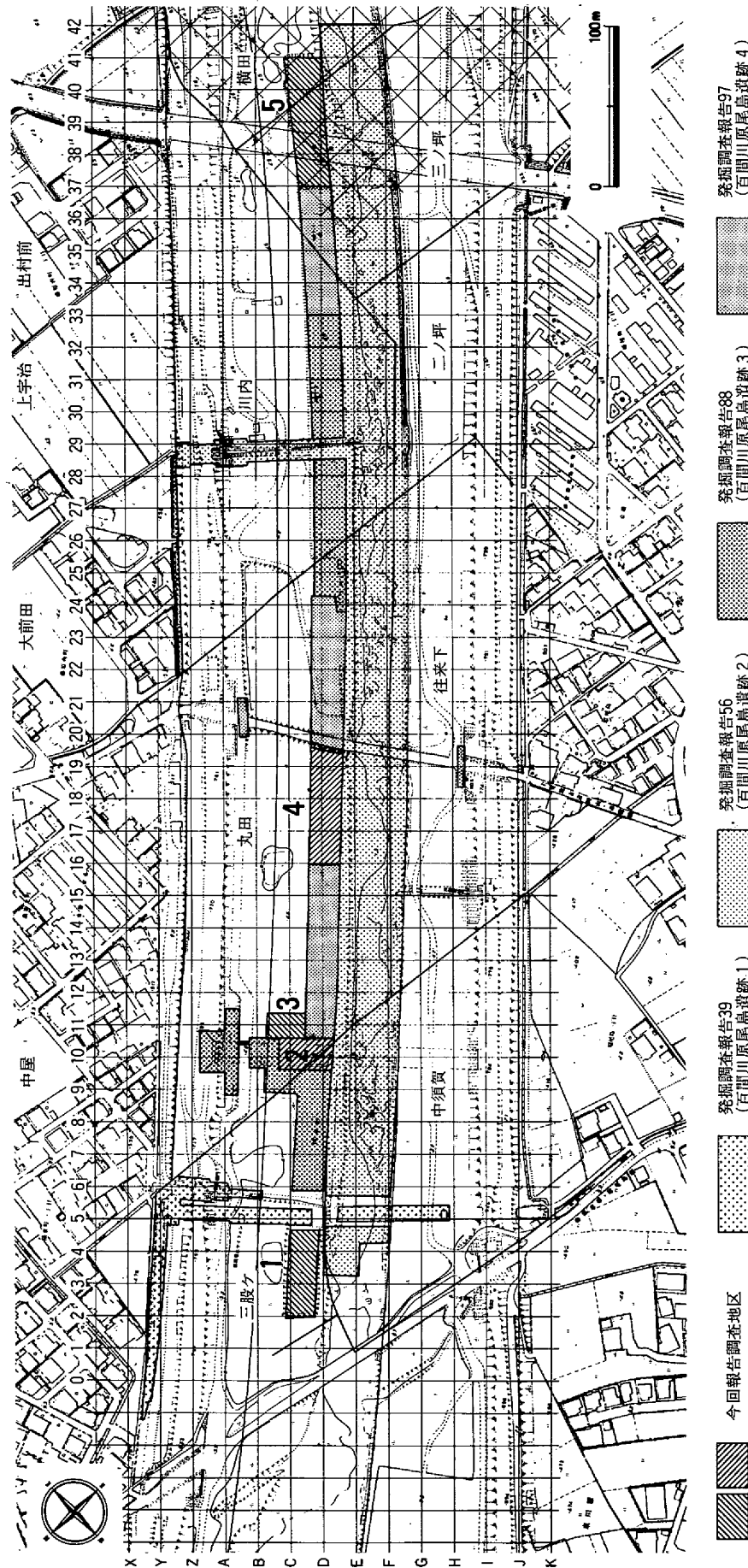
岡山市原尾島に所在する百間川原尾島遺跡は、百間川の河川敷にある遺跡群（百間川遺跡群と総称）のなかでは最上流部に位置し、国道2号線の百間川橋の約100m下流の地点から、上流部に向かって約800m間に広がっている。第1節でふれた1950年代に周知されていた百間川A遺跡の範囲が、この百間川原尾島遺跡とはほぼ一致する。この遺跡の調査は、確認調査（第1次調査）に引き続いて1977（昭和52）年の新田サイフォン低水路部分に始まり、1981（昭和56）年度までに低水路の予定掘削幅80mのうち、右岸側の40mおよび排水樋門等の構造物部分が対象となった。これは、建設省の5カ年工事計画、つまり当初の5カ年で少なくとも30mを満たす幅の低水路を上流から下流まで掘削し通水させる計画に添うものであった。なお、これらの対象調査区の報告書は、「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39・「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56として、それぞれ1980・1984年度に刊行されている。

1982（昭和57）年度からは、おもに低水路予定掘削幅80mのうちすでに調査を終了した幅40m部分の左岸側にあたる幅20mについての低水路、および藤原橋（共用時からは原尾島橋と呼称）の橋脚部や橋梁護岸部、左岸用水路部や高水敷護岸部などを調査対象にして、1990（平成2）年度まで実施した。このうち、本報告書に掲載する調査地区は表1に示すとおりであり、これは個々の対象調査地区の面積、遺物量、さらに個々の調査員の担当期間などを勘案して、全体を3分割したうちの一つである。そして、今回の報告は3分割のうちの最後であり、すでに前二者については「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88・「百間川原尾島遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97として、1993・1994年度に刊行されている。

表1の調査地区の名称は、小字名・削平などの原因となる工事箇所名+グリッド名を順に記して表わし、番号は第3図の調査地区番号と符号する。そして1～4調査地区を包括して第3章第1節三股ヶ・丸田調査区で、5調査地区を同章第2節三ノ坪・横田調査区で取り扱った。（柳瀬）

表1 百間川原尾島遺跡調査一覧

番号	地区名	担当者	期間	面積	遺物数
1	三股ヶ・低水路2～4-C・D	井上・平井泰	1984.4.2～5.22	1000	5
2	三股ヶ、丸田・橋梁PⅡ 9・10-B～D	柳瀬・岩崎	1983.4.21～10.25	720	202
3	丸田・低水路10・11-B・C	岡本・山本	1985.1.7～3.22	330	145
4	丸田・低水路16～19-C・D	岡本・高田・阿部	1988.8.18～ 1989.3.31	1405	76
5	三ノ坪・低水路37～40-B～D	井上・平井泰	1984.5.23～ 1985.1.11	1502	121
計				4957㎡	549箱



第3図 設定グリッドと調査区位置(1/4000)

※ 図中の調査地区番号(1~5)は、表1の番号に対応

## 第4節 報告書作成の経過

前節でもふれたように、1982（昭和57）年度以降の百間川原尾島遺跡の報告書は、対象地区全体の調査終了分について3分割し、1992（平成4）年度から今年度までの予定でそれぞれ年度ごとに整理・報告書作成作業を行い、これらのうち2分冊はすでに刊行されている。本報告書は3分冊目にあたるが、報告書の作成は、担当者2名（柳瀬昭彦・高田恭一郎）で1994（平成6）年度に行った。対象となる調査地区は、表1および第3図に示すとおりであるが、作成に当たって2者が関係した調査地区は各々が、その他の調査地区は古墳時代の初めまでを柳瀬が、それ以降を高田が中心で進めるよう分担を取り決めた。整理対象面積は6704㎡、出土土器は整理箱で549箱あり、これに石製品・土製品・木製品・金属製品・玉類など約800点が加わる。

出土遺物の水洗・注記については、そのほとんどを調査年度のうちに現場事務所で終了させているため、整理・復元作業については4月当初から進め、遺物台帳の整理や実測の必要なものの選別・選定作業を平行して進めた。そして、12月頃までかかって全遺物について整理・検討を加えたが、本年度分の遺物は、前二年度分に比べてとくに遺構に伴う土器の量が多く、極力それらを優先して取り上げたため、いわゆる土器溜りや包含層中、あるいは近現代溝中などから出土した明らかに時代の違う土器については、原則として図の掲載を省かざるを得なかった。

遺物の実測は、まず遺構に伴う完形のものについて4月当初から進め、その後復元作業の終了したものから順次行った。実測にはその大半について整理補助員・実測作業員の助力を得、全実測図について担当者が修正・補正を加え、それらの浄書はおおむね分担に添って両名が2月頃まで当たった。また、鑑定や分析の必要な遺物の抽出およびそれらの依頼等については、高田が担った。なお、実測点数は土器が1315点、石器その他の遺物が398点を数え、前二年度分より土器がそれぞれ約500点、その他が200点以上多い。

遺物写真は、実測のほぼ終了した1月の終わり頃から整理補助員の助力を得て撮影に入り、土器を中心に約400点ほどを撮影したが、全体の頁数との絡みでかなり精選して掲載せざるを得なかった。

また、遺構については遺物整理等と平行して、4月当初から図面整理・検討を進めたが、調査終了から10年以上経過している調査地区や直接調査を担当していない地区もあり、図面の調整に予想以上の期間を要した。個々の遺構図および全体図の浄書はおもに両名が行い、一部に整理補助員の助力を得て2月中にはほぼ終了した。

報告書の構成、遺構・遺物のレイアウト等を含む割り付けについてはおもに柳瀬が担い、部分的に2月から進めた。

原稿の執筆は、原則として調査担当者が分担して行ったが、実測点数が増加したことにより全体の工程が遅れがちになり、執筆に十分な時間をとることができなかった。

なお本報告書は、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査の報告書としては11冊目であり、参考までに次頁にⅠ～Ⅺまでの報告書名を掲載しておく。（柳瀬）

\*表2では紙面の関係で発行者名を省略しているが、発行はいずれも建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会である。

表2 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査報告書一覧

番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行 年月
I	江見正己・伊藤 晃・浅倉秀昭・柳瀬昭彦 中野雅美・内藤善史他	百間川原尾島遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告39	1980 11
II	井上 弘・下澤公明・松本和男・岡田 博 浅倉秀昭・福田正継・江見正己・中野雅美 内藤善史・平井泰男・島崎 東他	百間川沢田遺跡 1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告46	1981 11
III	高畑知功・正岡陸夫・井上 弘・下澤公明 渡辺 光・山磨康平・浅倉秀昭・岡本寛久 江見正己・中野雅美・内藤善史・平井泰男 島崎 東・光永真一・平井典子他	百間川兼基遺跡 1 百間川今谷遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告51	1982 11
IV	井上 弘・松本和男・岡田 博・二宮治夫 平井泰男・光永真一	百間川当麻遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告52	1982 11
V	正岡陸夫・高畑知功・平井泰男・島崎 東 光永真一・井上 弘・下澤公明・渡辺 光 岡田 博・二宮治夫・岡本寛久・中野雅美	百間川原尾島遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告56	1984 3
VI	二宮治夫・正岡陸夫・井上 弘・下澤公明 柳瀬昭彦・山磨康平・岡田 博・高畑知功 浅倉秀昭・岡本寛久・江見正己・中野雅美 平井泰男・島崎 東・光永真一他	百間川沢田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告59	1985 3
VII	岡本寛久・平井 勝・柳瀬昭彦・井上 弘 宇垣匡雅・平井泰男・江見正己	百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告74	1989 9
VIII	平井 勝・井上 弘・柳瀬昭彦・浅倉秀昭 古谷野寿郎・岡本寛久・江見正己 宇垣匡雅・阿部泰久・高田恭一郎	百間川沢田遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告84	1993 3
K	宇垣匡雅・平井 勝・江見正己・柳瀬昭彦	百間川原尾島遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告88	1994 3
X	平井 勝・岡本寛久・高田恭一郎	百間川原尾島遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告97	1995 3
XI	柳瀬昭彦・高田恭一郎・岡本寛久 平井泰男・井上 弘	百間川原尾島遺跡 5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告106	1996 3

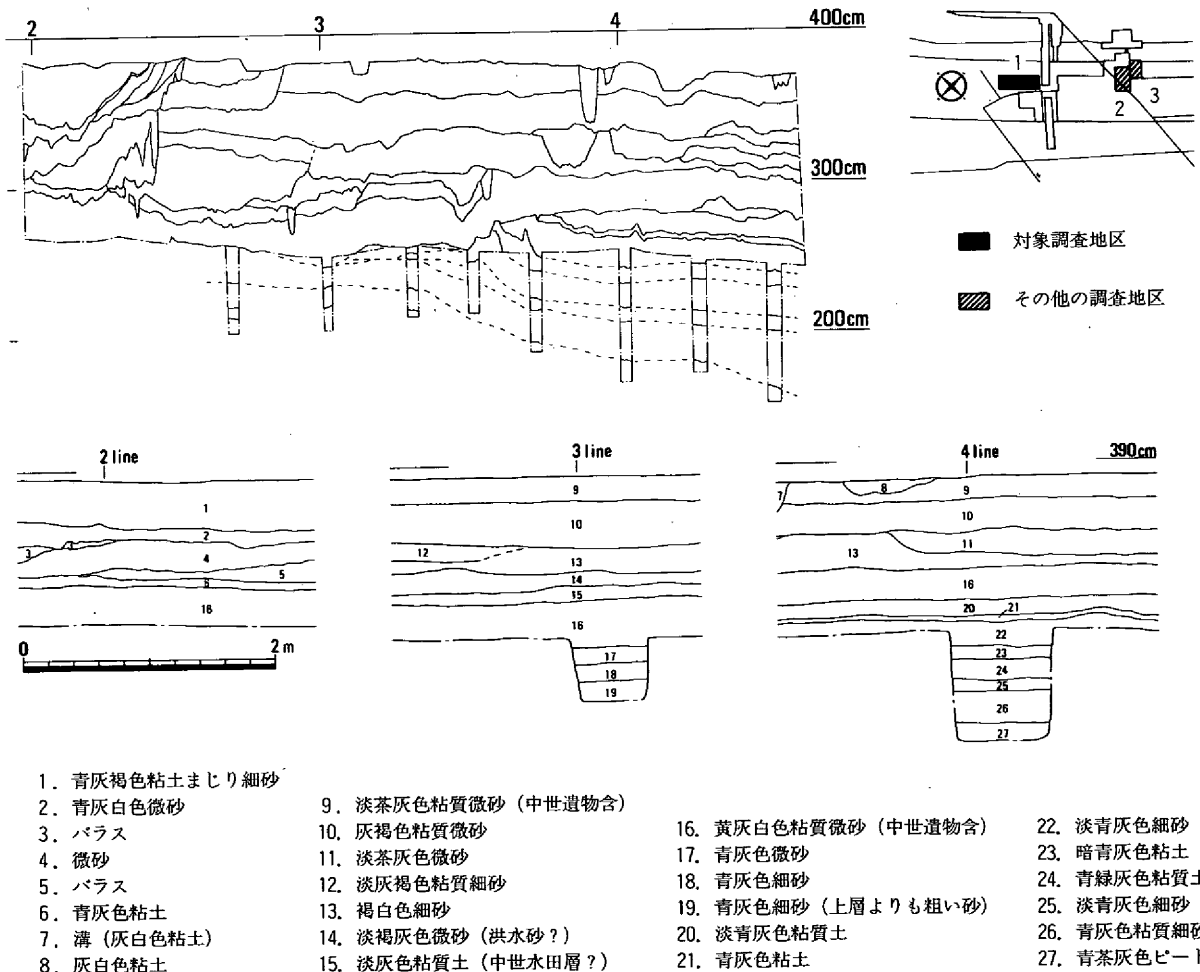
## 第3章 調査の概要

### 第1節 三股ケ・丸田調査区

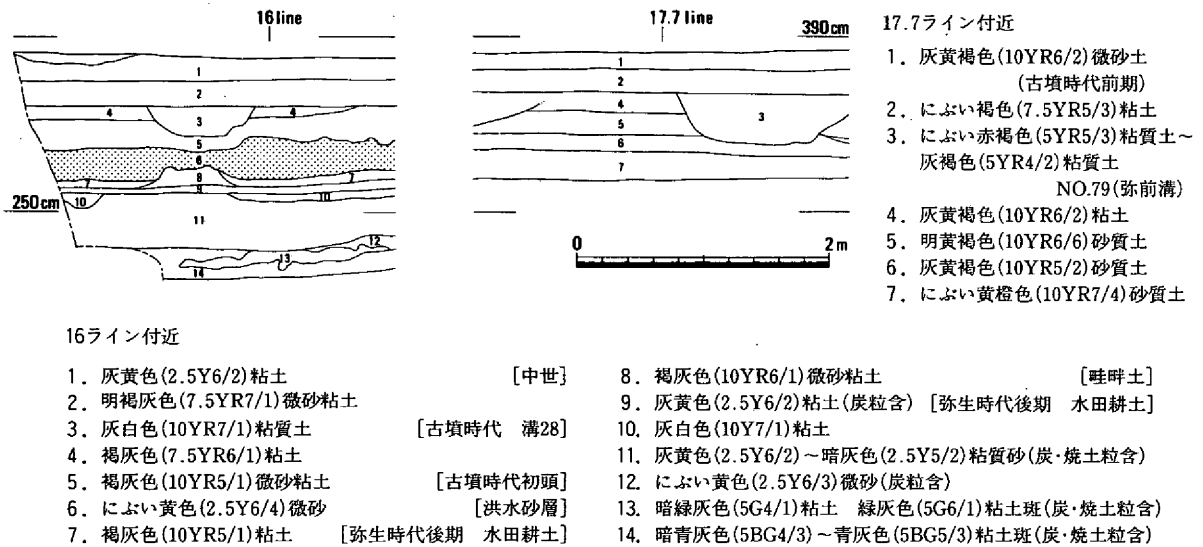
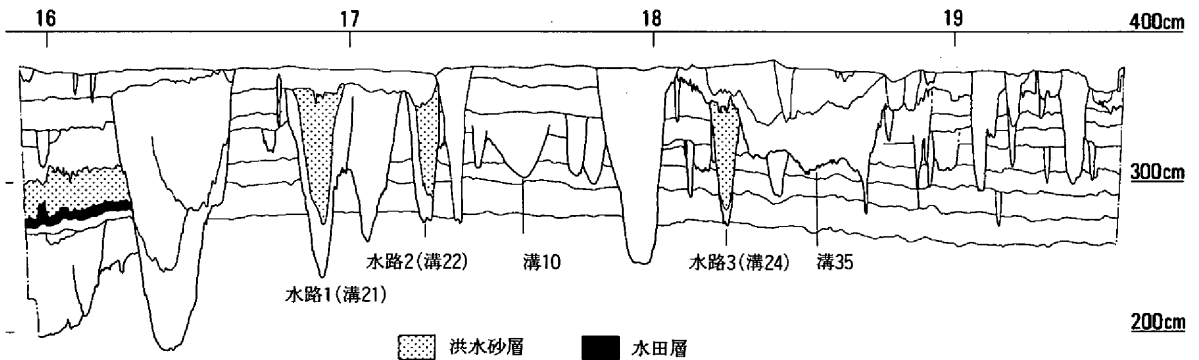
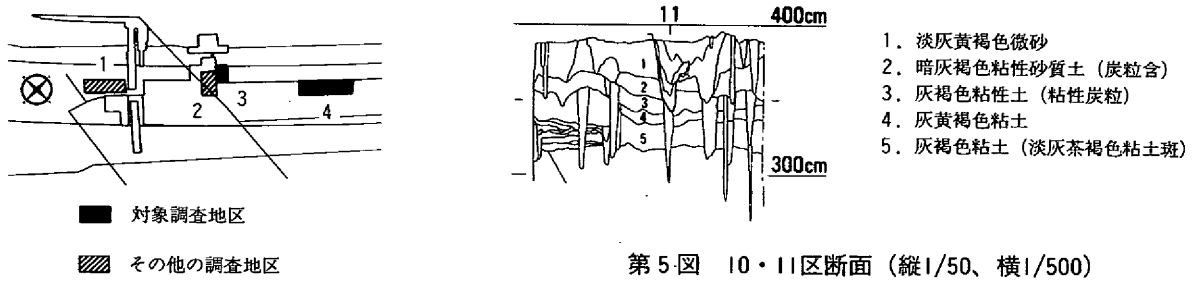
#### 1. 調査区の概要

この調査区の調査地区は4箇所であるが、その位置関係は第3図でわかるように、2・3地区が隣接しているため、上流から1地区、2・3地区、4地区と大きく3箇所に分かれる。

1地区は百問川原尾島遺跡の微高地の北西端に位置し、旭川の比較的大きな旧河道の攻撃面に当たる所である。断面の土層でいえば、16層と9層に中世土器を包含し、ほぼ水平堆積の15層は水田層の可能性もある。そして、土壌60が3ライン付近の標高約300cmのレベルで検出されるなど、かなり短期間のうちに洪水等が繰り返され、堆積が進むなかでの中世の微高地形成の状況と、その過程での土地利用の一端がうかがわれる。また、2.5ライン付近から上流は、中世の時期に広がった微高地を削るような砂質土の堆積が看取され、その後も洪水で削られては埋まる状況にあったようである。



第4図 2～4区断面 (上. 縦1/50、横1/500) (下. 1/60)



第6図 16～19区断面 (上、縦1/50、横1/500) (下、1/60)

1地区から約100m下流の2・3地区は、縄文時代の終わり頃から現在に至るまで比較的安定した微高地の一部にあたり、とくに弥生時代後期の遺構密度が高く、同時に遺物も多量に出土している。この地区は、近・現代用排水路が縦横に走り、さらに現耕作土の床土下(標高380～385cm)からすぐに中世の土壌墓中の人骨の上部が削られた状態で検出されるなど後世の削平が顕著であり、また古墳時代と弥生時代後期の遺構検出面もほぼ同じという状況であった。そのため、遺構の時期決定は切り合い関係と出土遺物によったが、無遺物あるいは小破片のみの遺構も多く、不明のものが少なくない。ちなみに、この地区での弥生時代後期の堅穴住居の床面レベルは310～340cm、同じく古墳時代のレベルは350～380cmであり、中世の土壌墓の床面レベルは後者とほぼ同じ370cm前後であった。

4地区は3地区から下流へ約100m隔たった地点から始まり、約20×70mの範囲である。この地区は、微高地と微高地端部から低位部（旧河道）の一部にあたり、遺構としては弥生時代前期から中世に至るまでの各時代が確認されている。ただ、2・3地区の遺構密度に比べて全体的に希薄であり、15・16区付近の旧河道で隔たれた別の微高地に属す可能性が高い。

微高地と旧河道との土層的な関係は、第6図では近・現代溝の攪乱で直接的には捉えられないが、旧河道内の堆積の状態は、最下層に縄文時代晩期および弥生時代前期の土器を包含し、その上層の数層は前期の段階で堆積したとみられ、さらにその上層には中期土器を含む洪水砂、後期末水田層、後期末洪水砂、古墳時代包含層と続く。いっぽう、微高地上には弥生時代前期から中世にかけて、ほぼ南北方向の用水路などの溝が数条存在し、そのうちの3本の溝が低位部の水田を覆った砂と同じ砂によって埋没している事実が両者の同時存在を証明し、少なくとも後期末の段階では低位部（水田面）と微高地上との比高差が約80cm以上あったことがわかる。（柳瀬）

## 2. 縄文時代の遺物および弥生時代前・中期の遺構・遺物

この時代は、4地区の旧河道とその東側に形成された微高地上で遺構・遺物を検出している。

縄文時代の遺構は検出していないが、旧河道からまとまった量の土器が出土している。その多くは晩期中葉に属し、突帯文期のものは少ない。

前・中期の遺構は、すべて弥生時代の基盤層である明黄褐色土上面で検出している。その内訳は、旧河道1条、土壌4基、溝11条である。土壌のうち2基は、その底面に被熱箇所をもつ。また溝は、旧河道と同様の南北方向に流走するものが多い。住居は検出していないが、旧河道内での遺物の出土が東半に偏ることと、他の遺構の検出状況から、居住域が近くに存在した可能性は高い。（高田）

### (1) 旧河道（第7・8・10～20図、図版4・43～45・65・66・69・72）

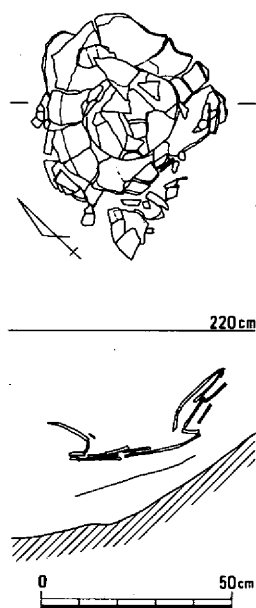
調査区の西端で、自然河道の東半部を検出した。これは、15・16C・D区を南北に流走して調査区外に延びるもので、南側は『百間川原尾島遺跡2』の「河道」、西半部は『同4』の「旧河道1」に接続する。

河道の規模は幅17m以上、深さ2mを測り、標高0cm前後のほぼ平坦な底から急斜に壁が立ち上る。東肩には流路の蛇行によると考えられる張り出し部分がみられ、その南側は大きく抉られている。また、河道の東側は微高地となり、西側は浅い凹地となることを確認している。

埋土は、第8図の11～27・33～39層で、上層（11～17層）、中層18～21層）、下層（23～27層）の三層に大別できる。28～32層は河道の東肩に掘り込まれた溝1の埋土である。なお、河道全体の埋没状況や形成過程の復元等は既報告の詳述に譲りたい。

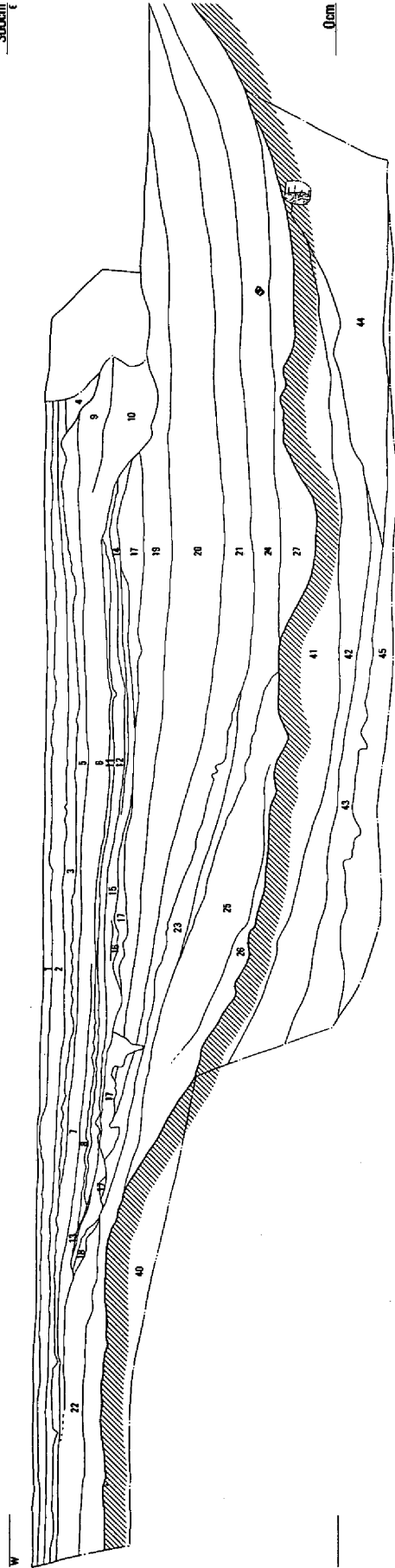
第7図は、44の大形壺の出土状況である。中層埋没段階の東肩斜面に掌大の胴部片をほぼ水平に敷き、その上に口縁から肩部までを逆さに据えるもので、これらの下部には有機物層がみられる。河道の埋没途中に掘り込まれたと考えられるが、その掘り方等は検出できなかった。

遺物は、縄文土器、弥生土器、石製品、土製品、木製品、勾玉、獣骨、



第7図 旧河道  
遺物出土状態

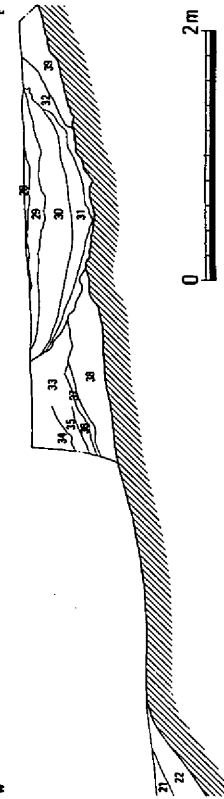
300cm



1. 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土(弥生後期 水田耕土)
2. 灰色(5Y6/1)土
3. によい黄色(2.5Y6/4)土
4. 灰色(N5/)粘土
5. オリーブ黄色(5Y6/4)土
6. オリーブ灰色(10Y5/2)砂
7. オリーブ黄色(5Y5/4)土
8. 黄褐色(2.5Y5/4)土
9. 緑灰色(10GY5/1)砂
10. 青灰色(5GY6/1)砂-粗砂
11. 灰色(7.5Y6/1)粘土
12. 灰色(N4/)粘土
13. 青灰色(5BG5/1)粗砂
14. 青灰色(5BG5/1)微砂粘土
15. 青灰色(5BG5/1)粘質砂
16. 暗青灰色(5GB4/1)粘質砂
17. 灰オリーブ色(5Y5/2)粗砂
18. 褐灰色(10YR5/1)土
19. 暗緑灰色(10G4/1)粘土
20. 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土
21. オリーブ黒色(10Y3/1)粘土

22. 黄褐色(10YR5/6)土
23. 黄褐色(10YR5/8)土
24. 黒褐色(10YR2/2)粘土(上部に灰色砂の薄層)
25. 黒褐色(10YR3/1)粘土と灰色砂層の互層  
(炭・植物遺体多含)
26. 暗青灰色(5B4/1)粘土
27. 黒褐色(10YR3/1)粘質土
- 28~32. 溝埋土
33. 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土(炭・炭土粒含)
34. 明黄褐色(10YR6/6)微砂粘土  
(によい黄褐色基盤土ブロック含)
35. 褐灰色(10YR5/1)微砂粘土  
(下部に灰白色微砂薄層、炭・炭土粒含)
36. 褐灰色(10YR4/1)粘土
37. 灰褐色(7.5YR5/1)粘質微砂
38. 灰黄色(2.5Y6/2)粘質微砂(炭粒含)
39. によい赤褐色(5YR5/3)粘質土(炭・炭土粒含)
40. 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土
41. 青灰色(5BG6/1)粗砂

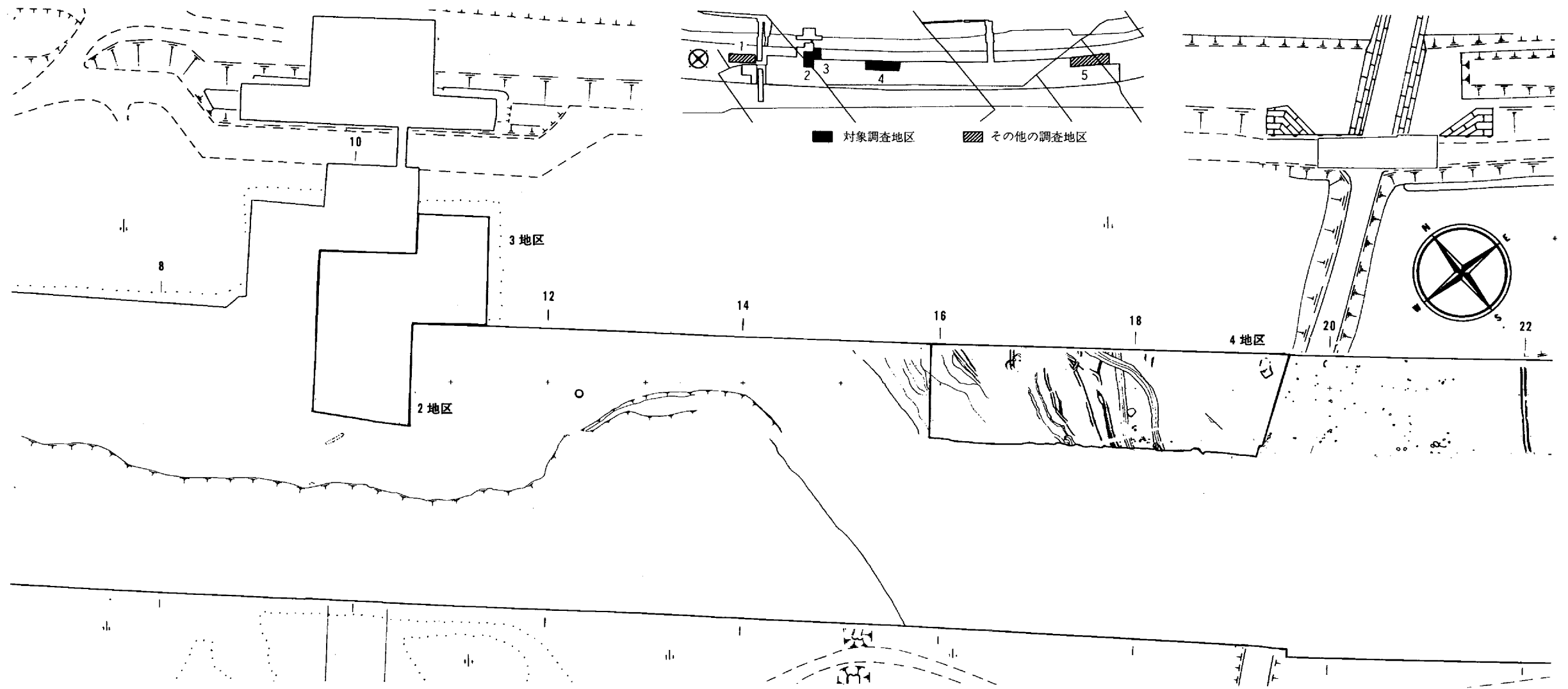
300cm



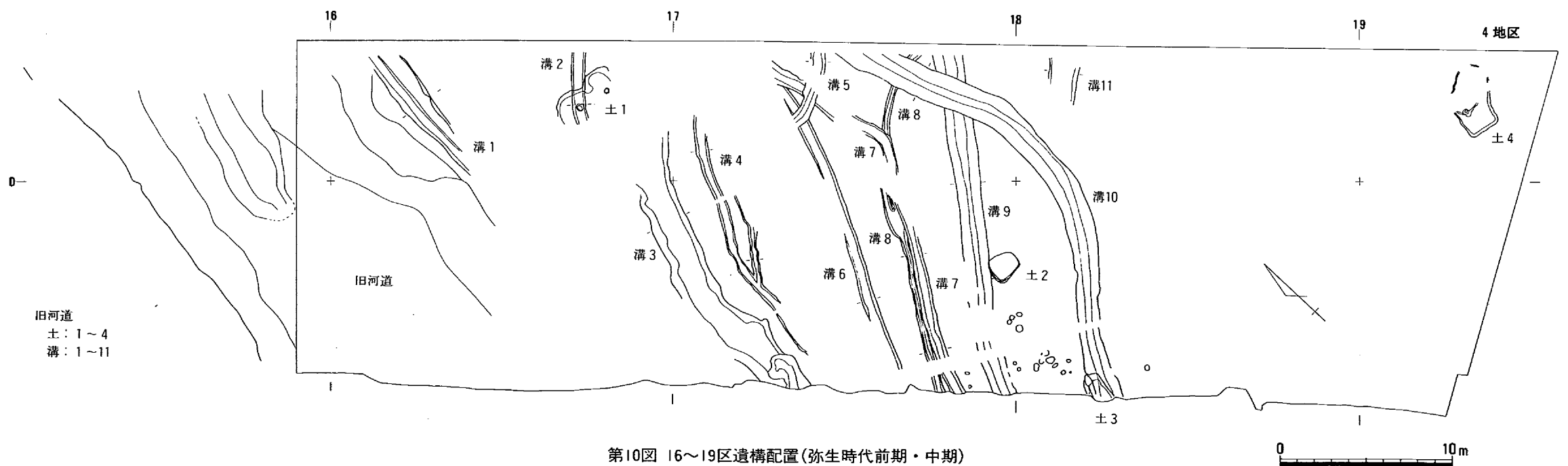
2m

第8図 旧河道断面

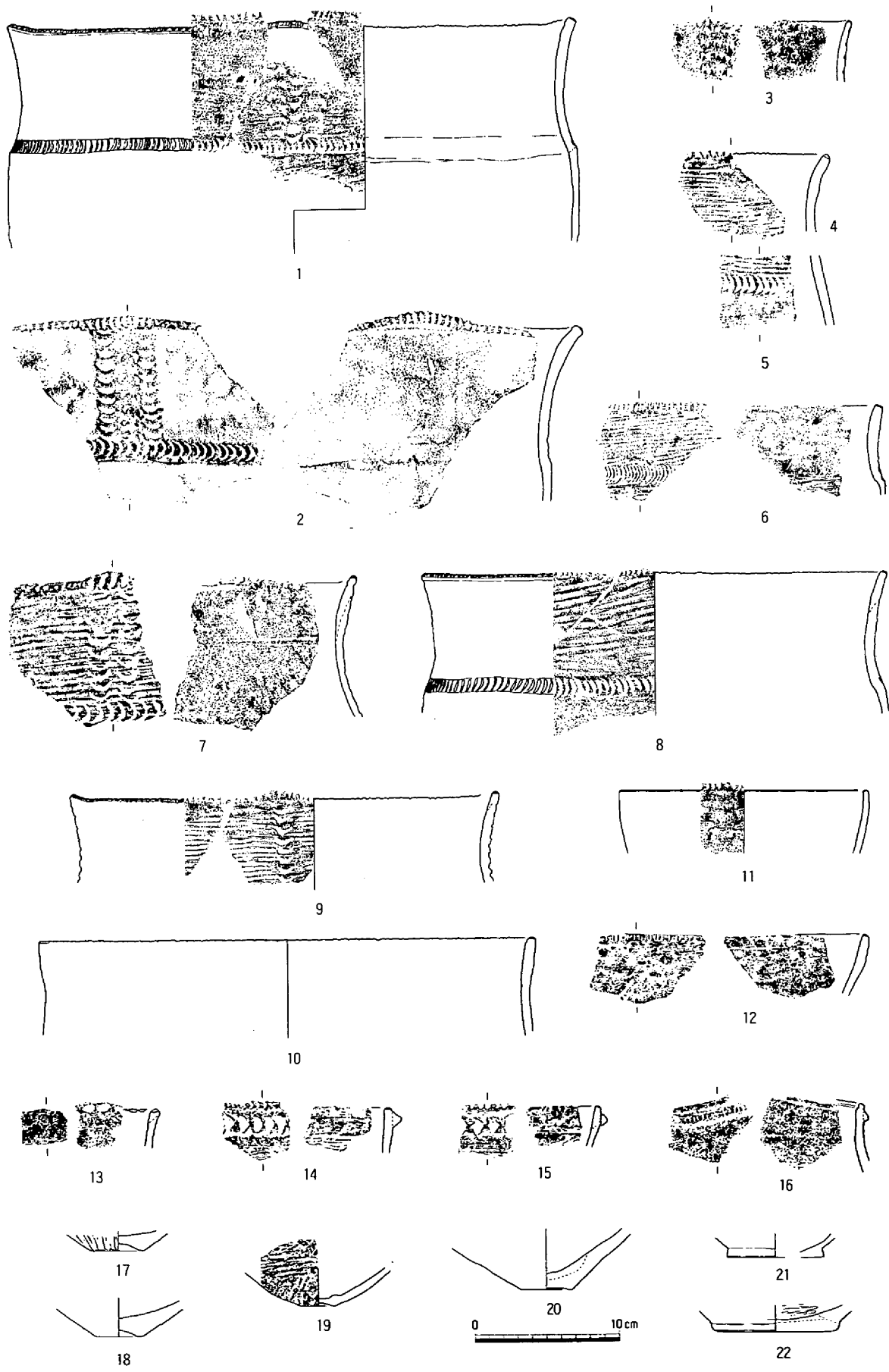




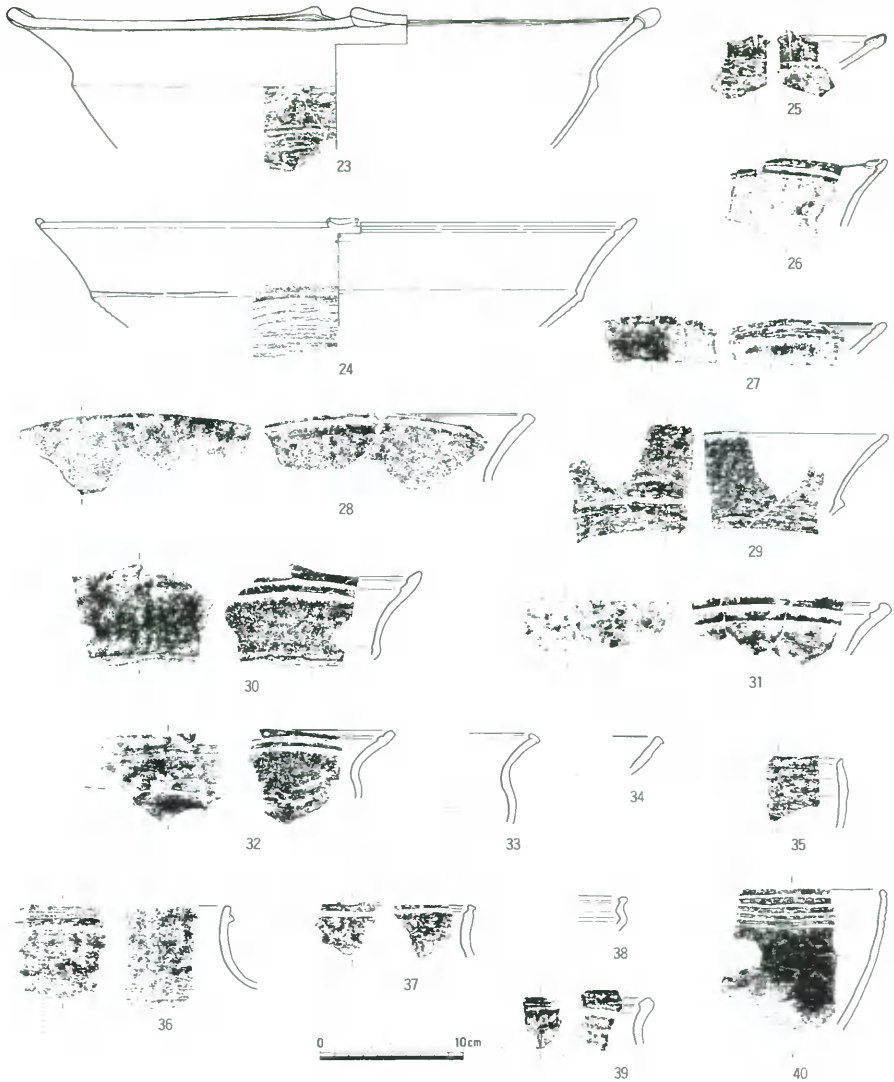
第9図 対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代前期・中期、1/1000)



第10図 16~19区遺構配置(弥生時代前期・中期)



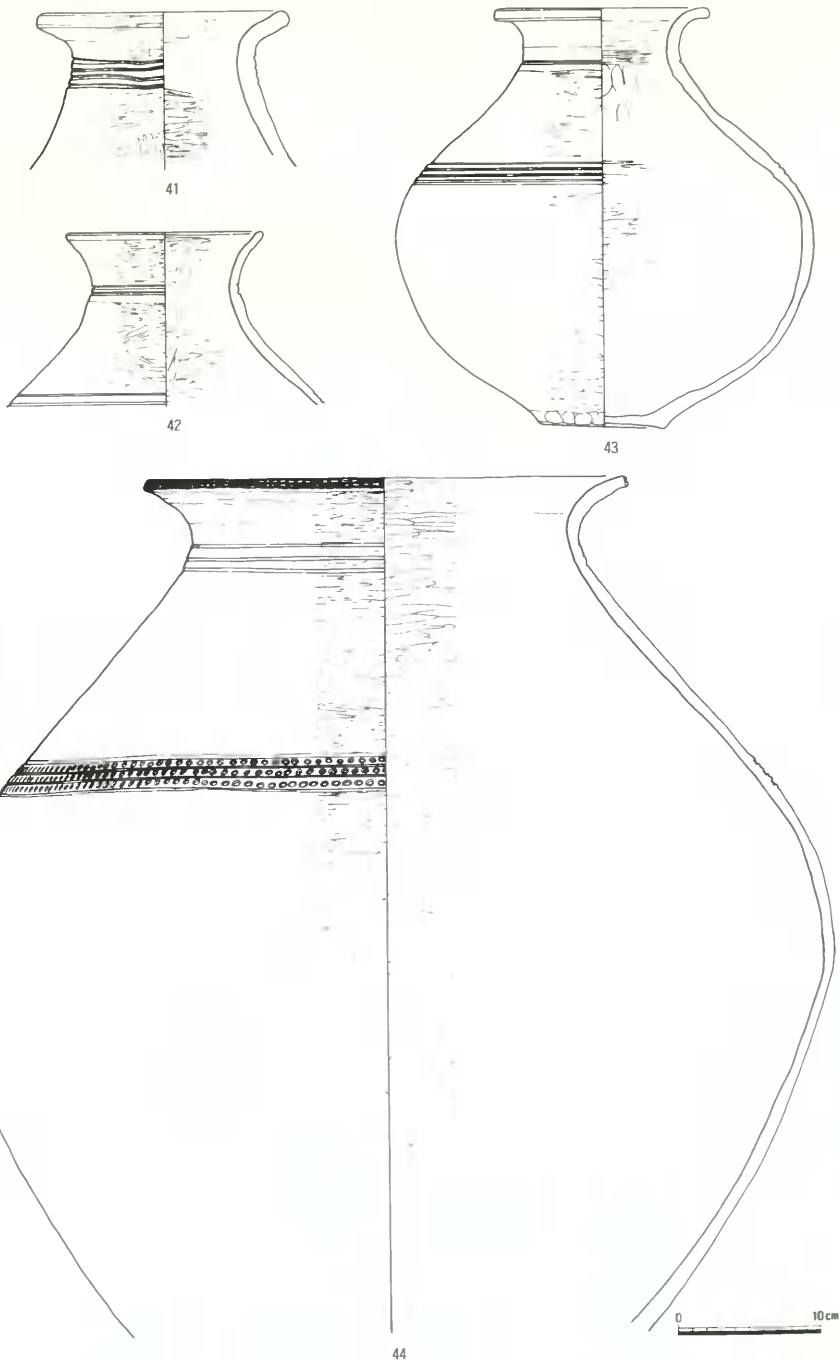
第11図 旧河道出土遺物(I)



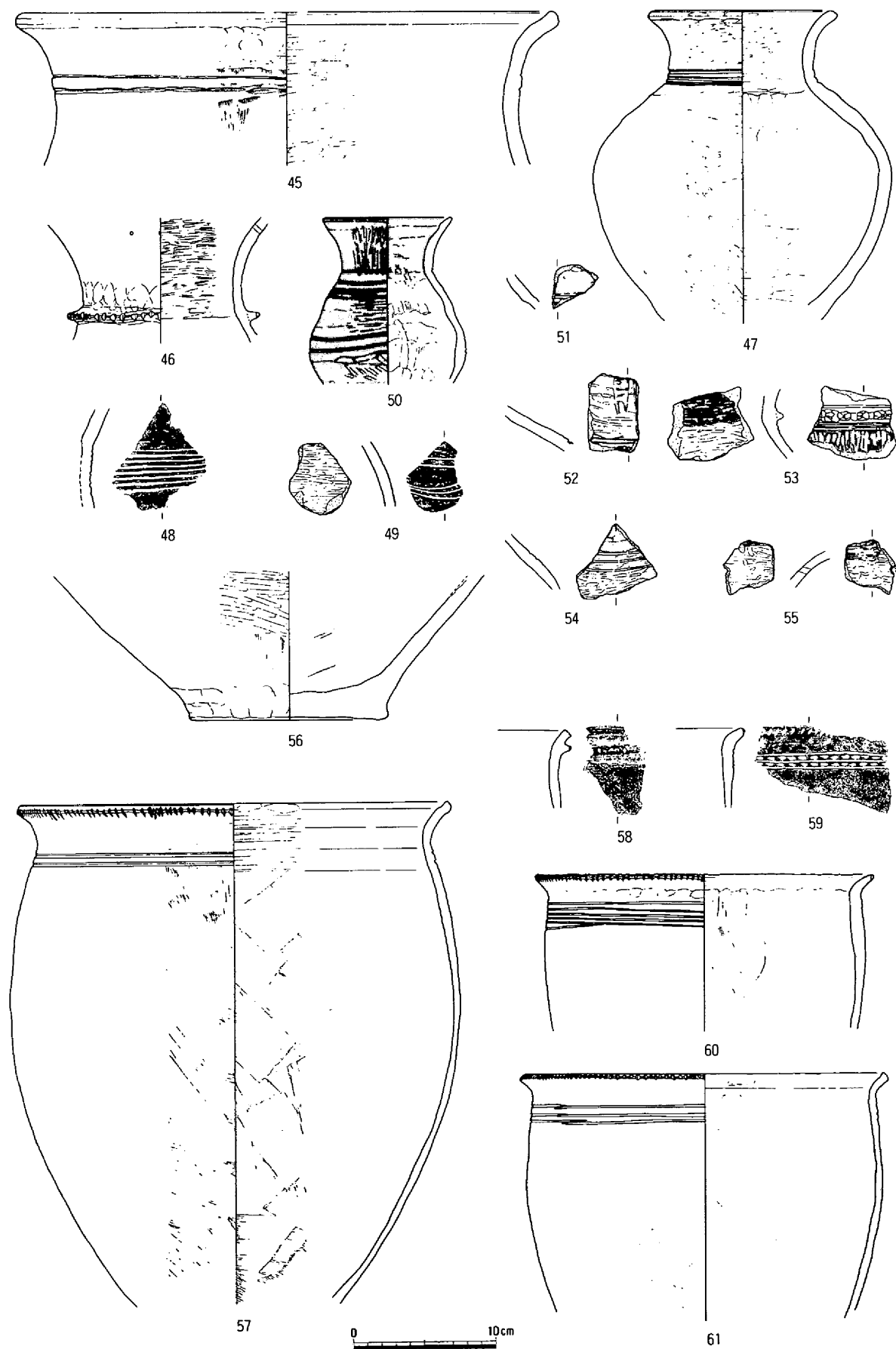
第12図 旧河道出土遺物(2)

貝殻、種子がある。土器の多くは東肩の斜面堆積で、肩の張り出し部分下や挟れ部分に集中する。出土層位は、縄文土器と弥生前期土器が中・下層から出土し、弥生中期土器は上層から出土する。その他の遺物では、木製品、獣骨、貝殻、種子が中層以下から出土し、石製品は各層から出土する。

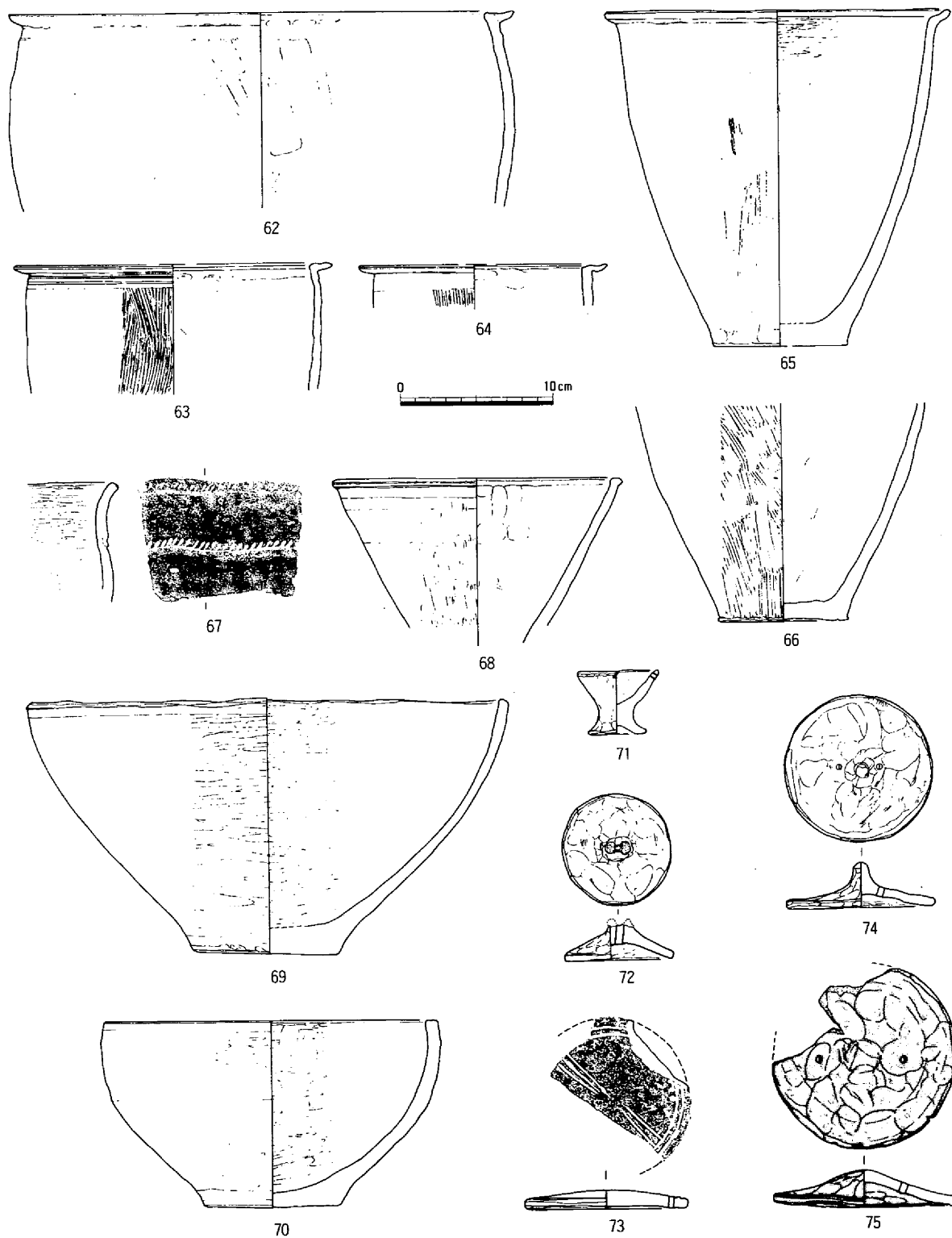
縄文土器は、深鉢（1・10・13～20）と浅鉢（11・12・21～40）がある。深鉢の13～16は晩期後葉、その他は晩期中葉に属す。なお、頸と胴部の境の施文は、すべて逆C字形の爪形文と押し引文である。浅鉢40は、内湾して立ち上る口縁部外面に5条の沈線を繞らせ、内外面ともヘラミガキする。



第13図 旧河道出土遺物(3)

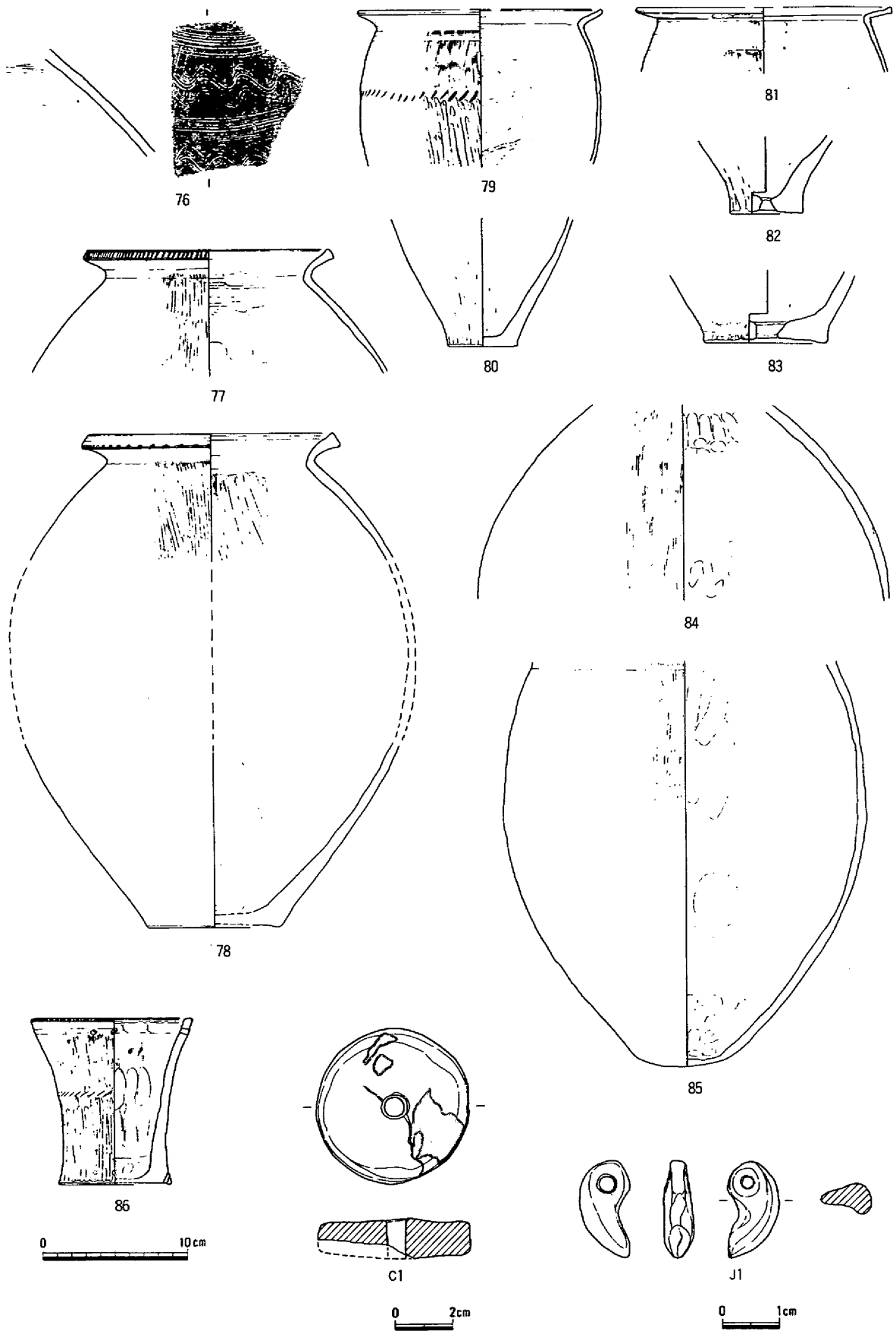


第14図 旧河道出土遺物(4)

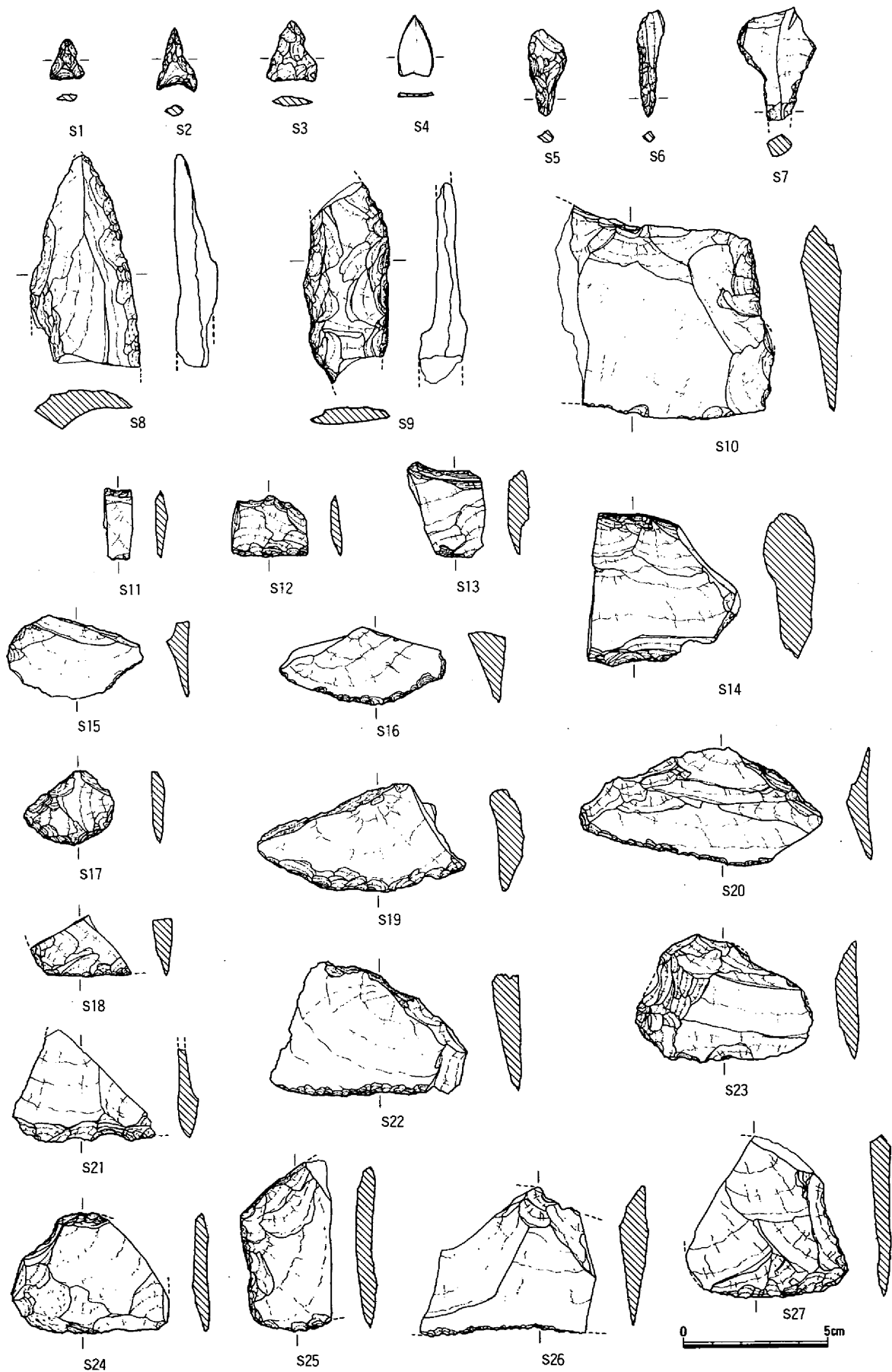


第15図 旧河道出土遺物(5)

弥生土器は、前・中期の壺、甕、鉢、蓋がある。大形壺44の肩部は、ヘラによる際どりで突帯状にした中に平行沈線を繞らせ、さらにその間を円形の刺突で充填する。壺49の内外面には黒色物を塗布し、48・51・52・54の外表面と53・55の内外面には赤色顔料を塗布する。甕58は、緩やかに外反する口縁部に突帯を貼り付け、口唇部と突帯上にキザミメを施す。鉢67は、粘土接合部をヘラで面取りし

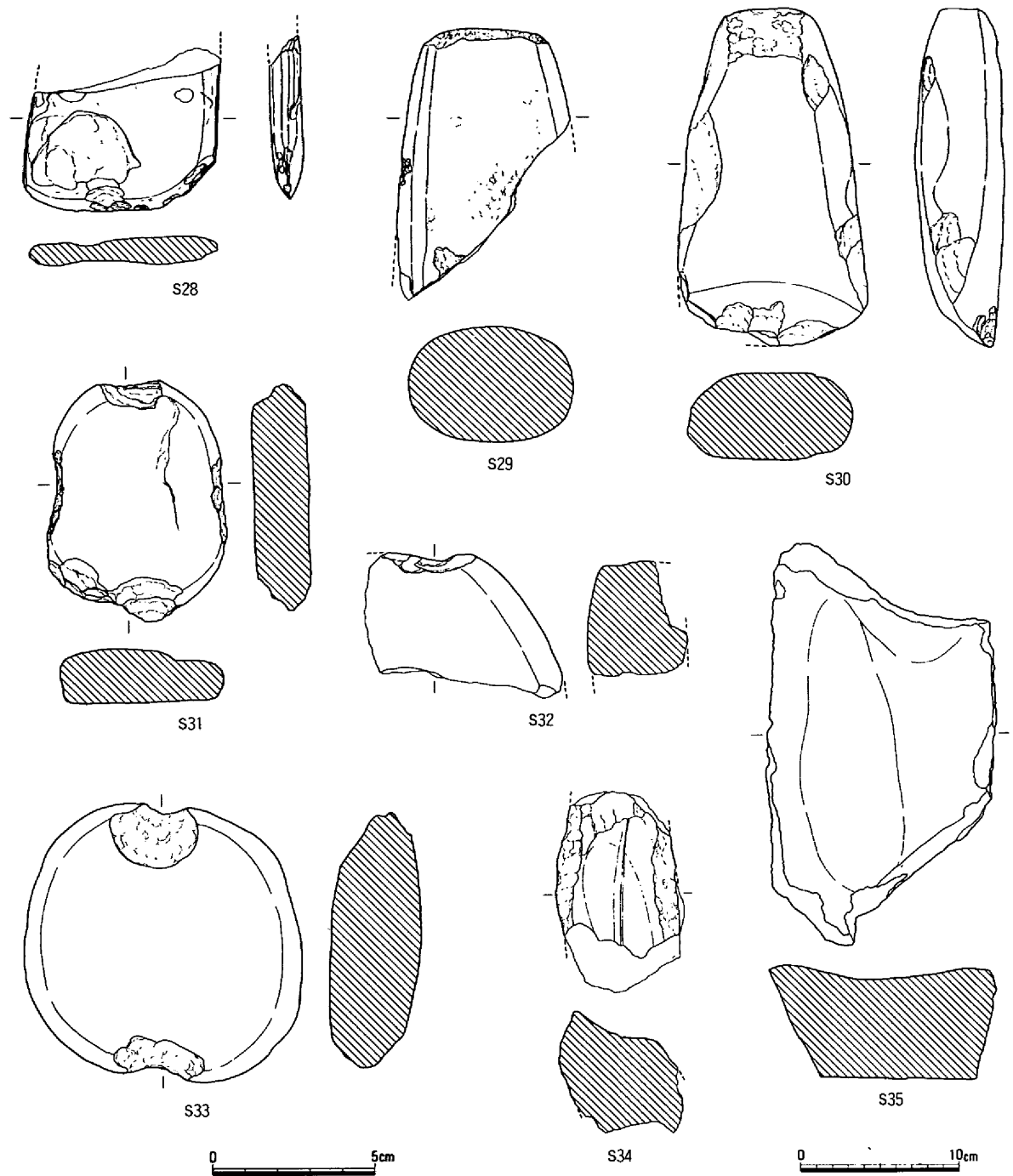


第16図 旧河道出土遺物(6)



第17図 旧河道出土遺物(7)

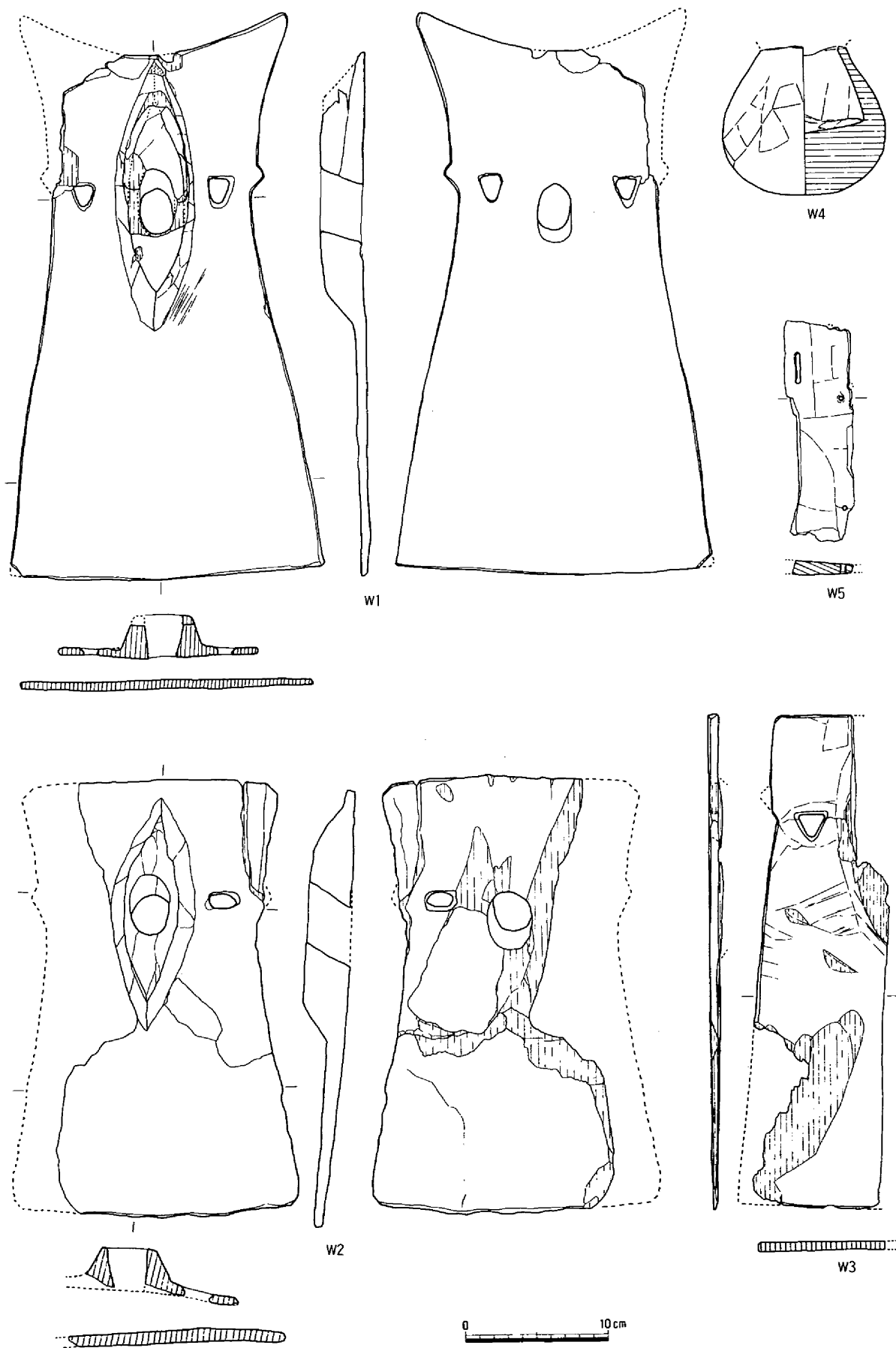




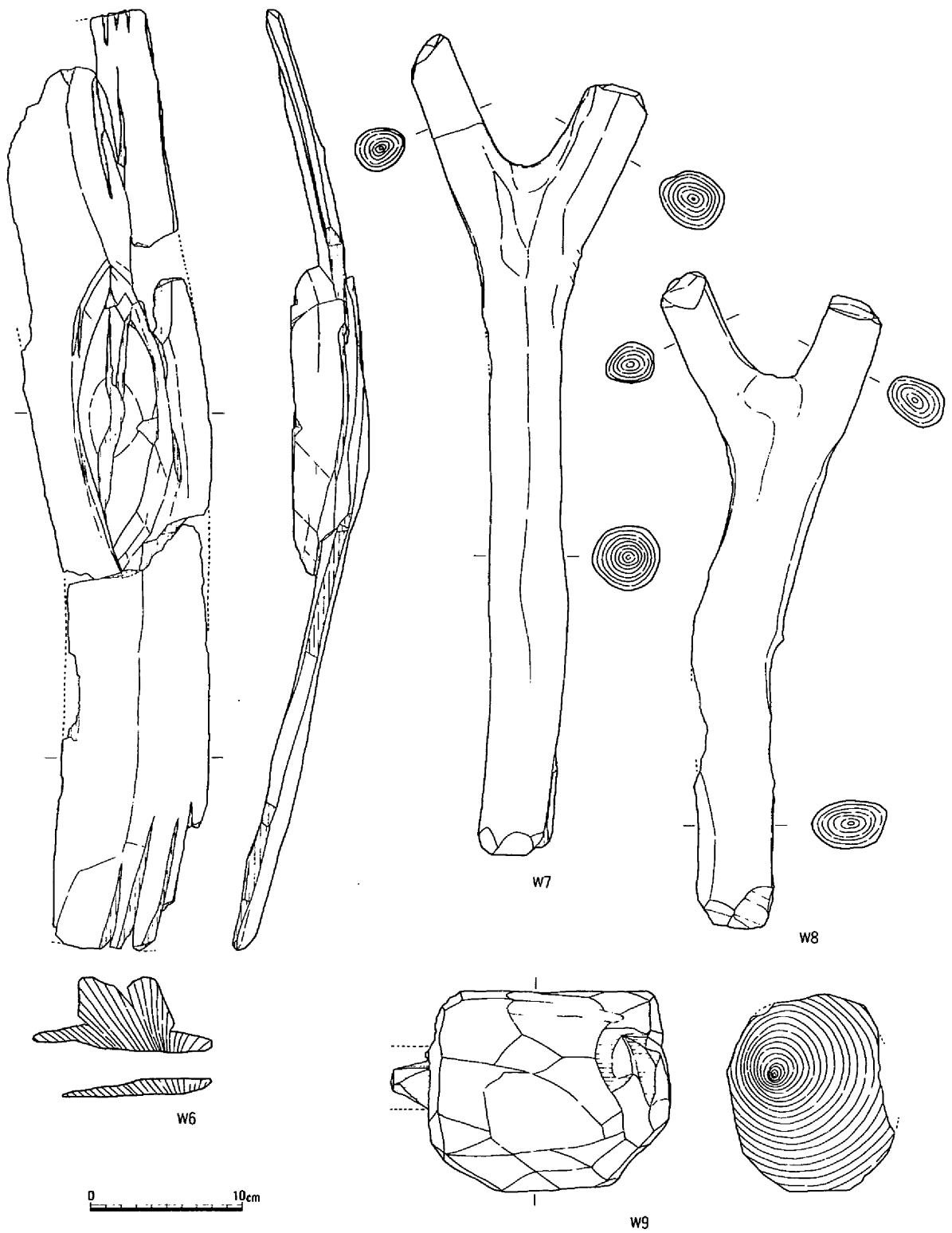
第18図 旧河道出土遺物(8)

て際立たせ、その上部と口唇部に浅いキザミを施すもので、内外面ともヘラミガキする。また、蓋73は、外面に赤色顔料を塗布する。甕84・85は、技法や焼成が酷似するもので、外面はハケメ、内面はユビナデとユビオサエを施す。特に底部内面は指頭圧痕が顕著で、底部を押し出して成形する。

以上の弥生土器は、百・前・Ⅰのものが若干みられるものの、概ね百・前・Ⅱ～中・Ⅱに属する。石製品は、打製石鏃、磨製石鏃、石錐、石槍、石包丁、楔形石器、スクレイパー、磨製石斧、石錘、砥石、石皿である。S1～27は、サヌカイト製で、その他は、黒色頁岩(S28,)ヒン岩(S29)、安山岩(S30)、閃緑岩(S31～33)、砂岩(S34)、花崗岩(S35)を素材とする。



第19図 旧河道出土遺物(9)



第20図 旧河道出土遺物(10)

C1は、一部に黒色物の塗布がみられる土製円板で、紡錘車とも考えられる。

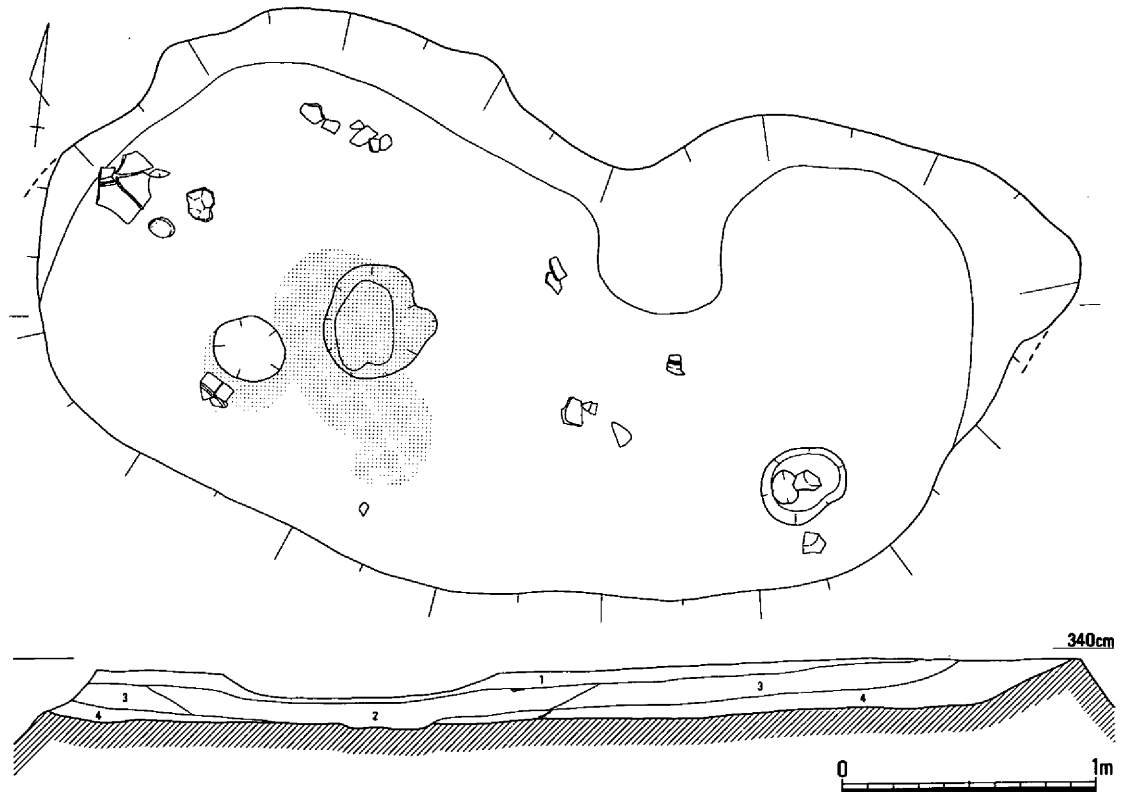
J1は、翡翠製の勾玉である。東肩口の張り出し部分の上面から出土した。

木製品は、広鋏(W1～3)、壺(W4)、諸手鋏の未製品(W6)、二又柄(W7・8)、きぬた(W9)等である。壺は口縁部を欠損するものの、前期の壺を象ったものと考えられる。(高田)

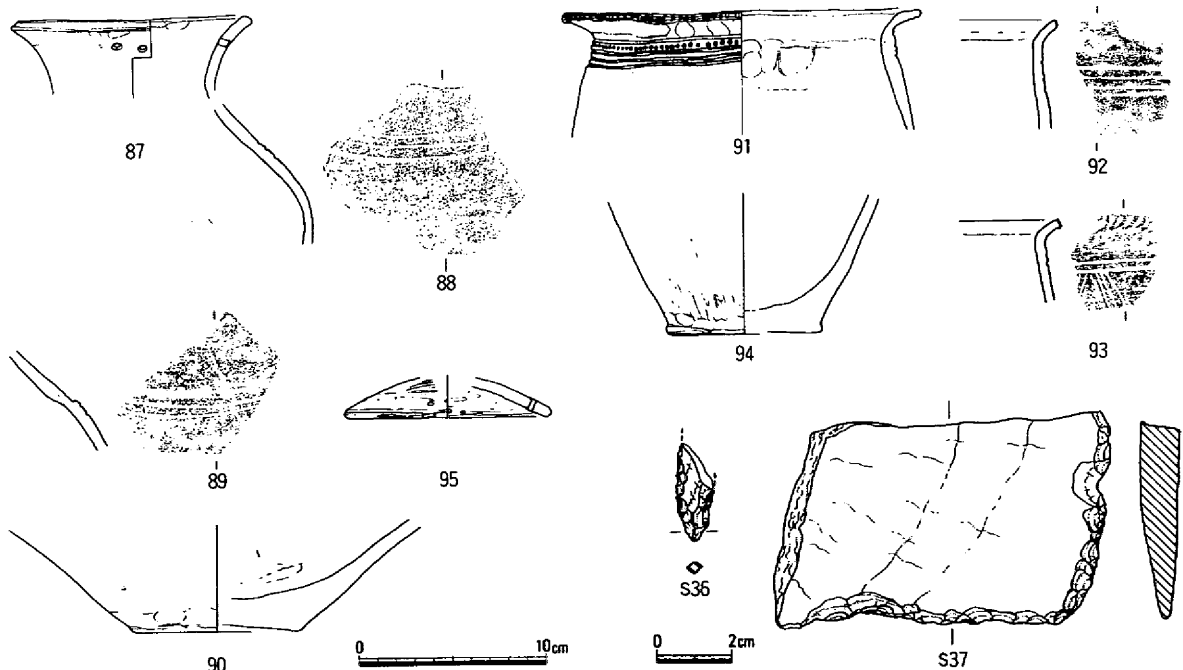
(2) 土 壙

土壙1 (第10・21図、図版5)

16C区の南隅で検出した不定形な土壙である。後述する溝2と水田1にその南半を大きく切られて



1. によい黄橙色(10YR7/3)粘性砂質土  
 2. 灰褐色(7.5YR5/2)粘性砂質土(焼土ブロック・炭粒多含)  
 3. 灰褐色(7.5YR5/2)粘性砂質土  
 4. 灰黄褐色(10YR6/2)粘性砂質土



第21図 土壙1、同出土遺物

いる。規模は現状で東西412cm、南北205cm、深さ20cmを測る。底はほぼ平坦だが、3箇所に径30～45cm、深さ3～10cmの円～楕円孔が穿たれている。このうち土壌中央付近のものは、焼土ブロックと炭を多く含み、底面およびその周囲が明赤褐色によく焼けていた。

遺物には土器と石器があり、いずれも底面近くで出土している。

時期は百・前・Ⅱと考えられる。

(高田)

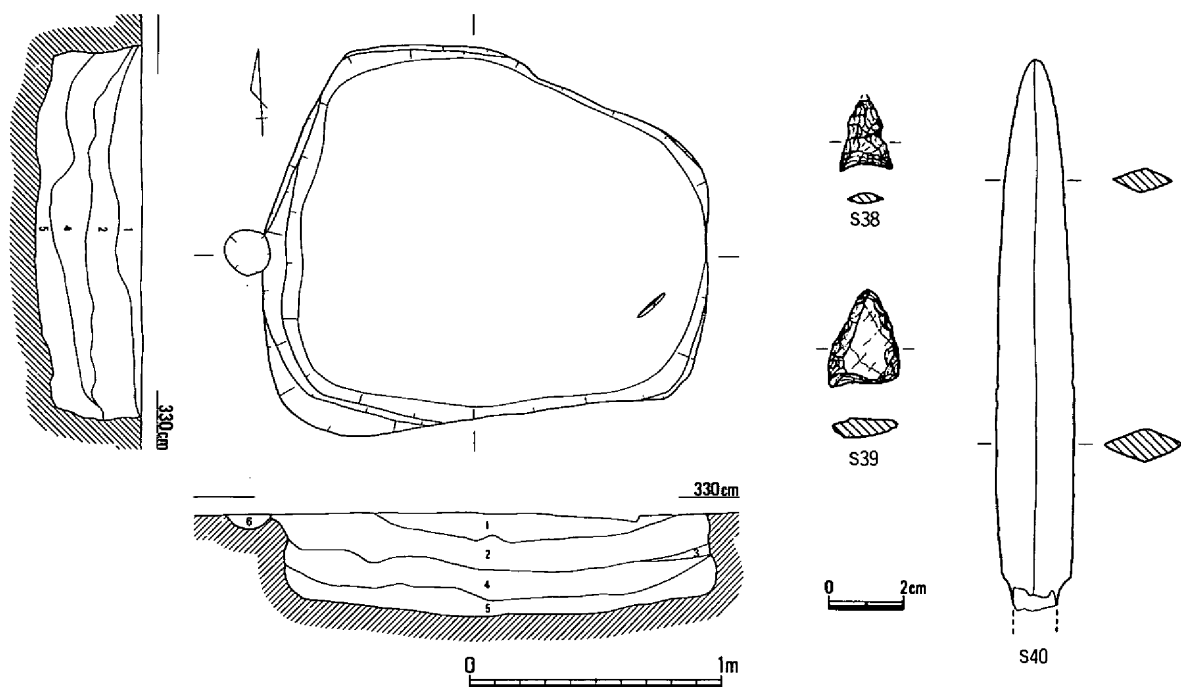
土壌2 (第10・22図、図版66)

17D区の東隅で検出した土壌である。平面形は隅丸の台形状で、その規模は東西176cm、南北155cm、深さ41cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は垂直かやや内傾ぎみに立ち上がる。その埋土は、4・5層に基盤土と考えられるにぶい黄褐色粘土ブロックを充填するなど、人為的なものである。

出土遺物には、サヌカイト製の石鏃(S38・S39)と緑色片岩製の磨製石鏃(S40)がある。S40は、茎部を欠くものの長さ14.7cmで、1層下部で水平な状態で出土した。その標高は320cmである。

時期は、検出面と溝9に北西隅を一部切られることから、前期と考えられる。

(高田)



- |                              |   |
|------------------------------|---|
| 1. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂(炭・焼土粒含) | 4. 灰黄褐色(10YR4/2)粘土(炭・焼土粒含、にぶい黄褐色粘土ブロック多含) |
| 2. 灰褐色(7.5YR4/2)粘土(炭・焼土粒多含)  | 5. 黄褐色(2.5Y4/1)粘土(炭・焼土粒含、にぶい黄褐色粘土ブロック多含)  |
| 3. 黄灰色(2.5Y4/2)粘土            | 6. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂(柱穴埋土)                |

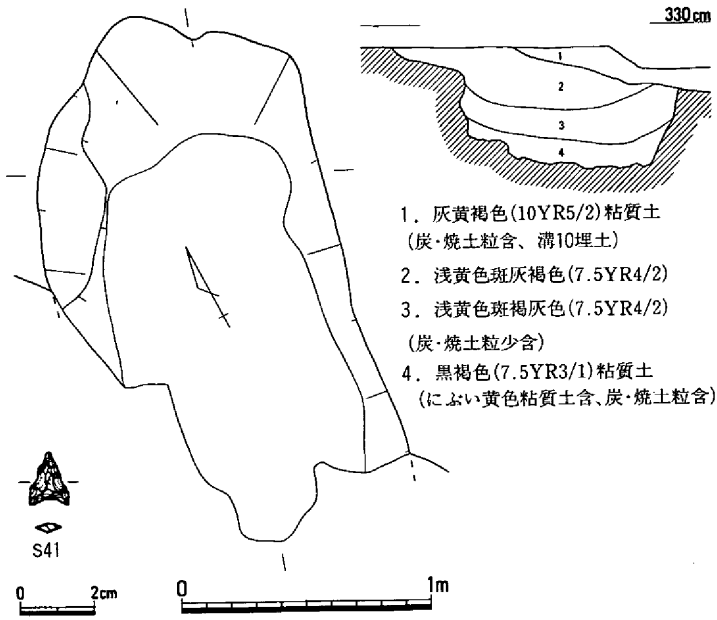
第22図 土壌2、同出土遺物

土壌3 (第10・23図)

18D区の西寄りで検出した土壌で、東半を溝10に切られる。南半は調査区外に延び、『百間川原尾島遺跡2』の「土壌114」に接続する可能性が高い。平面形は隅丸の長方形で、残存規模は南北215cm、東西115cm、深さ48cmを測る。底は、若干の凹凸がみられるもののほぼ平坦で、壁は急傾斜に立ち上がるが、一部に張り出し状の平坦面をもつ。出土遺物には、サヌカイト製の石鏃S41がある。

時期は、検出状況から前期と考えられる。

(高田)



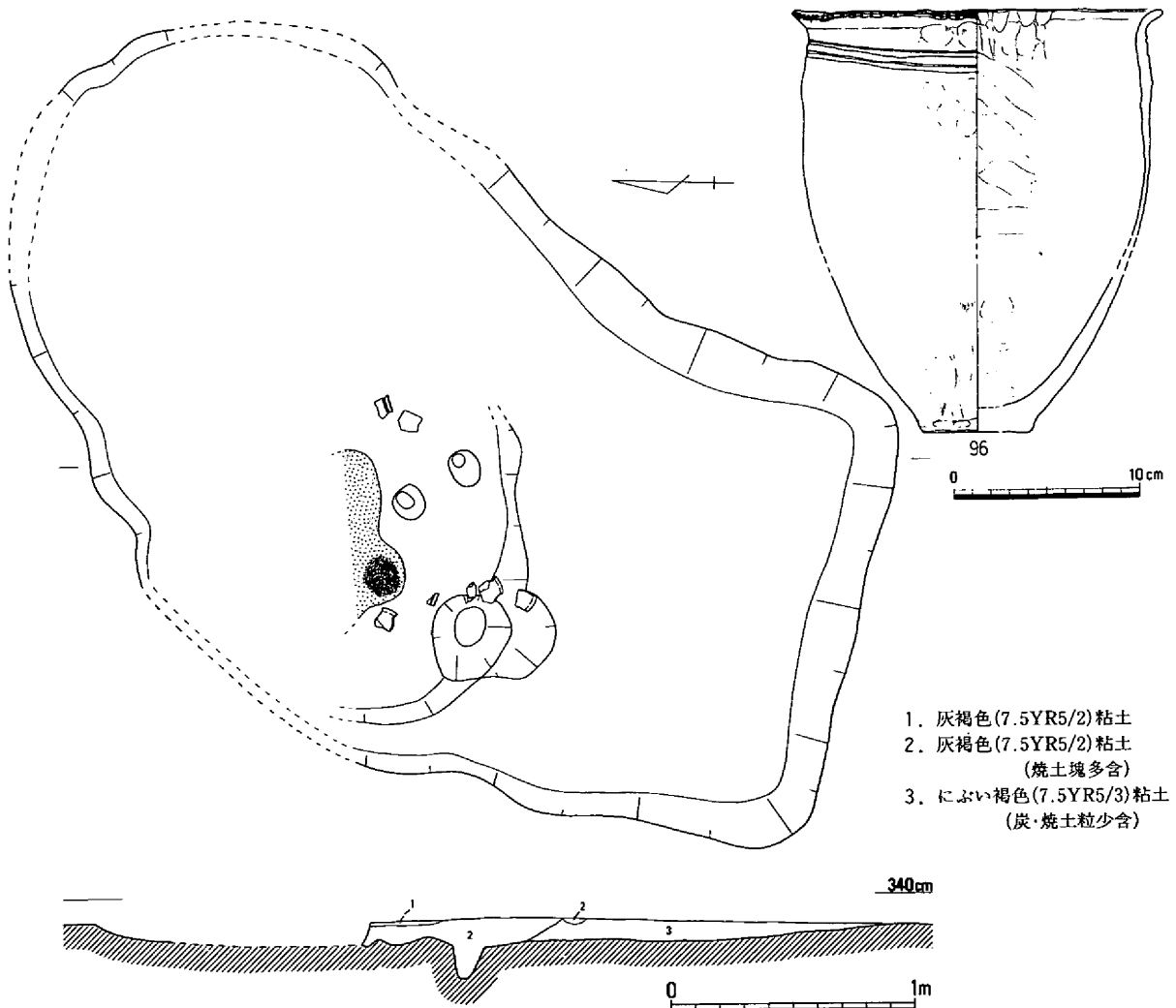
第23図 土壌 3、同出土遺物

1. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土  
(炭・焼土粒含、溝10埋土)
2. 浅黄色斑灰褐色(7.5YR4/2)
3. 浅黄色斑褐灰色(7.5YR4/2)  
(炭・焼土粒少含)
4. 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土  
(にぶい黄色粘質土含、炭・焼土粒含)

土壌 4 (第10・24図、図版 5)

19C区の西隅で検出した不定形な土壌で、その北半を古墳時代の建物12に切られている。規模は長軸で429cm、短軸で228cm、深さ10cmを測る。底はほぼ平坦だが、中央付近が一段落ち込んでいる。その中央底面には数個の円孔と、長軸70cm、短軸20cm以上の範囲に被熱した部分が見られた。その形態や底面の被熱面等の在り方は、先述の土壌1と類似する。

時期は、出土した甕から百・前・Ⅱと考えられる。(高田)



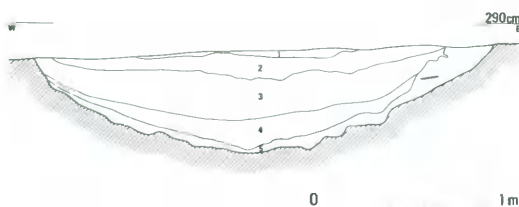
第24図 土壌 4、同出土遺物

1. 灰褐色(7.5YR5/2)粘土
2. 灰褐色(7.5YR5/2)粘土  
(焼土塊多含)
3. にぶい褐色(7.5YR5/3)粘土  
(炭・焼土粒少含)

### (3) 溝

#### 溝1 (第8・10・25図)

16C区の西寄りに位置し、旧河道の東肩で検出した溝である。その北端は調査区外に延び、南端は古墳時代の溝29に切られている。規模は残存長約9m、幅242cm、深さ55cmを測る。底部は若干の凹凸がみられ、壁は丸みをもった底から緩やかに立ち上がる。溝は第8図にみられるように、旧河道の埋没途中に掘り込まれた状況を呈し、その上面は弥生後期の水田開発で削平されていた。



1. 黄灰色(2.5Y6/1)粘土
2. 灰黄色(2.5Y6/2)粘土(下端に微砂層)
3. にぶい褐色(7.5YR5/3)～黄褐色(2.5Y5/3)粘質微砂(炭・焼土粒少含)
4. 灰黄色(2.5Y6/2)～暗灰黄色(2.5Y6/3)微砂(灰白色微砂少含)
5. 黄灰色(2.5Y4/1)粘土(灰白色微砂少含)

第25図 溝1 断面

以上のことから溝の時期は、前期あるいは中期と考えたい。

(高田)

#### 溝2 (第10・245図)

16C区に位置し、土壌1と重複する溝である。その東北端は調査区外に延び、西南端を水田1に切られる。規模は長さ4.2m、幅75cm、深さ14cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。出土遺物にはS100の黒耀石製の石鎌がある。

時期は、検出状況から前期あるいは中期と考えられる。

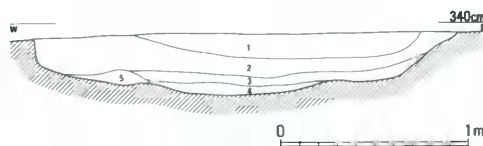
(高田)

#### 溝3 (第10・26図)

16・17C・D区に位置し、やや弧を描きながら南北に流走する溝である。北端を水田1に切れ、南端は調査区外に延び、『百間川原尾島遺跡2』の「溝31」に接続する。規模は幅225cm、深さ33cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

時期は、検出状況から前期と考えられる。

(高田)



1. 灰褐色(7.5YR6/2)粘性砂質土  
(マンガン多含、焼土粒含)
2. 灰褐色(7.5YR6/2)粘性砂質土(焼土粒含)
3. にぶい黄褐色(10YR7/4)粘性砂質土
4. にぶい黄褐色(10YR7/3)粘性砂質土
5. 淡黄色(2.5Y8/3)微砂

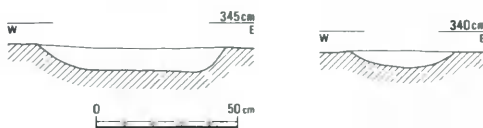
第26図 溝3 断面、同出土遺物

#### 溝4 (第10・27図)

17C・D区に位置し、溝3に平行して南北に流走する溝である。2条の溝が合流するものの、いずれの端も溝21に切られるため、詳細は不明である。規模は幅65cm、深さ8cmを測る。底は平坦な部分もあるが多くの丸みをもち、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土である。

時期は、検出状況から前期あるいは中期と考えられる。

(高田)



第27図 溝4 断面

溝5 (第10・28図)

17C区に位置し、溝6・7と重複する溝である。東北端は調査区外に延び、西端を溝22に切られるため、弧を描くものの流走方向は不明である。規模は幅75cm、深さ20cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

時期は、検出状況から百・中・I以降である。(高田)

溝6 (第10・28図)

17C・D区に位置し、北東から南西に直線的に流走する溝である。その北東端を溝5と7に切れ、南西端と北西の肩を溝22に切られている。規模は73cm、深さ25cm前後を測る。底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がる。埋土は、2・4層に黄褐色土ブロックを含むなど、人為的に埋めた可能性がある。

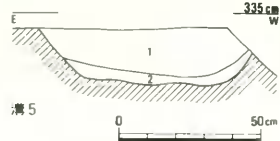
切り合い関係で溝7よりも古いことを確認していることから、溝の時期は、百・中・I以前と考えられる。(高田)

溝7・8 (第10・29図)

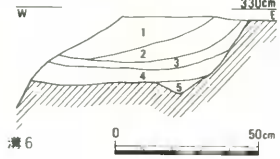
17C・D区に位置し、Dライン以南で重複する2条の溝である。両端は調査区外に延び、溝7の南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝33」に、溝8は「溝32」に接続する。直線的に南流した溝7は、溝8と接して向きを西寄りに変え、さらに直線的に流走する。その規模は幅73cm、深さ28cmを測り、断面形は逆台形を呈す。溝8は東から弧を描きながら流走し、溝7と接したのちは同様の流路をとる。その規模は幅42cm、深さ10cm前後を測り、断面形は逆台形を呈す。なお、溝7は溝5と、溝8は溝10に切られている。

溝の時期は、出土遺物と検出状況から、百・中・Iと考えられる。

(高田)

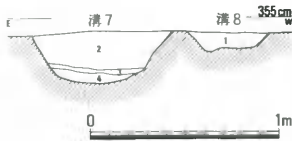


1. によい黄橙色(10YR7/3)粘性砂質土
2. 明褐色(7.5YR7/2)粘質土



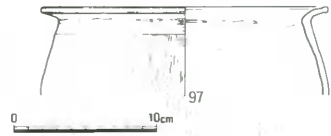
1. 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土
2. 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土(黄褐色土ブロック含)
3. によい黄橙色(10YR7/2)粘性微砂
4. 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土(黄褐色土ブロック含)
5. 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土

第28図 溝5・6断面



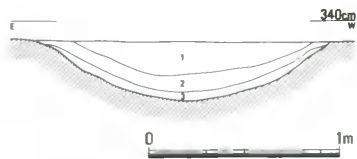
1. 褐色(7.5YR6/1)粘質土
2. によい黄橙色(10YR7/2)粘質土
3. 褐色(7.5YR5/1)粘質土
4. 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土

第29図 溝7・8断面、溝8出土遺物



溝9 (第10・30・31図)

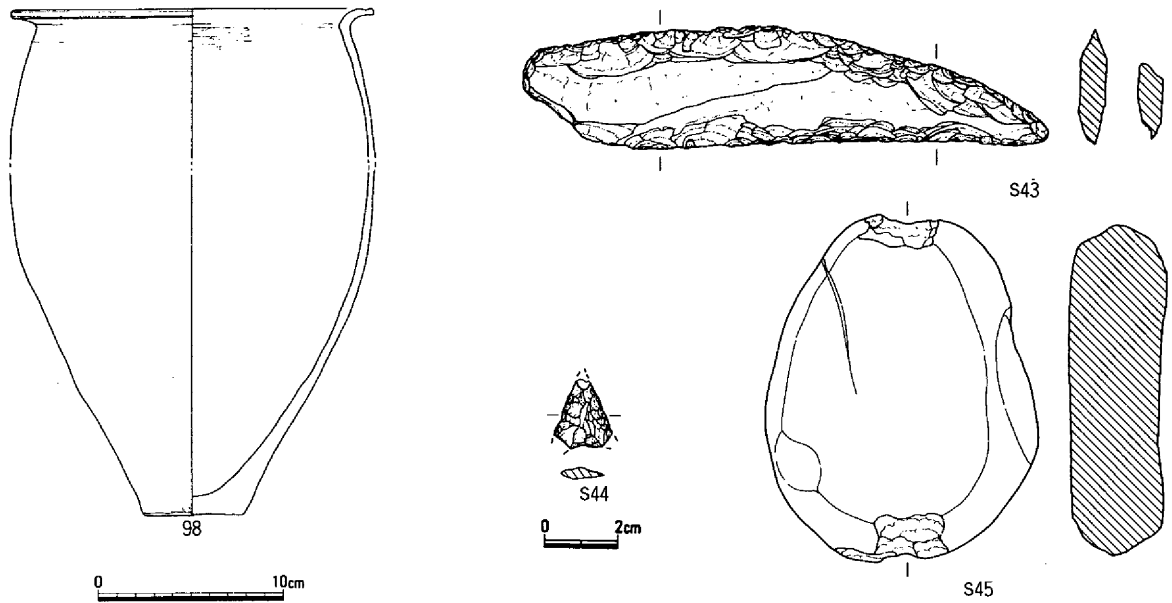
17C・D区に位置し、18ラインにはほぼ平行して直線的に流走する溝である。その両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝34」に接続する。また、18D杭の北で後述の溝10と交差する。規模は幅155cm、深さ30cmを測る。底は丸く平坦面をもたず、やや緩やかに立ち上がるなど、溝10との相似がみられる。埋土は3層で、いずれも粘質土のレンズ状堆積であり、各層とも炭と焼土粒がやや目立っている。



1. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(炭・焼土粒少含)
2. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(炭・焼土粒やや多含)
3. 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土(炭・焼土粒やや多含)

第30図 溝9断面





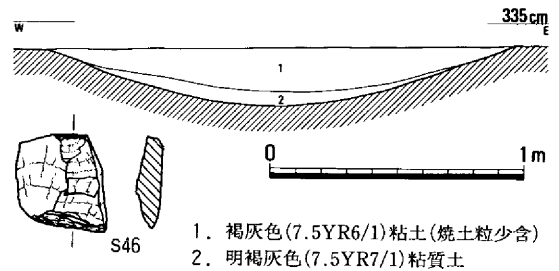
第31図 溝9 出土遺物

出土遺物には、土器と石器がある。S43はサヌカイト製の打製石鎌身、S45は安山岩製の石錘である。

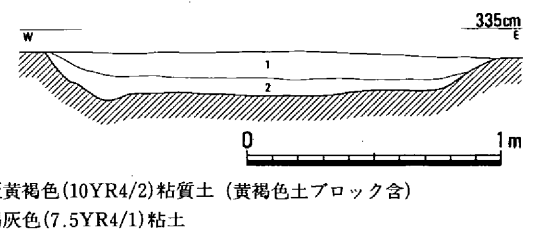
溝の時期は、出土した遺物や検出状況から百・中・Iと考えられる。(高田)

溝10 (第10・32図)

17・18C・D区に位置する溝である。溝8・9と切り合い関係にあり、それらよりも新しいことを確認している。溝は、18D杭付近で大きく蛇行しながら北から南へ流走するが、その両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝35」に接続する。規模は幅180cm、深さ25cm前後を測り、底は丸く平坦面をもたず、緩やかに立ち上がる。埋土は2層で、粘土と粘質土であり、除々に堆積したことが窺える。



第32図 溝10 断面、同出土遺物



第33図 溝11 断面

出土遺物は少量の土器片と楔形石器で、時期を決する資料はないが、検出状況から中期と考えられる。また、溝8・9より新しいことから、百・中・I以降である。(高田)

溝11 (第10・33図)

18C区の西寄りに位置し、明黄褐色土上面で検出した遺構である。東北端は調査区外に延びると考えられ、西南端は後世の遺構に切られる。規模は長さ280cm、幅176cm、深さ17cmを測る。底はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。その形状から溝としたが、流走方向等は不明である。

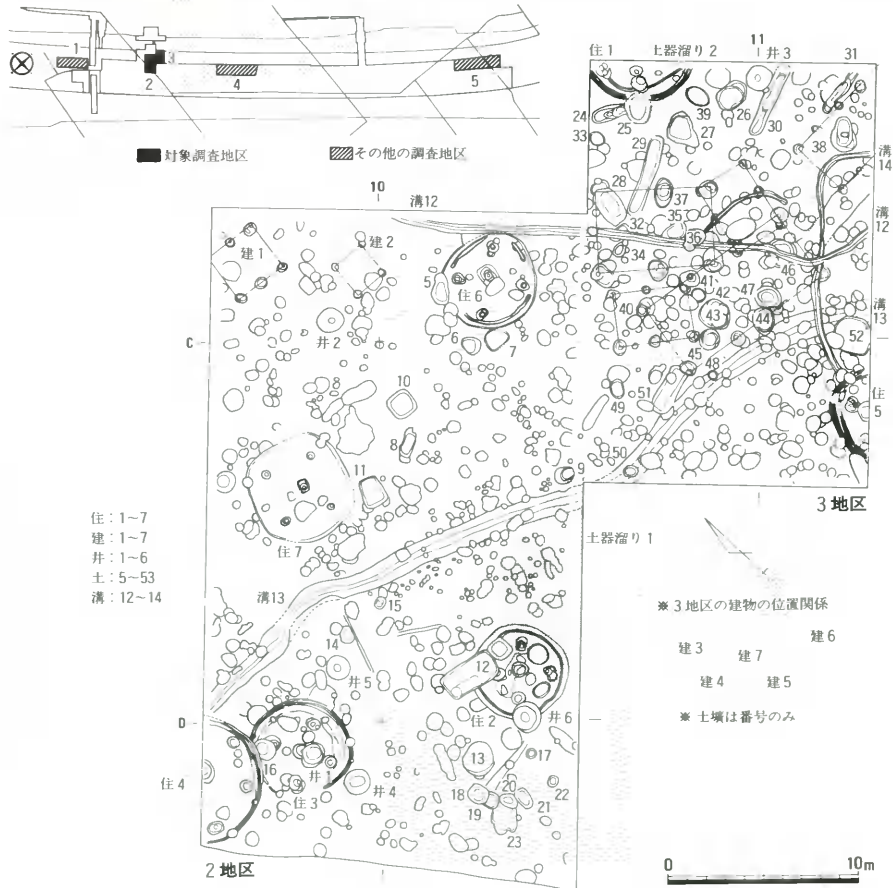
時期は、検出面等から前期あるいは中期と考えたい。(高田)

### 3. 弥生時代後期の遺構・遺物

この調査地区は、百間川原尾島遺跡の中でも他の時代に比べて、とくに住居や土塋などの遺構密度が高く、それらに伴う遺物も多量に出土し、集落の中心である2・3地区と水田・水路遺構が中心の4地区が対象である。

前者は、柱穴状土塋や不定形土塋が遺構の多くを占め、それらはのほとんどは弥生土器片を多量に含む。本項にそれらの全部について報告するには量が多すぎるため、土塋の形状や規模・性格、遺物の出土状況や質・量・時期などを参考にして、選択のうえ掲載せざるを得なかった。また、土器溜り1・2のとくに土器については割愛を余儀なくされた。この地区の遺構の時期は、後・Ⅰの新相と後・Ⅲの古相のものが多い。

4地区の数条の溝状遺構のうち、そのほとんどは水路の機能をもつと思われるが、報告書の構成上、洪水砂によって後期末水田と直接関係の捉えられる溝のみ水路として扱った。(柳瀬)

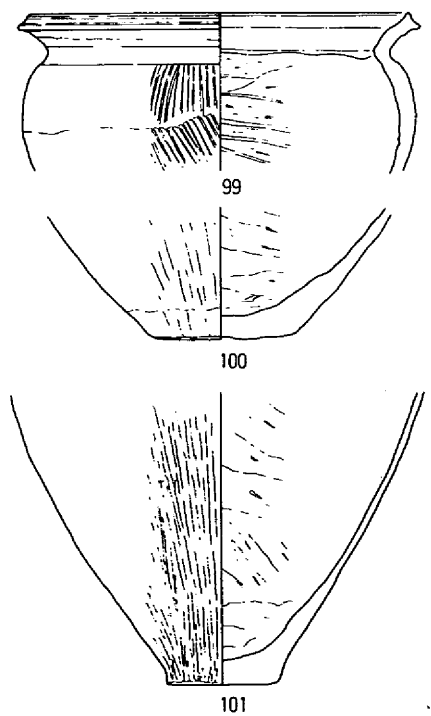
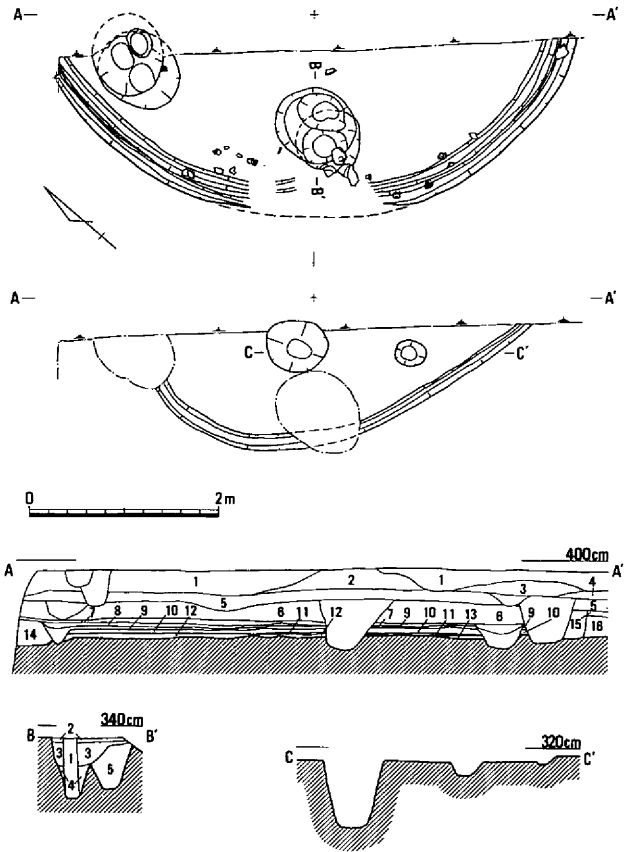


第34図 9～11区遺構配置(弥生時代後期)

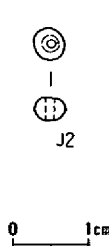
(1) 竪穴住居

竪穴住居1 (第35・38図、図版6-1.45)

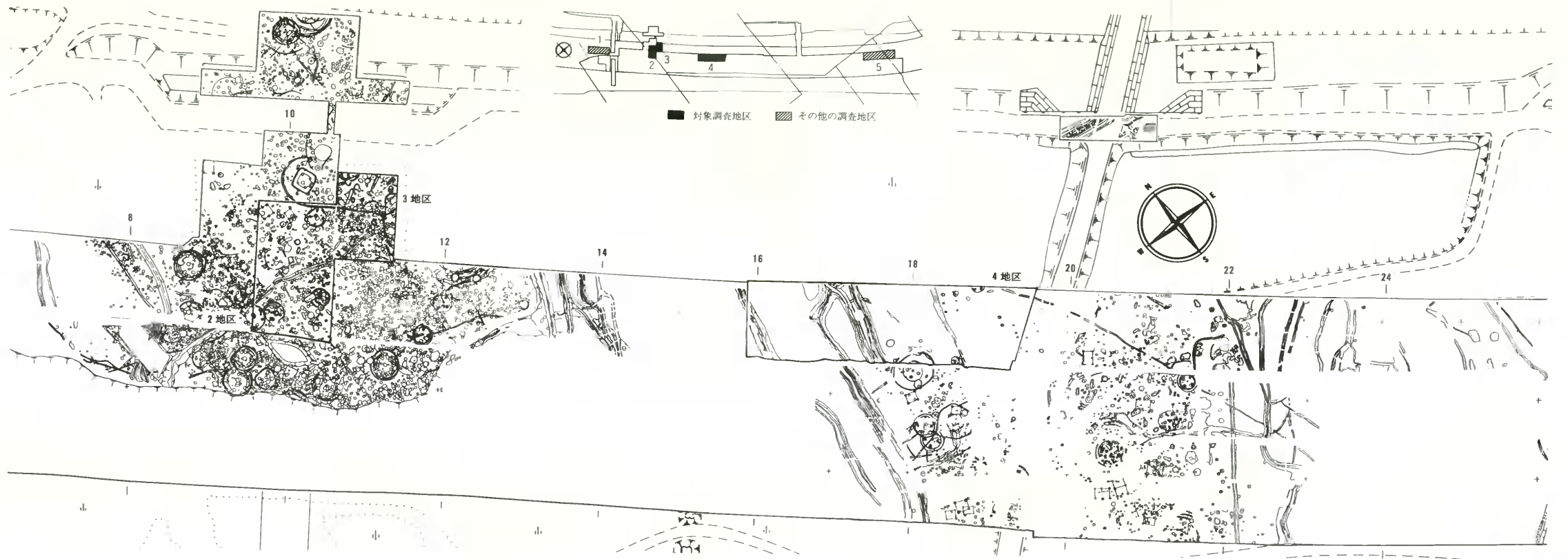
10B区の北半、調査区の北端で一部が検出された。壁体溝の形状から、円形の平面形が考えられるが、後述するように、当初は隅丸方形であった可能性が強い。この住居は度々改築されたようで、壁体溝が3条確認されたが、第35図の土層断面から判断して、拡張の方向になされたようである。床も何度か張り替えられ、床面とみられる炭の薄層が4面あった。第35図の住居平面図は、下が初期、上が中期と終期であるが、中期から終期への拡張は小さく、柱穴も重複している。支柱は、初期には4本であったものが、中期以降は6本に増やされたと想定される。竪穴の規模は、直径が推定で6.4m、残存の深さは初期で20cmを測る。柱穴の規模は、初期のものが直径65cm、深さ73cm、中期の一つが長径85cm、深さ56cmであった。直径15cmの柱痕が確認された。



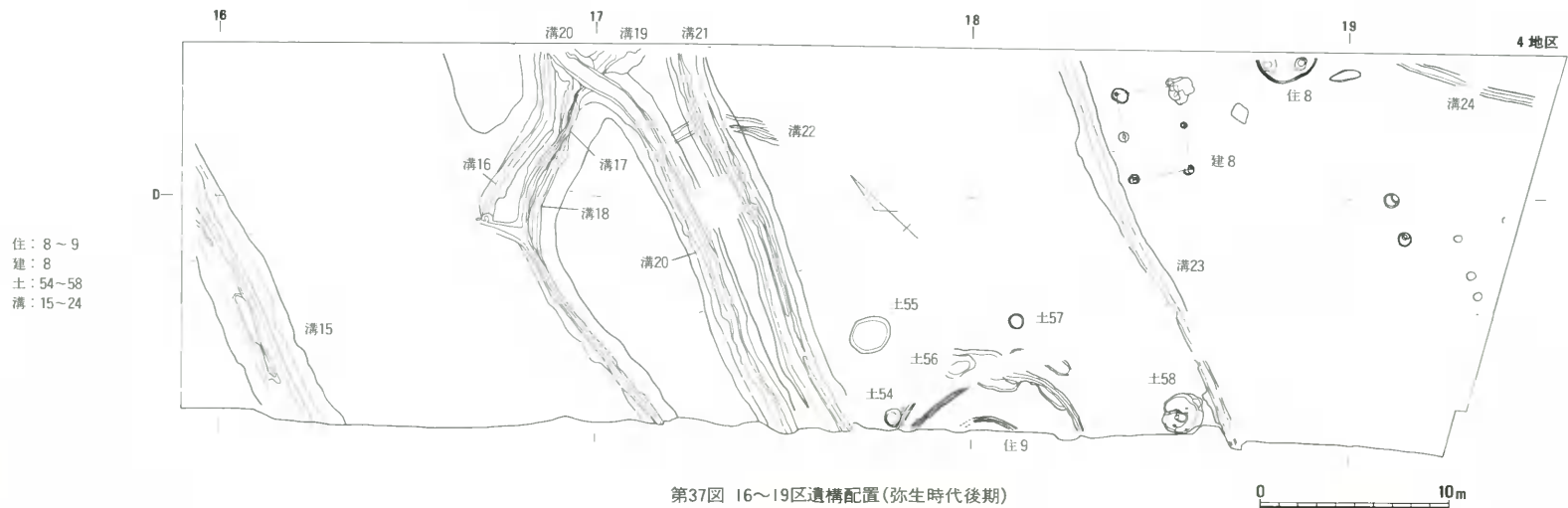
- A-A'
- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 淡灰黄褐色微砂          | 9. 灰褐色粘性土(底に炭)床3      |
| 2. 灰褐色粘性微砂(土器溜り)    | 10. 黄灰褐色粘性土( " )床4    |
| 3. 同上               | 11. 灰褐色粘性土斑粘性土( " )床5 |
| 4. 暗灰褐色粘性砂質土        | 12. 褐灰色粘性土(小ブロック混)    |
| 5. 灰灰色粘性土(炭粒含)      | 13. 暗灰褐色粘性土           |
| 6. 淡灰褐色粘性土          | 14. 灰褐色粘性土(黄褐色斑)      |
| 7. 灰褐色粘性土(粒)        | 15. 淡灰褐色粘性土           |
| 8. 淡灰褐色粘性土(炭含)床 1・2 | 16. 灰褐色粘性土(淡灰黄褐色粘土斑)  |
- B-B'
- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1. 灰褐色粘性土(底ほど黄斑)  | 4. 灰黄褐色粘土        |
| 2. 灰褐色粘性土         | 5. 黄褐色粘土(灰褐色粘土斑) |
| 3. 灰褐色粘性土(黄褐色粘土斑) |                  |



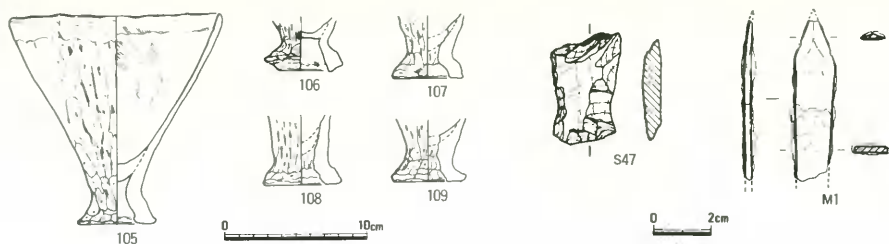
第35図 竪穴住居1、同出土遺物(1)



第36図 対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代後期、1/1000)



第37図 16~19区遺構配置(弥生時代後期)



第38図 竪穴住居Ⅰ 出土遺物(2)

出土遺物としては、土器・石器・鉄器・玉が認められた。図示した土器は終期の床面付近から出土したもので、製塩土器の割合が高くて注意される。出土土器の時期はⅠ(新)～Ⅱ(古)である。石器は楔形石器、鉄器は鉋の刃部とみられる。玉はガラス製で淡青色を呈する。(岡本)

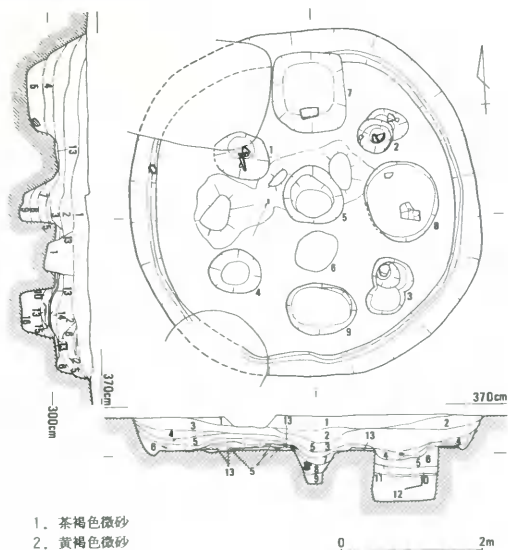
#### 竪穴住居2 (第34・39～41図、図版6-2. 45・67-1. 71)

10C区のD区寄りに位置し、ほぼ円形のプランを呈する。この住居址は径約5m、深さ約50cmを測り、他に比べて残存状態が非常によいが、肩部の二箇所を井戸6および土壌12によって切られている。床面には1～4の柱穴と5の中央穴のほかに7～9の貯蔵穴を有し、ほぼ全体に貼床を施す。

貼床は、中央穴の周辺で約10cmほど盛り上がる部分もあり、それを含めた床面上にはサヌカイトの剥片(一部製品・未製品を含む)が多量に散在して認められた。製品と製品に近いものの大半は第41図に載せたが、それ以外の総重量は1,350gであった。

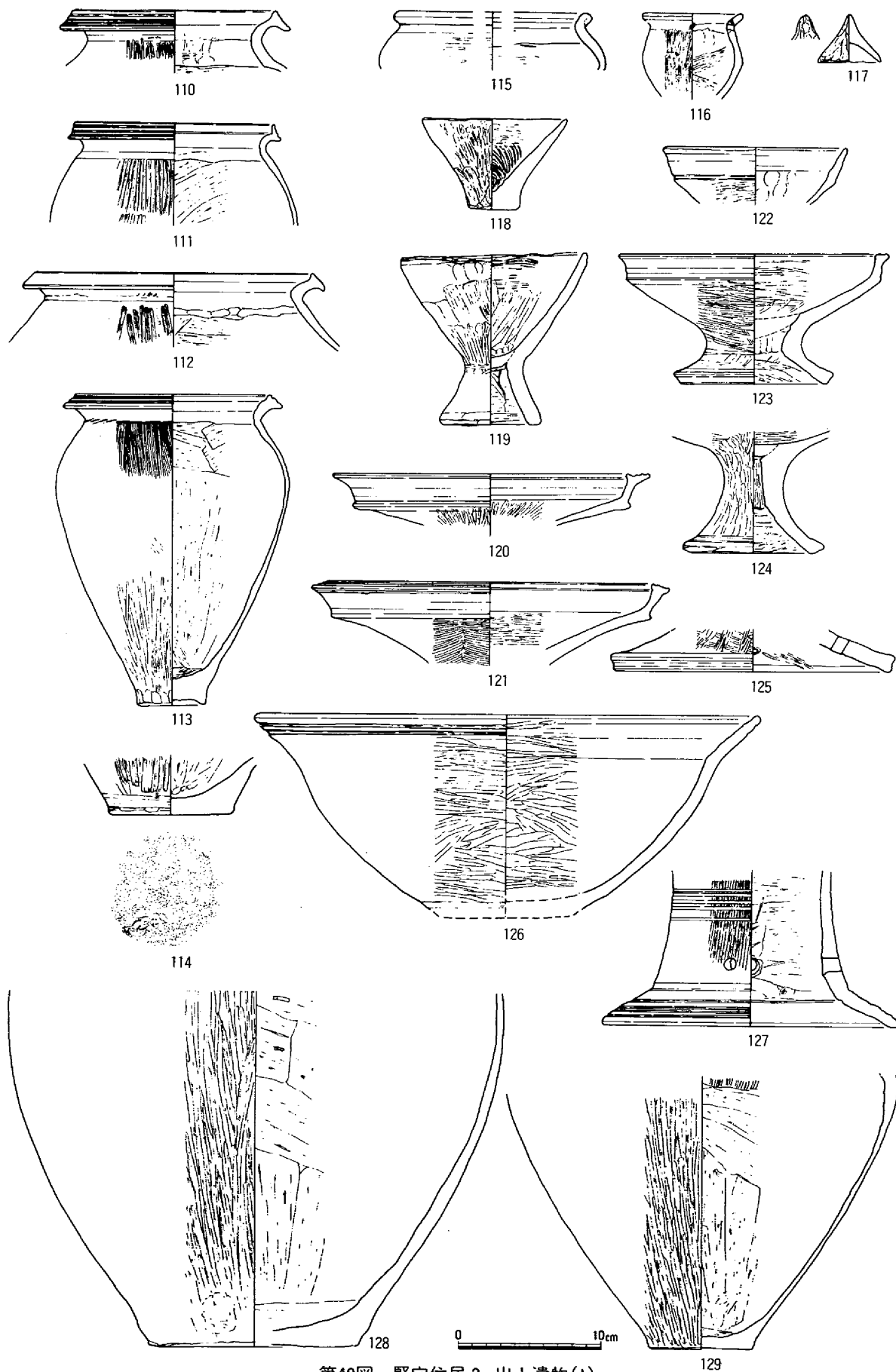
また、柱穴を除く床面の遺構(5・7～9)は、縦横断面の土層関係から、廃絶の直前まで5と7が機能し、その時すでに8・9は埋まっていたことが察せられる。柱穴はいずれも約60cmの深さを有し、柱穴2・3は底近くに礎石を持っていた。礎石は、本来作業台あるいは摺り石であったS78(3個の石塊が接合)の一部(柱穴2が右端・3が中央)が利用されていた。なお、S78の半分以上の部分は、床面土壌9の底から出土している

他の出土遺物のうち、117・123は貼床面、112・114は柱穴1、119は柱穴2、110・124・M2は中央穴、113・125・126・128は土壌8、129は土壌9、それ以外は床

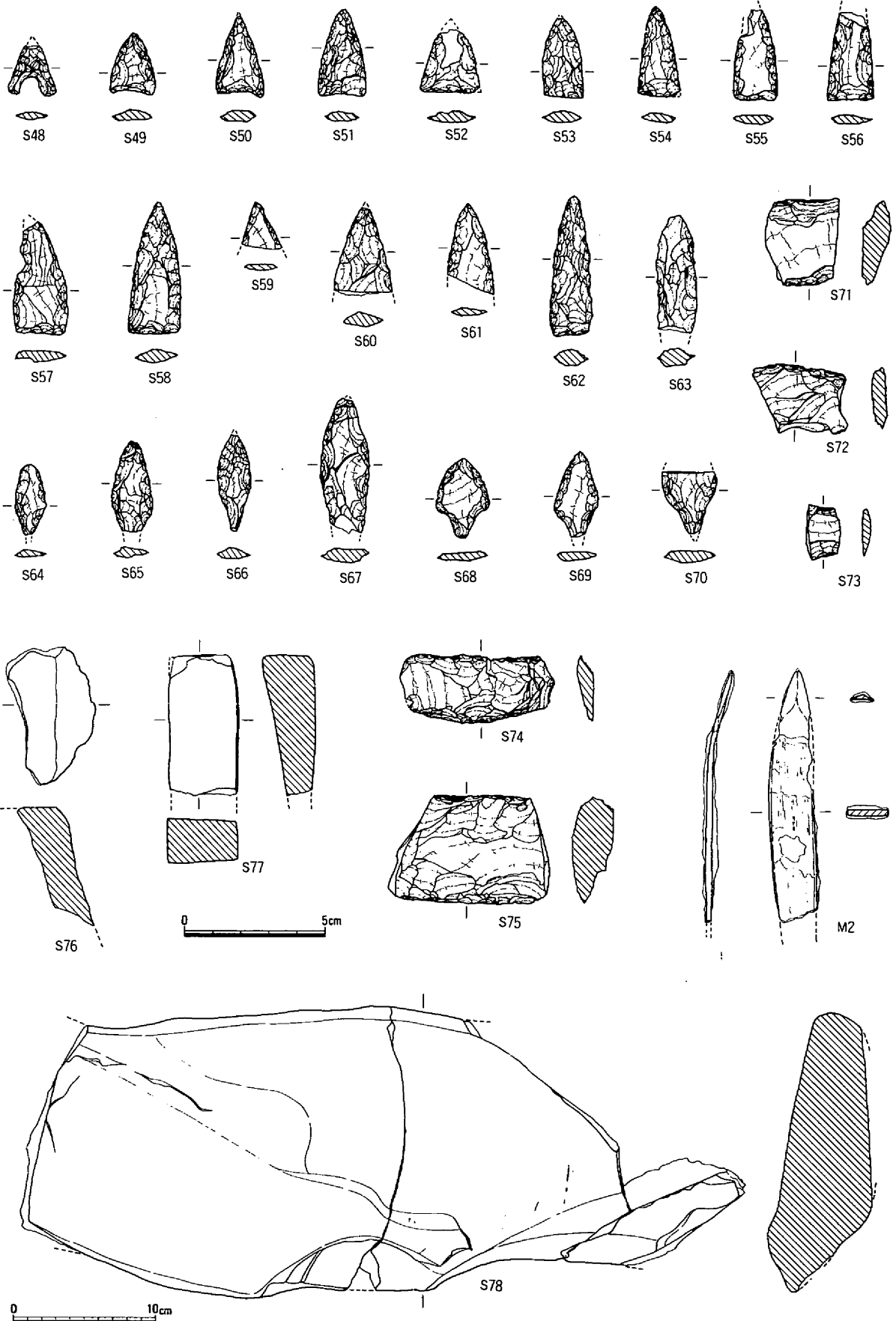


- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 1. 茶褐色微砂            | 11. 黄灰白粘土          |
| 2. 黄褐色微砂            | 12. 黄褐色粘土(15とはほぼ同) |
| 3. 黄茶褐色微砂           | 13. 黄色粘土(貼床)       |
| 4. 暗黄褐色微砂           | 14. 灰褐色粘土          |
| 5. 暗茶褐色微砂           | 15. 茶灰色粘質土         |
| 6. 暗茶褐色粘質土          | 16. 黄褐色砂質土(焼土・炭粒含) |
| 7. 暗黄褐色微砂           |                    |
| 8. 暗灰茶褐色粘質土(炭・灰多含)  |                    |
| 9. 暗灰茶褐色粘質土(炭・焼土粒含) |                    |
| 10. 黄茶色粘質土          |                    |

第39図 竪穴住居2



第40図 竪穴住居2 出土遺物(I)



第41図 竪穴住居2 出土遺物(2)

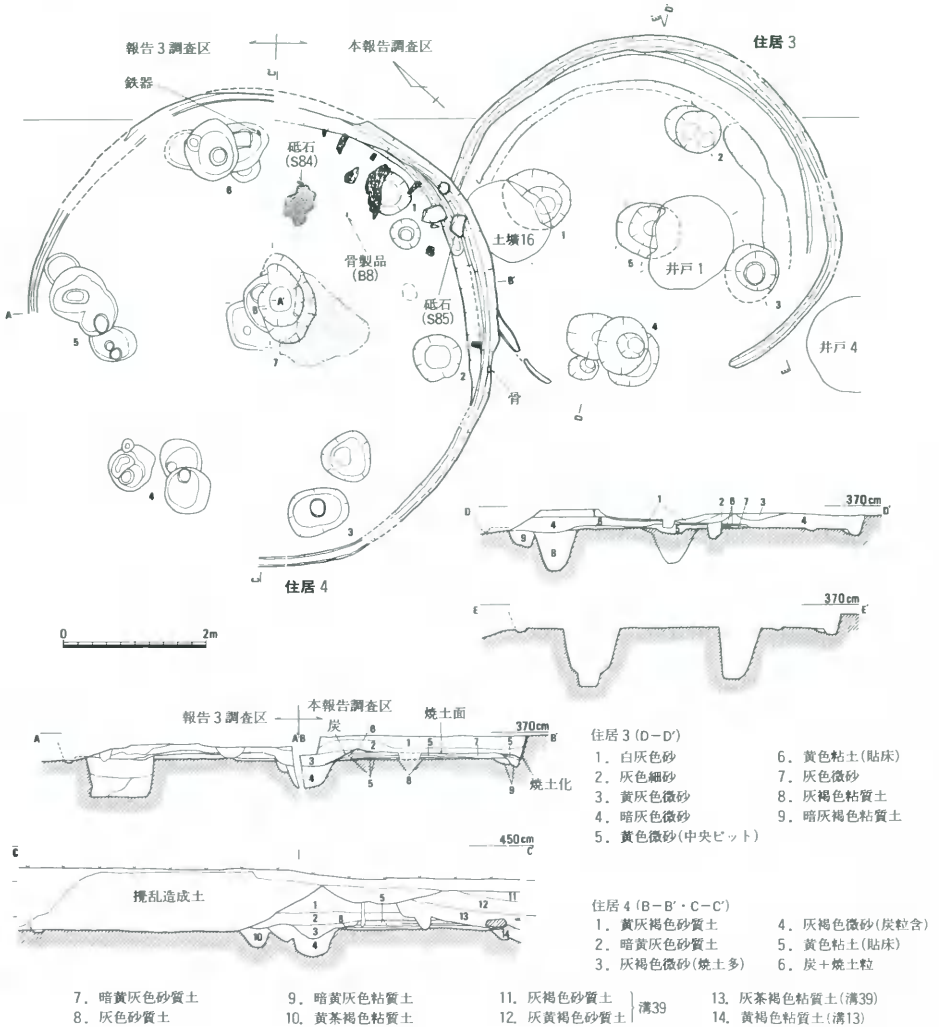
面に近い覆土からの出土であり、ほかに覆土の上層からガラス浴滓が少量出土している。

以上のことから、この住居は貯蔵機能を合わせ持ち、最終的には石器工房として使用されて百・後・Ⅰの時期の中で廃絶したと思われる。(柳瀬)

**竪穴住居 3 (第34・42・43図、図版7-1・2、45)**

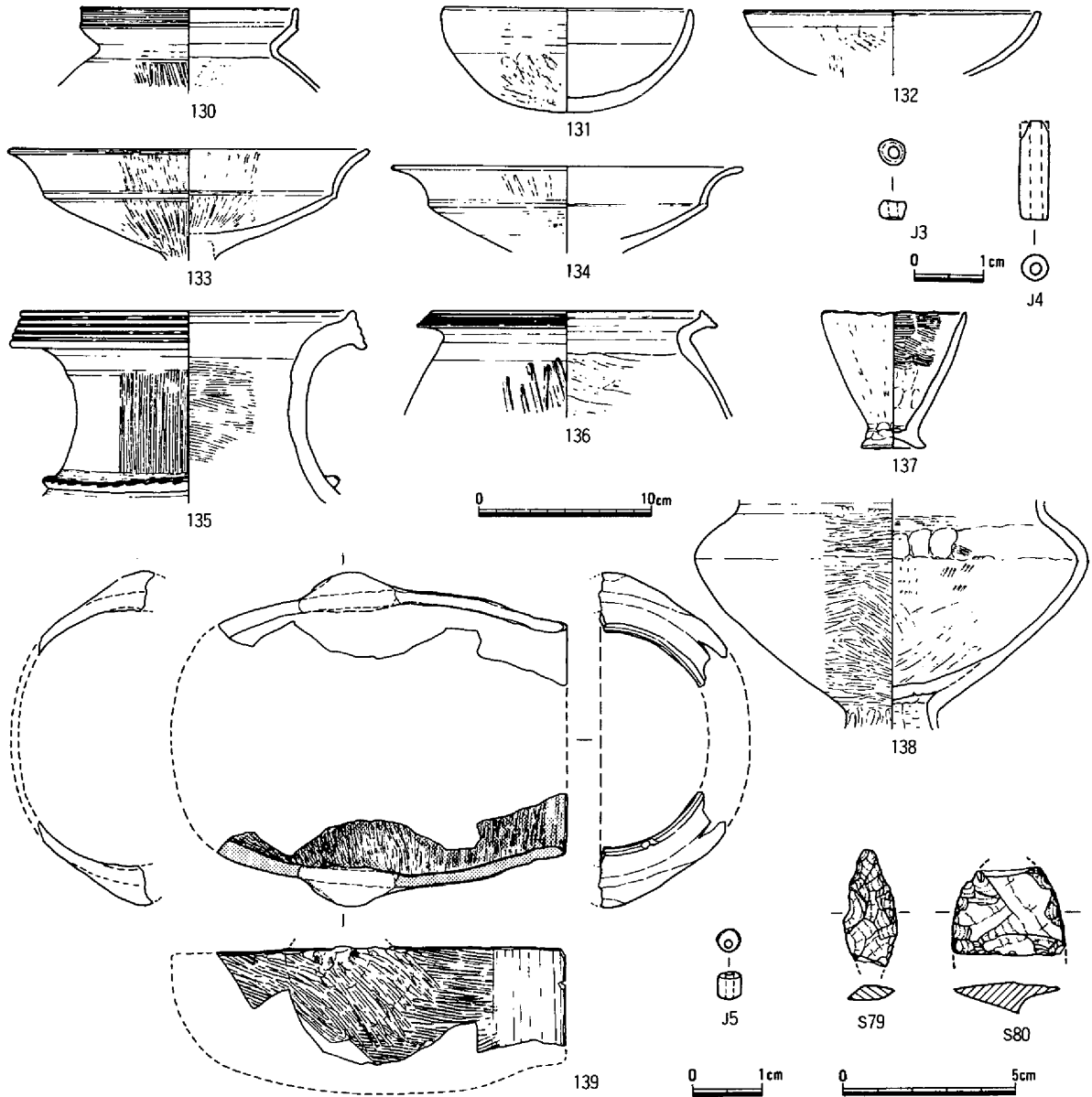
この住居は主に9D区にあり、竪穴住居4・井戸1・土壌16などに切られて存在する。不整形円形を呈し、4本柱と中央穴をもつ。後世の削平が南西部の一部床面にまで及んであるため、今一つ不明ながら壁体溝の状況から、2回の拡張が認められる。

覆土の上層(1層)には白灰色の砂層が入り込み、一部床面に達する所もあり、この層には130~



第42図 竪穴住居 3・4





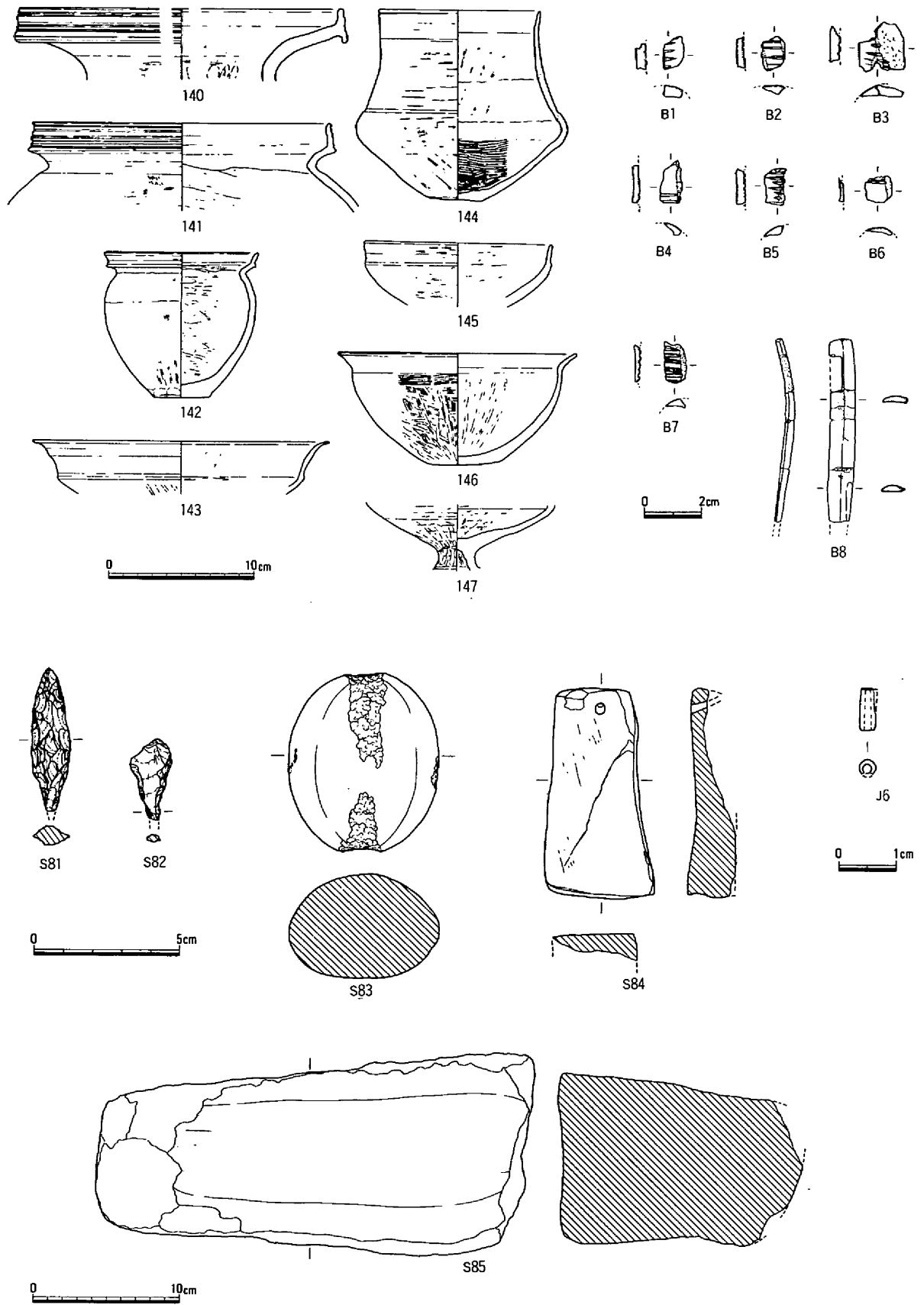
第43図 竪穴住居3 出土遺物

132の土器を含む。また、下層（4層）上部に133・134・J3・J4、同下部は図示したその他の遺物を含んでいた。ただ、内面に朱が付着した片口容器139は、隣接する竪穴住居4の覆土上層出土の破片と接合関係にあり、この土器の供伴時期が今一つ明確でない。

この住居は古墳時代初め頃までにかけて、一部床面に達するほどの削平を受けているが、切り合い関係にある遺構の時期などから百・後・Iと考えてよい。（柳瀬）

竪穴住居4（第34・42・44図、図版7-3・8-1. 45・72）

竪穴住居3に隣接して存在するこの住居址は、この地区では住居址の約半分が調査対象になったが、残りの半分は既報告の「百間川原尾島遺跡3」に掲載されている。本報告には分かりやすくするため、図を合体させた。規模は径約6.7mで、ほぼ円形を呈し6本柱と中央穴をもつ火災住居である。住居の南西部の約半分は、現代溝による削平が床面下に及んでいるが、残存する貼床面上部の一部には炭化材と焼土、炭（植物繊維？）の面が確認され、壁面も赤褐色に変色するほど被熱していた。



第44図 竪穴住居4 出土遺物

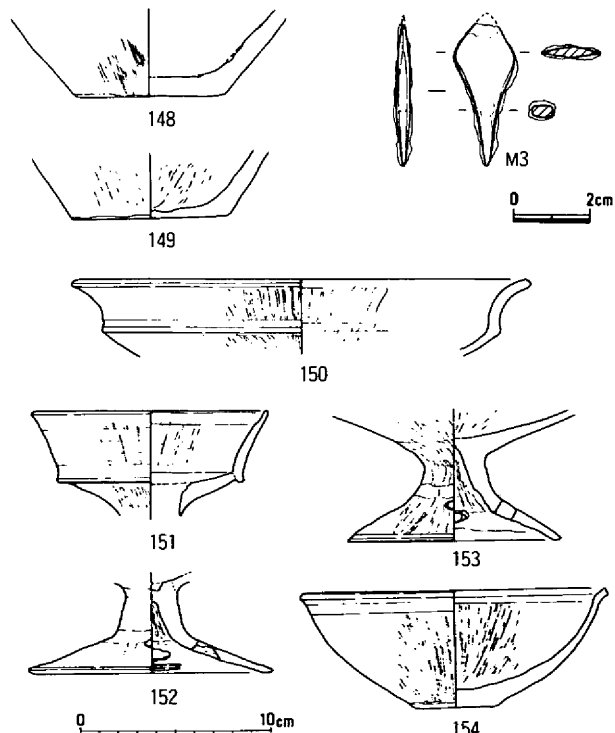
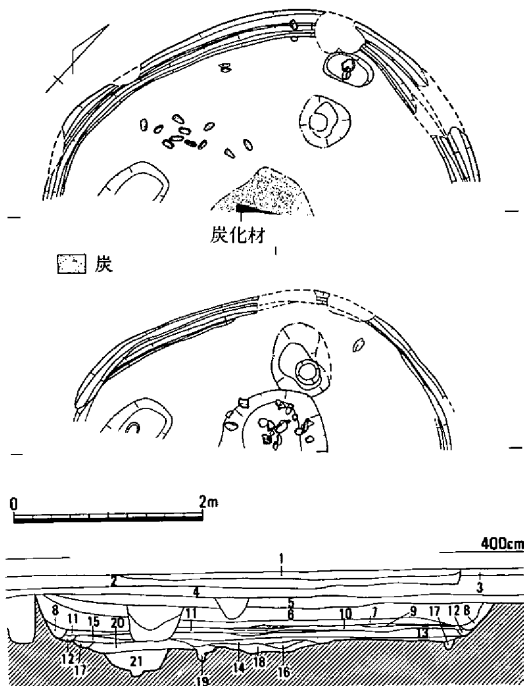
出土遺物のうち、刻骨B1～6・骨製品B8・S84が貼床上面、刻骨B7が柱穴1、その他が覆土から出土している。床面出土の骨類は、被熱が顕著であった。また、既報告部分では鉄鏃が出土しており、S84の携帯用砥石は鉄器用と見てよい。

この住居址の時期は、出土土器が覆土ながら百・後・Ⅲとみて大差ない。 (柳瀬)

堅穴住居5 (第34・45図、図版8-2. 45・71)

11C区の北半で、調査区の東端にかかって半分を検出した。壁体溝が4条あり、土層断面の観察から考えて、順次に拡張されたと判断される。ただ、1期と2期、3期と4期の壁体溝はそれぞれ近接しているが、2期と3期の間ではいくらか間隔があり、この段階で1度だけ規模の大きな掘削がなされたかもしれない。床面も4面確認された。堅穴の平面形は円形に近いが、わずかに角張る部分があり、あるいは隅丸方形を意識した可能性も考えられる。支柱は4本と想像される。住居の中央には深さが5～10cmの浅い窪みがあり、多量の炭が含まれていたことから、炉に関係するとみられる。堅穴の規模は、長径が推定で4.7m、残存の深さは1期で54cmを測る。柱穴の規模は、長径が80cm、深さは47cmである。

出土遺物には土器と鉄器がある。土器の示す時期は百・後・Ⅲと考えられ、他の時期のものを含まない。鉄器は鏃とみられる。身は先端を欠いているが、菱形を呈する。茎は短くて、先端を尖らせている。茎の断面は方形である。 (岡本)



1. 灰黄褐色砂質土(炭の薄い層を部分的に含む)
2. 灰褐色微砂(炭粒・土器片含)
3. 褐灰色微砂
4. 淡灰褐色微砂(粘粒少含)
5. 灰褐色粘質土(やや砂質、炭・焼土粒、土器片含)
6. 灰褐色粘性土(やや砂質、炭・焼土粒含)
7. 黄褐色粘土斑混灰褐色粘性土(焼土多含)
8. 灰褐色粘性土
9. 黄褐色粘土斑混灰褐色粘性土(貼床)
10. 黄褐色粘土斑混灰褐色粘性土
11. 褐灰色粘土(中央部炭・焼土多く、黄褐色粘性土少含)
12. 灰褐色粘性土(黄褐色粘性土少含)
13. 黄褐色粘土斑混灰褐色粘性土
14. 黄褐色粘土斑混灰褐色粘性土(黄色土強、貼床)
15. 黄褐色粘土斑混灰褐色粘性土
16. 黄褐色粘土
17. 14・15と同
18. 褐灰色粘土(炭を多含)
19. 淡灰褐色粘土
20. 黄褐色粘性斑混灰褐色粘土
21. 褐灰色粘土斑混黄褐色粘土(柱穴)

第45図 堅穴住居5、同出土遺物

竪穴住居 6 (第34・46図、図版 8 - 3. 45)

10B区に位置し、不整円形を呈するこの住居址は、4本柱と中央穴を有し1度拡張されている。上部をかなり削平されているが、現状での規模は径約4.8~5.2mを測る。住居址の北東部をわずかに溝12によって切られ、北西部は不明確ながら土壌5の上部を切って存在する。また、中央穴の南側を除く

周辺はわずかに高まりをもち、穴は南北方向では2段に落ち込む。柱穴2・4は柱痕跡が認められた。

遺物は、柱穴3の周辺の床面にまとまって土器が検出されたほかは、わずかに覆土から破片が出土しているに過ぎない。

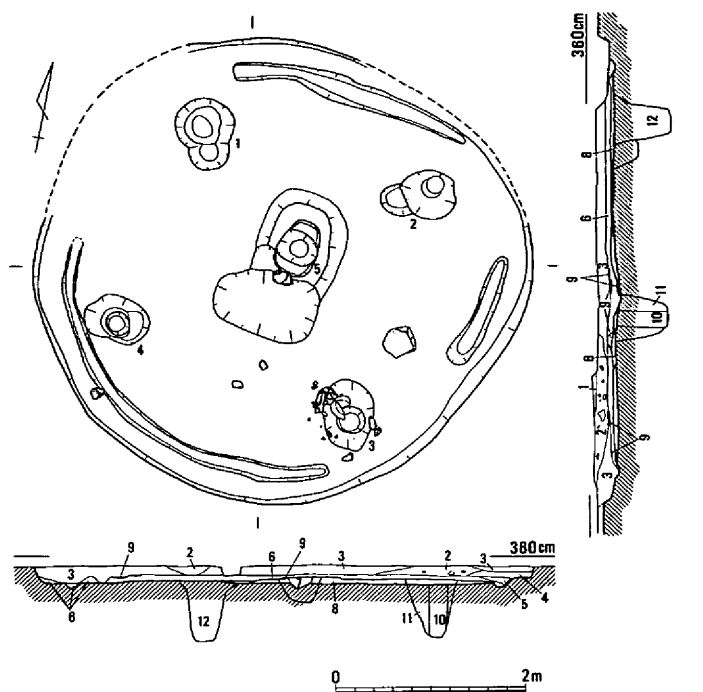
甕156の底部中央が非常に薄い特徴や157の口縁端部が上方に拡張し、端面に2~3条の凹部をもつ特徴は、百・後・Ⅲを示す。(柳瀬)

竪穴住居 7 (第34・47図、図版 9 - 1)

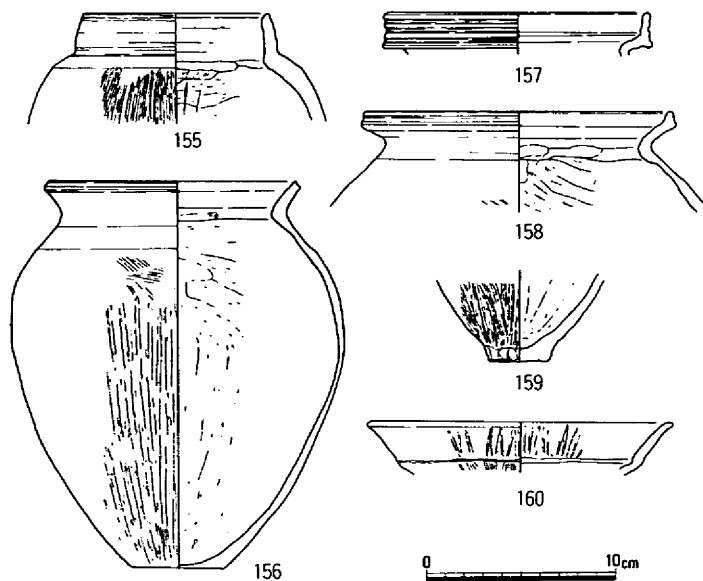
9C区に検出されたが、上部を古墳時代の竪穴住居11に、北辺の一部を同井戸10に、南側の一部を現代用水などによって削平されている。平面形態は隅丸方形に近い形を呈し、5.5×5.3mの規模をもつ。また、4本柱で中央穴を有し、床面にはわずかであるが炭化材片と細かな炭の面、4~5カ所に焼土塊がみられ、その状況は竪穴住居4に似る。

中央穴は上部は約70×50cmのほぼ長方形の平面形態をもち、深さが約10cm下がったところの中央部に径約40cm・深さ約40cmの円形土壇をもち、2段ぼりを呈す。円形土壇部分には炭を多く含んでいた。

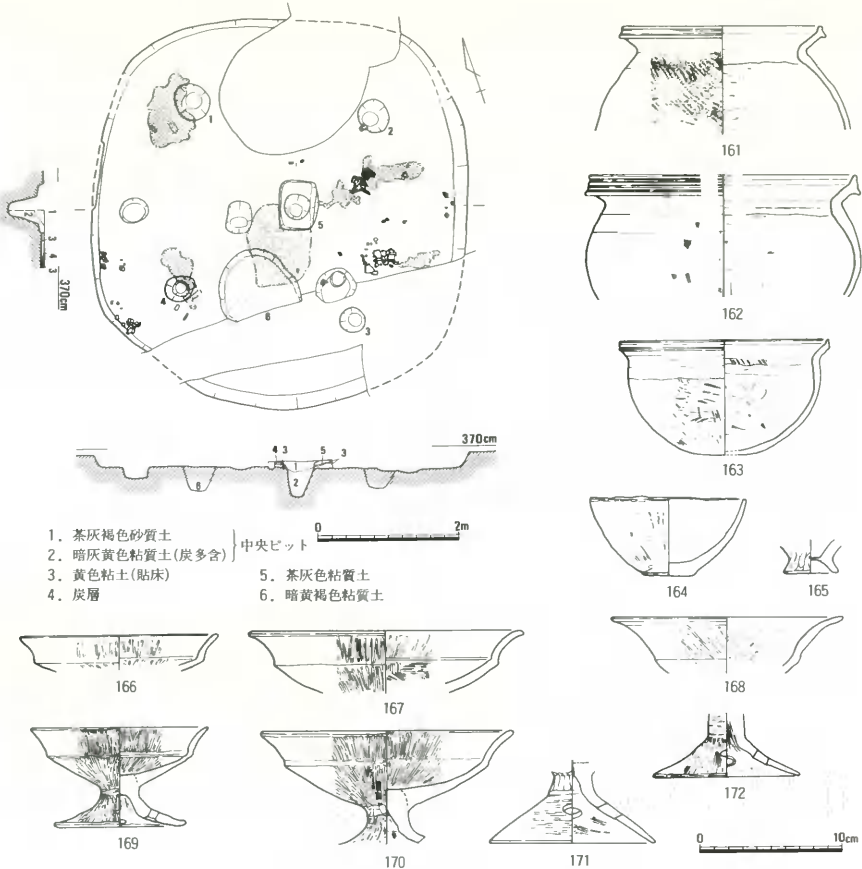
土器はおもに南西隅と南東部分の床面にまとまって出土しており、とくに高杯が多い。高杯は小型化し、杯部が比較的浅く短頸化した脚部の特徴は百・後・Ⅲの時期を示す。器



- |             |                |
|-------------|----------------|
| 1. 淡黄褐色砂質土  | 7. 茶褐色粘質土      |
| 2. 黄褐色焼土塊集積 | 8. 黄色粘質土       |
| 3. 淡黄褐色粘質土  | 9. 黄色粘土塊貼床     |
| 4. 淡茶褐色粘質土  | 10. 暗灰色粘質土柱痕跡  |
| 5. 黄茶色粘質土   | 11. 暗茶褐色粘質土    |
| 6. 黄褐色粘質土   | 12. 暗茶(青)灰色粘質土 |



第46図 竪穴住居 6、同出土遺物



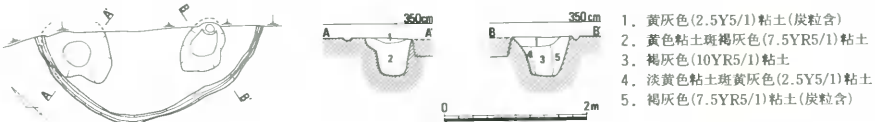
第47図 竪穴住居 7、同出土遺物

表面にタタキを施す甕161は、この時期には希少である。他にモモの種が出土している。

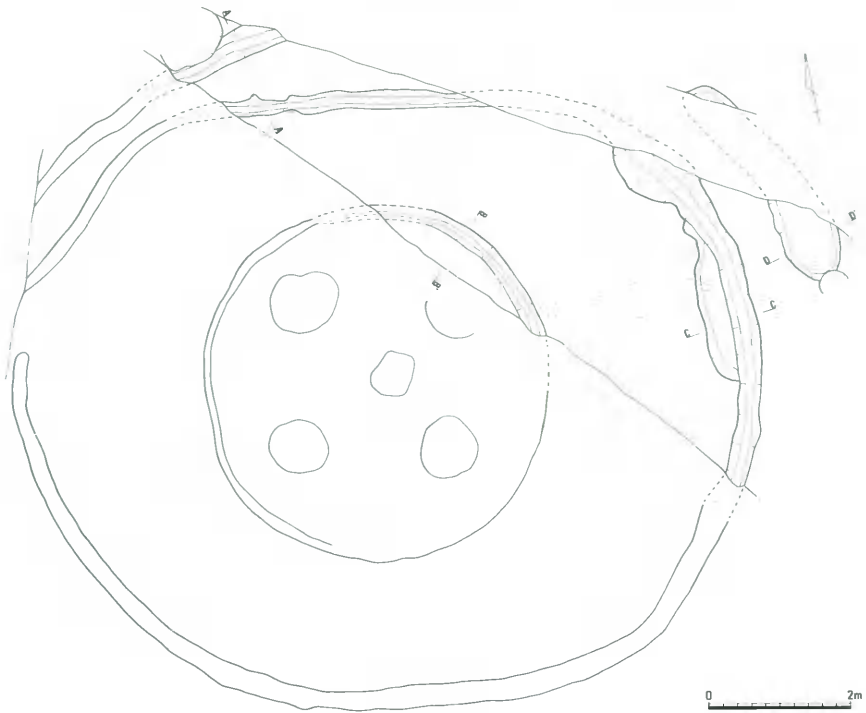
この竪穴住居 7 と同 4・5 は、ほぼ同時期で焼失住居という共通点をもつ。 (柳瀬)

竪穴住居 8 (第34・48図、凶版 9-2)

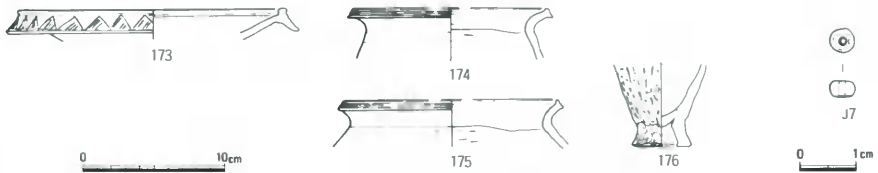
18C区に位置する。調査区の北端で全体の半分弱を検出した。残存状況は悪くて、床面は削平されてなく、壁体溝の底部と 2 基の柱穴を検出したにすぎない。竪穴の平面形は不整形な円形と思われ、その直径は推定で3.4mを測る。主柱は 4 本と考えられる。検出された柱穴の掘り方は、竪穴の規模に比べると大きく、長径で82cmと107cmであり、壁体溝下まで広がっていた。深さは55cm。 (岡本)



第48図 竪穴住居 8



1. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂(炭・焼土粒多含)
2. 褐灰色(7.5YR4/2)粘質微砂(炭・焼土粒含)
3. ぶい褐色(7.5YR5/4)粘質微砂(炭・焼土粒少含)
4. ぶい褐色(7.5YR5/3)粘質微砂(部分的に炭層含、焼土粒含)
5. 灰黄褐色(10YR4/2)粘質微砂(炭・焼土粒多含、土器片多含)



第49図 竪穴住居9、同出土遺物

竪穴住居9 (第34・49図、図版9-3)

『原尾島遺跡2』竪穴住居30の壁体溝と2条の外周溝を17区と18区の境界で検出した。壁体溝は幅24cm、深さ7cmを測り、弧を描いている。弧の内側には、竪穴住居の床面がわずかに残存していた。外周溝は、場所によって形状の変化が大きく、段状を示す部分もあった。いずれも埋土に炭や焼土を多く含んでいる。図示した遺物は外周溝から出土している。土器は百・後・Ⅱである。(岡本)

(2) 建 物

建物 1 (第34・50図)

この調査地区の北隅9B区に検出された2間×1間の建物である。隣接する調査地区には、関連する柱穴はない。柱穴のうち北西の1は側溝で削平されたためか、見つかっていない。柱穴のうち2・3・4・6に柱痕跡を有し、柱間は桁行1.4m、梁間2.8mを測る。

各柱穴から数片の弥生土器片が出土しているのみであるが、埋土等の特徴などから後期とみてよい。建物の方向は、建物2と同様方位にほぼ一致する。(柳瀬)

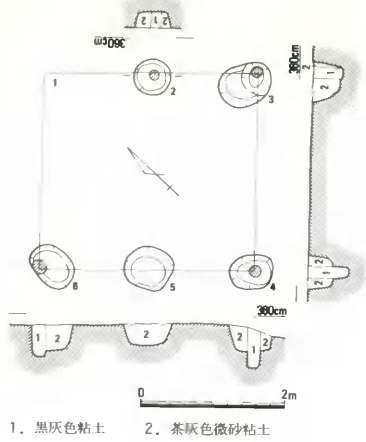
建物 2 (第34・51図、図版10-2)

建物1から南東へ約3m程離れて検出された。柱穴はいずれも径約40cmで深さも40数cmと残存がよく、それらを結ぶ線上に類似の柱穴がないため、1間×1間の掘立柱建物と判断された。高床倉庫の可能性が高い。

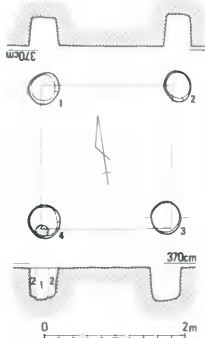
柱穴4から数片の後期土器が出土している。(柳瀬)

建物 3 (第34・52図)

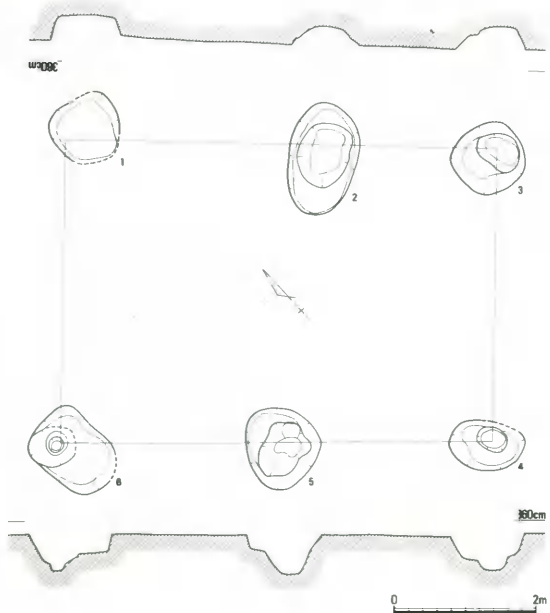
10B区の南半に、大形柱穴からなる掘立柱建物の存在する可能性がある。2間×1間の構造だが、桁行全長が608cm、梁間は430cmを測り、床面積は26㎡と広い。柱穴は長径が99~159cm、深さは北桁行と南桁行で差があり、底の高度で南桁行が10~15cm深い。北桁行の中央柱穴は中点から大きくはずれるため建物として疑問もある。



第50図 建物1



第51図 建物2

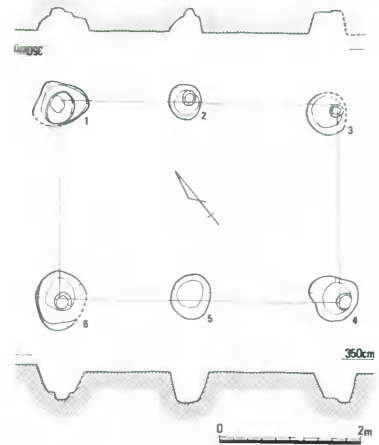


第52図 建物3

柱穴出土土器の年代は百・後・Ⅲである。柱穴2は土壌37として後述する。(岡本)

建物4 (第34・53図)

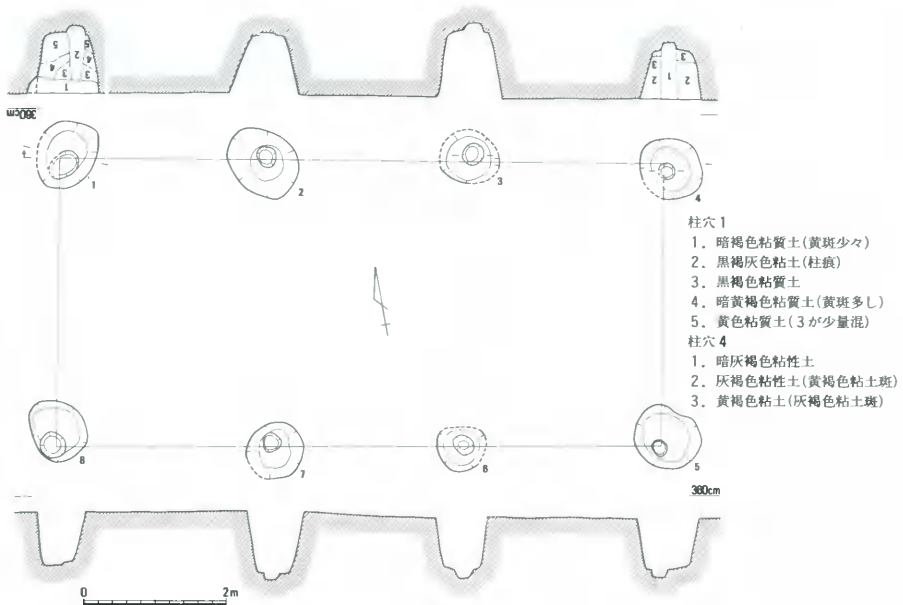
10B区と10C区の境界で検出された。2間×1間の掘立柱建物である。桁行全長は397cm、梁間283cm、床面積11.2㎡を測る。柱穴は長径が50~85cm、深さは32~50cmあり、やはり南桁行が深い。南北桁行ともに中央の柱穴がやや小ぶりであり、桁行の中心点よりわずかに西に位置している。柱穴1~4・6で柱のめり込んだ直径20~25cmの小穴を検出した。柱穴出土土器の年代は百・後・Ⅱである。(岡本)



第53図 建物4

建物5 (第34・54図)

10・11B区と10C区にまたがる大形の掘立柱建物である。構造も3間×1間で、通有の2間×1間より長い。桁行全長は850cm、梁間が408cm、床面積は34.7㎡もあり、先の建物4の3倍強にあたる。桁行の各柱間は柱痕心で270cmから300cmと一定しないが、柱穴の位置は等間からはずれていない。柱穴の掘り方は不整形な円形か楕円形で、長径が70~109cm、深さは75~107cmを測る。各柱穴で柱のめり込みとみられる柱痕が検出され、その直径は24~46cmであった。柱穴1と4では断面で柱痕が確認され、その幅は27cmと23cmを測った。柱穴出土土器



第54図 建物5



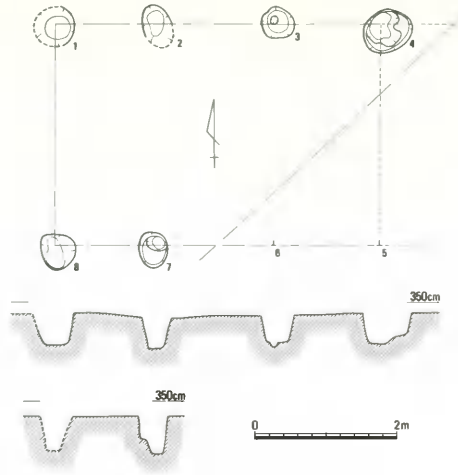
の年代は百・後・Ⅲである。柱穴2は土壌41として後述している。(岡本)

#### 建物6 (第34・55図)

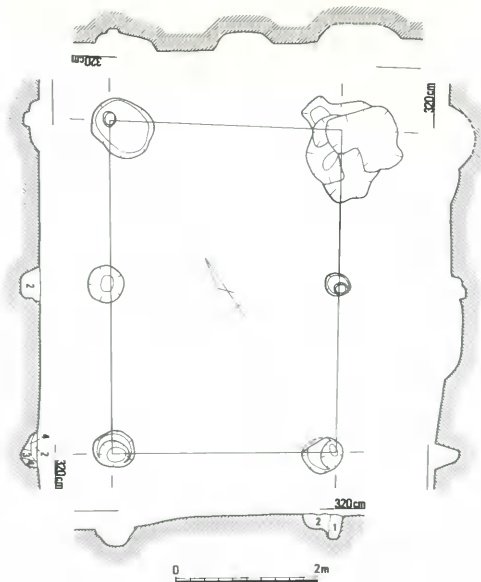
11B区、調査区の東端で検出された。一部は未調査区に入るが、3間×1間の掘立柱建物と推定される。桁行全長457cm、梁間313cm、床面積は14.3㎡を測る。桁行の柱間は140cm、166cm、151cmと等間ではない。柱穴の掘り方は円か楕円形で、長径48~72cm、深さ46~54cmであった。柱穴7では直径25cmの柱痕跡が確認された。柱穴出土土器の年代は百・後・Ⅲである。(岡本)

#### 建物7 (第34・56図)

10B区と11B区の境界の2間×1間の掘立柱建物である。桁行全長395cm、梁間280cm、床面積11㎡を測る。桁行中央の柱穴はともに中点より北にずれていた。柱穴掘り方は楕円

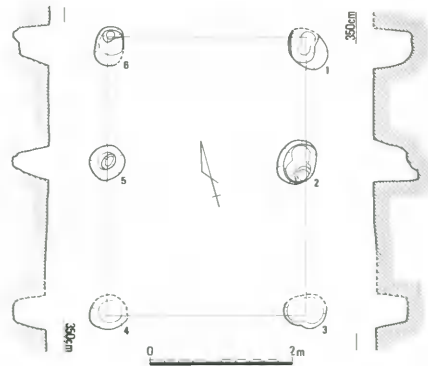


第55図 建物6



1. 灰色(N5/)粘土(炭粒含、淡青灰色砂質土ブロック多含)
2. 青灰色(5B5/1)粘土(炭粒含)
3. 暗青灰色(5B4/1)粘土
4. 灰白色粘性微砂斑青灰色(5B6S/1)粘土

第57図 建物8



第56図 建物7

形で、長径は50~66cmであった。3柱穴で直径25cm前後の柱のめり込みを確認した。(岡本)

#### 建物8 (第37・57図)

18C区の南半中央で検出された。2間×1間の掘立柱建物である。北東隅の柱穴は後世の削平で破壊されている。桁行全長470cm、梁間310cm、床面積は14.6㎡であった。桁行の柱間はほぼ等しい。柱穴の規模は、桁行の中央柱穴がひとまわり小さいため、長径は38~91cmと幅がある。(岡本)

(3) 井戸

井戸1 (第34・58~60図、図版11-1・2・46)

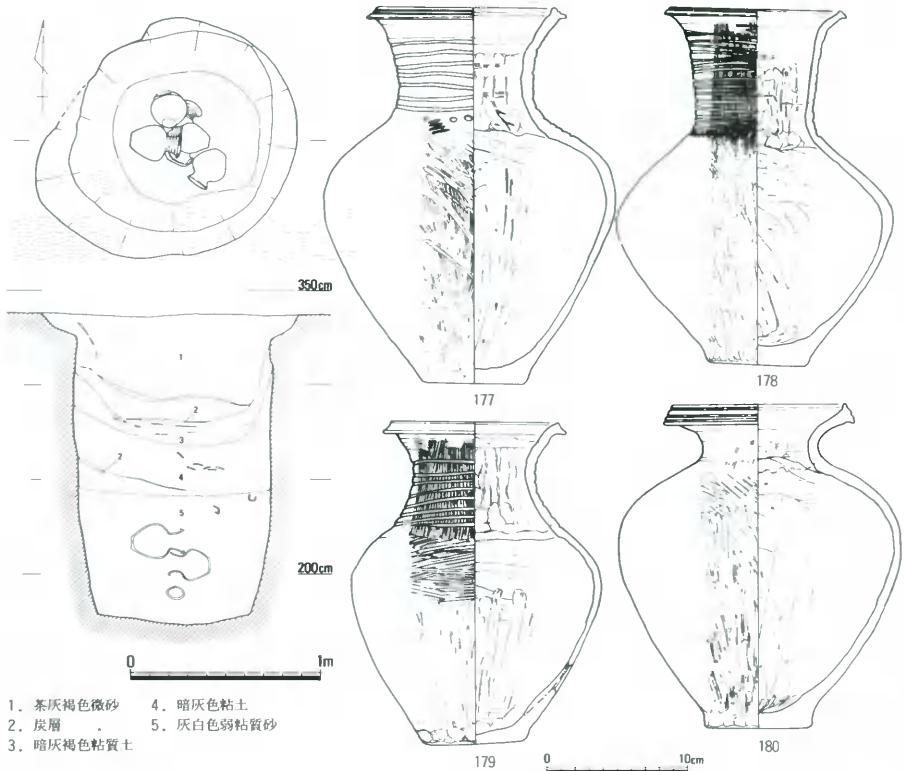
この井戸は、竪穴住居3の中央穴の一部と重なる位置に存在し、切り合い関係からすると井戸が後出である。平面形態は不整円形を呈し、径は1.3m前後、深さ1.65mを測る。

堆積土層は4つの層に大別されるが、1層の底および3・4層中に5~10mmの厚さの炭層が部分的に入り込んでいる。土器はおもに4層および5層に多く、とくに5層の中間部分には第58図の遺構図のように折り重なって、ほぼ完形の壺177~181が出土している。土層堆積の状況は、1~4層の炭層までが中央に向かって下る自然堆積を思わせるが、5層上面は平坦であり、5層中の完形土器の存在も考え合わせると何らかの人為的な行為（儀礼的な何か）があった可能性もある。

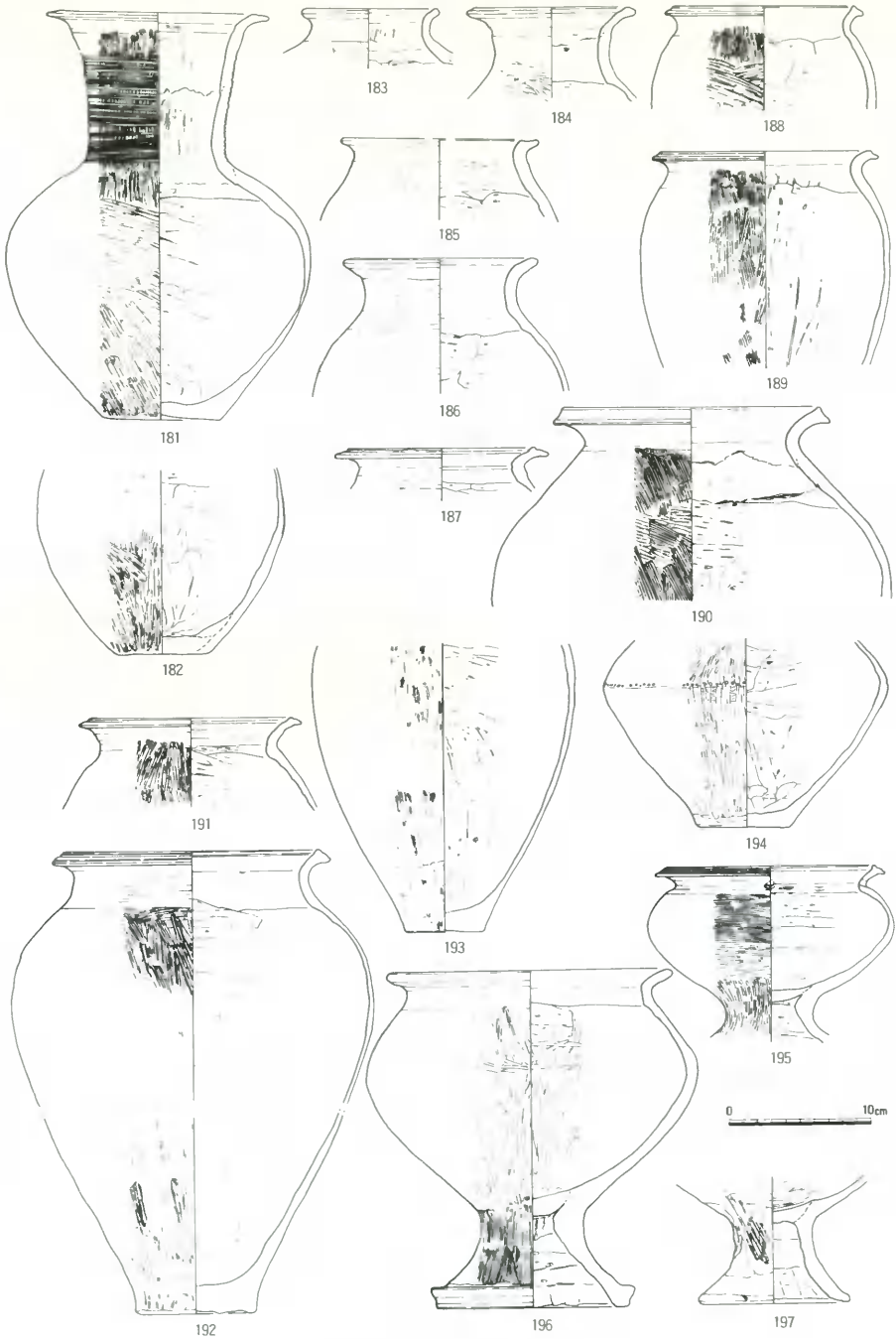
完形の壺のほとんどは長頸壺で、そのうち177は肩部に2個の竹管文とハケ目原体（板状工具か？）によると思われる4個の刺突文、179は胴部下方に径2cm程の打ち欠いた穿孔をそれぞれもち、さらに178は胎土に粘土質を多く含むいわゆる高杯の胎土に似るなどの特徴がある。また、出土土器は全体に器表面が痛んでいるものが多く、製塩土器199は器表に指紋が顕著であった。

出土土器の形態的特徴から、百・後・1の時期を当てることができる。

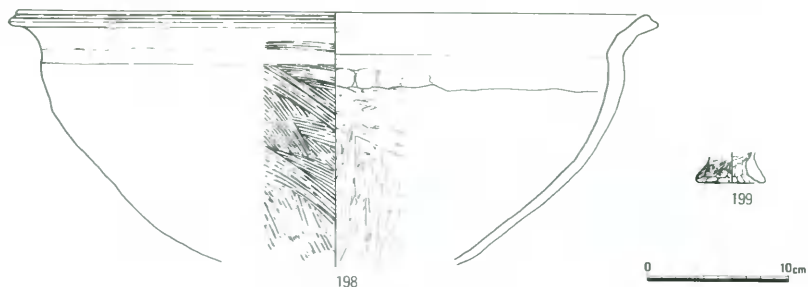
(柳瀬)



第58図 井戸1、同出土遺物(1)



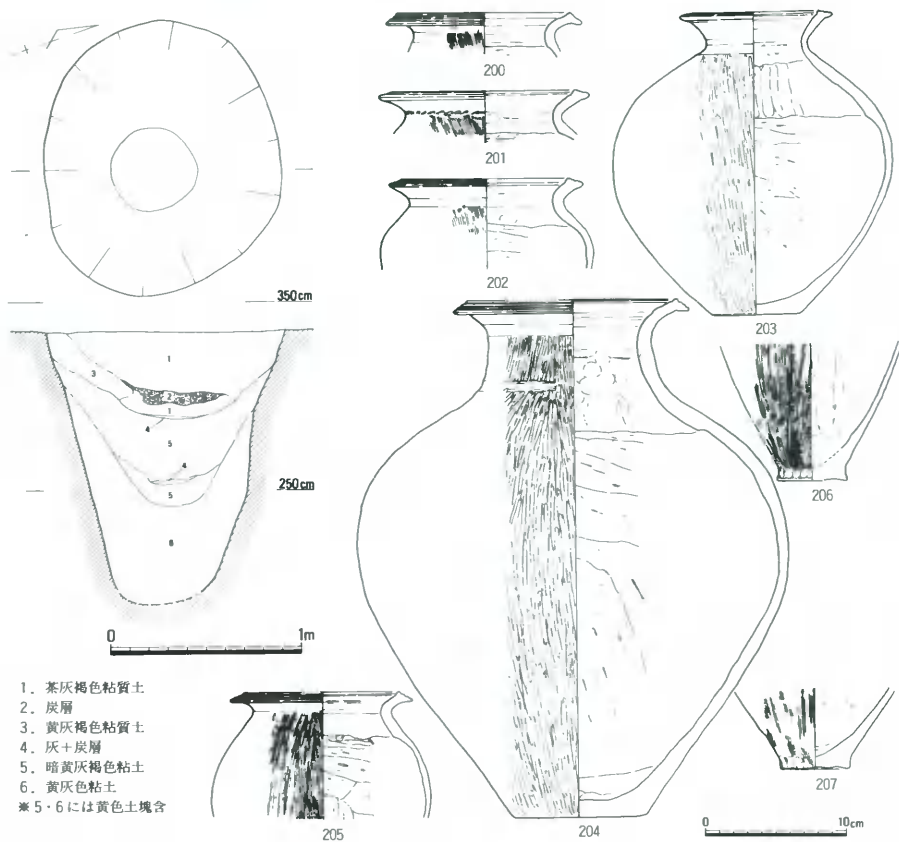
第59図 井戸 I 出土遺物(2)



第60図 井戸1 出土遺物(3)

井戸2 (第34・61図、図版11-3.46)

9 B区の南隅に検出された、径1.25~1.45mのはぼ円形プランを呈し深さ約1.45mを測る井戸である。底径が比較的狭く、底近くでは基盤層と酷似した堆積土のため、確実な底を捉えきれていない。



1. 茶灰褐色粘質土
  2. 炭層
  3. 黄灰褐色粘質土
  4. 灰+炭層
  5. 暗黄灰褐色粘土
  6. 黄灰色粘土
- ※ 5・6には黄色土塊含

第61図 井戸2、同出土遺物

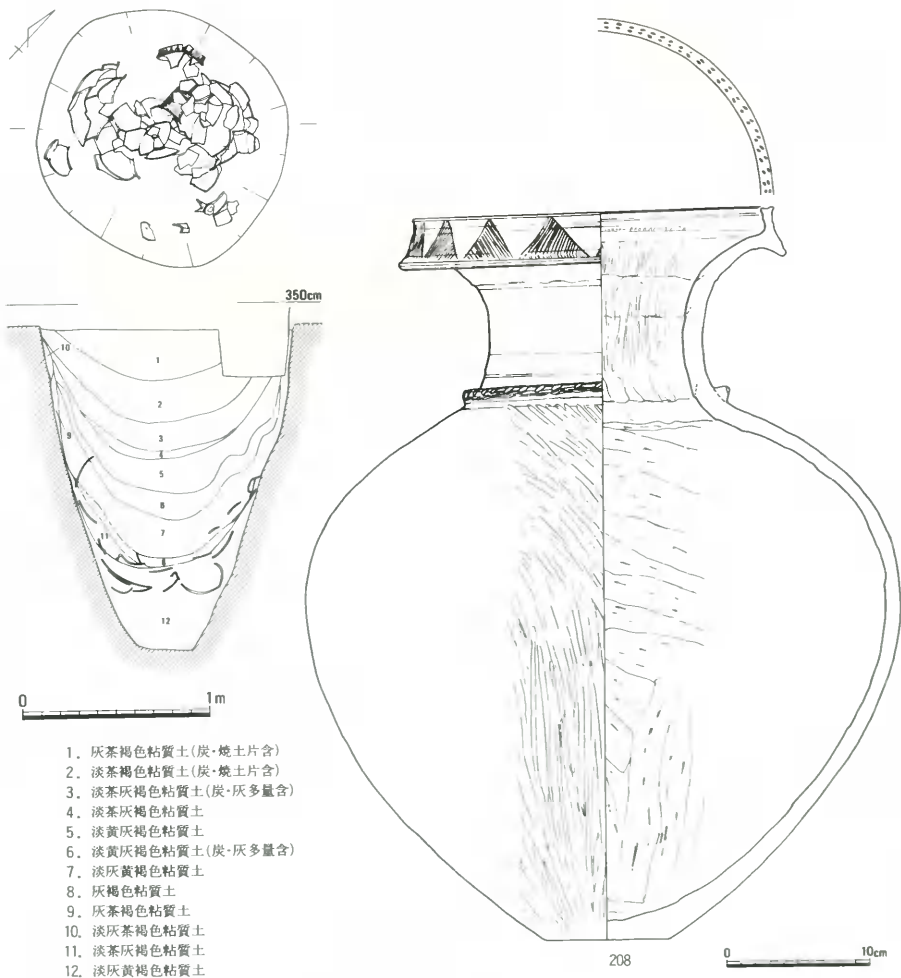
堆積土層は上・中・下層の3つの層に大別され、上層中に2の炭層が見られる。土器はおもに中・下層(4・5層と6層)で出土している。図上で完形の壺203・204は、各々復元ではほぼ完形になったが、破片は各々40~50片あり、おもに5~6層にかけて原形を保たず出土している。このことは、廃棄時において故意に細かく割られたと推量され、土器における人為的な行為と井戸そのものの廃絶との関係が、井戸1と同様儀礼的な何かが行われた可能性を示唆する。

土器の時期は、井戸1と同じく百・後・1の範疇を示す。

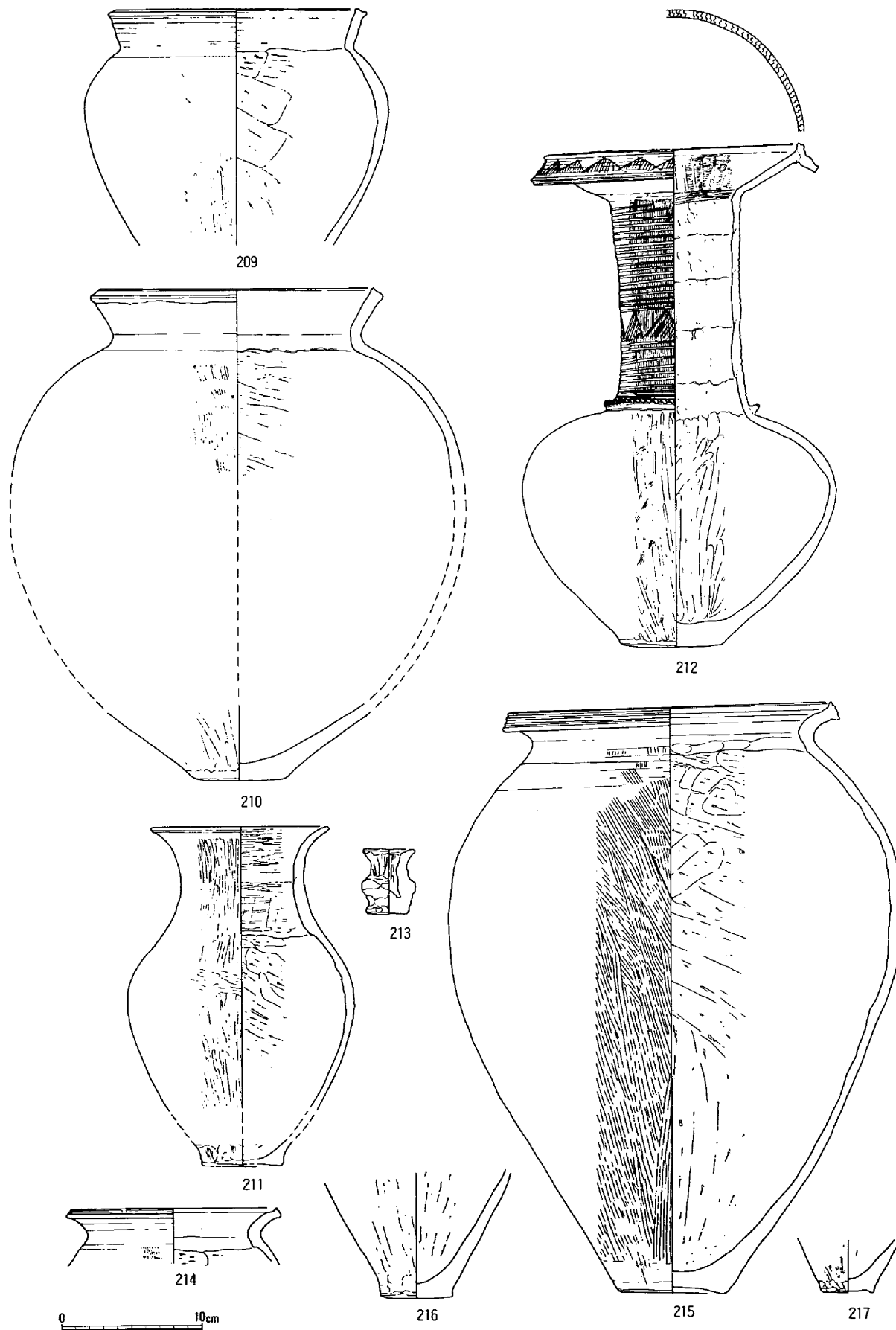
(柳瀬)

#### 井戸3 (第34・62~64図、図版12-1. 47)

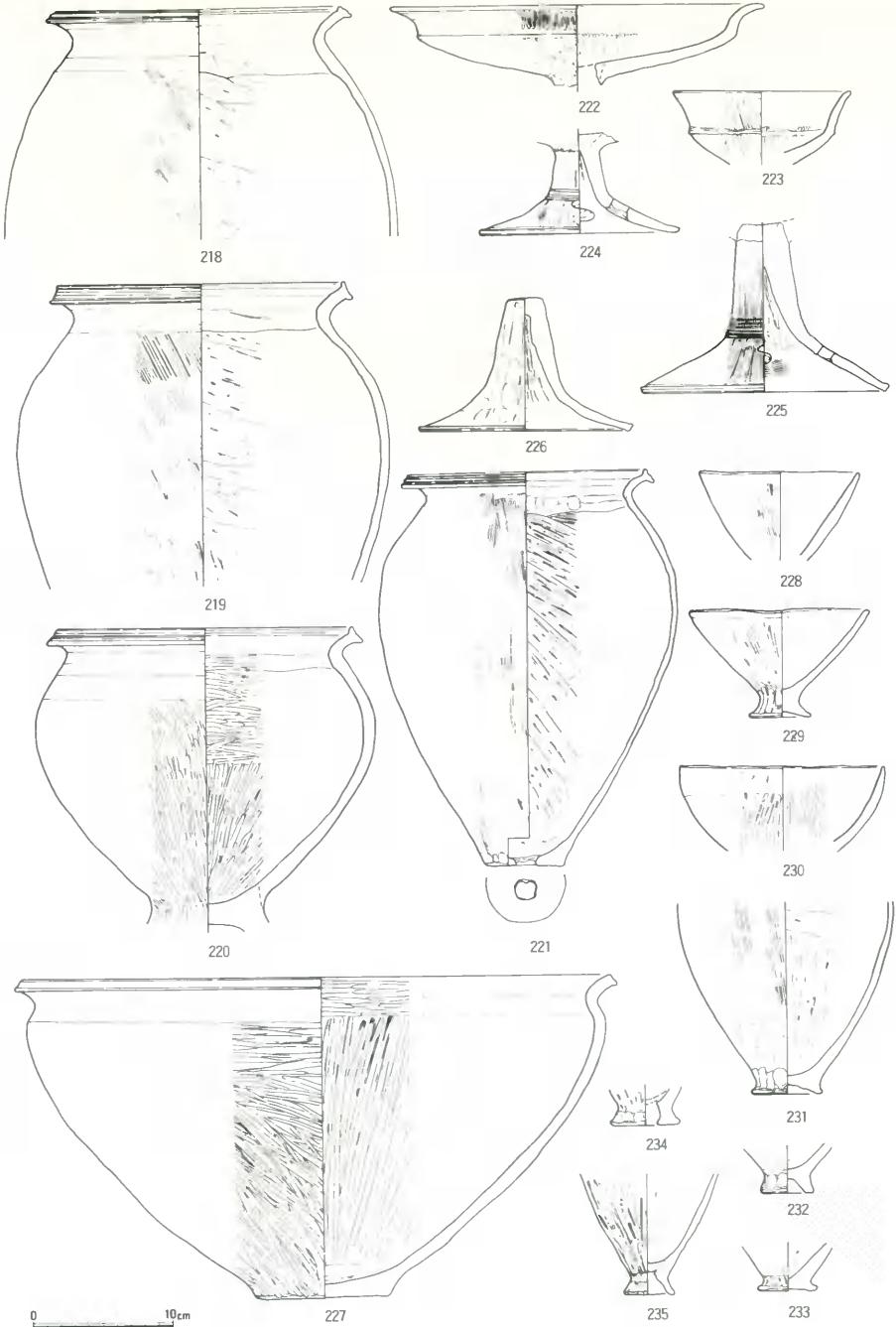
11ライン上にあり、調査区の北端で検出された。素掘りの井戸である。平面形はやや角張った円形で、長径が147cm、短径は127cmであった。深さは173cmと深かったが、底面は長径が35cmと狭いため、



第62図 井戸3、同出土遺物(1)



第63図 井戸3 出土遺物(2)



第64図 井戸3 出土遺物(3)

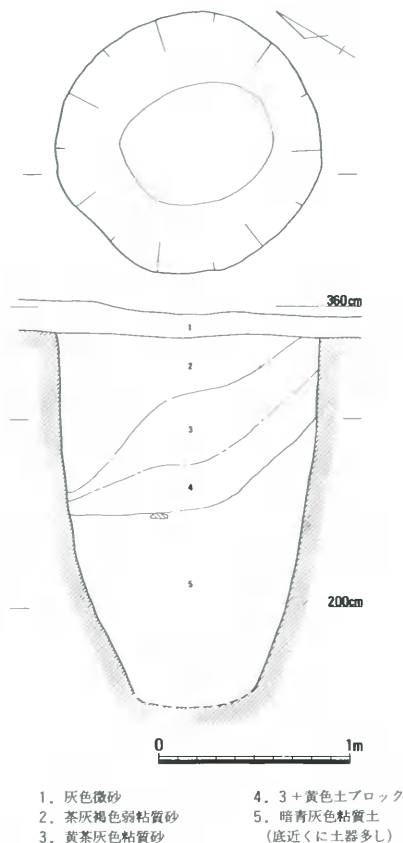
井戸の断面形は砲弾形を呈する。井戸内の埋土は、断面観察によれば十数枚の層からなるが、それらが順序よく堆積している。このことからすれば、この井戸は廃絶した後、じょじょに埋められたものと考えられる。最下層の12層の上部で大量の土器片が出土した。大形の土器片で、完形に近く復元されるものもあり、廃絶時にまとめて投棄されたものとみられる。3層と6層には炭と灰が多量に含まれ、また、1・2層では炭と焼土が含まれているなど、廃絶後は長期にわたってゴミ穴として利用されたものと思われる。

出土した土器片は多量にのぼるが、そのうち28点を図示した。器種は壺・甕・鉢・高杯・蓋と多様である。出土層位も各層にわたるが、多くは第8層から第12層の上部にかけての土器溜まりから出土したものである。土器溜まり出土の土器は208・211・213・215・218・220～223・225～227である。このうち208は完形に復元された。また、211は第6層からも破片が出土していたため、第6層以下は短時間で埋まった可能性が高い。第6層出土の土器としては209・215・219・224・234がある。226は高杯脚部の製法で作られた蓋である。土器の年代は百・後・Ⅲである。 (岡本)

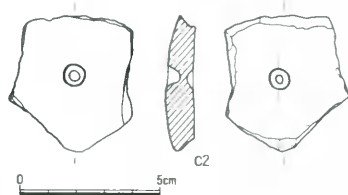
井戸4 (第34・65～67図、図版12-2、48)

9D区の堅穴住居3の南側に隣接して検出された、比較的大形の井戸である。ほぼ円形の平面形を呈し、径約1.4m、深さ約2mを測る。検出面から約1.5mの深さまでは比較的急角度で落ち込み、それから底にかけて次第にすぼまる断面形状を呈す。底は出水によって明確ではないが、遺物の途切れるところを底と判断した。井戸中の堆積土は上・中・下層の3層に大別され、ほぼ南側から土が流入した状況を示す。井戸の上部は1層の堆積前にはほぼ水平に削平を受けている。1層の灰色微砂は、隣接する堅穴住居3の覆土1層に対応する砂層と思われる、第43図の130～132の土器の時期に削平を受けた可能性がある。完形土器を含むほとんどの遺物は、底近くに集中して出土したが、出水のため原位置を保てず、出土状態の正確な実測図は取り留めていない。

出土遺物のうち完形は245、ほぼ完形は238・240・249であった。ただ、甕は口縁部と胴～底部が接合し

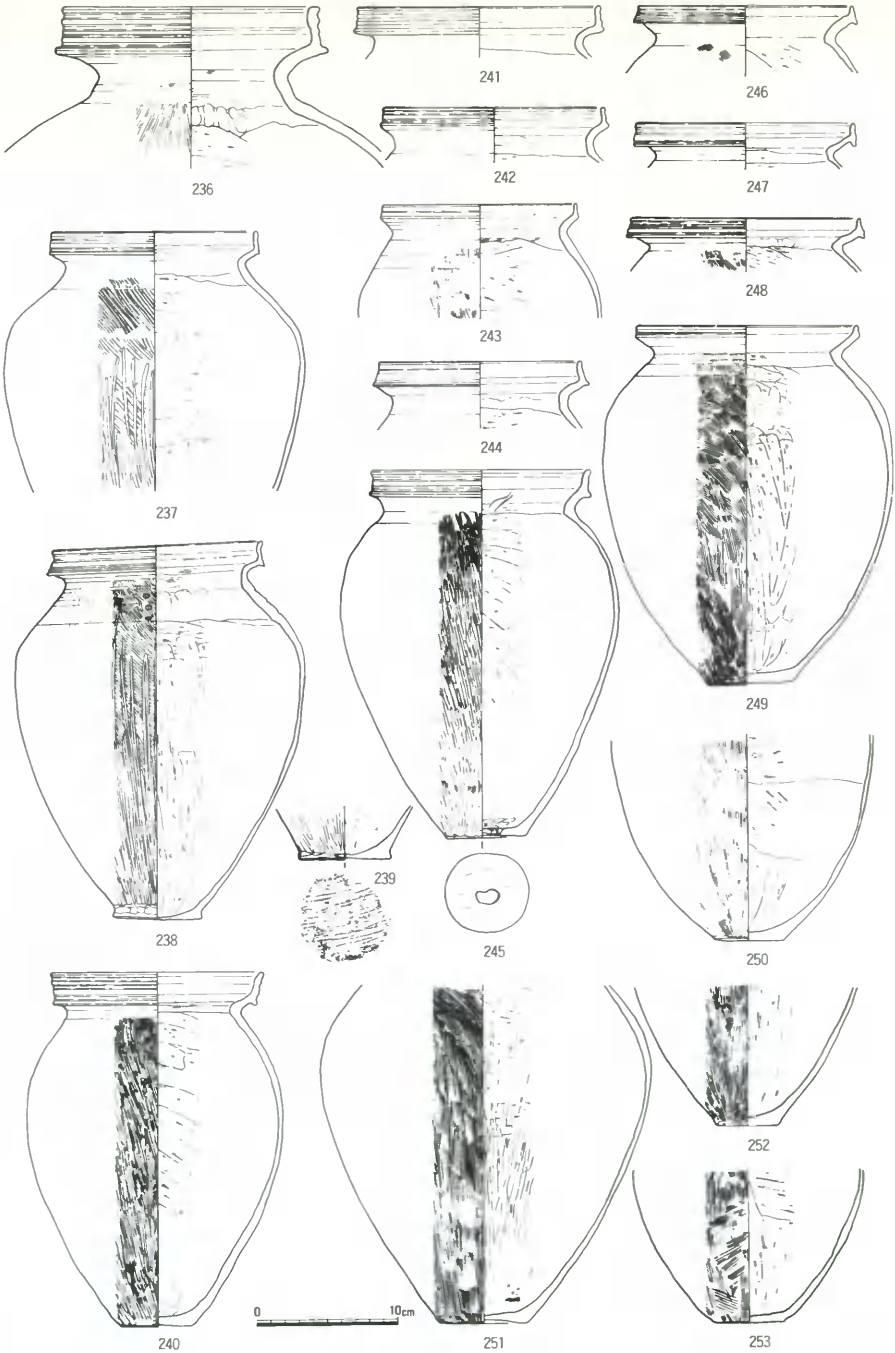


- 1. 灰色微砂
- 2. 茶灰褐色弱粘質砂
- 3. 黄茶灰色粘質砂
- 4. 3+黄色土ブロック
- 5. 暗青灰色粘質土 (底近くに土器多し)

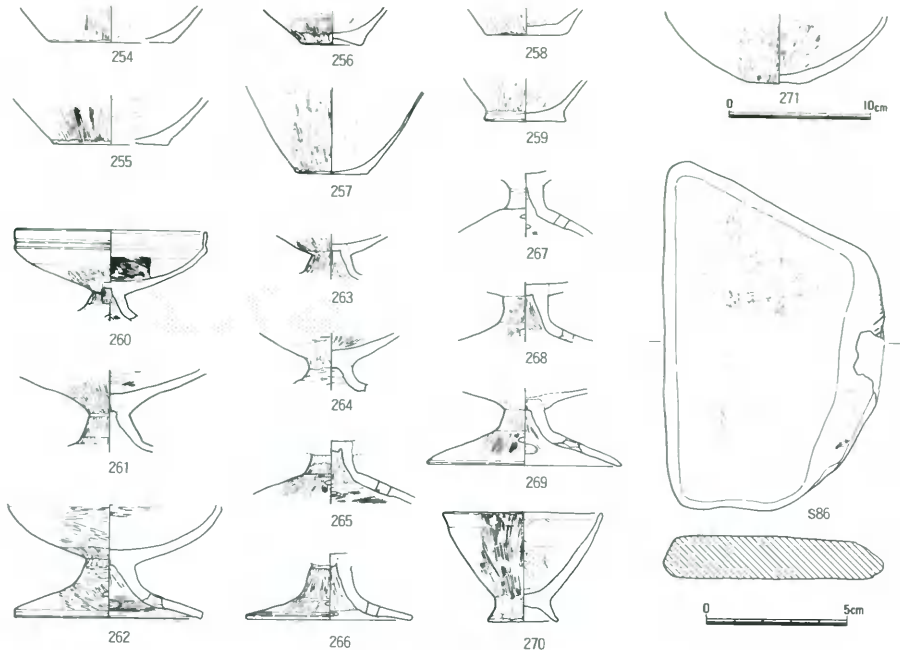


第65図 井戸4、同出土遺物(1)





第66図 井戸4 出土遺物(2)



第67図 井戸4 出土遺物(3)

そうなものも多く、廃棄時には完形であった可能性もある。壺・甕ともに口縁端部を上方に拡張させ、端面に2～4条の凹部を繞らせている。なかで、甕240・245は山陰系の土器と思われ、とくに240は斜め外方に長く拡張させた厚みのある口縁の形状に加え、撫で肩で白っぽい胎土などから移入の蓋然性が高い。また、高杯はいずれも短脚であるが、脚柱部と裾部の境に屈曲するものとなだらかなものの二者がある。紡錘車C2は、壺片の表と裏からそれぞれ穴開け途中の未製品である。

以上の、とくに甕・高杯の特徴から百・後・Ⅲ～Ⅳの時期とみてよい。

(柳瀬)

井戸5 (第34・68図、図版12-3)

9C区の南隅に検出された円形の井戸である。上部を近現代溝で削平されているが、現状では径約1.3m、底径35～40cm、深さ約1.4mを測り、断面形は底に向かって漏斗状にすぼまる。

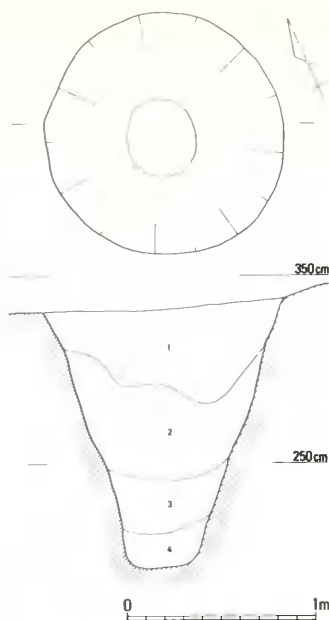
堆積土は4層確認され、とくに炭・焼土など目立った混入物は含まれない。出土遺物も図示したもののはかは数片の甕片くらいで、他の井戸に比べて非常に少ない。

出土土器は、拡張させた口縁の端面に4～5条のヘラガキの平行線文(これを擬凹線と呼ぶむきもある)を繞らせる甕272や短脚で脚柱と裾部の境に屈曲をもつ高杯274、脚径3.5cmほどの小ぶりな製塩土器275などがあり、その特徴は百・後・Ⅳの新相を示す。

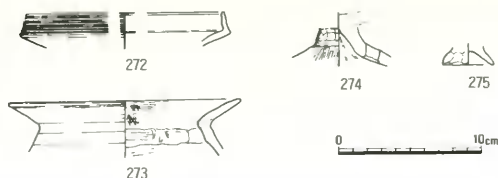
(柳瀬)

井戸6 (第34・69・70、図版12-4・48)

10区のDライン上に検出され、堅穴住居2の一部を切って存在する。検出面での平面形はほぼ円形を呈し径1.5～1.6mを測るが、約10cmの深さまで緩く下がったところではわずかに隅丸方形ぎみの円形を呈し、そこでは径1.2m前後を測る。そこから下は、胴張りぎみの急傾斜で底に至り、全体の深さ



第68図 井戸5、同出土遺物



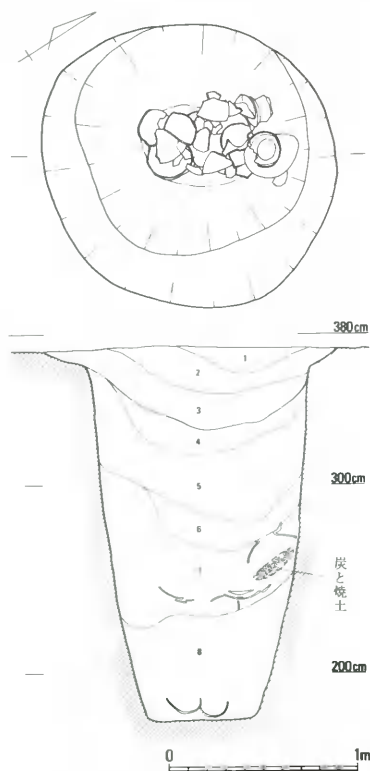
1. 暗黄灰色砂質土 3. 黄灰色粘質土  
2. 黄褐色砂質土 4. 暗青灰色粘土

は約2mにおよぶ。

堆積土層は8層に細分される。基本的には上層の1～3層は砂、中層の4・5層は砂質土、下層の6～8層は粘土の堆積であり、土器は7層に多く集中していた(8層は図示した土器では甕281のみ)。また、7層からは炭と焼土とともに長石の微粒子が多量に出土していて、陶土の一部が流入した可能性もある。

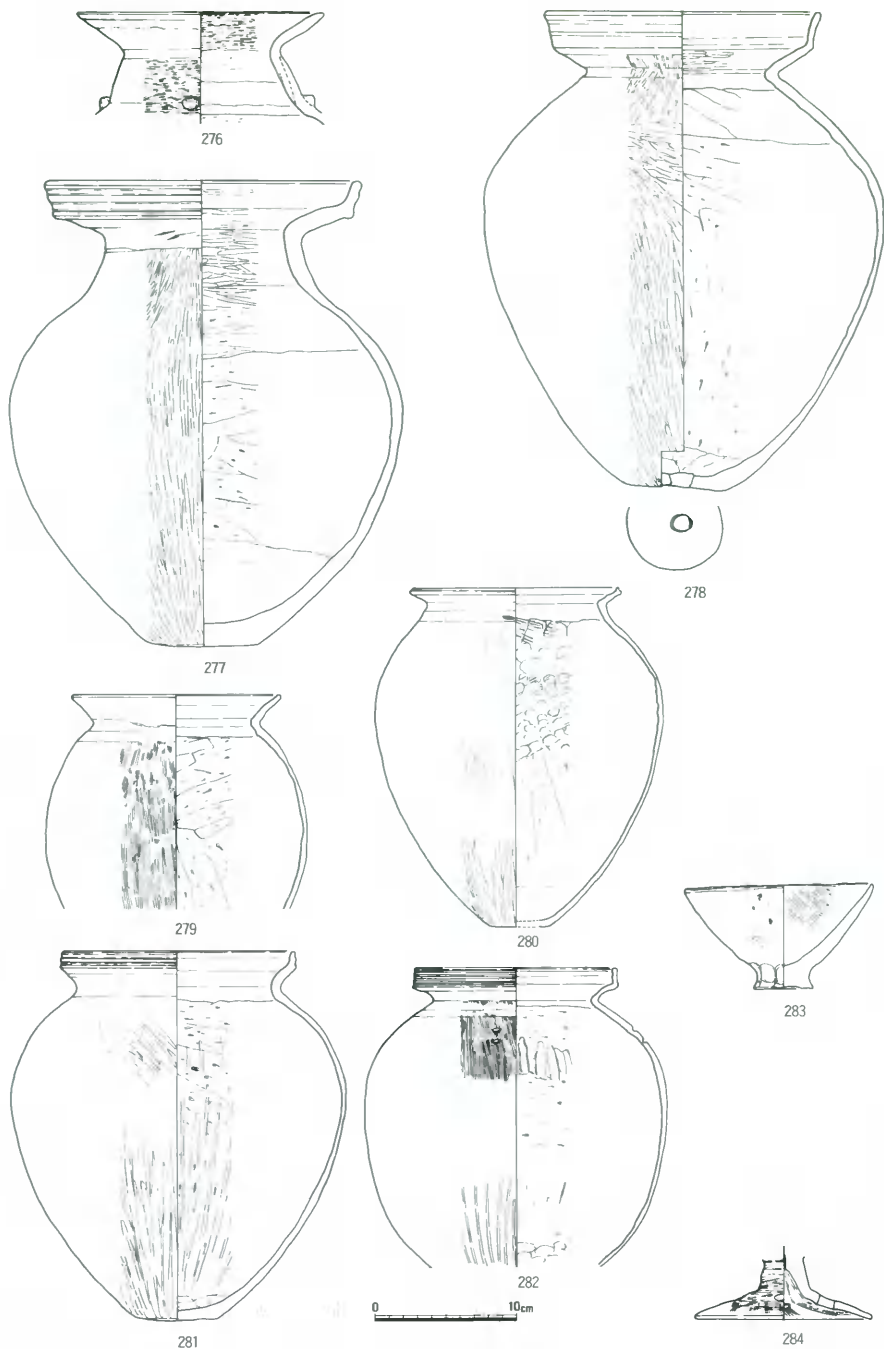
出土土器は、破片が比較的大きな割には完形近くに復元できるものは少なく、いわゆる完形はない。いずれも焼成はよいが、器表は摩滅しているものが多く長期間の使用をうかがわせる。ほかに個々の特徴として、器表に煤が認められる壺277、底部穿孔の壺278、胎土がチョコレート色で角閃石を含み、内面に指頭圧痕が顕著な鬚岐系の甕280などがあるが、器種それぞれの形態の特徴は百・後・Nの新相を示す。ただし、口縁端面にクシガキ沈線を施す甕282は、型的には後出の百・古・Iの時期であるが、7層の他の土器と供伴しており、井戸の廃絶の時期は百・古・Iとみられる。

(柳瀬)



1. 暗黄灰色砂 } 洪水砂  
2. 黄灰色砂 }  
3. 茶灰色微砂 }  
4. 暗灰褐色粘質土 }  
5. 暗黄褐色粘質土  
6. 暗灰色粘土  
7. 明灰色粘土  
8. 暗灰黑色粘土

第69図 井戸6

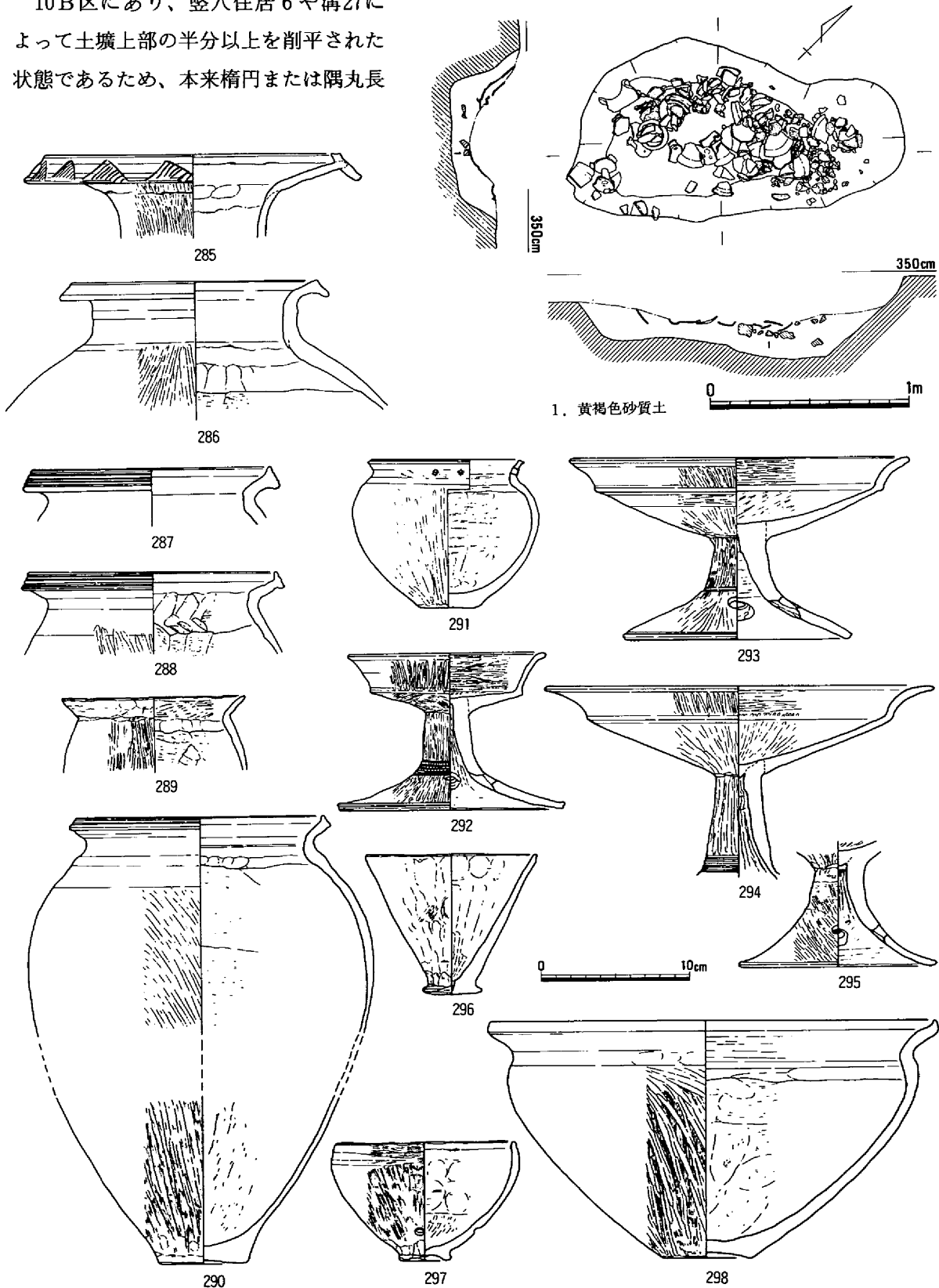


第70図 井戸6 出土遺物

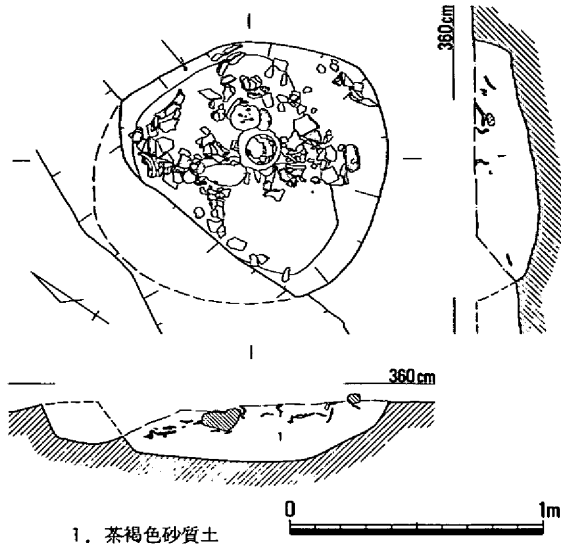
(4) 土 壙

土壙5 (第34・71図、図版13-1. 49)

10B区にあり、竪穴住居6や溝27によって土壙上部の半分以上を削平された状態であるため、本来楕円または隅丸長



第71図 土壙5、同出土遺物



1. 茶褐色砂質土

方形に近い平面形が歪になっている。長径約1.7m、短径約90cm、深さ20~30cmを測る。

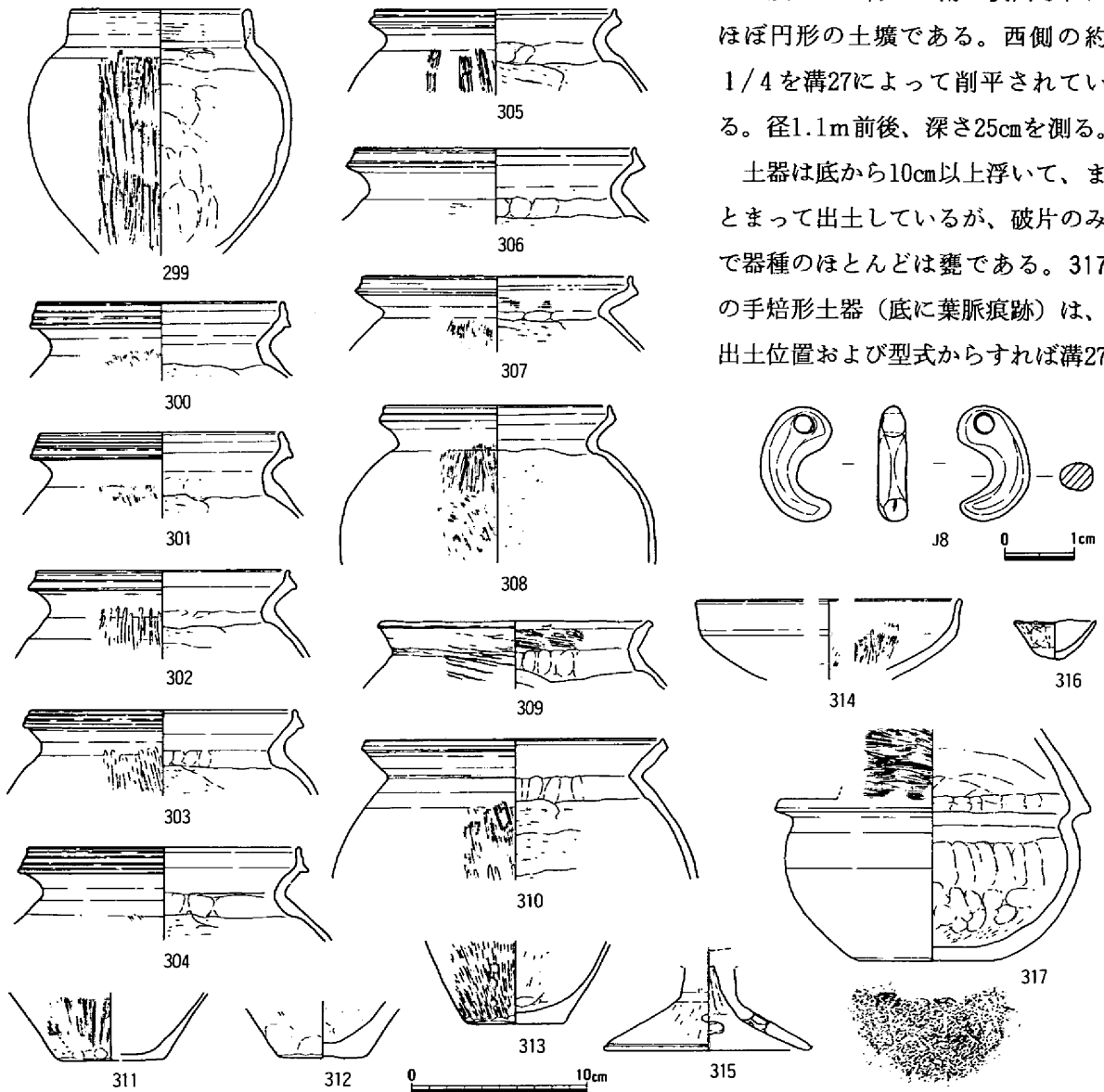
土器は底から約10cm浮いた状態で、いくらかは消失しているものの、小礫を含み多く出土している。器種は壺・甕・高杯・鉢・碗と揃っているが、いわゆる完形はない。高杯の脚柱部に短頸化の兆しが見える百・後・Ⅱの時期である。(柳瀬)

土壌 6 (第34・72図、巻頭図版

4-1、図版13-2. 49)

土壌 5 から約 3 m 南に検出されたほぼ円形の土壌である。西側の約 1/4 を溝 27 によって削平されている。径 1.1 m 前後、深さ 25 cm を測る。

土器は底から 10 cm 以上浮いて、まとまって出土しているが、破片のみで器種のほとんどは甕である。317 の手焙形土器 (底に葉脈痕跡) は、出土位置および型式からすれば溝 27



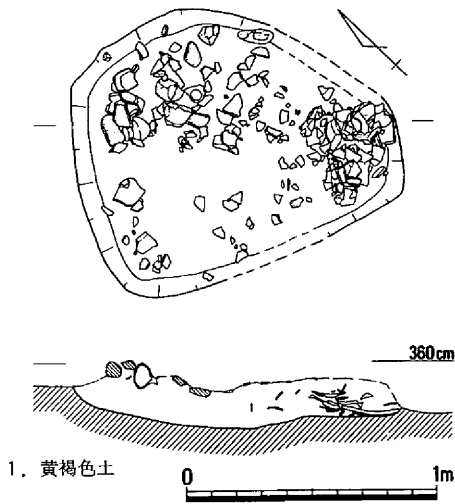
第72図 土壌 6、同出土遺物

に伴う可能性が強いが、この項で扱った。勾玉J8は土器と同レベルの壁際で出土している。質はヒスイに似る。

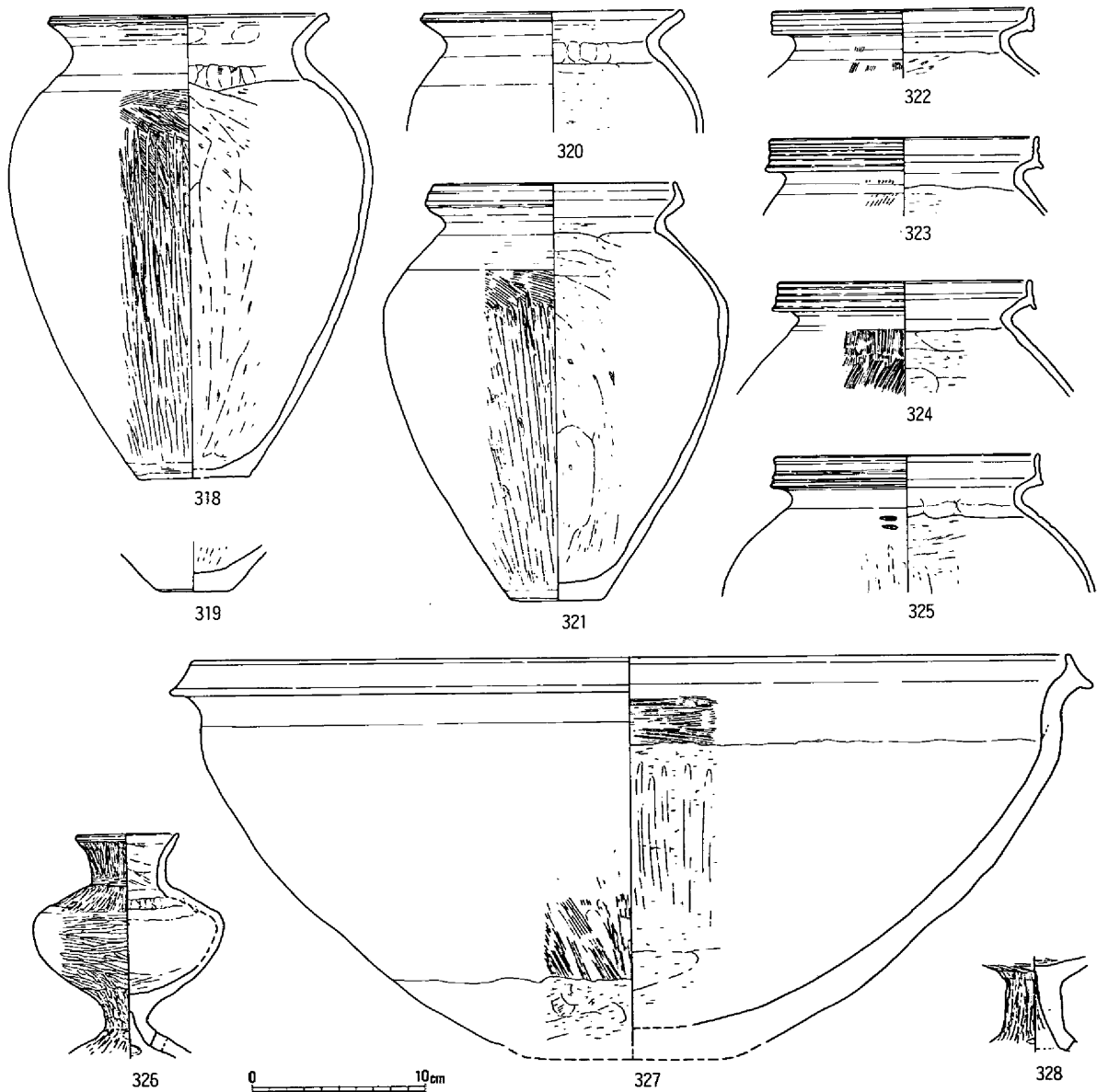
遺構の性格は不明ながら、百・後・Ⅲの時期を与えることができよう。(柳瀬)

土壌7 (第34・73図、図版49)

竪穴住居6の南西側に接し、10区のCライン上に検出された不整円形の土壌である。断面でも明らかなように上部あるいは周辺にかなりの削平を受けている。現状では長径約1.3m、短径約1.1m、深さ約15cmを測る。土器の出土状態は、近接する土壌6と似るが、一部集中する箇所は底に接している。器種は甕が多くを占める。



1. 黄褐色土

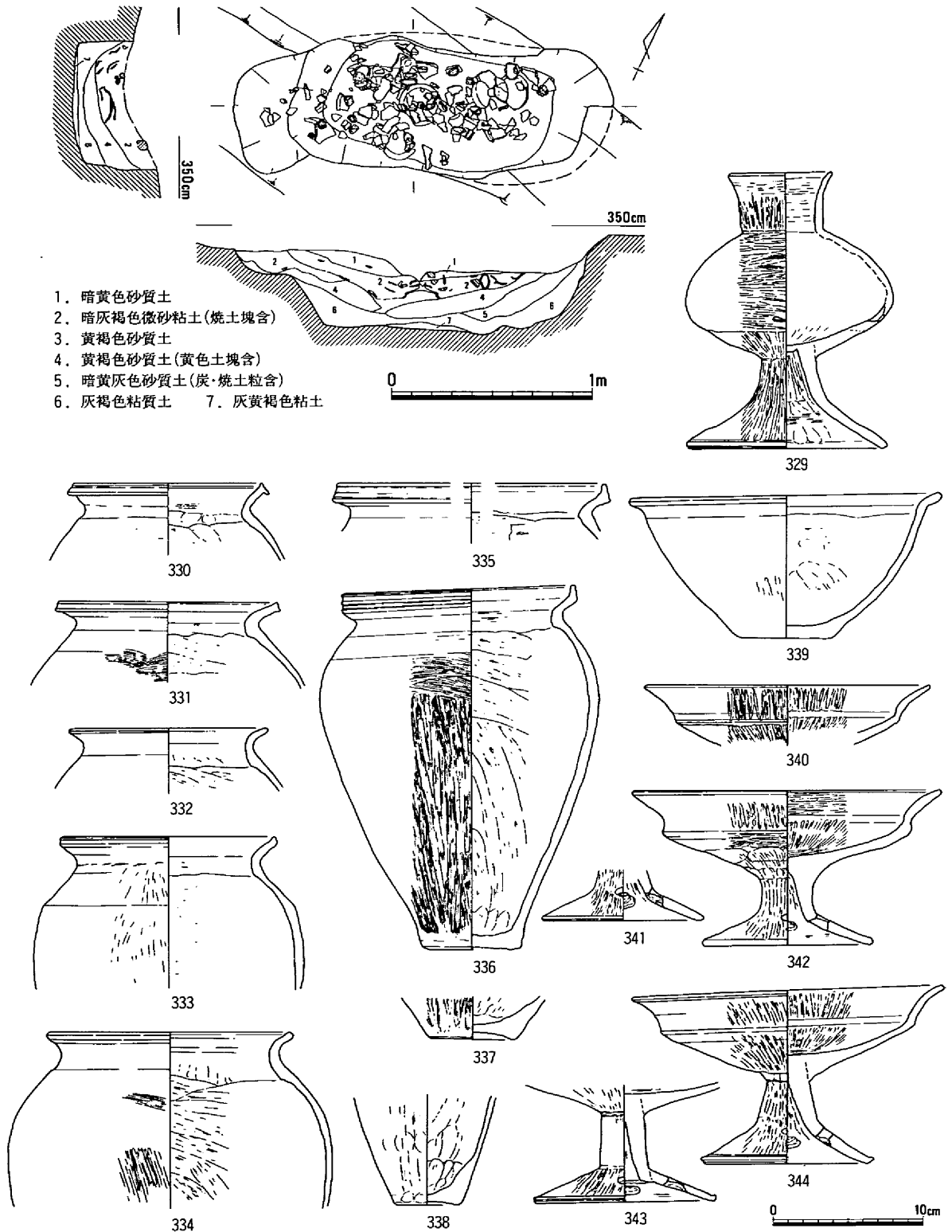


第73図 土壌7、同出土遺物

この種の遺構はその性格が特定しにくい、土器の時期は百・後・Ⅲとみてよい。(柳瀬)

土壌8 (第34・74図、図版13-3.49)

10C区の中では北寄りに位置する、隅丸長方形の土壌である。上方の一部を近現代溝によって削平を受けているが、比較的残存状態はよい。断面は長軸方向で逆台形、短軸方向で箱形を呈し、堆積土



第74図 土壌8、同出土遺物

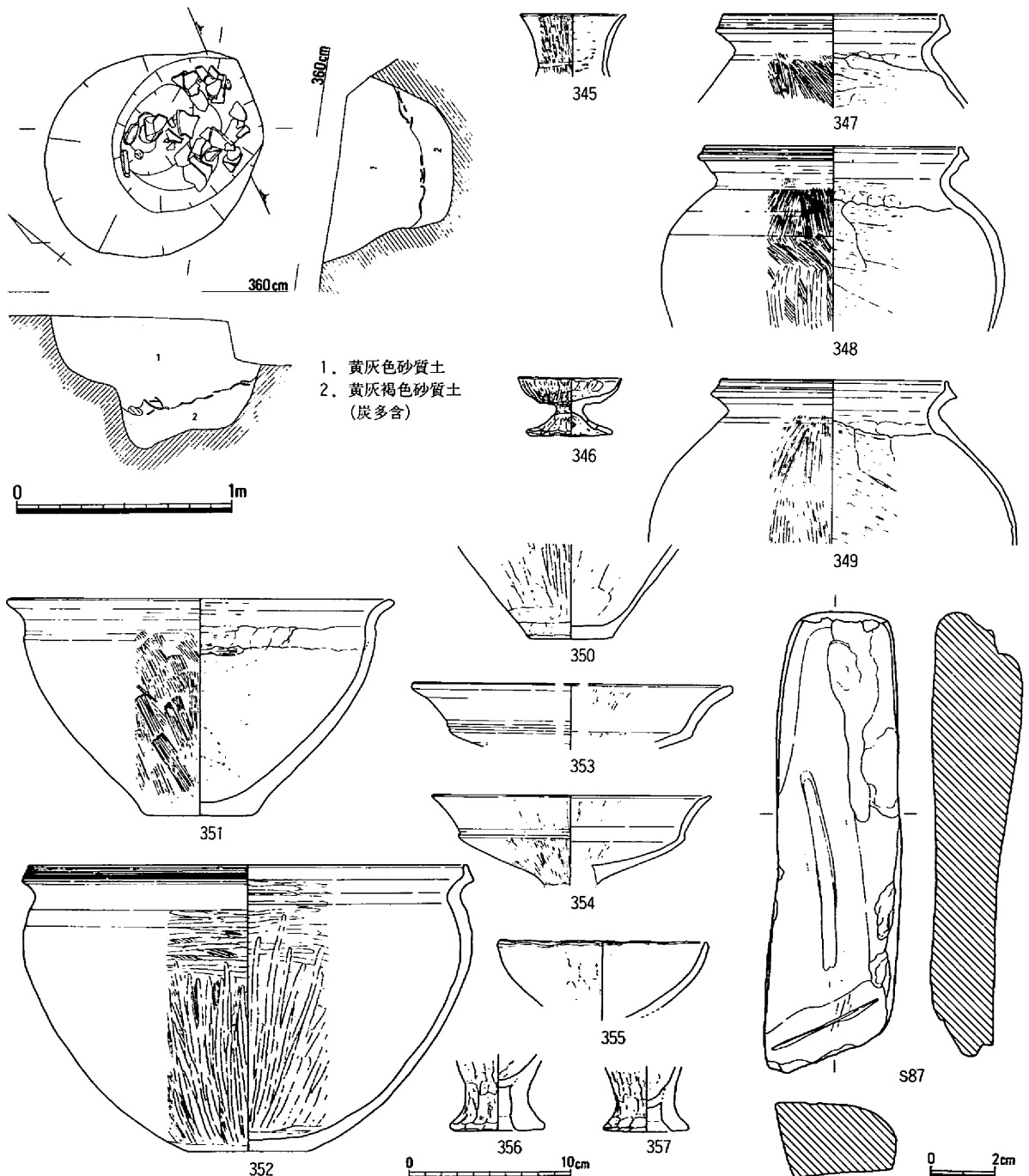


の状況は中央に向かって緩く落ち込む。長辺1.85m、短辺約70cm、深さ約50cmを測る。

出土土器は、おもに上層の1・2層に集中している。土器の中では高杯の344がほぼ完形ながら、他は復元完形または破片である。これらは百・後・Ⅱ～Ⅲの時期の特徴を合わせもつ。この土壌は、形状からすれば墓の可能性もないとは言えないが、ほぼ同時期の住居区の中であることや今のところ周辺では小児用の土器棺墓しか確実なものはないので、今後の検討を待つしかない。(柳瀬)

土壙 9 (第34・75図、図版49)

10C区のほぼ中央に検出されたほぼ円形の土壙であるが、一部を側溝によって切られている。規模は径約0.9～1m、深さ50～60cmを測る。堆積土は2層に分かれ、その境に土器が集中する。



第75図 土壙 9、同出土遺物

土器のうち完形は346の手握ね高杯のみで、他は破片である。砥石S87は流紋岩の溶岩で、両面ともに擦痕が観察されるが、片面には浅いながらも幅4～5mmの窪みが約7cmの長さに認められ、玉類の研磨に使用された可能性もある。出土土器から、百・後・Ⅱの時期とみられる。(柳瀬)

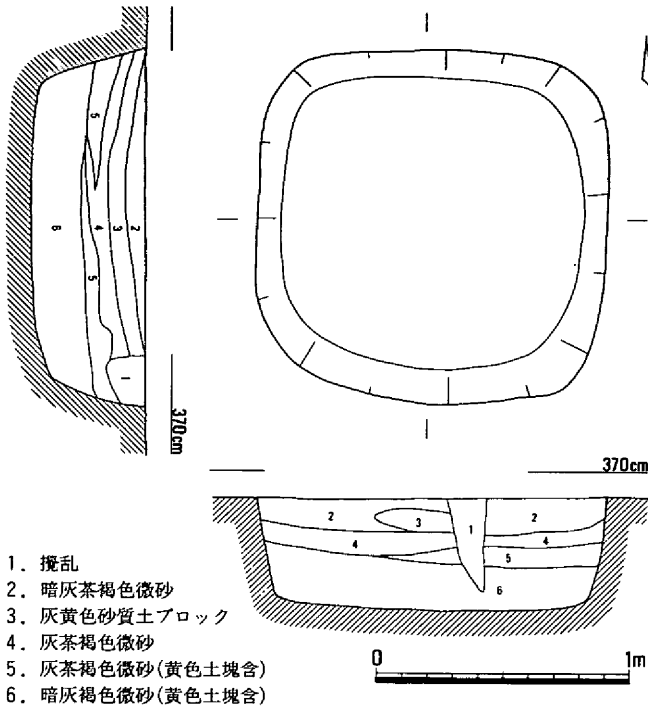
土壌10 (第34・76図、図版14-1)

10C区の北寄りに検出され、隅丸の正方形に近い形を呈する。長さ約1.4m、深さ約45cmを測る。土層は水平堆積に近く、自然堆積とは思えない。底は凹凸もなく、ほとんど平坦であり、貯蔵穴かもしれない。

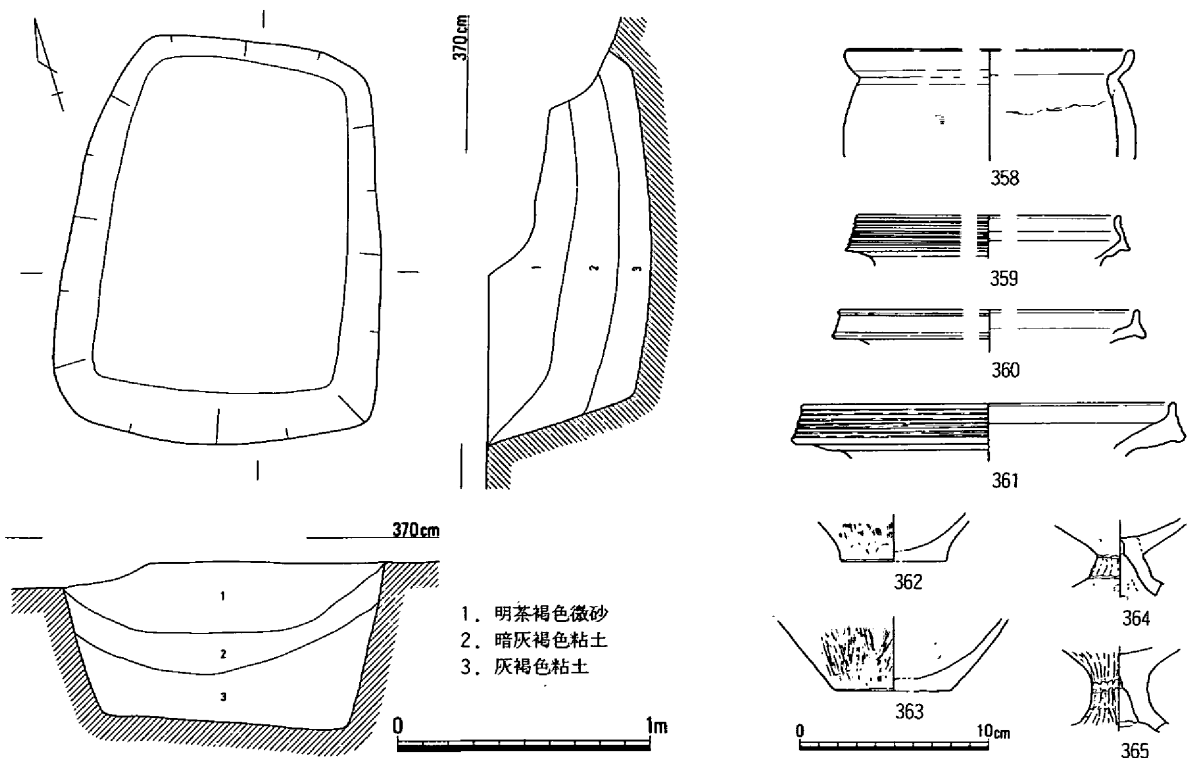
出土遺物は、土器の破片が少量出土しているに過ぎないが、時期は甕の口縁片の特徴などから、百・後・Ⅲ～Ⅳと思われる。(柳瀬)

土壌11 (第34・77図、図版14-2)

9C区の10ラインに接する位置に検出された。北半の上部を近現代溝に削平されているため、平面形が台形状に見えるが、本来は隅丸長方形であった可能性が強い。規模は現状で約1.6×1.0～1.3m、深さ約65cmを測る。



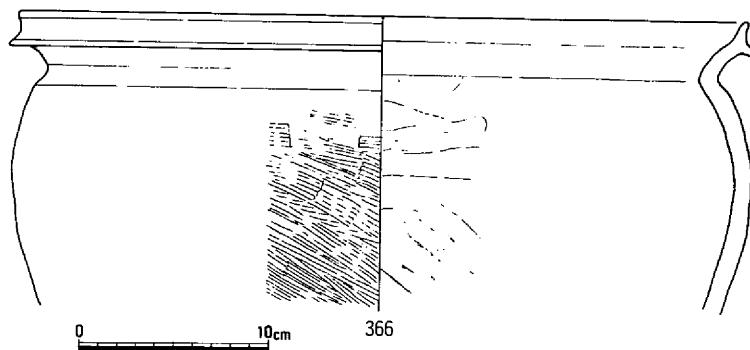
第76図 土壌10



第77図 土壌11、同出土遺物(1)

土層は3層に大別され、中央に向かって緩やかに下がる自然堆積状態を示す。遺物はとくに集中することなく、土器片のみ散在して認められた。土器量は図示したもののほかは、甕の胴部片など20数片に過ぎない。

この土壌は、土器の形態から百・後・Ⅲの時期に廃絶した貯蔵穴と考えられる。(柳瀬)

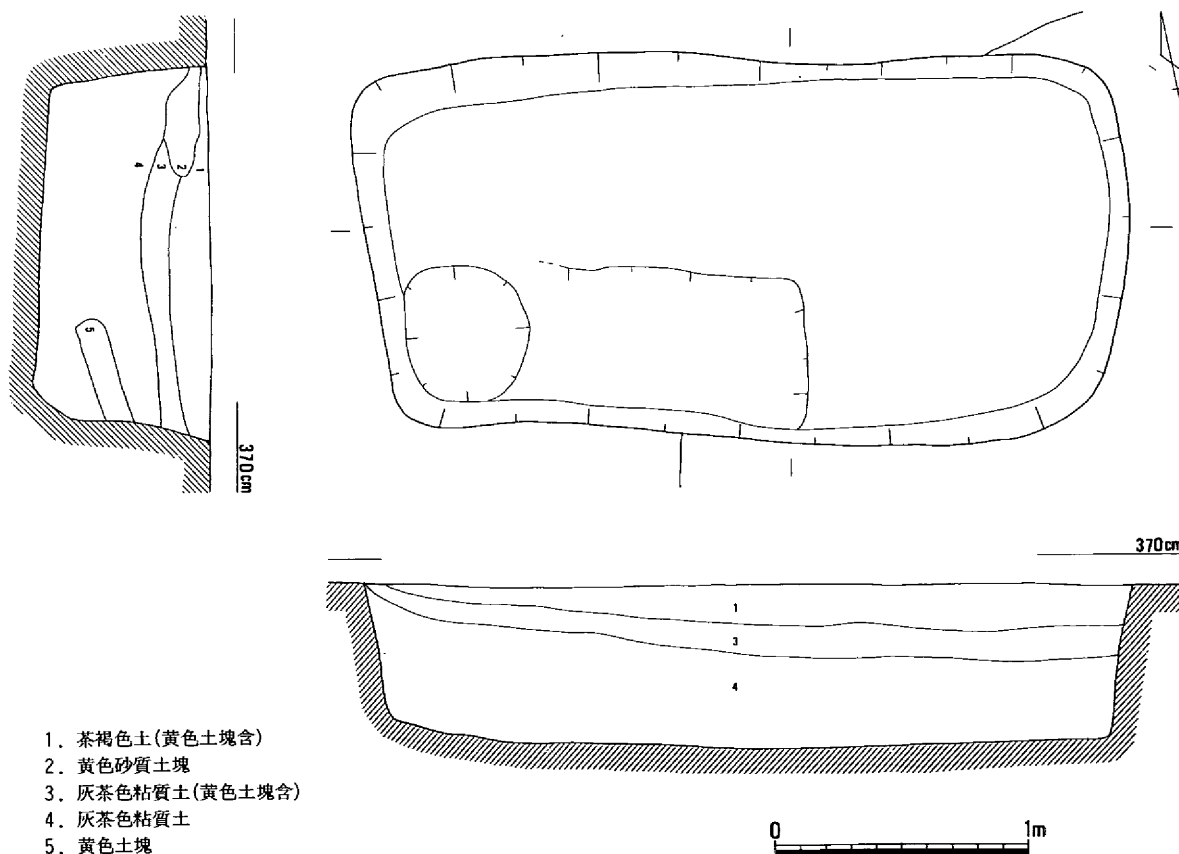


第78図 土壌11 出土遺物(2)

土壌12(第34・79・80図、図版14-3)

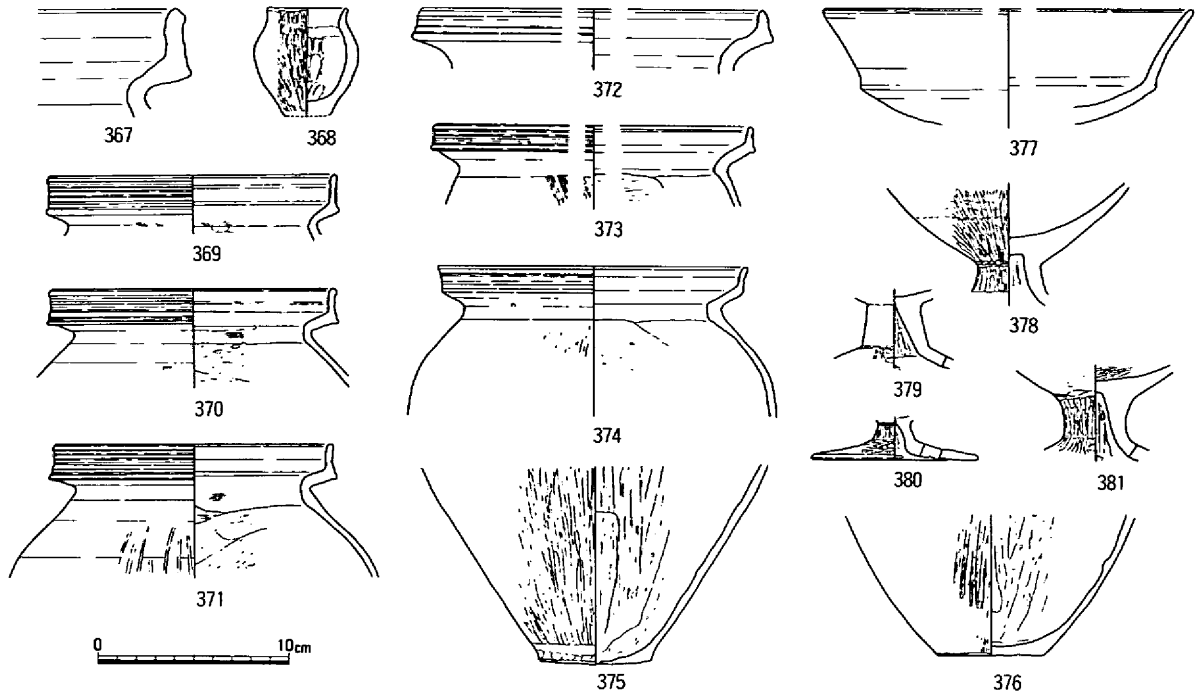
10C区の西寄りに位置し、竪穴住居2の一部を切って存在する。ほぼ隅丸長方形を呈し、比較的急傾斜で落ち込む掘り方をもつ有する大形の土壌である。長軸約3m、短軸約1.5m、深さ60~70cmを測る。南西部の底は円形または長方形にわずかに窪むものの、大半は平坦面を呈する。

土層は水平に近い堆積状態を示し、自然堆積とは思えない。土器は破片のみ、とくに集中することなく散在した状態で出土している。図示した土器以外にも、百・後・Ⅰ~Ⅱの時期の土器片が割合からすれば多く出土しているが、遺構の存在は図示したⅢの時期に求めることができよう。また、この土壌の性格は、確証はないものの規模・形態からすれば、貯蔵穴と考えられる。(柳瀬)



1. 茶褐色土(黄色土塊含)
2. 黄色砂質土塊
3. 灰茶色粘質土(黄色土塊含)
4. 灰茶色粘質土
5. 黄色土塊

第79図 土壌12



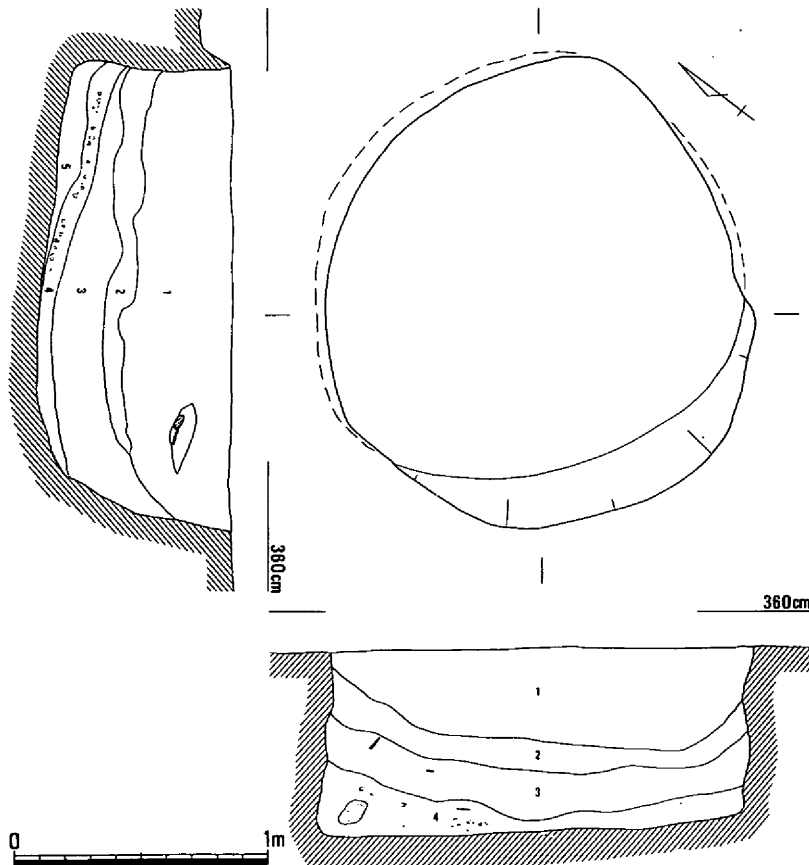
第80図 土壌12 出土遺物

土壌13 (第34・81・82図、図版14-4)

10D区の北寄りに検出した、大形のほぼ円形の土壌である。断面はわずかに袋状を呈する。規模は

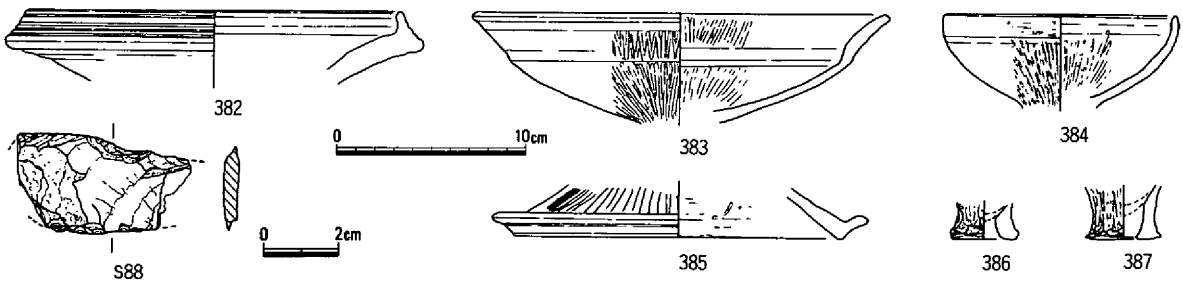
底径1.7m 前後、現状での上部径は底とあまり代わらず、深さ60~70cmを測る。底面は南西部分がわずかに窪むが、ほぼ平坦である。

土層は中央に低く堆積し土器は小破片が少量、おもに3層から、焼土粒・炭粒が比較的多量に4層から検出されている。出土土器の型式は幅があるが、百・後・Ⅲの時期に埋没したと思われる。この土壌が袋状土壌だとすれば、百間川遺跡群で初見である。(柳瀬)



1. 黄灰色砂質土(黄色土塊含)
2. 灰褐色砂質土
3. 黄灰褐色粘質土(黄色土塊含)
4. 茶灰褐色粘質土(焼土粒・炭多含)
5. 3と同(黄色土塊が細かい)

第81図 土壌13

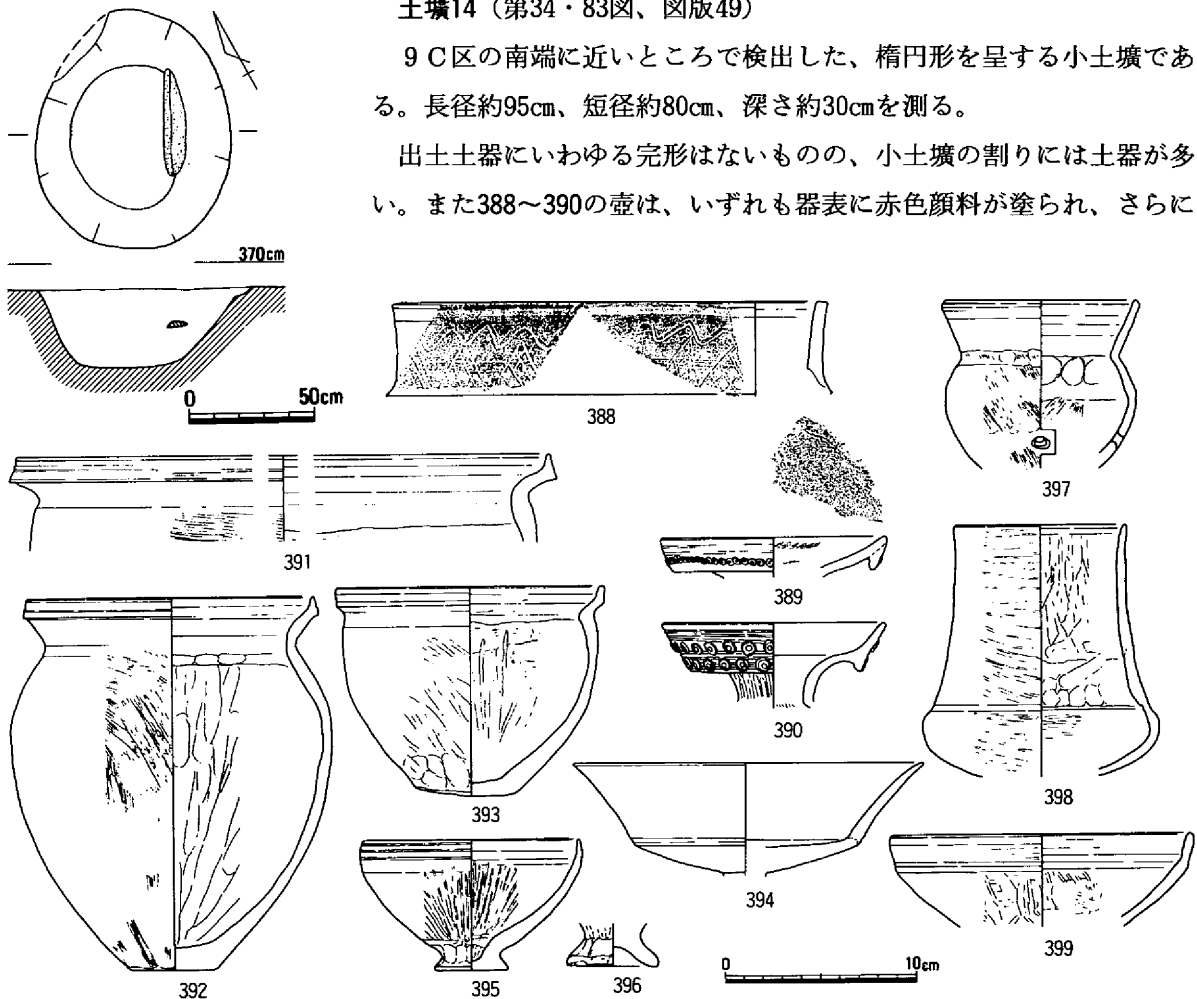


第82図 土壌13 出土遺物

土壌14 (第34・83図、図版49)

9C区の南端に近いところで検出した、楕円形を呈する小土壌である。長径約95cm、短径約80cm、深さ約30cmを測る。

出土土器にいわれる完形はないものの、小土壌の割りには土器が多い。また388~390の壺は、いずれも器表に赤色顔料が塗られ、さらに



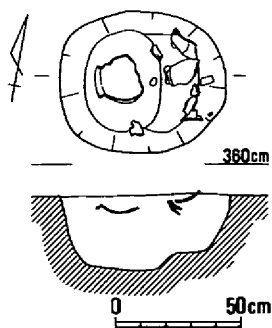
第83図 土壌14、同出土遺物

波状文や円形浮文などで飾られている。とくに、389・390については出土も希で、畿内から移入された可能性が高い。

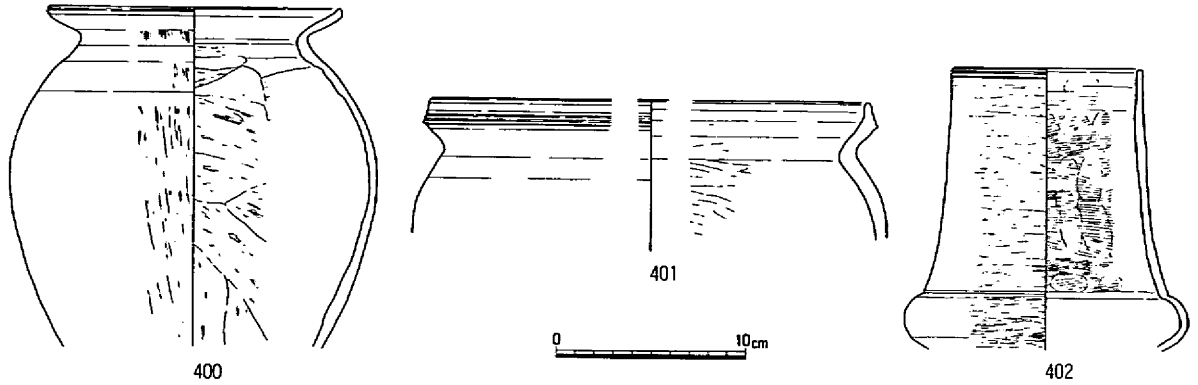
性格は不明ながら、時期は百・後・Nの新相である。(柳瀬)

土壌15 (第34・84・85図)

土壌14の東約2mの、10ライン上に検出されたほぼ円形の小土壌である。径60cm前後、深さ約30cmを測る。柱痕跡は不明ながら、西半分が1段下がる場所から、柱穴と思われる。土器は比較的上部から出土している。土器の時期は、百・後・Nの範疇である。(柳瀬)



第84図 土壌15

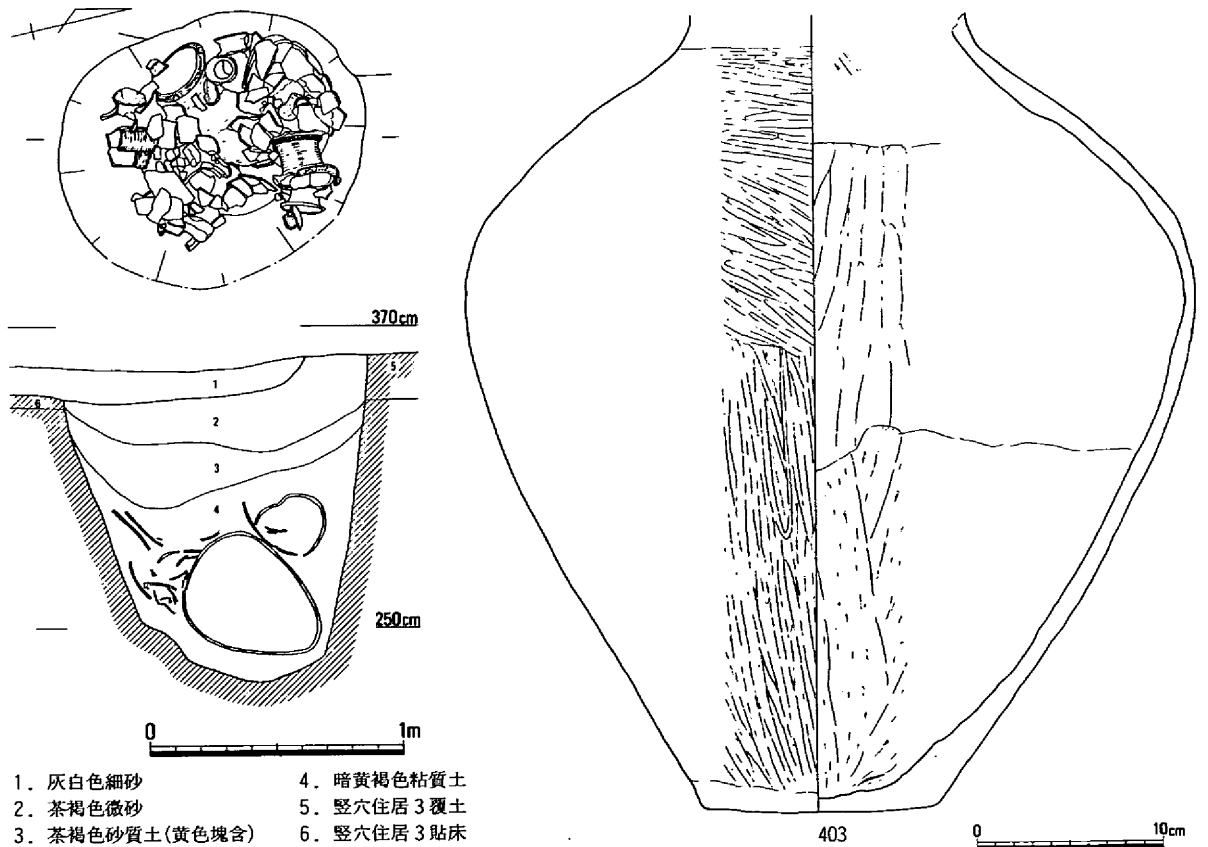


第85図 土壌15 出土遺物

土壌16 (第34・86~90図、図版15-1. 50・72)

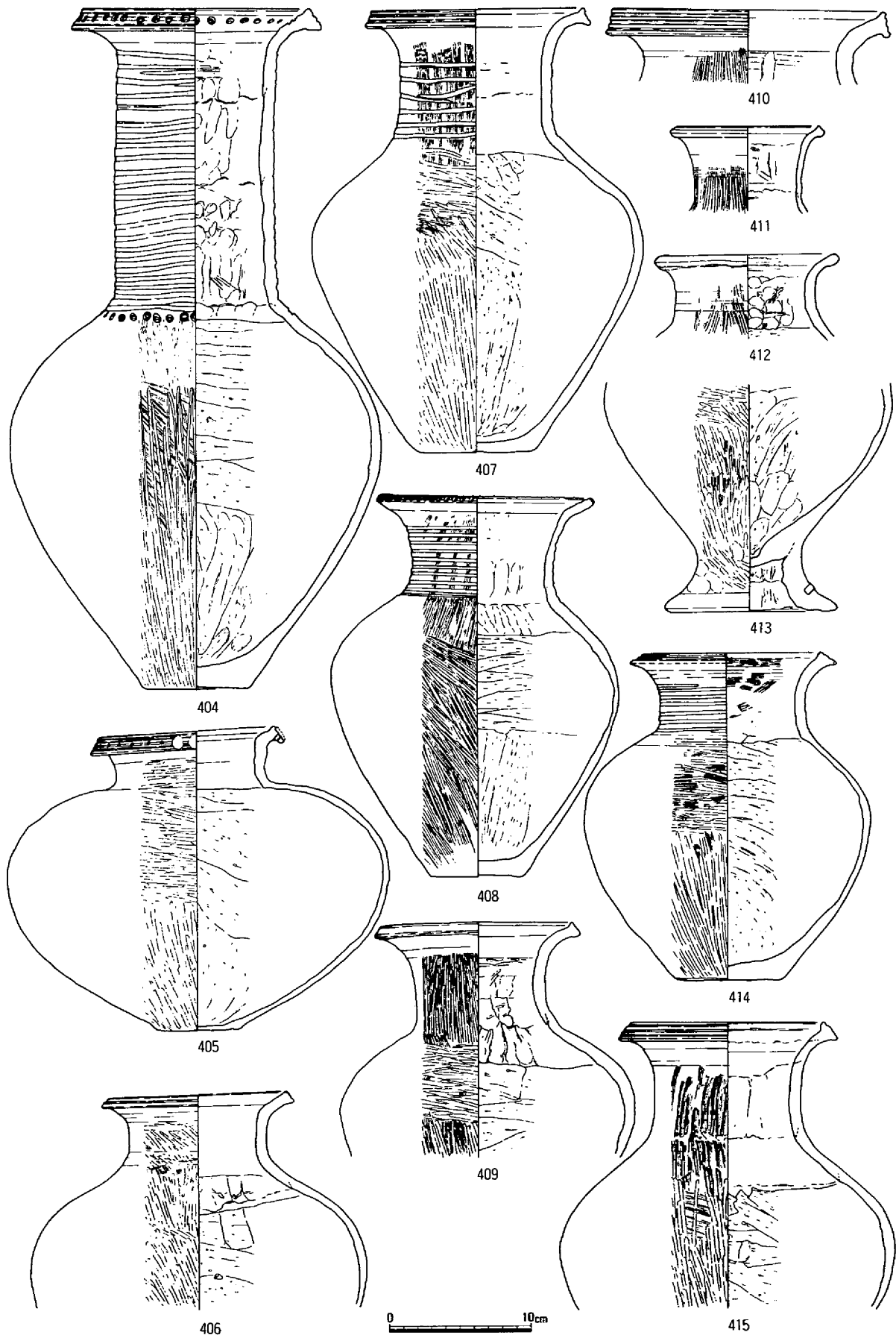
9D区の東寄りにあり、竪穴住居3の柱穴1および貼床面を切り、さらに隣接する竪穴住居4に切られて存在する。現状での規模は長軸1.2m、短軸1.0m、深さ約1.3mを測り、平面形はわずかに楕円形を呈し、底近くは凹凸が見られる。埋土は基本的には3層に大別され、上部の1層は竪穴住居3から井戸4にかけて広く覆われた灰白色の砂層と同一と考えられる。この層には百・古・Iの土器(130~132)を包含しているため、この時期にも上部に削平を受けていることになる。

遺物はおもに土壌下層の4層に土器溜りを形成して出土しており、一括遺物として取り扱うことができる。出土の状態は、まず底に大形壺420が置かれ、壁との隙間にランダムに他の土器を入れ(捨

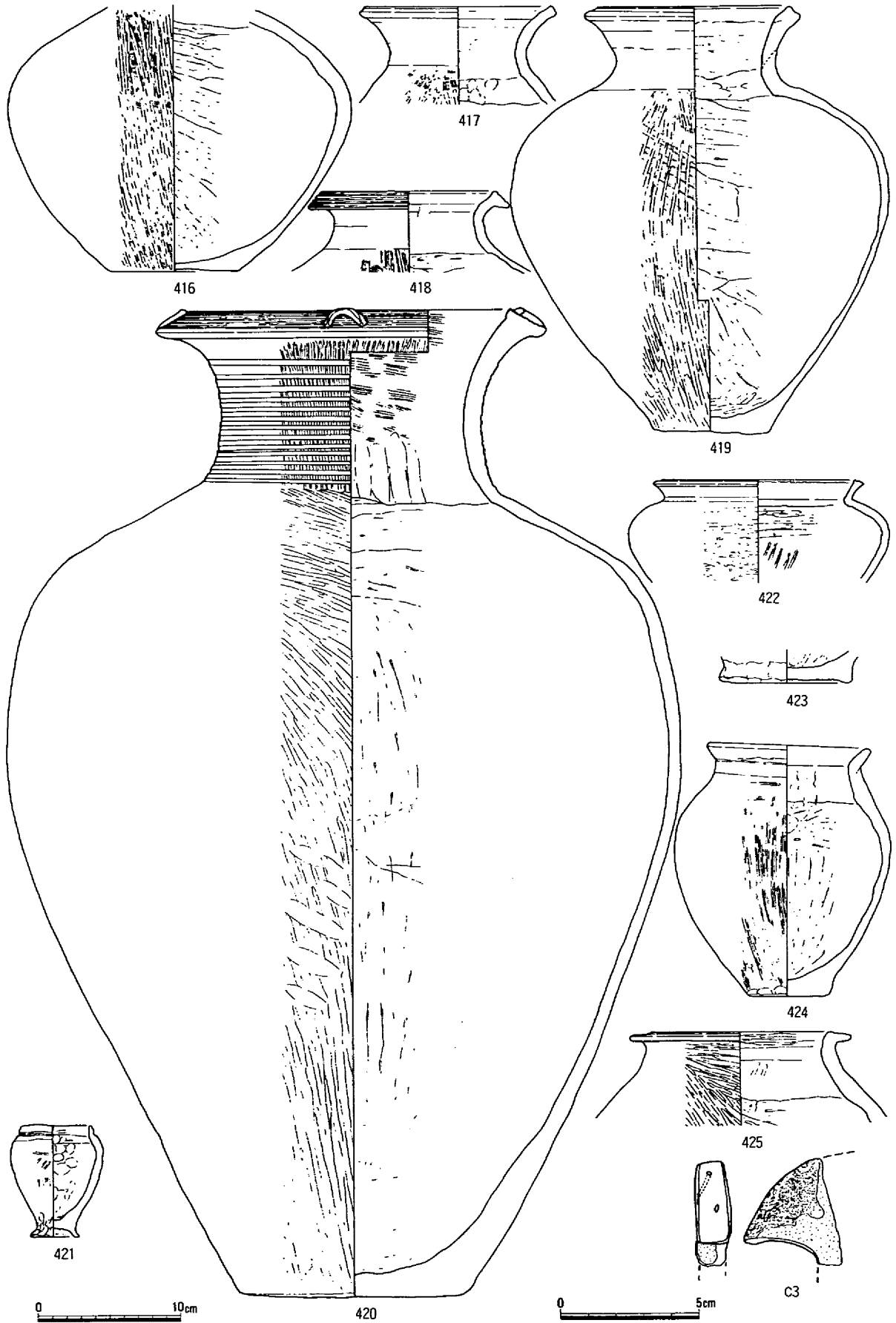


- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1. 灰白色細砂        | 4. 暗黄褐色粘質土 |
| 2. 茶褐色微砂        | 5. 竪穴住居3覆土 |
| 3. 茶褐色砂質土(黄色塊含) | 6. 竪穴住居3貼床 |

第86図 土壌16、同出土遺物(1)

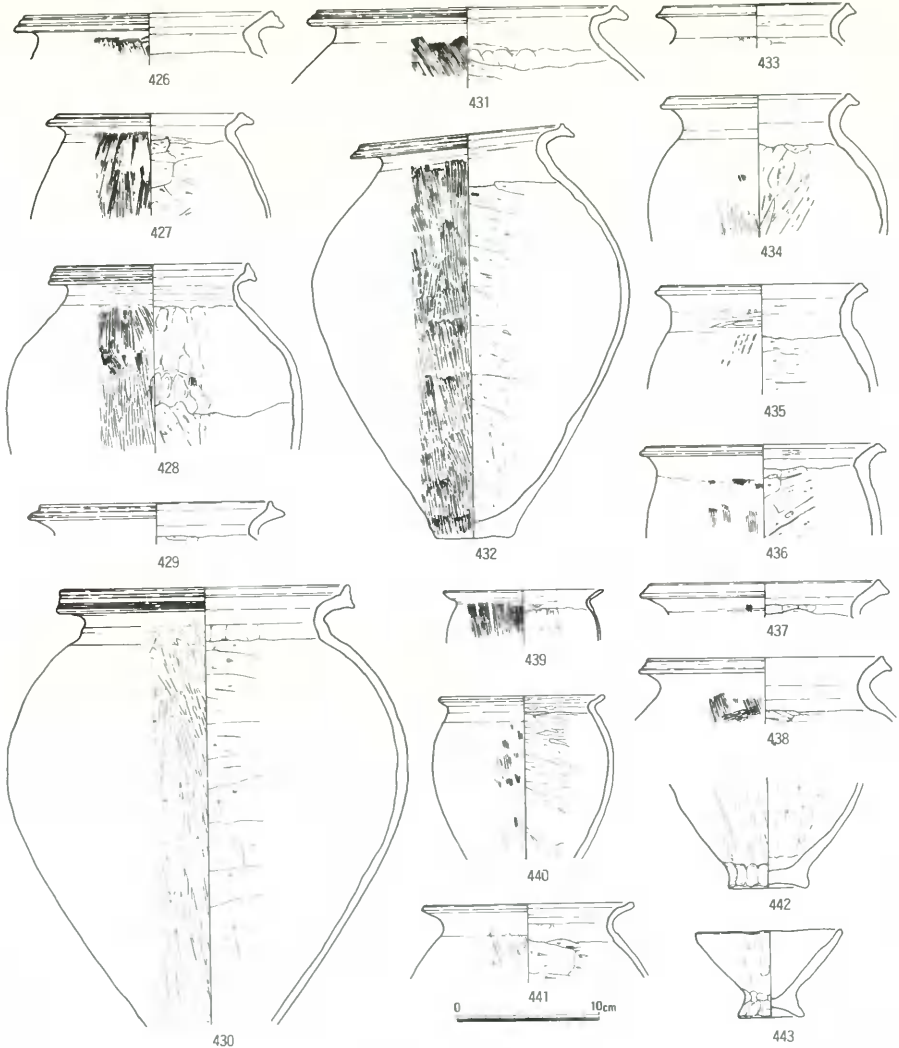


第87図 土壙16 出土遺物(2)



第88図 土壙16 出土遺物(3)



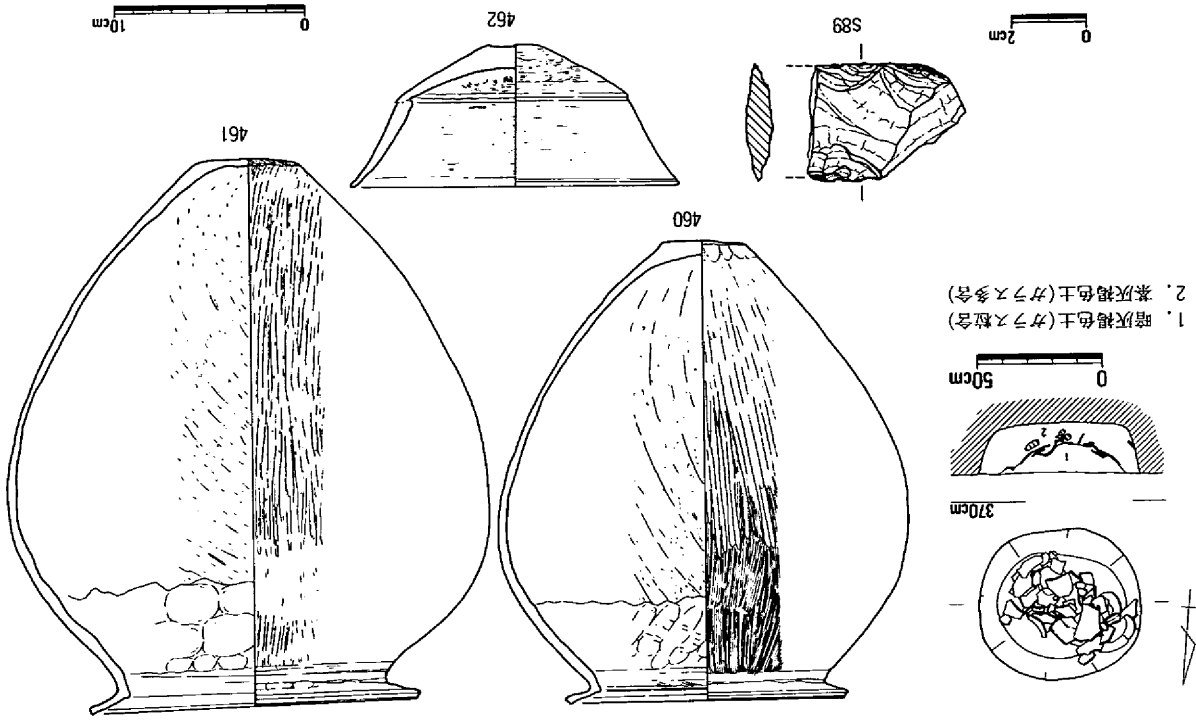


第89図 土塚16 出土遺物(4)

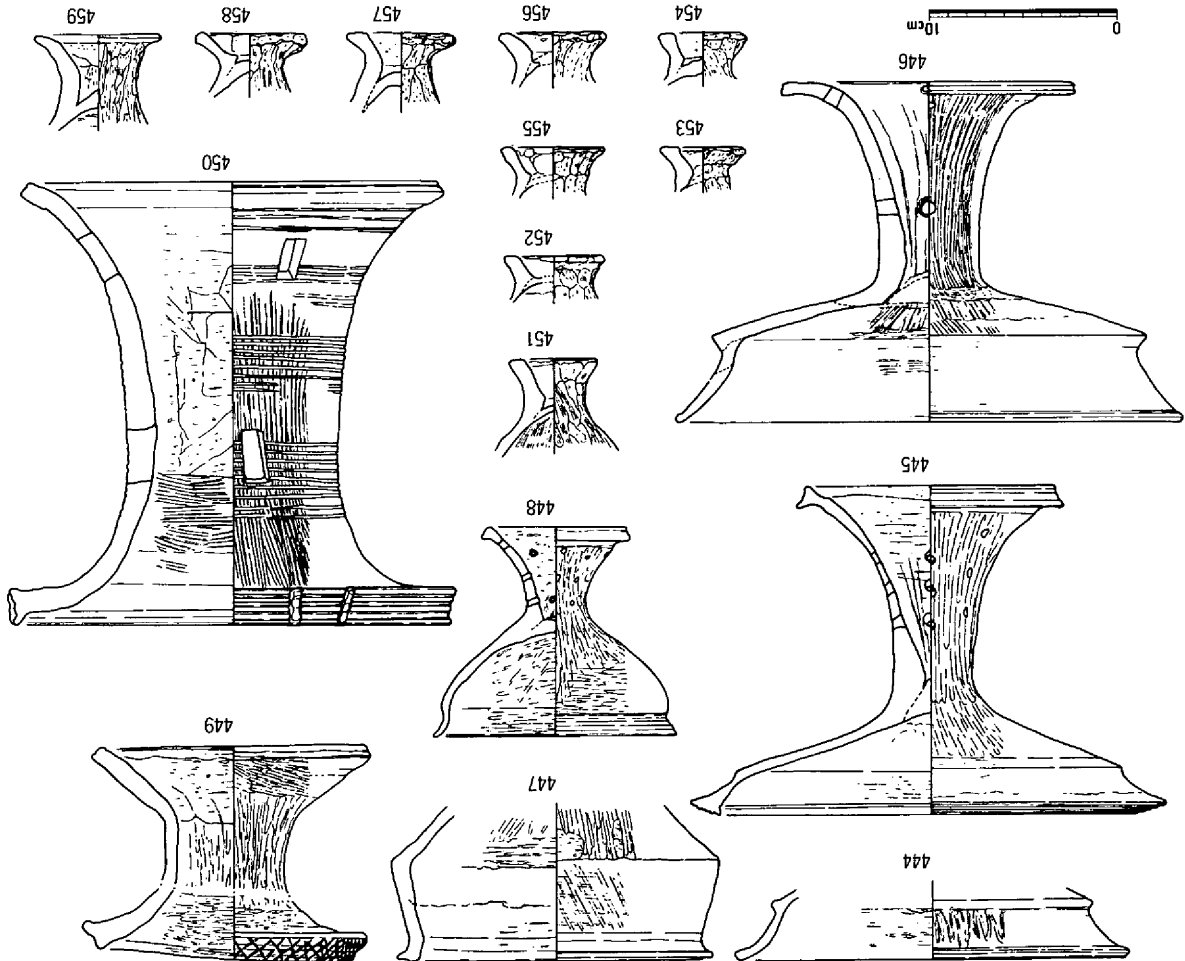
て)といった様子が見られる。土器そのものは、全体的に器表面の荒れや使用痕跡、欠損等が見られ、廃棄時の衝撃あるいは埋没後の土圧等で破損しただけでなく、廃棄の直前に完形の個体も少なかったと思われる。土器の形態以外の特徴として、壺407・417の外面には煤が付着し、とくに前者には内面にオコゲの痕跡もある。出土土器の器種は、壺・甕・高杯・小型鉢・器台・製塩土器などほとんどセット関係を満たしているが、比率としては壺の割合が多い。百・後・1の時期である。

この土塚は他の井戸に比べて約40～50cm浅く、井戸の機能はない。遺構の性格は特定できないまでも、廃棄された土器と伴出している破碎された分銅形上製品C3の存在は注目される。(柳瀬)

第91图 土坑17、同出土遺物



第90图 土坑16 出土遺物(5)



土壌17 (第34・91図、図版51)

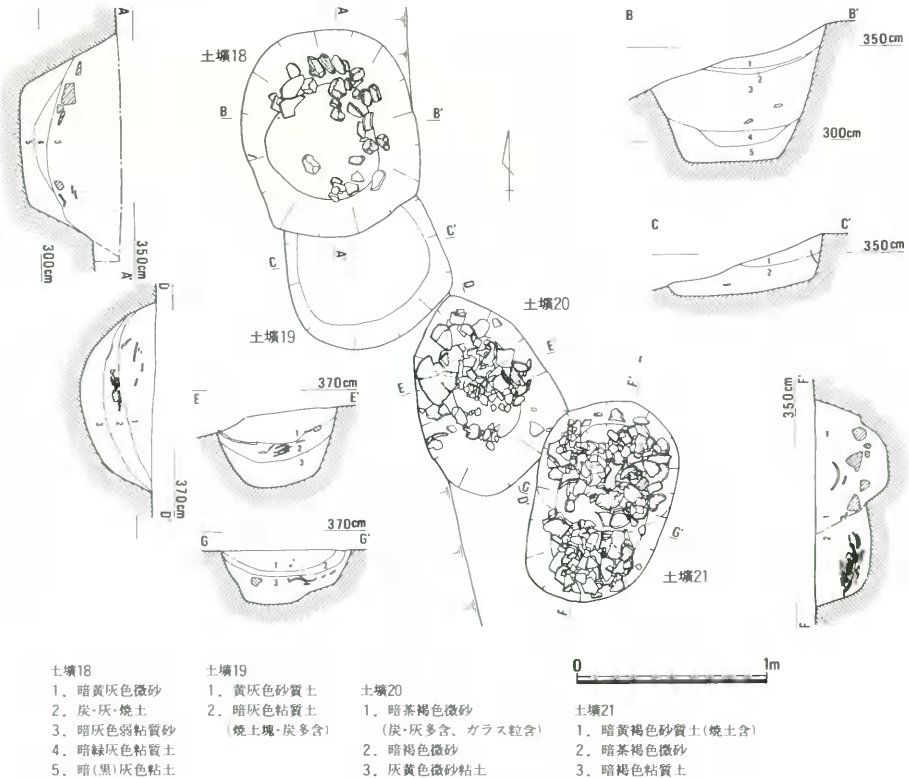
10D区にあり、上部を後出の土器溜り1に覆われて存在する。ほぼ円形で径60~65cm、深さ約20cmと、柱穴とすれば比較的大きい。土壌のほぼ中央部に、細かく破損した土器片が集中して出土しており、堆積土はそれを境に2層に分層される。土層中にはガラス容滓の細粒を含み、とくに2層に多い。

図示した土器は、いずれもほぼ完形近くまで復元された。甕460・461は前出の280、後出の465と同類の土器で、いわゆる讃岐系である。462は高杯の脚柱部をもたない杯であり、類例は少ない。深目の杯の形態や他の讃岐系甕の伴件遺物からしても、百・後・Nの新相とみて差はない。(柳瀬)

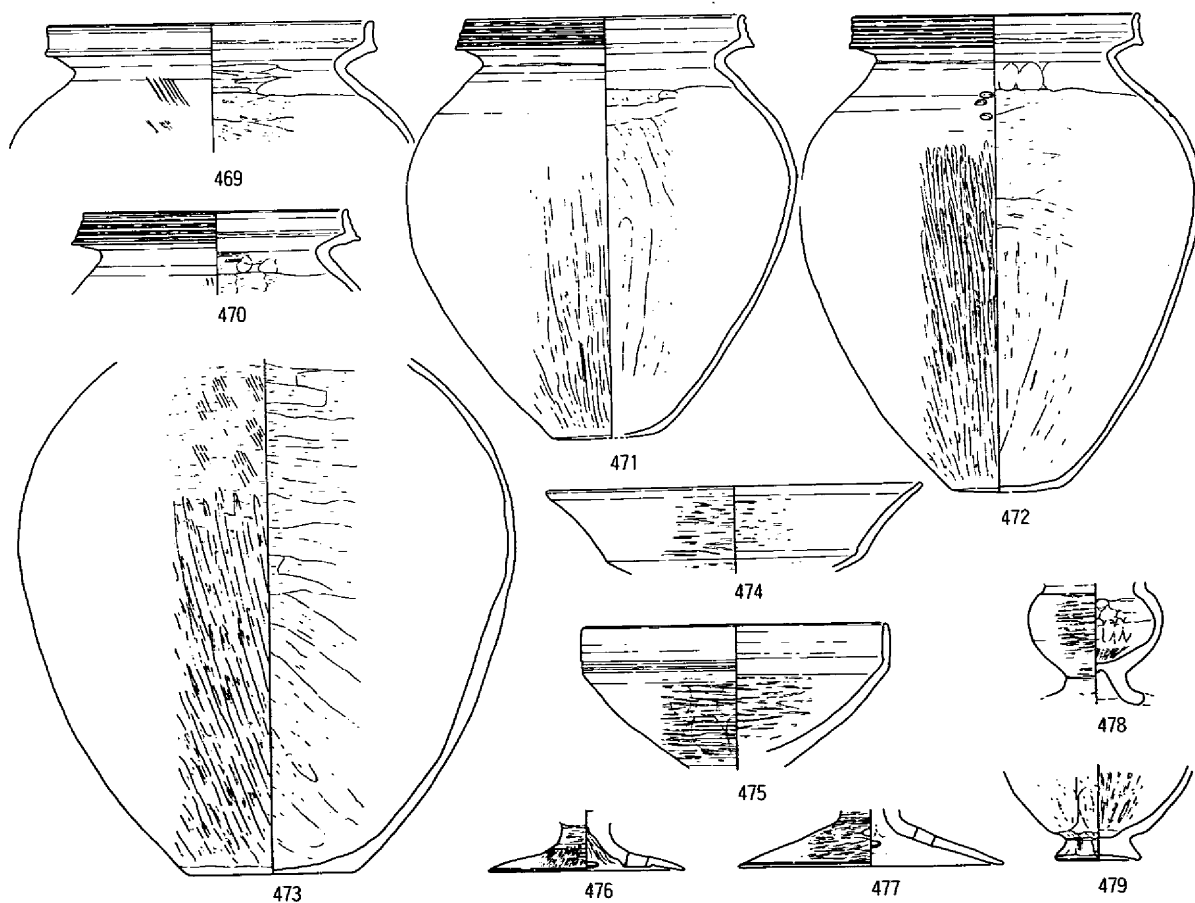
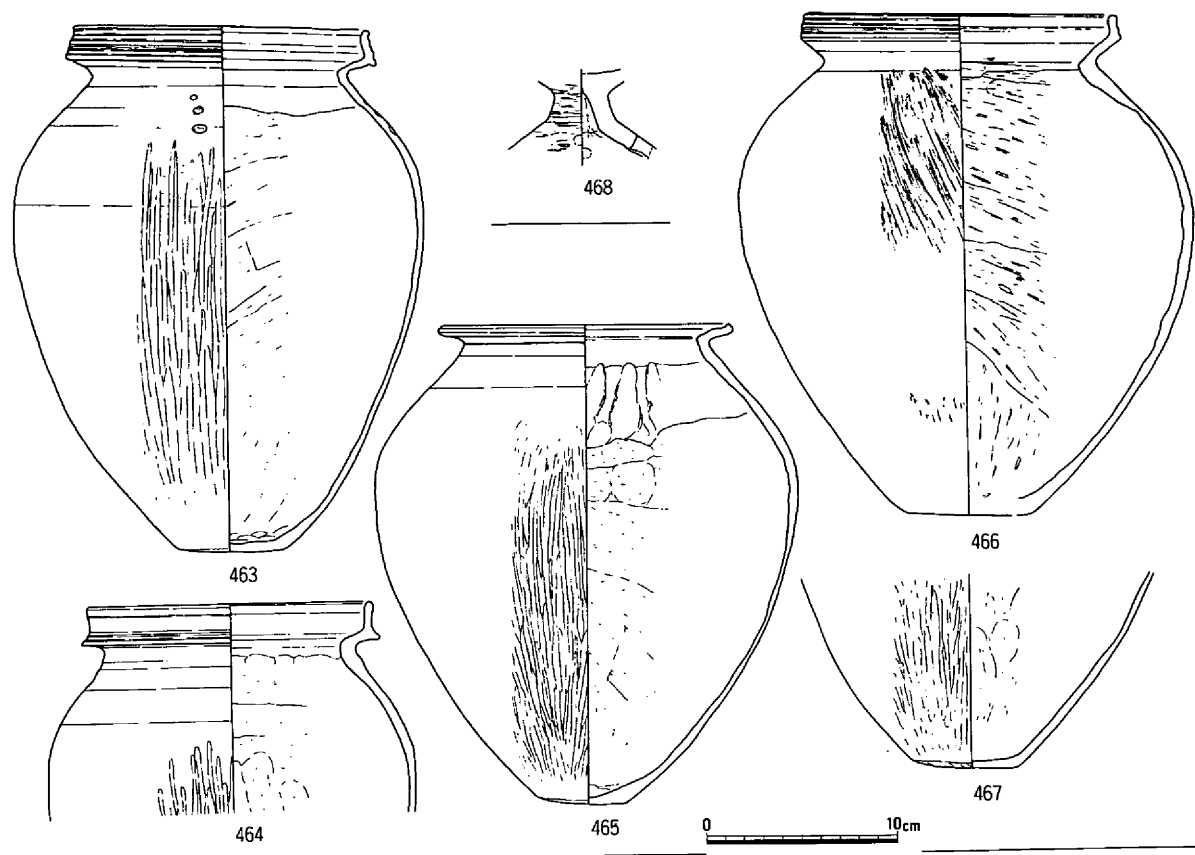
土壌18・19 (第34・92・93図、図版15-2・51)

10D区の土壌13の南西側に隣接して存在し、現代溝により上部が西側に深い削平を受けている。また、土壌19は土壌18に切られる関係にある。土壌18は現状で約0.9×1.1m、深さ最大で約70cm、同19は径約80cm前後、深さ約20cmをそれぞれ測る不整形円形を呈する。

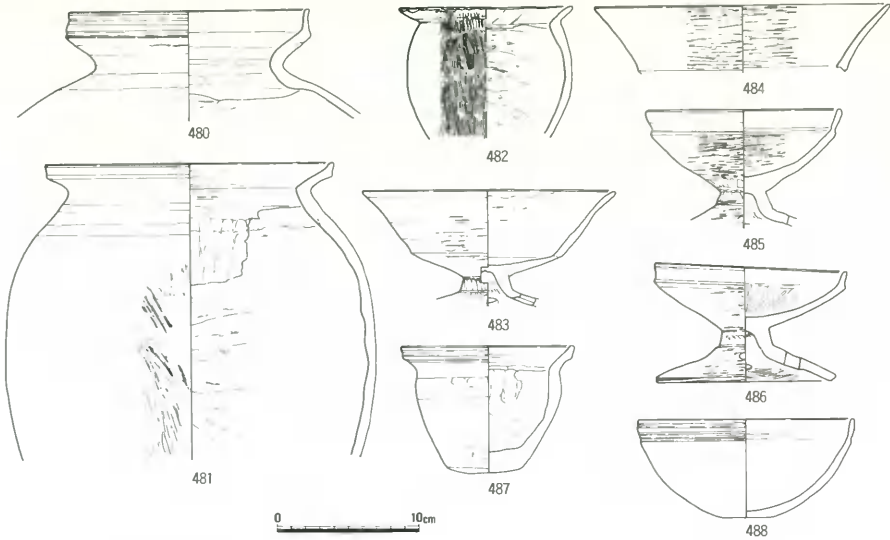
土壌18は埋土の上層に炭・灰・焼土層があり、3層の下部で土器片と小礫の集中をみた。出土土器のうち甕463・465・466は復元でほぼ完形を得ている。土壌19は浅く、底近くに焼土塊と炭を比較的多く含んでいた。土器は数片しかない。土壌18は百・後・N、同19もほぼ同時期と思われる。(柳瀬)



第92図 土壌18・19・20・21



第93図 土壙18・19(上)、20(下) 出土遺物



第94図 土壌21 出土遺物

土壌20 (第34・92・93図、図版15-2・51)

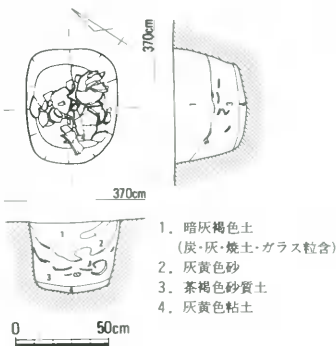
土壌19の南東側に接して検出された不整楕円形を呈する土壌である。長軸約1m、短軸約70cm、深さ40cm弱を測り、遺物は1層下部から2層上部にかけて集中して出土している。また、1層中には土壌17と同様のガラス粒と炭・灰も多く認められ、後出の土壌22とも位置的に近く、三者を含めて何らかの関連性がうかがわれる。ほかにモモの種子が出土している。

土器のうち甕471・472はほぼ復元完形であり、後者はとくに土壌18の463とその形態・整形技法に共通点が多い。土器の年代は、百・後・Ⅳの新相とみてよい。(柳瀬)

土壌21 (第34・92・94図、図版15-2・51)

土壌20の南東側に接して、その一部を切って検出された長楕円形の土壌である。長軸約1.1m、短軸約70cm、深さは北側で40cm弱、南側で30cm弱を測るが、土色で正確に捉えることができなかったものの、F断面では北に小礫、南に土器片の溜りが顕著で、底のレベル差からも2基の土壌が重なっている可能性もある。

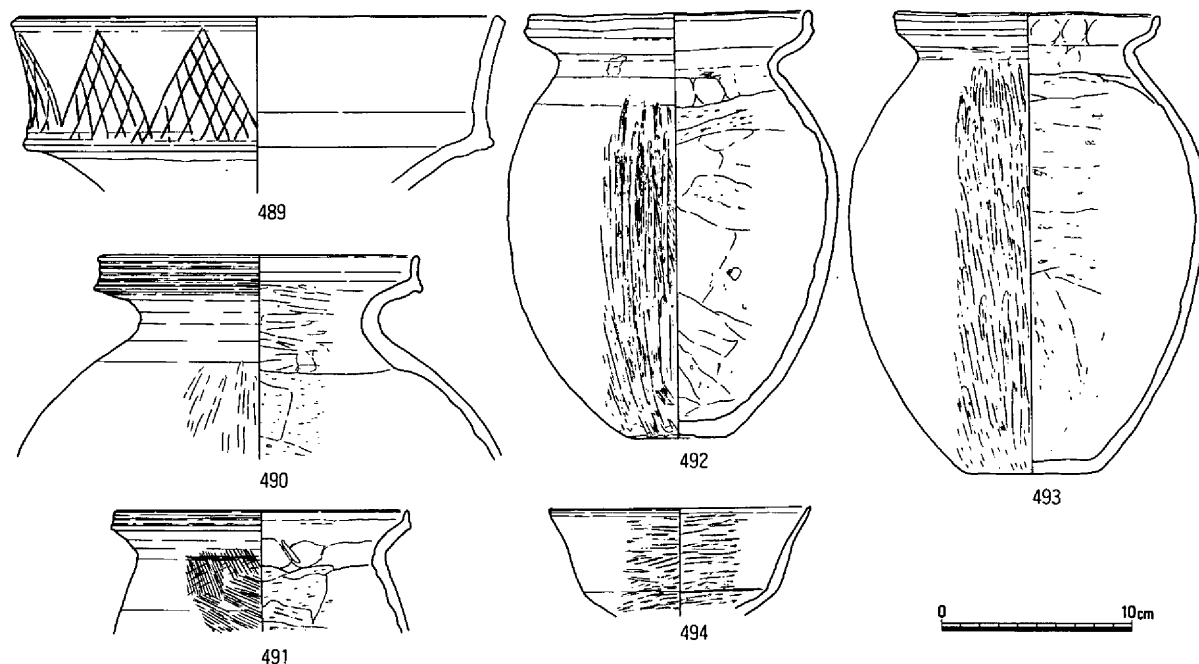
出土土器のうち、甕480・481の一部に土壌18の甕片が接合する。他の遺物も百・後・Ⅳの範疇である。(柳瀬)



第95図 土壌22

土壌22 (第34・95・96図、図版15)

土壌21の東に約1.5m離れた位置に検出された、ほぼ隅丸方形の土壌である。長さ約50×60cm、深さ40cm弱を測り、土層は大きく上・下層に分かれる。上層には炭・灰・焼土とともにガラス粒が見つかる。下層の3層から土器の大半が出土している。



第96図 土壌22 出土遺物

甕492・493はともに復元でほぼ完形になっている。また、後者の肩部から胴部下半にかけての器表には、とくに吹きこぼれ痕跡（図版51）が顕著である。

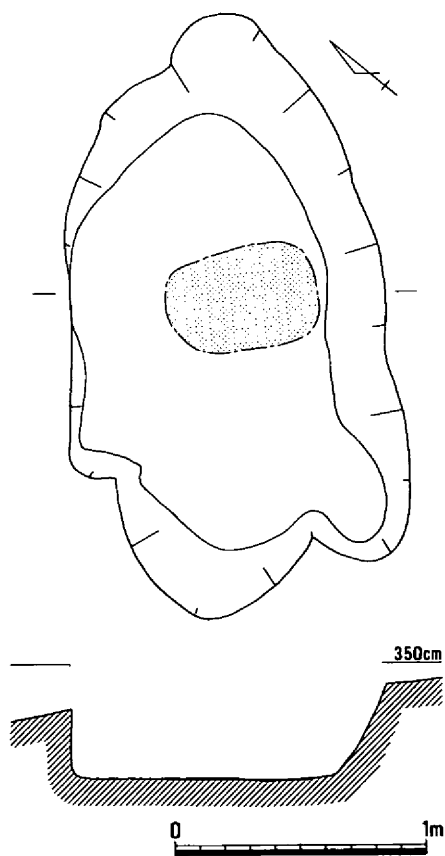
土器の年代は百・後・Ⅳの時期を示し、ほぼ同時期の近辺の土壌のいくつかにガラス粒が出土している点と井戸6出土の長石との関連が注目される。（柳瀬）

土壌23（第34・97図、図版15-3）

10D区にあり、土壌19・20と一部重複し、さらに上部を現代溝によって深く削平されている。平面形は一部が入り組んだ不整楕円形を呈し、長軸約2.4m、短軸1.3m弱、深さ約35cmを測る。埋土は基盤層と酷似した黄褐色粘質土がつまっており、自然堆積とは思えない。底面は平坦で、ほぼ中央部の約40×60cmの範囲が赤橙色に焼土化している。土器は数片出土しているのみで、時期は後期前半であろうか。（柳瀬）

土壌24（第34・98図、図版16-1. 52）

10B区にあり、土壌25によって一部が破壊されている。平面形は細長い形状を示し、中央付近が一段落ち込む。残存長は190cm、幅は78cmであった。深さは端部で20cm、中央部で57cmを測る。壇壁の傾斜は急だが、端部の平坦面から中央部への傾斜は緩やかである。土壌の上部に土器溜りが形成され、中央部分ではU字状

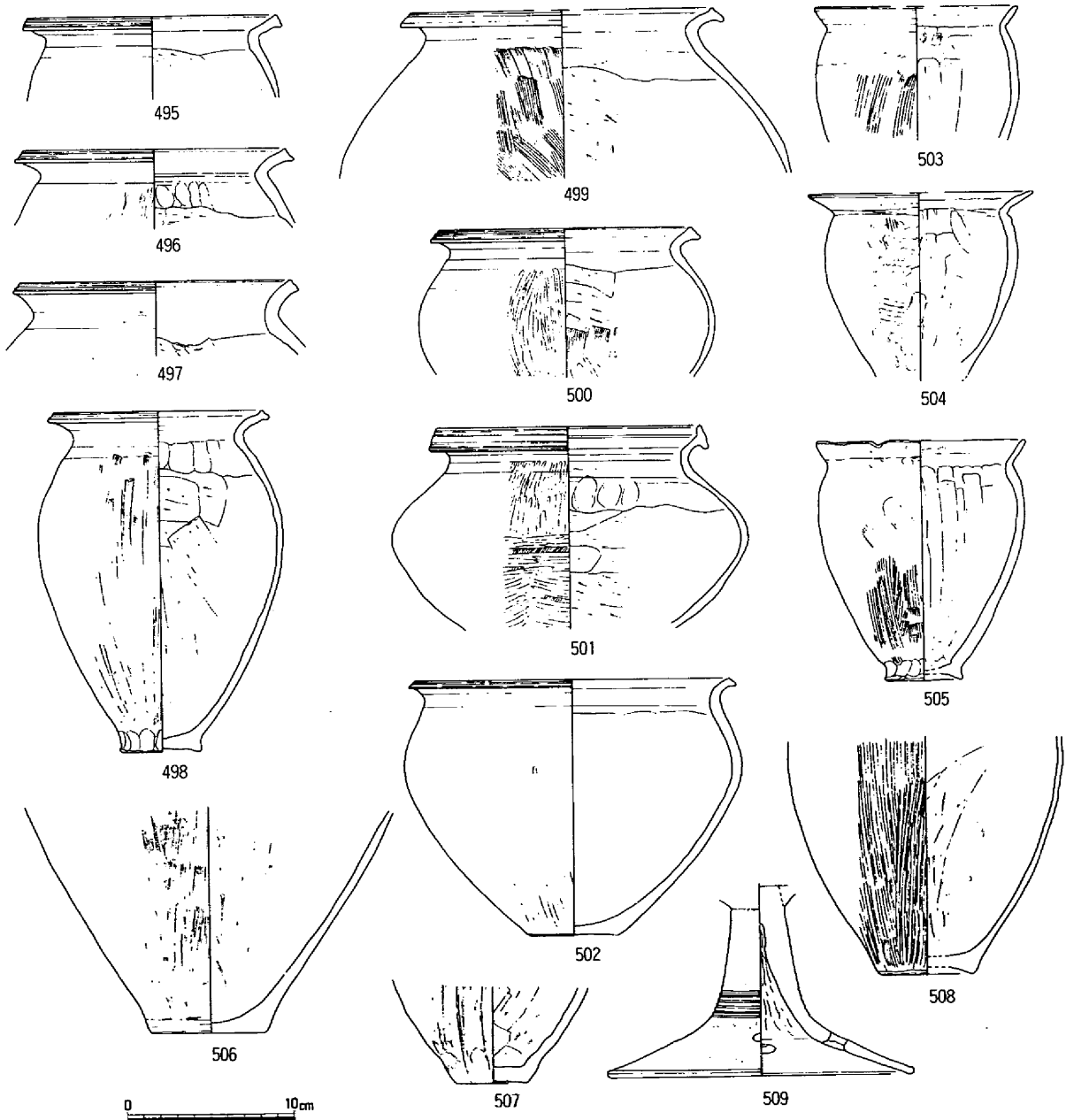
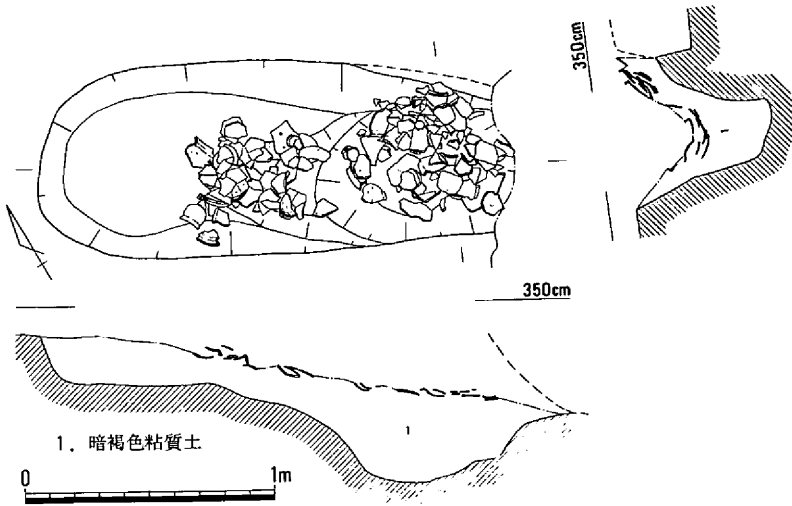


第97図 土壌23

3. 弥生時代後期の遺構・遺物

に窪んでいた。二ヶ所で土器片の集中がみられた。土器溜りの下は暗褐色粘質土の一層であった。

出土土器の器種をみると甕が多く、鉢も目立った。口縁部の形状から判断して多少の時間幅が考えられそうである。土器の年代は百・後・Ⅱである。(岡本)

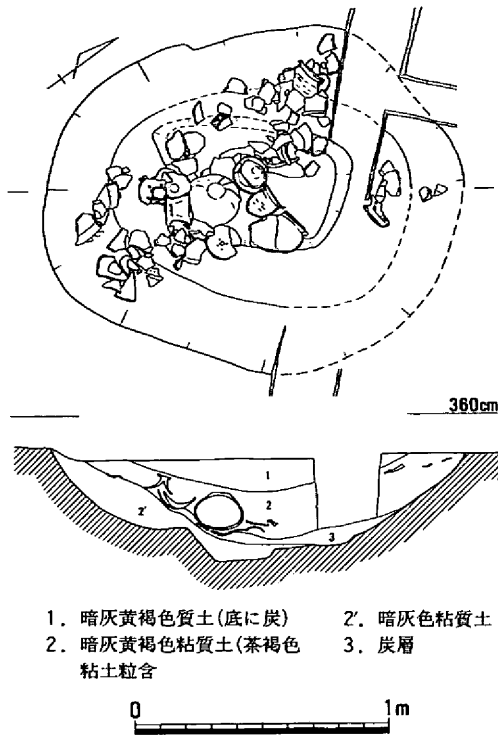


第98図 土壙24、同出土遺物

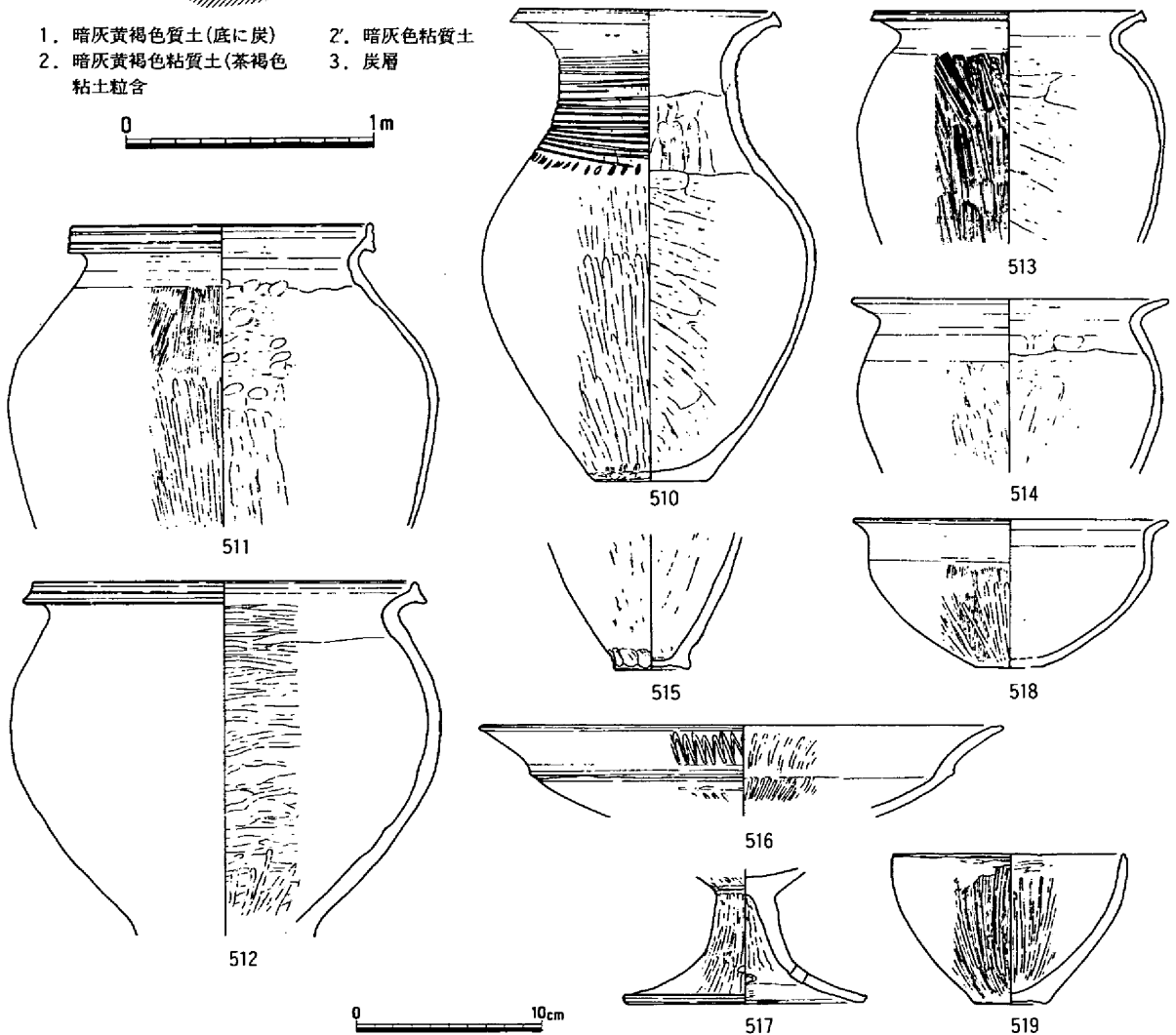
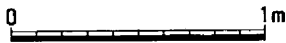
土壙25 (第34・99図、図版16-2. 52)

10B区にあり、土壙24を破壊して掘られている。平面形は不整形な楕円形を呈し、長径が166cm、短径は141cmを測る。壙底は中央部分が落ち込んで段状をなしていた。土壙の深さは、最深で47cm、一段高い底面で33cmだった。埋土は3層に分けられたが、第2層には大量の土器片が含まれ、土器溜りの様相を呈していた。土器溜りの底には焼土を含んだ炭の層があり、土壙本来の機能が失われた後、しばらくしてゴミ穴として利用されたものであろう。

土器の年代は百・後・Ⅱが主で、Ⅲを含む。(岡本)



- 1. 暗灰黄褐色質土(底に炭)
- 2. 暗灰黄褐色粘質土(茶褐色粘土粒含)
- 2'. 暗灰色粘質土
- 3. 炭層

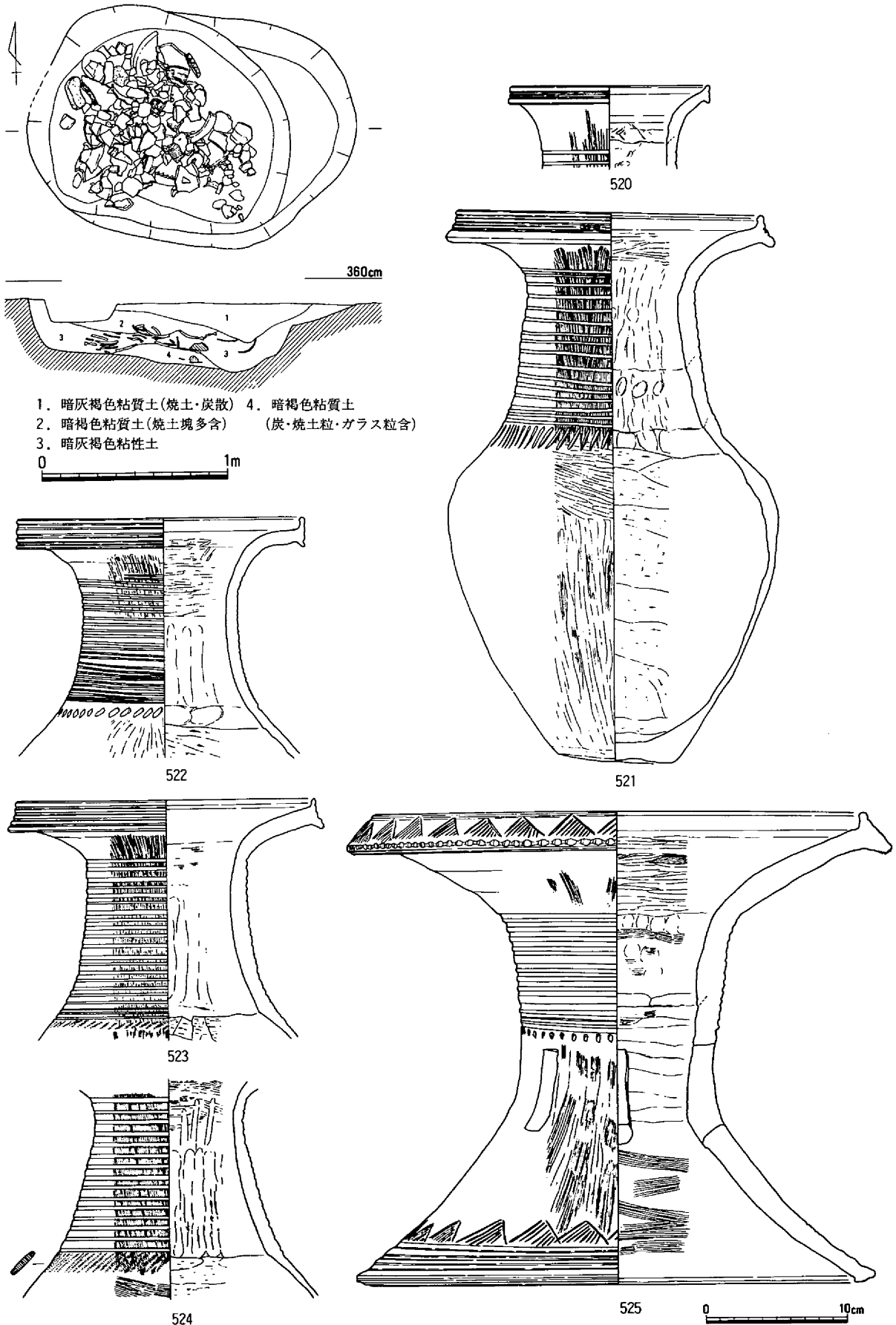


第99図 土壙25、同出土遺物

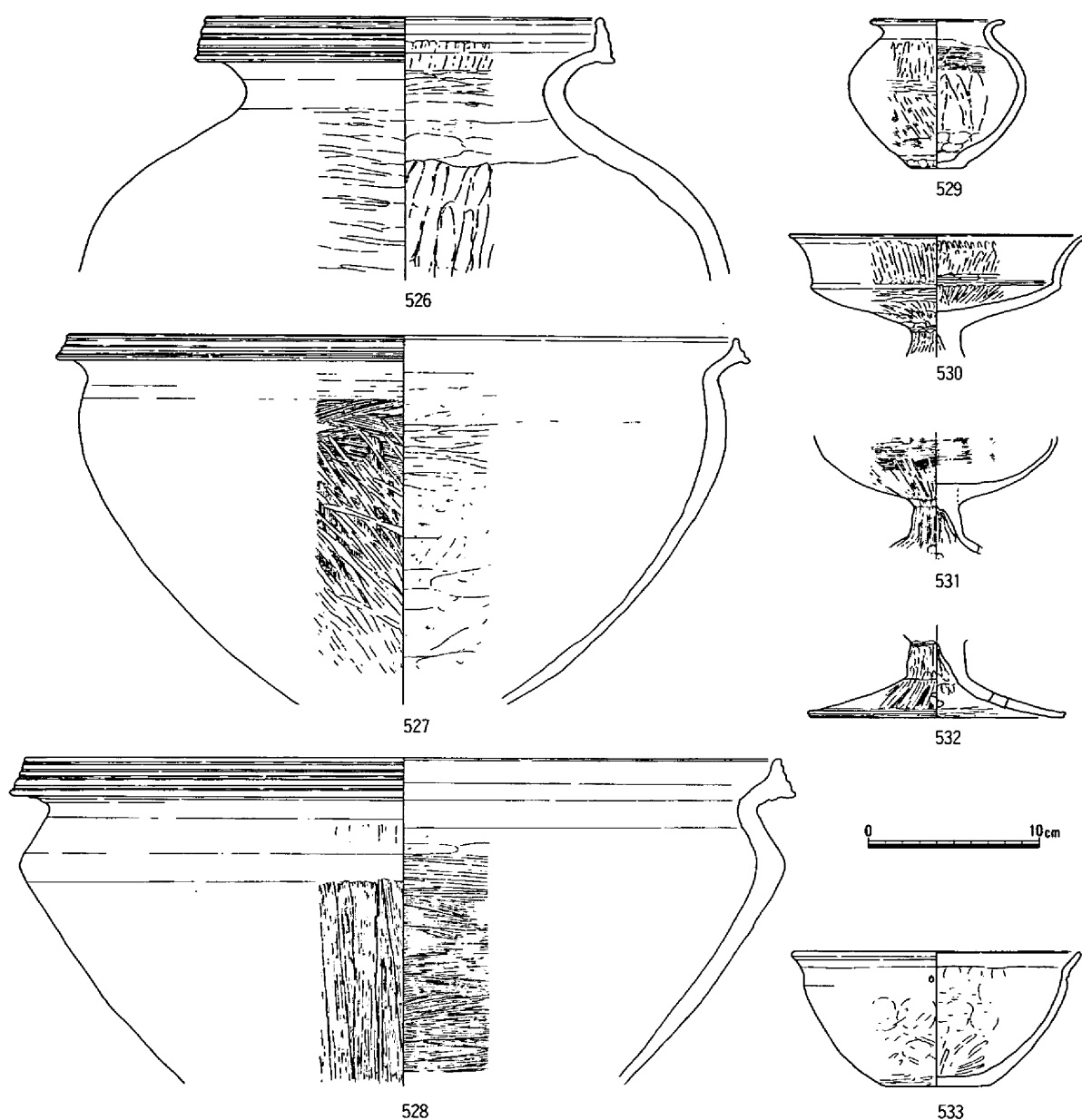
土壙26 (第34・100・101図、図版16-3. 52)

10B区の東端で検出された。平面形は不整形な楕円形をなし、その規模は、長径が177cm、短径が





第100図 土壇26、同出土遺物(I)

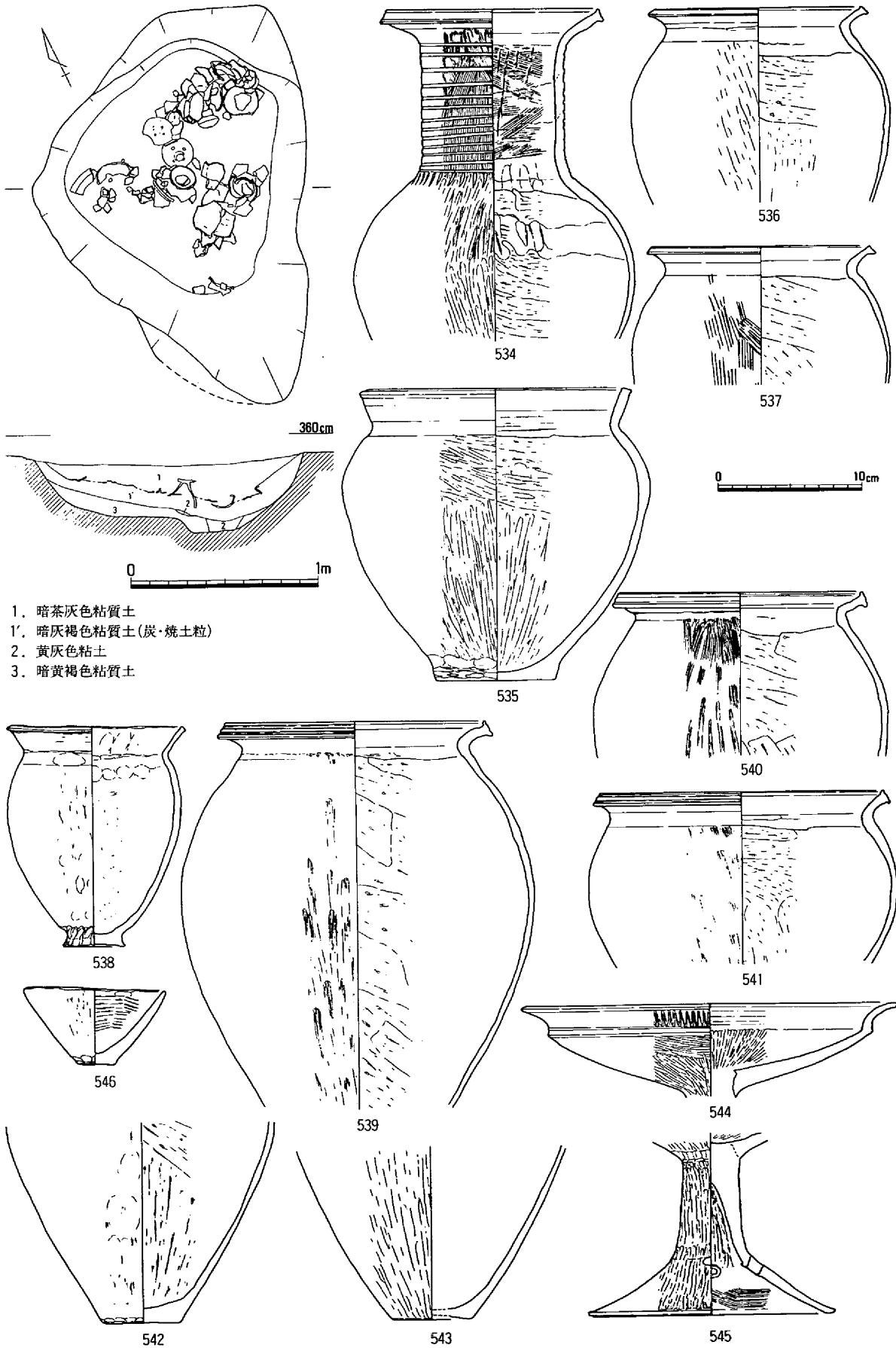


第101図 土壙26 出土遺物(2)

123cm、深さは40cmを測る。土壙の東肩部は深さが12cm前後の浅い段になっていて、段の肩部で測ると土壙の長径は142cmとなる。壙内の埋土は4層に分けられるが、下半の第3層には土器片が大量に含まれ、土器溜りとなっていた。土器溜りの下に接して、炭や焼土を多量に含んだ第4層の盛土があり、この中にはガラス滓も認められた。第2層にも多量の焼土塊が含まれているため、第4層から第2層までの堆積は短時間であったかもしれない。出土土器の年代は百・後・Ⅲの古である。(岡本)

土壙27 (第34・102図、図版16-4. 52)

10B区の東半にあり、土壙25から南に1mしか離れていない。平面形は不整形な三角形のような形を呈し、長径が213cm、短径は141cmを測る。底面は四角形に近く、対角線方向の長径で128cmであった。この土壙の底面も、東半が8cm程度落ち込んで段をなしている。土壙の深さは最深部で42cmであった。断面を観察すると、埋土は3層からなり、第1層の底に土器溜りが形成されていた。土器溜



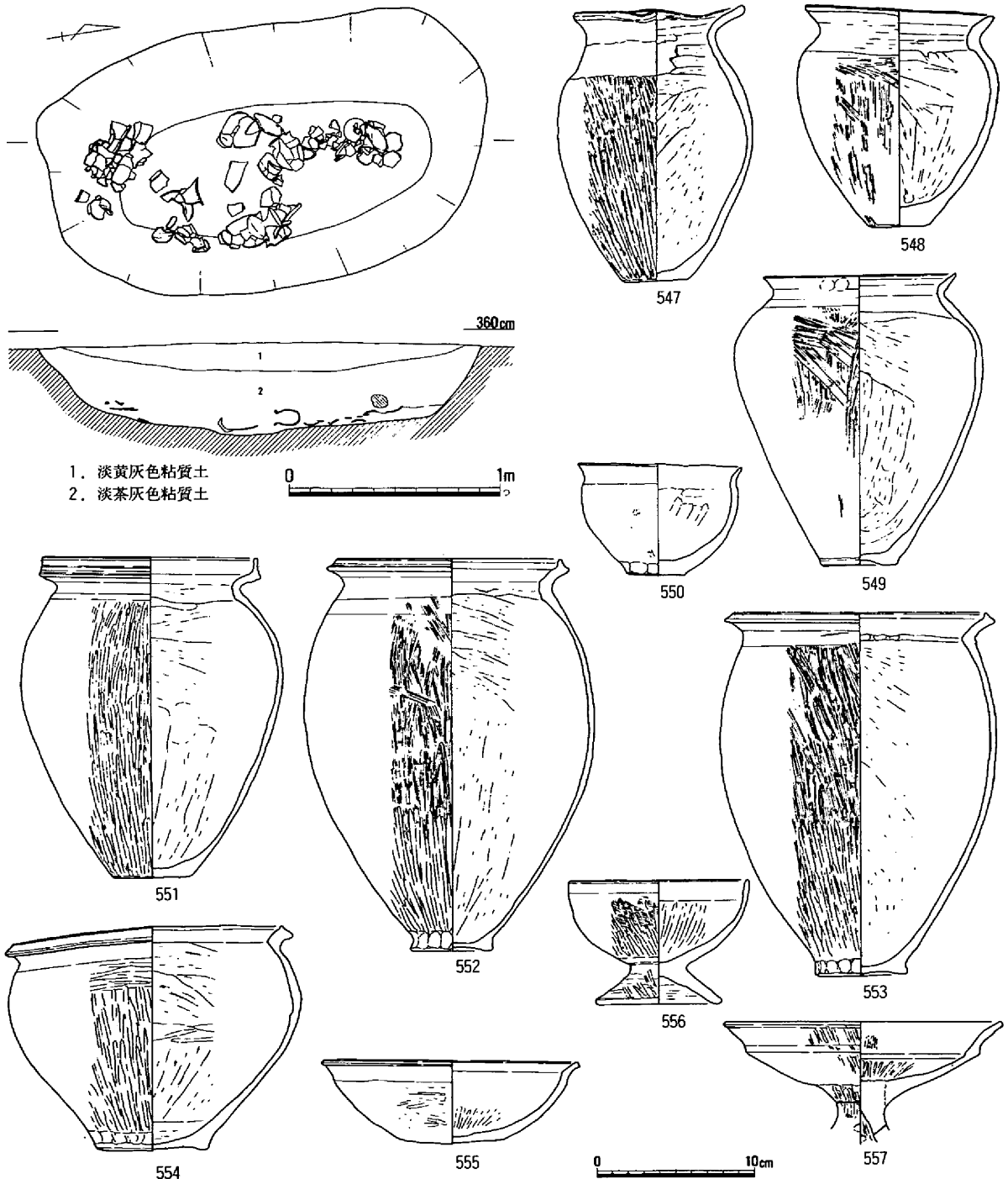
- 1. 暗茶灰色粘質土
- 1'. 暗灰褐色粘質土(炭・焼土粒)
- 2. 黄灰色粘土
- 3. 暗黄褐色粘質土

第102図 土壌27、同出土遺物

りの下の第2層には炭や焼土が含まれていた。第3層には黄灰色粘土の塊を包含していた。出土の土器の年代は百・後・Ⅱである。545の高杯脚部は蓋に再使用されたようで煤が付く。(岡本)

土壙28 (第34・103図、図版16-5. 52)

10B区の中央付近で検出された。平面形は不整形な長楕円形で、長径が210cm、短径は126cm、深さは42cmを測る。底面は中央がわずかに窪んだ平坦面となっていた。壙壁の傾斜は緩やかだった。埋土は2層に分けられたが、第2層には多量の土器片が包含され、とくに底面では完形に近い土器もあり、石の混じった土器溜りを形成していた。土器溜りの下では、炭や灰の集中している所が認められ

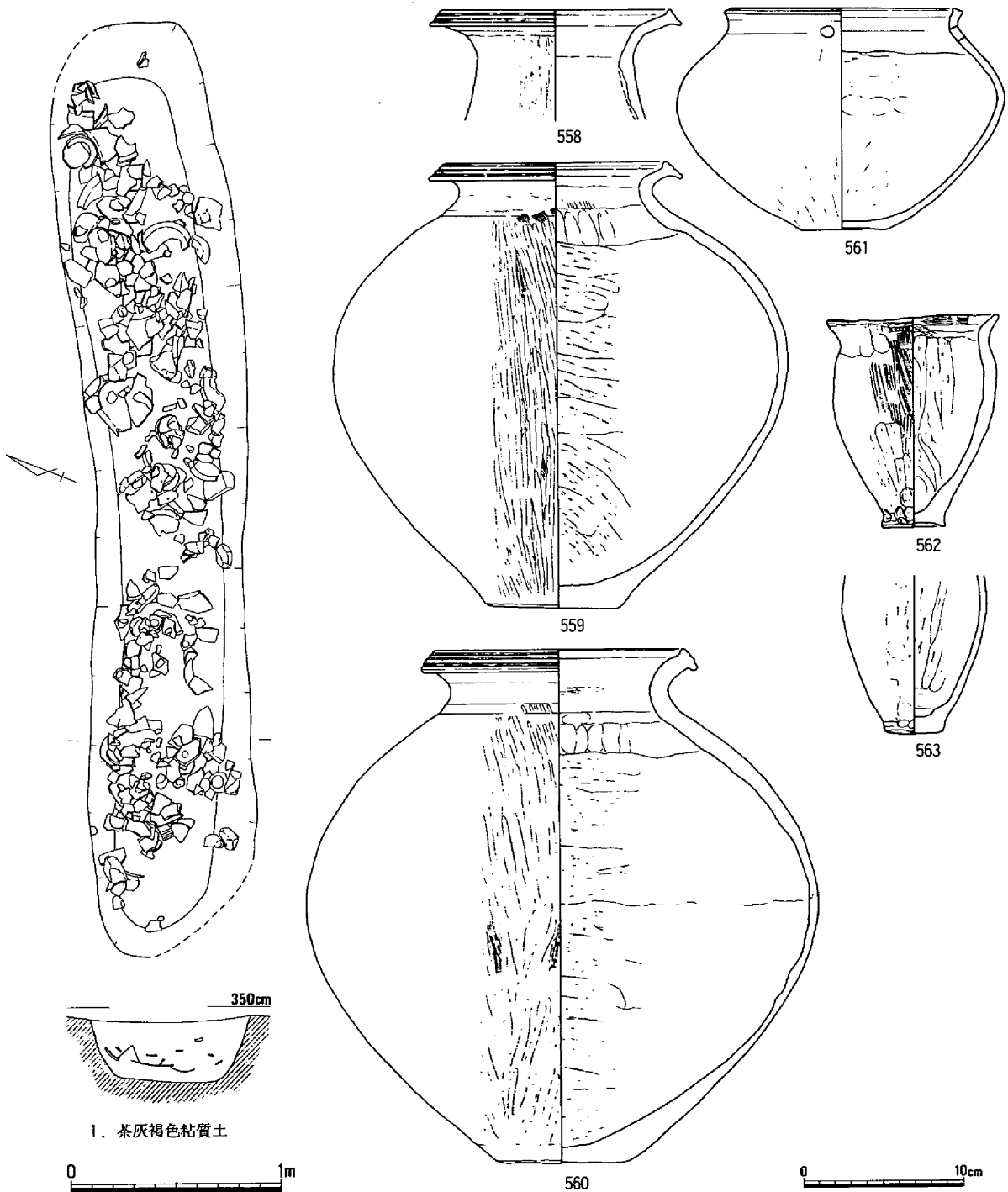


第103図 土壙28、同出土遺物

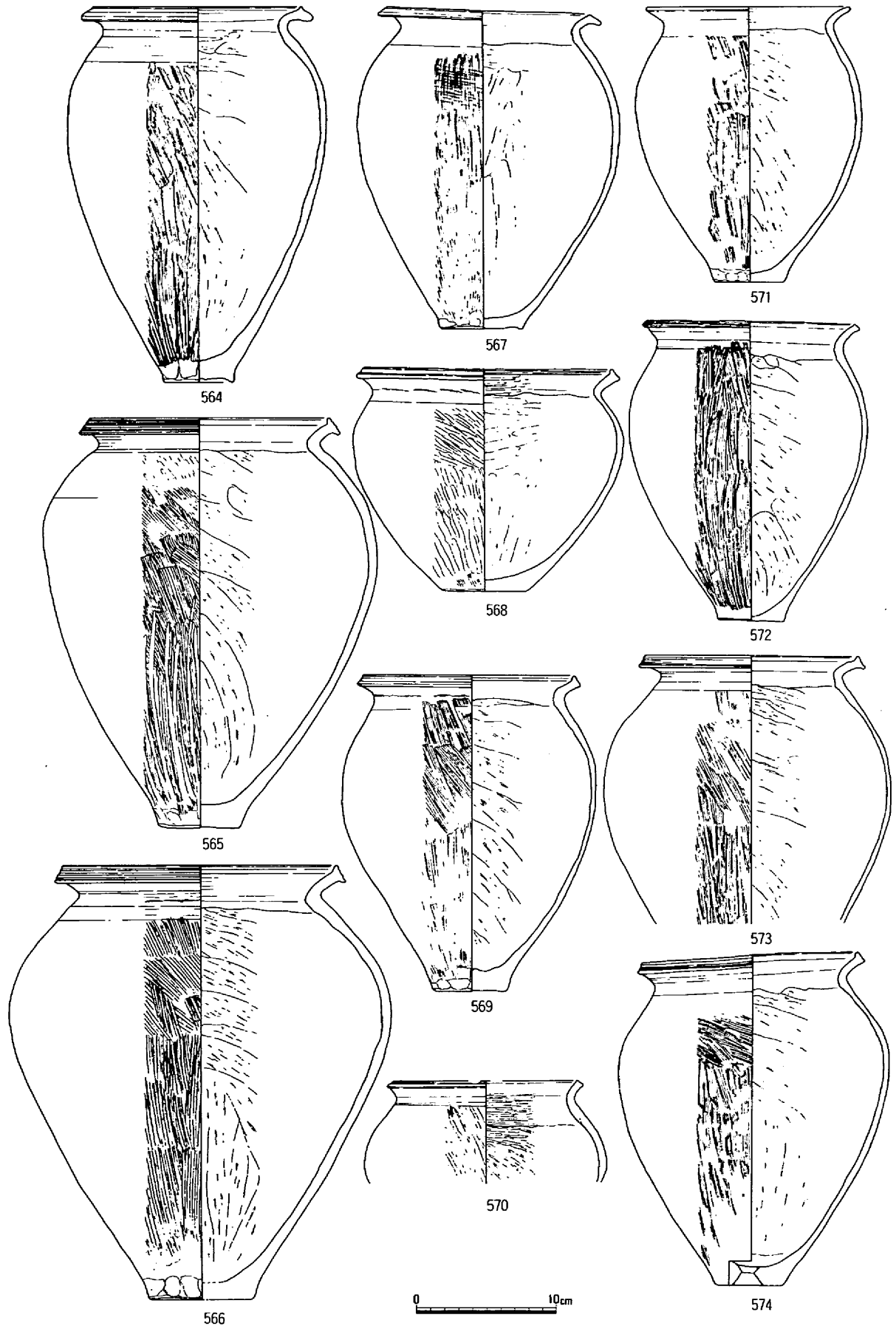
た。出土土器の年代は百・後・Ⅲが主体で、Ⅱを一部含んでいる。長頸壺もあった。 (岡本)

土壙29 (第34・104~106図、図版17-1. 53)

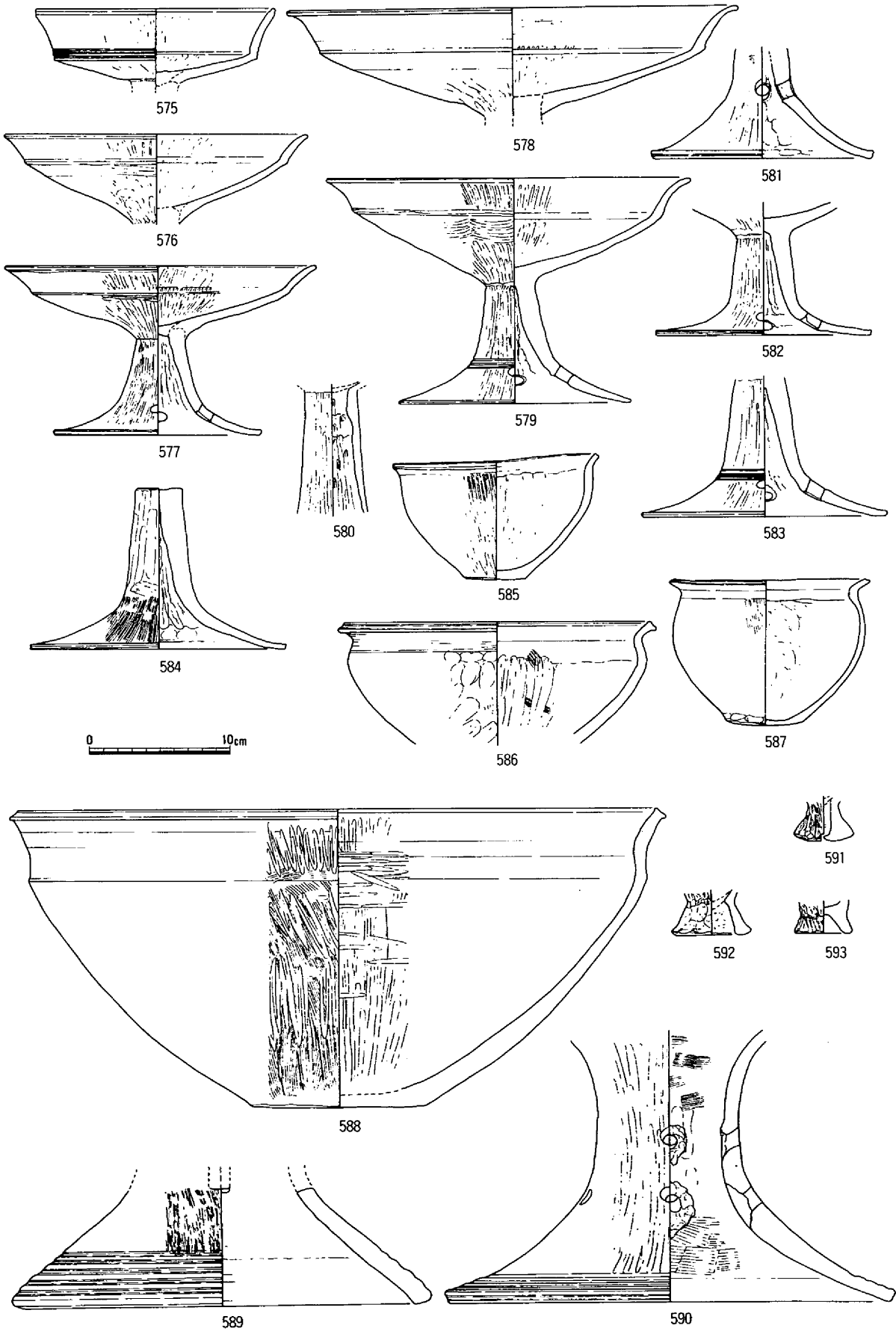
10B区の東半、土壙27のすぐ西に位置している。細長い溝状の土壙で、全長は439cm、幅が69~83cmを測る。底面は平坦で、壙壁の傾斜は急なため、断面形は逆台形状を呈する。底面の幅は48~59cmであった。埋土は茶灰褐色粘質土の1層であったが、層中に炭の薄層を含んでいた。また、多量の土器片を包含し、土器溜りとなっていた。この土器溜りはある面に揃うのではなく、層中全体に散乱している状態であった。このようなあり方は、前述の土壙24~27とは異なっている。



第104図 土壙29、同出土遺物(1)



第105図 土壙29 出土遺物(2)

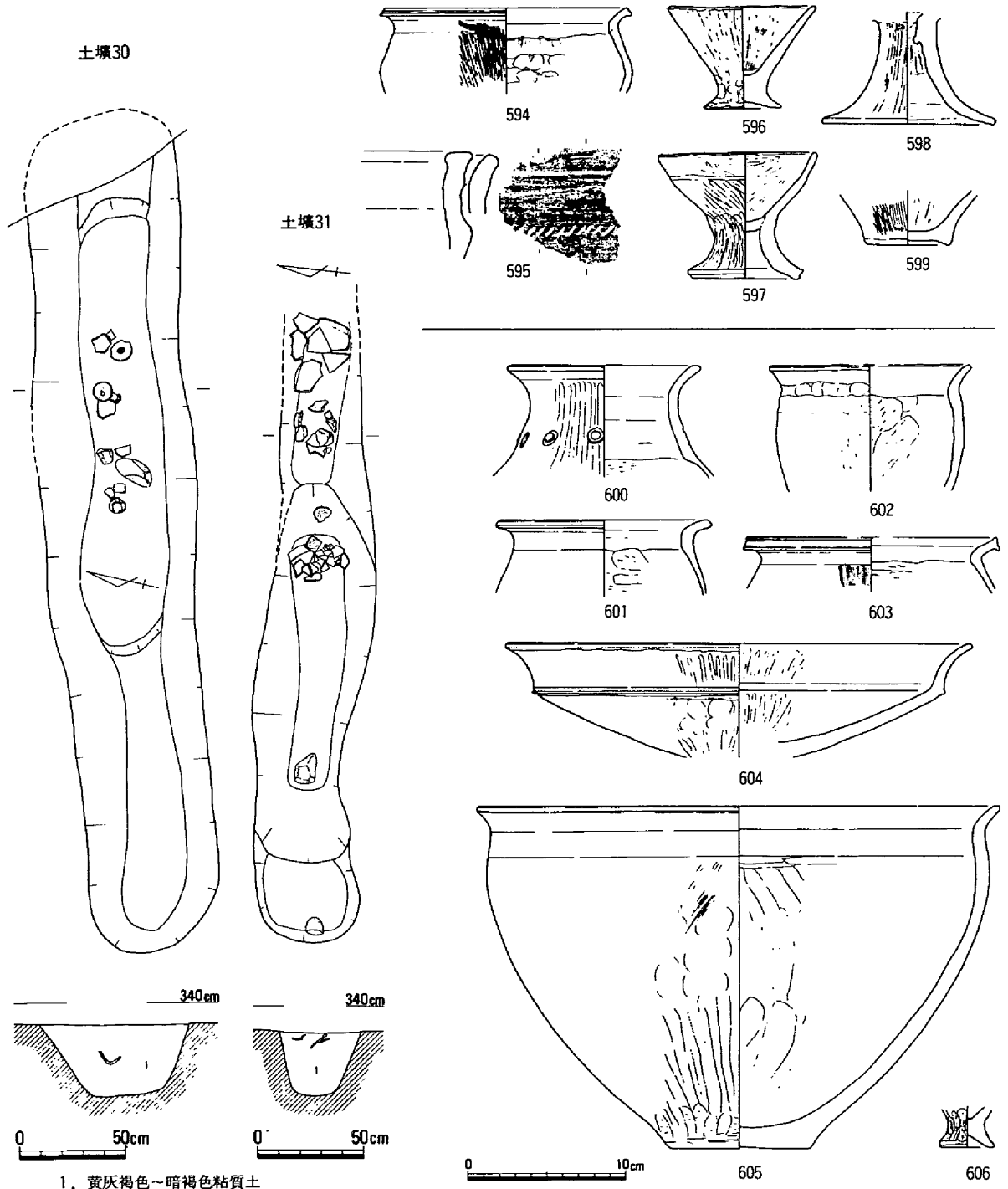


第106図 土壙29 出土遺物(3)

土壙29から出土した土器はさまざまな器種を含み、器形や口縁の形態で類似するものが多く、良好な一括資料である。百・後・Ⅱの古段階と考えられる。584は高杯脚を蓋に転用している。（岡本）

土壙30・31（第34・107図、図版17-2・3）

ともに11C区の調査区北端で検出された。一部は調査区外にある。土壙24や29と同様に溝状の形態をしていた。それぞれの規模は、土壙30が残存長280cm、幅50cm、深さ39cm、土壙31は残存長385cm、幅74cm、深さ35cmを測る。両土壙ともに、底面は中央部が一段落ち込んで、階段状を呈していた。ただ、その段の高さは、土壙30では11cm、土壙31も6cmとわずかであり、土壙24ほどではない。土壙



第107図 土壙30・31、同出土遺物

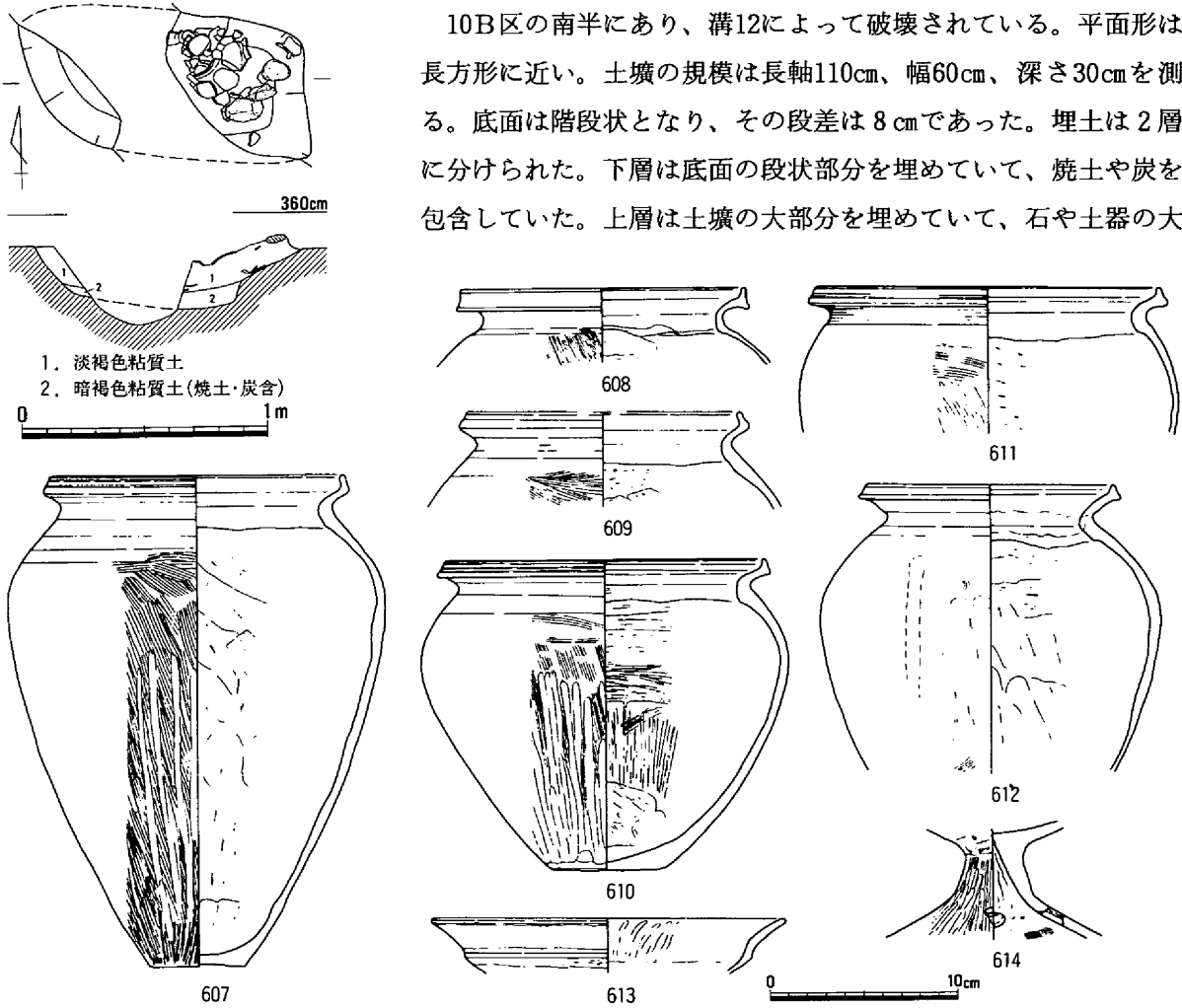


30・31は土器片をいくらか包含していたが、土器溜りと言えるほどではなく、底面からは浮いた状態にあった。この点で、長軸方向の類似する土壙29とはおおきく異なっている。

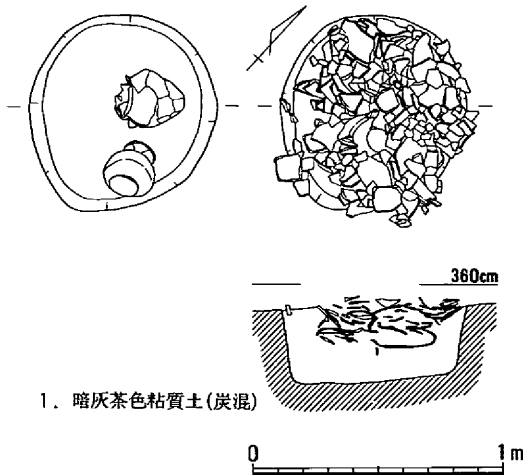
第107図の上が土壙30、下が土壙31出土土器である。ともに百・後・Ⅱと考えられる。（岡本）

土壙32（第34・108図）

10B区の南半にあり、溝12によって破壊されている。平面形は長方形に近い。土壙の規模は長軸110cm、幅60cm、深さ30cmを測る。底面は階段状となり、その段差は8cmであった。埋土は2層に分けられた。下層は底面の段状部分を埋めていて、焼土や炭を包含していた。上層は土壙の大部分を埋めていて、石や土器の大



第108図 土壙32、同出土遺物



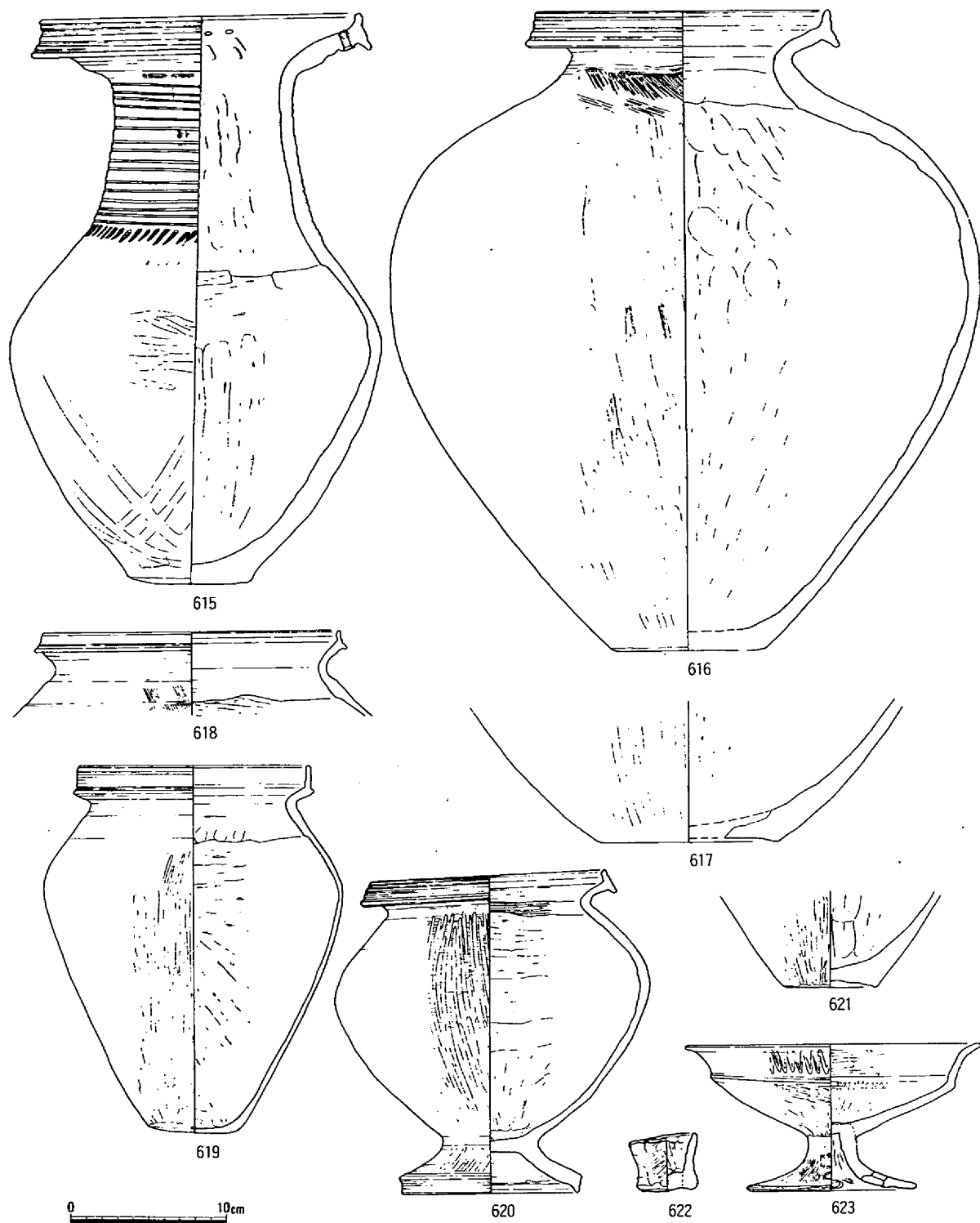
第109図 土壙33

形破片を多く含んでいた。また、焼土片も少量認められた。

出土土器の年代は百・後・Ⅱと考えられるが、Ⅲの段階のものも一部含まれるようである。（岡本）

土壙33（第34・109・110図、図版54）

10B区の中央付近で検出された。平面形は円形に近く、その規模は長径が80cm、短径は72cm、土壙の深さは39cmであった。壙壁の傾斜はきわめて急で、底面はほぼ平坦であったため、断面は箱形をなす。埋土は暗灰茶色粘質土の1層で、炭を混じえていた。土壙の上半部には土器片が大量に投棄されてい



第110図 土壙33 出土遺物

て、その一番下には、完形に近い土器が2点（619・620）出土した。土壙の東部分における土器片のあり方からすれば、土壙は上方へ広がっていたものと考えられる。

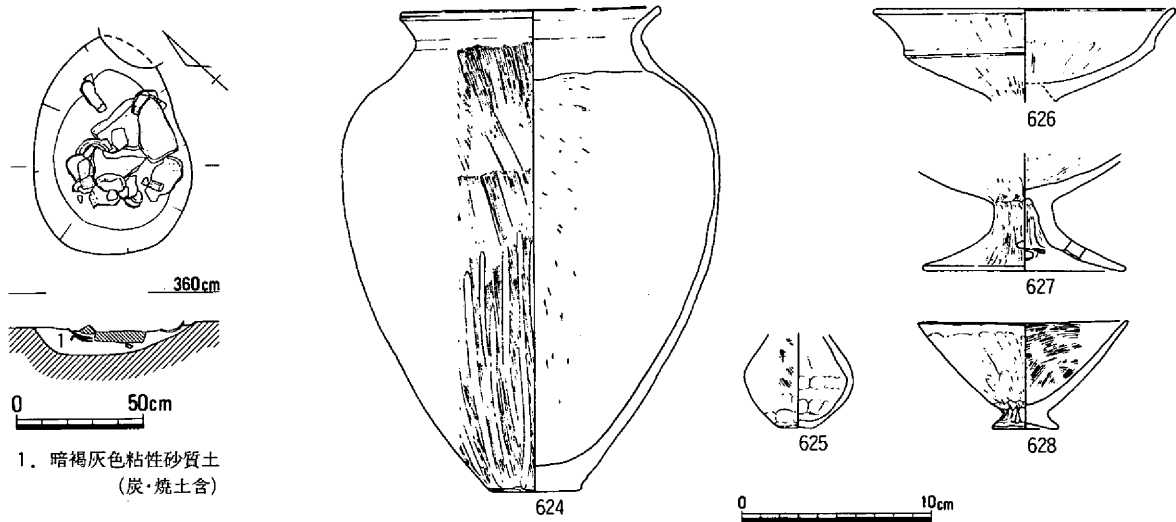
出土土器の年代は百・後・Ⅲである。615の長頸壺には網目の痕跡が明らかである。 （岡本）

土壙34（第34・111図）

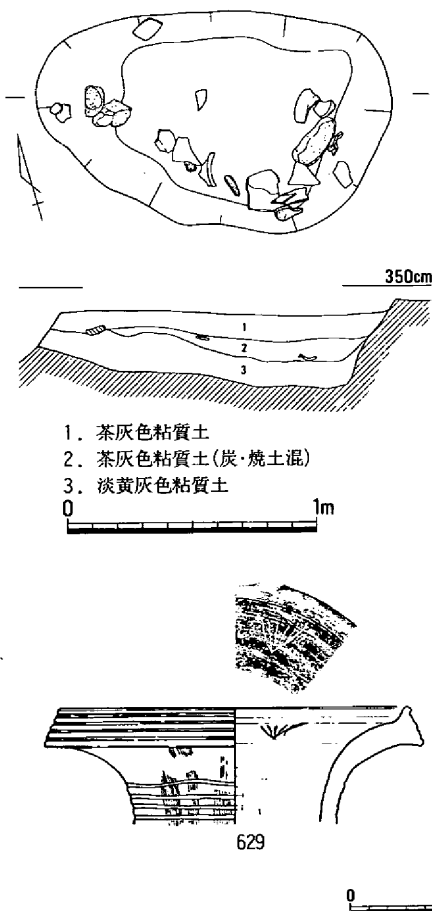
10B区の南半に位置する小形の土壙である。平面形は卵形で、長径が86cm、短径は63cmを測り、深

さは13cmときわめて浅い。墳内からは、長径25cm前後の平石3個を中心にして石や土器片がまとまって出土した。これらの遺物は土壌の底面からは浮いていた。埋土は暗褐灰色粘性砂質土の1層で、炭と焼土が含まれていた。土器片の多くは624のもので、胴部の1/3を欠くにすぎない。

出土土器の点数は少ないが、それらの年代は百・後・Ⅲと考えられる。 (岡本)



第111図 土壌34、同出土遺物



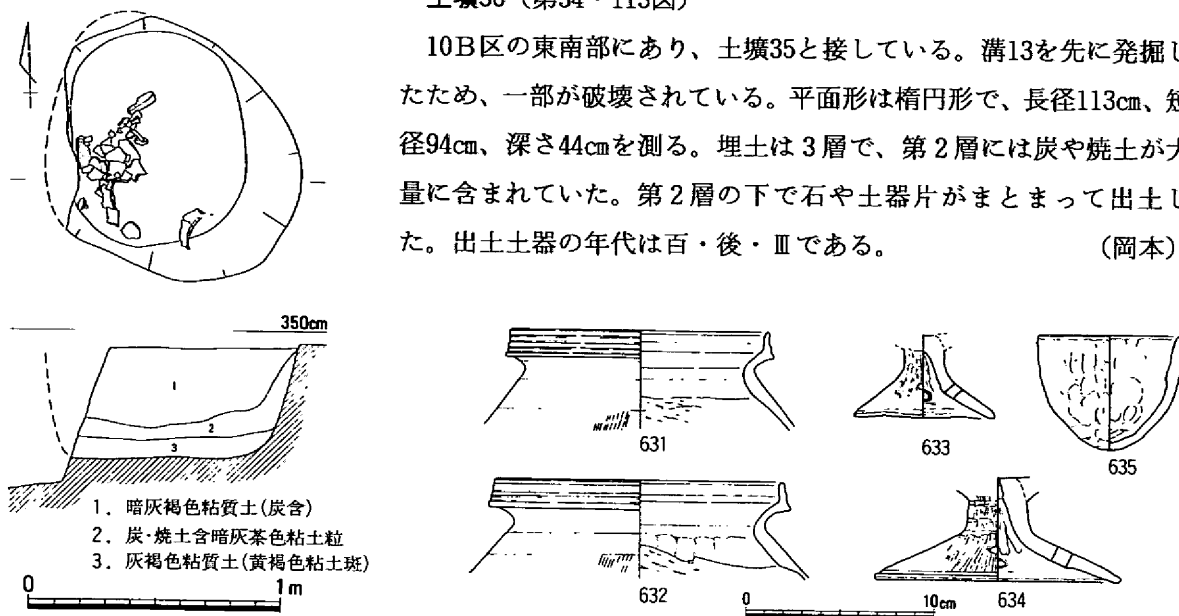
土壌35 (第34・112図)

10B区の東南部で検出された。溝13によって一部を破壊されている。平面形は不整形な楕円形で、長径が142cm、短径は87cmであった。底面はほぼ平坦だったが、わずかな傾斜面になっていた。土壌の深さは最深部で35cmを測る。墳壁は途中で傾斜角度が変わっていた。埋土は3層で、遺物を含んでいた第2層には炭や焼土が含まれていた。第3層には黄色粘土の塊が多く混じっていた。出土土器の年代は百・後・Ⅲである。 (岡本)

第112図 土壌35、同出土遺物

土壌36 (第34・113図)

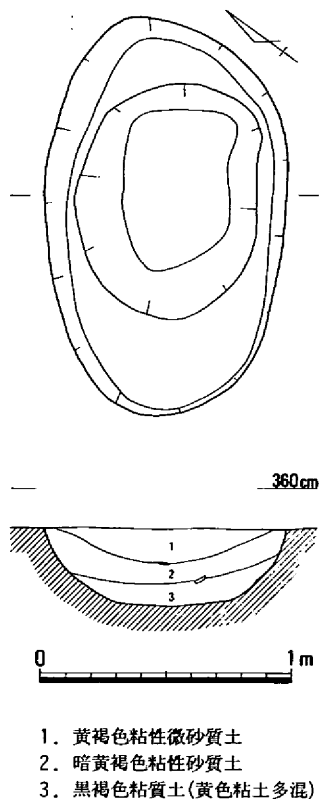
10B区の東南部にあり、土壌35と接している。溝13を先に発掘したため、一部が破壊されている。平面形は楕円形で、長径113cm、短径94cm、深さ44cmを測る。埋土は3層で、第2層には炭や焼土が大量に含まれていた。第2層の下で石や土器片がまとまって出土した。出土土器の年代は百・後・Ⅲである。(岡本)



第113図 土壌36、同出土遺物

土壌37 (第34・114図)

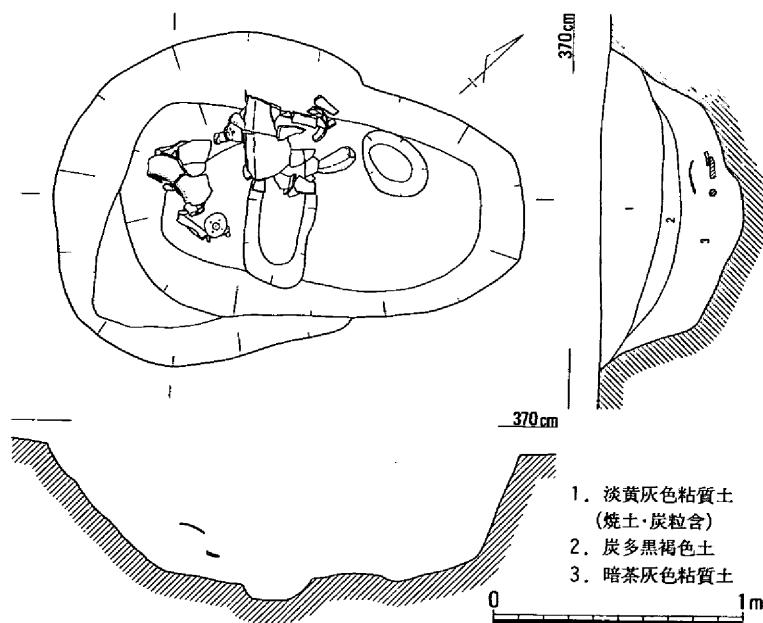
10B区の東半に位置する。前述したように、建物3の柱穴である可能性が高いが、疑問もあり、土壌として述べる。平面形は長楕円形で、長径158cm、短径95cm、深さ32cmを測る。墳壁の途中に段があり、二段になっている。埋土の第3層には黄色粘土塊が多い。土器の年代は百・後・Ⅲ。(岡本)



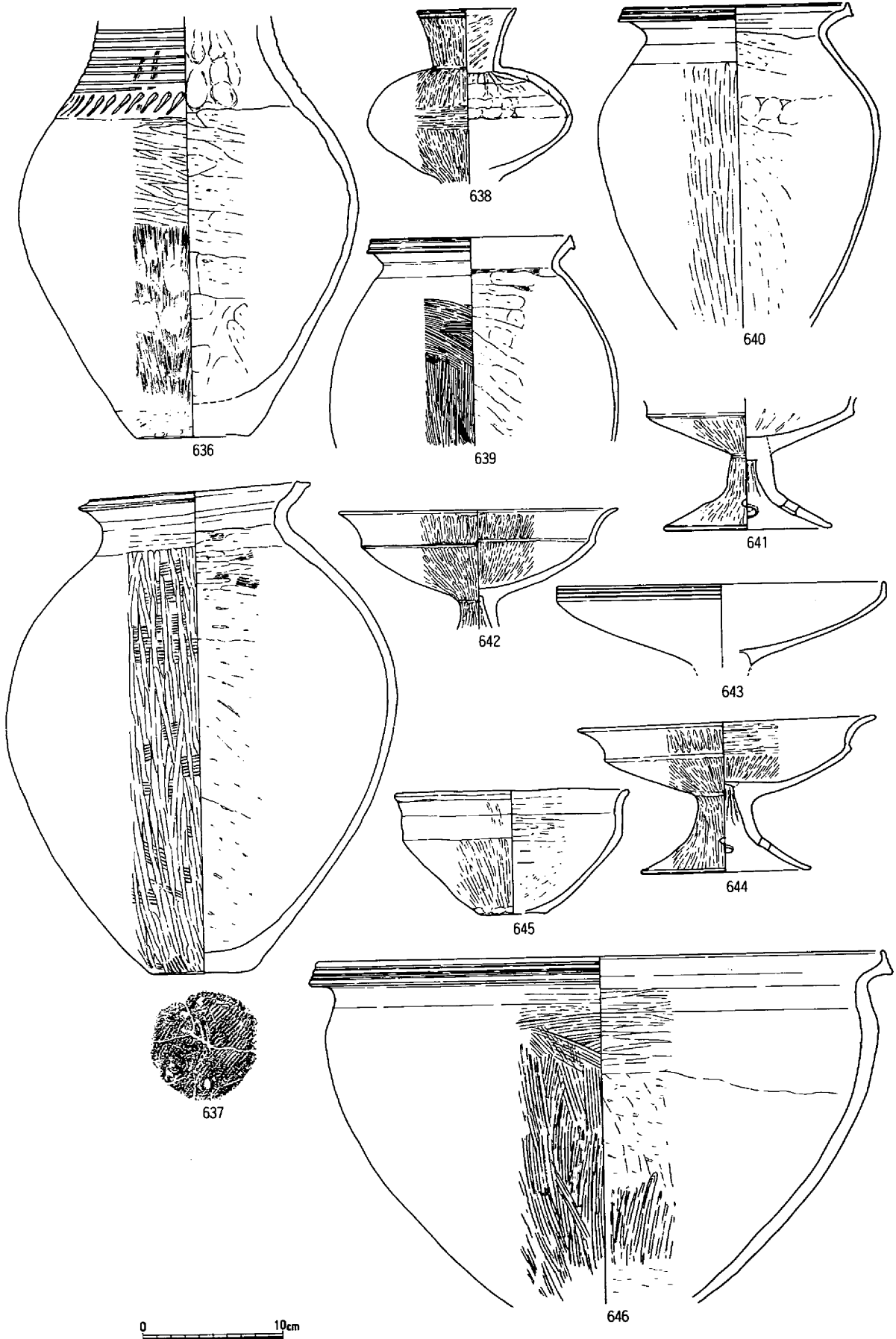
第114図 土壌37

土壌38 (第34・115・116図、図版17-4. 54)

11C区の西半で検出された。検出面が北東部分より南西部分が高いため、不整形な平面形に見えるが、もともとは卵形である。長径が189cm、短径は136cmであった。墳内の形状はやや複雑で、土壌の



第115図 土壌38



第116図 土壙38 出土遺物

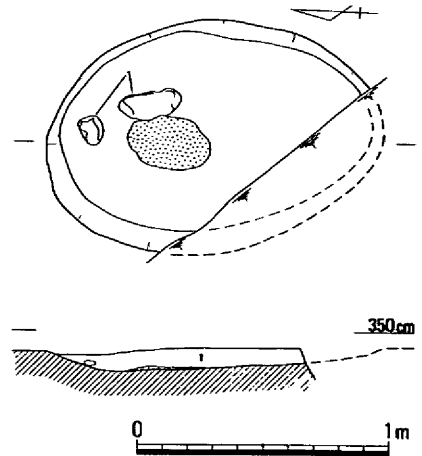
南隅に底面より20cmほど高い段があり、底面の中央には深さ8cmの長楕円形の穴がみられた。また、長径31cm、深さ4cmの穴も底面の端で検出された。土壌の深さは最深部で61cmを測る。埋土は3層に分けられる。第1層には炭粒と焼土が含まれ、第2層は炭層となっている。第3層には、石や大形の土器片が床面より浮いた状態で包含されていた。出土土器の年代は百・後・ⅢとⅣである。(岡本)

土壌39 (第34・117図)

10B区の北西部にあり、土壌27の60cm東に位置する。平面形は楕円形で、長径は推定で134cm、幅は93cm、深さが10cmを測る。墳底に焼土面があり、大きな焼土塊も出土した。埋土は1層で、少量の炭と焼土を含んでいた。このことからすれば、炉のような施設である可能性が高い。出土した土器片は20数片で、製塩土器の脚部が多かった。土器の年代は百・後・Ⅱであろうか。(岡本)

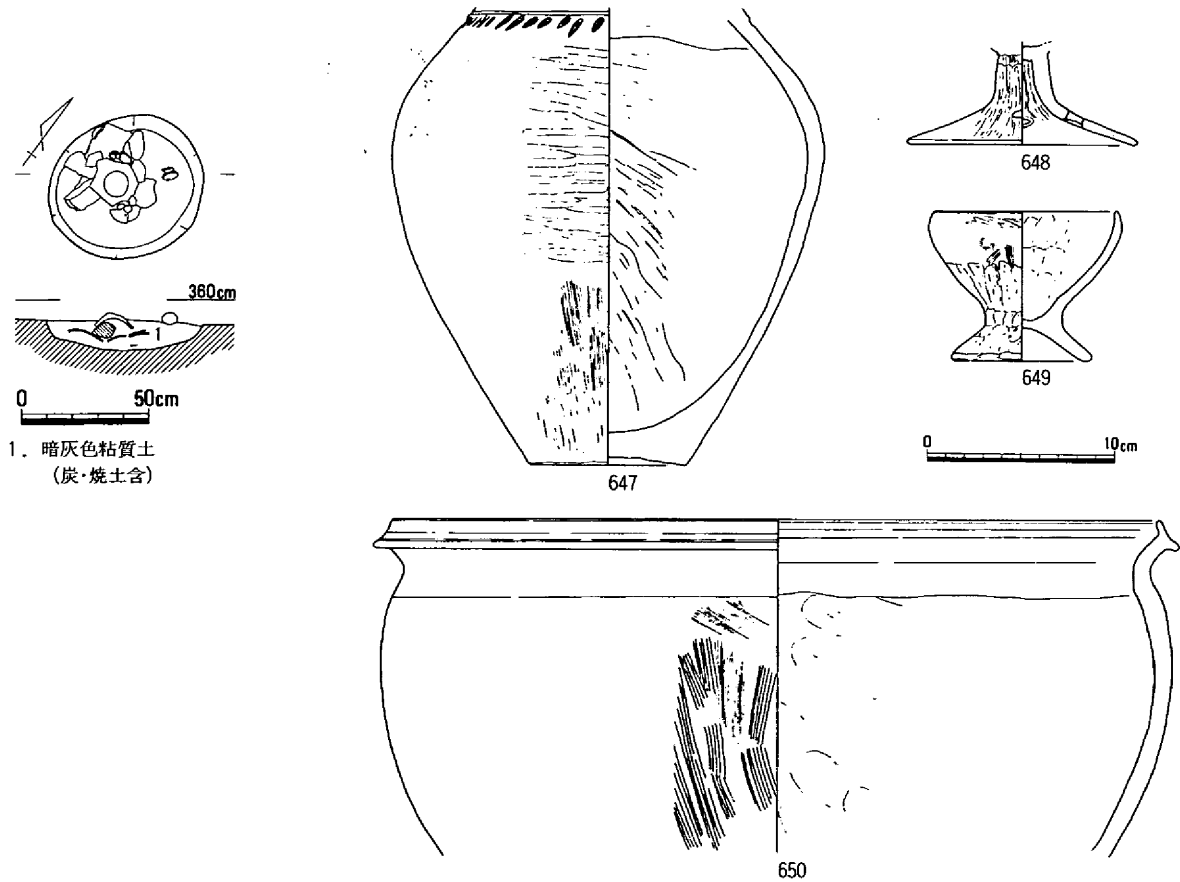
土壌40 (第34・118図)

10B区の南端にあり、建物5の柱穴を破壊している。平面形は円形に近く、長径62cm、短径55cm、深さ12cmを測る。底面はわずかに窪んだ凹面となっていた。埋土は暗灰色粘質土で炭と焼土が含まれていた。墳内からは石と土器片がまとまって出土した。土器の年代は百・後・Ⅲである。(岡本)



1. 暗褐色微砂質土(炭・焼土粒少量含)

第117図 土壌39

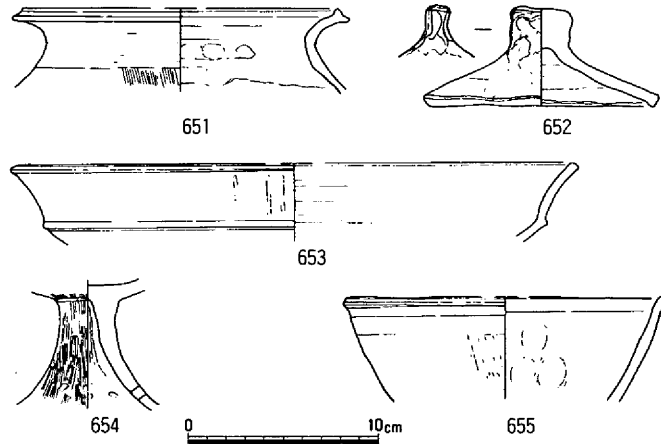
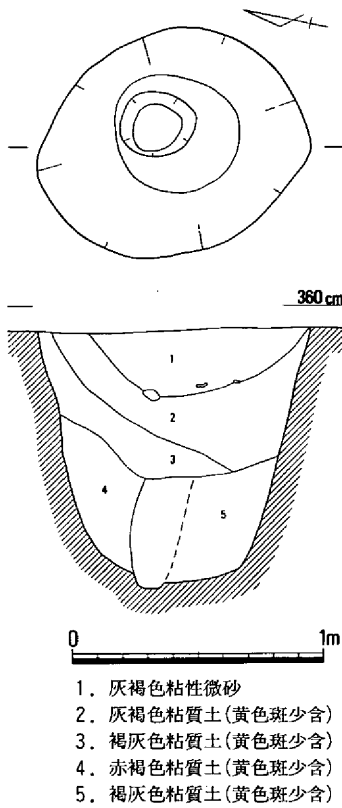


1. 暗灰色粘質土  
(炭・焼土含)

第118図 土壌40、同出土遺物

土壌41 (第34・119図)

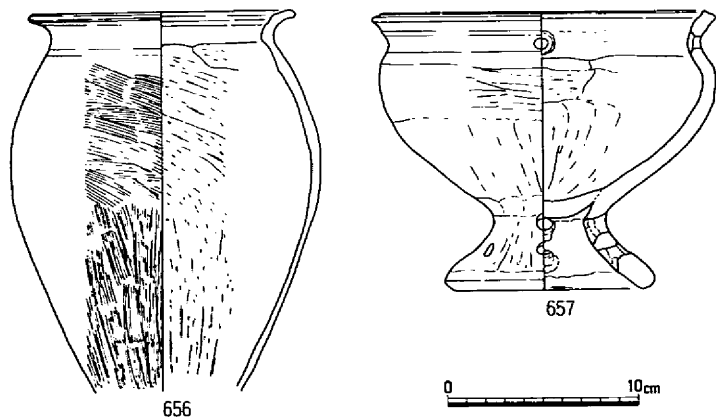
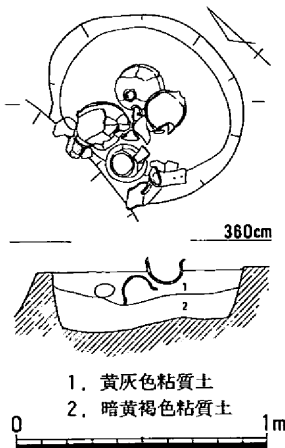
10B区の南東部にあり、前述したように建物5の柱穴である。平面形は楕円形で、長径が109cm、短径は88cmであった。墳壁は急傾斜で、底面はわずかな凹面となっていた。底面には長径30cmの柱のめり込んだ穴が確認された。柱穴の深さは最深で104cmを測る。埋土の下半で柱痕を確認した。出土土器の年代は百・後・Ⅱと考えられ、建物5の年代より古い。(岡本)



第119図 土壌41、同出土遺物

土壌42 (第34・120図、図版54)

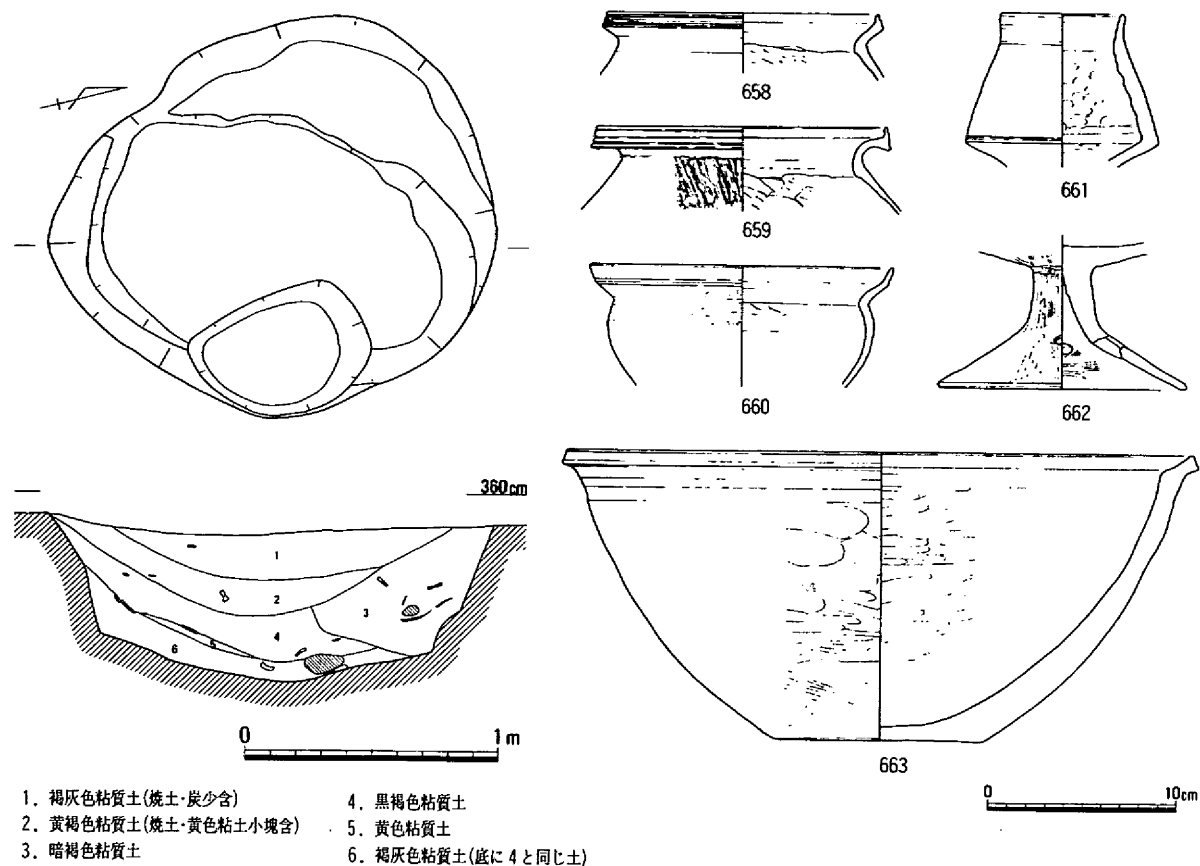
10B区の南東部、土壌41のすぐ南に位置していた。一部を隣接する柱穴によって破壊されている。平面形は円形に近く、長径が82cm、深さは25cmを測る。墳壁の傾斜は急で、底面はほぼ平坦であった。埋土は水平に2層の堆積がみられ、上層に完形に近い大形の土器片が集中して出土した。ガラス滓も認められたが、炭や焼土はなかった。出土土器の年代は百・後・Ⅱと考えられる。(岡本)



第120図 土壌42、同出土遺物

土壌43 (第34・121図、図版18-1)

10B区の東南隅、土壌42の10cm南にあった。平面形は不整形な楕円形で、長径が175cm、短径は

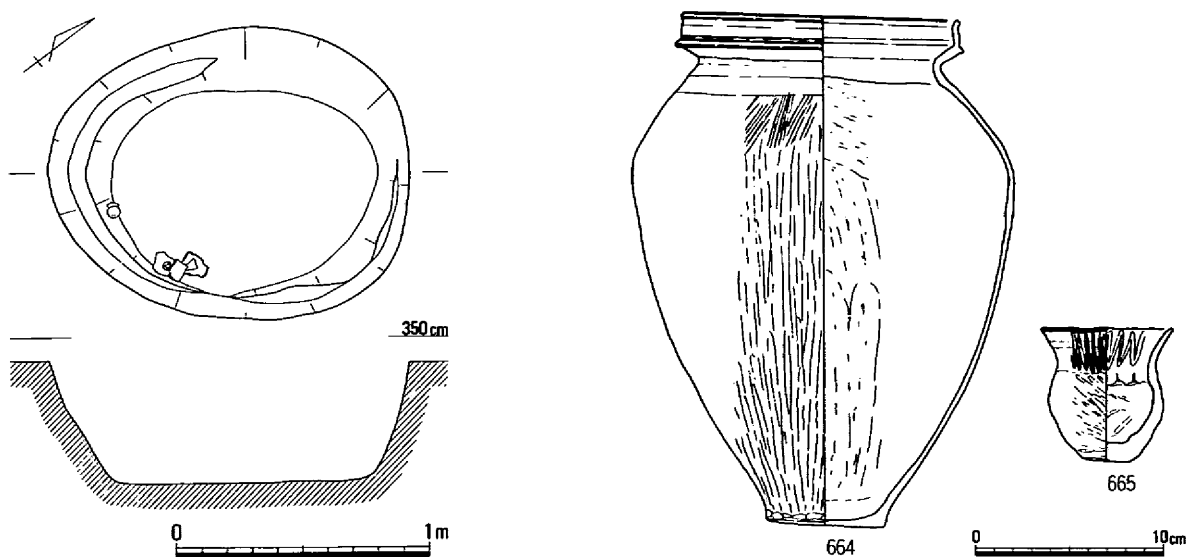


第121図 土壙43、同出土遺物

162cmであった。壙内は階段状になり、西端に深さ25cm前後で最大幅38cmの平坦面があり、そこから29~46cm下がって底面に至る。さらに、底面の東端で長径72cmの楕円形の穴が深さ4cmで確認された。埋土は第1・2層の上層とそれ以下の下層に二分される。上層には焼土が含まれていた。第3層には土器片が多く、第4層では灰層の薄層が認められた。土器の年代は百・後・Ⅱである。(岡本)

土壙44 (第34・122図、図版18-2・54)

10B区と11B区の境界南端に位置する。平面形は楕円形で、長径が285cm、短径は232cm、深さ49cm



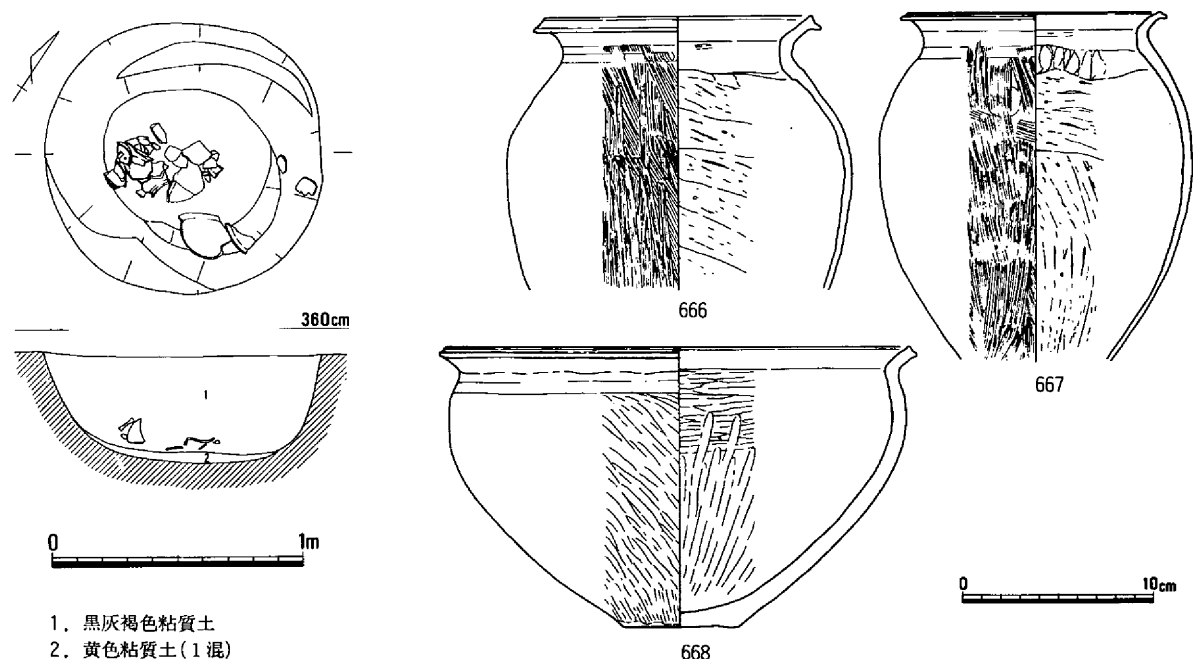
第122図 土壙44、同出土遺物



を測る。底面は広い平坦面となり、長径で210cmであった。この土坑の特徴は、坑壁の途中に段をもつことである。坑壁の傾斜は急であるが、深さ20cm付近で一度傾斜が緩くなり、再び急に落ちる。ただ、平坦面と呼べるほどの面は認められない。出土土器の年代は百・後・Ⅲとみられる。（岡本）

土坑45（第34・123図、図版18—3・55）

10B区と11C区の境界で検出された。土坑43のすぐ西に位置する。平面形は円形に近く、直径113cm、深さ40cmを測る。底面はわずかに窪んだ凹面となっていた。坑壁は急傾斜であったが、北と南では壁の途中に傾斜の変換点があり、北では最大幅9cmの三日月形の緩斜面となっていた。埋土は2層に分けられたが、第2層はごく薄い。第1層には炭や焼土が点々と含まれていた。第1層の底と一部坑壁に接して大形の土器片が出土した。出土した土器の年代は百・後・Ⅱである。（岡本）

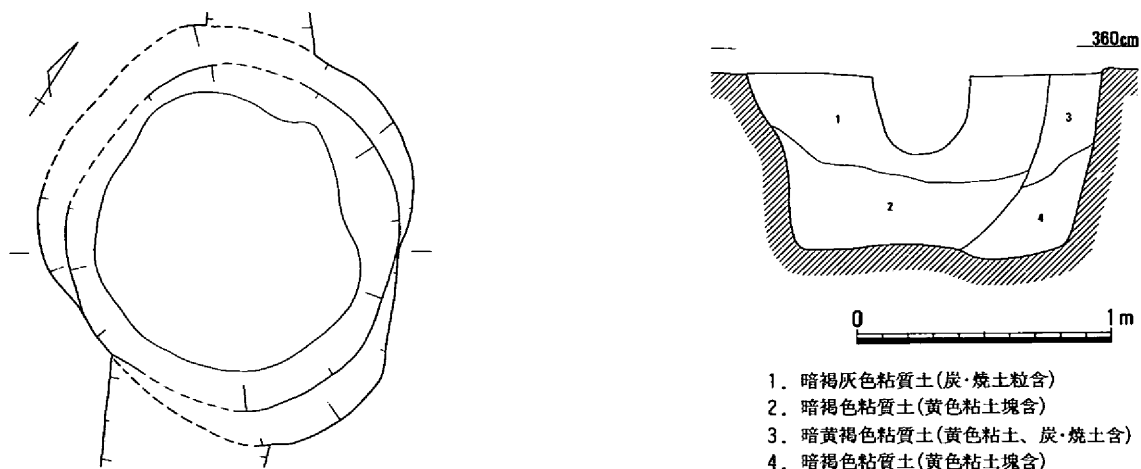


1. 黒灰褐色粘質土
2. 黄色粘質土(1混)

第123図 土坑45、同出土遺物

土坑46（第34・124図）

11B区の西端に位置する。溝13と柱穴によって上部を一部破壊されていた。埋土の断面観察から考



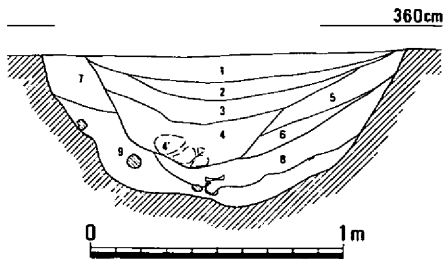
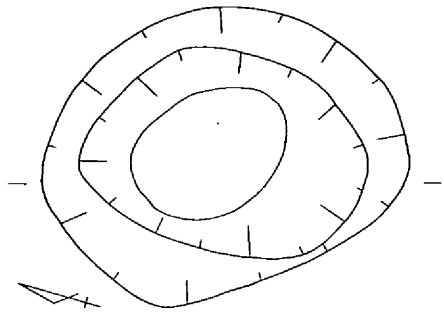
1. 暗褐色粘質土(炭・焼土粒含)
2. 暗褐色粘質土(黄色粘土塊含)
3. 暗黄褐色粘質土(黄色粘土、炭・焼土含)
4. 暗褐色粘質土(黄色粘土塊含)

第124図 土坑46

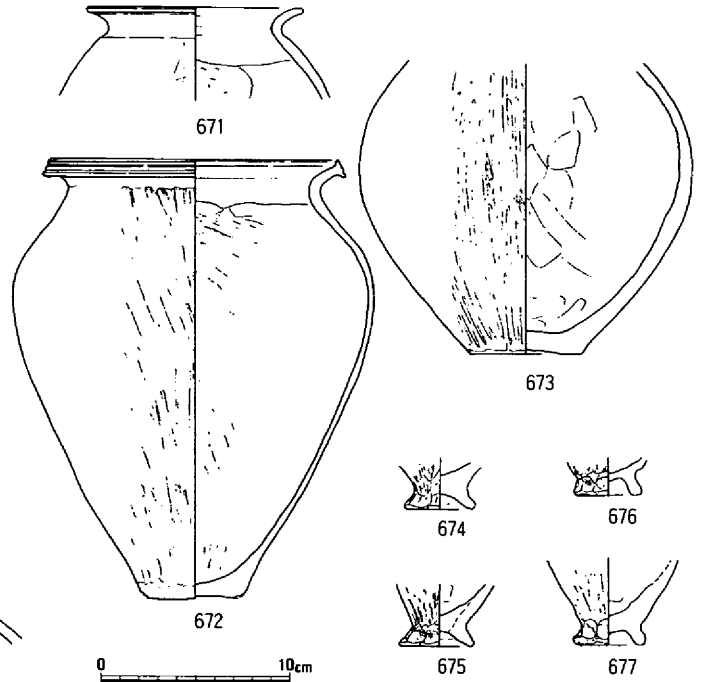
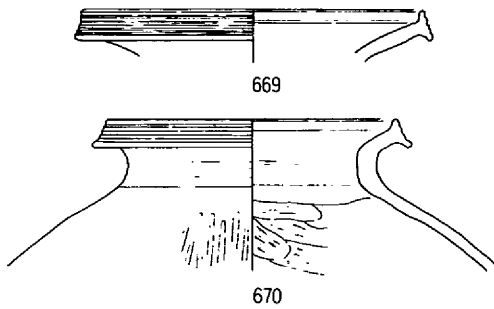
えれば、2基の土壇の重複したものである可能性がある。平面形は楕円形で、長径169cm、短径152cm、深さ37cmを測る。壇壁の途中に傾斜変換点をもっていた。埋土の第1層と第3層には炭と焼土が含まれていた。出土した土器の年代は百・後・Ⅱと考えられる。 (岡本)

土壇47 (第34・125図)

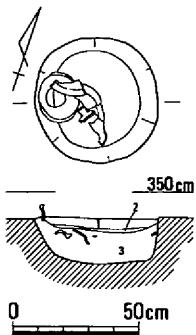
10B区と11B区の境界に位置し、土壇46から南西に1m離れていた。平面形は不整形な楕円形で、長径が145cm、短径は112cm、深さ62cmを測る。壇壁の傾斜は急で、途中に傾斜変換点をもっていた。底面は少し凹凸があった。埋土を観察すると、第1層から第4層までと、第5層以下との間には断絶があり、掘り直されたか、重複して別の土壇の掘られた可能性が高い。第5層と第8層には炭が多く含まれ、また、層の底に土器片がみられた。土器の年代は百・後・Ⅱである。 (岡本)



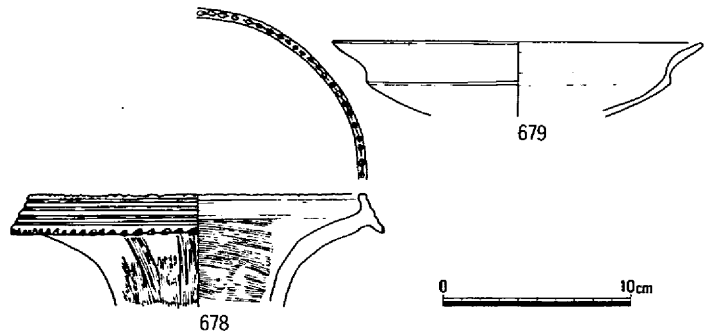
- 1. 明褐色弱粘質土
- 2. 灰褐色弱粘質土
- 3. 褐色粘質土
- 4. 灰褐色粘質土(粘土塊)
- 5. 3と同(炭下層に多し)
- 6. 暗黄褐色粘質土
- 7. 暗灰褐色粘質土
- 8. 黒褐灰色粘質土
- 9. 3と同じ



第125図 土壇47、同出土遺物



- 1. 暗褐灰色微砂質土
- 2. 灰色微砂
- 3. 暗褐灰色粘性砂質土



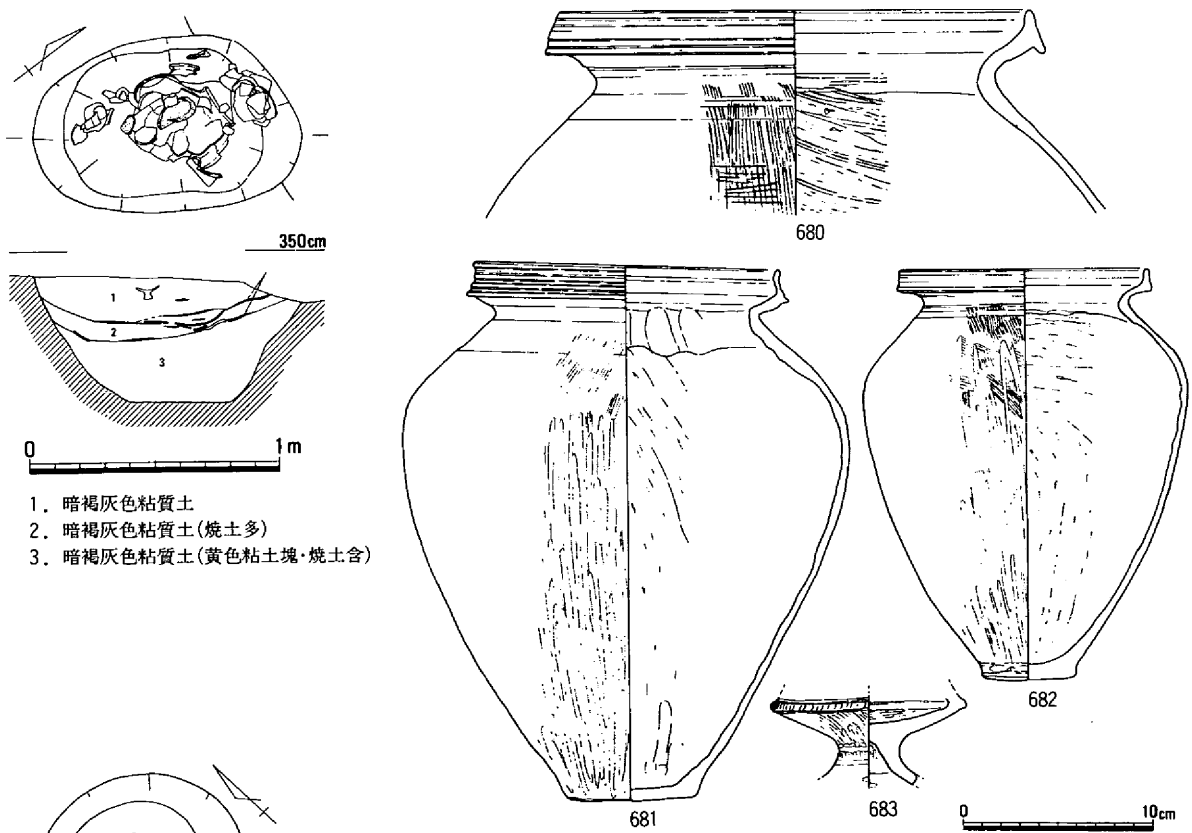
第126図 土壇48、同出土遺物

土壙48 (第34・126図)

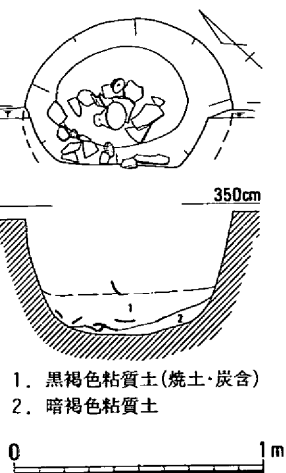
10C区の北東端で検出された。平面形はほぼ円形で、長径が51cm、短径は48cm、深さ23cmを測る。壙壁は急傾斜で、底面はほぼ平坦であった。埋土は3層だが、大きくは、第1・2層の上層と第3層の下層に分けられる。平面図にある大形土器片は、土壙の検出面より上方から見つかり、上層に包含されている。図示した土器がそれで、年代は百・後・Ⅱと考えられる。(岡本)

土壙49 (第34・127図)

10C区の北半に位置する。平面形は楕円形で、長径が106cm、短径は69cm、深さ50cmを測る。壙壁は深さ25cmあたりに傾斜の変換点があり、そこから下はさらに急傾斜となる。埋土は3層に分けられた。第1層と第2層の底には薄い炭の層が認められた。第2層には焼土が多く含まれ、第3層でも少量の焼土の包含があった。土器の大形破片は第2層に集中して出土し、一部、第1層からも出土をみた。出土した土器の年代は百・後・Ⅲと考えられるが、新段階のものがある。(岡本)



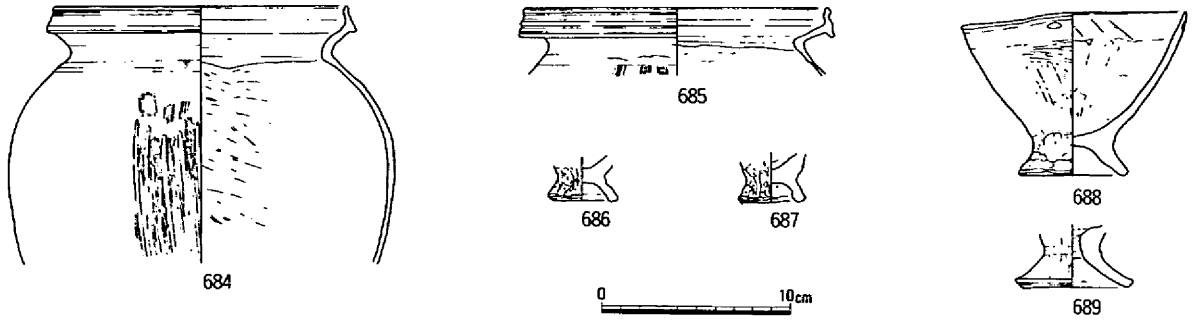
第127図 土壙49、同出土遺物



第128図 土壙50

土壙50 (第34・128・129図)

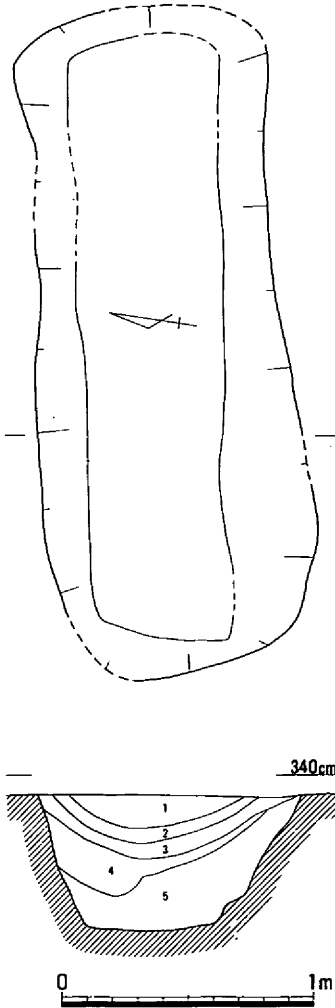
10C区の北半、調査区の南端で検出された。一部は調査区の側溝で破壊されていた。平面形は楕円形で、直径が83cm、深さは48cmを測る。壙壁は急傾斜で、底面はかすかな凹面となっていた。埋土は下半分のみの断面であるが、第1層には炭や焼土が含まれていた。この第1層の底からは小石や土器片が集中して出土した。出土した土器の年代は百・後・Ⅲと考えられる。(岡本)



第129図 土壌50 出土遺物

土壌51 (第34・130図)

10C区の北半に位置している。平面形は長方形に近く、長軸が266cm、短軸は106cm、深さ54cmを測る。塙壁は急傾斜で、底面はほぼ平坦である。このため土壌全体は箱形を呈する。埋土は5層に分けられる。ある時間幅での埋没が考えられる。建物5の柱穴に切られている。(岡本)

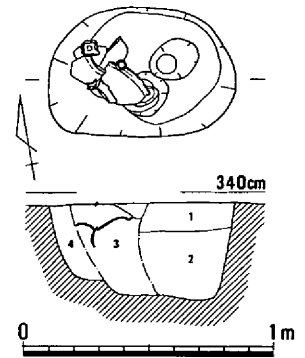


1. 黒褐色粘質土(焼土・炭片含)
2. 黒褐色粘質土(黄色土斑混)
3. 黒褐色粘質土(炭多量)
4. 暗灰褐色粘質土(黄色土斑混)
5. 暗灰褐色粘質土(黄色土斑少)

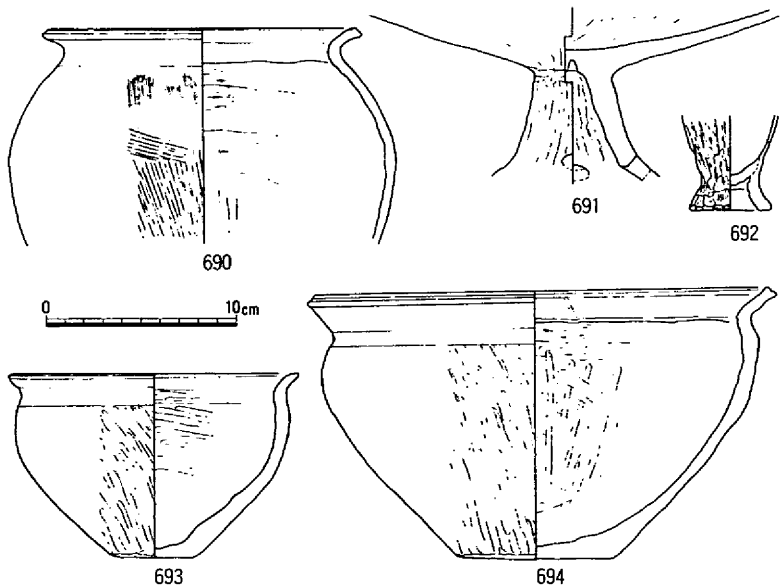
第130図 土壌51

土壌52 (第34・131図)

11B区の南端で検出された。平面形は楕円形で、長径74cm、短径51cm、深さ39cmを測る。底面は平坦であるが、長径が20cm程度の穴が2個あり、これを柱のめり込んだ跡と考えると、この土壌は柱穴ということになる。埋土を観察すると、第3層に土器片の集中が認められ、これが柱の抜き取り痕とみられる。第3層の上部には焼土が多



1. 暗褐色粘質土
- 2・3・4. 暗灰褐色粘質土  
(3は抜痕か)

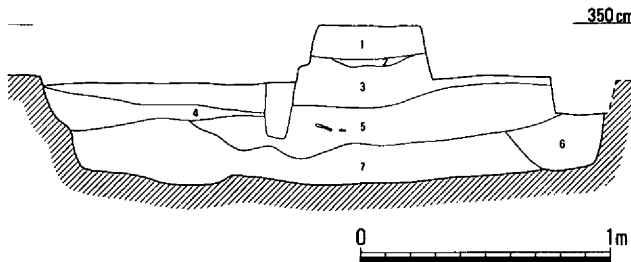
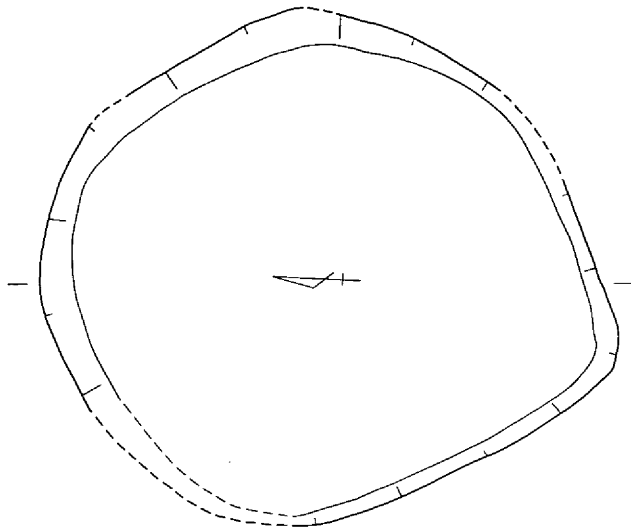


第131図 土壌52、同出土遺物

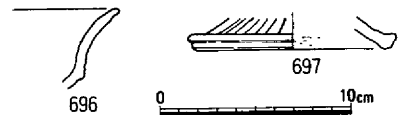
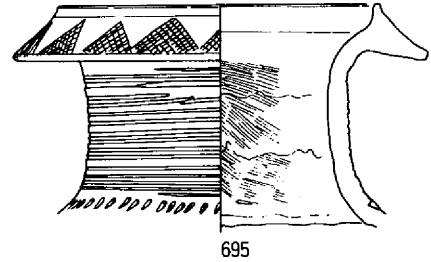
かった。焼土は第1層でも少量含まれていた。土器の年代は百・後・Ⅱである。 (岡本)

土壙53 (第34・132図、図版18-4.55)

11B区と11C区の境界、調査区の東端で検出された。平面形は隅丸の方形に近い。対角線の方向で長径230cm、方形の長軸として195cmを測る。深さは43cmであった。底面は広く、いくらか凹凸があった。埋土は7層に分けられたが、第4層以下はよく類似している。一時の埋没かもしれない。第1層から第3層までは焼土を含んでいて、第2層では炭も認められた。出土した土器の年代は百・後・Ⅱの古段階である。 (岡本)



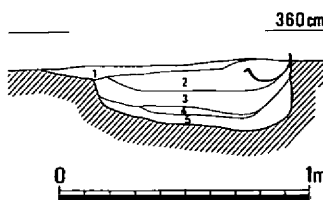
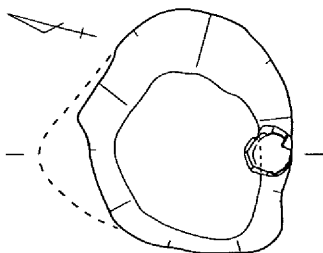
- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| 1. 褐色粘質土(黄色土斑多含)   | 5. 暗褐色粘質土(黄斑多) |
| 2. 黒褐色粘質土(炭・焼土片)   | 6. 暗褐色粘質土(黄斑少) |
| 3. 褐灰色粘質土(黄斑・焼土片少) | 7. 暗褐色粘質土(黄斑多) |
| 4. 褐色粘質土(黄斑多)      |                |



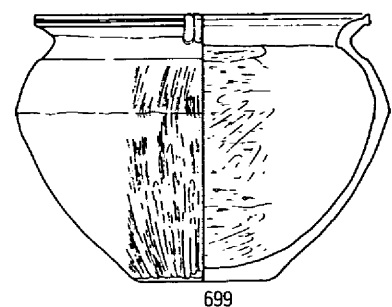
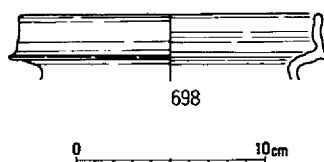
第132図 土壙53、同出土遺物

土壙54 (第37・133図)

17D区の東半、調査区の南端で検出された。竪穴住居9の外周溝2を破壊している。平面形は楕円形で、長径93cm、短径85cm、深さ30cmを測る。塙壁は垂直に近く、底面は傾斜した平面であった。埋土は4層に分けられた。最上層の第2層には多量の炭粒や焼土塊が含まれ、炭層と呼べるほどであった。第1層は他の遺構



- |  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 灰黄褐色(10YR6/2)粘質微砂                   | 3. 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土 |
| 2. 灰黄褐色(10YR5/2)微砂粘土<br>(炭・焼土粒極多・上部炭層) | 4. 灰白色(5Y8/2)粘土    |
|  | 5. 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土 |



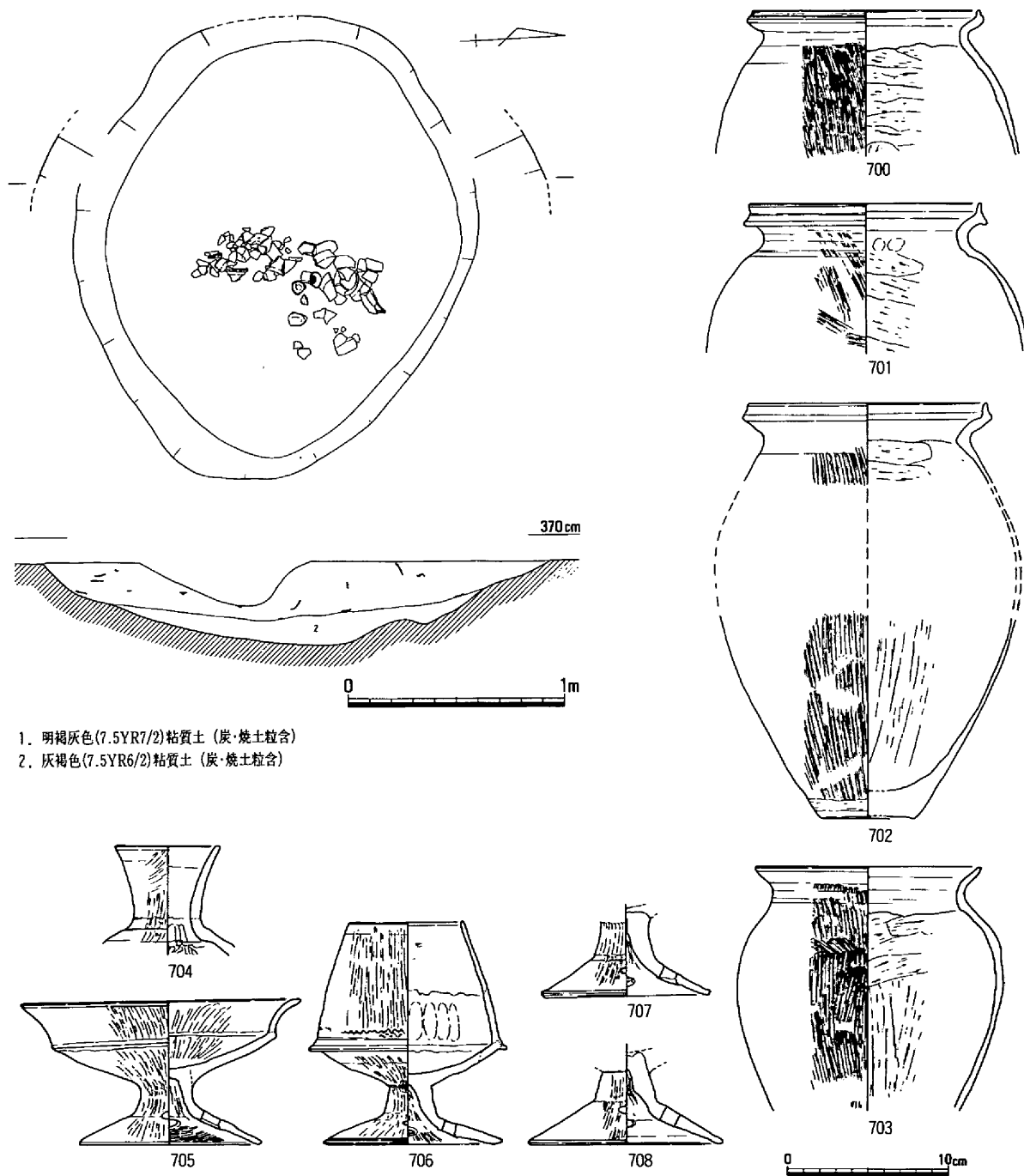
第133図 土壙54、同出土遺物

に伴う可能性が高いと考えられる。出土した土器の年代は百・後・Ⅲである。

(岡本)

土壌55 (第37・134図、図版19-1)

17D区にあり、土壌54の北東3mに位置していた。平面形は楕円形で、長径が216cm、短径は186cm、深さ39cmを測る。土壌の中央に残っていた土層観察用の土手の断面から考えて、土壌の検出面が弥生時代後期のそれより20cmほど低かったため、もとは長径が270cm前後あったものと思われる。壙壁の傾斜は緩く、底面との境は明瞭ではない。底面は窪んで凹凸がある。埋土は2層に分けられ、第1層の下部から第2層の上面付近に土器が集中していた。土器の年代は百・後・Ⅲである。(岡本)

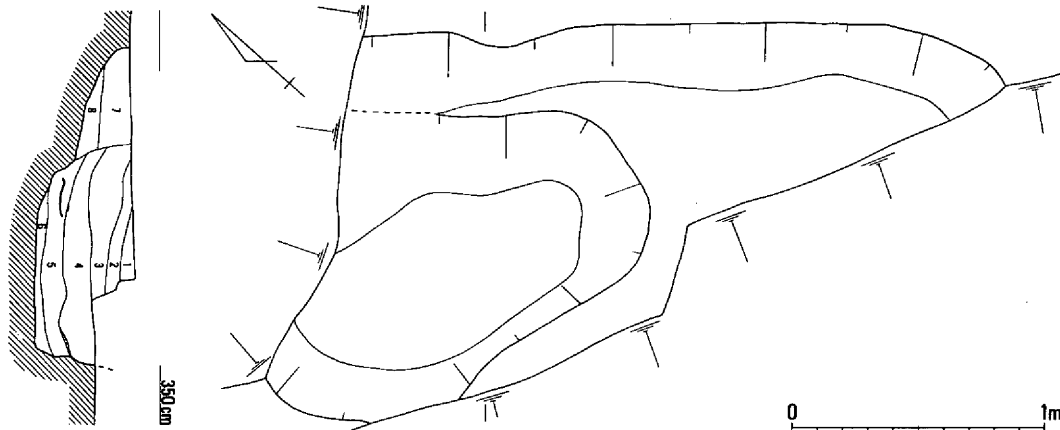


- 1. 明褐色(7.5YR7/2)粘質土 (炭・焼土粒含)
- 2. 灰褐色(7.5YR6/2)粘質土 (炭・焼土粒含)

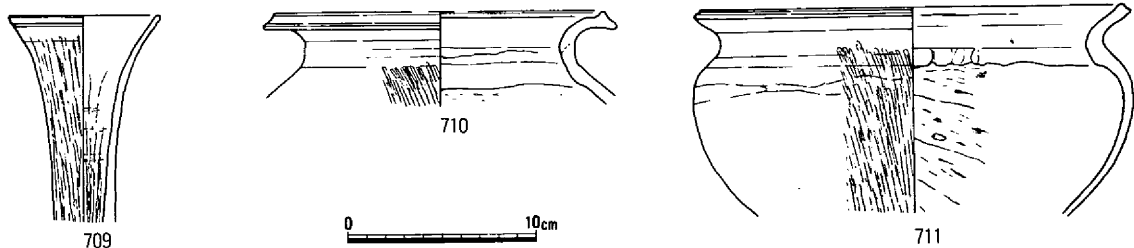
第134図 土壌55、同出土遺物

土壙56 (第37・135図)

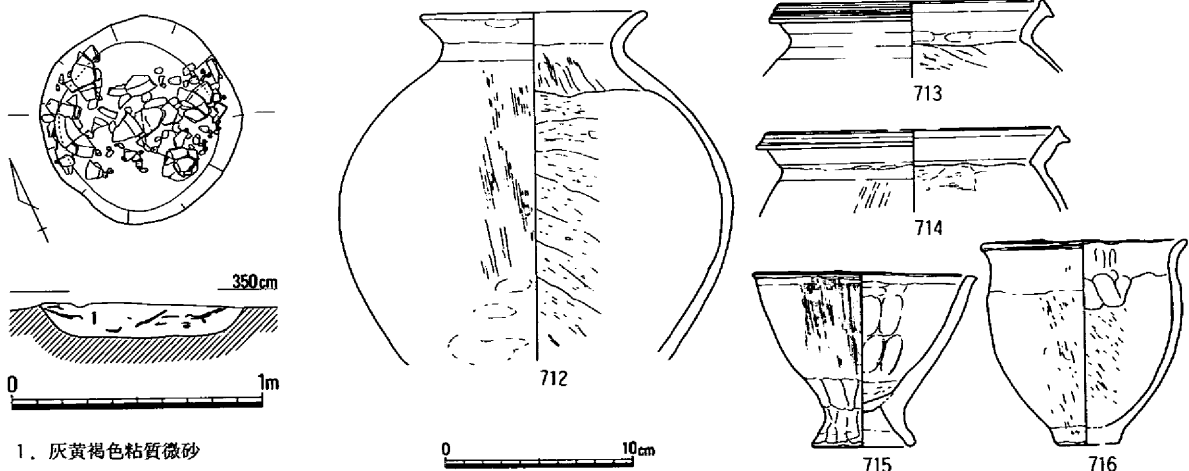
17D区と18D区の境界にあり、竪穴住居9の外周溝と重複していた。土層断面の観察から、平面図の左半の一段深い部分が土壙と考えられ、右半の浅い部分は竪穴住居9の外周溝2である可能性が高い。一部破壊を受けているが、平面形は不整形な楕円形で、長径が168cm、深さは40cmを測る。壙壁の傾斜は急で、底面は平坦である。埋土は6層に分けられ、最下層以外はすべて炭と焼土を含んでいたが、第4・5層にはとくに多かった。土器は第5層に多く、その年代は百・後・Ⅱである。(岡本)



- |                                     |                                     |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 黄褐色(2.5Y5/3)粘質微砂                 | 5. 黄灰色(2.5Y5/1)微砂粘土 (炭・焼土粒多含、礫・土器含) |
| 2. におい黄色(2.5Y6/3)粘質微砂               | 6. 黄灰色(2.5Y5/1)微砂粘土 (におい黄色土ブロック多含)  |
| 3. 黄褐色(2.5Y5/3)粘質微砂 (浅黄色微砂斑、炭・焼土粒含) | 7. 黄褐色(2.5Y5/3)粘質微砂                 |
| 4. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質微砂 (炭・焼土粒多含)      | 8. 灰黄褐色(10YR4/1)粘質微砂                |

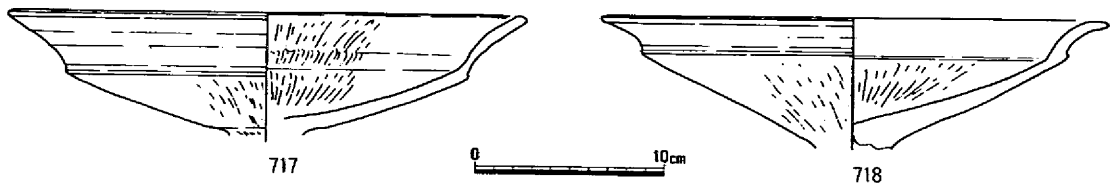


第135図 土壙56、同出土遺物



1. 灰黄褐色粘質微砂

第136図 土壙57、同出土遺物(1)



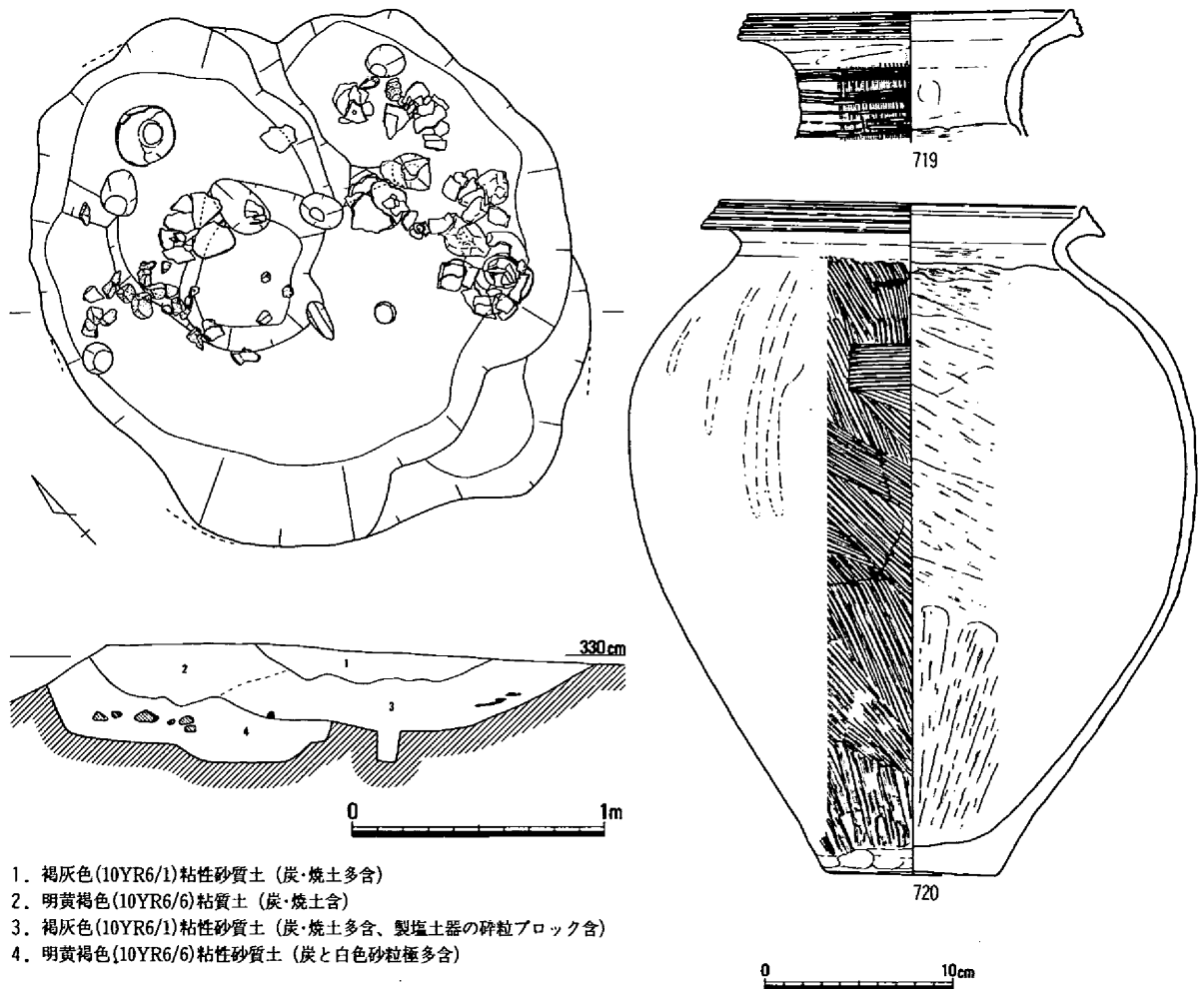
第137図 土壌57 出土遺物(2)

土壌57 (第37・136・137図、図版19-2)

18D区の北西部にあり、土壌56から東に2.5m離れていた。平面形は円形で、長径が82cm、短径は77cmであり、深さは15cmと浅かった。壙壁の傾斜は緩く、底面は平坦なため、土壌の断面形は皿状をしていた。埋土は灰黄褐色粘質微砂の1層で、炭粒や焼土塊を多く含んでいた。壙内からは多くの土器片や小礫が出土したが、高杯の破片が目立った。土器の年代は百・後・Ⅱと考えられる。(岡本)

土壌58 (第37・138図、図版19-3、55)

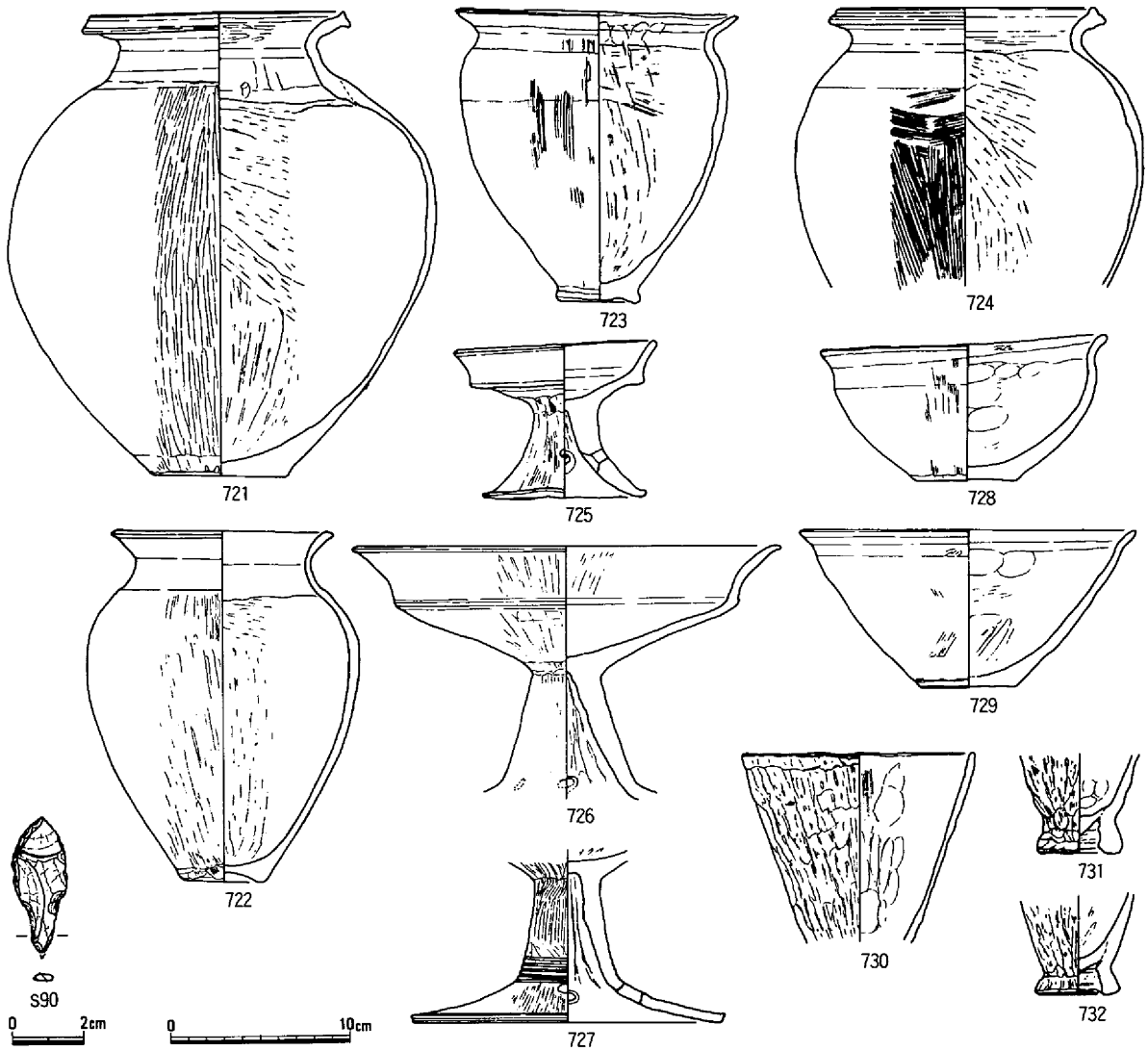
18D区の中央付近、調査区の南端で検出された。平面形は不整形な円形で、肩口の線はかなり凸凹している。長径は244cm、短径が222cm、深さは44cmを測る。土壌内の形状は複雑で、段状の凹凸がみられ、北東隅から中心へ右回りに巻き込むように深くなっていた。また、杭穴らしいものが7個認め



1. 褐灰色(10YR6/1)粘性砂質土 (炭・焼土多含)
2. 明黄褐色(10YR6/6)粘質土 (炭・焼土含)
3. 褐灰色(10YR6/1)粘性砂質土 (炭・焼土多含、製塩土器の碎粒ブロック含)
4. 明黄褐色(10YR6/6)粘性砂質土 (炭と白色砂粒極多含)

第138図 土壌58、同出土遺物(1)





第139図 土壙58 出土遺物(2)

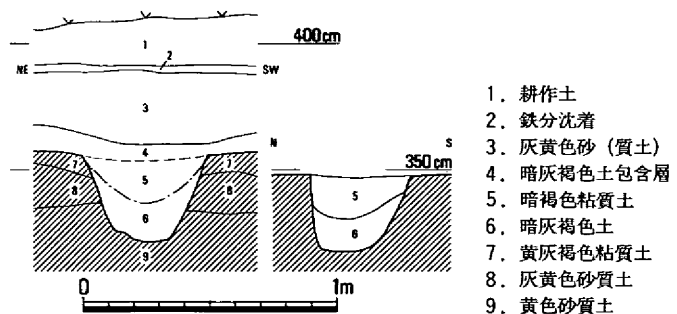
られた。埋土は4層で、炭や焼土を多く含み、第3層では製塩土器の碎粒のブロックが、第4層では白色砂粒が大量に包含されていた。壙底から百・後・Ⅱ期の大形土器片が多く出土した。(岡本)

(5) 溝

溝12 (第34・140図)

10・11B区に検出され、南東部の未調査区へ続く。幅40~50cm、深さ約30cmを測り、底のレベルは南東方向に下がる。この溝は、北東側の調査地区の竪穴住居5の外周溝(「百間川原尾島遺跡3」所収)と繋がる。

埋土中には破片のみ少量出土し

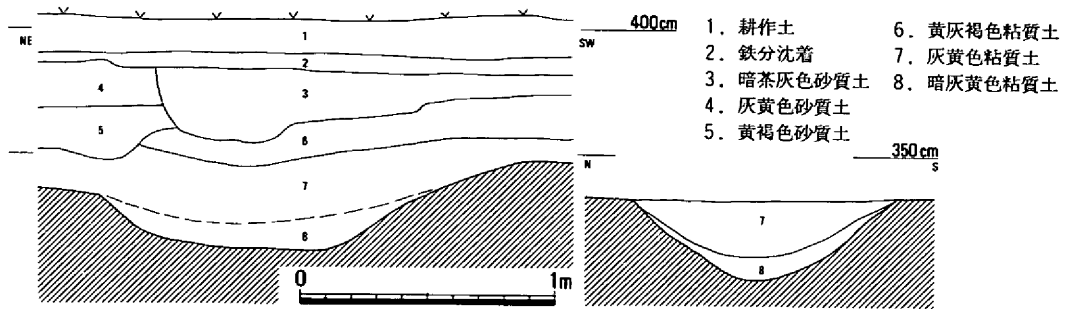


第140図 溝12 断面

ているに過ぎないが、既報告の住居および外周溝の時期、百・後・Ⅳとみて間違いはない。（柳瀬）

溝13（第34・141図）

竪穴住居4の北端にあたる9C区から10C区、さらに11B区にかけて検出された、ほぼ東西方向のわずかに蛇行した溝である。幅1.0～1.3m、深さ30cm前後を測り、底のレベルは西から東へ徐々に減じる。出土遺物は皆無であるが、北西側の調査地区の溝4（「百間川原尾島遺跡3」所収）から繋がるとすれば、前期または中期の可能性もある。（柳瀬）

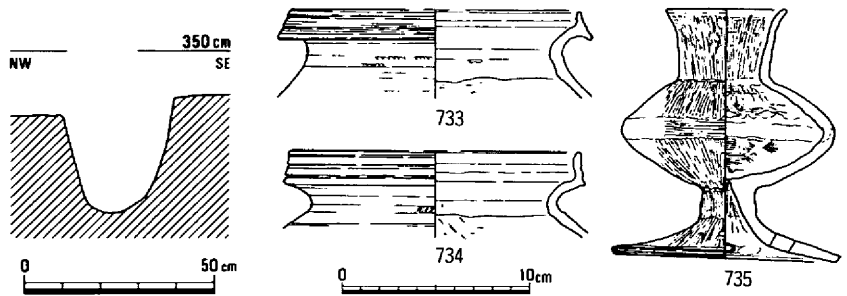


第141図 溝13 断面

溝14（第34・142図、図版55）

11C区の竪穴住居5の北側に接するあたりから10mほど北東方向に延び、徐々に南東に向きを変えて未調査区に続く。幅約30cm、深さ約30cmを測り、断面形はU字形を呈する。この溝は、小規模ながら溝12とよく似ており、南東側の未調査地区にこの溝に囲まれる住居址が存在するかも知れない。ただ、溝底のレベルが竪穴

住居5の床面より低いにもかかわらず、住居内では切り合い関係が認められないことや時期が後・Ⅲと同じであることから、直接住居5の壁溝と繋がるいわゆる排水溝の可能性もある。（柳瀬）



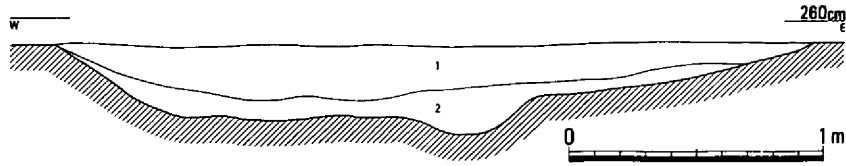
第142図 溝14 断面、同出土遺物

溝15（第37・143図）

15・16C・D区の水田層下で検出した溝である。旧河道の埋没後に掘削され、南北に流走する。その北端は『百間川原尾島遺跡4』の「溝21・22」につながる。規模は幅300cm、深さ30～35cmを測る。底は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。時期は、検出状況から後期と考えられる。（高田）

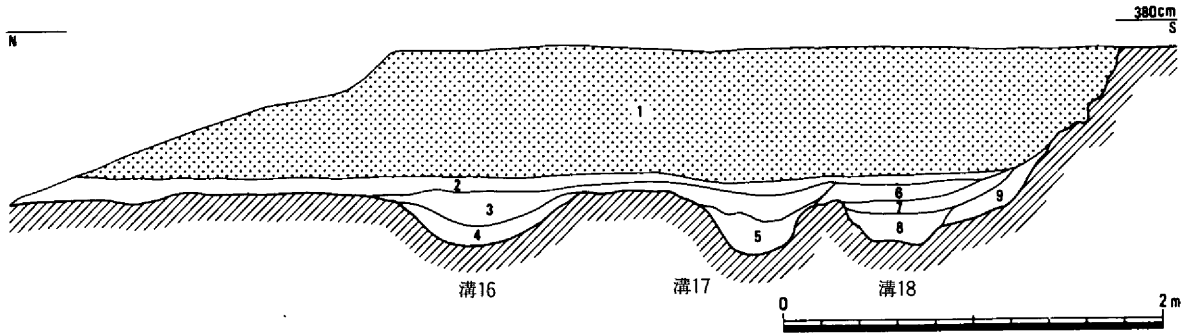
溝16・17・18（第37・144図、図版19—4. 55）

16・17C・D区に位置し、後期水田の水口下や水田層下で検出した溝群である。溝の規模は、残りのよい部分で幅200～100cmを測る。溝底の標高はいずれも260cm前後で、溝21よりも約20cm高い。溝底は、逆台形あるいはU字形を呈し、壁は2段に落ち込む。溝16の東北端は調査区外に延び、溝20から分岐することを北壁断面で確認している。溝19も溝20から分岐する。溝18は溝21に切られ、溝17

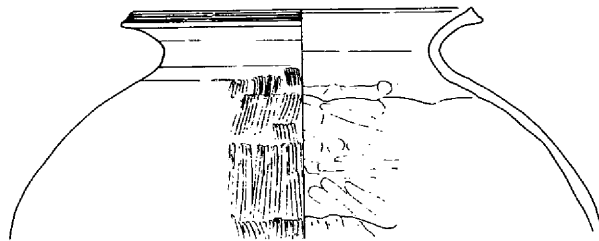


1. 灰黄色(2.5Y6/2)粘質砂      2. 灰色(N6/)粘土

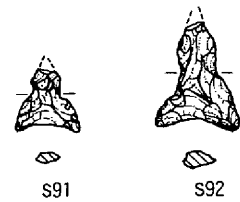
第143図 溝15断面



1. 浅黄色(2.5Y7/3)微砂(洪水砂)  
 2. 褐灰色(10YR6/1)粘土(水田耕土)      6. 褐灰色(10YR6/1)粘質土(黄褐色ブロック多含)  
 3. にぶい黄橙色(10YR7/3)粘質土      7. 褐灰色(10YR6/1)  
 4. 灰色(5Y5/1)粘土      8. 5と同じ  
 5. 褐灰色(7.5YR6/1)粘土      9. 褐灰色(7.5YR6/1)粘質土

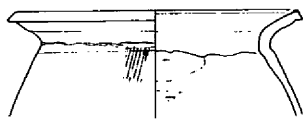


736

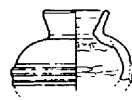


S91

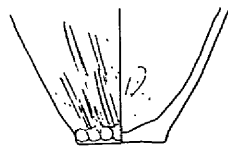
S92



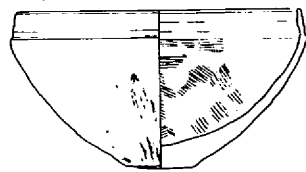
737



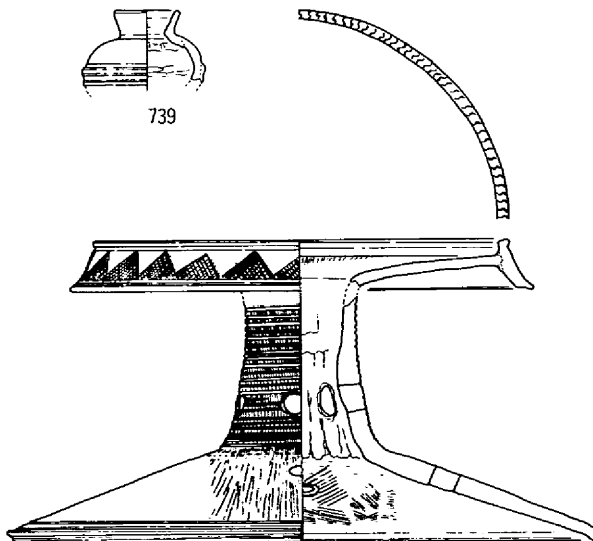
739



738



740



740



S93



S94



S95

第144図 溝16~18断面、溝16・17出土遺物

と重なりながら南流し、その東北端は溝19につながるものと考えられる。なお、溝18・19の南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝39」の下層に接続する。

以上のことから、溝18・19の埋没後に溝20から分かれた溝16・17が掘削され、さらにそれらを踏襲して後期水田とその水口が拓かれたと考えられる。

時期は、出土遺物と検出状況から、溝16・17が百・後・Ⅱ、溝18はそれ以前と考えられる。(高田) 溝19 (第37・145図)

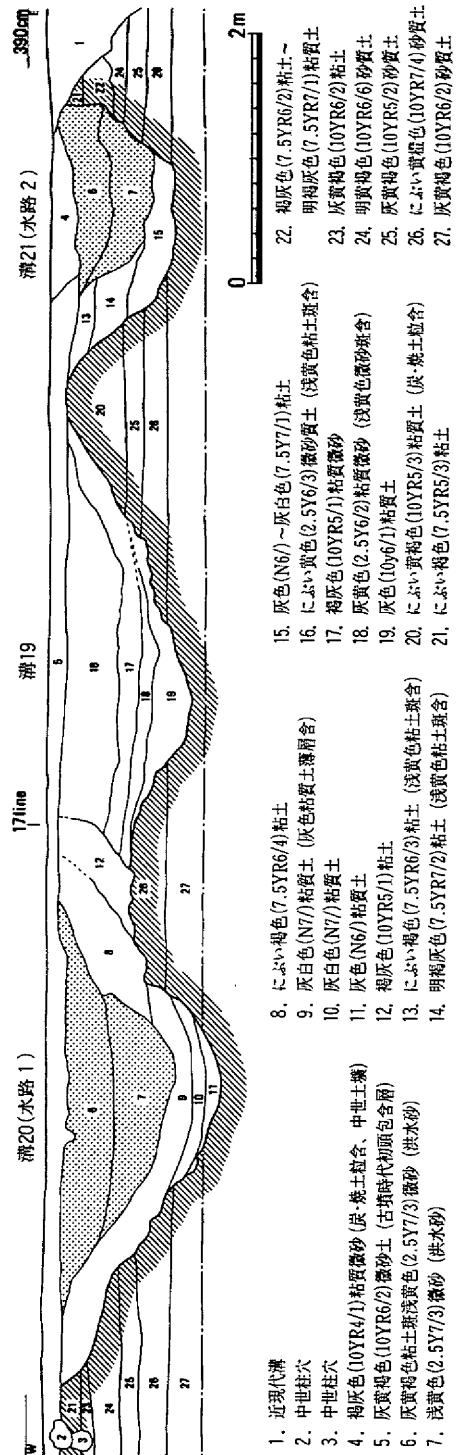
17D杭の北東7mで検出した溝で、東端は調査区外に延び、西端は溝20に切られる。溝底の標高や位置関係等から、溝18につながる可能性が高い。規模は幅200cm、深さ100cmを測り、上層に洪水砂はみられなかった。時期は、溝20との切り合いや検出状況から、後期前半と考えたい。(高田)

溝20 (第37・145・146図、図版19-4)

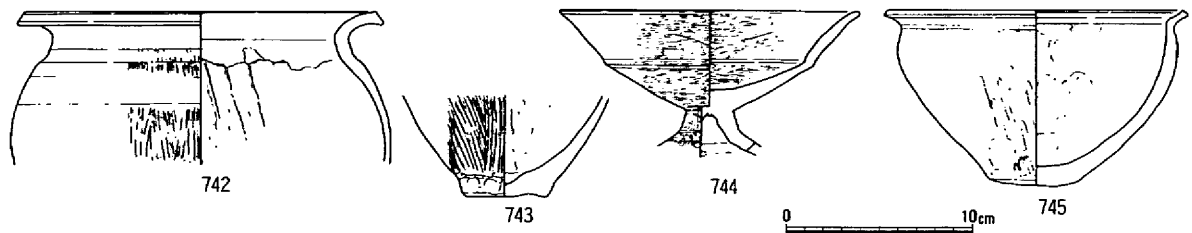
16・17C・D区を北から南に流走する溝で、上部に水路1がある。溝の両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝41」下層に接続する。また、溝16とは北壁付近で分岐し、溝18・19を切り、溝21とは50~100cmの間隔をおいて並流する。溝の規模は幅225cm、深さ135cmを測る。時期は、出土遺物と検出状況から、百・後・Ⅱと考えられる。744は水路1からの混入か。(高田)

溝21 (第37・145図、図版19-4)

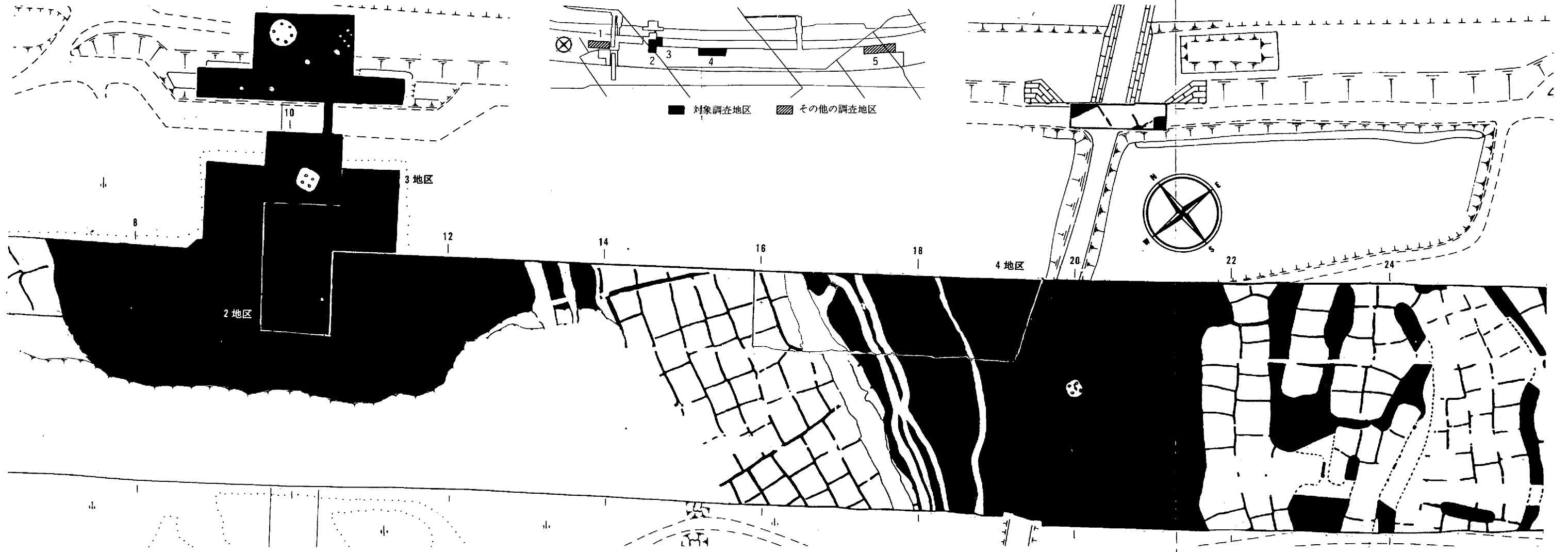
17C・D区を北から南に直線的に流走する溝で、上部には水路2がある。溝の両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝42」下層に接続する。溝の規模は幅250cm、深さ100cmを測り、溝20に比べて25cm浅い。壁は数段に落ち込み、複数の改修が行なわれたことが窺われる。時期は、



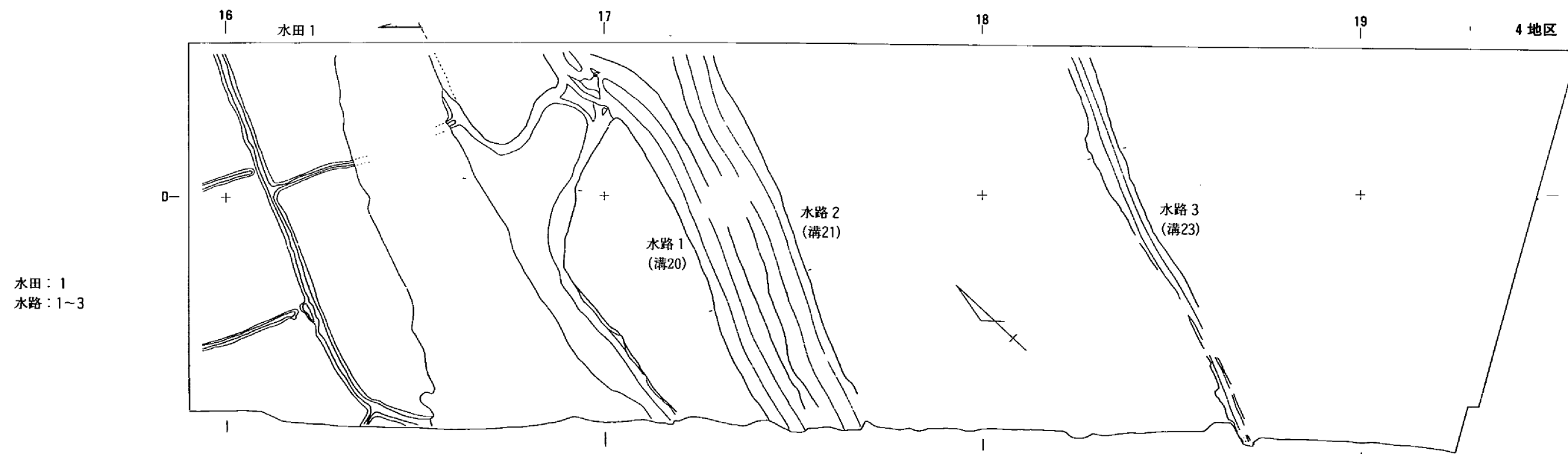
第145図 溝19~21 断面



第146図 溝20 出土遺物



第147図 対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代後期末水田、1/1000)



第148図 16~19区遺構配置(弥生時代後期末)

検出状況等から、溝20と同時期と考えられる。

(高田)

#### 溝22 (第37図)

17C区に位置する溝で、溝20、21に切られる。規模は幅95cm、深さ20cmを測り、断面形は西部で逆台形、東部は数段に落ち込む。埋土は褐灰色粘質土である。時期は、後期と考えられる。

(高田)

#### 溝23 (第37・151図)

18C・D区を北から南へ流走する溝で、上部には水路3がある。溝の両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝44」下層に接続する。溝の深さは75cmで、その他の規模、断面形等は水路3とほぼ同様である。時期は、溝20、21に近いものと考えられる。

(高田)

#### 溝24 (第37図)

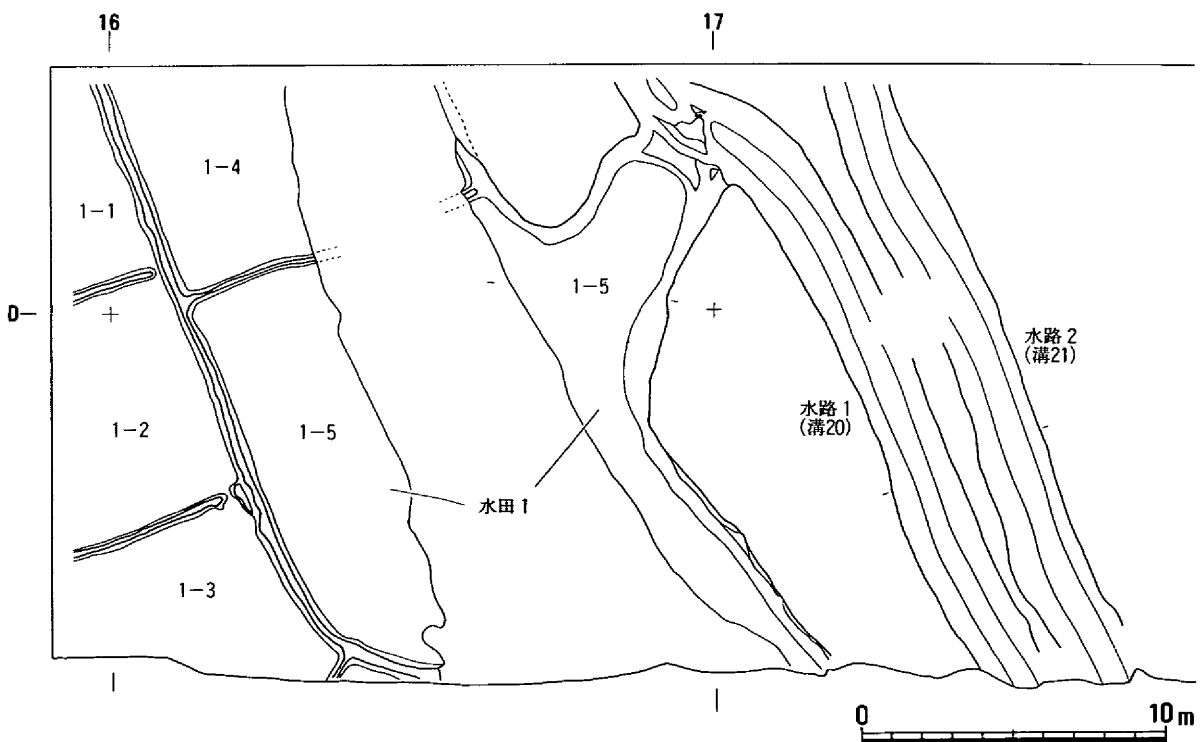
19C区に位置し、ほぼ南北に流走する溝である。その両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡4』の「溝23」に接続する可能性が高い。規模は幅50～65cm、深さ20～30cmを測り、溝の断面形は逆台形を呈する。時期は、検出状況から後期と考えられる。

(高田)

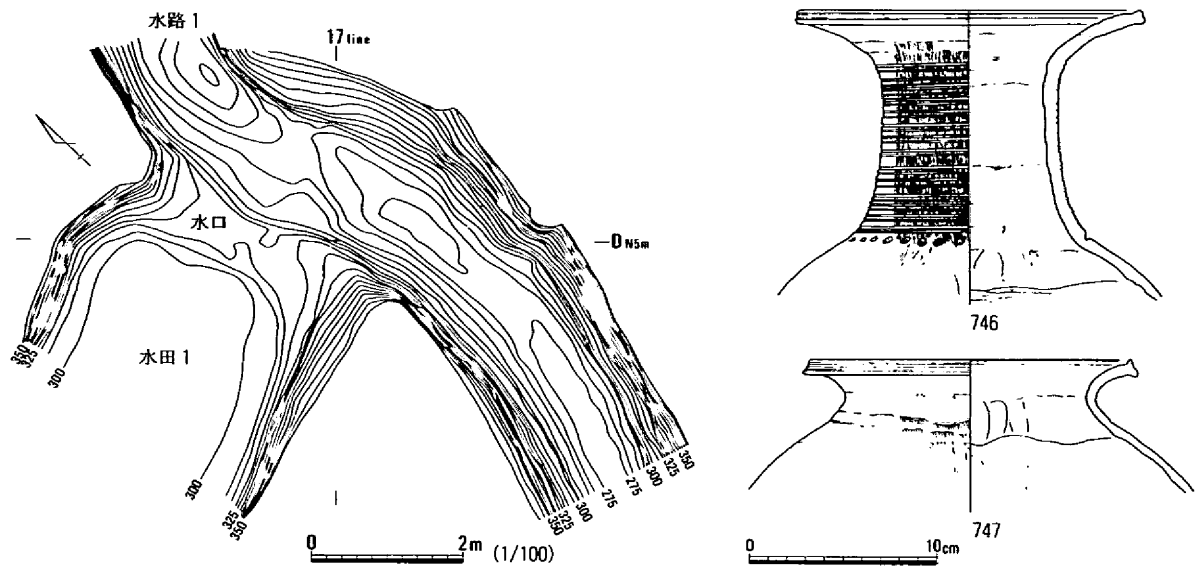
### (6) 水田・水路

#### 水田1 (第148・149・150図、図版20-1. 55)

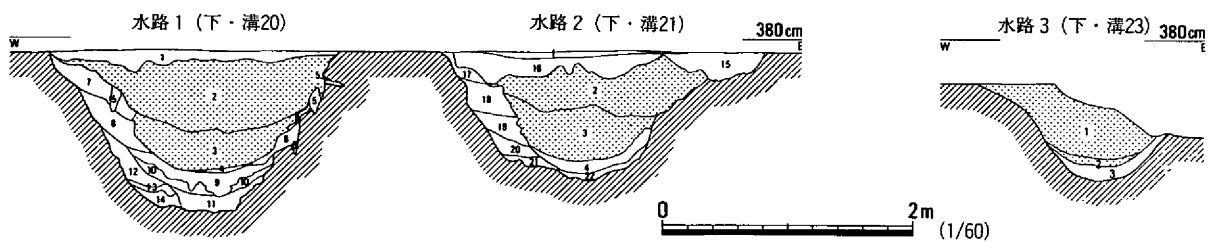
15～17C・D区に位置し、後期末の洪水砂で埋没した低位部の水田である。溝29によってその過半を失っている。水田の東側は微高地となるが、その他は調査区外に広がり、南側は『百間川原尾島遺跡2』の、西側は『同4』の水田につながる。田面は、ほぼ南北に延びる大畦畔と、それに直角に設けられた小畦畔によって区画される。その形状は、1-1～4がほぼ方形と考えられるのに対し、1-5は東に曲がる大畦畔によって不定形となるようである。田面の標高は、1-1～5の順に273cm、265cm、259cm、283cm、275cmで、南西方向に低くなる。これは水田下に旧河道が存在するため



第149図 水田1、水路1・2 (1/250)



第150図 水田・水路連結部微地形、水田層 出土遺物



- |  |  |  |
|--|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. におい黄褐色(10YR7/3)砂質土</li> <li>2. 灰黄褐色粘土斑浅黄色(2.5Y7/3)微砂(洪水砂)</li> <li>3. 浅黄色(2.5Y7/3)微砂(洪水砂、腐食物含む灰色粘性微砂の薄い互層を多量に含む)</li> <li>4. 灰白色(N7/)粘質土(灰黄褐色粘土・浅黄色粘土ブロック含)</li> <li>5. 灰黄褐色粘土斑浅黄色(2.5Y7/4)砂質土</li> <li>6. 褐灰色(10YR5/1)粘質土</li> <li>7. におい橙色(7.5YR6/4)粘土</li> <li>8. 褐灰色(10YR5/1)粘土</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>9. 灰白色(N7/)粘質土(炭粒少含、灰色粘質土薄層含)</li> <li>10. 灰白色(N7/)粘質土(炭粒少含)</li> <li>11. 灰色(N6/)粘質土(炭粒少含)</li> <li>12. 灰色(5Y6/1)粘土(炭粒少含、灰白色微砂の薄層多含)</li> <li>13. 灰色(N/6)粘土(上半に灰白色微砂の薄層を多含)</li> <li>14. 灰白色微砂斑灰色(N6/)粘土(炭粒含)</li> <li>15. 灰黄褐色(10YR6/2)粘性砂質土</li> <li>16. 灰黄褐色(7.5YR6/2)粘性砂質土</li> <li>17. 黄色粘土斑におい褐色(7.5YR6/3)粘土</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 明緑灰色(7.5GY7/1)微砂</li> <li>2. 灰白色(N7/)粘性微砂</li> <li>3. 灰色(N6/)粘土</li> </ul> |
|--|--|--|

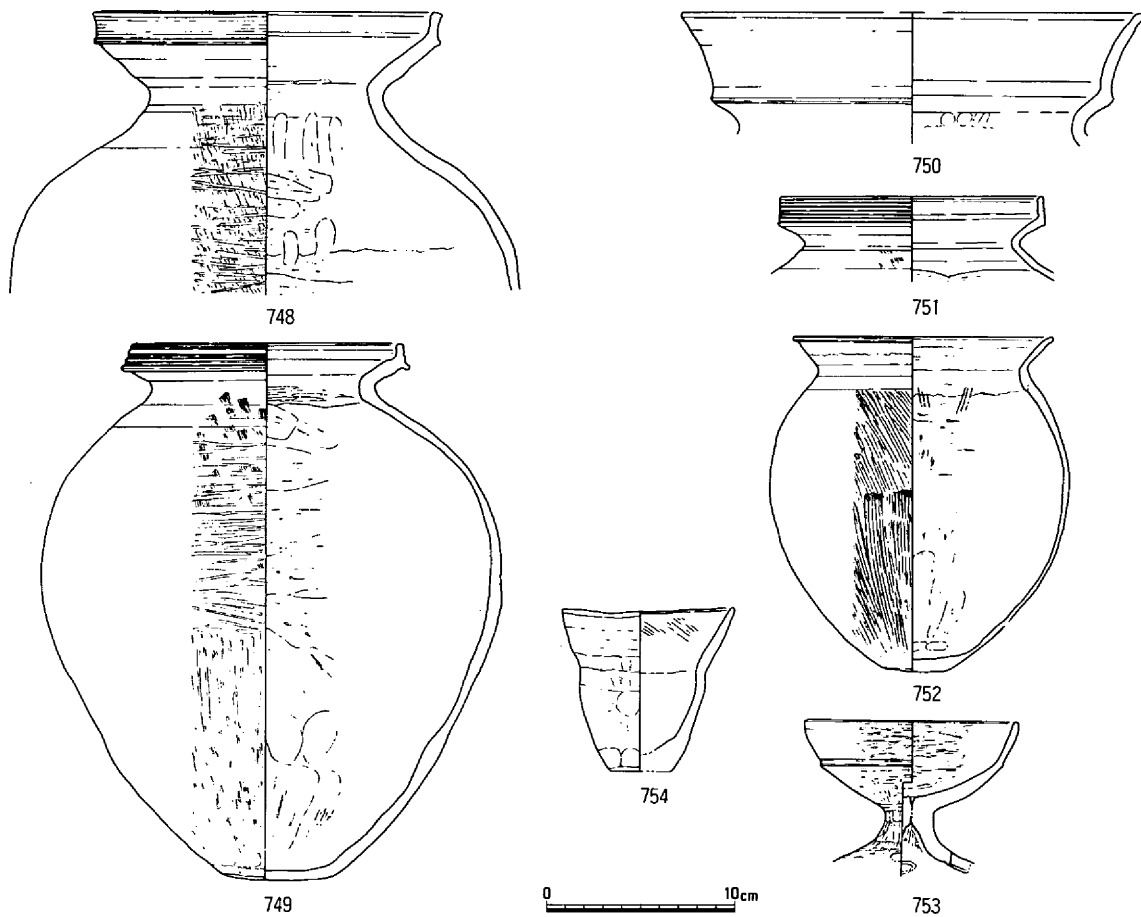
第151図 水路1・2、同3 断面

で、微高地と田面との比高差は微高地端下で70cm、最深部で100cmとなる。水田層は厚さ約6cmの褐灰色粘土で、その下にも1～2層の水平堆積がみられる。畦畔はみられないが後期を通じての耕作が考えられる。なお、畦畔の規模は大畦畔が幅70cm、高さ10cm、小畦畔が幅30～40cm、高さ3～5cmを測る。また小畦畔が耕作土の盛り上げによるのに対し、大畦畔は耕作以前の土盛りで形成される。

17D杭の北側で検出した水口は、既述の溝17・18を踏襲したもので、水田が微高地に入り込むようにして水路1に接する。その境には土盛りがみられ、水路1の底面との比高差25cm、水田面とは10cmを測る。また、水口に接する水路1の底面は、その前後より約15cm高くなっていた。(高田)

水路1・2 (第148～152図、図版20—2. 21—1・2. 56)

16・17C・D区で検出した2条の溝で、微高地端を北から南に平行して流走する。水田1と同様に後期末の洪水砂で埋没し、その同時存在が確実である。また、水路1と2は、溝20と溝21の上部に位置し、それらの溝を踏襲して掘削したもので、その南端は、『百間川原尾島遺跡2』の「溝41」と「溝42」にそれぞれ接続する。水路の規模は、いずれも幅225cm、深さ97cm前後を測り、断面形は丸い底



第152図 水路1～3(洪水砂層)出土遺物

から段を持ちながら急斜に立ち上がる。また、底に薄く灰白色粘質土がみられる点も酷似する。

出土遺物には、744・746～749がある。その時期は、百・後・Ⅳと考えられる。(高田)

水路3(第148・151・152図、図版21-3. 55・56)

溝24の上部に位置し、後期末の洪水砂で埋没した溝である。その南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝44」に接続する。溝の規模や形状等は溝24とほぼ同様だが、深さは65cmを測る。

時期は、745・749の出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。(高田)

### (7) 土器溜り

土器溜り1(第34図、図版22-1)

10C～D区に広がる土器片の集積である。南東側の調査地区から続くもので、「百間川原尾島遺跡4」の土器溜り1に対応し、検出される状況にとくに変化はない。後期の遺構検出面上に10～20cm盛り上がるように形成されていて、おもに5×15m位の範囲に認められるが、全体では18m四方程の広がりをもつ。土器溜りは、竪穴住居2の東半分の上部を覆っているため後・Ⅰ期を遡ることはなく、Ⅱ期の土器が大半を占めることから、後・Ⅱ期のある時期から土器廃棄場となっらしい。(柳瀬)

土器溜り2(第34図、図版22-2)

10B区の竪穴住居1、土塙25・27の上部を覆うような形で確認され、検出状況は土器溜り1と大差はない。ただ、土塙25には後・Ⅲ期の土器を含むため、廃棄の時期はⅢ期と考えられる。(柳瀬)



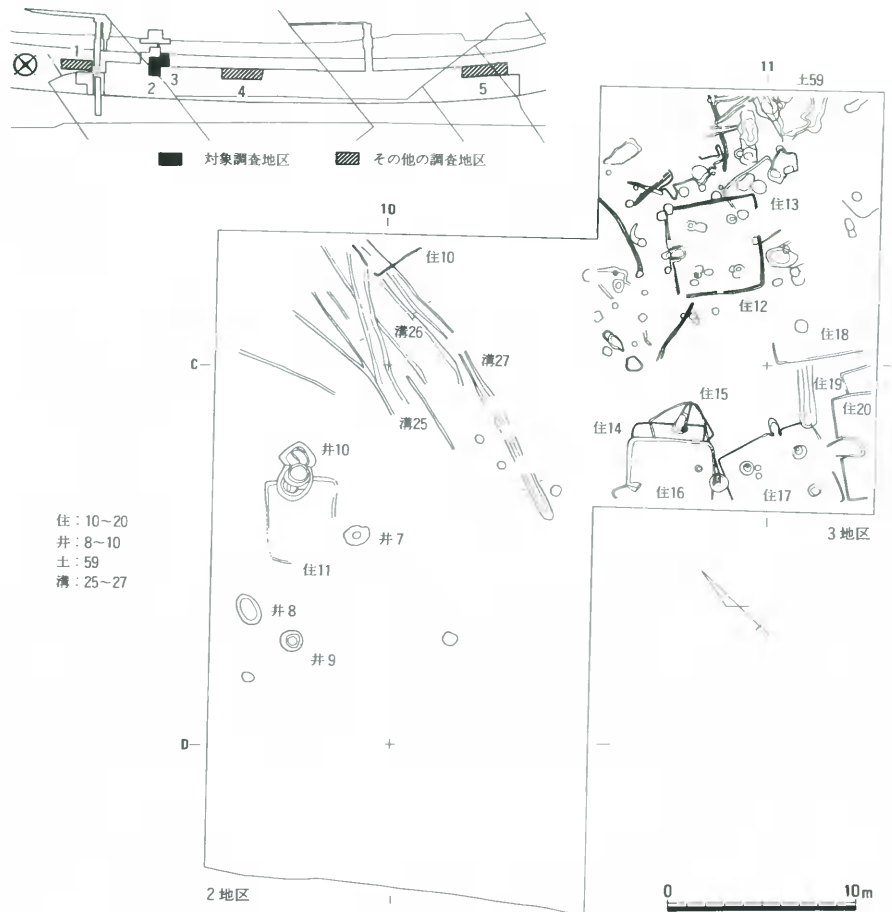
#### 4. 古墳時代の遺構・遺物

この時代は、弥生時代後期ほど遺構密度が高くなく、遺物も多くない。遺構は堅穴住居・建物・井戸・溝等が散在した状態で検出され、全体的に残存もよくない。対象調査区のうち、2地区では住居・建物ともにほとんど確認されず、3地区および既報告の北と西側に多く占地されている。

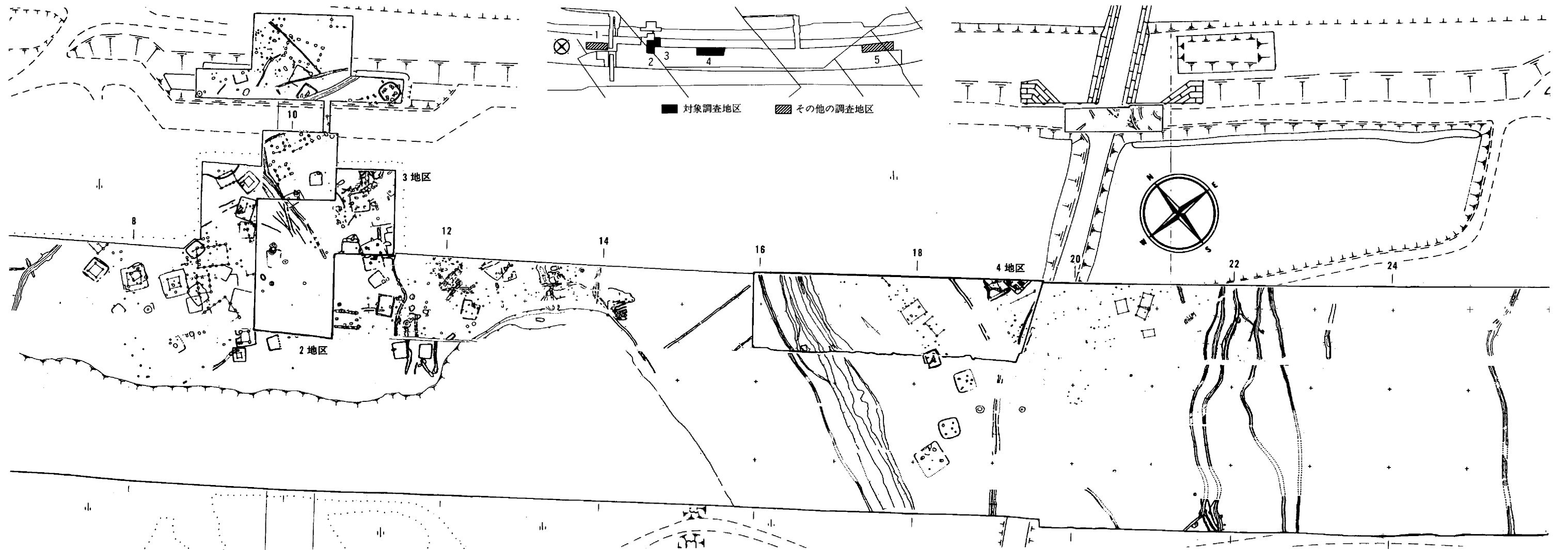
遺構・遺物の示す時期は、6世紀後半が多くを占め、百間川遺跡群の編年の百・古・Ⅲ期と7世紀中葉以降については、遺構・遺物ともに非常に希薄である。また、後期に続く百・古・Ⅰ～Ⅱ期の遺構も2地区の井戸および4地区の溝29下層くらいで少ない。

そのほか、2地区の10B～Cにかけてと9D区の堅穴住居3の上部あたりに、百・古・Ⅰ期の土器を包含する住居址状の落ち込みを認めていたが、正確に住居遺構として捉えることができなかったため、掲載を割愛した。

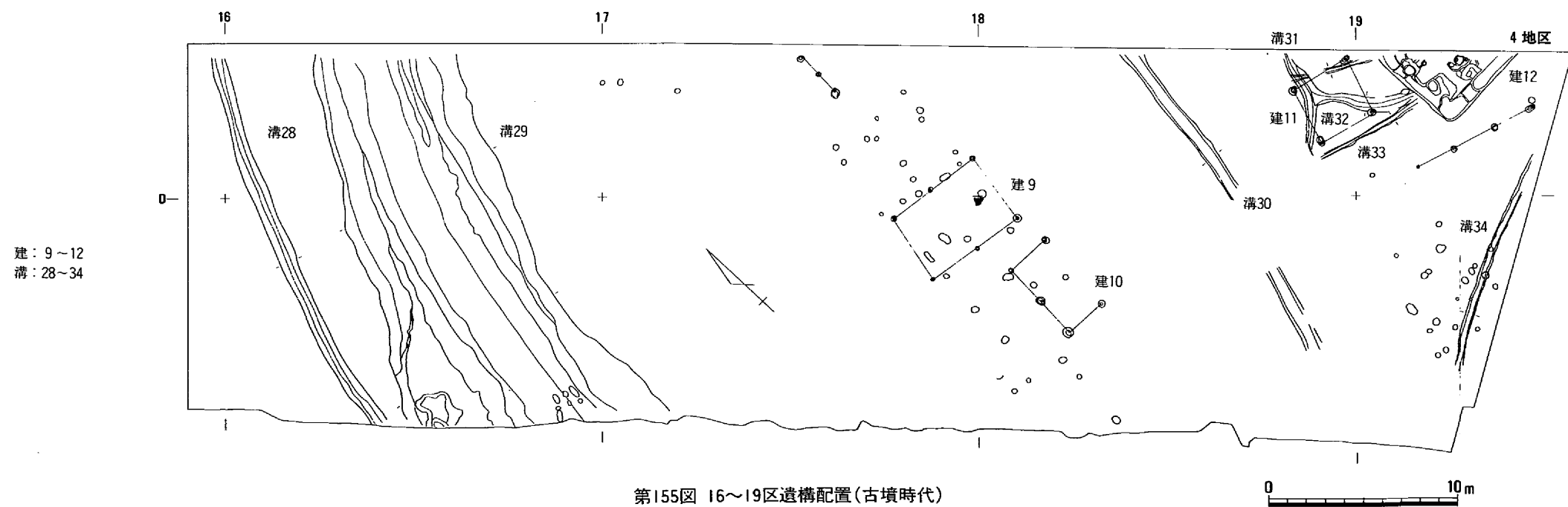
(柳瀬)



第153図 9～11区遺構配置(古墳時代)



第154図 対象調査区位置および周辺遺構配置(古墳時代、1/1000)



第155図 16~19区遺構配置(古墳時代)

## (1) 竪穴住居

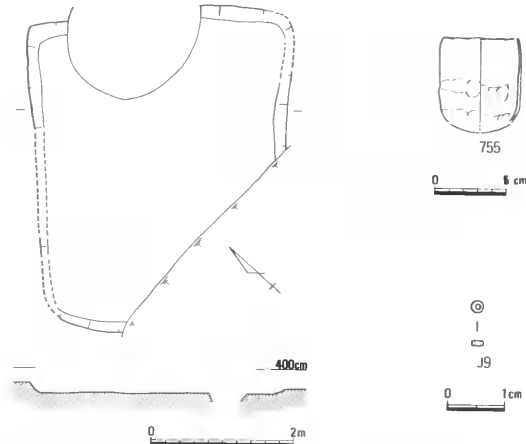
## 竪穴住居10 (第153図)

B区の10ライン上に、北東側の調査地区にまたがって検出された長台形の住居である。この住居は「百間川原尾島遺跡3」に竪穴住居31として全体を報告してあるので、参照願いたい。(柳瀬)

## 竪穴住居11 (第156図、図版22-3)

9C区で見つかった長方形の住居である。長さ約4.4×3.6m、深さは15cm前後で、井戸10や近現代溝等により大きく削平を受けていて、残存状況はよくない。床面を十分に精査したが、壁溝や柱穴は検出されていない。

出土遺物は、図示した2点のほかは須恵器の細片8片と土師器数片のみである。製塩土器755は772に先行する形態で、須恵器片の特徴を加味して5世紀末～6世紀初頭に時期を求められる。(柳瀬)

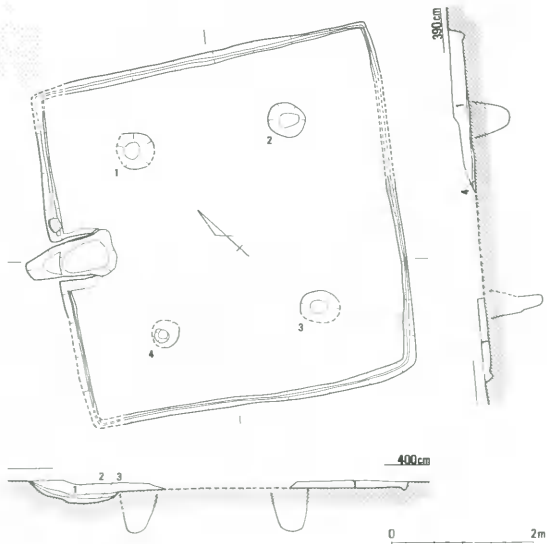


第156図 竪穴住居11、同出土遺物

## 竪穴住居12

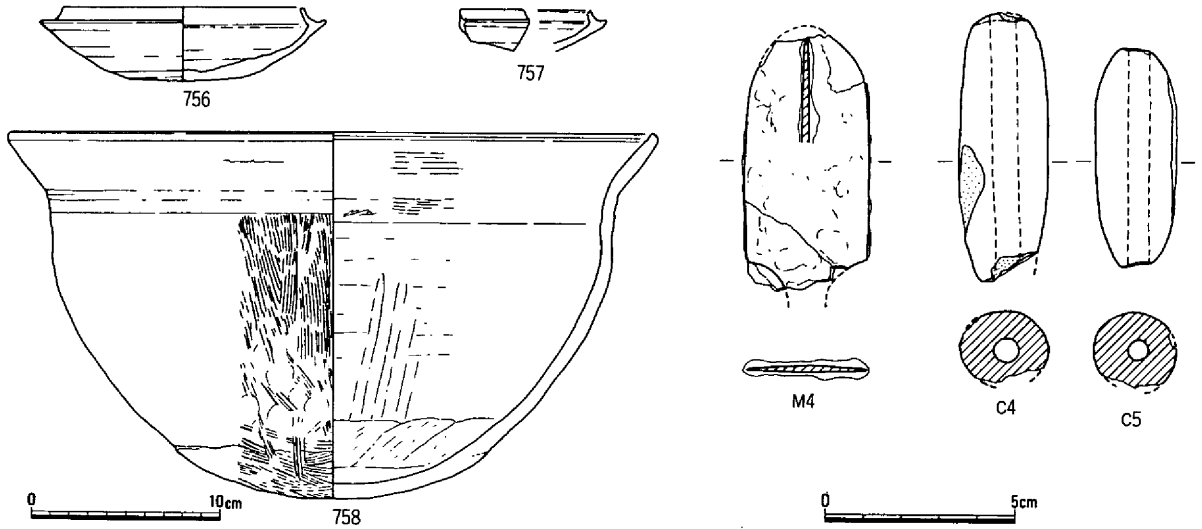
(第157・158図、図版22・56)

10B区の南西隅に位置していた。竪穴の平面形は方形で、南東辺の長さは485cm、北東辺は475cmを測る。竪穴の残存状況はあまり良好ではなく、深さは24cmにすぎなかった。柱穴は4個で、長径が54cm、深さは48～67cmであった。柱穴1と2の距離は225cm、柱穴2と3の間は268cmで、4柱穴を直線で結ぶと長方形となる。北西辺の中央でカマド跡を検出した。カマドの窪みは、幅が65cm、長さは128cm、深さ33cmを測る。カマドの部分を除いて幅20cm前後の壁体溝が巡っていた。遺物として、土器・鉄鏃・土錘があった。土器の年代は6世紀末である。(岡本)

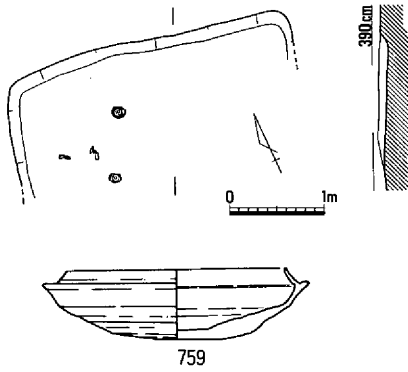


1. 暗灰色砂質土
2. 暗灰黄褐色砂質土 (焼土多含)
3. 暗灰色砂質土 (焼土多含、上面に炭層)
4. 暗灰褐色砂質土

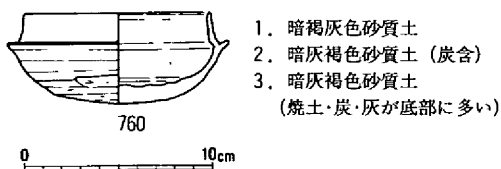
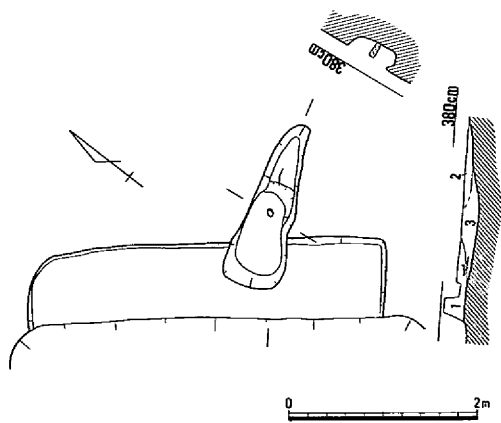
第157図 竪穴住居12



第158図 竪穴住居12 出土遺物



第159図 竪穴住居13、同出土遺物



1. 暗褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土 (炭含)
3. 暗灰褐色砂質土 (焼土・炭・灰が底部に多い)

第160図 竪穴住居14、同出土遺物

竪穴住居13 (第153・159図、図版56)

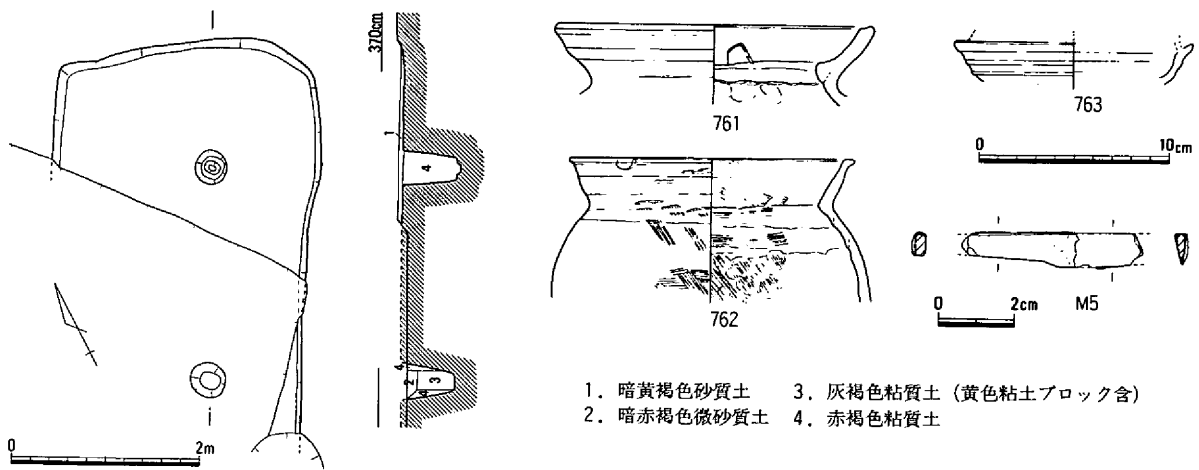
10B区と11B区の境界に位置していた。竪穴住居12の東角を破壊していた。竪穴の大部分は後世の遺構によって消滅させられていて、北端部分を残すのみだった。残存状況は劣悪で、竪穴の深さは11cmにすぎなかった。竪穴の最大幅は315cmを測る。壁体溝やカマドは確認されなかった。床面から須恵器の杯が出土した。6世紀後半と考えられる。(岡本)

竪穴住居14 (第160図、図版23-1・2・56)

10C区の東半に位置し、竪穴住居16によって大きく破壊されていた。竪穴の平面形は方形で、その東辺付近が残存していたにすぎないが、辺の中央よりやや南でカマドを検出した。竪穴は一辺380cm、深さ11cmを測る。壁体溝や柱穴は確認されなかった。カマドは東辺とは直交せず、少し南へ振る。最大幅63cm、奥行き180cm。燃焼部に支石が立っていた。出土土器の年代は6世紀初頭である。(岡本)

竪穴住居15 (第153・161図、図版23-1)

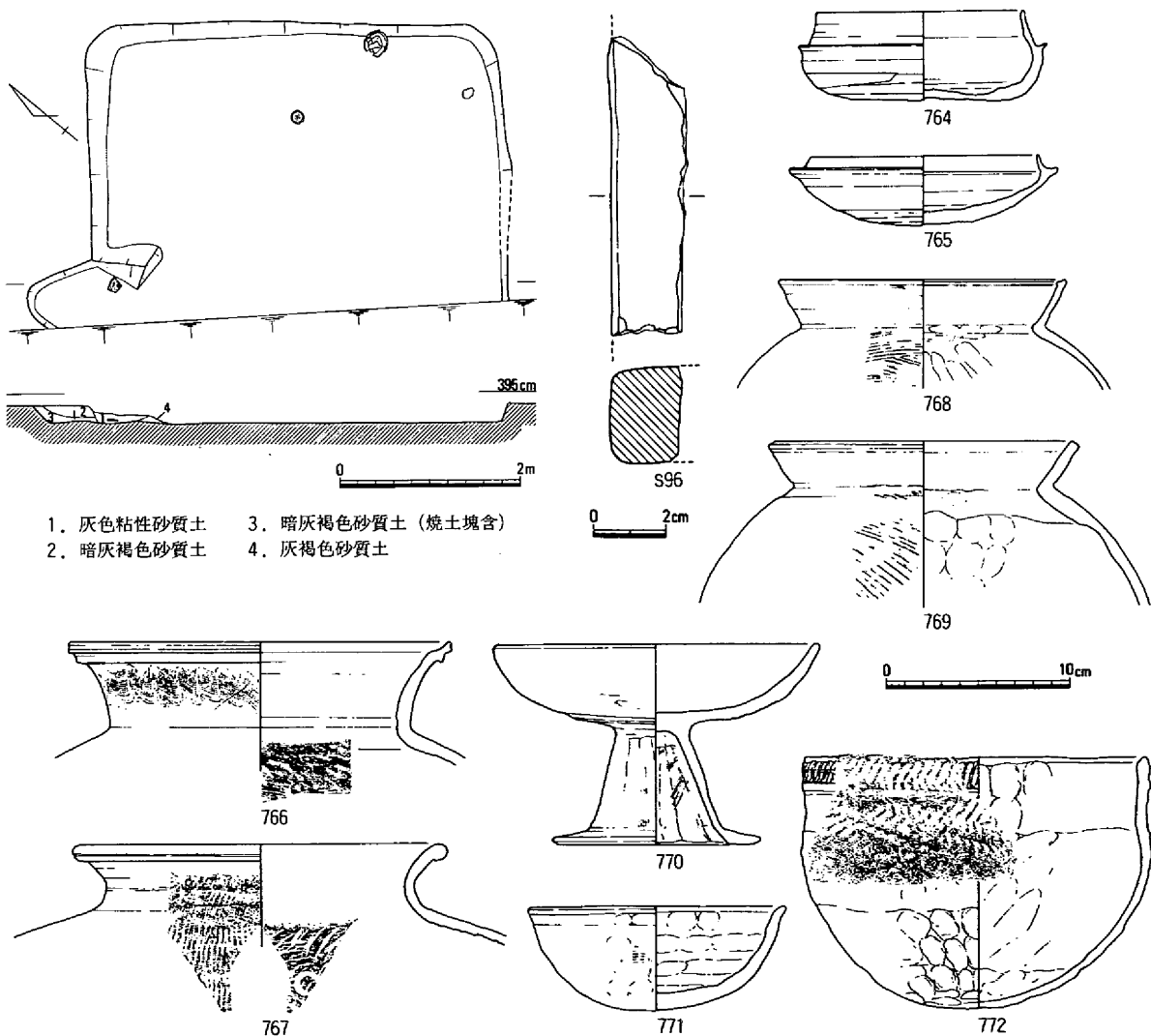
10C区の北東部で検出された。竪穴住居14・16によって大きく破壊されていた。竪穴の平面形は長方形で、残存長軸が415cm、短軸は285cmを測る。残存状況は悪く、深さはわずか5cmにすぎなかった。壁体溝は認められなかった。柱穴は2基で、長径が36・39cm、深さは55・59cm、心々距離は225cmだった。土器の年代は5世紀末から6世紀初。(岡本)



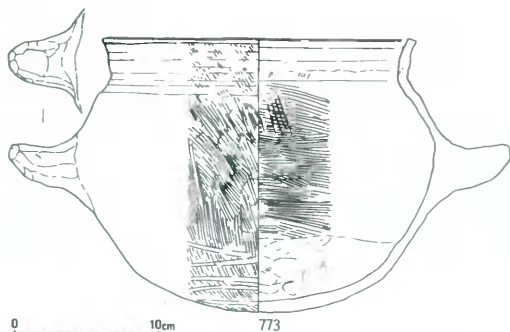
第161図 竪穴住居15、同出土遺物

竪穴住居16 (第153・162・163図、図版23-1・56)

10C区の東半、調査区の南端で半分を検出した。竪穴住居14を破壊していた。竪穴の平面形は隅丸



第162図 竪穴住居16、同出土遺物(1)



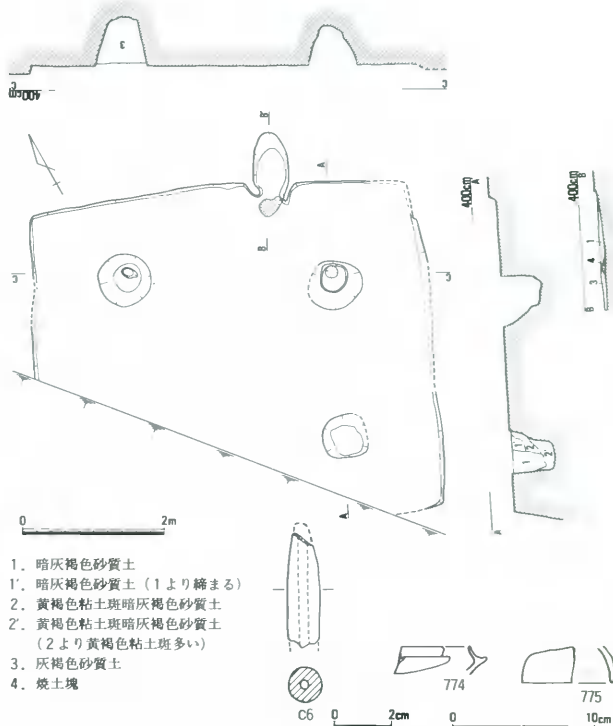
第163図 竪穴住居16 出土遺物(2)

の方形で、北西辺の中央にカマドが設けられていた。竪穴の規模は、一辺が465cm、深さは38cmを測る。主柱となるべき柱穴は確認できなかった。また、壁体溝も検出されなかった。カマドは竪穴の北角から300cmあたりに中軸線が位置するため、かならずしも北西辺の中央とは言えないかもしれない。カマドの残欠である土盛り部分が北西辺から内側へ78cm延びていた。カマドの残存幅は最大で65cmあり、煙出し部分は北西辺から70cm延び出していた。

出土遺物には土器と砥石があった。土器は須恵器と土師器があり、製塩土器も含まれていた。把手付きの甕773は床面から出土した。土器の年代は5世紀末から6世紀後半と考えられる。(岡本)

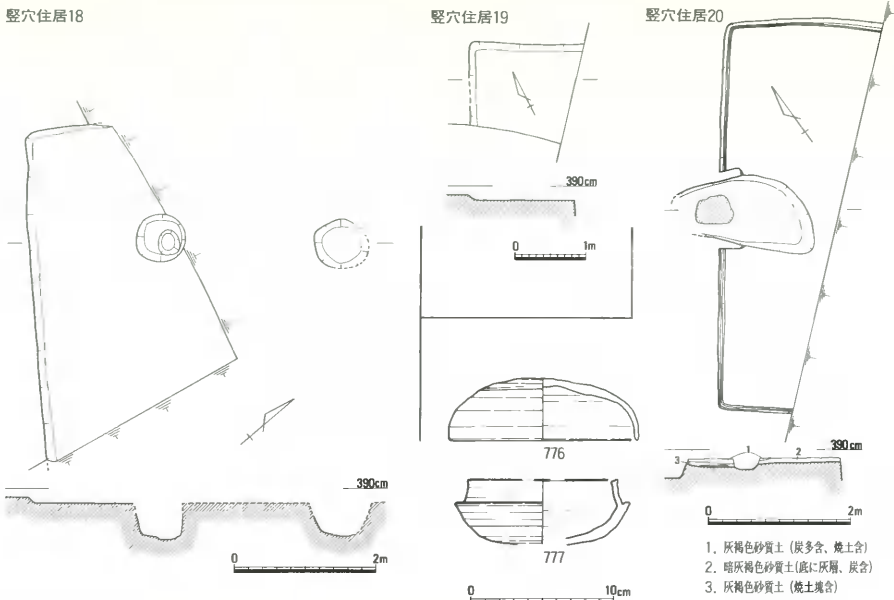
**竪穴住居17 (第153・164図、図版23-3)**

10C区と11C区の境界付近、調査区の南端で検出された。住居跡の一部は調査区外にある。竪穴の



第164図 竪穴住居17、同出土遺物

平面形は方形で、北辺の中央より東寄りでカマドが残存していた。竪穴の規模は、東西が550cm、南北は470cm、深さが8cmを測る。主柱は4本とみられ、1本は調査区外になる。柱穴の掘り方は円形に近く、長径は67~78cm、深さが50~73cmであった。北側の2柱穴では柱のめり込み痕が確認され、その直径は18cmを測る。南側の柱穴でも断面で柱痕らしきものが認められ、その幅は26cmであった。柱穴間の距離は、東西が285cm、南北は250cmとなっていた。カマドの中軸線は竪穴の北東角から195cm離れたところに位置している。カマドの残存部分は幅50cm、長さ102cmで、燃焼部



第165図 竪穴住居18・19・20、同20 出土遺物

に焼土塊が残っていた。壁体溝はなかった。出土遺物としては、土鍾と須恵器の蓋杯の小片があったにすぎない。土鍾は両端が細くなる型式で、須恵器の年代は6世紀末頃と考えられる。(岡本)

#### 竪穴住居18 (第153・165図)

11B区の南西隅で検出された。後世の遺構によって大破され、わずかに南辺と柱穴2基を確認したにすぎない。竪穴の平面形は方形と推測される。南辺の残存長は230cmで、竪穴の深さは8cmにすぎない。壁体溝は確認されなかった。支柱は4本と考えられるが、西側の2柱穴のみが検出された。柱穴の長径は71・80cm、深さは29・38cmを測る。柱穴間の距離は250cmであった。住居の年代は出土した遺物がなかったため明瞭ではないが、形態から6世紀代ではないかと推測される。(岡本)

#### 竪穴住居19 (第153・165図)

11C区の北端にあり、竪穴住居20によって大きく破壊されている。また、調査区の東端にあるため大部分は調査区外にあり、検出されたのは北西角にすぎない。竪穴の平面形は方形と推定される。北辺の残存長は162cm、竪穴の深さは10cmであった。壁体溝は認められなかった。出土遺物から判断すると、住居の年代は6世紀後半ではないかと考えられる。(岡本)

#### 竪穴住居20 (第153・165図、図版23-4)

11C区の北西隅に位置していた。調査区の東端で一部を検出したのみで、多くは調査区外に残存している。検出されたのは北西辺と、その中央にあったカマドである。壁体溝は確認されたが、柱穴は検出されなかった。竪穴の平面形は方形で、北西辺の長さは550cm、深さが7cmであった。カマド部分は、北西辺の内側で幅102cm、長さ132cm、深さ6cmの浅い窪みとなっていて、底に焼土の塊が残存していた。出土した須恵器の年代は6世紀初頭と後半である。(岡本)

(2) 建 物

建物9 (第155・166図)

17・18C区と17・18D区  
の境界付近に位置してい  
た。2間×1間の掘立柱建  
物である。南西角の柱穴が  
西にずれているため、平面  
形は台形となる。桁行全長  
は北側で528cm、南側で555  
cm、梁間は東側で394cmを  
測る。床面積は21.3㎡とな  
る。柱穴の掘り方は円形  
で、長径は22~41cm、深さ  
は24~40cmであった。桁行  
の中央柱穴は中点にはな  
く、東の柱穴からの距離も  
南北で一致しない。中央柱  
穴は他の四隅の柱穴よりも  
浅い。南東角の柱穴の柱の

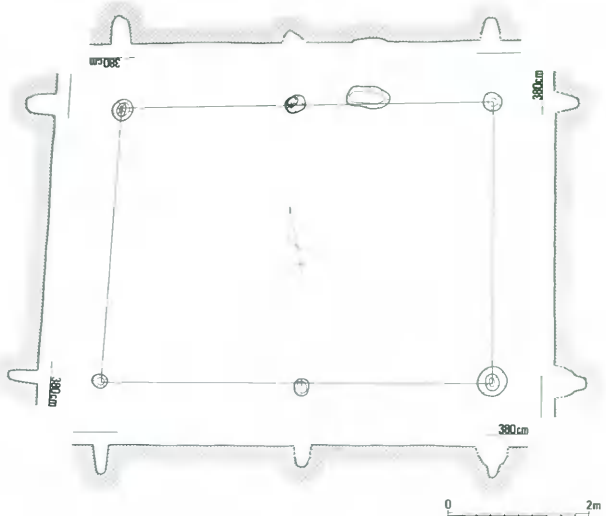
めり込み痕は直径24cmであった。(岡本)

建物10 (第155・167図、図版24-1)

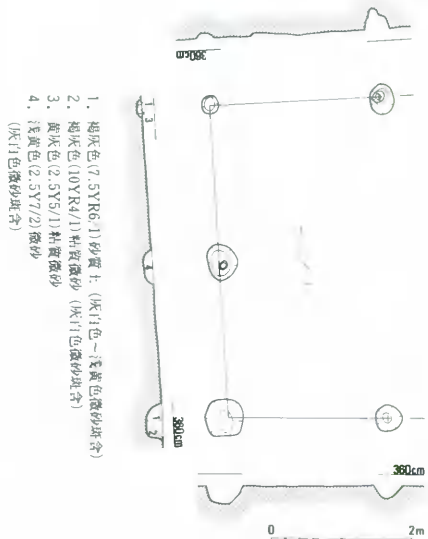
18D区の北西隅で検出された。掘立柱建物  
であるが、東半部分が後世の遺構によって破  
壊されている可能性が強く、正確な規模は不  
明である。おそらく、東西棟の建物と推測  
される。梁間全長は445cm、北側の桁行柱間  
が240cm、南側の桁行柱間は230cmを測る。梁  
間の中央にある柱穴は、この建物の柱穴か疑  
問もあるが、北西角の柱穴からの距離は225  
cmであった。北東の柱穴で柱のめり込み痕が  
認められ、直径は18cmを測る。(岡本)

建物11 (第155・168図)

18C区と19C区の境界、調査区の北端で検  
出された。1間×1間の掘立柱建物である  
が、後述するような形状から判断すると、堅  
穴住居の床面が後世の削平を受けて消滅し、  
4本の柱穴のみが残存した可能性が高い。柱

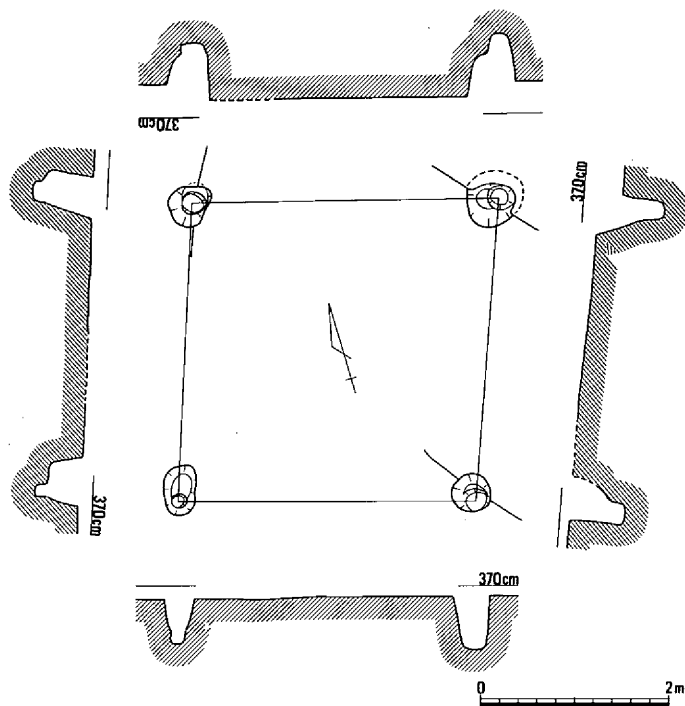


第166図 建物9



第167図 建物10





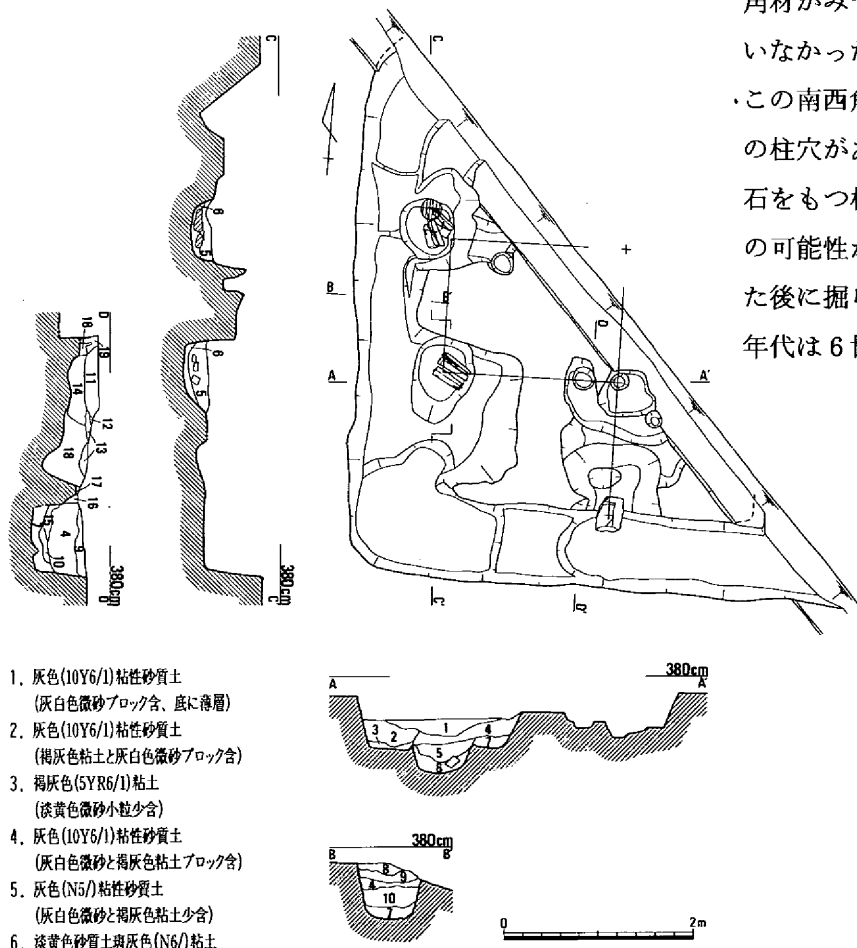
第168図 建物11

穴の規模は、長径が42~53cm、深さは47~74cmを測る。柱間は、南辺が315cm、東辺は322cm、北辺は325cm、西辺が315cmとほぼ等しい。平面形はやや歪んだ方形をなしている。(岡本)

建物12 (第155・169図、図版24-2)

19C区、調査区の北端で検出された。約半分を発掘したとみられる。通常の掘立柱建物とは型式を異にする。もっとも大きな特徴は建物を方形に取り囲む周溝の存在である。周溝は一辺が550cm程度と推定され、幅は65~85cm、深さは65cmを測る。周溝の壁は垂直に近く、断面形は箱形を呈す。周溝の底には段が所々にあり、角の部分で深くなっていた。検出された柱穴は4基で、西辺の2基では礎石や敷かれた角材が見つかったが、柱根は残存していなかった。柱間は140cmであった。この南西角の柱穴から東185cmに1基の柱穴があり、それから140cm南で礎石をもつ柱穴が検出された。棟持ち柱の可能性もある。周溝は柱が立てられた後に掘られたと観察された。建物の年代は6世紀中頃と推測される。

(岡本)



1. 灰色(10Y6/1)粘性砂質土  
(灰白色微砂ブロック含、底に薄層)
2. 灰色(10Y6/1)粘性砂質土  
(褐灰色粘土と灰白色微砂ブロック含)
3. 褐灰色(5YR6/1)粘土  
(淡黄色微砂小粒少含)
4. 灰色(10Y6/1)粘性砂質土  
(灰白色微砂と褐灰色粘土ブロック含)
5. 灰色(N5/)粘性砂質土  
(灰白色微砂と褐灰色粘土少含)
6. 淡黄色砂質土塊灰色(N6/)粘土

7. 褐灰色(7.5YR5/1)粘土
8. 灰オリーブ色(5Y6/2)粘性砂質土  
(黄灰色粘土ブロック含)
9. 灰オリーブ色砂質土斑褐灰色(10YR6/1)粘土  
(ブロック混合)
10. 褐灰色粘土斑黄灰色(2.5Y5/1)粘土  
(ブロック混合、灰白色微砂ブロック含)
11. 褐灰色粘土塊灰白色(10YR7/1)砂質土
12. 灰白色(5Y7/1)砂質土
13. 褐灰色(7.5YR6/1)砂質土
14. 灰色(7.5Y6/1)砂質土  
(褐灰色粘土と淡白色微砂ブロック少含)
15. 灰白色微砂斑褐灰色(10YR5/1)粘土  
(ブロック混合)
16. 灰色(7.5Y6/1)砂質土  
(褐灰色粘土と灰白色微砂ブロック少含)
17. 灰褐色(5YR5/2)粘土
18. 褐灰色(7.5YR6/1)粘土
19. 淡黄色(5Y8/3)微砂

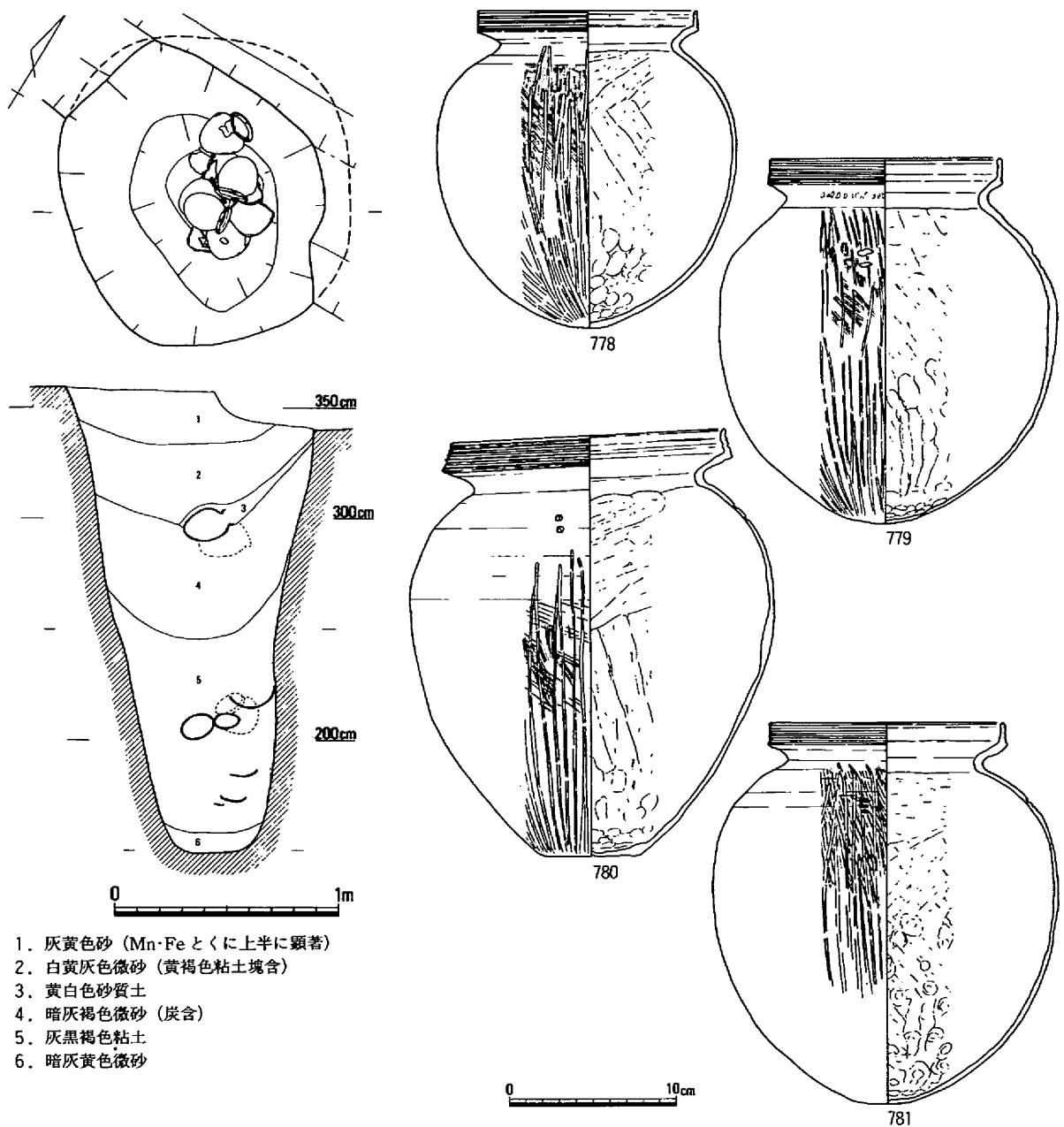
第169図 建物12

(3) 井 戸

井戸7 (第153・170・171図、図版25—1. 57)

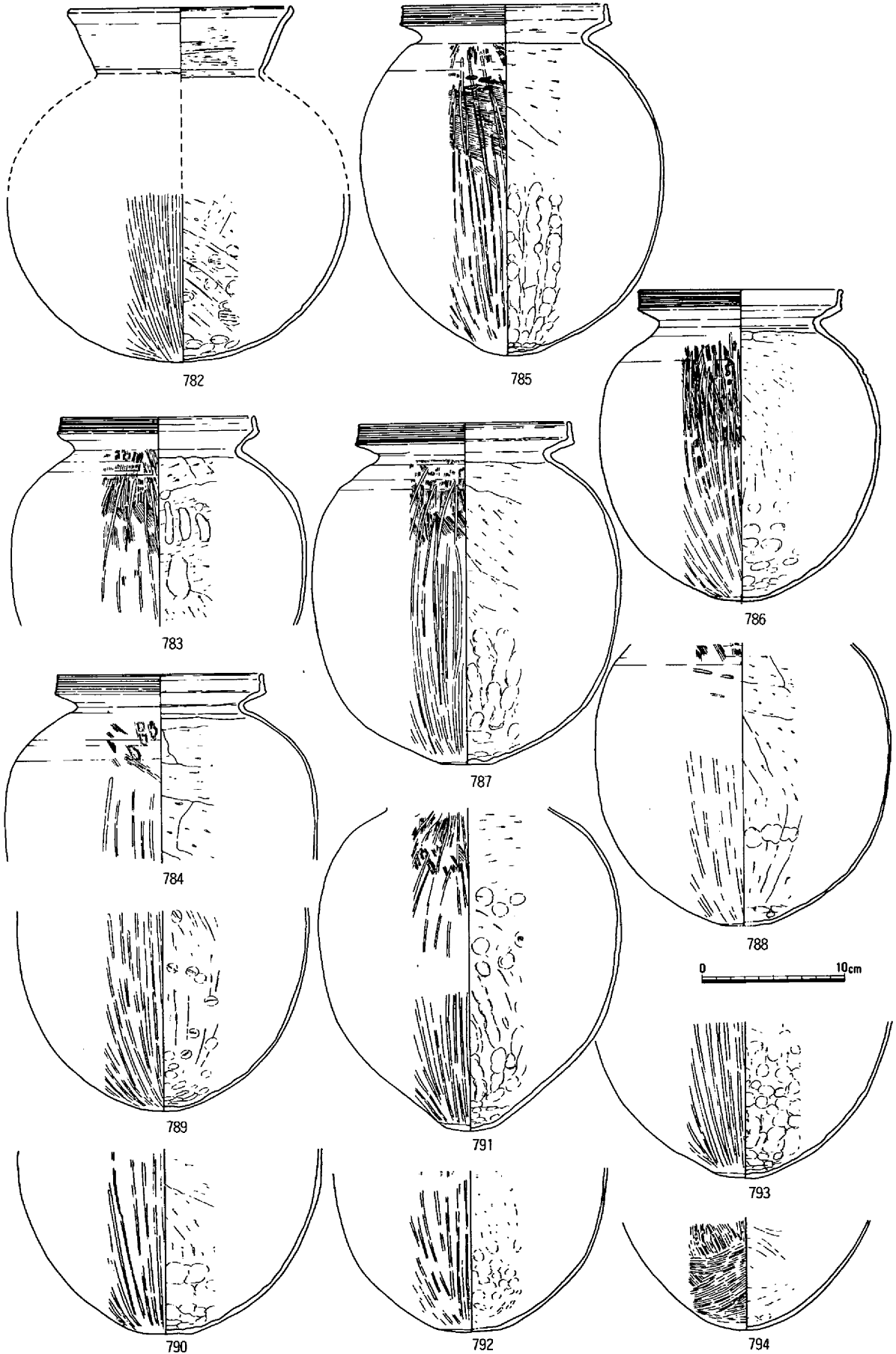
近現代溝に上部北半を削平され、竪穴住居11の南東側に検出された。推定では平面形は径約1.4m弱のほぼ円形であったと思われ、深さは約2.1mと非常に深い。

埋土は6層に分別されるが、5層を除いて全体に砂質分が強い。遺物は口縁端面にクシガキ沈線を繞らせる甕が大半を占め、3～5層に比較的まとまって出土している。個体ごとに少し詳しく述べれば、778・779が3～4層、780・781・785・786が5層中位、そのほかが5層下位であり、5層中位までの甕はいわゆる完形であった。図示した土器のほかには、同甕の口縁部2片と後・Ⅲ～Ⅳ期の壺・高杯・碗の破片各1片があるに過ぎない。また、完形の甕のうち778以外には肩部に円または長楕円



1. 灰黄色砂 (Mn・Fe とくに上半に顕著)
2. 白黄灰色微砂 (黄褐色粘土塊含)
3. 黄白色砂質土
4. 暗灰褐色微砂 (炭含)
5. 灰黒褐色粘土
6. 暗灰黄色微砂

第170図 井戸7、同出土遺物(1)



第171図 井戸7 出土遺物(2)

形の刺突文を2～4個もち、とくに781・785の窪んだ部分には板目状の痕跡も観察される。

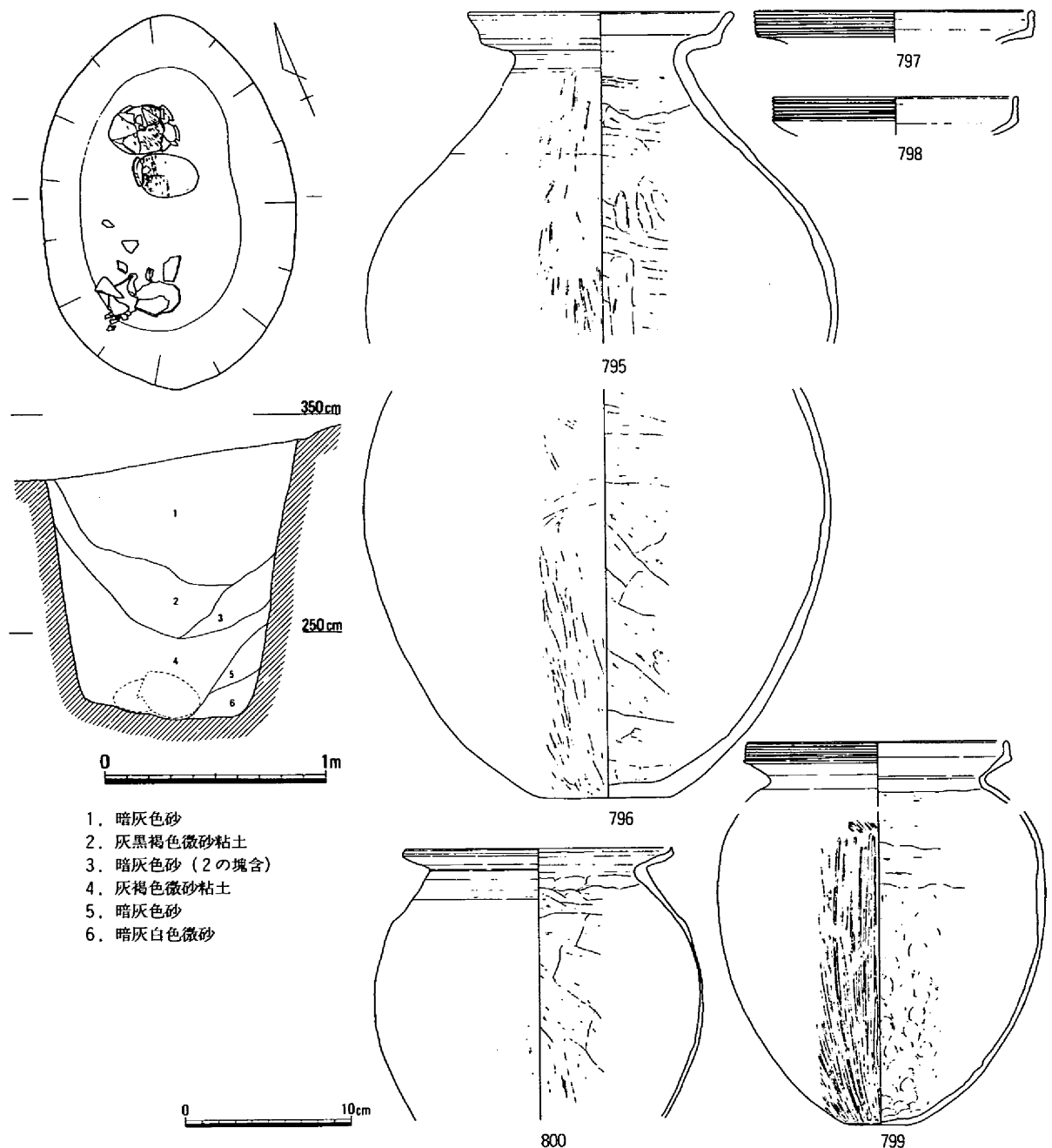
土器の年代は、クシガキ沈線甕の形態により百・古・I期に比定されるが、口縁端面にヘラガキ平行線文を繞らせる甕780だけは、形式的にはそれらに先行する百・後・IVの新相を示す。（柳瀬）

井戸8（第153・172・173図、図版25—2・57）

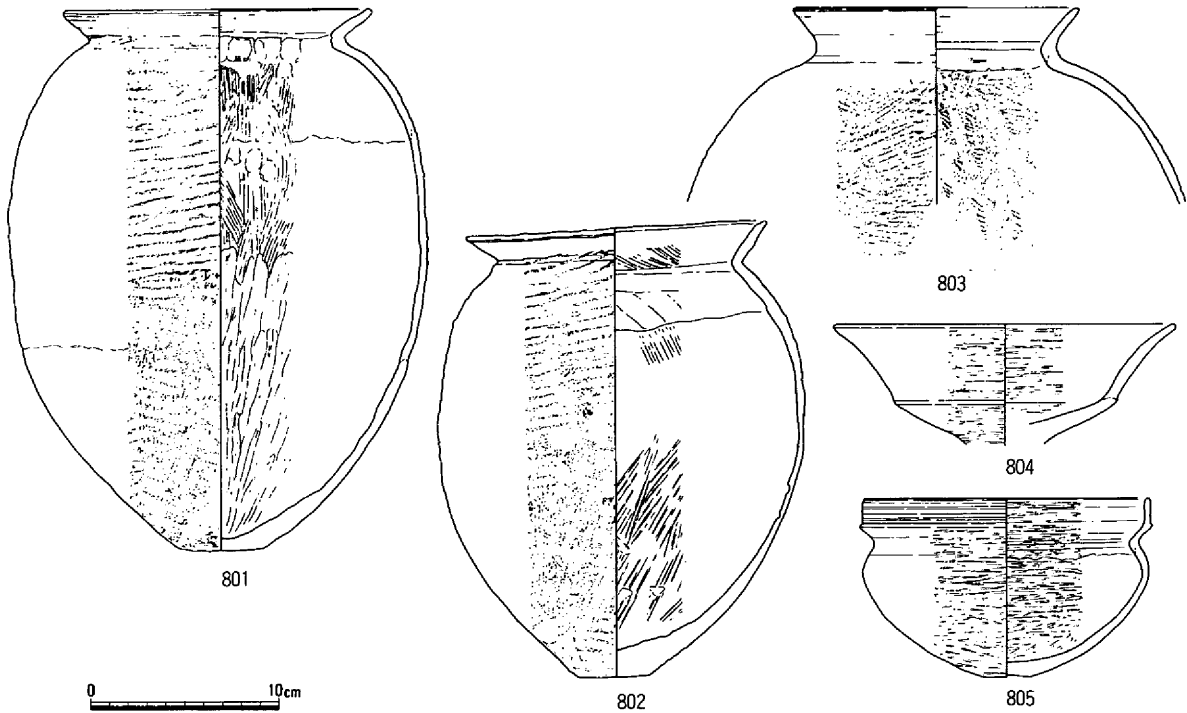
近現代溝に上部全体を大きく削平され、9C区に検出された卵形の井戸である。断面形は逆長台形を呈し、掘り方の傾斜は急である。長軸約1.7m、短軸1.2m弱、深さは最大で約1.3mを測る。

埋土は6層に細別され、各層の土質と堆積状況は井戸7に類似する。土器は、ほぼ完形の801・802の甕が北寄りの底に接して検出されたほか、大半は井戸底に近い4層下部から出土している。

土器はいずれも器表面が痛んでおり、長期間使用されたことが察せられる。甕は口縁端面にクシガ



第172図 井戸8、同出土遺物(1)



第173図 井戸8 出土遺物(2)

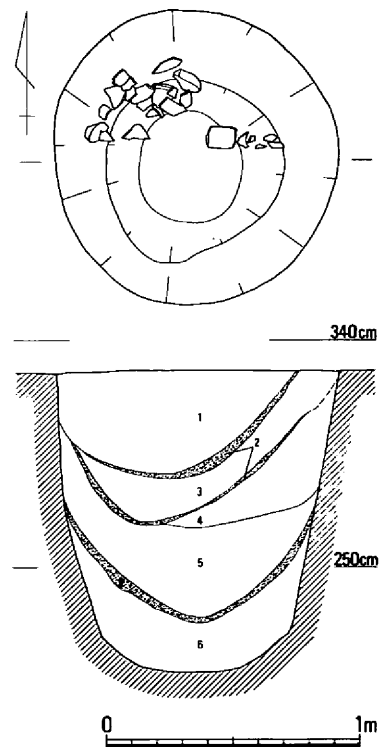
キ沈線を施す797~799、くの字に開く口縁端部を上方にわずかに拡張させる800、くの字口縁で器表面にタタキメを施す801~803の3種類がある。後二者は在地ではなく、それぞれ讃岐系・中部瀬戸内島嶼系とみられる。801は、タタキメの方向や粘土接合痕などから、3分割にしての成形過程の状況が看取される。時期は百・古・Iである。(柳瀬)

井戸9 (第153・174・175図、図版57)

井戸8の南に約2m離れ、同様に削平された状態で検出されたほぼ円形の井戸である。断面形は典型的なU字形を呈す。規模は径1.2m弱、深さ約1.2mを測る。

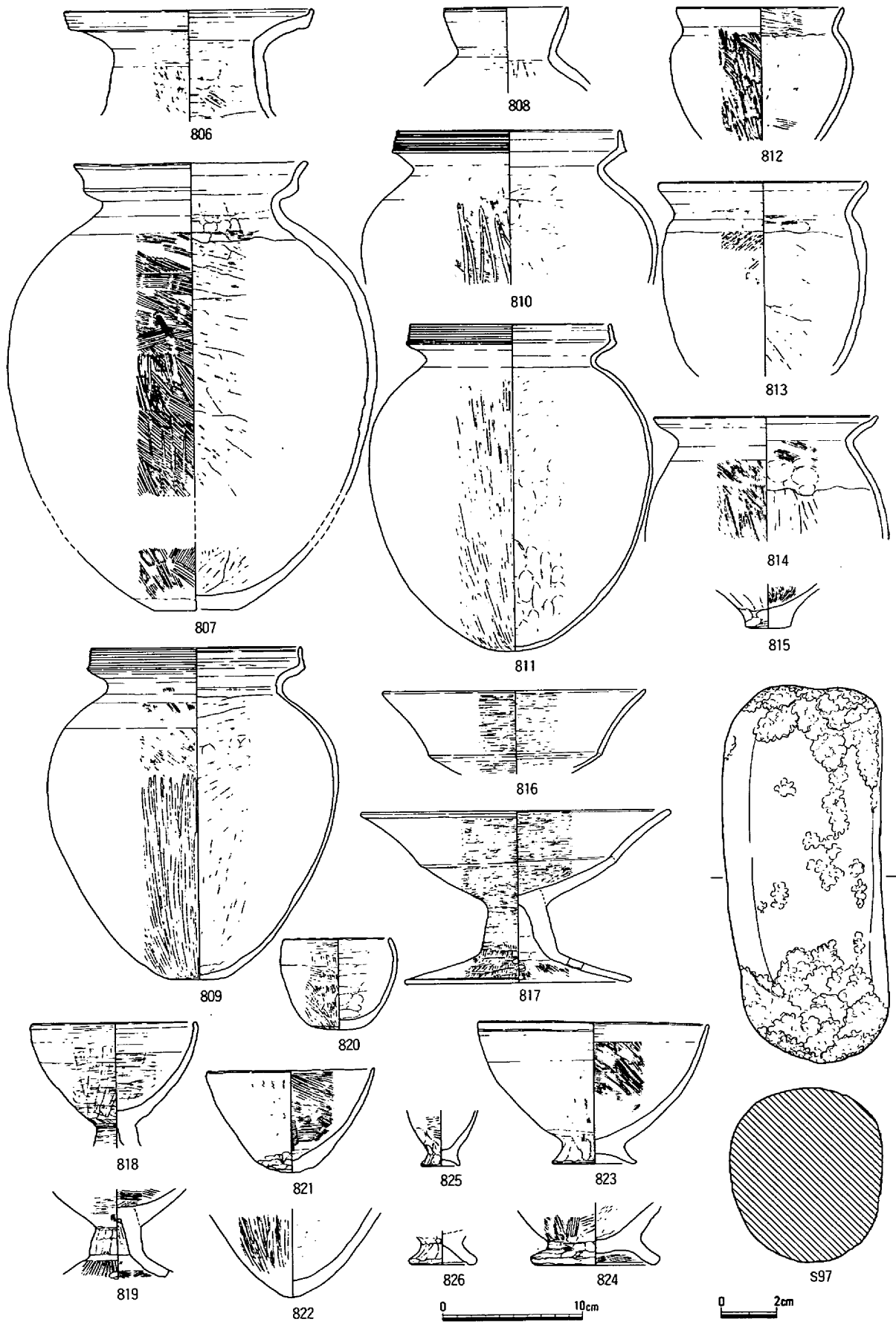
埋土は4つの層に大別され、中央に低い自然堆積の状況が看取される。また、それらの層の堆積段階を示すかのように、1・3・5層の下部にはそれぞれ厚さ1~4cm位の炭層が堆積している。遺物はおもに1・5層下部のそれぞれの炭層面に多くみられ、後者に806・817・818・826が伴うほかは前者に伴う。ただし、例外的に807は両者、811は3つの炭層面の破片の接合をみている。土器の大半は破片あるいは図上での完形復元であり、いわゆる完形はない。S97は花崗岩の敲石であるが、弥生時代後期前半の可能性もある。

下層出土の土器に後・Ⅳの特徴をもつものも含むが、全体的には百・古・Iの時期とみてよい。(柳瀬)

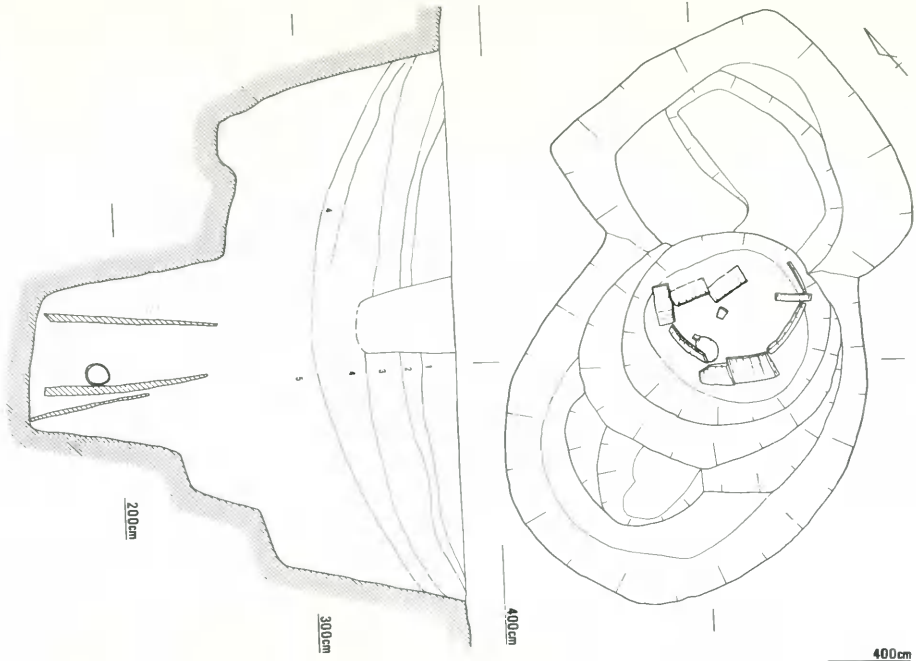


1. 暗灰色微砂(炭混)
2. 炭層
3. 茶灰色微粗砂
4. 黄灰色粘質砂
5. 灰茶褐色粘質土(黄褐色土塊含)
6. 灰黄褐色粘質土

第174図 井戸9



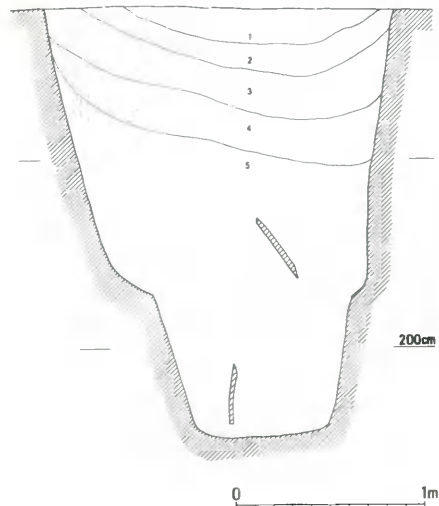
第175図 井戸9 出土遺物



## 井戸10 (第153・176・177図、図版26-1)

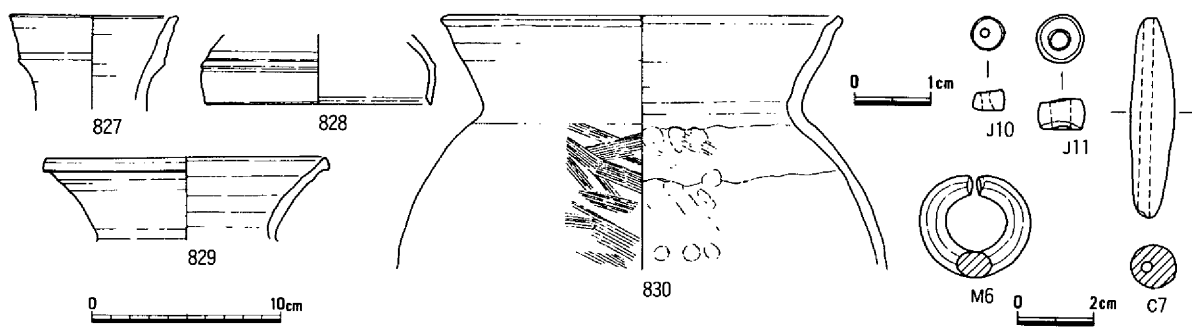
竪穴住居11および同7の一部を掘り込んで、9C区に存在する不整形の掘り方をもつ井戸である。当初検出の段階では、楕円形と菱形の両プランをもつ井戸または土壌の切り合った状態が想定されたが、断面図のとおり両者に切り合い関係は認められない。平面の長さは最長部で約3.2m、最短部で1.4m弱、深さは最深部で2.3m弱、菱形の掘り方底で1.2m前後を測る。

掘り方全体のはほぼ中心に井戸本体があり、底から上部への約1m間には、板状の井側が9枚残存していた。井側は土圧等で原位置を正確には保ってはいないが、径70cm程の円形に組まれていたと思われる。また、井戸下半の5層の中での分層は認められていないものの、これらの土層の堆積状態は両掘り方が同時に埋まった、したがって廃絶時または廃絶後の一時期にそれらが同時に開いていたことを示し、例えば柱の抜き方を大規模にしたような行為が行われた可



- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 1. 茶灰褐色微砂(Mn・Fe 沈着) | 4. 暗灰色粘土      |
| 2. 暗茶褐色微砂(Mn・Fe 沈着) | 4. 暗灰色粘土+黄色土塊 |
| 3. 灰茶褐色微砂(Mn・Fe 沈着) | 5. 暗(青)灰色粘土   |

第176図 井戸10



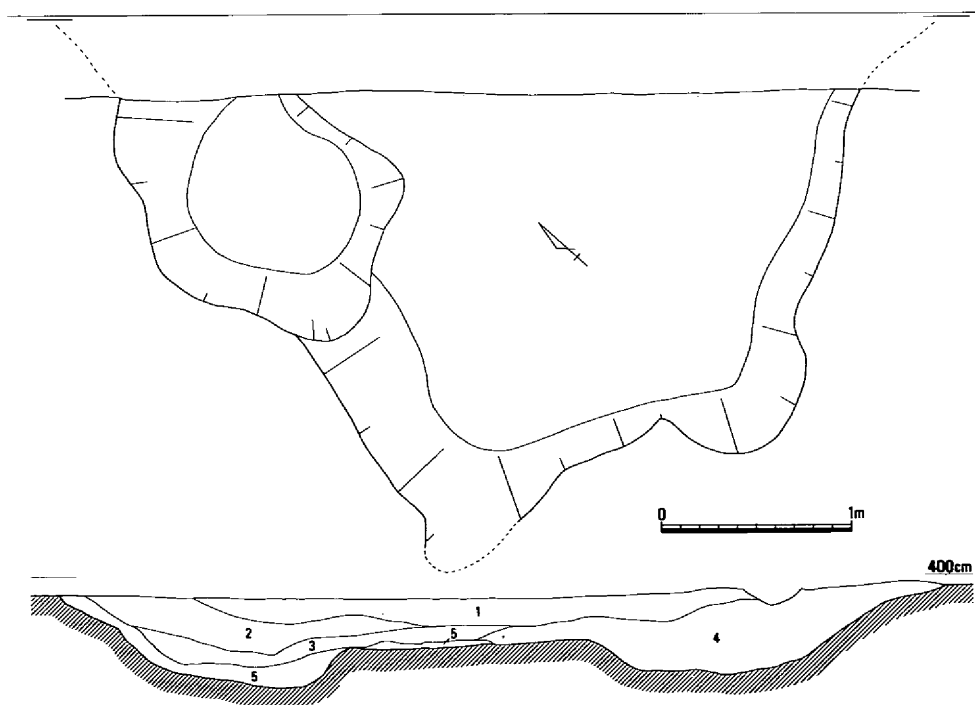
第177図 井戸10 出土遺物

能性も否定できない。遺物は、J10・11が上位の層のほかは5層、そのうち金環M16は菱形掘り方の底に接して出土している。土器の年代は5世紀初と同末～6世紀初頭の二者がある。 (柳瀬)

(4) 土 壙

土壙59 (第153・178・179図、図版56)

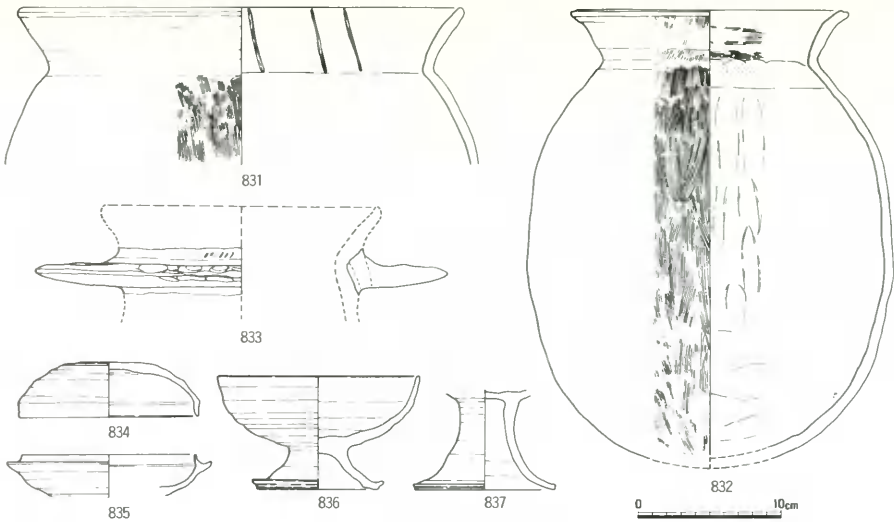
10B区と11B区の境界、調査区の北端で検出された。全体の半分程度を発掘したものと思われる。平面形は単純ではなく、肩部の線が入り組んでいる。調査区の北端で幅が375cmを測る。壙壁の傾斜は緩く、底部はかなり凹凸をもっている。土壙の南東部分が深くなっているが、北西部分でも一段深い落ち込みがあった。もっとも深いところで深さは40cmであった。埋土を観察すると、その堆積は複雑



- |                         |                   |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 黒褐色粘性砂質土 (炭粒・焼土塊多量)  | 4. 灰褐色粘性微砂 (土器少々) |
| 2. 暗灰褐色粘性微砂 (炭粒少、土器片多し) | 5. 淡灰褐色粘性微砂 (炭少々) |
| 3. 暗灰褐色粘性微砂 (炭粒多し、土器少)  |                   |

第178図 土壙59





第179図 土壙59 出土遺物

で、北から南、また北と堆積する部分に変化している。1層と3層では炭粒や焼土塊が多く含まれ、2層では土器片が多かった。出土した土器の年代は6世紀末から7世紀前半である。(岡本)

### (5) 溝

#### 溝25・26 (第153・180図)

両者ともおもに9B区を中心に、北東側の調査地区から続いて検出された。9B区の中で交差しているが、どちらも埋土は灰黄褐色の砂質土で切り合い関係は微妙ながら、溝26が後出である。いずれも幅80cm～1m前後、深さ10cm前後を測る。遺物は弥生後期の土器片を中心に比較的多く出土しているが、数片の須恵器片および白玉等の出土により6世紀末から7世紀初頭とみられる。(柳瀬)



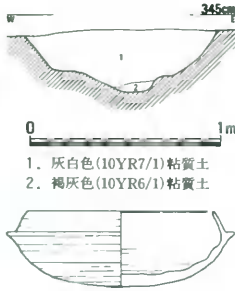
第180図 溝25・26 断面、同25 出土遺物

#### 溝27 (第153・181図)

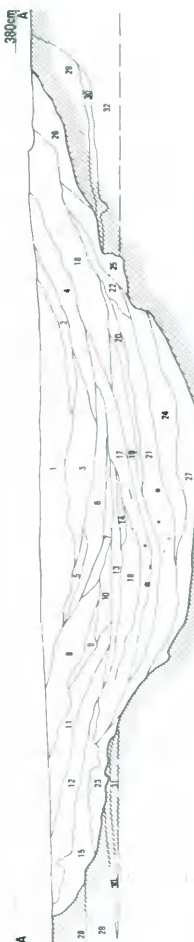
9B～10C区にかけてほぼ南北方向に検出された、幅60cm前後、深さ10～20cmの溝である。土器は百・後・1～古・1の破片が整理箱1箱分も出土しているが、北東側の調査地区での切り合い関係では溝26に後出するため、古墳時代後期後半らしい。(柳瀬)



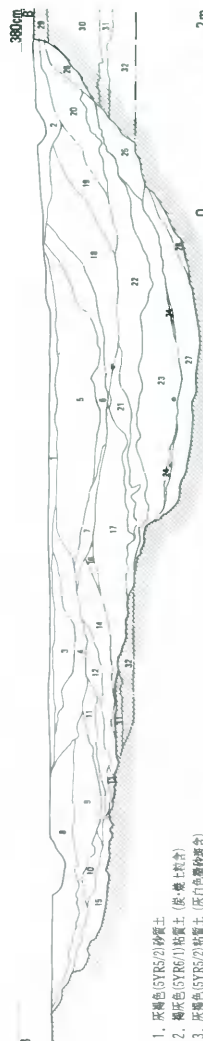
第181図 溝27 断面



第182図 溝28 断面、  
同出土遺物



1. 明褐色(7.5YR7/1)粘性土 (下部に灰白色の層を含む)
2. 灰白色(10YR8/1)粘砂
3. 褐色(10YR6/1)粘質土 (灰白色層を含む)
4. 1と同
5. 灰白色(10YR8/1)粘砂
6. 赤褐色(2.5Y7/3-5Y7/4)砂 (赤色粘土層を含む)
7. 灰赤(1-7色)2.5Y6/2砂 (赤色粘土層を含む)
8. 明褐色(7.5YR6/1)粘性土 (灰白色層・粘質土を含む)
9. 灰白色(10YR8/1)粘砂 (赤褐色層を含む)
10. 赤褐色(2.5Y7/3-5Y7/4)砂 (赤色粘土層を含む)
11. 明褐色(10YR6/1)粘性土 (下部に灰白色の層を含む)
12. 灰褐色(10YR6/1)粘性土 (1)と(1)色調や暗い)
13. 淡黄色(5Y8/3-8/4)砂 (赤色粘土層を含む)
14. 明褐色(10B6/7)粘砂
15. 明褐色(10YR5/1)粘質土 (上部と・赤土層を含む)
16. 明褐色(10B6/5)粘砂 (明褐色土層を含む)
17. 灰赤(10Y4/1)粘性土
18. 明褐色(10YR5/1)粘質土
19. 灰赤(10Y4/1)粘性土 (下部に粘土層を含む)
20. 灰赤(10Y4/1)粘質土
21. 灰赤(5Y8/1)粘質土 (植物遺体を含む)
22. 灰赤(2.5Y7/2)粘性土
23. 淡黄色(2.5Y7/4)粘砂
24. 灰赤(5Y4/1)粘性土 (植物遺体や多量、灰白色砂・ロ・クを含む)
25. 淡黄色(2.5Y7/4)粘砂
26. 明褐色(10YR7/6)粘性土
27. 明褐色(5B7/1)粘性土
28. 灰赤褐色(10YR6/1)粘砂 (土層時代に面を呈す)
29. 灰赤褐色(10YR5/3)粘性土 (赤土層に面を呈す)
30. 明褐色(10YR5/1)粘土 (赤土層に面を呈す)
31. 赤土層に面を呈す
32. 明褐色(10YR6/6)粘質土



1. 灰褐色(5YR5/2)粘質土
2. 灰褐色(5YR6/1)粘質土 (灰・粘土層を含む)
3. 灰褐色(5YR6/2)粘質土 (灰白色層を含む)
4. 灰白色(7.5YR6/2)粘砂と灰褐色(7.5YR6/2)粘砂の互層 (灰赤や多量を含む)
5. 灰褐色(5YR6/1)に赤褐色(2.5Y6/2)粘砂と灰白色(5Y8/2)粘砂の互層 (灰赤を含む)
6. 灰褐色(5YR6/1)に赤褐色(2.5Y6/2)粘砂と灰褐色(7.5YR6/2)粘砂の互層 (灰赤を含む)
7. 灰褐色(5YR6/2)粘質土 (灰白色層を含む)
8. 灰褐色(7.5YR6/1)と灰白色(2.5Y8/2)粘砂の互層
9. 灰褐色(2.5Y7/3)粘砂
10. 灰褐色(5YR5/1)粘質土
11. 淡黄色(2.5Y7/3)砂
12. 灰赤(2.5Y6/1)粘質土 (下部に淡黄色層を含む)
13. 灰褐色(5YR5/1)粘質土 (灰白色層を含む)
14. 灰褐色(5YR6/1)と明褐色(2.5Y6/1)粘質土と(1)色調の互層 (灰赤を含む)
15. 明褐色(5YR5/1)粘質土
16. 明褐色(5YR5/1)粘質土 (明褐色層を含む)
17. 灰赤(5Y7/1)粘砂 (下部に淡黄色層を含む)
18. 灰赤(2.5Y6/1)粘砂 (下部に淡黄色層を含む)
19. 灰赤(2.5Y6/1)粘砂 (下部に淡黄色層を含む)
20. 明褐色(7.5YR5/1)粘質土
21. 灰赤(5YR6/1)粘質土 (灰・粘土層を含む)
22. 明褐色(5YR5/1)粘質土 (植物遺体を含む)
23. 明褐色(5YR5/1)粘質土
24. 灰赤(10Y6/1)砂 (灰・粘土層を含む)
25. 明褐色(2.5Y7/2)粘砂
26. 灰赤(10Y5/1)粘質土 (灰・粘土層を含む)
27. 灰赤(10Y5/1)粘質土 (灰・粘土層を含む)
28. 明褐色(5B6/1)粘質土
- 29-32. 同上

第183図 溝29 断面

溝28 (第155・182図)

16C・D区に位置し、溝29に平行しながら北から南に流走する溝である。その両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝72」に接続すると考えられる。溝の規模は幅100cm、深さ30cmを測る。底は2段に落ち込み、壁は急斜に立ち上がる。

出土遺物には、須恵器と少量の鉄滓がある。

溝の時期は、出土した須恵器の杯身の特徴から、6世紀前半頃と考えられる。(高田)

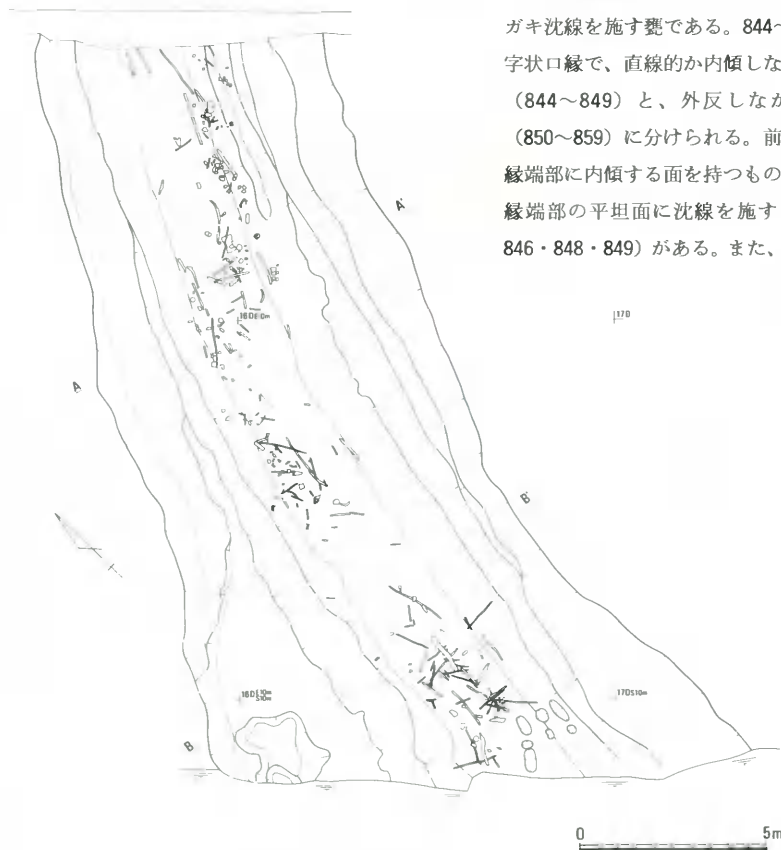
## 溝29 (第155・183～189図、図版26～28・53・58・59・69)

16・17C・D区に位置し、北から南に流走する溝である。これは、弥生時代前期の旧河道の東肩部に位置し、その東肩は弥生時代後期末の微高地の下がりにはほぼ一致する。つまり、弥生時代前期以来の低位部に掘削されたことがわかる。溝の両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝73」に接続する。溝は、土層断面や遺物の出土状況等から、規模を縮小しながら数回の掘削を経て、長期間機能していたと考えられる。このため、掘り上げ後の底面から肩の形状は複雑で、南西端は流路の蛇行によるテラス状の広がりが見られる。掘り上げ後の規模は、幅7.5～10.5m、深さ1.7mを測る。埋土は砂や粘土で、流水と滞水を繰り返しながら埋没した状況が窺える。

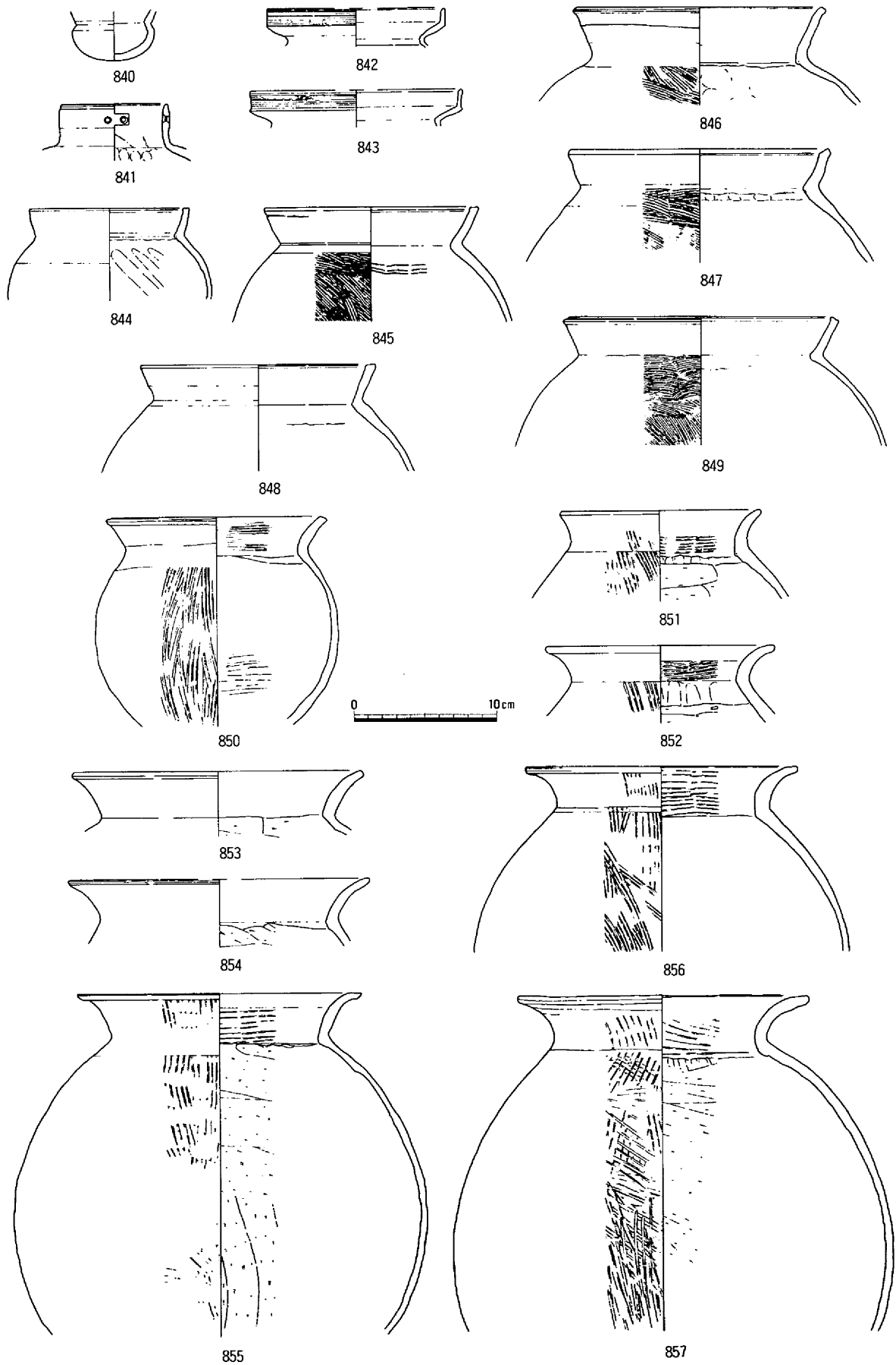
遺物には、大量の土師器と須恵器の他、玉類や木製品、鉄滓がある。また、溝の中位以下では、大量の植物遺体と種子が出土した。第184図は、ほぼこれら中位以下の遺物出土状況を示している。以上は、「溝73」の内容とほぼ同様である。なお、縄文土器や弥生土器、ササカイト製の石製品もみられるが、下層に位置する遺構の遺物と考えられることから、ここでは図示していない。

土師器には、壺(840・841)、甕(842～859)、鉢(860～864)、高杯(865～867)がある。842と

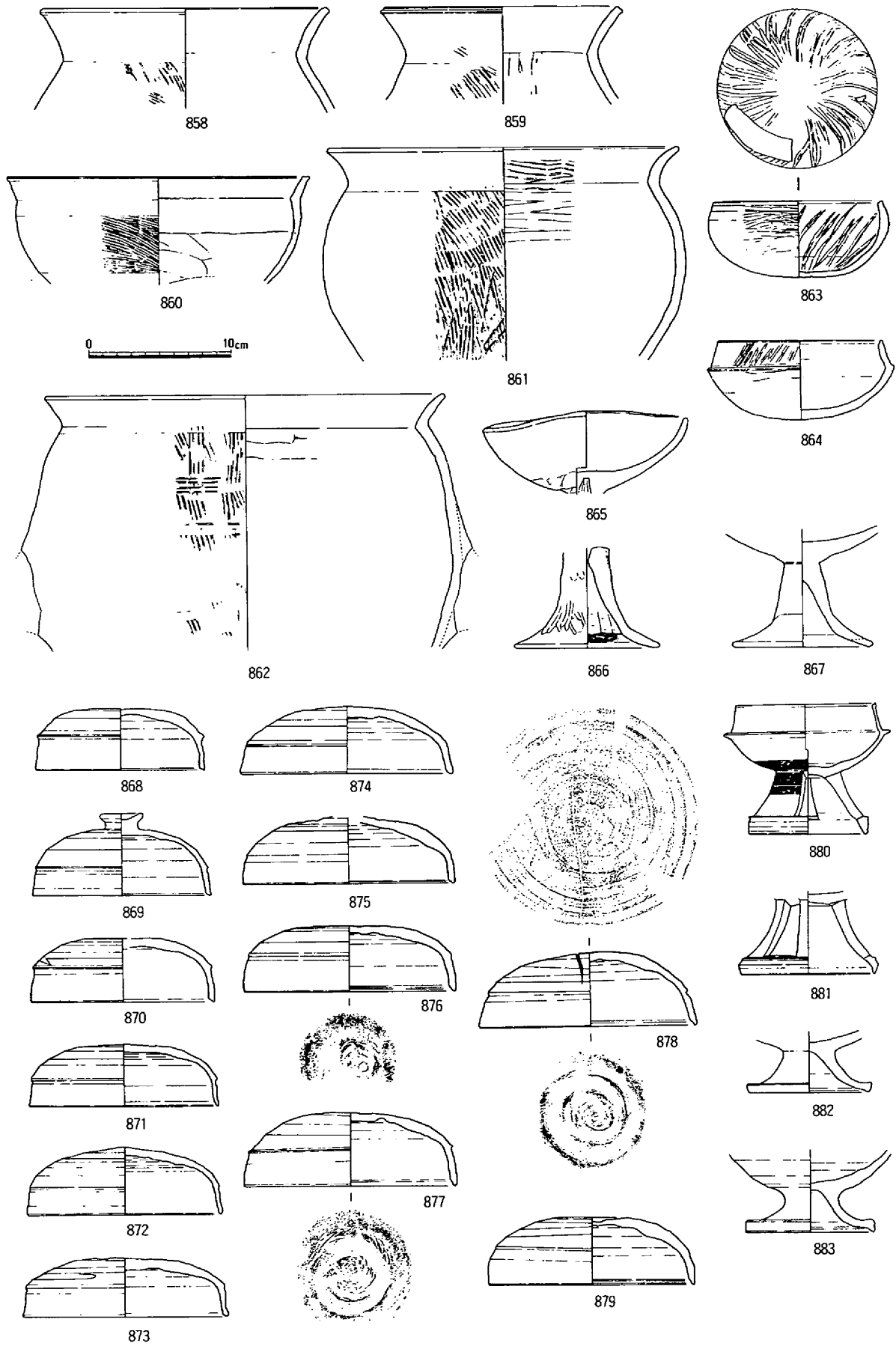
843は、二重口縁の立ち上がった外面にクシガキ沈線を施す甕である。844～859は、くの字状口縁で、直線的か内傾しながら開くもの(844～849)と、外反しながら開くもの(850～859)に分けられる。前者はさらに口縁端部に内傾する面を持つもの(847)と、口縁端部の平坦面に沈線を施すもの(845・846・848・849)がある。また、後者も口縁端



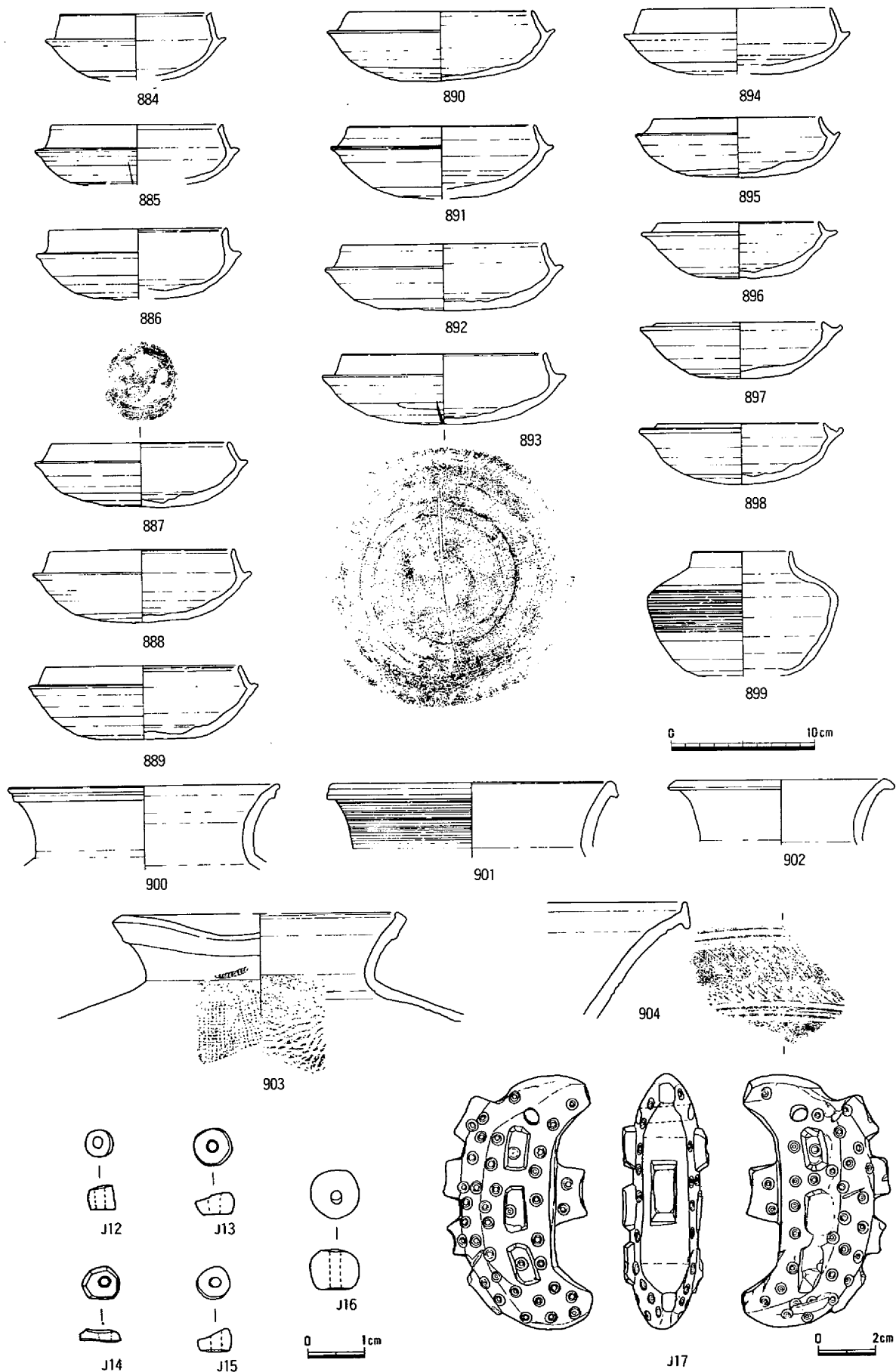
第184図 溝29 遺物出土状況(1/150)



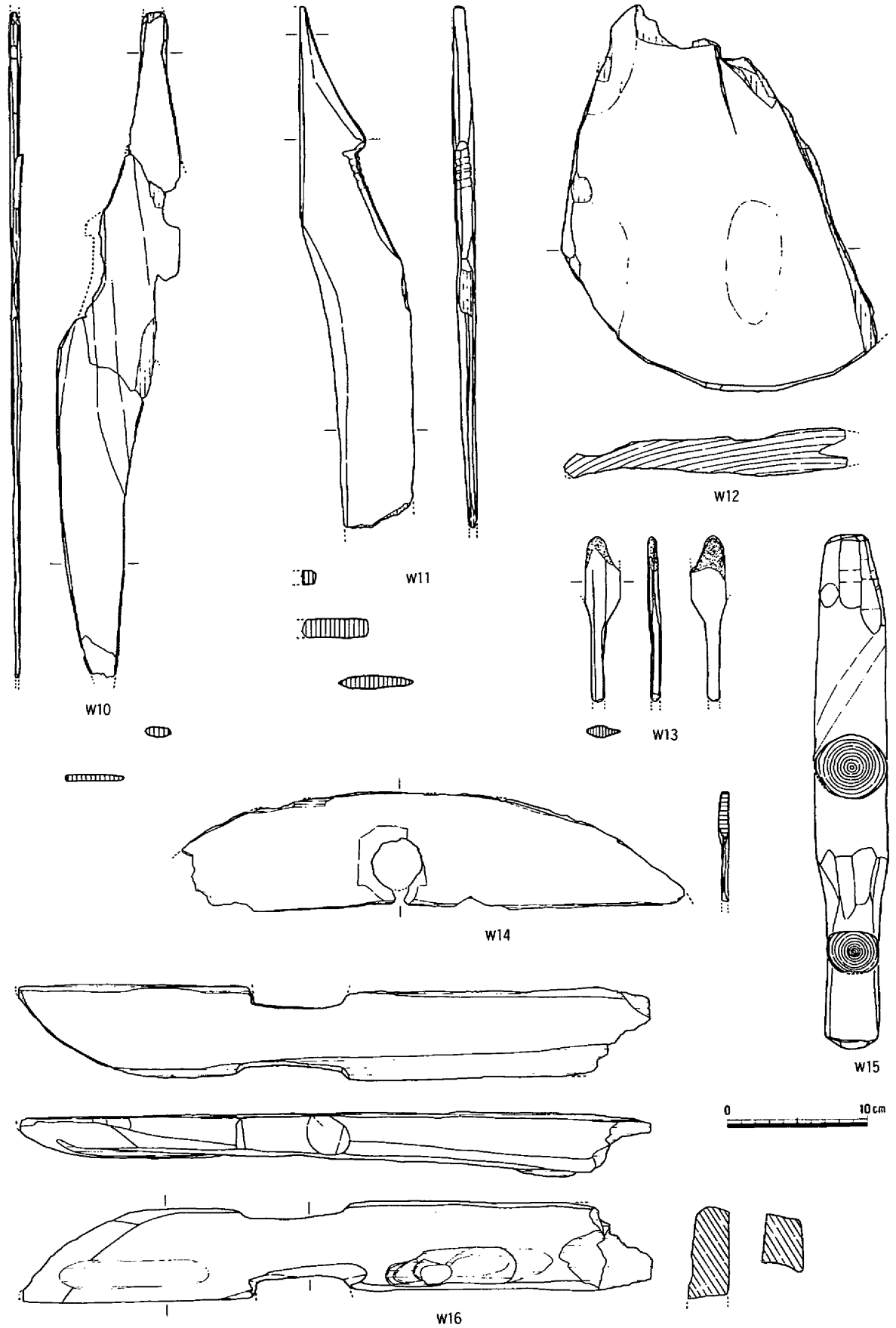
第185図 溝29 出土遺物(1)



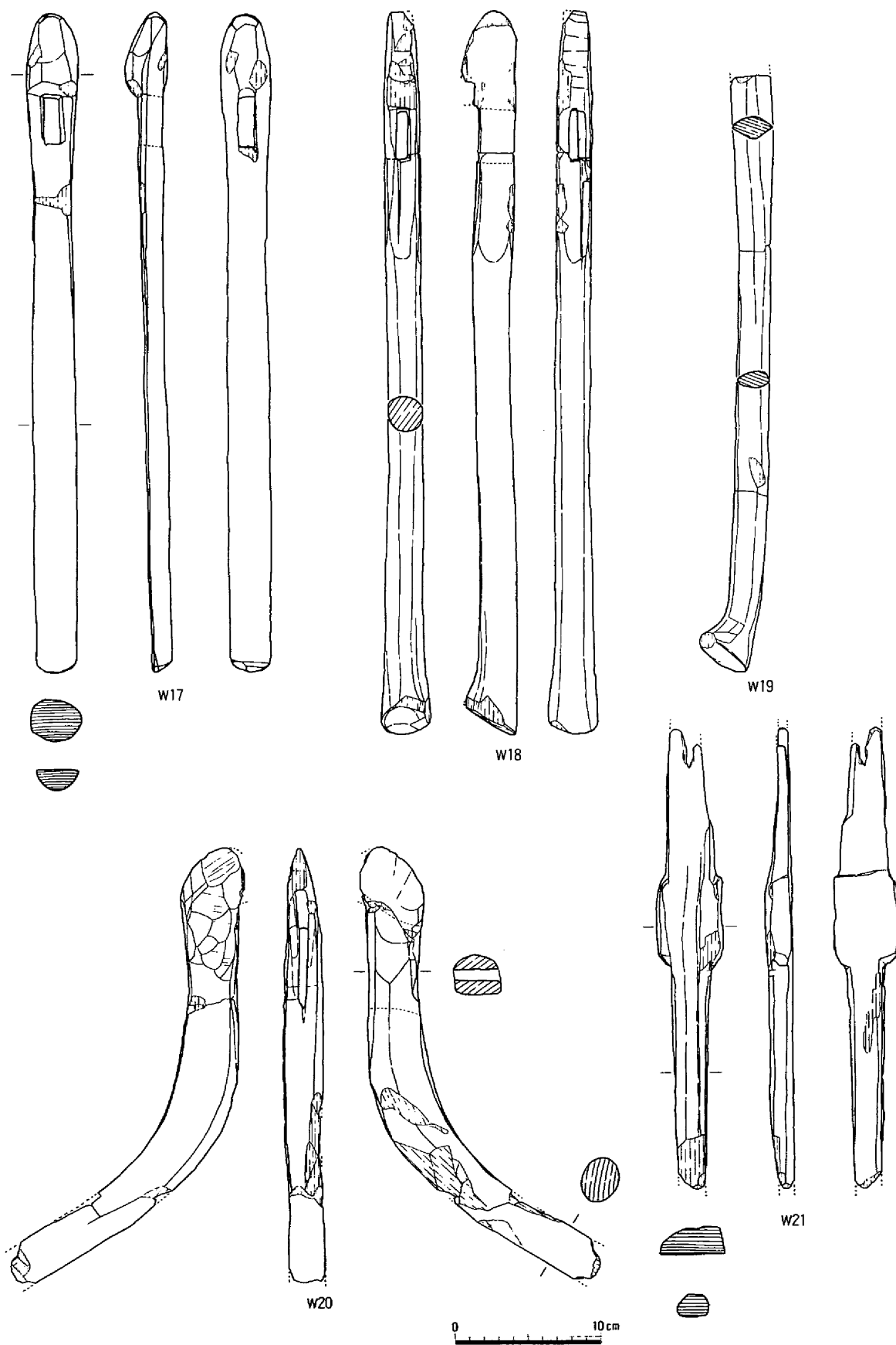
第186図 溝29 出土遺物(2)



第187図 溝29 出土遺物(3)



第188図 溝29 出土遺物(4)



第189図 溝29 出土遺物(5)



部を丸く収めるもの(851~857)と、平坦面を持つもの(850・858・859)がある。なお、後者の外面調整は、粗いハケメや工具アタリ痕のようなヘラミガキを施している。863と864は、形状の異なる鉢で、864は須恵器の杯身を模倣したものと考えられるが、両者は胎土の選択や成形と調整の技法において酷似するものである。つまり、胎土は精製粘土で、成形は粘土積み上げ後のナデとヨコナデにより、調整は黒色物塗布の後にヘラミガキを施している。特に863の内面と864の口縁部外面のヘラミガキは、暗文風となる。

須恵器には、杯蓋(868~879)、杯身(884~898)、高杯(880~883)、短頸壺(899)、甕(900~904)がある。878・885・893は、ヘラ記号を持つ杯で、876~878・887は、内面中央に当て具痕を持つものである。

以上の土器の時期は、上限が百・古・Ⅰ・Ⅱ、下限が7世紀前葉に求められる。中でも大量に出土し、その大半を占めるのは、5世紀末から6世紀前半代の土師器の甕と、須恵器の杯蓋・身である。

玉類は、滑石製の白玉(J12~15)と、土製の玉(J16)、滑石製の子持勾玉(J17)である。中でも子持勾玉は、断面が楕円形に近く、形の整うもので一円孔を配す。突起は腹部に1個、背部に4個、両側面に3個ずつ配し、さらに三又錐による小円圈を72個(+2個?)施している。出土位置は、17DからS10m杭付近で、東肩に近い標高330cm前後の黄灰色粘質微砂内である。

木製品は、又鋏(W10・11)、鎌(W13)、横鋏(W14)、横槌(W15)、柄(W17~20)、用途不明の部材(W16・21)、板状の未製品(W12)である。なお、取り上げ後の腐朽により、凶化し得なかったものに、臼、槌の子(紡錘)、田舟等がある。W10・11は「ナスビ形着柄鋏」と呼ばれているものだが、曲柄装着と考えられることから又鋏とする。また、W14は、本来刃縁が鋸歯状となる「えぶり」と考えられるが、欠損のため不明であり、ここでは広義の横鋏に含めたい。W17は、断面が半円形を呈し、柄としての機能に疑問が残ることから、組み合わせ部材の一部とも考えられる。W18は、板状鉄斧の柄か。W20は、その形状から曲柄としたが、頭部を加工して刃状にすることや、ほぞ穴のあり方は特異で、柄の具体的な使用方法は不明である。

以上の出土遺物から、溝は古墳時代を通じて機能していたと考えられる。特に5世紀末から6世紀前半代の大量の土器や木製品の出土は、当該期の旺盛な活動を窺せる。(高田)

#### 溝30(第155・190図)

18C・D区を北から南に直線的に流走する溝で、古代の溝35の底面で検出した。その北端は調査区外に延び、南端は深くなる溝35に切られて不明である。規模は幅70cm、深さ25~30cmを測る。断面形は逆台形を呈す。出土遺物には、少量の土師器と須恵器がある。

時期を決する資料はないが、後期と考えておきたい。(高田)

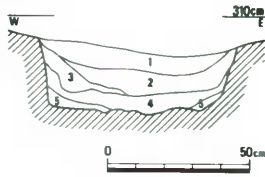
#### 溝31(第155・191図)

18・19C区に位置し、建物11・12、溝32・33に切られる溝である。建物11下で岐れ、北端は調査区外に延びる。また、東と西側は他の遺構に切られるため、その流水方向は不明である。規模は幅70cm、深さ35cmを測り、壁はU字形の底から段をもって立ち上がる。

出土遺物はすべて土師器である。905の直口壺と906の甕は、底面から若干浮いた状態で出土した。908の高杯の杯部は混入か。溝の時期は、遺物の特徴から、百・古・Ⅰと考えられる。(高田)

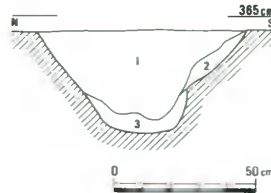
#### 溝32(第155・192図)

18・19C区に位置し、溝31を切る溝である。東西方向に流走するが、東端は調査区外に延び、西端

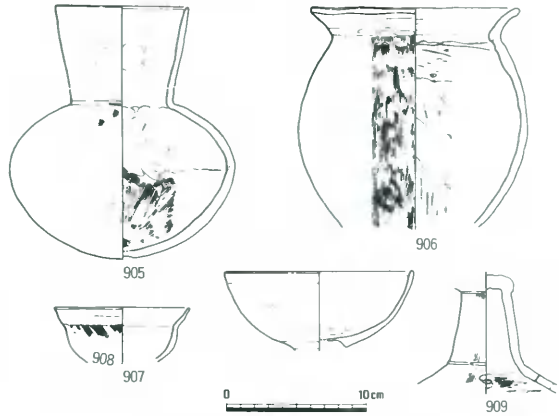


1. 明青灰色(10BG7/1)粘性微砂
2. 灰白色(5Y7/2)粘性微砂
3. 浅黄色(7.5Y7/3)微砂
4. 1と同じ
5. 灰色(N6/)粘土 (浅黄色微砂薄層含)

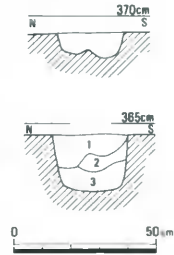
第190図 溝30 断面



1. 淡黄色微砂斑灰黄褐色(10YR6/2)粘性砂質土 (炭粒少含)
2. 灰黄褐色(10YR6/2)粘土 (淡黄色微砂小ブロック含)
3. 褐灰色(10YR6/1)粘性砂質土



第191図 溝31 断面、同出土遺物

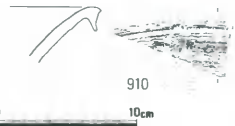


1. 灰白色(2.5Y7/2)砂質土
2. 褐灰色(7.5YR6/1)粘質土
3. 灰白色(5Y7/2)砂質土 (灰黄色砂質土ブロック含)

第192図 溝32・33



1. 灰白色(5Y7/2)微砂斑  
灰色(7.5Y6/1)粘性砂質土
2. 灰黄褐色(10YR6/2)粘土斑  
灰色(7.5Y6/1)粘性砂質土



第193図 溝34 断面、同出土遺物

は溝35に切られるため、その詳細は不明である。規模は幅20～30cm、深さ10cm前後を測る。断面形はほぼU字形を呈し、埋土は灰黄色砂質土である。出土遺物は少量の土器片のみで、時期を決する資料はない。溝31との切り合い等から、百・古・Iよりも新しいと考えられる。(高田)

**溝33 (第155・192図)**

19D杭の北を東西方向に流走し、溝31を切る溝である。その東端を建物12に、西端は溝35に切られ、流水方向は不明である。規模は幅25～45cm、深さ20cmを測り、断面形はU字形を呈する。

溝の時期は、検出状況から、溝31より新しく建物12より古いものと考えられる。(高田)

**溝34 (第155・193図)**

19C・D区に位置し、調査区の東端に沿って検出した溝である。北東から南西方向に流走すると考えられるが、北東端は調査区外に延び、南西端は溝35に切られる。規模は幅45cm、深さ20cmを測り、壁はほぼ平坦な底から段をもって急斜に立ち上がる。出土遺物は、少量の土器と須恵器片で、910は、須恵器の甕の口縁部である。以上から溝の時期は、5世紀後半以降と考えられる。(高田)

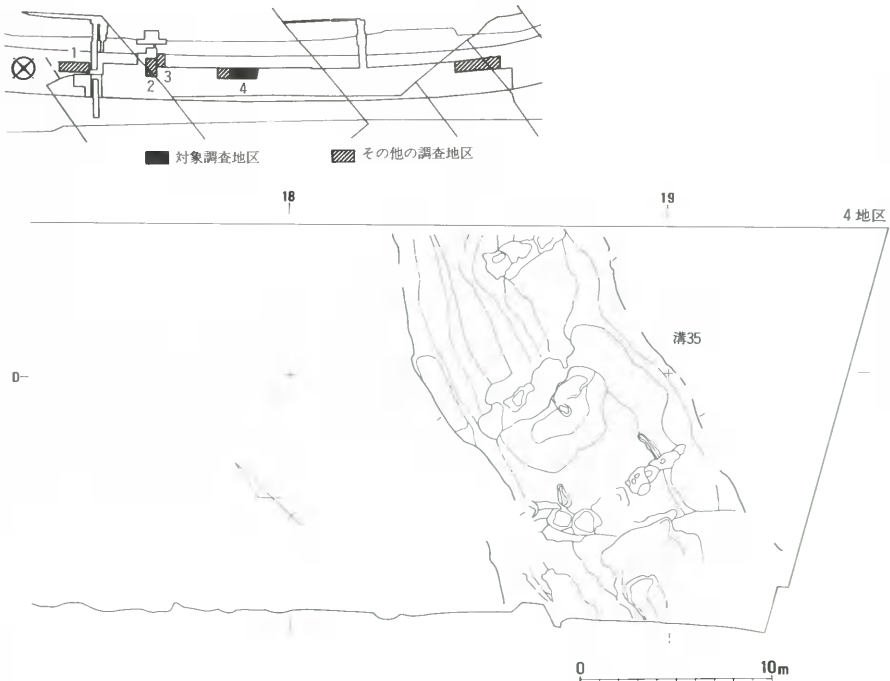
## 5. 古代の遺構・遺物

## (1) 溝

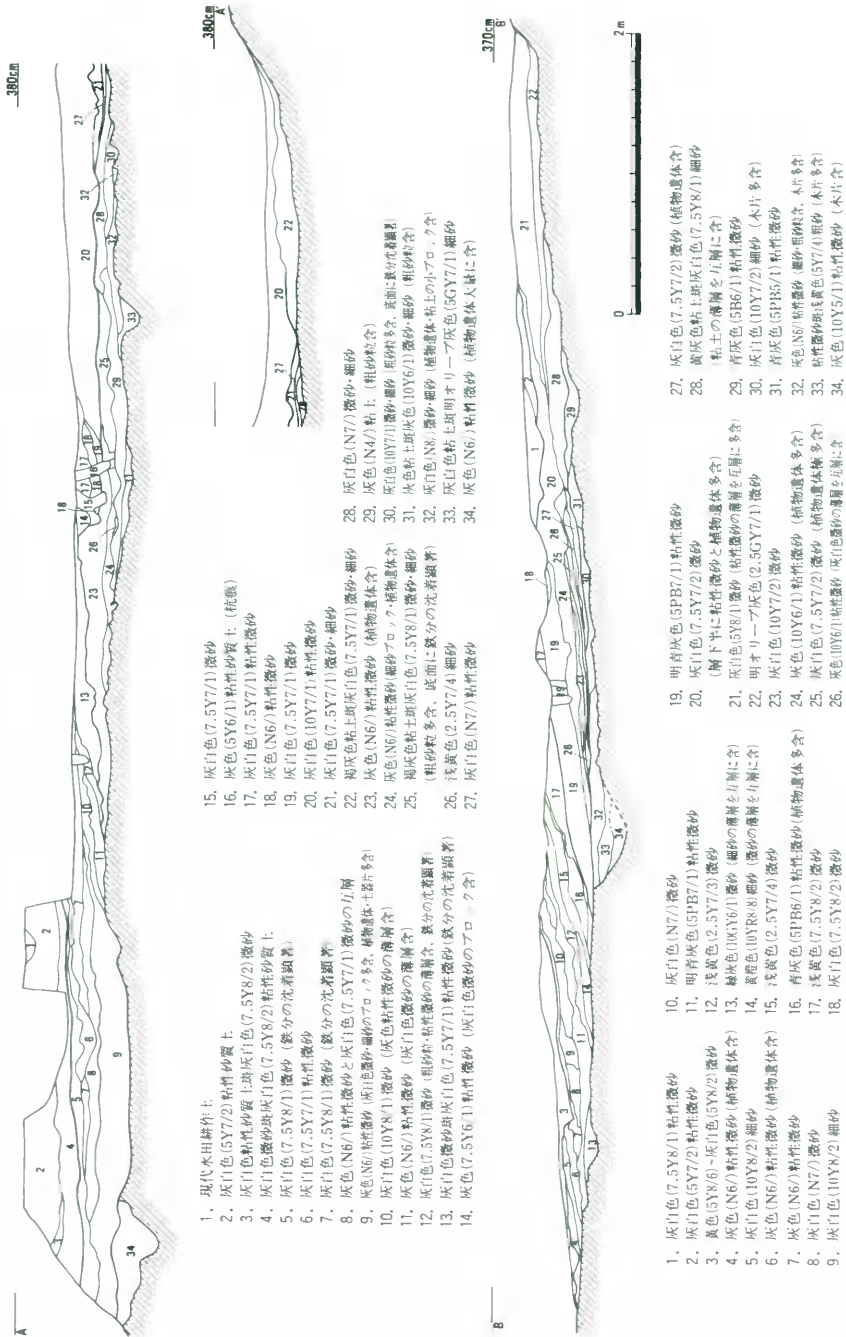
## 溝35 (第194～200図、巻頭図版2、図版59・70～72)

18・19C・D区に位置し、北から南に流走する溝である。両端は調査区外に延び、南端は近・現代の攪乱を受けるものの、『百間川原尾島遺跡2』の「溝87」に接続する可能性が高い。また、西肩は中世の溝45や近現代用水に切られている。規模は、上幅で11～13m、深さは溝の中央付近で検出面から70～100cmを測る。壁は、激しい凹凸の河床から、段を持ちながら緩やかに立ち上って肩に至る。

溝の埋土は、上層、中層、下層に大別され、流路を徐々に西肩側に片寄せせながら埋没していったことが判る。上層は、最も西に寄った最終流路で、西北部では明瞭に底面をもつ。13世紀後半代の出土遺物があり、本報告では溝47として後述する。第195図のA-A'断面(以下、A断面とする)の5～13層とB-B'断面(以下、B断面とする)の4～17層が該当する。中層は、溝内に最も広く堆積する微砂層で、植物遺体や獣骨を顕著に含む。A断面の14～28層とB断面の18～28層が該当する。下層は、植物遺体、特に木片を多く含んだ粘性微砂層である。ほぼ標高300～310cm以下の、溝の中央の低位部や井堰の周辺と落ち込み列、杭穴内に堆積する。図示した木製品や金属製品、石製品はすべてこの下層から出土している。A断面の29～32・34層とB断面の29～32層が該当する。



第194図 17～19区遺構配置(古代)



第195図 溝35断面



第196図 溝35 遺物分布、同断面(1/100)



河床では、北から落ち込み列1・井堰1・落ち込み列2・井堰2を検出した。いずれも溝を横切るように設けられ、それぞれの距離は、7.5m、6m、2.5mを測る。これらは、土層の堆積状況の検討から、溝の下層段階に廃絶した施設で、その在り方から同時に機能していたとは考え難い。

落ち込み列は、幅1～1.5m、深さ10～20cm単位の浅い落ち込みが直線的に連なるもので、若干の杭や杭穴もみられる。規模は、落ち込み列1が東西長4.5m、南北長1.5m、落ち込み列2は、東西方向から溝中央のやや西寄りて約45°北に折れ、東西長9m、南北長0.5～2mを測る。

井堰は、遺存する杭と杭穴からなるもので、その数は、井堰1が約60本と170個以上、井堰2が約30本と150個以上を数える。杭は丸杭で、先端を加工して尖らせ、樹皮を残す。径6～7cmのものが最も多い。中央部付近では河床面から30～40cm遺存するが、それ以上は欠損している。なお、抜けて流出した中には長さ1.5mを測るものがある。杭穴は、径6～8cmが多く、粗砂などが充填するものと、杭が土質化したものがある。両者の違いは廃絶時期差とも考えられるが、遺存する杭のみで井堰としての機能を果たしていたかは疑問で、保存条件の違いや杭の流出等も加味しての検討が必要である。

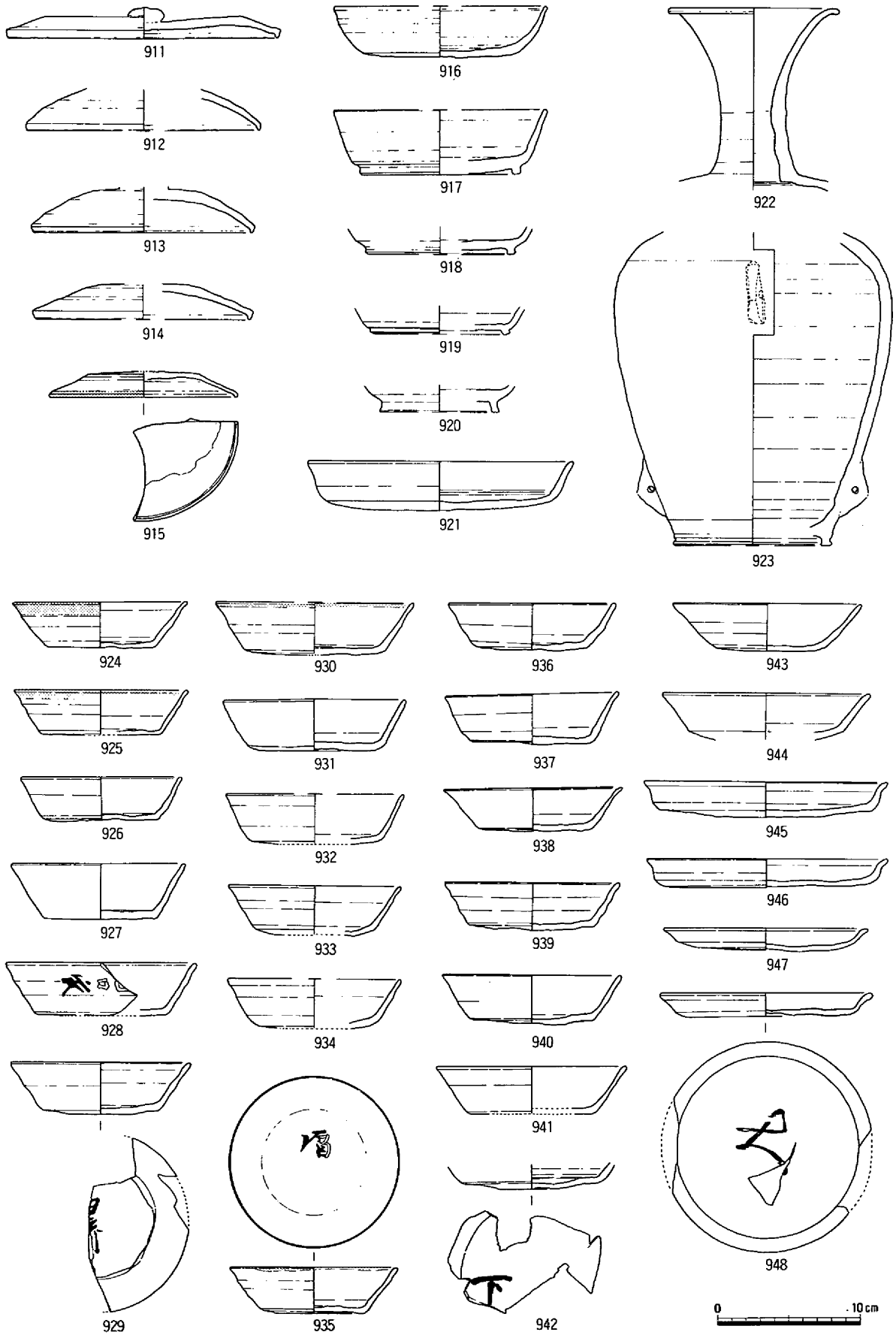
井堰1は、溝に直交する東西部分と、その両端から北寄りに30～70°振って斜めに延びる部分からなり、その平面形は逆台形を呈する。規模は、東西部分で長さ7m、幅2.50m、斜延部分の西側で長さ約7m、東側で約1.5mを測る。遺存する杭は5～50cm間隔に打ち込まれた列が、約50cmの幅で平行するもので、杭の打ち込み方向は一定しないが、中央付近は水勢に押されたものか、杭頭を下流側に向けるものが目立つ。また、井堰を中心に6.5m×5.5m、深さ50cmの範囲が落ち込んでいる。

井堰2の平面形は、井堰1と異なり、やや湾曲しながら溝に直交するか、落ち込み列2と同様に西側部分を約20°北に振るもので、規模は東西長12m、幅1.2mを測る。また、中央の5×1.2mの範囲には、杭列とその前面に植物遺体が遺存する。杭列は10～40cm幅に並ぶが、打ち込み方向は一定せず、基本的には直立していたようである。杭列前面は、径1～2cmの枝材を横木とし、それに直交してアソなどの草木を配し、さらに砂や粘性微砂を横木や草木と交互に組合せている。これらを押さえるような材はないものの、検出状況から井堰の構造物と考えたい。なお、15～30cm深くなる5m四方の範囲は、水流による洗掘部であり、杭列や植物遺体はこの低い部分に遺存している。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師器の他、平瓦、木製品、金属製品、石製品、土製品、獣骨、鉄滓、種子が出土している。須恵器は、杯蓋(911～915)、杯(916・924～935・949～952)、高台杯(917～920)、皿(921)、長頸壺(922・923)である。923は肩部以下1/6ほど残存するもので、胴下部の高台近くに耳を張りつけ、篋で成形した後一孔を穿っている。これは双耳になると考えられ、肩部付近に示したのもも推定される。922と923は別個体である。924～926・928～935の底部は押圧技法を用い、927はヘラキリで終る。いずれも腰部から口縁部に向かって「ハ」の字状に開口する。なお、915・924・925・930・935・950は、口縁部に重ね焼の痕跡をもつ。また、915は内面に墨が付着するもので、摩耗等がみられないことから、墨入れと考えたい。

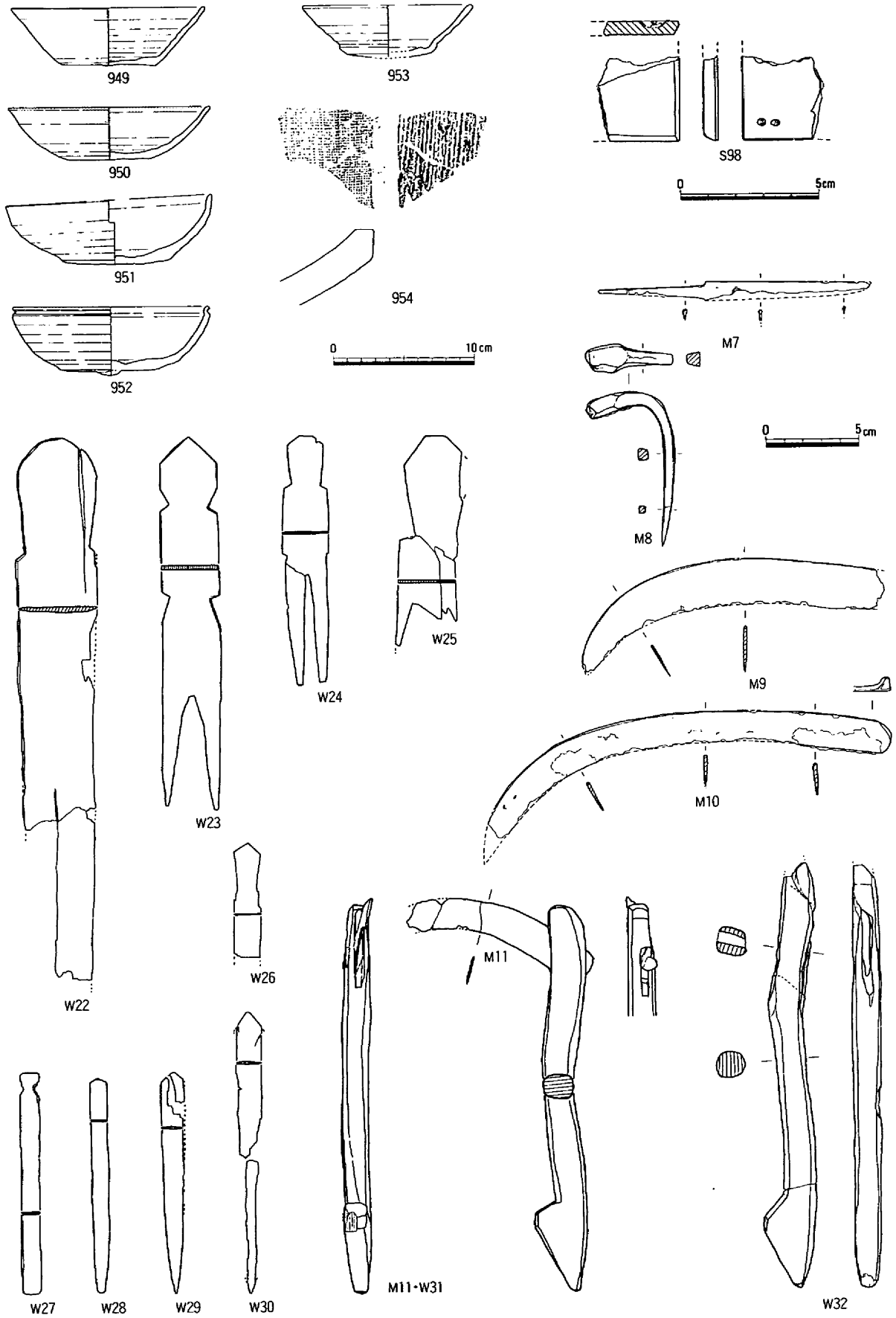
土師器は、杯(936～944・953)と皿(945～948)である。936～943・945～948は、底部押圧技法によるもので、すべての土師器には赤色顔料の塗布がみられる。

928・929・935・942・948は墨書土器である。928は外面の口縁に平行して「家」が書かれ、その上は欠損するものの、「口」が2つ続いて1字になると考えられる。これを「呂」とすると「麻呂家」、「官」とすれば「官家」等の字句の可能性が指摘される。929は欠損により判読不明だが、底部外面に2～3字が考えられる。935は底部内面に「酒」の1字を記す。942と948は、底部外面にそれぞれ

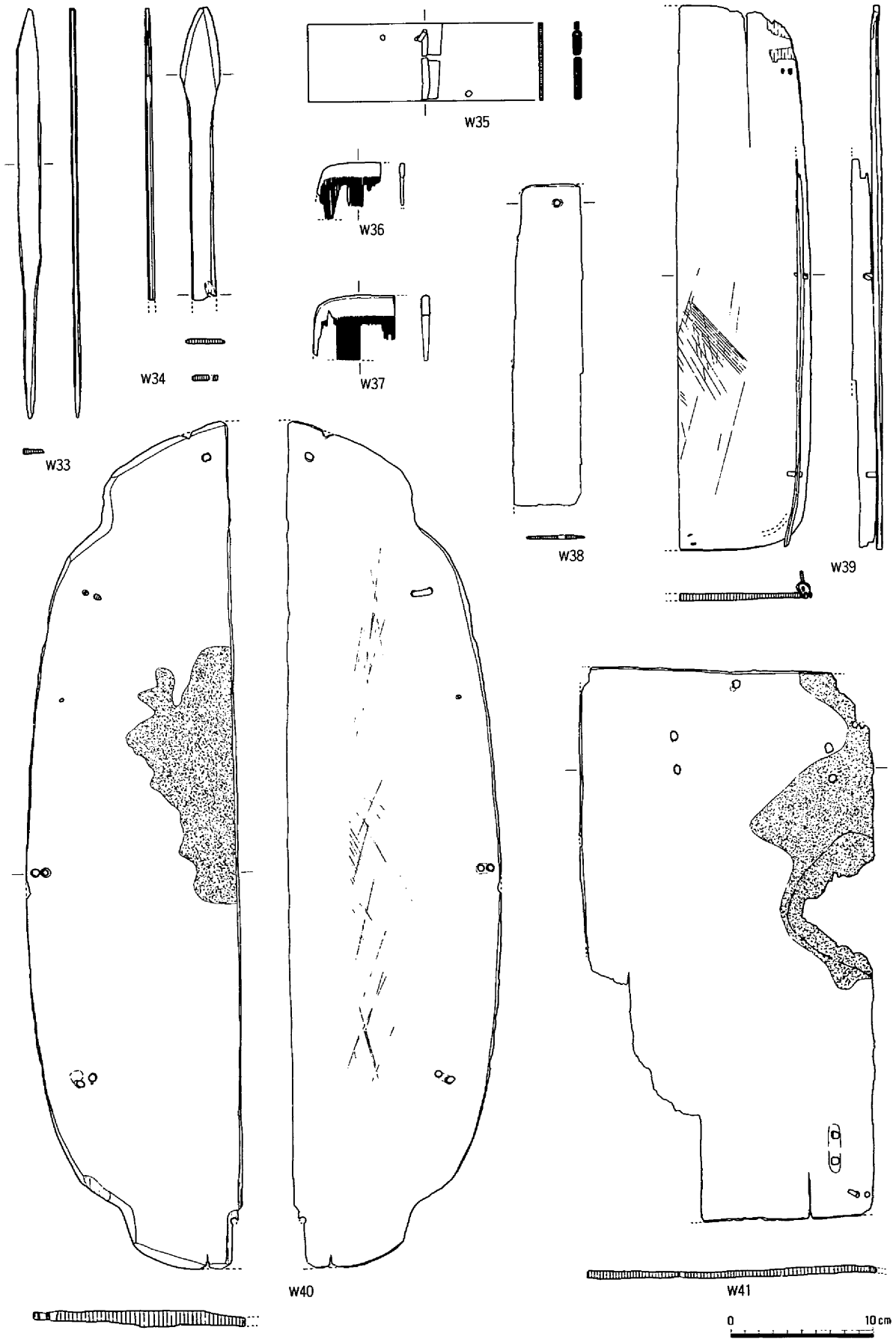


第198図 溝35 出土遺物(1)

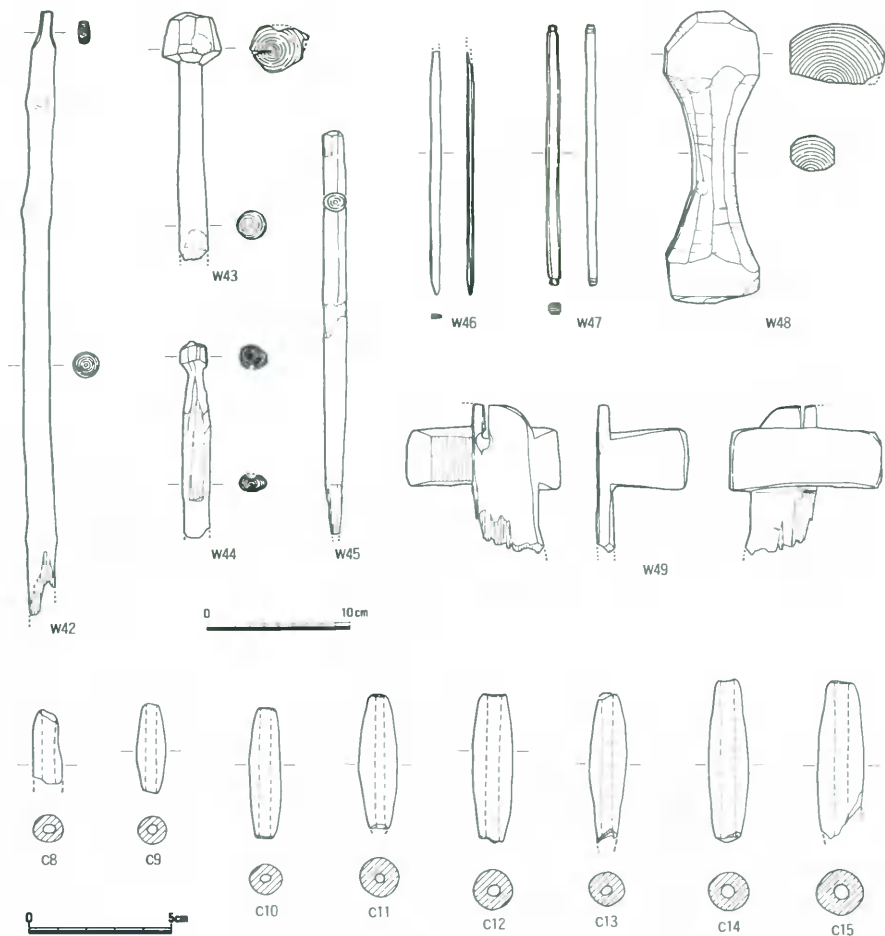




第199図 溝35 出土遺物(2)



第200図 溝35 出土遺物(3)



第201図 溝35 出土遺物(4)

「下」と「大」を記す。942はその下にさらに字句の続く可能性がある。

木製品は、人形(W22~25)、斎串(W26・28~30)、武器形の刀(W33)と鎌(W34)などの木製模造品の他、付札、鎌、曲物、横櫓、折敷、有頭棒、加工棒、紡織具、連歯下駄がある。

S98は蛇紋岩製の巡方で、裏面には2孔1対の潜り孔があり、革帯に縫じ付けるための銅線の一部が残る。金属器は、刀子(M7)、鎌刃(M9~11)、不明金属器(M8)がある。M10・11の基部は折り曲げており、さらにM11は、柄に装着するための木楔が残る。土製品は、C8~15の土錘である。獣骨は、北端付近に集中し、いずれも中層からウシ・ウマ・イノシシ・イヌが出土している。

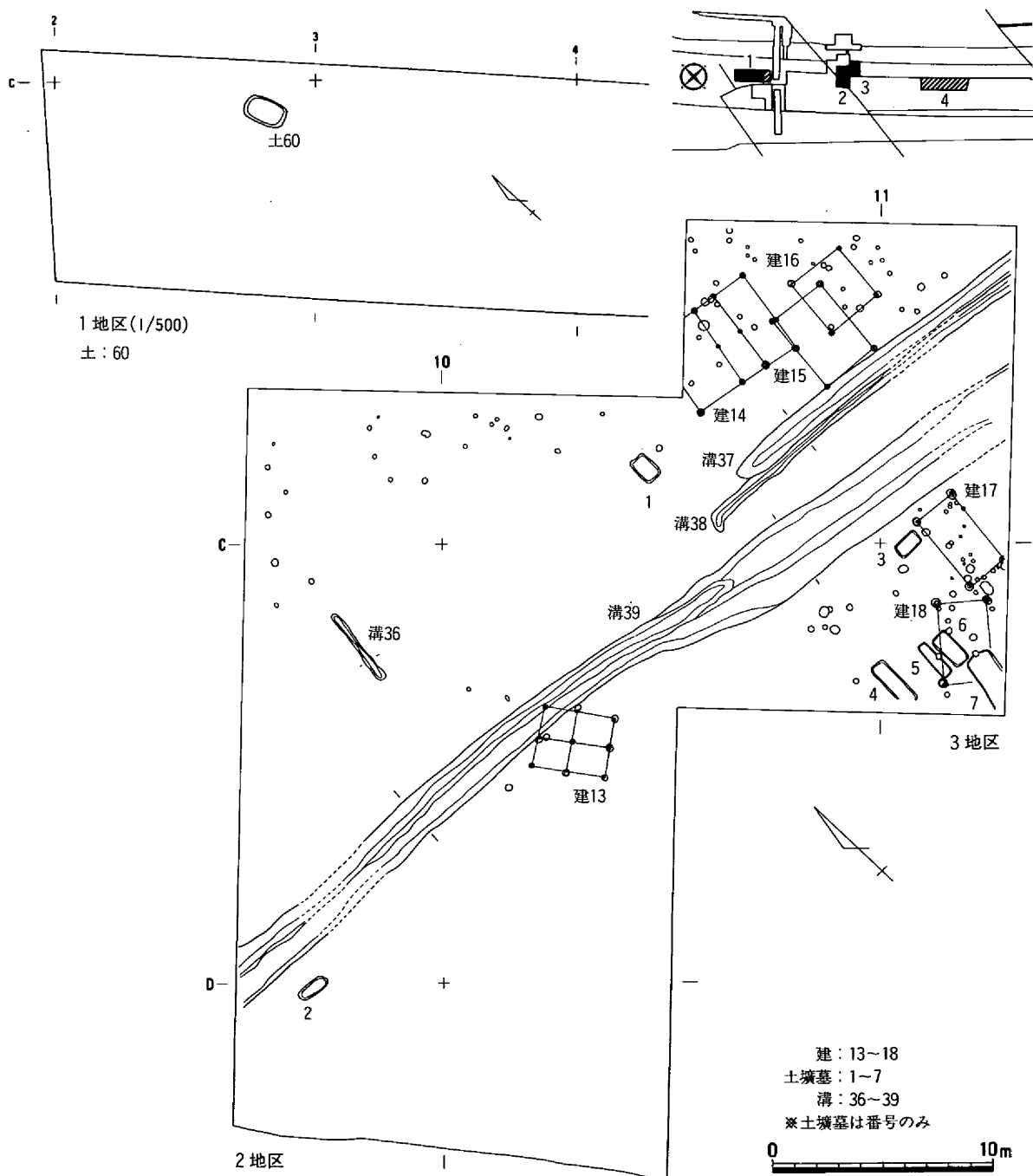
以上の遺物は、墨入れや墨書土器、石の出土が官人層の存在を示し、木製模造品やその他の木・金属製品は律令的祭祀に結びつく。これらは、律令的祭祀の地方への波及を示す資料と考えられる。

時期は、下層が平時代初頭を下限とし、井堰はそれに先行して廃棄されたと考えたい。(高田)

## 6. 中世の遺構・遺物

この時代は、上流の1地区が低位部から微高地端にあたり、2・3地区から4地区の溝45付近までは微高地となる。前者の遺構密度は低く、土壙1基を検出している。後者は、ほぼ全面が居住域となり、遺構密度も高いが、近現代の削平や用水路による攪乱を大きく受けている。

2・3地区の土壙墓は、鎌倉時代前半代に比定され、副葬品を有し人骨の遺存するものと、そうでないものの両者がある。4地区では室町時代に比定される井戸や溝を検出した。溝には、屋敷地や集落を区画すると考えられるものがある。なお、建物や柱穴列の詳細な時期は不明である。 (高田)

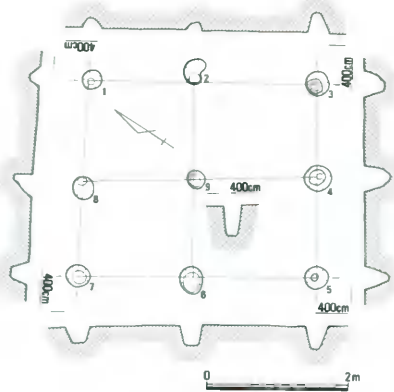


第202図 2～4区・9～11区遺構配置(中世)

(1) 建物・柱穴列

建物13 (第202・203図)

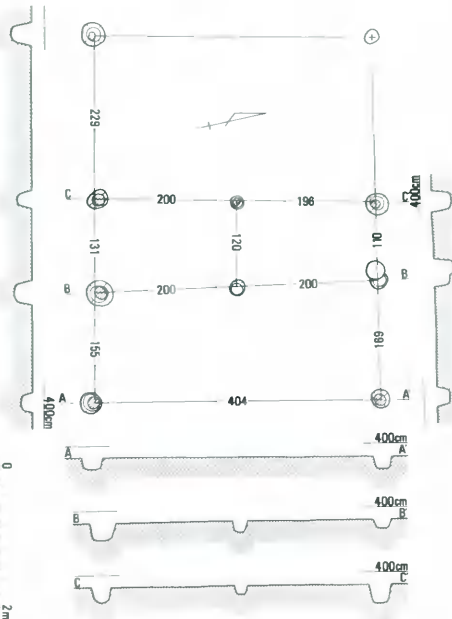
10C区のはほぼ中央で、耕土直下に検出された2間×2間の総柱の建物である。桁行全長約3.3m、梁間約2.7m、床面積は約9㎡を測る。柱穴掘り方は、径22~38cm、深さ10~40cmを測り、柱の径は17cm前後と思われる。遺物は細片が少量出土しているのみで、時期の決め手にはならないが、埋土は黄灰色で他の中世遺構に類似する。また、柱穴1は溝39を切っているため、13世紀後半以降と考えてよい。(柳瀬)



第203図 建物13

建物14 (第202・204図)

10B区にあり、調査区の北西端で検出された。3間×1間の掘立柱建物と考えられるが、北西角の柱穴は調査区外にあたる。桁行全長は515cm、梁間が404cm、床面積は20.8㎡を測る。建物は東西棟で、梁の方向は真北に近い。桁行の柱間は229・131・155cmと均等ではなく、西がひとまわり広がっていた。このような柱の配列はこの遺跡では一般的で、住居空間を土間と居間という異なる利用状況によって分割した結果であろう。南北の桁行中央の2柱穴を結ぶ梁行の真ん中の柱穴は小さくて浅く、束柱とみられる。(岡本)



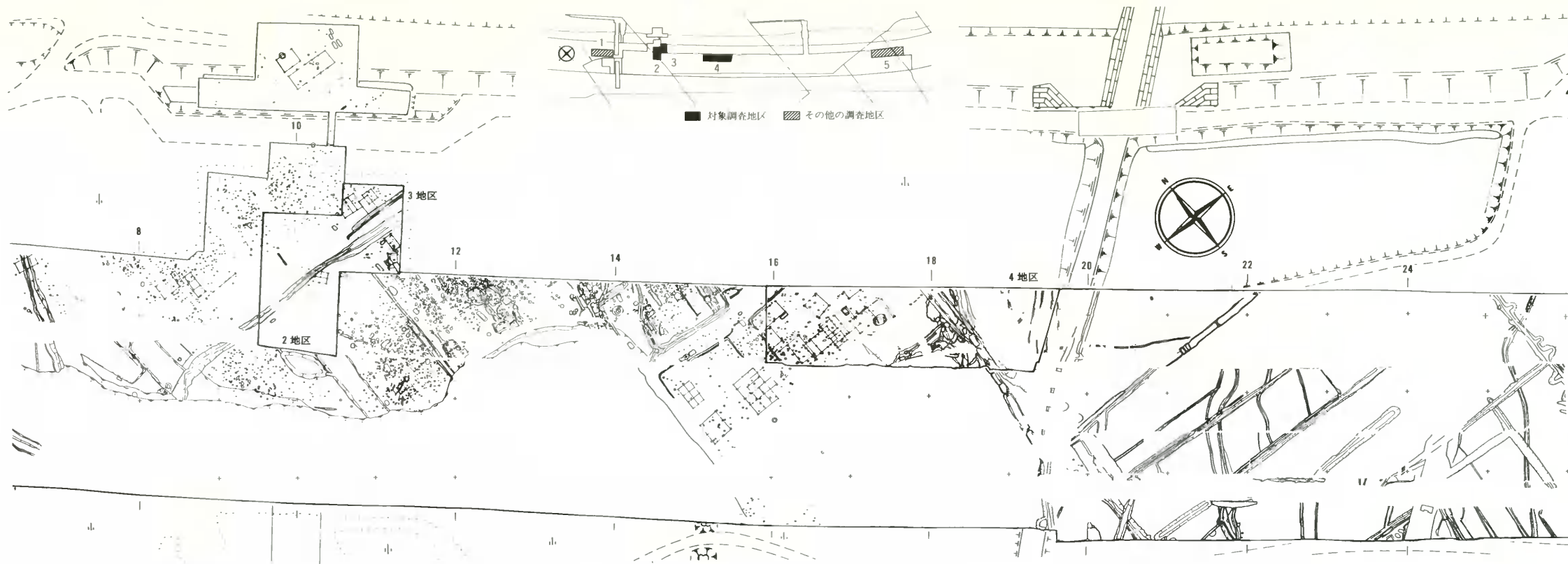
第204図 建物14

建物15 (第202・207図)

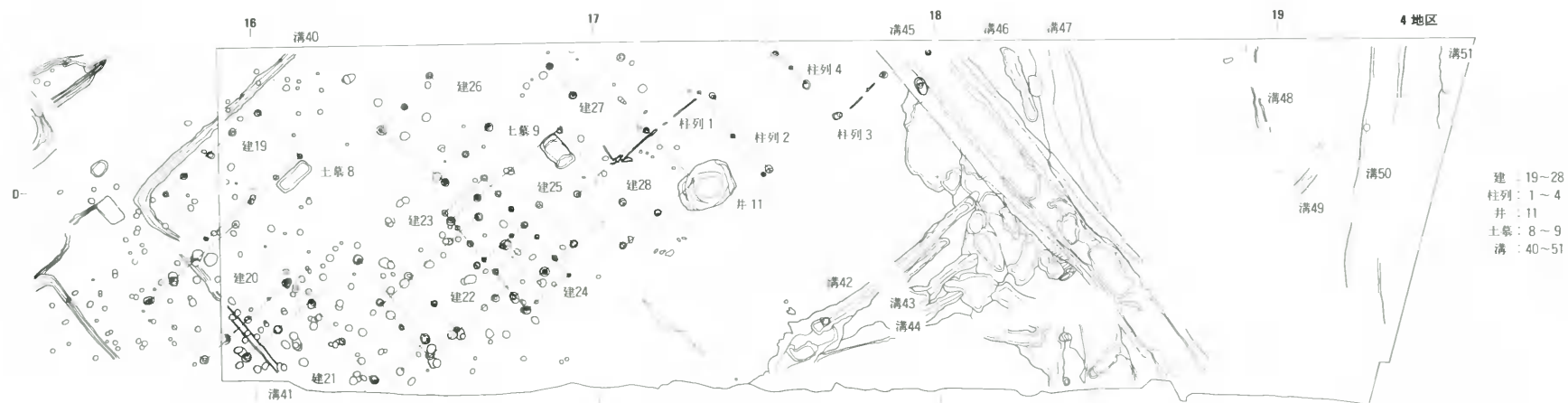
10B区の東端にあり、建物14・16と重複していた。1間×1間の掘立柱建物である。柱穴を結んだ平面形は、少し歪んだ長方形となる。柱間からみて南北棟の建物と考えられる。梁間は269・276cm、桁行が384・390cm、床面積は10.6㎡を測る。柱穴の長径は21~31cm、深さ19~31cmであった。(岡本)

建物16 (第202・207図)

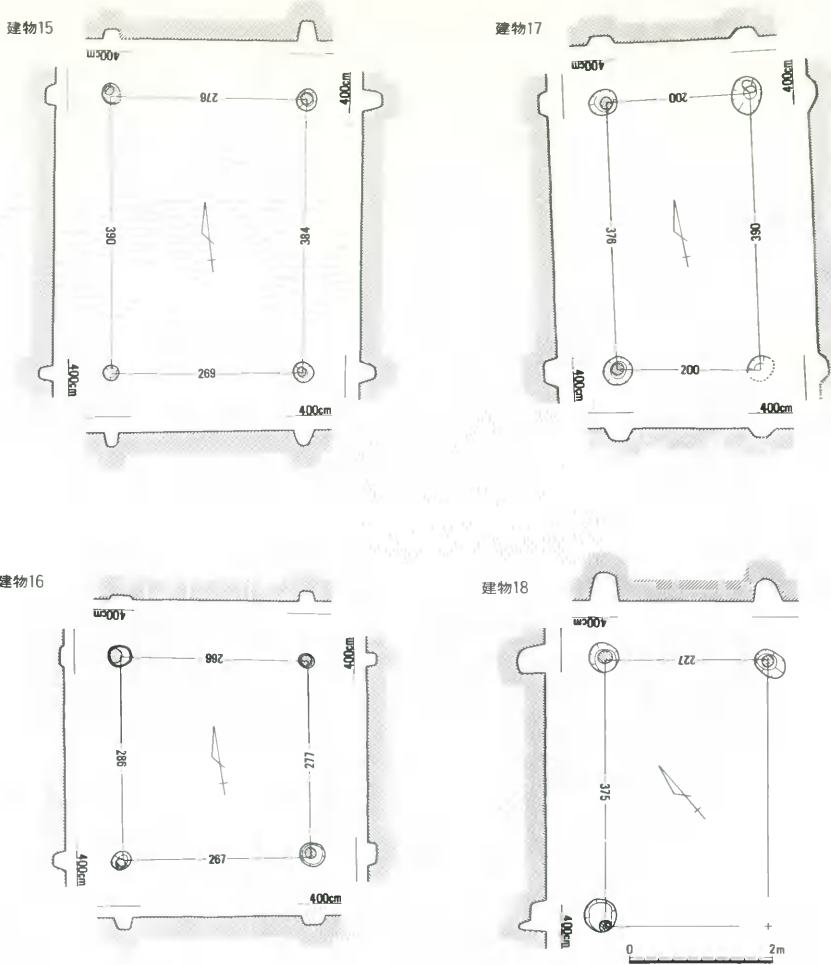
10B区の東端で、建物15と重複していた。1間×1間の掘立柱建物で、柱間によれば南北棟の建物とみられるが、そう大きな差ではなかった。桁行は277・286cm、梁間が266・267cm、床面積は7.5㎡を



第205図 対象調査区位置および周辺遺構配置(中世、1/1000)



第206図 16~19区遺構配置(中世)



第207図 建物15・16・17・18

測る。柱穴の長径は23～35cm、深さが6～17cmであった。柱痕の直径は14～22cm。 (岡本)

#### 建物17 (第202・207図)

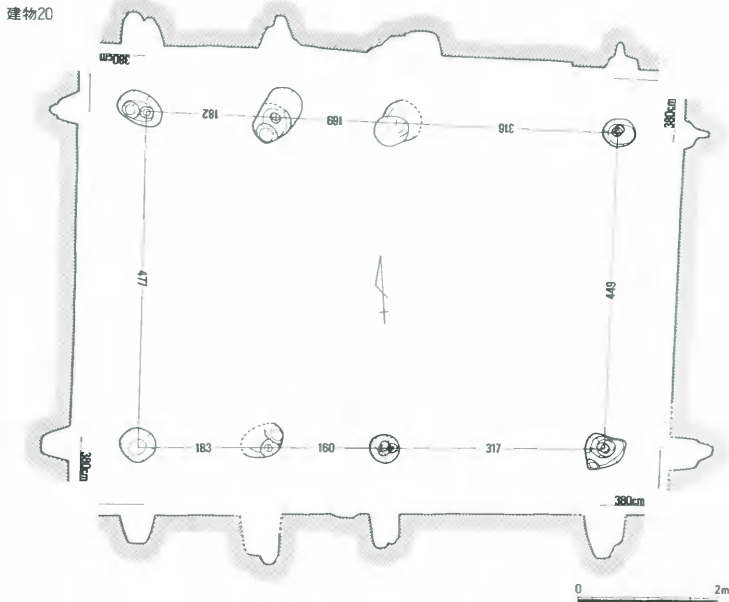
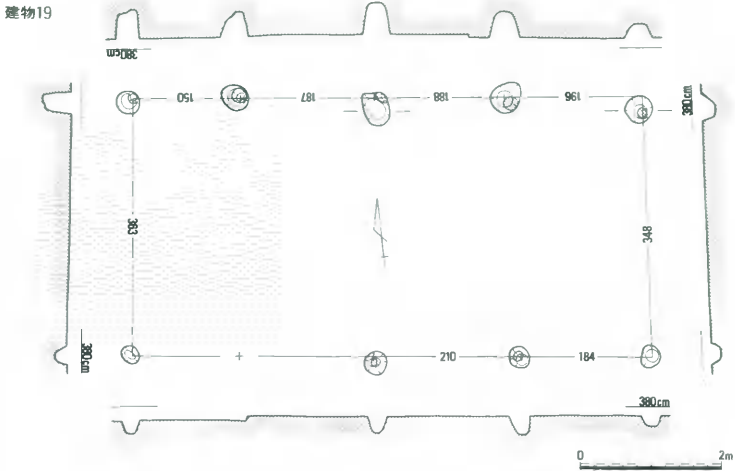
11B区と11C区の境界で検出された。1間×1間分を検出したが、桁行がさらに東へ延びていた可能性が強い。柱間は梁間が376・390cm、桁行は200cmで、床面積は7.7㎡を測る。柱穴の長径は39～52cm、深さが12～28cmであった。3柱穴で柱痕が確認され、その直径は18～21cmを測る。 (岡本)

#### 建物18 (第202・207図)

11C区の北西隅、建物17のすぐ南で検出された。この建物のみ棟の方向が先の建物14～17と異なり、また、南東角の柱穴が土塚墓7の底面で検出されなかったことから疑問が残る。南北棟で、柱間は桁行が375cm、梁間は227cm、床面積は8.5㎡を測る。柱穴の長径は44～46cmであった (岡本)

建物19 (第206・208図)

15C区と16C区の境界付近に位置し、既報告の調査区にまたがって検出された。4間×1間の掘立柱建物である。棟の方向は東西であった。桁行の柱穴は一直線上にはかかるが、わずかずずれている。桁行全長は721cm、梁間が348・363cm、床面積は25.6㎡を測る。桁行の柱間は一定していないが、とくに西端の1間が短くなっていた。柱穴の長径は32~52cm、深さが14~46cmで、個々の差が大き



第208図 建物19・20



い。全体的には南側桁行の柱穴が北側に比べて小ぶりであった。

(岡本)

#### 建物20 (第206・208図)

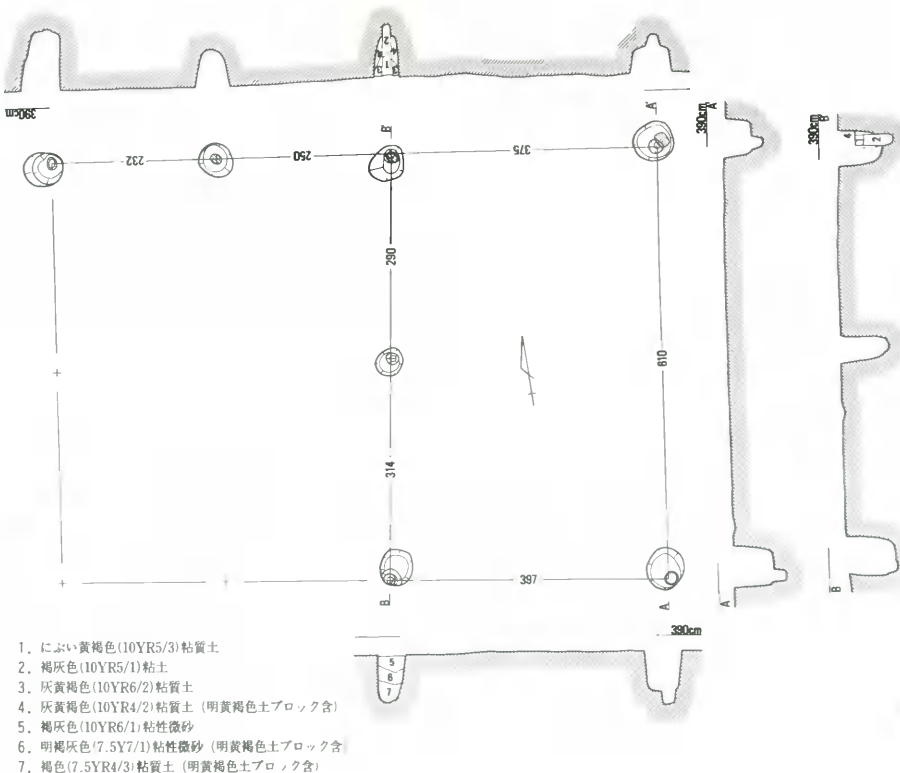
15D区と16D区の境界にあり、建物19のすぐ南で検出された。この建物も既報告の調査区にまたがっていた。3間×1間の掘立柱建物で、棟の方向は東西であった。桁行全長は660・667cm、梁間が449・477cm、床面積は30.7㎡を測る。桁行の柱間をみると、北側で182・169・316cmとあり、東の1間が広い型式の建物である。柱穴の長径は43~66cm、深さは32~70cmで、やや大きい。

(岡本)

#### 建物21 (第206・209図)

16D区に位置し、既報告の調査区にまたがって検出された。3間×1間の掘立柱建物で、東西棟であった。桁行全長は857cm、梁間が610cm、床面積は52.3㎡を測る。桁行の柱間は232・250・375cmで、端の1間が広い型式であった。柱穴の長径は50~59cm、深さが53~77cmと大型である。柱根のめり込みは直径20cm程度であった。東から二つ目の梁間の中央柱穴は長径40cmと小さい。

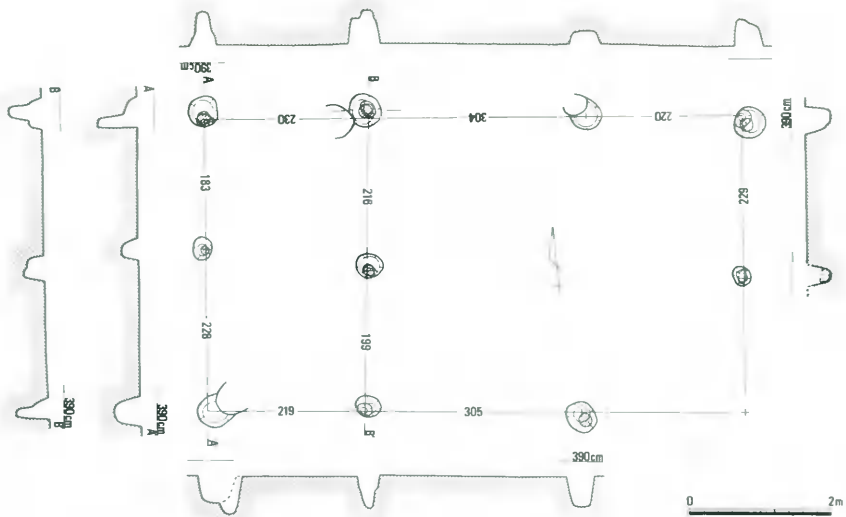
(岡本)



第209図 建物21

#### 建物22 (第206・210図)

16D区で検出された。建物21・23~25と重なっていた。3間×2間の東西棟の掘立柱建物である。



第210図 建物22

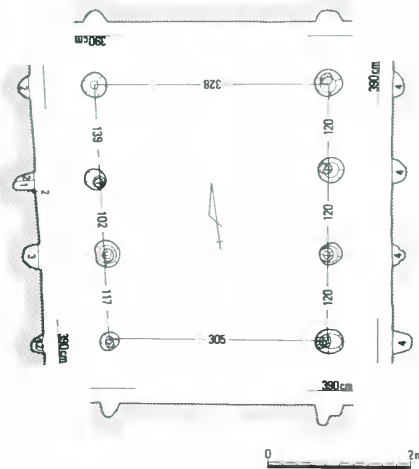
桁行全長は754cm、梁間が411cm、床面積は31.0㎡を測る。北側桁行の柱間は東から220・304・230cmで、中央の柱間が広がっていた。普通の型式とは異なる。側柱柱穴の長径は36～55cm、深さが19～54cm、梁間の中央柱穴は長径が28～36cm、深さは23～28cmであった。(岡本)

建物23 (第206・211図)

16D区の北端に位置し、建物22・25と重なっていた。3間×1間の掘立柱建物で、棟の方向は南北とみられる。桁行全長は358・360cm、梁間が305・328cm、床面積は11.4㎡を測る。桁行の柱間は、東側では120cm等間であったが、西側は117・102・139cmと一定しない。梁間も南北で異なり、粗雑な造りである。柱穴の長径は27～39cm、深さは16～37cm、柱痕の幅は13cmを測る。(岡本)

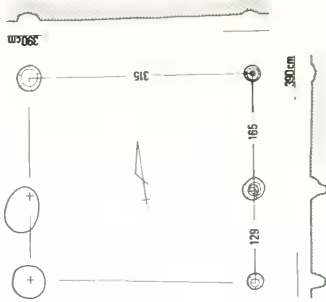
建物24 (第206・212図)

16D区、建物23のすぐ南で検出された。建物22・25と重複していた。建物23と桁行を揃えていることから南北棟の掘立柱建物と考えている。西側桁行の柱穴は他の建物の柱穴によって破壊されていると想定している無理もある。桁行全長は294cm、梁間が315cm、床面積は9.3㎡を測る。柱穴の長径は22～36cm、



第211図 建物23

1. 黄灰色(2.5YR6/1)粘質土
2. におい黄褐色(10YR7/3)粘質土
3. 灰色(5Y6/1)粘質土
4. におい黄褐色(10YR7/2)砂質土

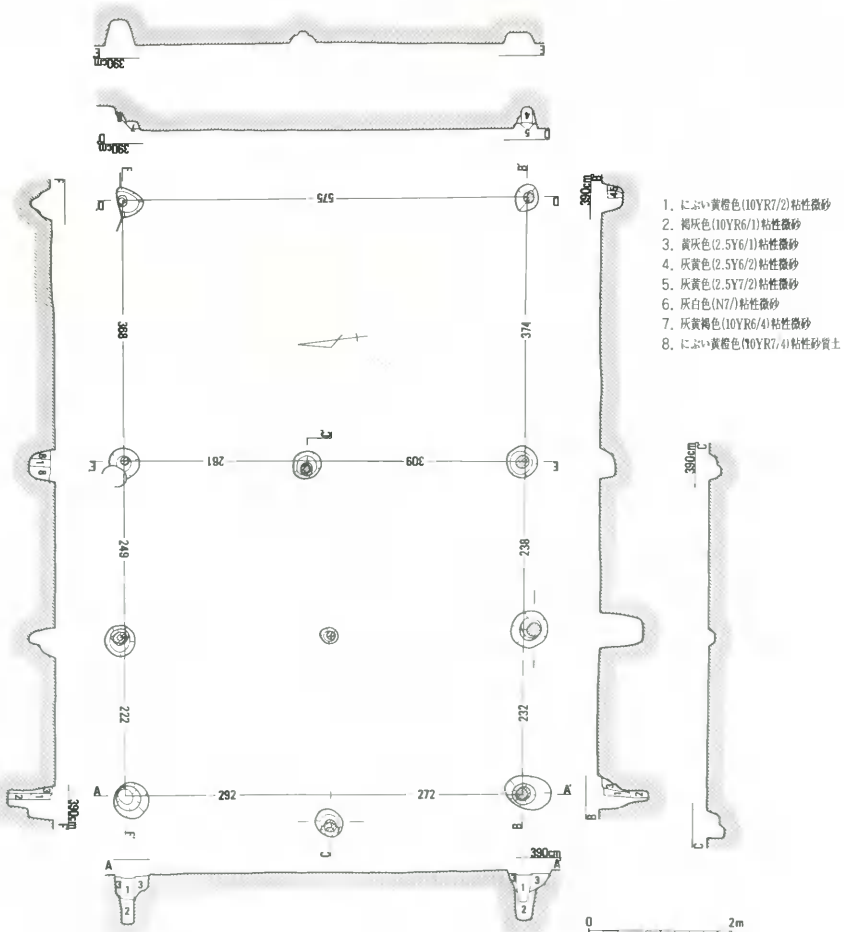


第212図 建物24

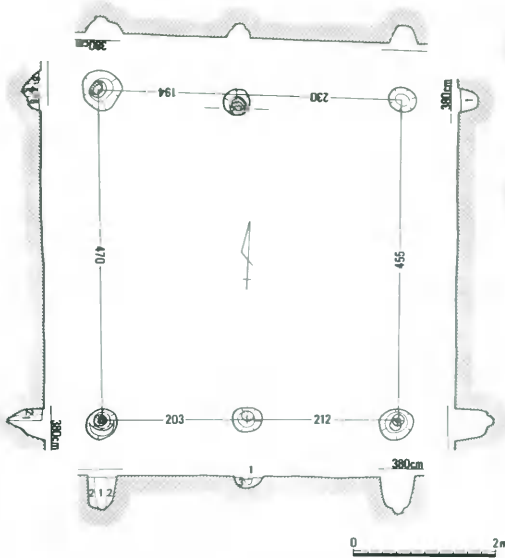
深さが5～24cmであった。 (岡本)

建物25 (第206・213図)

16C区と16D区の境界で検出された。建物22～24・28と重なり、同規模の建物21からは東に5.5m離れている。3間×1間の掘立柱建物で、棟の方向は東西を示す。桁行全長は839・844cm、梁間は564・575cm、床面積は47.9㎡を測る。南側桁行の柱間は232・238・374cmで、等間ではなくて、端の1間が広い型式である。西梁間の中央外側の柱穴がこの建物に伴うかは、類例からして疑問であるが、図示しておく。建物の中央にある2柱穴

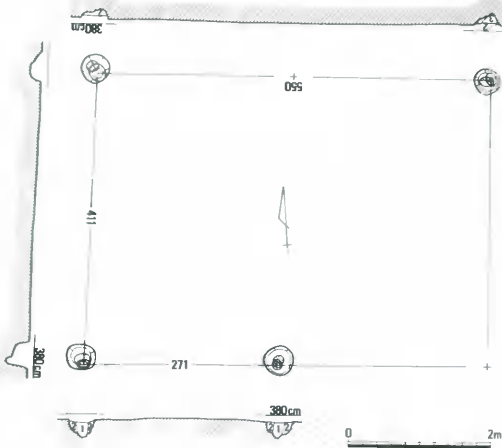


第213図 建物25



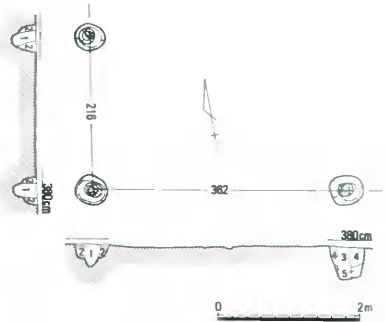
- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 1. 灰黄褐色(10YR6/2)粘質土   | 4. 浅黄色(2.5Y7/3)粘質土    |
| 2. にぶい黄褐色(10YR7/3)粘質土 | 5. 灰褐色(7.5YR5/2)粘質土   |
| 3. にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質土 | 6. にぶい黄褐色(10YR7/2)粘質土 |

第214図 建物26



- |                       |                  |
|-----------------------|------------------|
| 1. 灰黄褐色(10YR5/2)土     | 3. 褐灰色(10YY5/1)土 |
| 2. にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土 |                  |

第216図 建物28



- |                       |
|-----------------------|
| 1. にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土 |
| 2. にぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土 |
| 3. 灰黄褐色(10YR6/2)土     |
| 4. 灰黄褐色(10YR5/2)土     |
| 5. 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土   |

第215図 建物27

は直径が小さくて浅く、束柱と考えられる。側柱の柱穴は長径が40~65cm、深さは18~72cmであった。柱痕の直径は20cmを測る。(岡本)

建物26 (第206・214図)

16C区の南端で検出された。建物25のすぐ北に位置するが、棟の方位を異にしている。棟の方向は柱間から考えると南北方向とみられる。1間×2間の掘立柱建物である。桁行柱間は455・470cm、梁間全長が415・424cm、床面積は19.4㎡を測る。南北両梁間ともに、中央の柱穴はやや小さくて浅いため、束柱かもしれない。4隅の柱穴の長径は39~54cm、深さが11~54cmであった。(岡本)

建物27 (第206・215図)

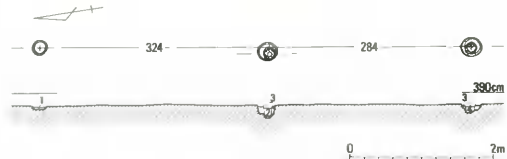
16C区と17C区の境界、調査区の北端で検出された。掘立柱建物の南西隅にあたると考えている。南北方向の柱間は216cm、東西方向は362cm、1間×1間ならば床面積は7.8㎡を測る。柱穴の長径は44~46cm、深さが34~52cmであった。柱痕の直径は20cm前後を測る。(岡本)

## 建物28 (第206・216図)

17C区、16・17D区にまたがって検出された。建物25と重なっていた。2間×1間の東西棟の掘立柱建物であろう。南東隅は井戸11に破壊され、北側桁行の中央柱穴もなかった。桁行全長は550cm、梁間が411cm、床面積は22.6㎡を測る。柱穴は長径37~41cm、深さ13~25cmであった。(岡本)

## 柱穴列1 (第206・217図)

17C区の南半で検出された。建物28の東3.5mに位置していた。3個の柱穴がほぼ真北の方向で並んでいた。柱間は324cmと284cmで同じではなかった。柱穴の長径は21~28cm、深さが5~14cmを測る。南の2柱穴では直径15cmの柱痕が確認された。また、柱のめり込みもみられた。(岡本)



1. 黄橙色(10YR7/8)砂質土
2. 浅黄色(2.5Y7/3)粘性砂質土
3. 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土
4. 浅黄色(2.5Y7/4)粘性砂質土

第217図 柱穴列1

## 柱穴列2 (第206・218図)

17C区の南半、柱穴列1の東わずか50cmに平行していた。2個の柱穴からなっていたが、南端の柱穴は柱穴列1の南端の柱穴と同じ位置にあったため、どちらかが立て替えられた可能性も考えられる。柱穴の長径は50・44cm、深さが13・18cm、柱痕は直径が15・18cmを測る。(岡本)



1. 灰色(7.5Y6/1)粘質土
2. におい黄橙色(10YR7/4)砂質土
3. 灰褐色粘土斑におい黄橙色(10YR7/4)砂質土
4. 灰褐色粘土斑におい黄橙色(10YR7/4)砂質土(灰褐色粘土斑3層より大粒)

第218図 柱穴列2

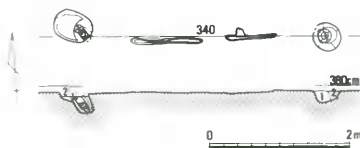
## 柱穴列3 (第206・219図)

17C区の南東部で検出された。2個の同規模の柱穴が東西に並び、その間に細い溝状の窪みが認められた。柱穴

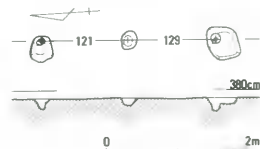
の長径が40・55cm、深さは16・12cmで、直径20cmの柱痕は斜傾し、8cmめり込んでいた。(岡本)

## 柱穴列4 (第206・220図)

17C区の南半にあり、3個の柱穴がほぼ真北方向に並んでいた。両端の柱穴は長軸が37・47cm、中央の柱穴の長径は28cmを測る。直径13cmの柱痕を確認した。柱穴の形状から、古代あるいは古墳時代に遡る可能性がある。すぐ西には近世遺構の溝があるため、建物であったかもしれない。(岡本)



第219図 柱穴列3

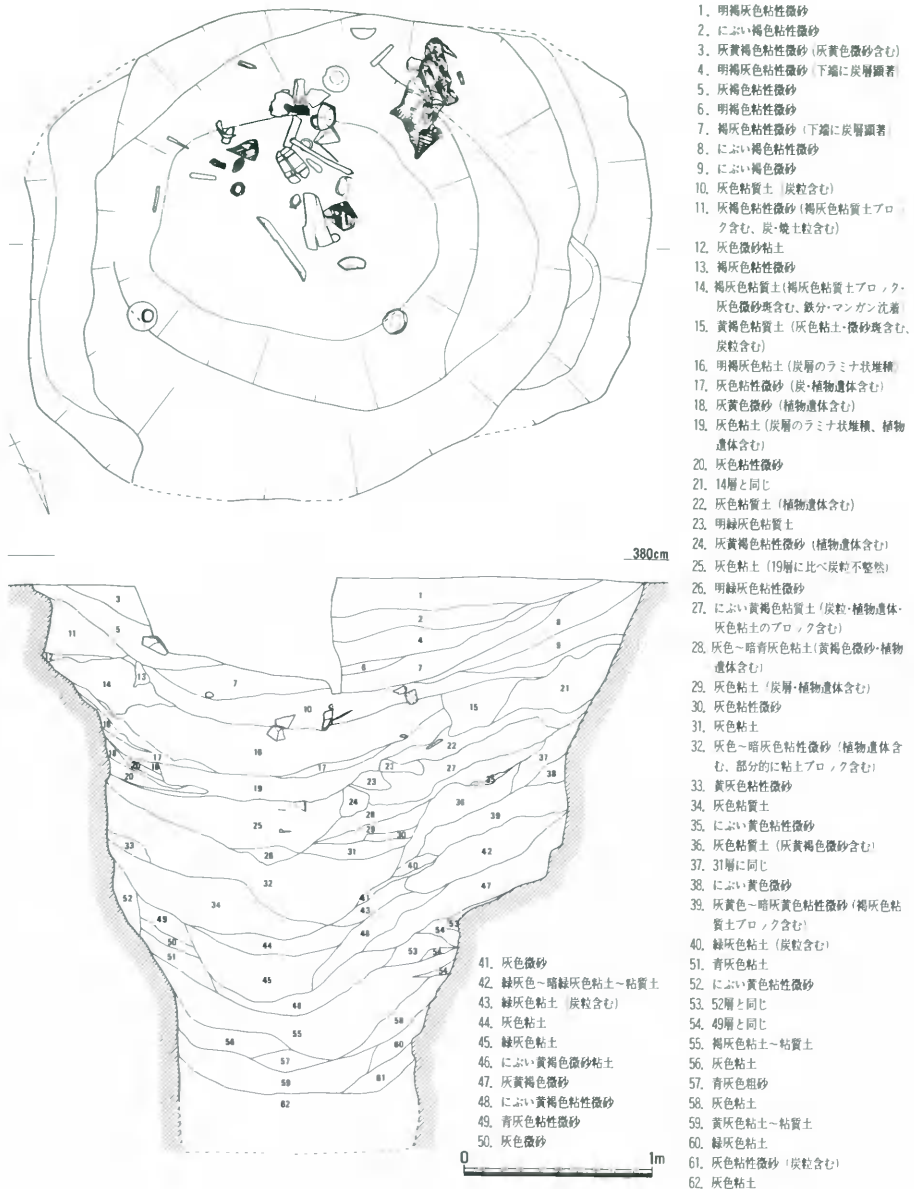


第220図 柱穴列4

(2) 井戸

井戸11 (第206・221~224図、図版30・70・72)

17D杭の南東5mで検出した井戸である。建物28と重複するものの、切り合い関係は不明で、その



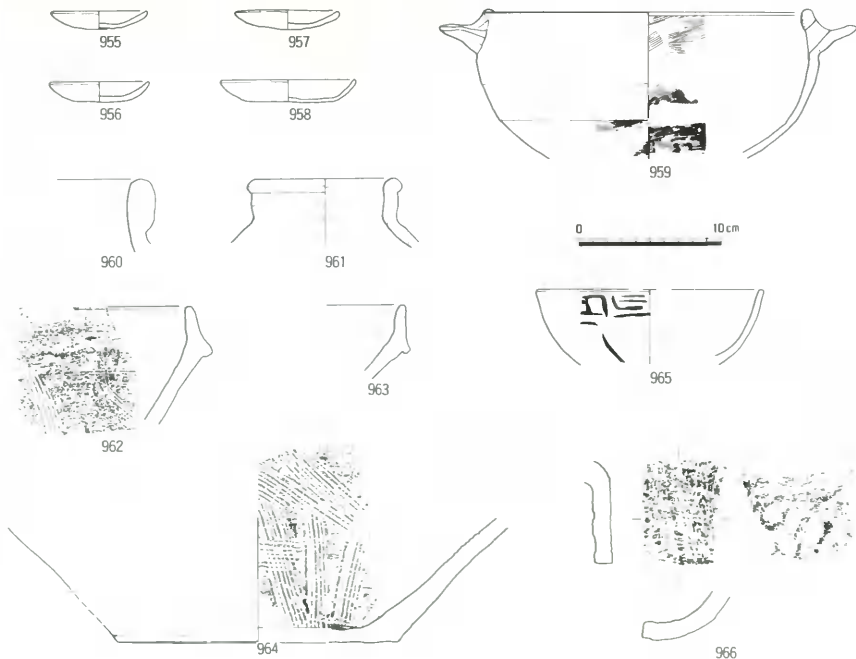
第221図 井戸11

約1.5m西側には柱穴列1・2がある。なお、62層以下は湧水層に達し、十分に調査できなかった。

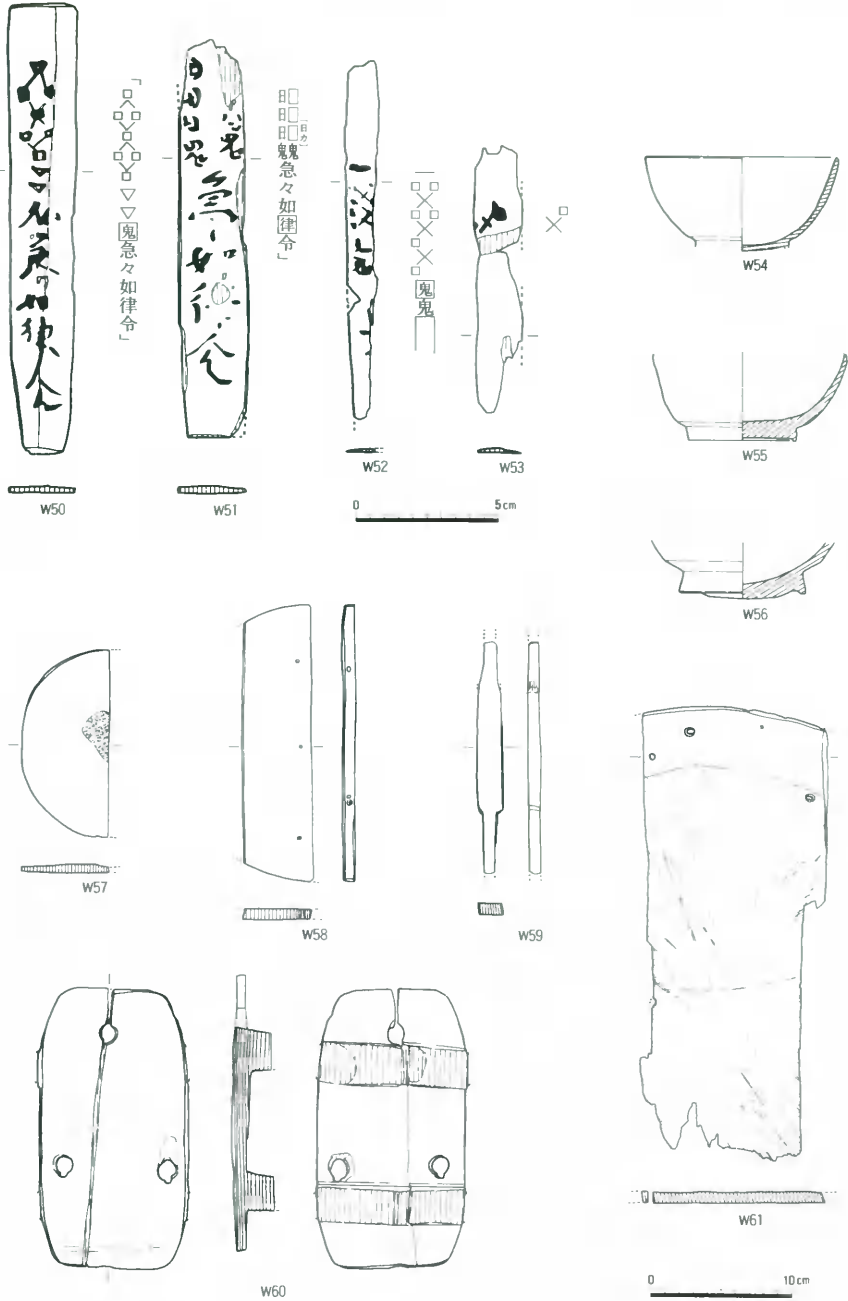
井戸の平面形は、歪な長楕円形で、南北長260cm、東西長350cmを測る。東西が張り出すのは、後述するように壁面が崩落したためである。深さは、検出面から300cm以上で、底の形状は湧水のため不明である。壁は底付近から垂直に立ち上がり、標高150cm前後で逆ハ字状に広がるが、そこから上部は壁面の崩落により、段をもちながらさらに大きく開く形状を呈す。

埋土は大きく三層に分けられる。下層（35層以下）は、井戸廃絶後の自然堆積によるものと考えられ、35～42・47層は、壁である弥生時代終末の洪水砂が崩落したものである。中層（16～20・22～34層）は、人為的な埋積を窺わせ、遺物の集中がみられる。上層（1～15・21層）は、井戸の最終的な自然堆積と考えられるが、4層と7層の下端に炭層が顕著に認められる。なお、井戸の規模や脆弱な壁から、井側等の構造物が存在した可能性があるが、廃絶時に抜き取られたものが検出していない。

遺物には土器、瓦、土製品、木製品、鉄滓、植物遺体がある。すべて上・中層から出土し、特に16層と32層に集中している。土器は土師器の小皿（955～958）、瓦質の鍋（959）、備前焼の甕（960）、壺（961）、摺鉢（962～964）、青磁の雷文帯蓮弁文碗（965）のほか、瓦器、亀山焼、土師質高台碗片がある。木製品は呪符木筒（W50～53）、漆塗椀（W54～56）、曲物底板（W57・58）、下駄（W60）、折敷底板（W61）のほか、蓆状編物、組み紐、藁を輪状に束ねたものなどがあり、W50～59が16層から、W60・61が32層から出土している。呪符木筒は、W50が下端のややすぼまる短冊形で、W51は上端が圭頭状をなす。また、すべての木筒に符籙が記され、W50と51については統いて「急急如律令」の呪句が確認できる。土製品は土器片を利用した円板状土製品で、素材は備前焼、亀山焼、瓦質土器である。なお、

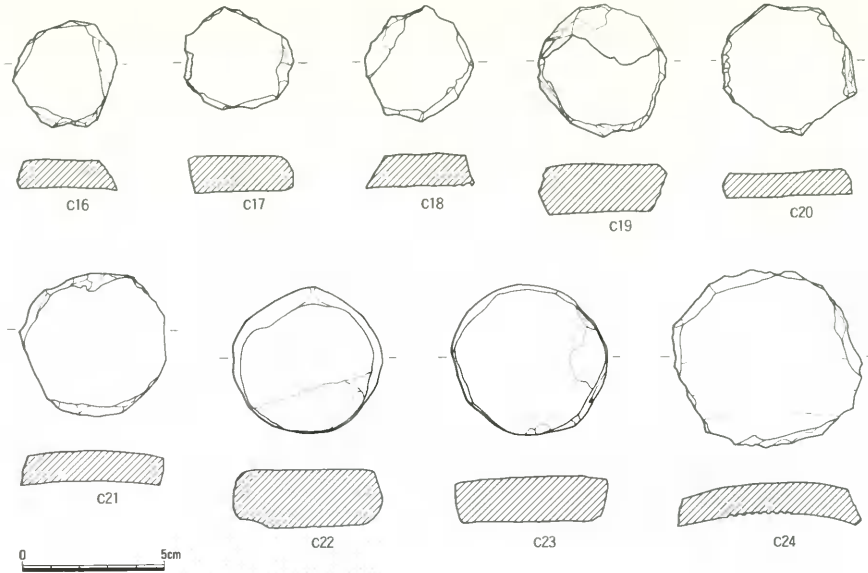


第222図 井戸11 出土遺物(1)



第223図 井戸II 出土遺物(2)





第224図 井戸II 出土遺物(3)

植物遺体としては、径1～2cmの竹が3点ある。

土器は概ね15世紀に属し、一部16世紀にかかる。井戸の時期は、室町時代と考えられる。(高田)

### (3) 土 壙

土壙60(第202図、図版30-2)

2C区の微高地の肩部に検出された、この調査地区唯一の遺構である。表土より約70cm下に検出され、平面形は隅丸方形を呈し、長さ約1.6m、幅95cm、深さ10cm前後を測る。遺物の出土がないが、土層関係からいえば時期は中世であろう。なお、形態からいえば土壙墓の可能性もある。(柳瀬)

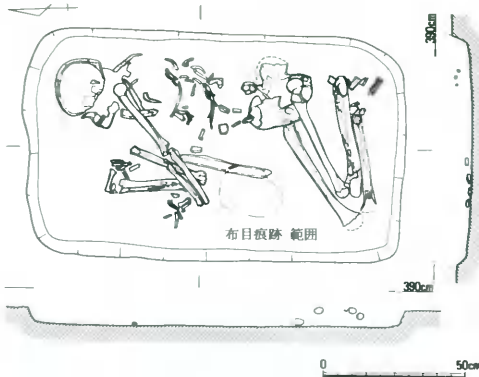
### (4) 土 壙 墓

土壙墓1(第202・225・226図、図版30-3・60)

上部を大きく削平された状態で、10B区に検出された隅丸長方形の土壙墓である。長さ1.35m、幅約1m、深さは5～6cmを測る。人骨は北枕の横臥屈葬の状態で見つかり、頭蓋骨の左側頭部と同腰骨の一部に削平が及んでいるのと、肋骨・背骨・手足端部の残り具合が悪いほかは比較的保存は良好



第225図 土壙墓1 出土遺物



第226図 土墳墓1

であった。遺物は土壌中央西寄りから刀子M12（全長34.2cm、刃渡り23.4cm刃幅2.3cm、厚さ6mm、反り5mm）が出土したのみで、棺釘等は見つかっていない。また、刀子を含みその西の底面には、径20cmほどの範囲に細かな布目らしき痕跡が確認されたが、今一つ確実ではない。

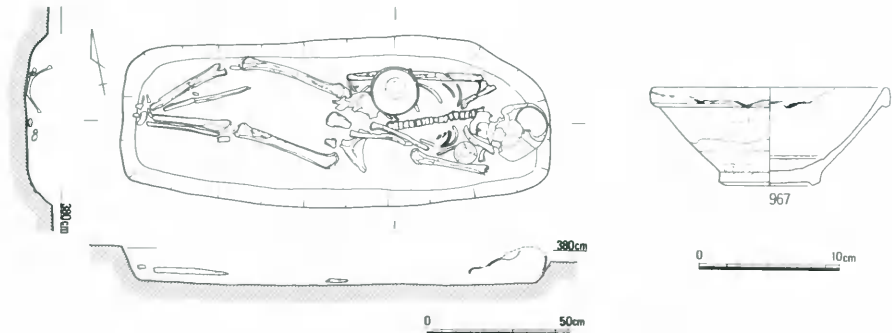
人骨は岡山理科大学の川中健二教授から、壮年の男性との鑑定をいただいている。土壌墓の年代は、土器が出土していないため細かくは比定できないが、後出の土壌墓と大差はないと思われる。

（柳瀬）

土壌墓2（第202・227図、図版31-1）

9区のDライン上の、耕土直下で検出された土壌墓である。土壌掘り方の平面形は、隅丸の長方形に近いが、北東隅のみ多少丸みが強い。土壌は最大長約1.5m、最大幅約60cm、深さ約12cmを測る。現状では、掘り方いっばいに東枕で仰臥伸展葬の人骨が確認されており、棺釘の出土もないことから木棺を使用していない可能性もある。人骨は全体に形は辛うじて保っているものの、非常に脆くなっている、部分的にしか取り上げられていない。土壌墓1と同様の鑑定結果を得ている。

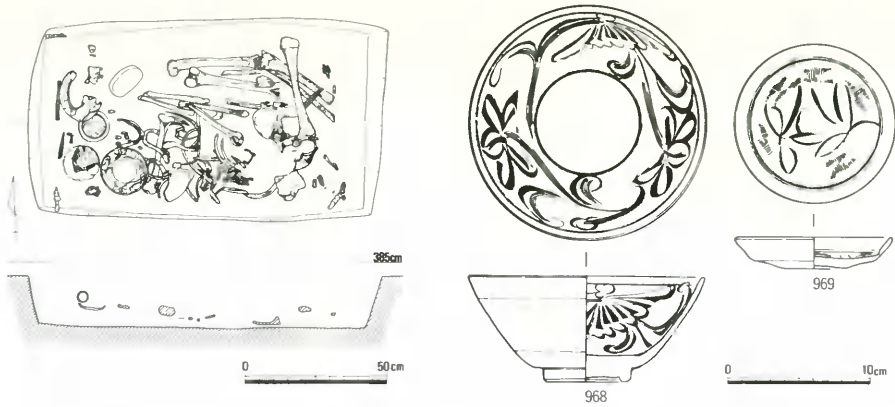
遺物は、人骨の右脇腹上部から完形で中国製の白磁碗967、左脇下から土師質小皿がそれぞれ出土して、副葬品とみてよい。967は土壌墓4出土の970と同形式で、百間川遺跡群の中でも完形は少ない。この種の碗は土師質の碗・皿に伴うことが多く、それらから13世紀前半とみてよい。（柳瀬）



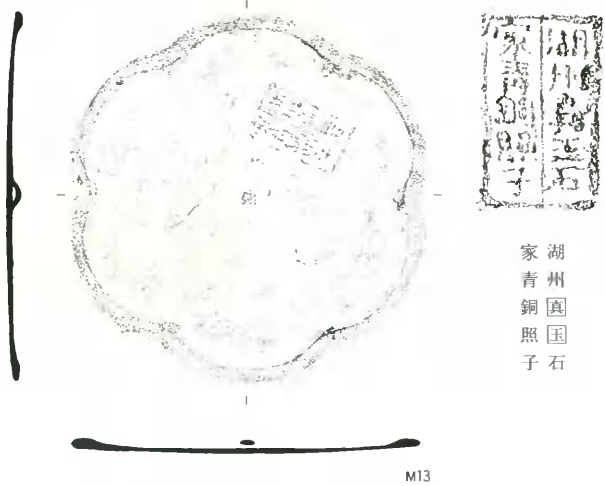
第227図 土壌墓2、同出土遺物

土壌墓3（第202・228図、巻頭図版3-2、図版31-2.60）

11B区と11C区の境界、建物17の50cm西で検出された。土壌の平面形は長方形で、長さ125cm、幅72cm、深さは17cmを測る。長軸の方向は東西である。西枕の人骨が1体分出土し、埋葬遺構であったことは明確である。土壌の四隅からは釘が出土し、土壌の長軸、あるいは短軸方向に平行していたこ



とから、木棺の角を留めた釘とみてよい。釘の位置から推測される木棺の大きさは、長さが110cm、幅が65cm程度と考えられる。釘は土壌の底から11~15cm上方にあり、底面から立つ釘の残存も認められなかったため、底板の存在は不明である。人骨は手足を折り曲げた横臥屈葬の形態をとり、岡山理科大学の川中健二教授の現場における鑑定では、壮年の男性であろうという結果をいただいた。



第228図 土壌墓3、同出土遺物

湖州圓国石  
家青銅照子

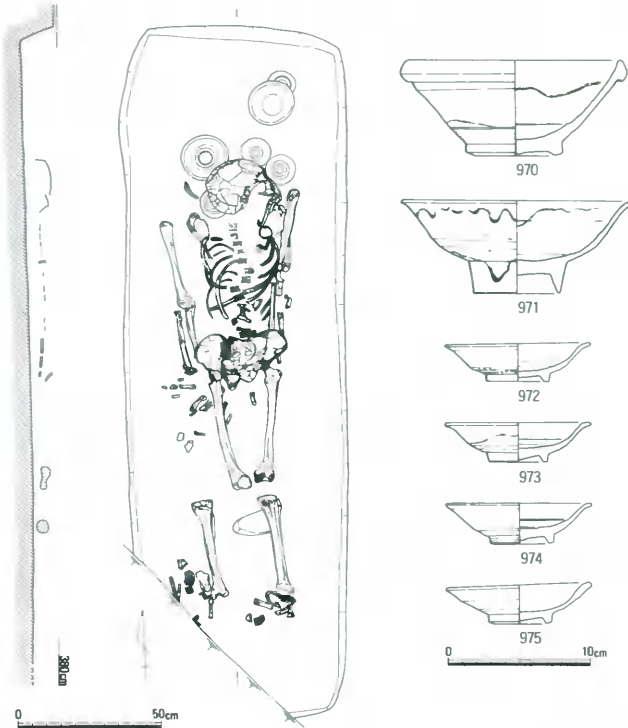
遺体の頭部付近に副葬品

が置かれていた。青銅鏡1面と青磁の碗と皿である。鏡は六花文の素文鏡で、鏡背に五字二行の銘文があり、「湖州圓国石、家青銅照子」と記す。いわゆる湖州鏡で、鏡の両面には板材が付着していて、浅い円形の鏡匣に収納されていたことが確実である。青磁は中国製で、碗は龍泉窯系、皿は同安窯系とみられる。碗には細かい傷が多く認められ、被葬者が生前に愛用した品であろうか。（岡本）

#### 土壌墓4（第202・229図、図版28-3. 31-3. 60）

11C区の西端、調査区の南端で検出された。壙内からは仰臥伸展葬の人骨が1体分出土し、墓であったことが明らかである。土壌の平面形は長方形で、長さが245cm、幅が80cm、深さが13cmを測る。長軸の方向は南北で、北枕をとる。釘の出土がなかったが、前述の土壌墓3と副葬品では遜色がなく、年代も近いものと思われることから、釘を使用しない木棺があったとするのが自然であろう。

副葬品は頭部付近に集中して出土した。副葬品はすべて中国製白磁で、碗が2点と皿が4点であっ



第229図 土墳墓4、同出土遺物

た。下肢骨の下から河原石が1点出土したが、土墳墓3でも河原石が出土している。2点の白磁碗の口縁は異なっている。人骨は、川中教授の鑑定で、壮年の男性とされる。土墳墓の年代は鎌倉時代の前半か。(岡本)

土墳墓5・6・7

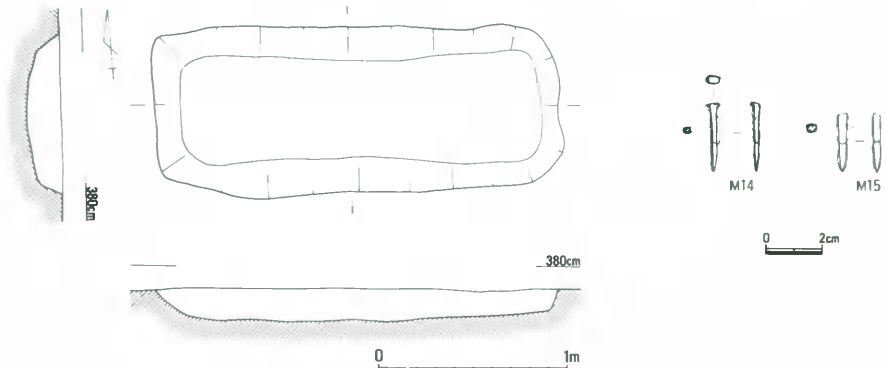
(第202図、図版28-3)

11C区の土墳墓4の東1.5~2.5mで3基の土墳が検出された。平面形はいずれも長方形を呈し、長軸の方向が土墳墓4のそれと平行していることから、これらも土墳墓と考えている。土墳墓5は長さ190cm、幅55cm、深

さ14cm。土墳墓6が長さ162cm、幅83cm、深さ31cm。土墳墓7は残存長235cm、幅126cm、深さ10cmを測る。土師器の高台付碗の破片が出土し、鎌倉時代前半の遺構か。(岡本)

土墳墓8 (第206・230図、図版32-1)

16C区の南西隅、建物19の南桁行に接して検出された。土墳の長軸は建物19の棟方向とはほぼ平行していて、東西であった。また、土墳の東辺は建物19の東梁行の延長にあった。土墳の平面形は長方形

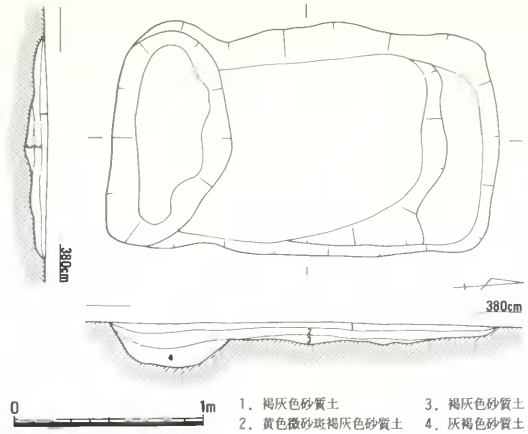


第230図 土墳墓8、同出土遺物

に近く、長さ215cm、幅90cm、深さ17cmを測る。底面は中央部が窪むものの、平坦に近い。遺物としては釘があり、木棺に使用されたとみて、土壌墓と判断した。(岡本)

#### 土壌墓 9 (第231図、図版32-2)

16C区、建物25の北東隅に重なって検出された。土壌は長方形に近く、長軸方向は南北であった。長さが205cm、深さが22cmを測る。底面には軽い段があり、南端部は底面から10cm低い窪みになっていた。墓ではなく、建物25に伴う遺構の可能性も無視できない。(岡本)



第231図 土壌墓 9

#### (5) 溝

##### 溝36 (第202・232図)

9C区に検出された、南北方向の溝である。長さ約4m、幅20~30cm、深さ7~8cmを測り、南北両方向に続く痕跡もない。埋土は黄灰色の砂質土で、土師器の細片が50片ほど出土しているうち、図示できるものは976のみであった。13末~14世紀初頭か。(柳瀬)



第232図 溝36 断面、同出土遺物

##### 溝37・38 (第202・233図)

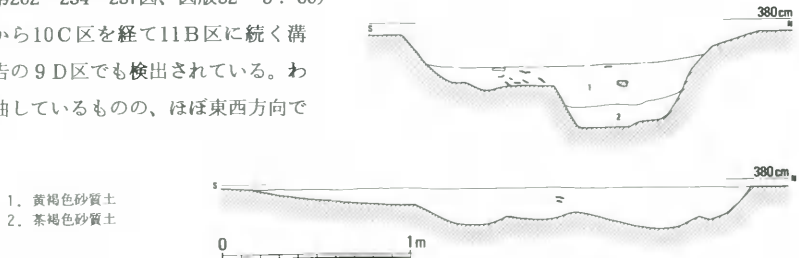
10B区から11B区へかけて、ほぼ東西方向で直線的に延びる2条の溝が検出された。溝38の西端は鉤形に曲がり、始点を思わせる。2条の溝は重なり、溝37が新しく掘りなおされたと観察された。水は西から東へ流れていたとみられる。溝37は幅115cm、溝38は幅60cmを測る。溝37では礫の集中が認められた。(岡本)



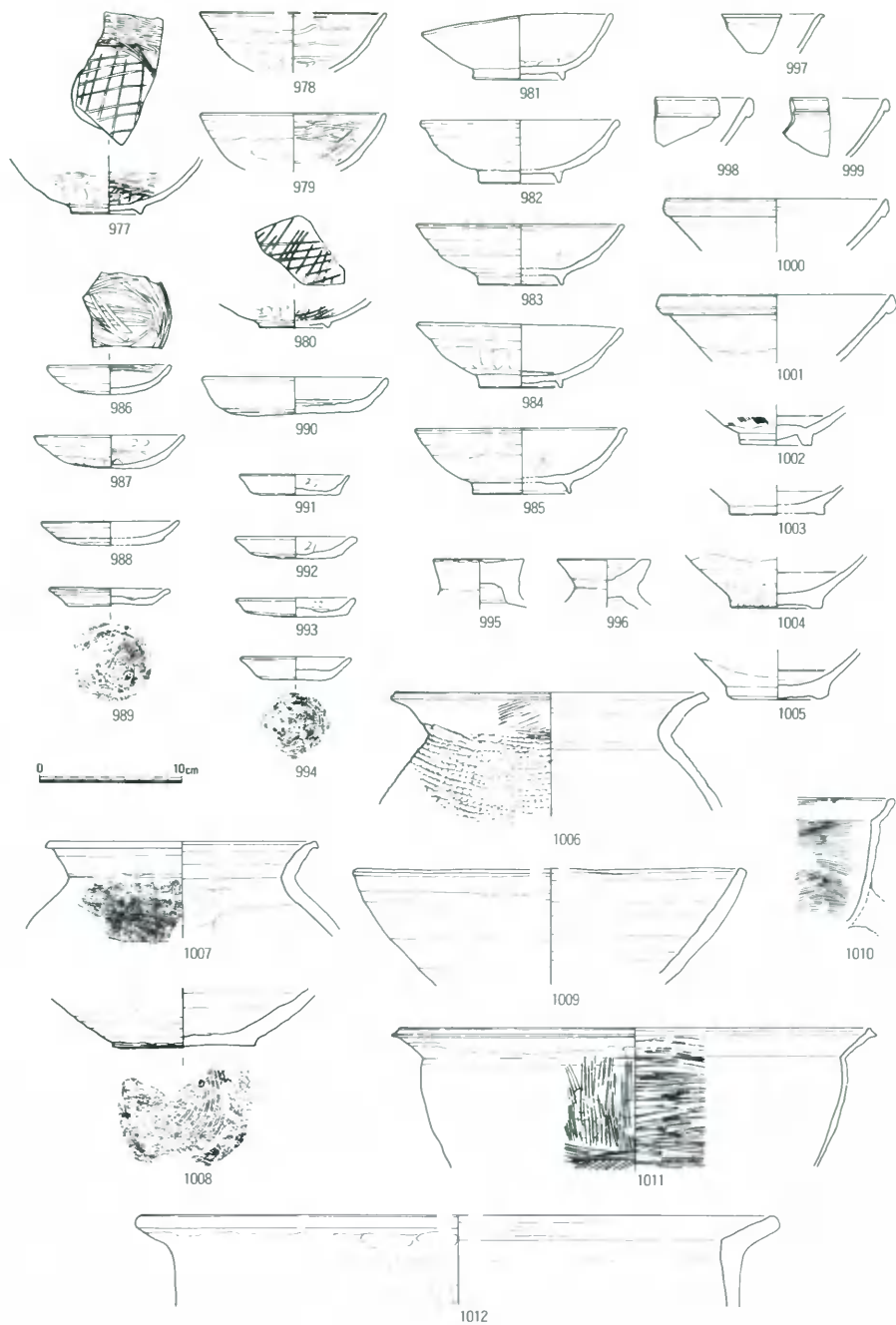
第233図 溝37・38 断面

##### 溝39 (第202・234~237図、図版32-3・60)

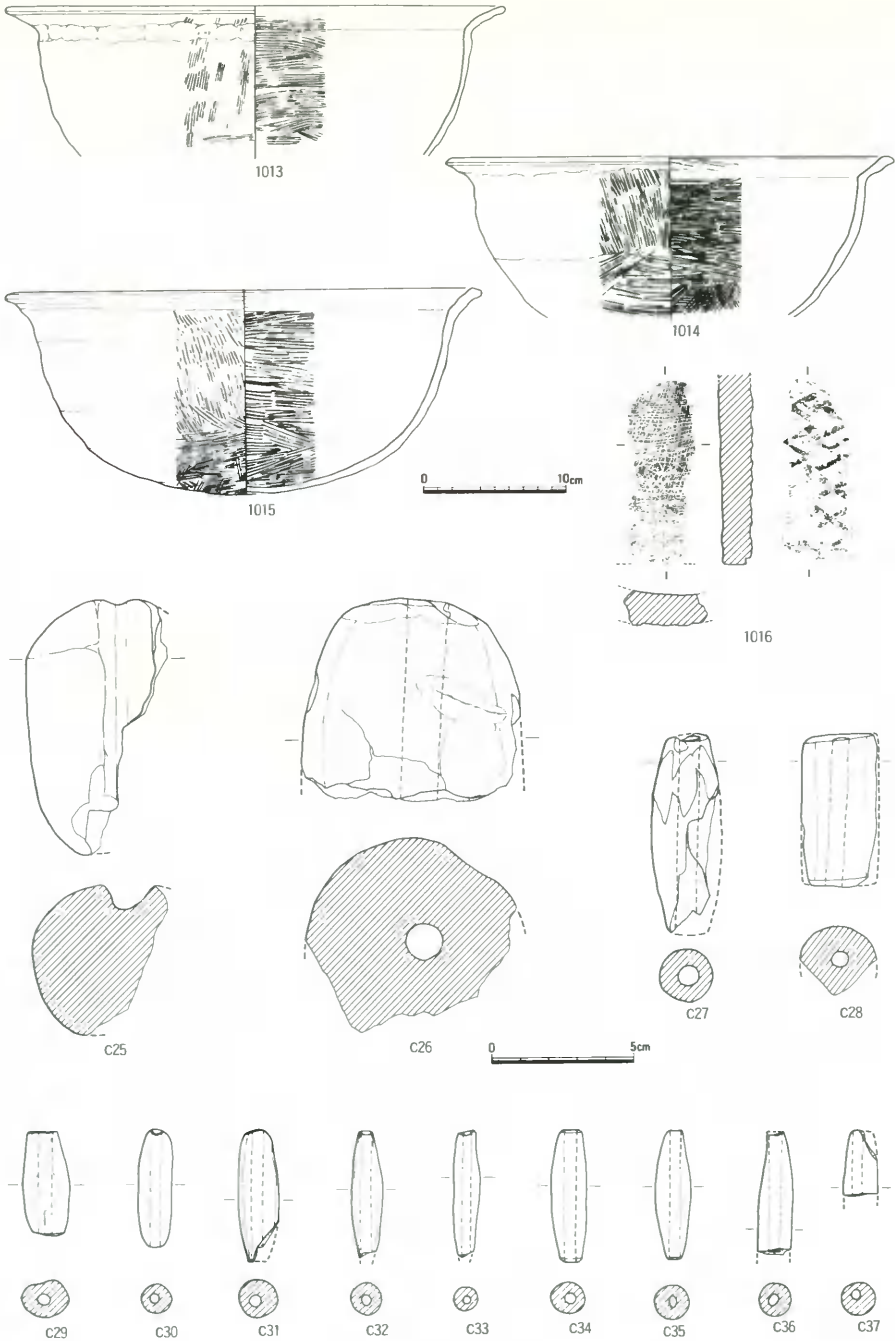
9C区から10C区を経て11B区に続く溝で、既報告の9D区でも検出されている。わずかに湾曲しているものの、ほぼ東西方向で



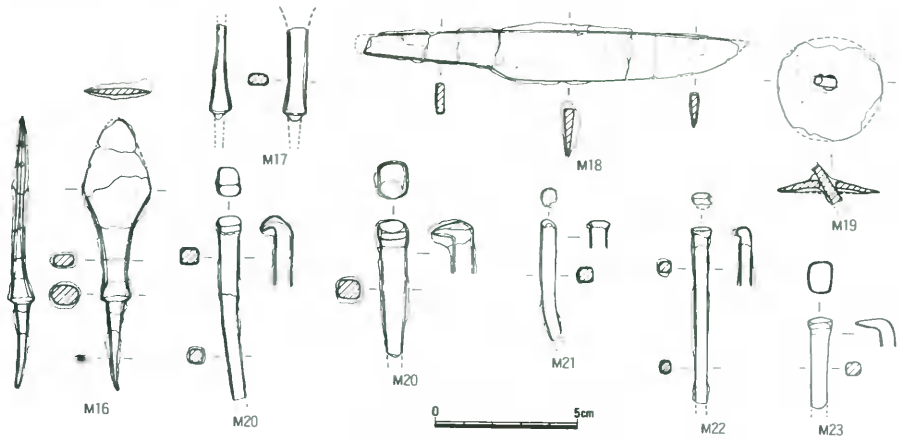
第234図 溝39 断面



第235図 溝39 出土遺物(1)



第236図 溝39 出土遺物(2)

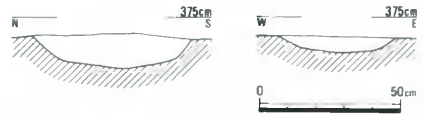


第237図 溝39 出土遺物(3)

調査区を横切っていた。溝底の高さから判断すると、水の流れは東から西へ向かっていたと考えられる。上流部にあたる10B区あたりでは、溝の幅は300cm前後と広いが、深さは20~25cmと浅く、溝の断面は軽い凹凸の連続だった(第234図下)。それが、10C区に入ると溝の北半が一段深く落ち込み、幅は200cm前後と狭くなるが、深さは50cmと深まり、断面では溝壁の傾斜も角度を増して階段状に整備される(第234図上)。溝内からは多くの土器片とかなりの礫が出土した。

出土遺物はきわめて多様で、いかにも集落の中心部に位置する溝にふさわしい。土器には、瓦器・磁器・土師器・須恵器がある。土製品としては、平瓦と土錘がある。平瓦の凸面には斜格子の叩き目が残り、土錘には大・中・小の型式差が認められた。鉄器もかなり出土した。その多くは角釘で、他に、鎌や刀子、それに紡錘車らしき円板もみられた。遺物の示す年代は13世紀前半である。(岡本) 溝40・41 (第206・238図)

15・16C・D区に位置し、調査区の隅で検出した溝である。その両端は調査区外に延びるため、長さは東西方向の溝40で5.5mを、南北方向の溝41は5mを測るに過ぎない。また、溝40の西端と溝41の北端は、いずれも『百間川原尾島遺跡4』の「溝96」に接続し、屋敷地の北西角を画すると思われる。溝の規模は幅40~55cm、深さ5~12cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。埋土は灰オリブ色砂質土である。出土遺物には少量の中世土器片があるが、時期を決する資料はない。溝の時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。(高田)



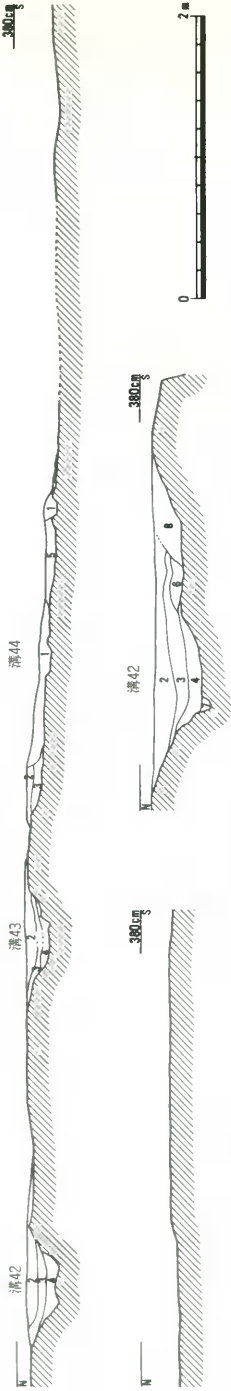
第238図 溝40・41 断面

溝42~44 (206・239図)

17・18C・D区に位置し、東西方向に流走する溝群である。その西端は調査区外に延び、東側は大きく広がり、数段に落ち込む浅い凹みとなる。さらにその東は、溝45に切られるものの、溝47の西肩に続くことを確認している。また南側は、近現代用水による攪乱を大きく受けている。

溝は、さらに数条に絞れるが、いずれも浅い凹みに注ぎ込むようにして途切れている。それらの規





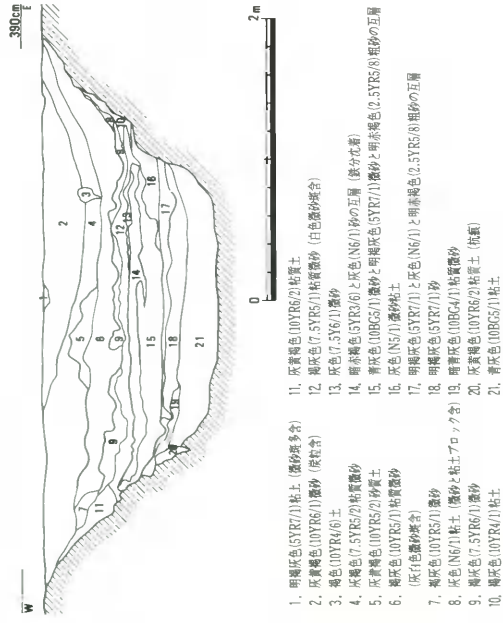
7. 灰白色(10YR7/1)粘性細砂  
8. 灰白色(10YR/1)粘性粗砂

5. におい・黄色(2.5Y6/3)砂質土  
6. におい・黄褐色(10YR7/3)粘性細砂 (灰白色・黄褐色細砂と褐灰色土・ブロック含)

3. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土 (下層に灰白色砂の薄層)  
4. 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土 (黄灰色土・ブロック含)

1. 浅褐色(2.5Y7/3)砂質土  
2. におい・黄色(2.5Y6/4)砂質土  
3. 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土 (下層に灰白色砂の薄層)  
4. 黄灰色(2.5Y6/1)砂質土 (黄灰色土・ブロック含)

第239図 溝42・43・44 断面



第240図 溝45 断面

溝は長さ9～17.2m、幅85～115cm、深さ15～20cm前後を測る。最も長い溝42では、その西側に幅190cm、深さ35cmに落ち込む部分がある。溝の断面形は逆台形だが、壁の上半が大きく開くことから、掘り直し等が考えられる。

出土遺物は、須恵器、土師器、土師質高台椀等があるが、いずれも小片である。

溝の時期は、検出状況等から、溝47と同時期の13世紀後半代と考えられる。(高田)

溝45 (第206・240図、図版33)

17・18C・D区を北から南に直線的に流走する溝で、溝42～44・47を切っている。両端は調査区外に延び、南端は『百間川原尾島遺跡2』の「溝89」に接続する。規模は幅390cm、深さ110cm前後を測る。断面形は逆台形で、壁の中位の段から上がやや広がりがみに立ち上がる。底は、北半がほぼ平坦なのに対し、南半は深さ10～20cmの凹みが数箇所みられる。

埋土は、上層(1～13層)と中層(14～20層)がほぼ砂による堆積なのに対し、下層(21層)は粘土である。また、上層下面の14層は鉄分沈着層であり、壁の

1. 明褐色(5YR7/1)粘土 (腐砂多分)
2. 灰黄色(10YR6/1)粗砂 (灰粘土)
3. 褐色(10YR4/6)土
4. 灰黄色(7.5YR5/2)粘着粗砂
5. 灰黄色(10YR5/1)粘着土
6. 灰黄色(10YR5/1)粘着粗砂 (灰黄色粗砂含)
7. 灰黄色(10YR7/1)粗砂
8. 灰色(N6/1)粘土 (腐砂と粘土・ブロック含)
9. 明灰色(7.5YR6/1)粗砂
10. 明灰色(10YR4/1)粘土
11. 灰黄色(10YR5/2)粘着土
12. 明灰色(7.5YR5/1)粘着粗砂 (白色粗砂含)
13. 灰色(7.5Y6/1)粗砂
14. 明赤褐色(5YR3/6)と灰色(N6/1)砂の互層 (鉄分含)
15. 黄灰色(10R5/1)粗砂と明褐色(5YR7/1)粗砂と明赤褐色(5YR5/8)粗砂の互層
16. 灰色(N5/1)粘着粘土
17. 明褐色(5YR7/1)と灰色(N6/1)と明赤褐色(5YR5/8)粗砂の互層
18. 明褐色(5YR7/1)粗砂
19. 明褐色(10R5/1)粘着土
20. 灰黄色(10YR6/2)粘着土 (粘着)
21. 黄灰色(10R5/1)粘土

形態と合わせ、上層段階での溝の改修が考えられる。出土遺物には、中世土器片や鉄滓、加工木や杭先、獣骨、モモの種子等がある。

溝の性格は、その東側に柱穴がないことから、西側の集落を画するものであった可能性が高い。

時期は、検出状況等から、13世紀後半代よりも新しいと考えられる。(高田)

**溝46** (第206・241図)

18C区の西寄りに位置し、溝45と47の間で検出した遺構である。その平面形は、ほぼ南北に細長い土壇状を呈す。規模は長さ470cm、幅50~100cm、深さ37cmを測る。断面形は逆台形で、部分的に一段低くなる箇所がみられる。時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。(高田)

**溝47** (第206・242図)

溝35を踏襲し、その最終流路と考えられる溝で、第195図のA-A'断面の2~13層に該当する。南北に流走し、北端は調査区外に延びるが、南側は溝35と同時に掘上げたため不明である。規模は、幅550cm、深さ75cmを測り、埋土は、微砂や粘性微砂である。出土遺物には、瓦器の小皿(1017)や土師質高台碗(1018)がある。

溝の時期は、13世紀後半と考えられる。(高田)

**溝48** (第206・243図)

19C杭の北に位置し、東北から南西方向に流走する溝である。その北東端は調査区外に延び、南西は不明瞭となって途切れる。規模は幅50cm、深さ10cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。埋土は褐色粘土である。

時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。(高田)

**溝49** (第206・243図)

19C杭の南を東西に流走する溝で、東端は近現代用水に切られ、西端は途切れて終わる。規模は幅60cm、深さ15cmを測り、壁は平坦な底から段をもって急斜に立ち上がる。

時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。(高田)

**溝50** (第206・243図)

19C・D区に位置し、東北から南西方向に直線的に流走する溝である。平行する溝51とは210cmの距離をおく。その北東端は調査区外に延び、南西端は溝47に切られている。規模は幅180cm、深さ15cmを測り、壁は平坦な底からやや急斜に立ち上がる。埋土は褐色粘土である。

時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。(高田)

**溝51** (第206図)

19C区の調査区隅で西肩のみ検出した溝で、西南端は『百間川原尾島遺跡4』の「溝98」に接続する。埋土は褐色粘土で、規模は溝50とほぼ同様と考えられる。

時期は、検出面と埋土から中世と考えられる。(高田)

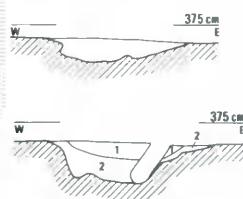


1. 灰白色(5Y7/1)粘性微砂  
2. 褐色(10YR5/1)粘土斑灰白色(5Y7/1)粘性微砂

第241図 溝46 断面



第242図 溝47 出土遺物



1. 灰黄褐色(10YR6/2)粘土  
2. 褐色(5YR6/1)粘土

第243図 溝48・49・50 断面

## 7. その他の遺構および包含層の遺物

## 土器 (第244図)

1019と1020は、甕または鉢の底部だと思われるが、1019は焼成前底部穿孔、1020は底部外面に先刻が認められる。底部穿孔甕のうちそのほとんどが焼成後穿孔孔であることはよく知られているが、前者は数少ない例外であり、注目される。後者は鋭利な工具が使用された線描であるが、その構成は家が描かれているようにも見える。時期はいずれも百・後・Ⅱ～Ⅲとみてよい。

杯蓋1028・甕1022は3調査地区の土壌11周辺から出土したもので、井戸10にも比較的近く5世紀末から6世紀初頭の時期に比定される。また、1023～1026は溝35の混入または上部から出土したもので、年代は室町時代後期とみて大差はない。

## 石器 (第245・246図)

石鎌、石錐、石包丁、石槍、石鎌、スクレイパー、楔形石器、紡錘車、馬形、砥石、硯、敲石など多種多様の石器が出土している。打製石器のうちほとんどの石材はサヌカイトが使用されているが、石鎌S99の黒耀石、石包丁S131の頁岩・S132の粘板岩などに例外が認められる。S99・石鎌S137は縄文晩期の可能性もある。滑石製紡錘車のS147は溝35から出土しているが、古墳時代に属すと思われる。馬形と考えたS148は、堅穴住居3に隣接する小土壙から出土していて、自然面を多く残すがとくに側面に線刻痕跡などが認められる。また、敲石S157は古墳時代と思われる小土壙から出土しているが、弥生時代とみてよい。

## 玉類 (第247図、巻頭図版4-1)

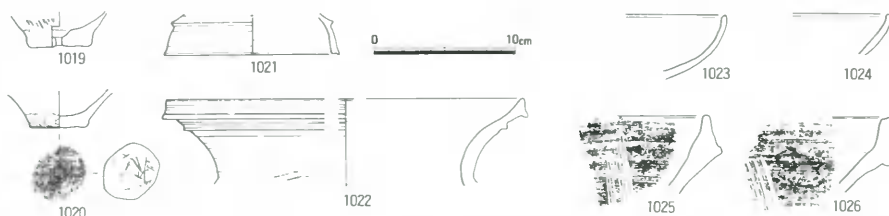
J18・J19がガラス製のほかは、いずれも滑石製の白玉である。J20～J28の白玉は溝25・26の検出時またはその周辺遺構の検出時に出土したもので、この付近に削平を受けた古墳時代後期の堅穴住居が存在した可能性もある。J29・J30の白玉は溝29の肩部付近で出土しているため、この項で扱った。

## 土製品 (第247図)

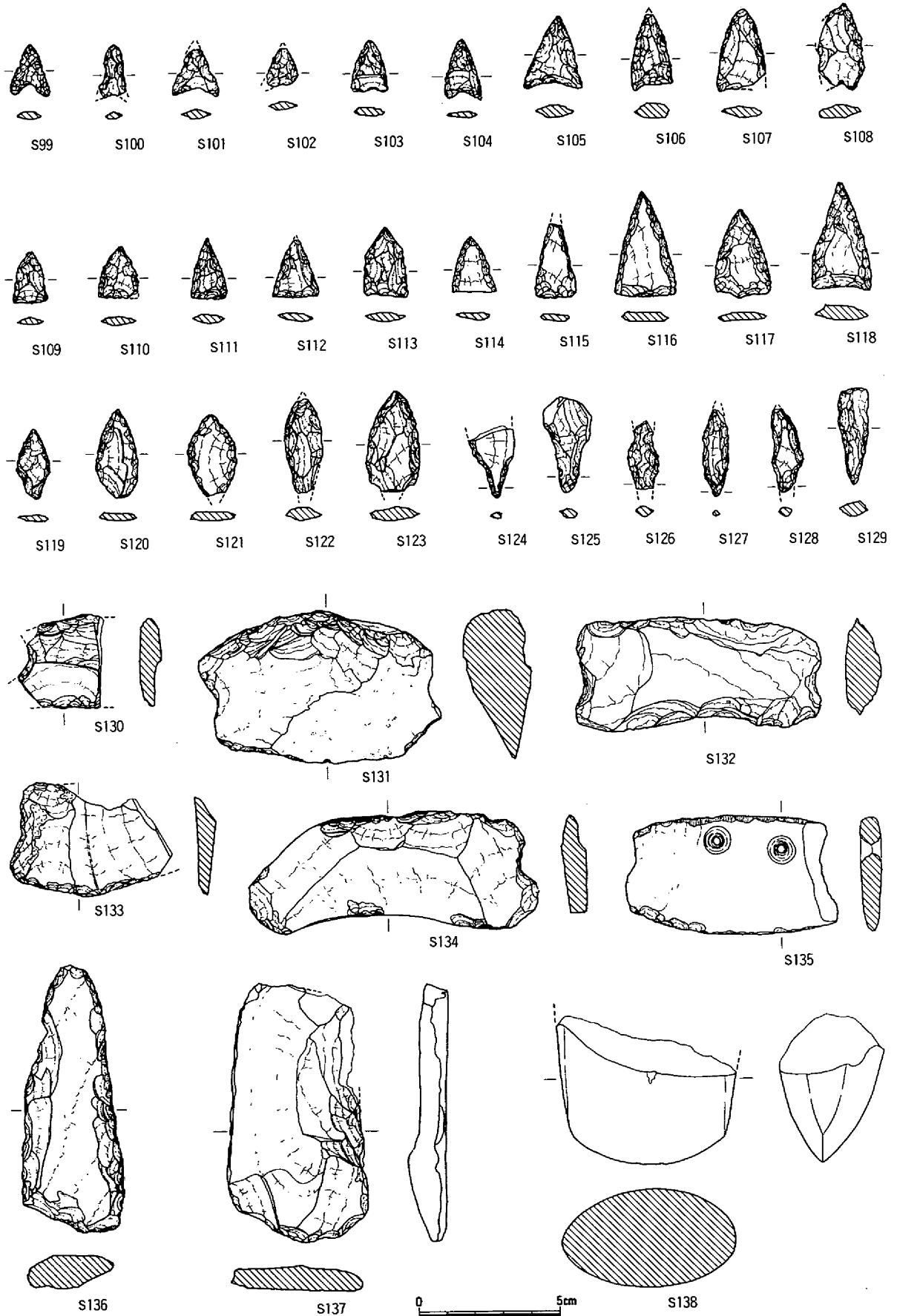
図示したものはいずれも土錘である。楕円形でC型式のC38は、中せらしい浅い溝から出土しているが、古代の可能性がある。球形のC39は土器溜り2に含まれていたが、これも古代に多い形態である。C40～C42は紡錘形を呈し中央に穴が貫通するB型式で、前二者は古墳時代の小土壙、後者は溝26付近から出土している。

## 金属製品 (第247図、図版71)

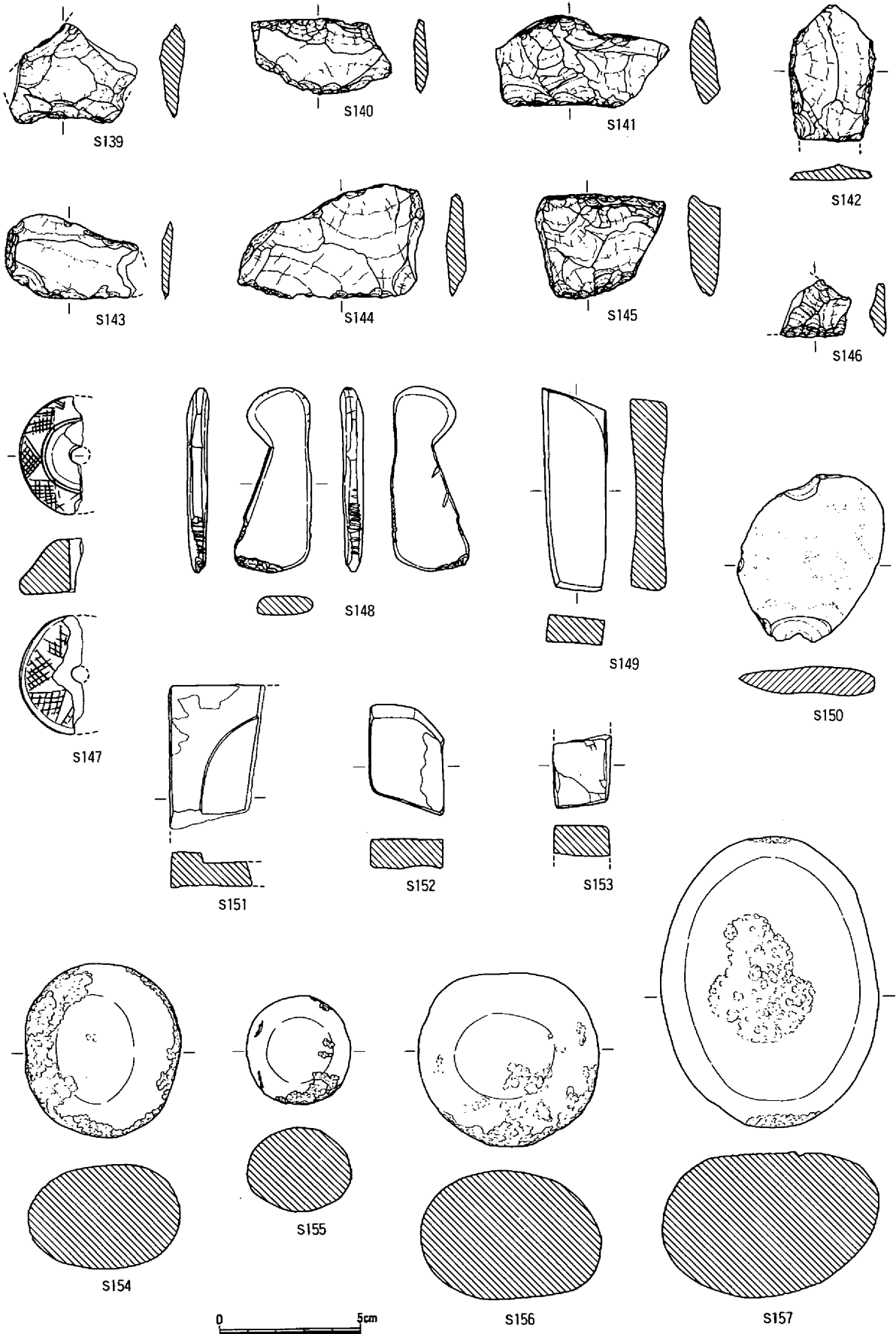
図示したもののほかに、約60点ほどの鉄片や10数点の銅銭（おもに寛永通宝）などが出土しているが、おもに時期の分かる完形に近い製品に限って提示した。M25～M29・M31は弥生時代後期の包含層あ



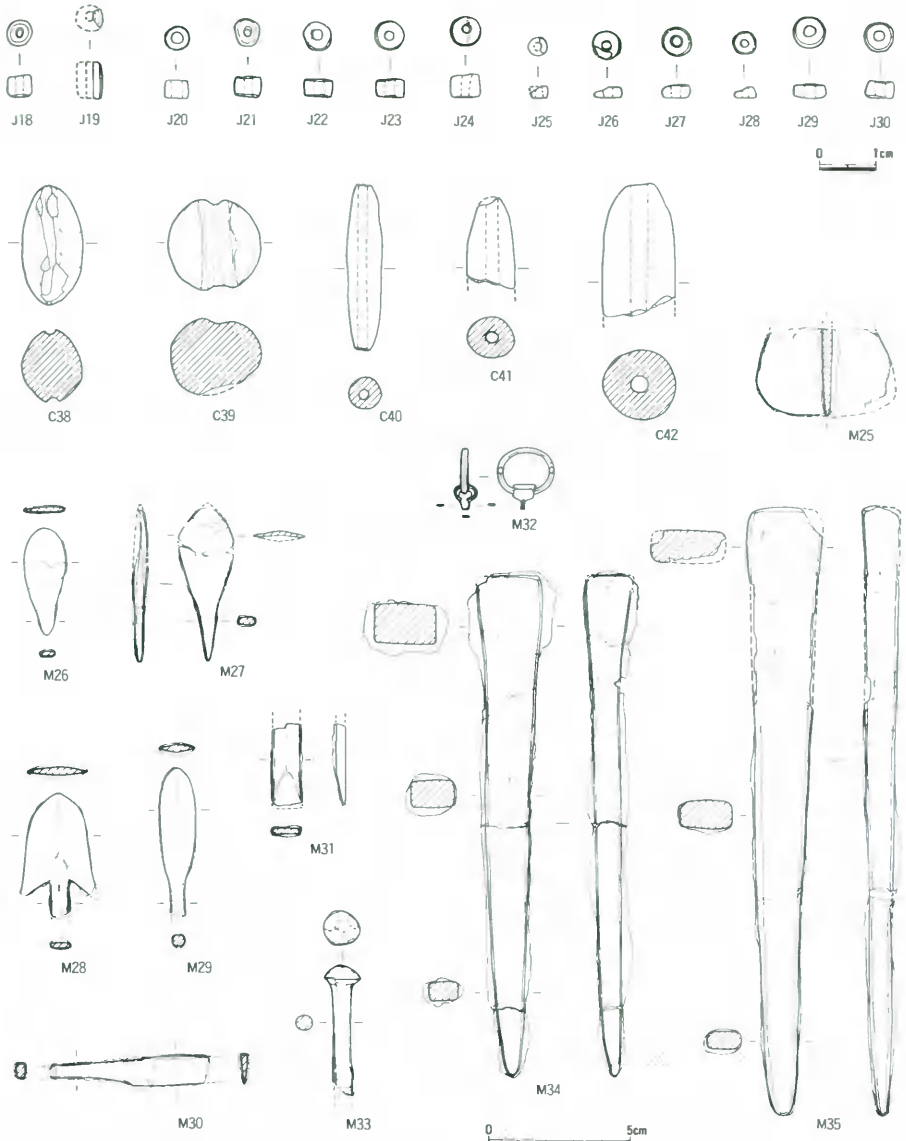
第244図 包含層等 出土遺物(1)



第245図 包含層等 出土遺物(2)



第246図 包含層等 出土遺物(3)



第247図 包含層等 出土遺物(4)

るいは同時期の土壌などに伴っているため、同時期とみてよい。M30は溝25～27の交差する付近から出土しているため、古墳時代の可能性が強い。鑿と考えたM31は、両側から中央に向かって折り重ねた形跡もあるため、別の器種かもしれない。金具M32は溝に伴っているが、中世と考えられる。鍍金が施されている。釘M33～M35は溝35の上部で出土していて、中世とみてよい。

(柳瀬)

## 第2節 三ノ坪・横田調査区

### 1. 調査区の概要

この調査区の調査前の大部分の状況は休耕中の水田であった。また調査区の西側には現在の国道2号線百間川橋の橋脚が存在しており、調査不能であった。さらに37・38CD区には近年の土取りのために掘削された部分が存在しており、この部分は縄文時代の土層まですでに削平されてしまっていた。現代水田の下層には中・近世の水田層と水路と考えられる溝を検出することができた。中・近世の溝は方位に沿ったかたちで存在していた。

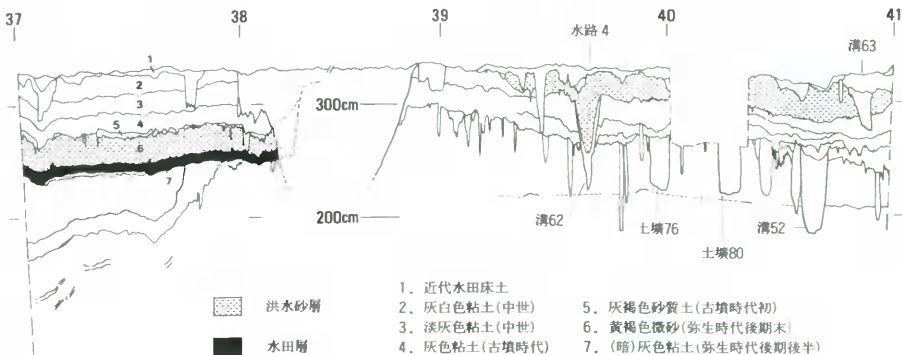
中・近世の水田層の下層には古墳時代の包含層および生活面が存在していた。検出できた遺構は竪穴住居1軒、井戸2基、溝4条、土器溜り1箇所、いずれも調査区の東半部に位置している。

古墳時代の包含層の下層には、弥生時代後期末（百・後・Ⅳ）と考えられている洪水砂層が調査区の多くの部分に堆積していた（第248図）。この洪水砂層に覆われるかたちで検出されたのは、調査区の西半部と南東部隅に存在していた水田2・3と水田3に伴う水路4のみであった。

水田および水路を除く弥生時代後期の遺構は、井戸1基、土壌1基、製塩炉1基、溝9条、土器溜り1箇所が検出された。これらの多くは百・後・Ⅱの時期であった。これらの遺構のうち弥生時代の製塩炉は岡山県下では2例目の発見であり、特に注目される遺構である。

この調査区において最も遺構・遺物が多いのは弥生時代前期～中期前葉の時期のもので、竪穴住居3軒、土壌46基、焼土面2箇所、溝2条を報告している。このうち竪穴住居については床面は検出できず、中央穴と考えられる土壌と柱穴の配置から想定したものである。遺物は多くの土器・石器が出土したが、1192の漆の付着した土器や前期後葉の土壌から重なった状態で出土したS178～183の石器や前期後葉の土壌から出土した管玉（J31・32）などが注目できる。

弥生時代前期の溝52を掘り下げ中にその肩部から縄文時代後期の土器が出土した。そのため周辺のいわゆる弥生時代前期以降の基盤層と考えていた黄色砂質土を掘り下げたところ第250図に示したような状況で縄文時代後期後葉の土器を検出することができた。（平井）



第248図 37～40区 断面(縦1/50、横1/500)

## 2. 縄文時代の遺構・遺物

### (1) 土器溜り

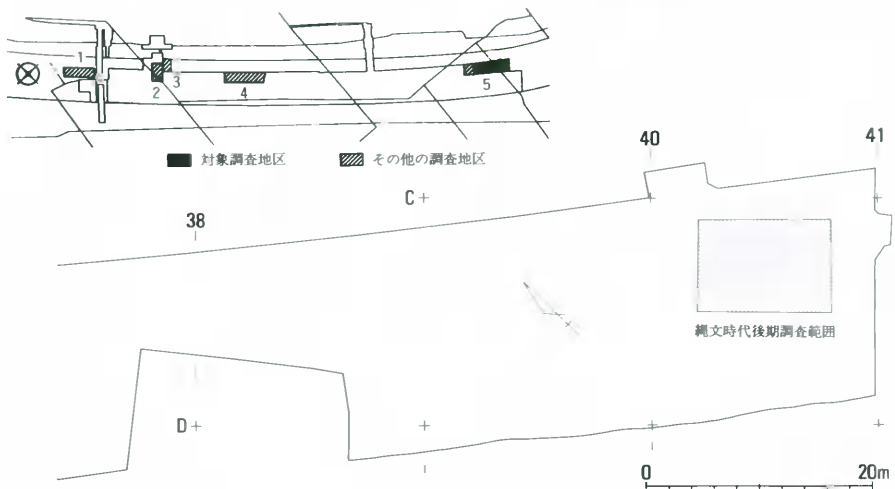
#### 土器溜り3 (第249～251図、図版33・61)

40C区で検出された弥生時代前期後葉の溝52の埋土を掘り進める過程で、溝の西壁面から縄文時代後期の土器片が数点出土した。出土した層位は弥生時代前期の遺構検出面から約50cm下位にあっていた。この層位は調査時点では原尾島遺跡などで縄文時代晩期の土器が弥生時代前期の遺構検出面近くから出土した例があったものの、いわゆる基盤層で無遺物層と考えていた黄色砂質土のかなり深い部分に相当していた。しかしながら土器片が僅かではあるが出土する事実から、出土地点を中心に5m四方の調査区を設定して基盤層を掘り下げていった。その結果50片前後の土器片と焼土面を検出することができたものの、土器片はこの調査区外にも広がっている可能性が高いことが推測できたため、さらに調査区を拡張することとし、最終的には調査期間との調整もあって、第249・250図に示した12×8mの範囲を掘り下げることによって縄文時代後期の遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果、焼土面が3箇所と、160片余りの土器片および2点の石片(石器ではない)を検出することができた(第250図)。焼土面はいずれも土器片とほぼ同じ高さで検出できており、図示した大きさの範囲に被熱した面が確認できた。土器は調査区の中央ちかくに60片前後がまとまって出土しており、その他にも10～20片前後のまとまりが3箇所認められた。出土レベルには最大で約20cmの高低差が認められるものの、出土土層に明確な違いは認められなかった。

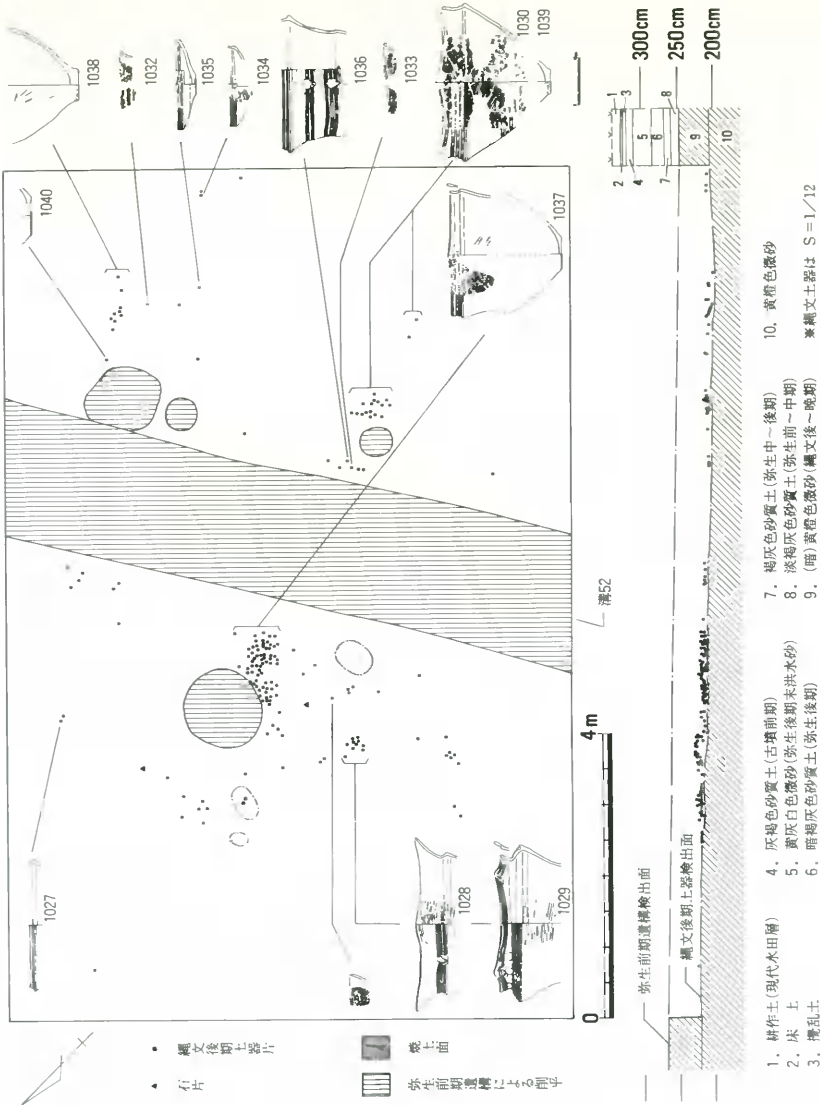
このような焼土面や土器片の検出状況から本報告書ではこれらを土器溜りとして報告することにした。しかしながらそれ以外に径10m以内の堅穴住居が存在していた可能性も考えられるが、調査時点では掘り込みや柱穴は検出することはできなかった。

出土した土器片のうち復元作業を経て図示できたのは、1027～1040の14点の土器で、出土地点につ

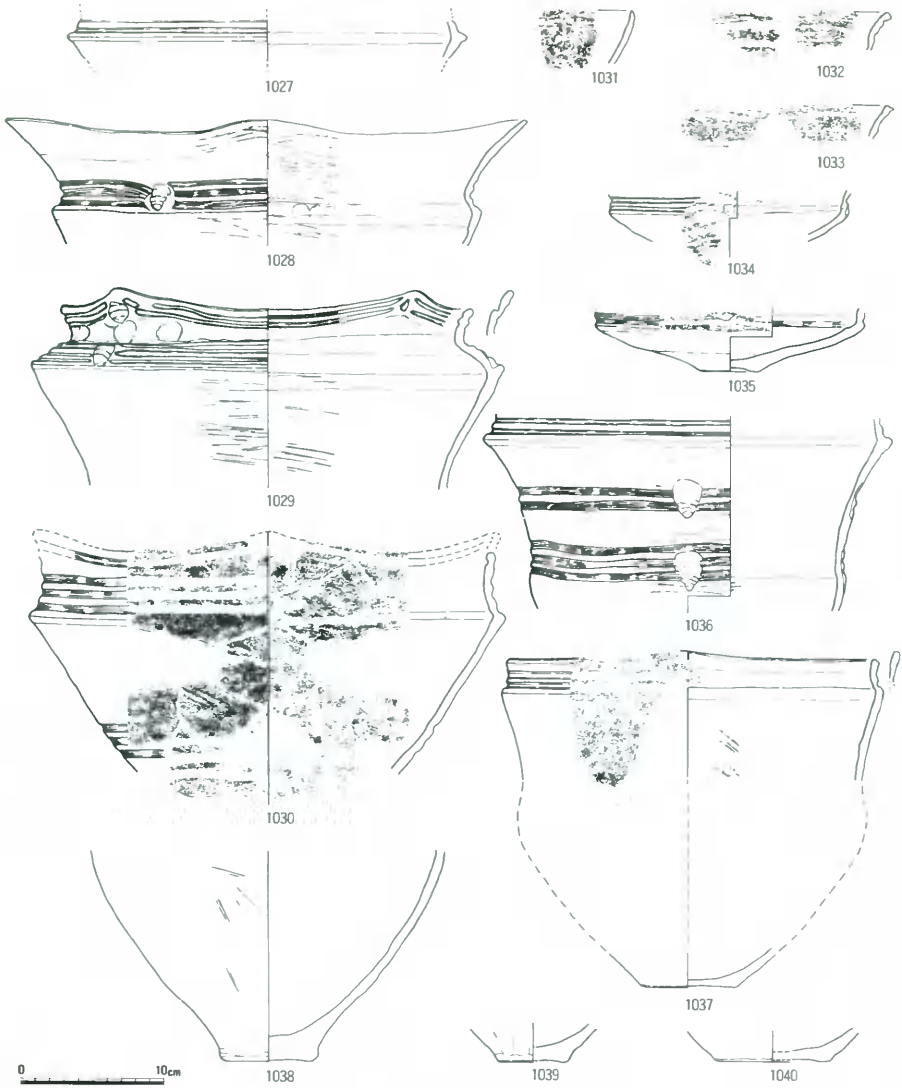


第249図 対象調査区位置および範囲(縄文時代後期、1/500)





いては第250図に示した。器種の不明確なものや調整が識別しにくいものもあるが、1028の口頸部下半には巻貝による3条の凹線が施されており、巻貝扇条痕も1か所残存していた。1029の口縁部は波状になっているが、図は約1/3残存していた口縁部から作図したものである。口縁部の内外面と肩部の外面には巻貝による凹線と扇条痕が観察できる。1030の口縁部は波状になると推定した。また口縁部の外面および体部下外面には巻貝による凹線文が施されている。1032の口縁部外面には巻貝による凹線文が確認できる。1034・1035は浅鉢か注口土器で、口縁部外面には巻貝による凹線文と扇条痕



第251図 土器溜り3 出土遺物

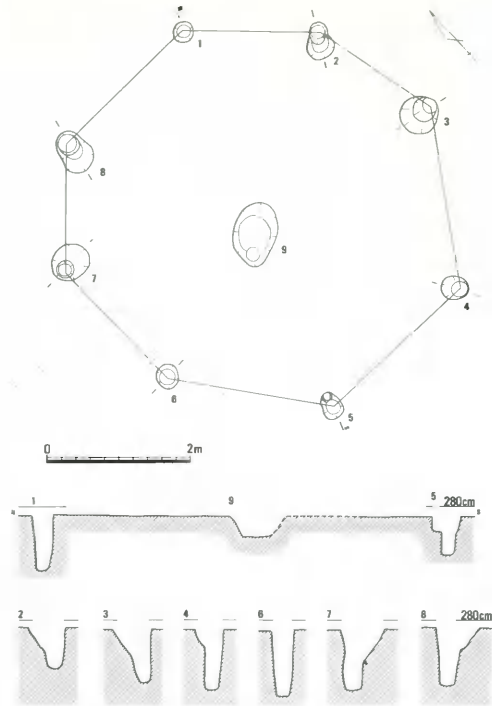
が施されている。1036の口縁部外面には巻貝による凹線文が、また1036の体部外面と1037の口縁部外面には巻貝による凹線文と扇条痕が施されている。このような調整や文様の特徴からこれらの土器の時期は縄文時代後期後葉と考えられる。ところで、ここで報告した発掘調査以後、岡山県南部では弥生時代以降の基盤層中やその1～2m下位から縄文時代後期の遺構・遺物が津島岡大遺跡や南溝手遺跡などにおいて発見されるようになった。こうした沖積地における縄文時代後期の集落の成立については、稲作を含む農耕の存在があったと推定できるのではなかろうか。 (平井)

## 3. 弥生時代前・中期の遺構・遺物

## (1) 竪穴住居

## 竪穴住居21 (第252図、図版34-1)

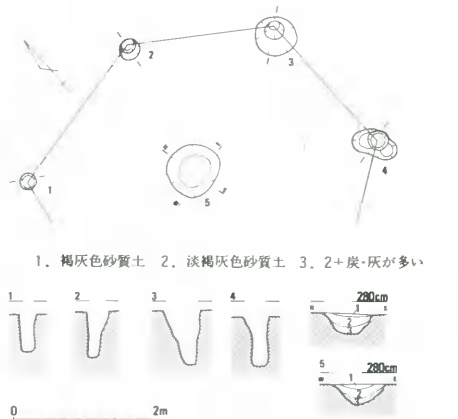
39C区と39D区とにわたって検出した。この竪穴住居は床面まで後世に削平されており、中央穴と考えた土壌とそれを取り囲むように確認できた柱穴の存在によって想定した。柱穴は8本と考えた。これ以外に周辺には適当な柱穴は存在しなかったが、柱穴の間隔が約2m~2.7mまで異なっているのが気にかかる。中央穴は長さ90cm、幅60cmの楕円形状を呈し、深さは検出面から約30cm残存していた。時期については中央穴や柱穴から遺物が出土しなかったため明確ではないが、埋土や検出面などから百・前・Ⅲ頃と考えている。(平井)



第252図 竪穴住居21

## 竪穴住居22 (第253図、図版34-2)

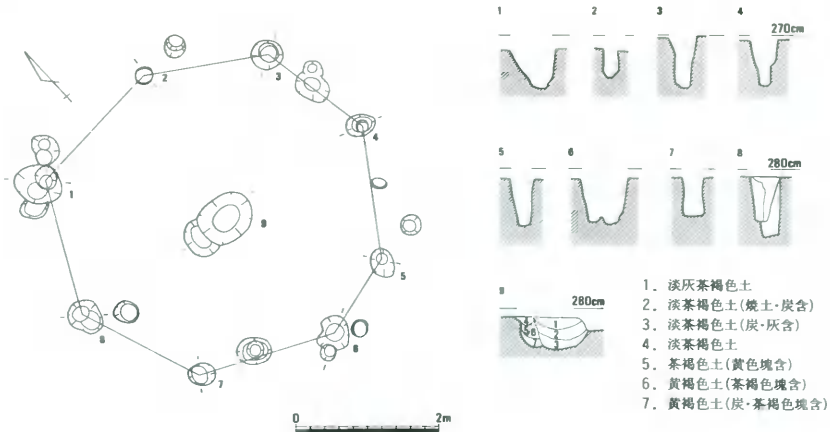
39C区の南端部において検出した。図示したようにこの竪穴住居は中央穴と考えた土壌とそれを取り囲むように確認できた4本の柱穴の存在によって想定したものである。中央穴と考えた土壌は直径約70cmの円形状を呈し、深さは検出面から約30cm残存していた。また底面には約8cmの厚さで炭と灰が堆積していた。柱穴は4本が確認できたが南側については調査区外に存在しているものと考えている。時期については中央穴から甕の小片が出土していることなどから百・前・Ⅲ頃と考えている。(平井)



第253図 竪穴住居22

## 竪穴住居23 (第254図、図版34-3)

39C区の東端部において検出した。竪穴住居21と同じく中央穴と考えられる土壌とそれを取り囲むように確認できた8本の柱穴の存在によって竪穴住居と想定した。中央穴は二つの土壌が切り合っており、住居の建て替えが行われたのかも知れない。柱



第254図 竪穴住居23

は8本を想定しているが、柱間隔は約1.2m～2mまでの違いがある。中央穴からは土器の小片とサマイト片が出土しており、時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井)

(2) 土 壌

土壌61 (第255・257・258図)

38C区の東端部において検出した。平面形は北端部が現代の土取りによって、また南端部は土壌99によって一部切られているが長さ約170cm、幅約115cmの不整楕円形を呈していたものと考えられる。断面形は逆台形状で、深さは検出面から約55cm残存していた。断面図の3層には僅かではあるが炭を含んでいた。

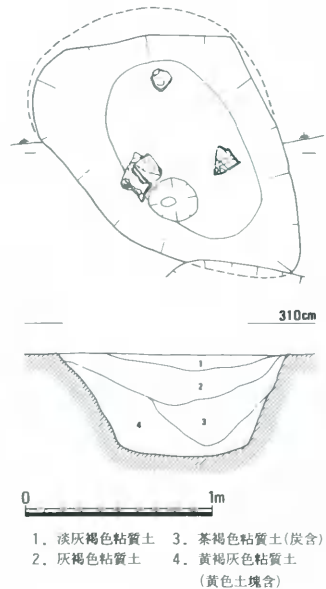
遺物は土器および石器が出土した。土器は少量出土したのみであるが、多状のヘラガキ平行沈線を胴部上半に施した甕が含まれていた。

また図示した石器のうちS158・159は石核と考えており、底面近くから重なった状態で出土している。S160は小型の柱状片刃石斧であろう。

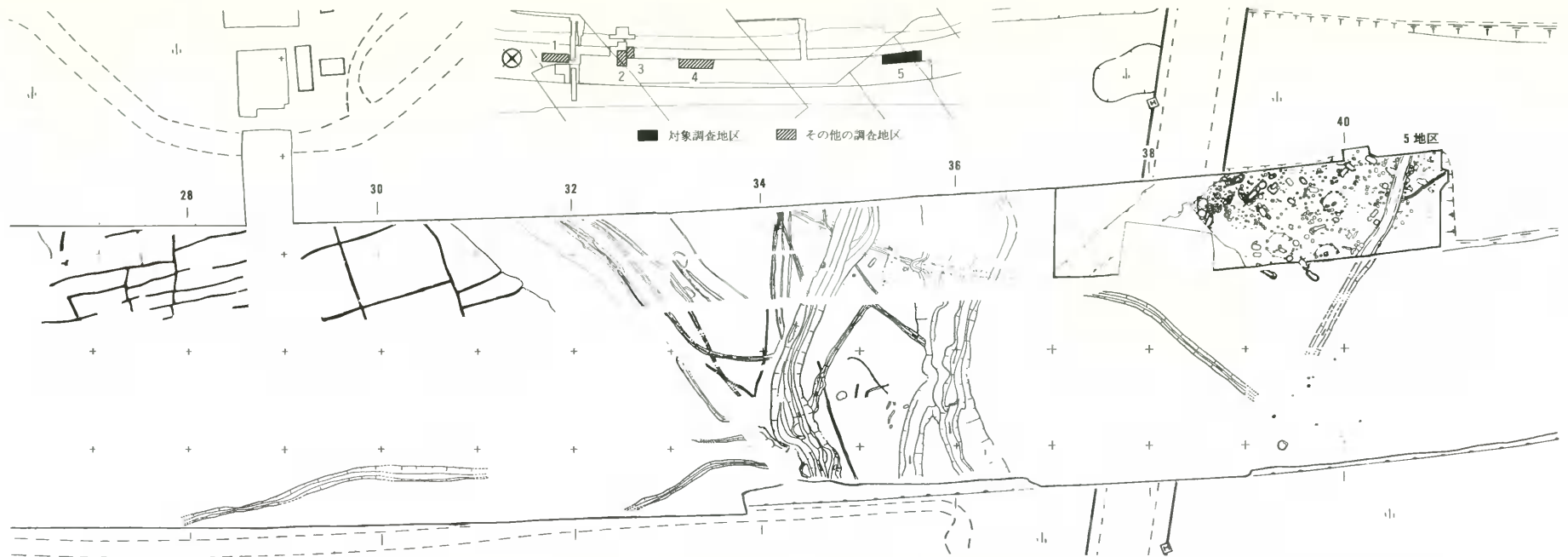
時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井)

土壌62 (第259図、図版35-2)

38C区の東部、土壌61の南において検出した。平面形は約130×125cmの円形状を呈し、南西端部は後世の柱穴によって切られている。断面形は皿状で、深さは検出面から32cm残存していた。埋土中には炭と焼土塊を含んでいた。



第255図 土壌61

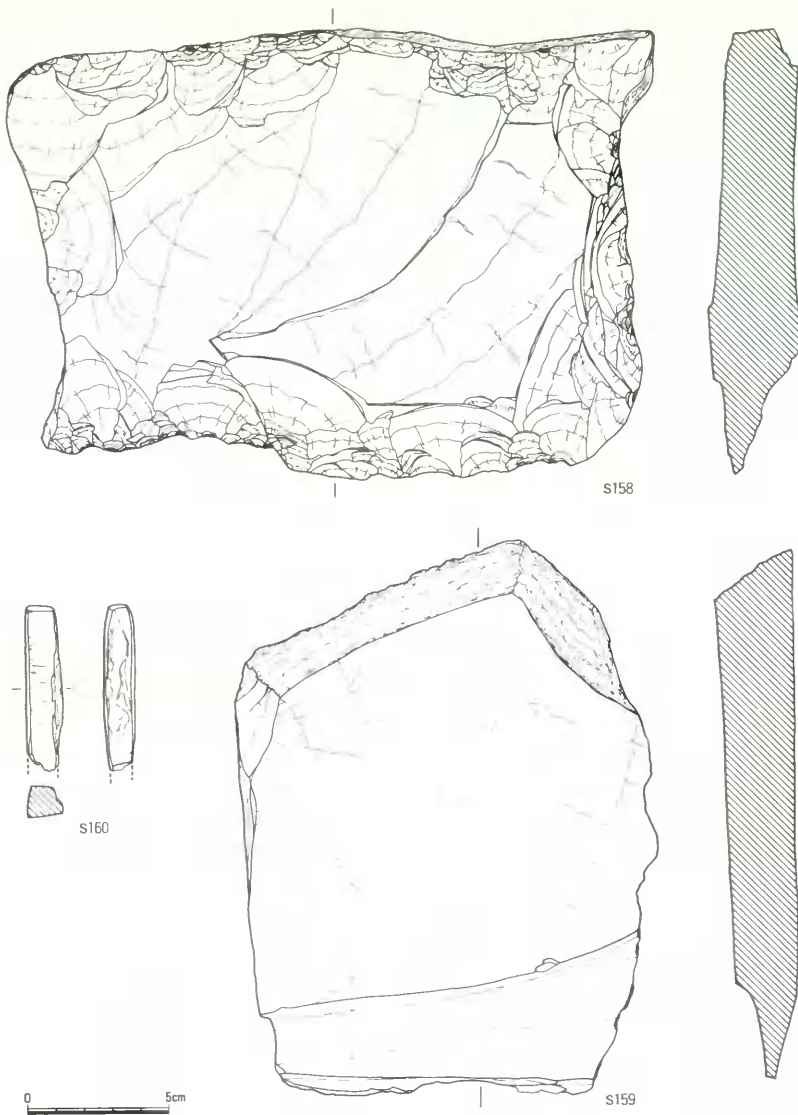


第256図 対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代前期・中期、1/1000)

※周辺遺構はおもに弥生時代前期

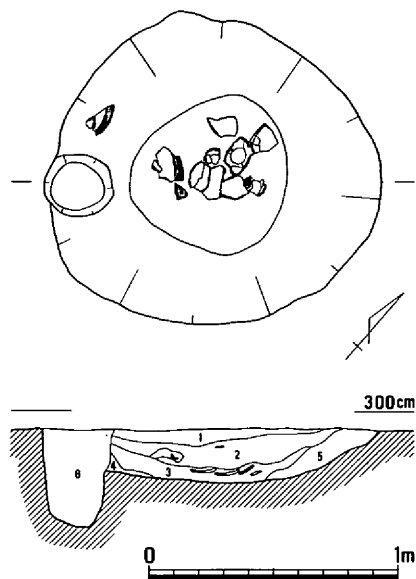


第257図 37~40区遺構配置(弥生時代前期・中期)

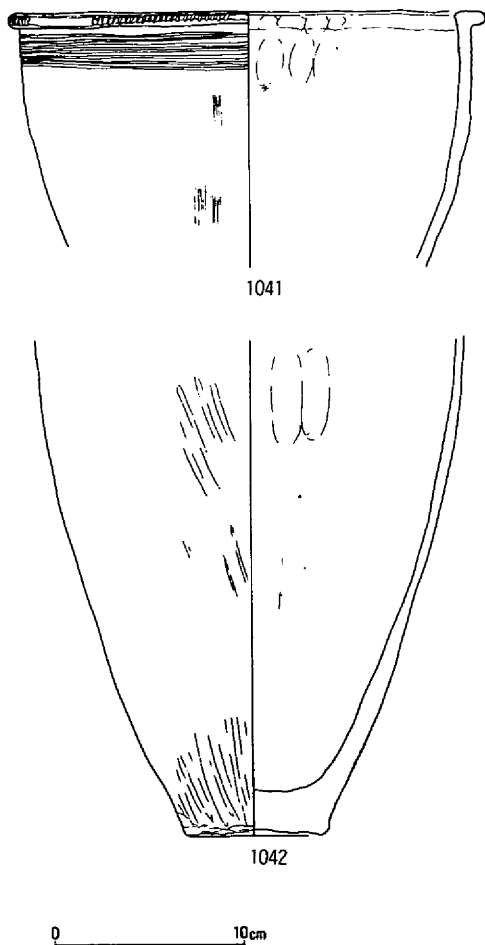


第258図 土塚6I 出土遺物

遺物は少量の土器片が3層中から出土した。1041は甕である。口縁部には逆し字状に貼り付け突帯を施している。口唇部にはヘラによるキザミメが施されているが全周してはいない。また胴部上半には7条のヘラガキ平行沈線が施されている。1042は甕の底部から胴部にかけての破片である。時期は百・前・Ⅲであると考えられる。(平井)



1. 黄褐灰色粘質土
2. 黄褐灰色粘質土(炭・焼土粒少し含む)
3. 暗茶褐色粘質土(炭・焼土塊多く含む)
4. 暗黄褐色粘質土
5. 茶褐色粘質土
6. 茶褐色粘質土(上部に炭・黄色塊混)



第259図 土壌62、同出土遺物

土壌63 (第257・260図)

39C区の北端部において検出した。平面形は長さ約165cm、幅90cmの隅丸長形状を呈していた。底面はほぼ平らであるが、東半部には55×60cmの円形状の落ち込みが存在していた。最深部までの深さは検出面から約55cmである。

遺物は少量の土器片とサヌカイト製の石器が出土している。1043は甕で口唇部にキザミメは施されていない。この他に胴部上半に多条のヘラガキ平行沈線を施した甕も出土している。石器のうちS161は石鏃、S162は石錐である。

時期は百・前・Ⅲであると考えられる。(平井)

土壌64 (第257・261図、図版35-1)

39C区の北端部、土壌63の南において土壌66を切るかたちで検出した。平面形は長さ約175cm、最大幅約95cmの長楕円形状を呈している。断面形は皿状で、深さは検出面から22cm残存していた。埋土中には炭や焼土を含んでいた。

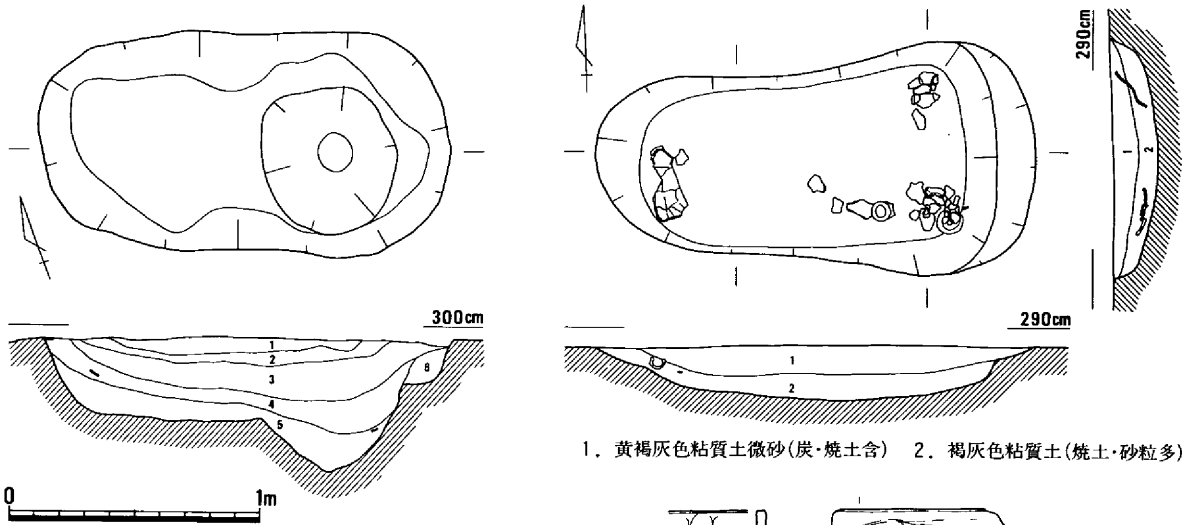
遺物はおもに図の2層から少量の土器片が出土した。1044には把手状の突起が貼り付けられている。1045は甕であるが口縁部と底部については図上復元であり明確ではない。1046は甕の底部、1048は壺の底部であろう。時期については百・前・Ⅲから百・中・Ⅰではないかと考えている。(平井)

土壌65 (第257・262図、図版35-3. 61)

39C区の北端部において検出した。平面形は92×80cmの円形状を呈し、深さは検出面から32cm残存していた。底面は部分的にくぼみが存在していたが基本的にほぼ平らであった。また壁面は垂直に近く立ち上がっていた。埋土は水平堆積にちかい土層が4層確認できた。

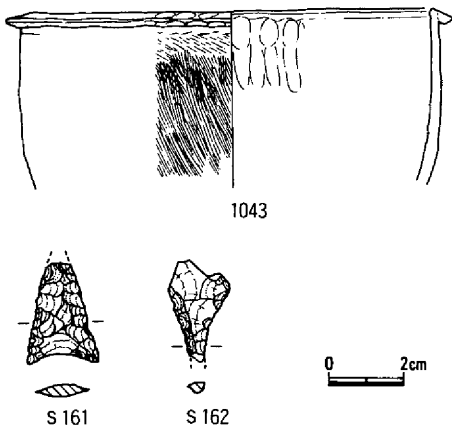
遺物は少量の土器片とサヌカイト製の石器が出土した。1049は図の1層から出土した甕形土器である。口縁部は「く」の字状に外反しており、口唇部にはキザミメが施されている。また胴部上半には7条のヘラガキ平行沈線を施している。胴部外面下半にはハケメが観察できる。S163は石鏃である。

時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)

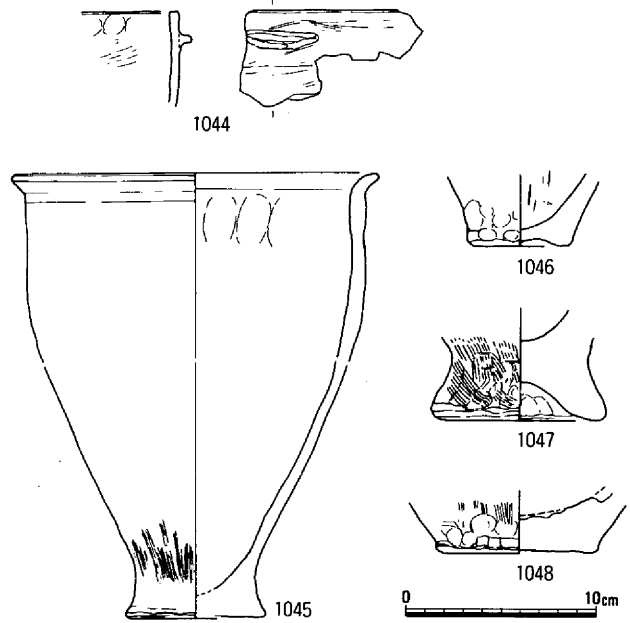


1. 黄褐灰色粘質土微砂(炭・焼土含) 2. 褐灰色粘質土(焼土・砂粒多)

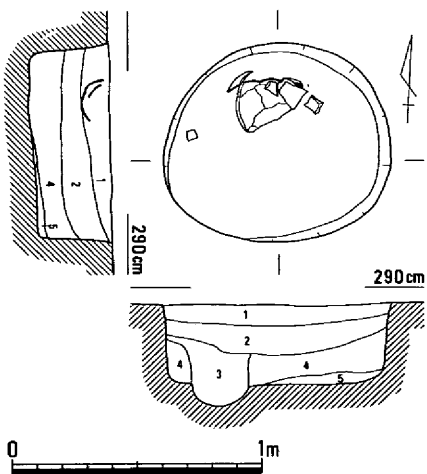
1. 茶灰色微砂土(炭含)
2. 黄褐灰色砂土(炭含)
3. 茶褐灰色砂土(炭・砂粒・黄褐色土塊含)
4. 茶灰色粘質土(炭含)
5. 茶灰色粘質土(焼土塊・黄褐色土塊・炭含)
6. 黄褐灰色微砂土



第260図 土壙63、同出土遺物



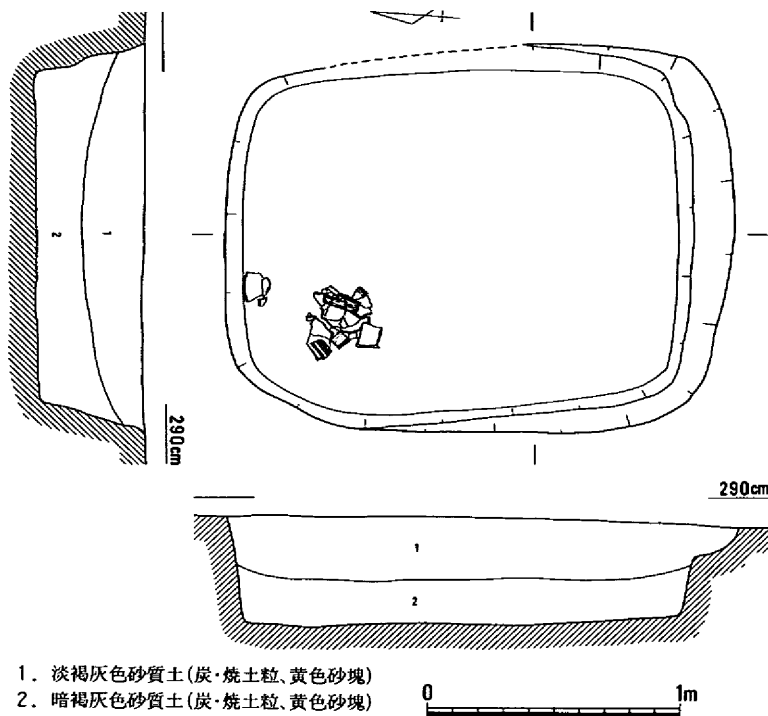
第261図 土壙64、同出土遺物



1. 褐灰白色砂質土(炭粒含)
2. 淡褐灰色砂質土
3. 黄色微砂(灰色粘土混)
4. 灰色粘土(黄色微砂塊混)
5. 暗灰色粘土

第262図 土壙65、同出土遺物



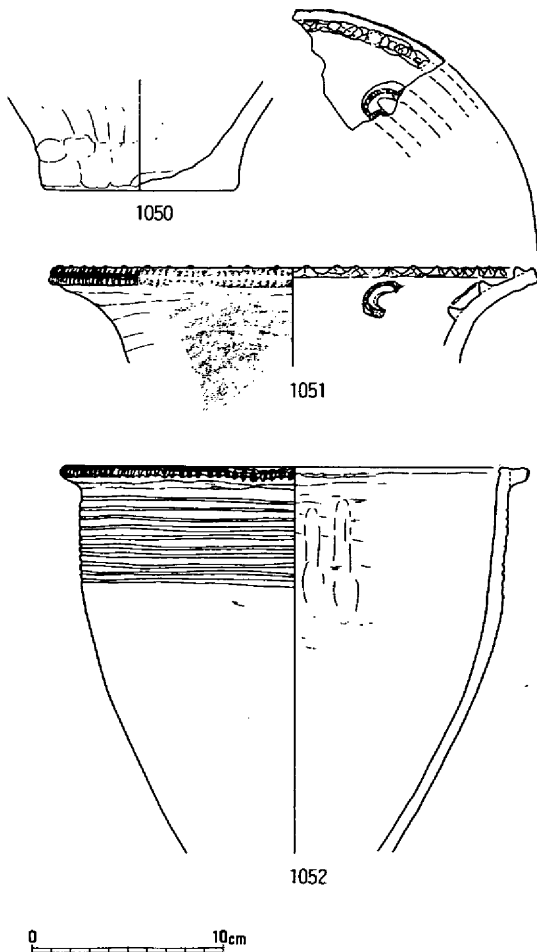


1. 淡褐灰色砂質土(炭・焼土粒、黄色砂塊)
2. 暗褐灰色砂質土(炭・焼土粒、黄色砂塊)

土壌66(第257・263図、図版61)

39C区の北端部において土壌64に切られるかたちで検出した。平面形は長さ203cm、幅156cmの長方形を呈し、深さは検出面から45cm残存していた。断面形は逆台形状で、埋土中には炭・焼土粒を含んでいた。

遺物は少量の土器片が出土している。1051は壺、1050・1052は甕と考えられる。1051の口縁部内面には貼り付けキザミメ突帯が、口唇部には沈線とキザミメが施されている。時期は百・前・Ⅲであると考えられる。(平井)



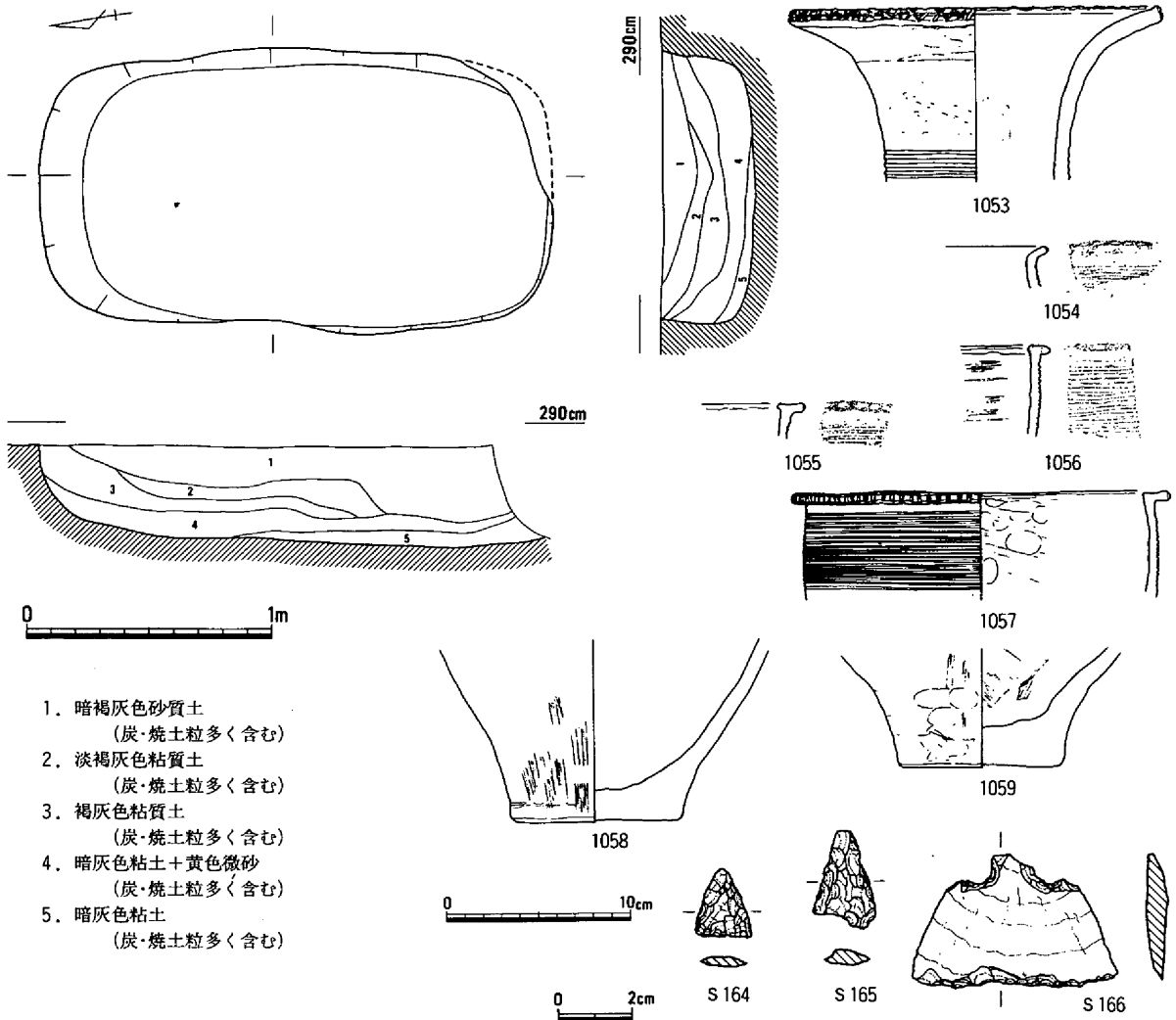
土壌67(第257・264図)

39C区の北部において検出した。平面形は南東部が土壌68によって切られてはいるが、長さ約210cm、幅約115cmの隅丸長方形を呈し、深さは検出面から約40cm残存していた。埋土中には炭・焼土粒を多く含んでいた。遺物は土器・石器が出土した。図示した土器のうち1053・1059は壺、1054～1058は甕である。甕の胴部上半の文様については1054・1055・1057はヘラガキ沈線であるが、1056はクシガキ沈線である。またS164・165は石鏃、S166は石匙である。時期は百・前・Ⅲから百・中・Ⅰであろう。(平井)

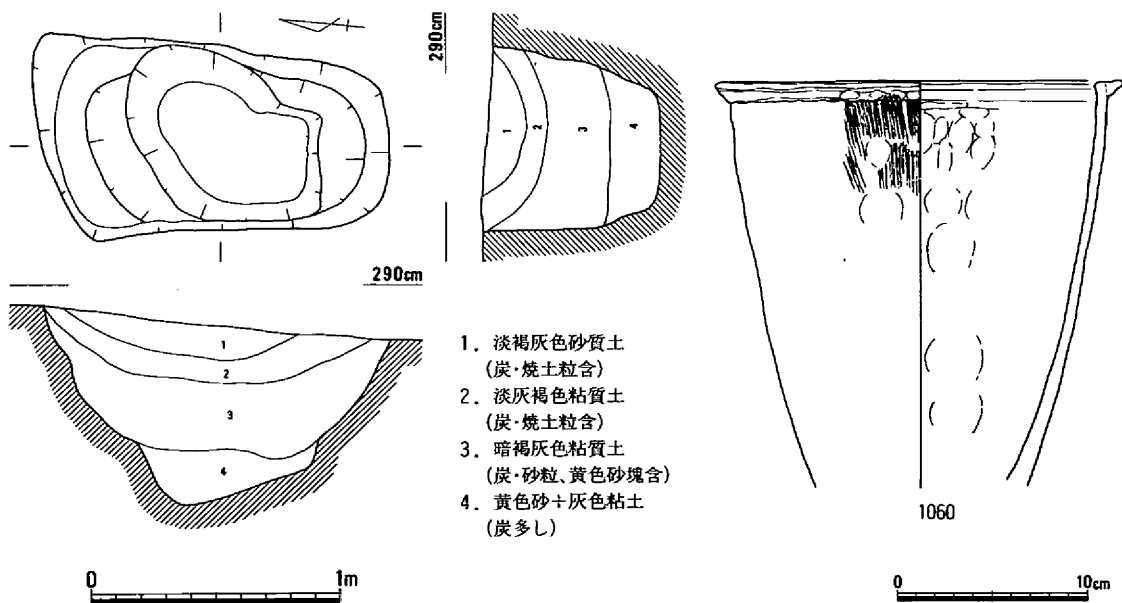
土壌68(第257・265図)

39C区の北部において土壌67を切るかたちで検出した。平面形は長さ約140cm、幅約75cmの長方形を呈している。深さは中央に向かって徐々に深くなっており、最深部で検出面から74cmを測る。埋土中には炭・焼土粒を含んでいた。遺物は少量の土器片が出土した。1060は口縁部に逆L字形に突帯を貼り付けている。時期は百・前・Ⅲから百・中・Ⅰである。(平井)

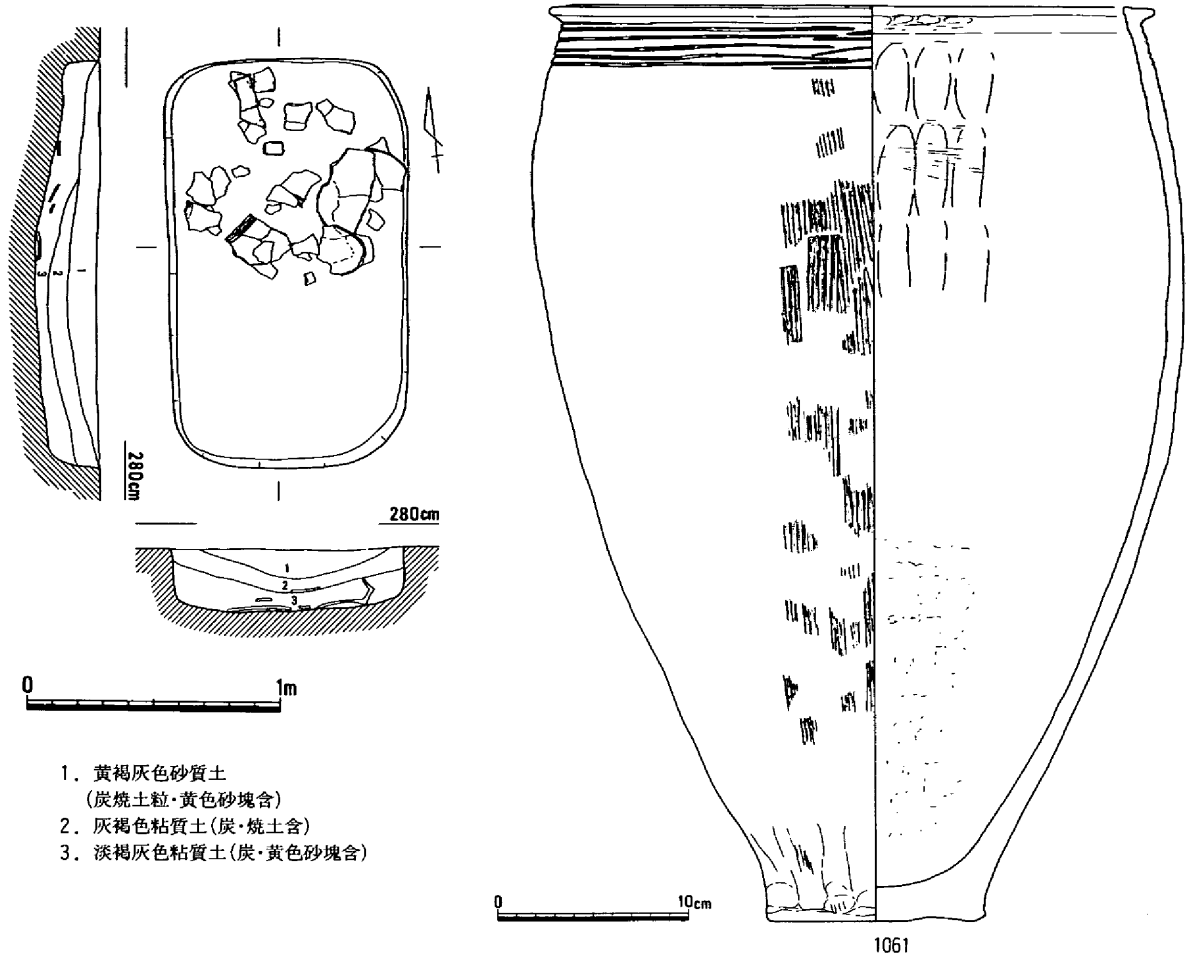
第263図 土壌66、同出土遺物



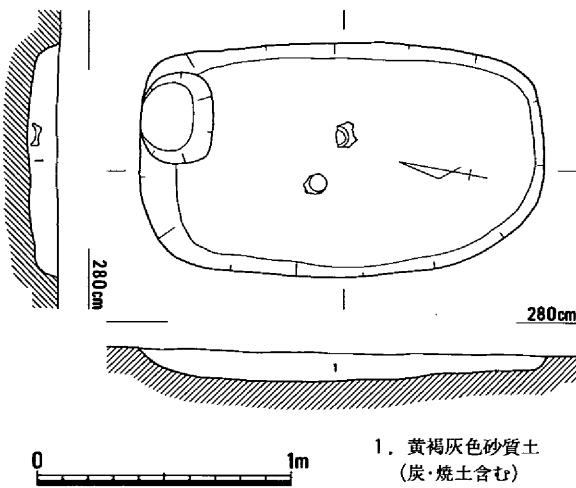
第264図 土壙67、同出土遺物



第265図 土壙68、同出土遺物



第266図 土壌69、同出土遺物



第267図 土壌70、同出土遺物

土壌69（第257・266図、図版35・61）

39C区の北部において検出した。平面形は長さ164cm、幅94cmの長方形を呈し、深さは検出面から25cm残存していた。埋土は3層に分離でき、炭や焼土を含んでいた。底面は北半部が僅かに高くなっていた。

遺物はおもに底面に接するようにして意識的に碎かれた土器片が出土した。これらの土器片は完形に復元することができ、1061として図示している。

時期は百・前・Ⅲである。（平井）

土壌70（第257・267図）

39C区の北部、土壌69の南西部において検出した。平面形は北東端部を後世の柱穴によって切られてはいるが、長さ160cm、幅95cmの隅丸長形状を呈し、深さは検出面から

10cm残存していた。底面はほぼ平らで、埋土中には炭・焼土を含んでいた。

遺物は底面近くから甕の底部片が2点出土したのみである。時期は明確ではないが、百・前・Ⅲと考えている。(平井)

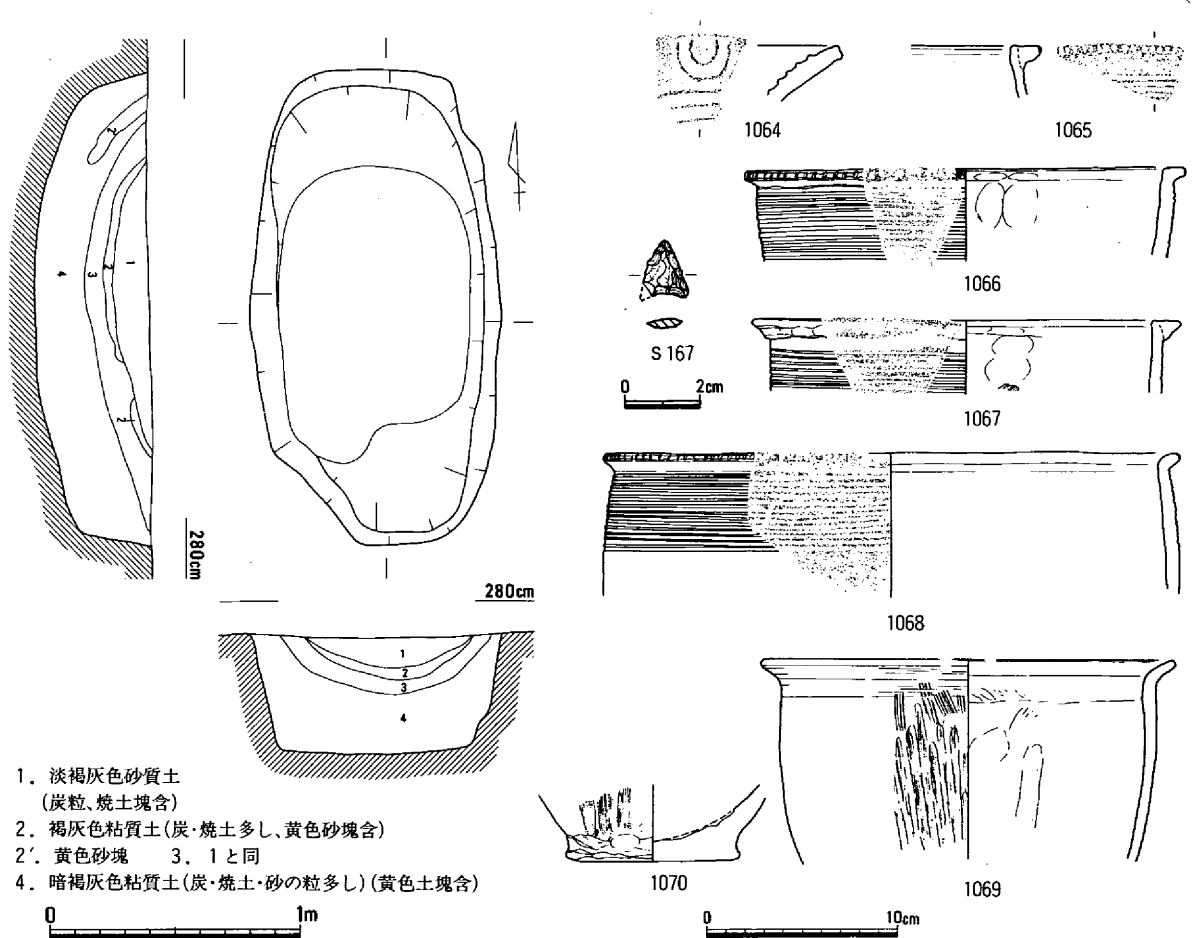
土壌71 (第257・268図)

39C区の北部、土壌69の南東部において検出した。平面形は長さ190cm、幅100cmの長方形状を呈し、深さは検出面から46cm残存していた。底面は中央に向かって深くなっていた。埋土は大きくは上層(1~3層)と下層(4層)とに区分することができる。

遺物は土器と石器が出土した。1064は壺で口縁部の内面に突帯が貼り付けられている。1065~1070は甕である。1066~1068の胴部上半にはいずれもヘラガキ平行沈線が施されているが、口縁部は逆L字形と「く」の字形のものがある。S167はサヌカイト製の石鏃である。

時期は百・前・Ⅲであると考えられる。

(平井)

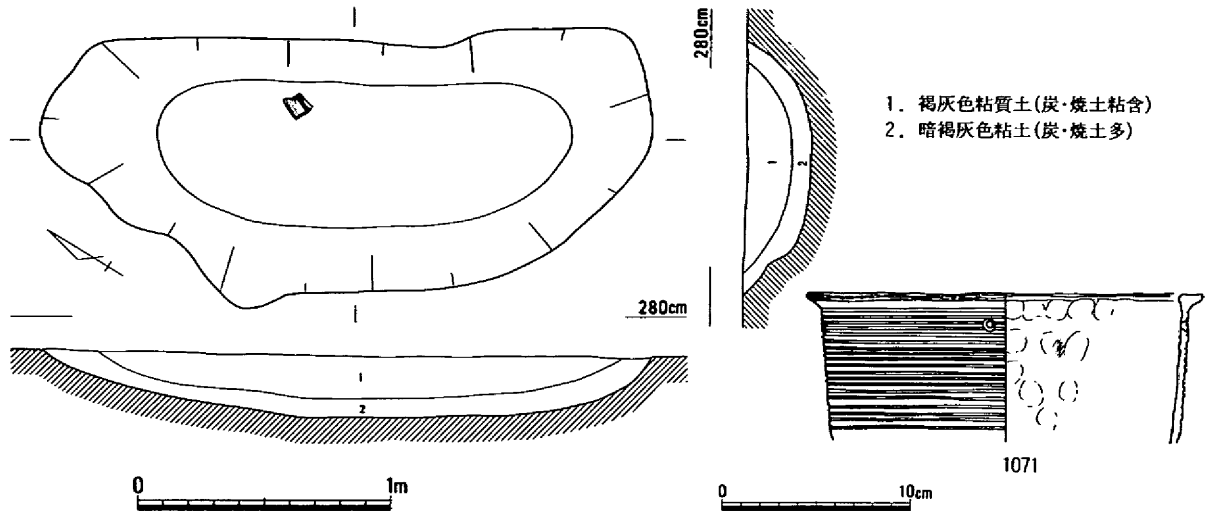


第268図 土壌71、同出土遺物

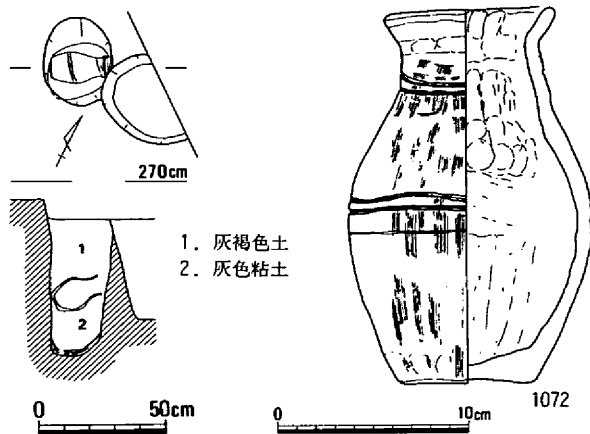
土壌72 (第257・269図)

39C区の東部、土壌71の南において検出した。平面形は長さ240cm、幅約100cmの不整長楕円形状を呈し、深さは検出面から25cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は2層に分離でき、いずれも炭・焼土を含んでいた。

遺物は少量の壺や甕の破片が出土した。1071は甕で、口縁部には逆L字形に突帯が貼り付けられて



第269図 土坑72、同出土遺物



第270図 土坑73、同出土遺物

おり、口唇部にはキザミメがある。また胴部上半には半截竹管状の工具による沈線が施されており、円形の穿孔が確認できる。

時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井)  
土坑73(第270図、図版36・61)

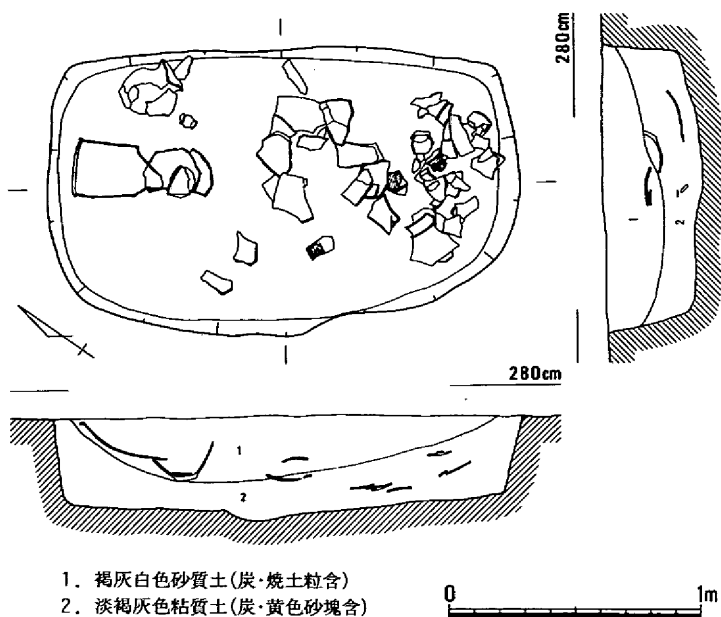
39C区の東端部において検出した。図示したように平面形は36×27cmの楕円形で、深さ62cmを測る柱穴状の遺構である。内部からは1072の壺が出土しており、その状況から意識的に埋められたものと考えられる。

時期は百・前・Ⅲではなかろうか。(平井)

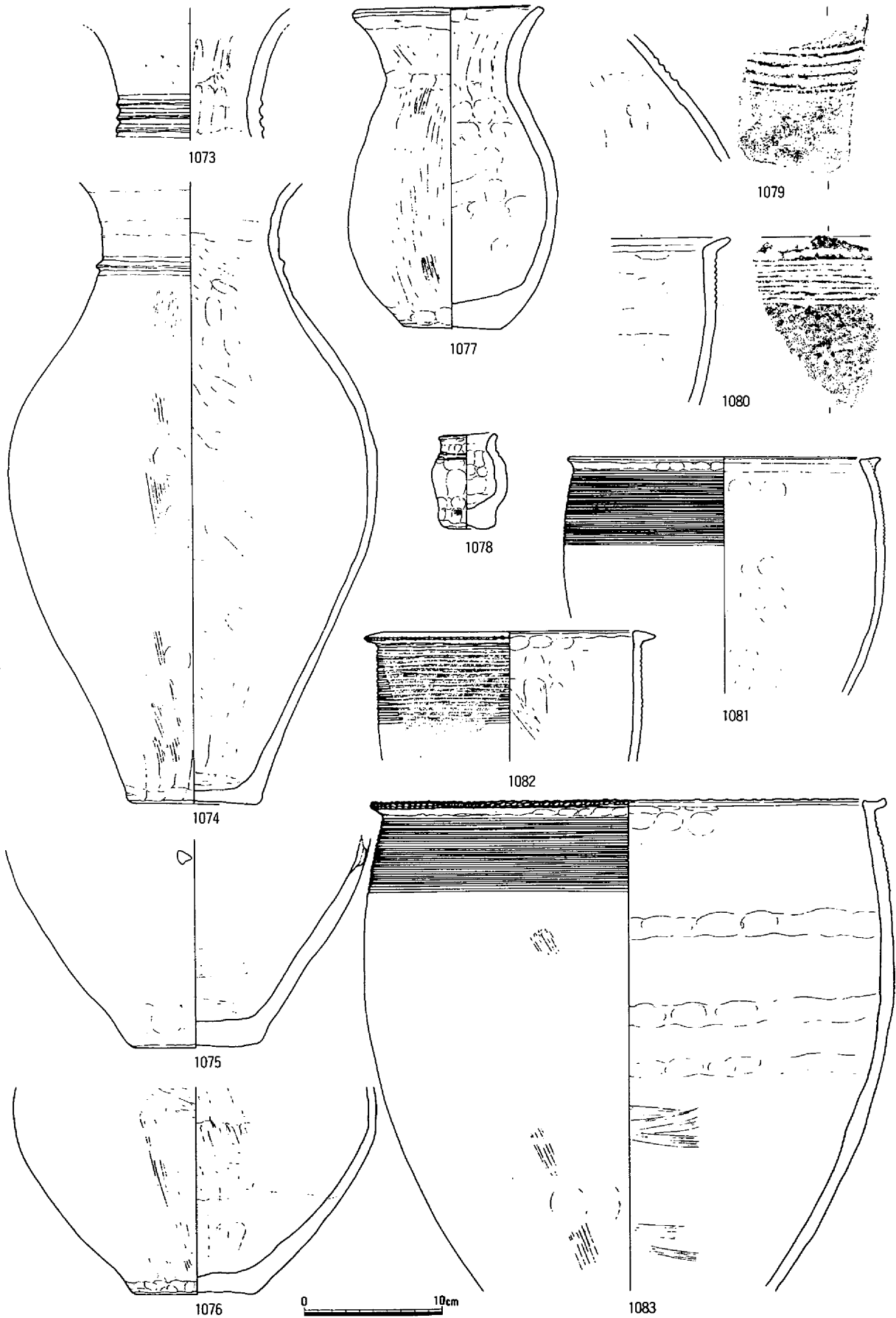
土坑74(第271・272図、図版36・61)

39C区の西端部、竪穴住居21の北西において検出した。平面形は長さ187cm、幅114cmの長方形を呈し、深さは検出面から約40cm残存していた。壁面は垂直にちかく立ち上がっており、底面はほぼ平らであった。埋土は2層に分離してはいるが微妙な違いであった。

遺物は多くの土器が出土している。図示した土器のうち1073～1079は壺である。1073・1074の頸



第271図 土坑74



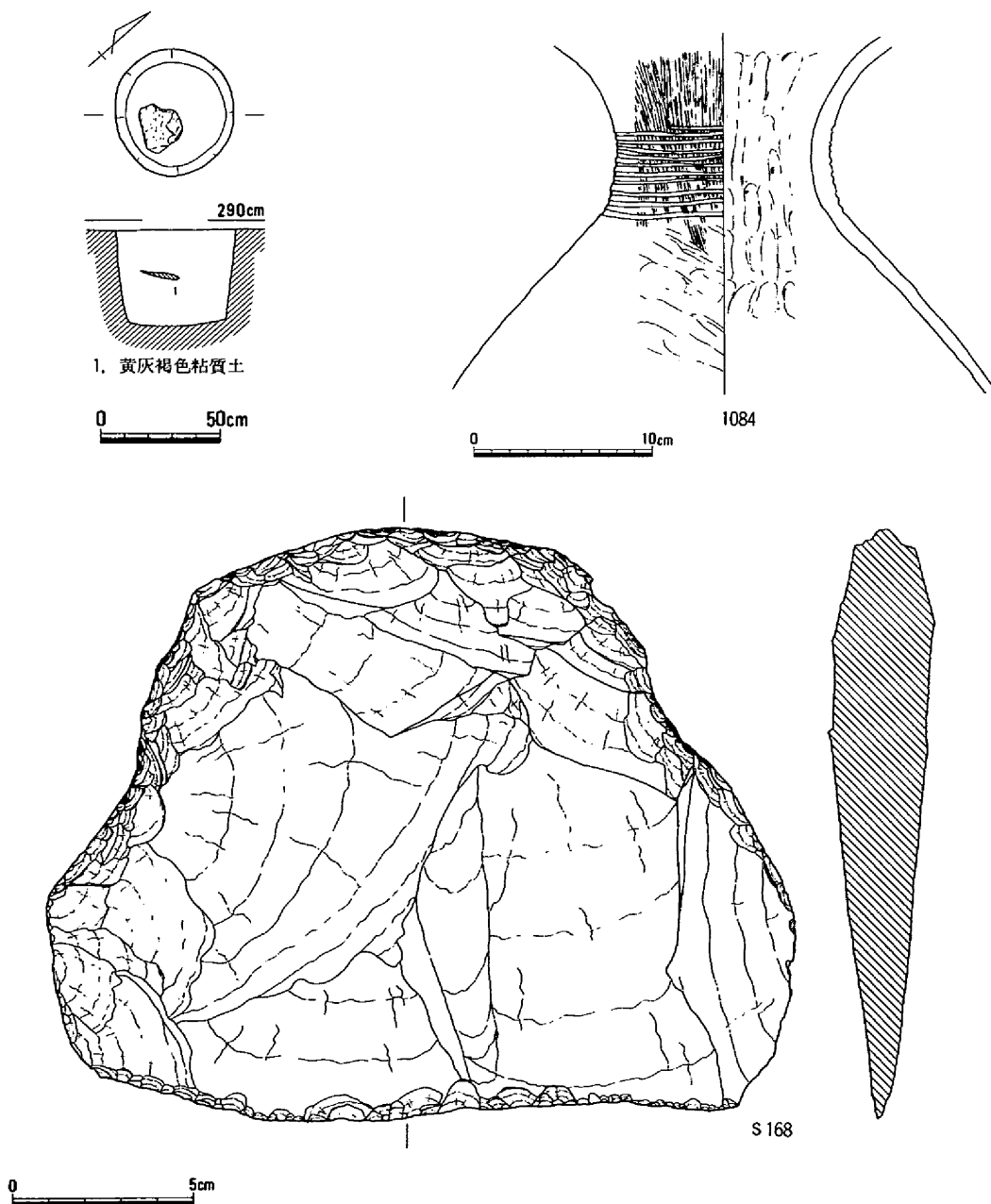
第272図 土壙74 出土遺物

部には貼り付け突帯がめぐらされている。1078はいわゆる手捏ねの土器である。1081～1083は甕である。いずれも口縁部には逆L字状の突帯が貼り付けられており、胴部上半にはヘラガキ平行沈線が施されている。また1082・1083の口唇部にはキザミメがある。時期は百・前・Ⅲであろう。（平井）

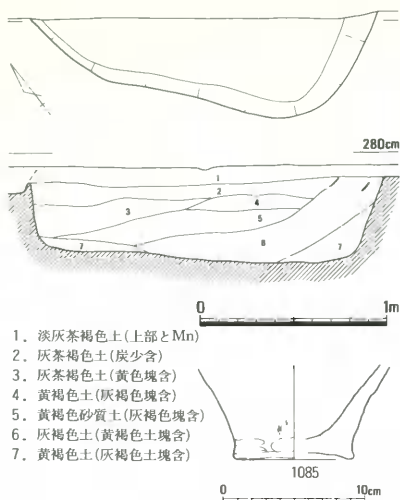
土壌75（第257・273図、図版36・68）

39C区の北部、土壌67・68の西において検出した。平面形は直径50cm前後の円形で、深さは検出面から40cmを測る柱穴状の遺構である。埋土は黄灰褐色粘質土が一層のみであった。

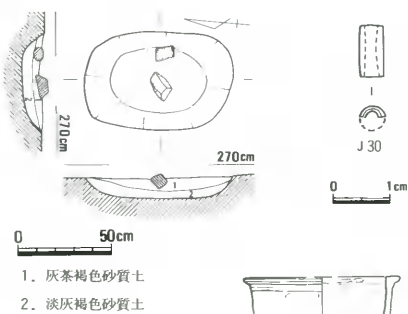
遺物は図示したような土器・石器が出土している。1084は壺で、頸部にはヘラガキ沈線が施されている。S168は大形の石包丁としているが、通常石包丁とは異なり、根刈りあるいは土の耕起などに使用されたのかも知れない。時期は百・前・Ⅲであろう。（平井）



第273図 土壌75、同出土遺物



第274図 土壌76、同出土遺物



第275図 土壌77、同出土遺物

**土壌76** (第257・274図、図版36)

39C区の東端部において検出した。平面形は北側が調査区外にのびるため明らかではないが、周辺に存在する土壌の形状から長方形になるのかも知れない。深さは検出面から45cm残存していた。断面形は逆台形で、底面はほぼ平らであるが、南東側に徐々に深くなっていた。

遺物は少量の土器片と獣らしき骨片が出土したのみである。1085は甕の底部であろうか。

時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)

**土壌77** (第257・275図、図版68)

40B区の西端部、土壌79の東において検出した。平面形は長さ78cm、幅52cmの楕円形状を呈し、深さは検出面から10cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離しているが相違は明瞭ではなかった。

遺物は少量の土器片と石器および管玉が出土している。1086は小形の甕であろう。S169は太形蛤刃石斧と考えられる。J31は片面が欠損しているが、緑色凝灰岩製の管玉である。

時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)

**土壌78** (第257・276図、図版36)

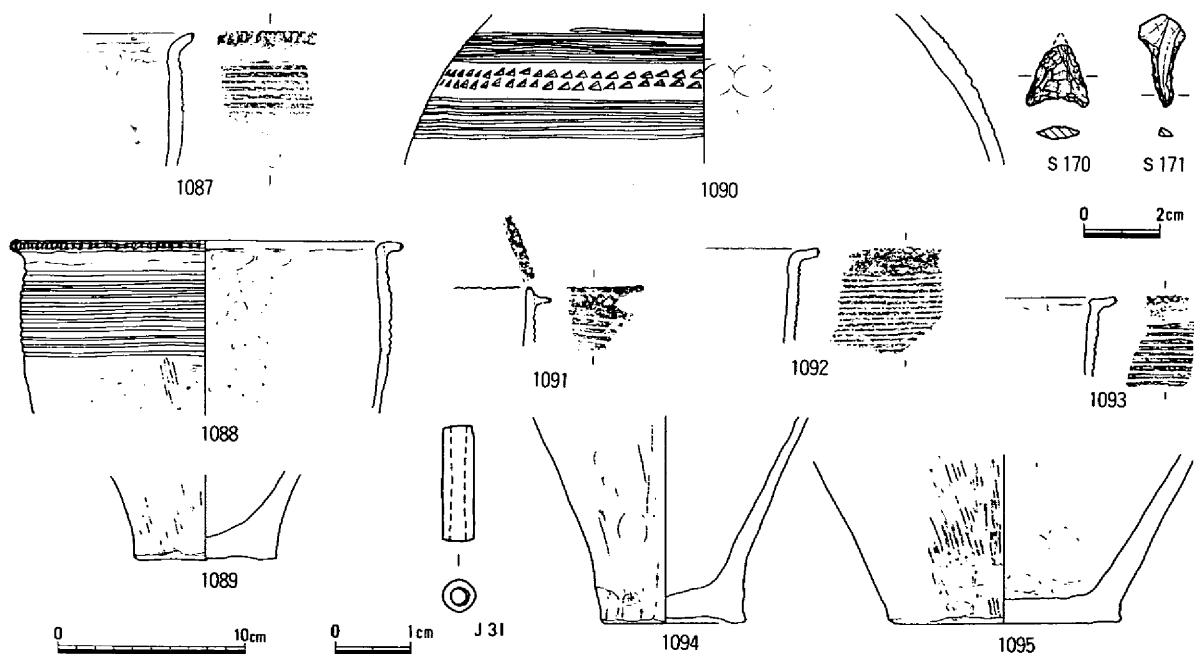
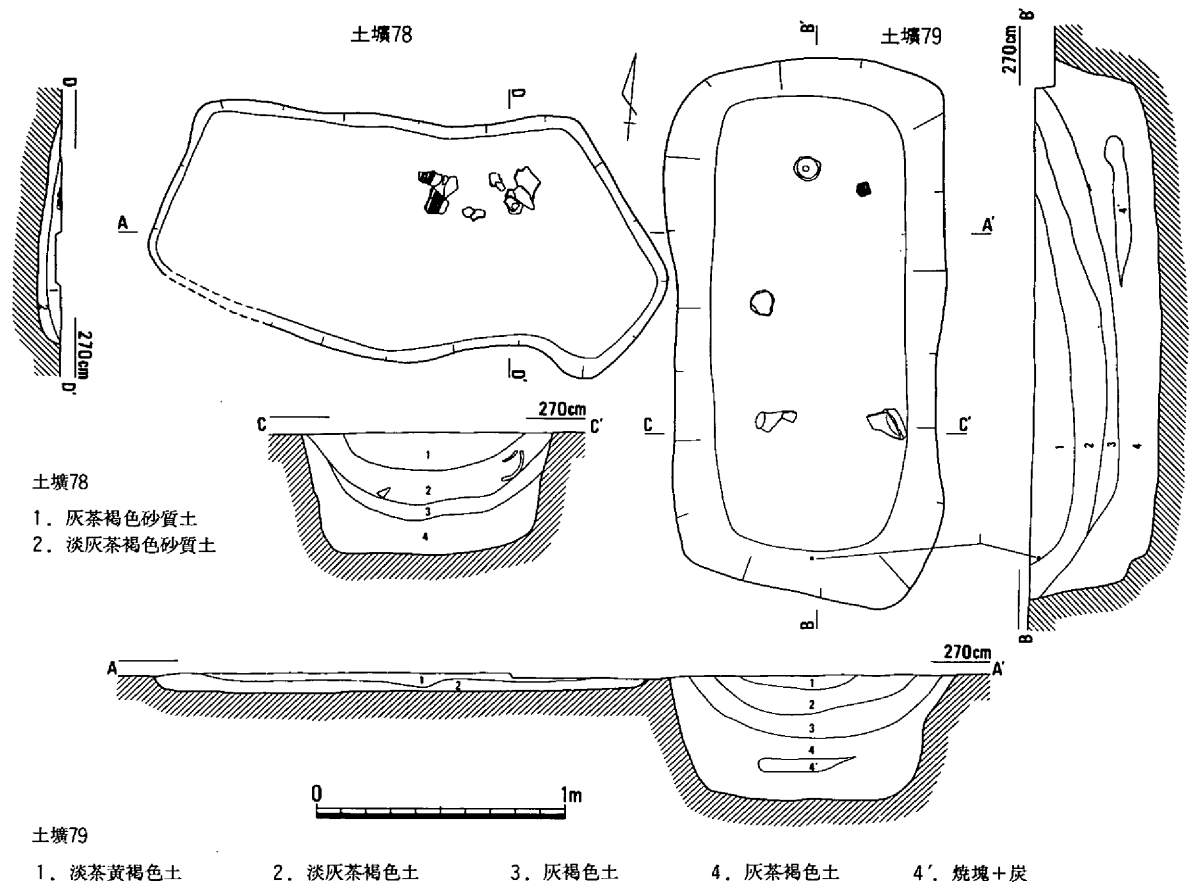
39C区の北東部と40C区の北西部にかけて検出した。検出できた平面形は図示したような不整形で、深さは8cm残存していたにすぎない。断面形は皿形で、埋土は二層に分離したが相違は明瞭ではなかった。

遺物は少量の土器片がおもに上層から出土した。図示できたのは第276図の1087～1089で甕と考えられる。1088と1089は2～3mm程度の暗灰色の円礫を含んでおり同一個体である可能性が高い。時期は百・前・Ⅲである。(平井)

**土壌79** (第257・276図、図版36)

40C区の北端部、土壌78の東において検出した。平面形は長さ約220cm、幅108cmの長方形形状を呈し、深さは検出面から50cm残存していた。断面形は逆台形で、底面はほぼ平らであった。埋土は大きくは図の1～3層と4層とに区分でき、4層



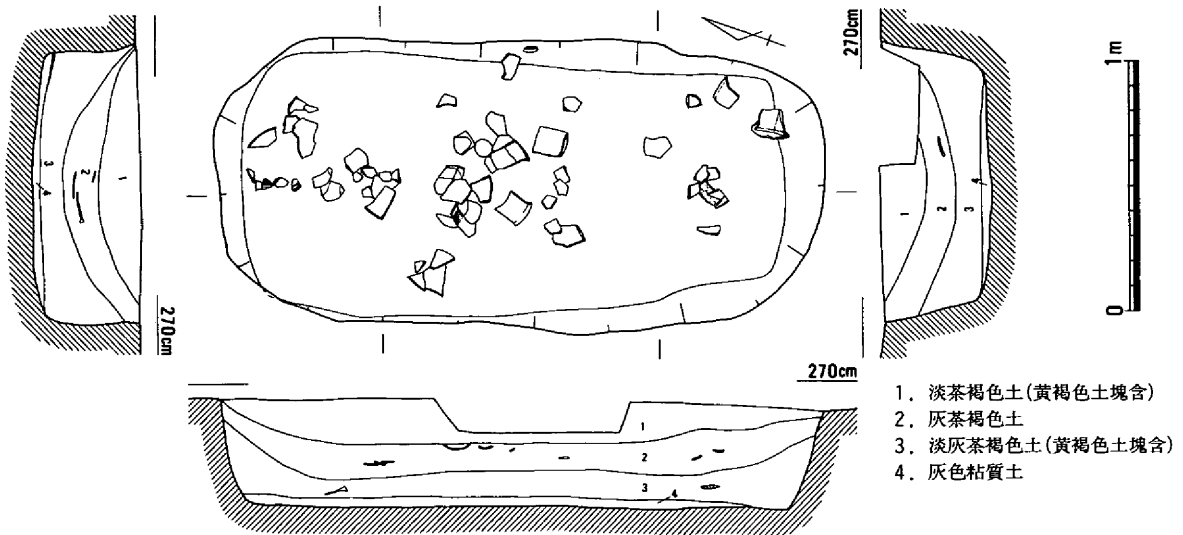


第276図 土壙78・79、同出土遺物

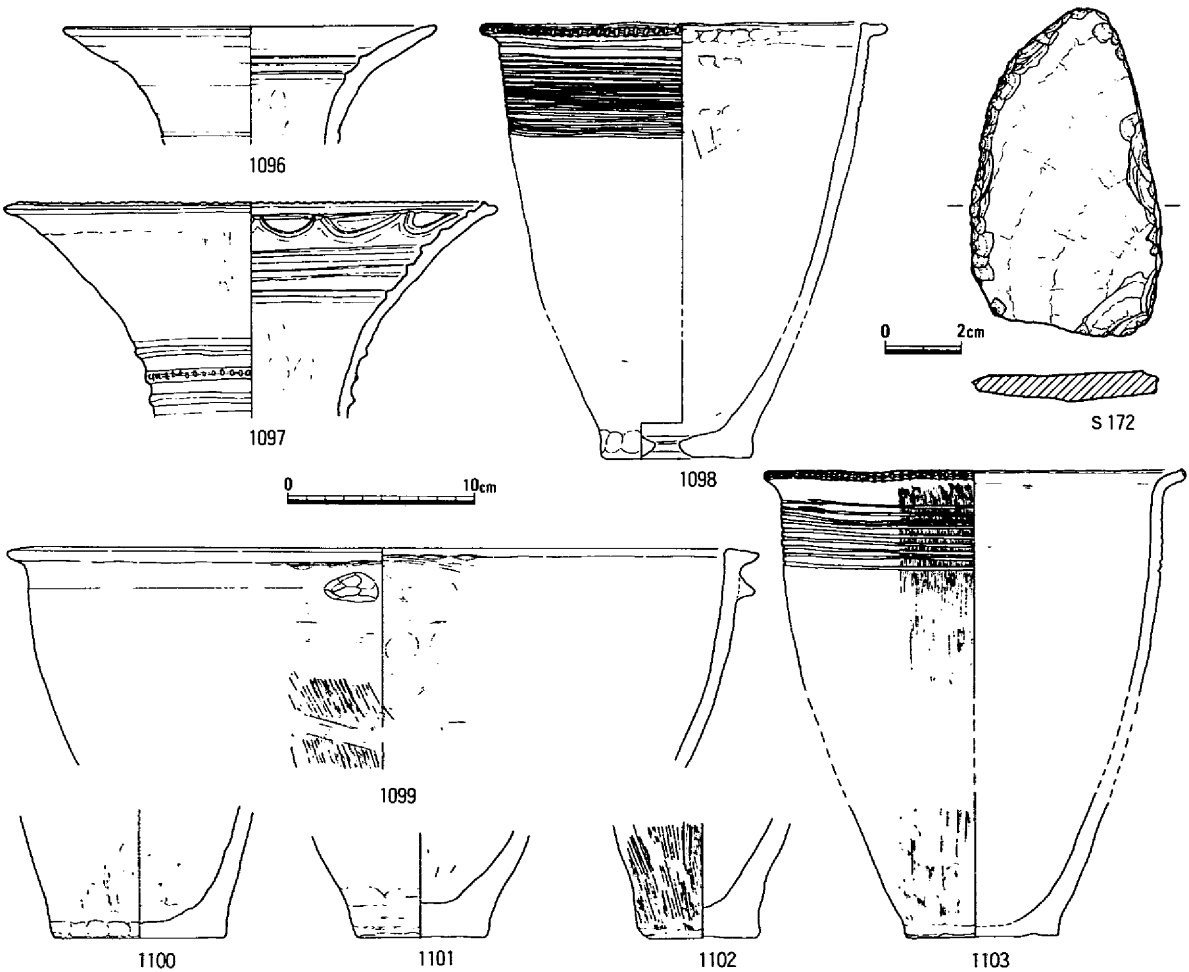
には焼土塊や炭が含まれていた。遺物はおもに1～3層から土器、石器および管玉が出土している(第276図)。図示した土器は1090が壺、1091～1095が甕である。石器はS170が石鏃、S171が石錐である。管玉(J32)は完形品で、緑色燧灰岩製である。時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)

土壙80 (第257・277図、図版37)

40B区と40C区との境において検出した。平面形は長さ約240cm、幅約120cmの長形状を呈し、深さは検出面から44cm残存していた。断面形は逆台形で、部分的には壁面が垂直にちかく立ち上がっていた。また底面はほぼ平らであった。埋土は四層に分離できたが、大きくは図の1～3層と4層とに



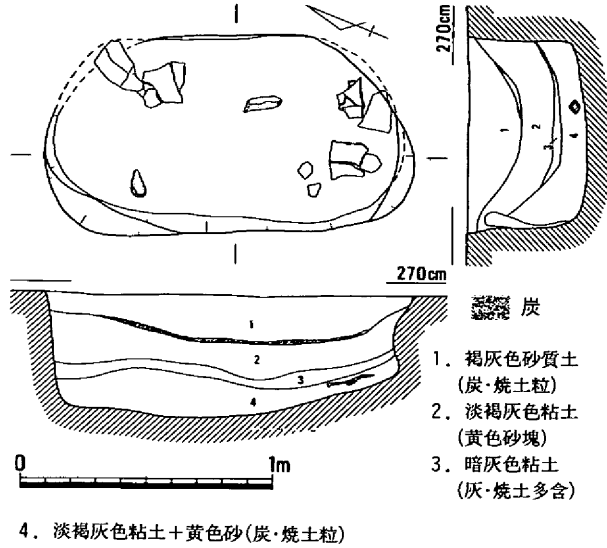
1. 淡茶褐色土 (黄褐色土塊含)
2. 灰茶褐色土
3. 淡灰茶褐色土 (黄褐色土塊含)
4. 灰色粘質土



第277図 土壙80、同出土遺物

区分することができる。

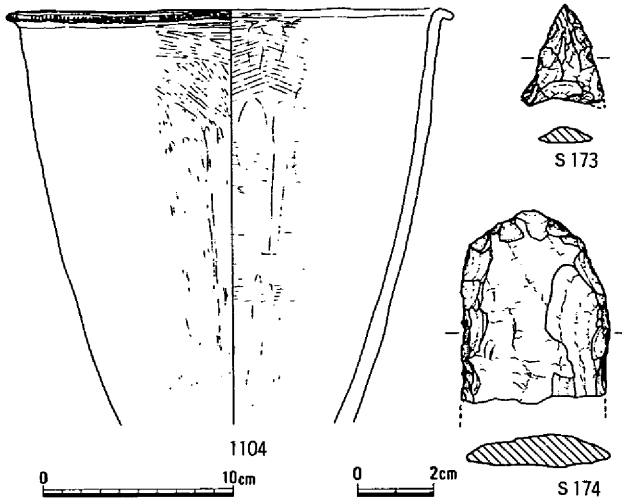
遺物はおもに1～3層から土器・石器が出土した。1096・1097は壺で、口縁部内面にはいずれも突帯が貼り付けられている。1098・1100～1103は甕で、1098・1103の胴部上半にはヘラガキ平行沈線が施されている。また1098の底部には焼成後に穴が穿たれている。1099は鉢ではなかろうか。S172はスクレイパーと考えている。



時期は百・前・Ⅲであろう。（平井）  
土壌81（第257・278図、図版62）

39C区の南西端部、土壌83の北において検出した。平面形は長さ146cm、幅78cmの長楕円形状を呈し、深さは検出面から46cm残存していた。底面は平らにちかく、壁面はほぼ垂直に立ち上がっていた。埋土中には全体的に炭・焼土を含んではいたが、特に炭や灰が多い層が二層確認でき、数次にわたって埋められたものと考えられる。

遺物は土器・石器が出土した。1104・1105は甕である。1104は全体の約4/5が残存している。口唇部にはキザミメが施されているが、全周はしていない。1105の胴部上半にはヘラガキ平行沈線がめぐっている。S173は石鏃、S174は欠損してはいるが石槍ではなかろうか。

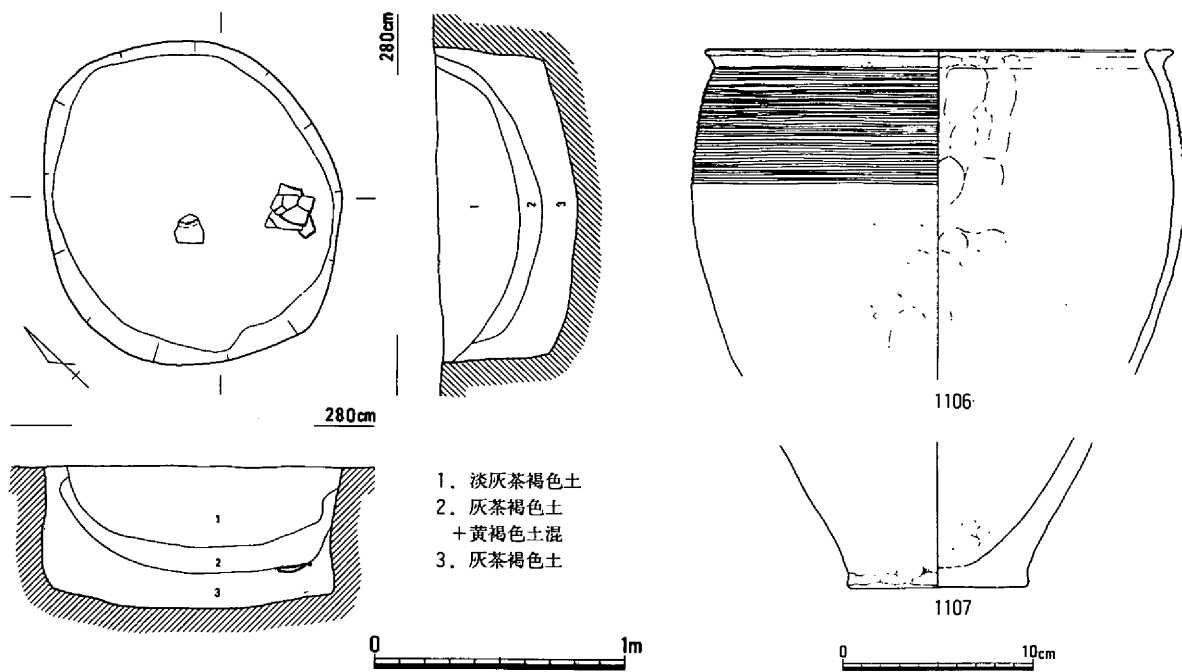


時期は百・前・Ⅲであろう。（平井）  
土壌82（第279図）

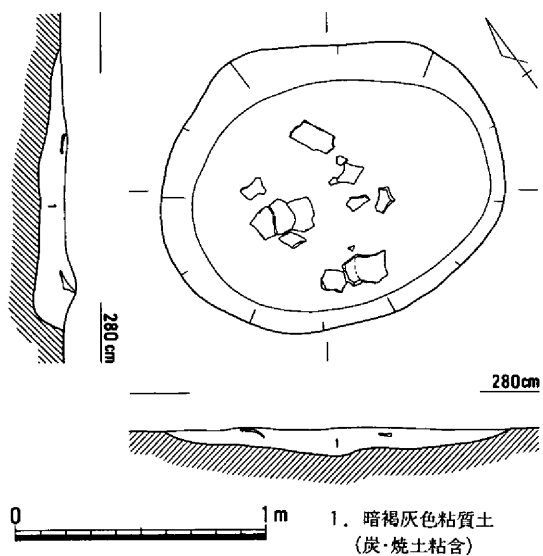
39C区の南西部、土壌81の東において検出した。平面形は約120×130cmの円形状を呈し、深さは検出面から56cm残存していた。底面は中央部がややくぼんでおり、壁面は垂直にちかく立ち上がっている。埋土は三層に分離したが、大きくは上層（1層）と下層（2・3層）とに区分できる。

遺物は少量の土器片が下層から出土したのみである。1106・1107は甕で、同一個体である可能性が高い。口縁部には逆L字状に突帯が貼り付けられており、口唇部にはキザミメは施されていない。胴部上半には多条のヘラガキ平行沈線がめぐらされている。時期は百・前・Ⅲである。（平井）

第278図 土壌81、同出土遺物



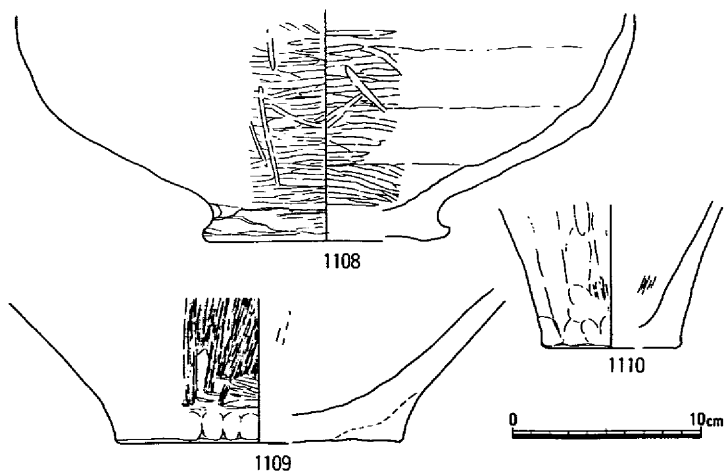
第279図 土壌82、同出土遺物



土壌83 (第257・280図)

39D区の北端部、土壌81の南において検出した。平面形は長軸140cm、短軸120cmの楕円形を呈し、深さは検出面から約20cm残存していた。断面形は皿形で、埋土中には炭や焼土粒を含んでいた。

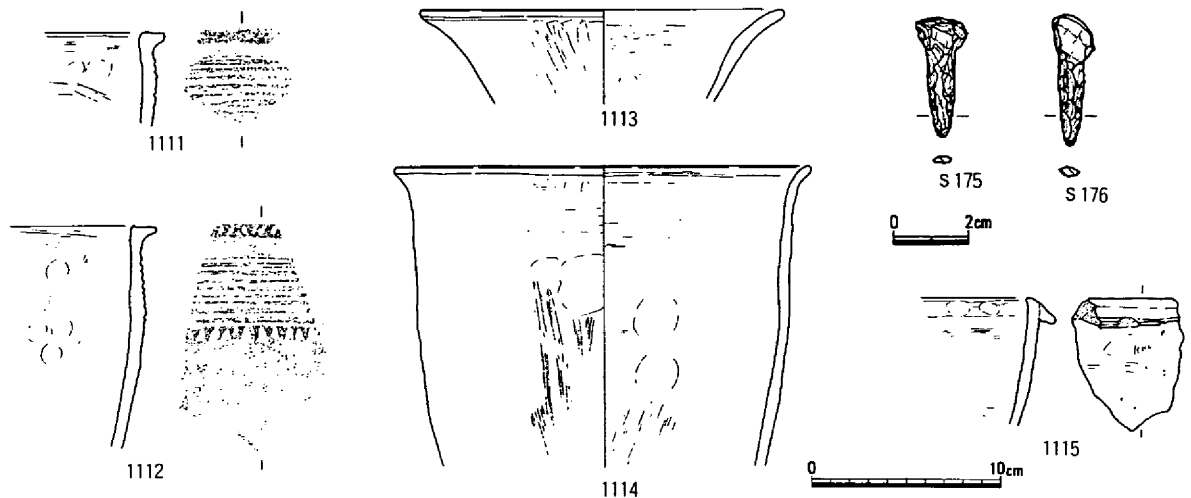
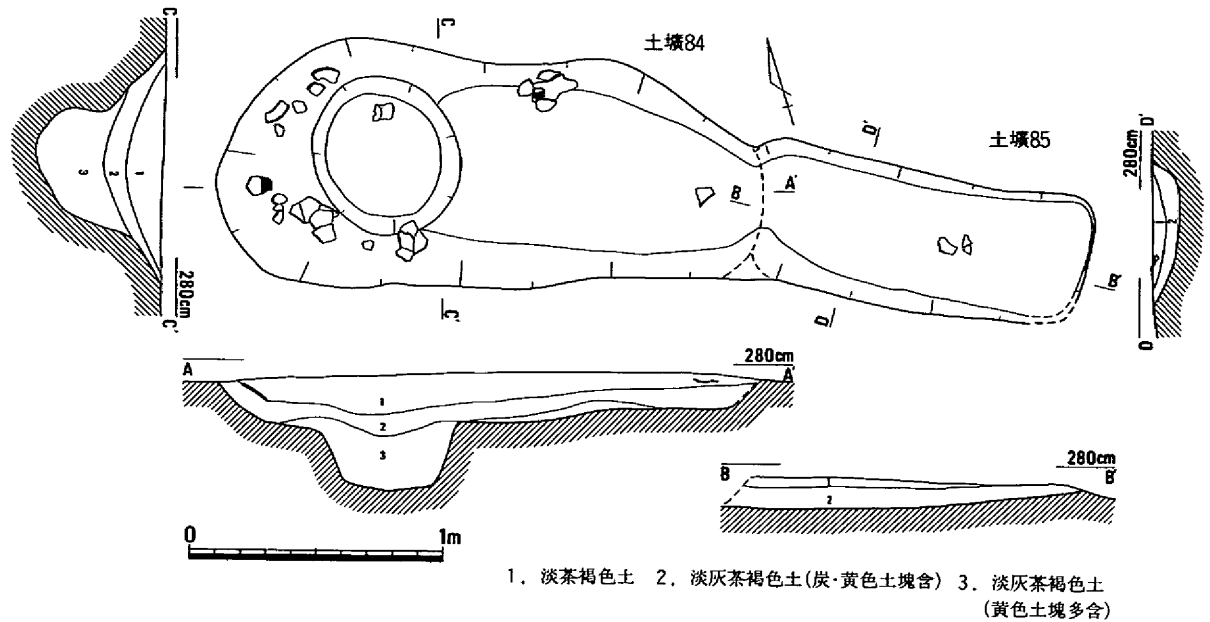
遺物は少量の土器片が出土したのみである。1108・1109は壺の、1110は甕の底部であろう。図示した土器以外にも甕の口縁部が出土しており、時期はほぼ百・前・Ⅲであると考えられる。(平井)



土壌84 (第281図、図版37)

39C区の南半部において土壌85を切るかたちで検出したが切り合い関係は明瞭ではなかった。平面形は長さ217cm、幅約100cmの長楕円形状を呈している。西半部には64×56cmを測る楕円形の穴が存在しているが、断面の状況などからこの土壌とは別の遺構と考えた方がよいと思われる。そうだとすれば、深さは検出面から約24cm残存していることにな

第280図 土壌83、同出土遺物



第281図 土壙84・85、同出土遺物

る。埋土は二層に分離でき、下層には炭が含まれていた。

遺物はおもに上層から土器や石器が出土した。1111・1112・1114は甕である。1111と1112の胴部上半にはヘラガキ平行沈線が施されており、1112にはその下に三角形の刺突文がめぐっている。S175・176はサヌカイト製の石錐である。

時期は百・前・Ⅲではなかろうか。

(平井)

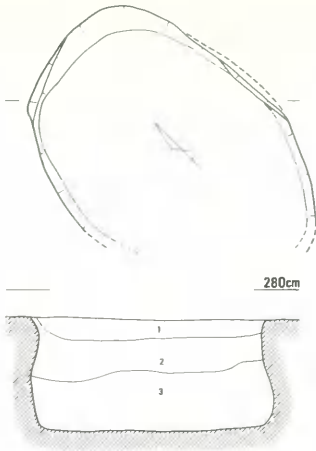
土壙85 (第281図、図版37)

39C区の南半部において土壙84に切られるかたちで検出したが、切り合い関係は明瞭ではなかった。平面形は長さ約132cm、幅約56cmの長形状を呈し、深さは検出面から12cm残存していたにすぎない。遺物は少量の土器片が出土したのみである。図示した土器(1115)は甕?で、口縁部には突帯が貼り付けられている。時期は百・前・Ⅲではなかろうか。

(平井)

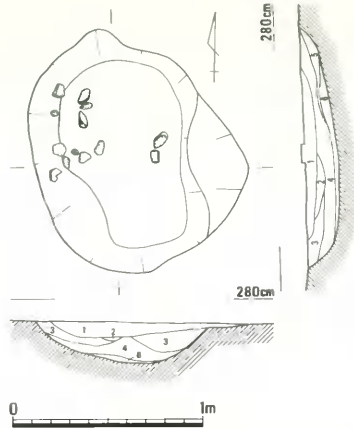
土壙86 (第282図)

39D区の北東端部において検出した。平面形は南西部が調査区外にのびているため明確ではない



1. 褐灰白色砂質土(炭・焼土粒含)
2. 淡褐灰色砂質土(炭・黄色砂塊含)
3. 黄色砂+淡灰色土混(炭・焼土少含)

第282図 土壇86



1. 淡灰褐色土(炭少含)
2. 灰茶褐色土(炭少含)
3. 灰茶褐色土
4. 灰茶褐色(白色砂含)
5. 灰茶褐色(黄色土塊含)
6. 白色砂

第283図 土壇87

が、長さ約170cm、幅約120cmの長楕円形状を呈していたのではなかろうか。深さは60cm残存していた。断面形は部分的に袋状になっており、底部はほぼ平らであった。また埋土中には炭・焼土を含んでいた。遺物は少量の土器片が出土したのみであるが、時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井)

土壇87 (第283図)

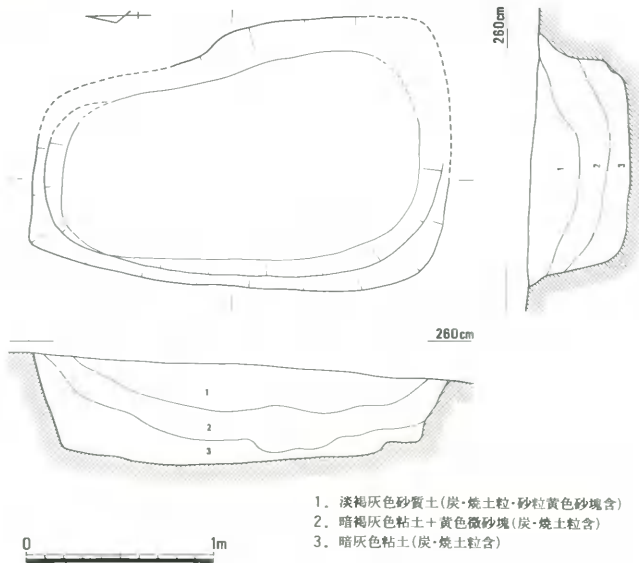
39C区の南東端部、堅穴住居23の南において検出した。平面形は長軸約130cm、短軸約100cmの楕円形状を呈する。断面形は皿形で、深さは検出面から22cm残存していた。遺物は壺の破片が1点出土したのみである。

時期は明確ではないが、百・前・Ⅲと考えている。(平井)

土壇88

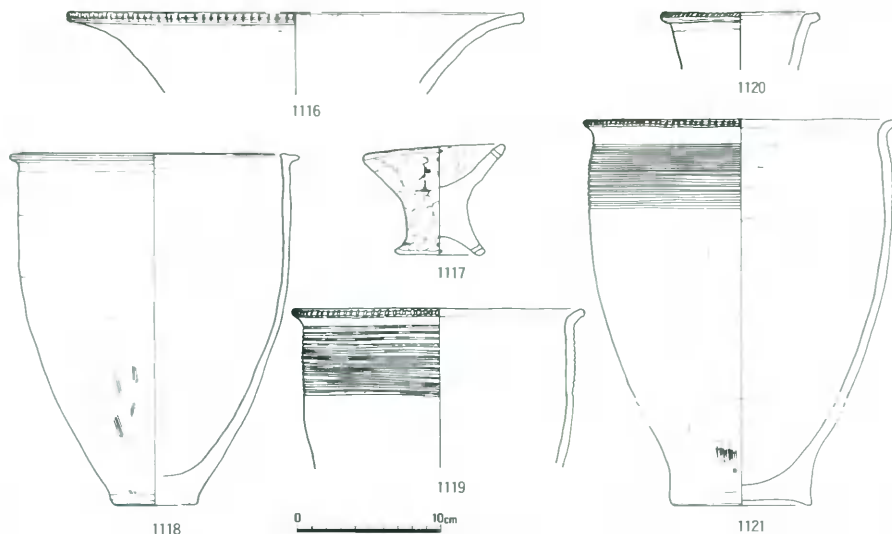
(第284・285図)

40C区の北東端部において検出した。平面形は北東部が井戸12に



1. 淡褐灰色砂質土(炭・焼土粒・砂粒黄色砂塊含)
2. 暗褐灰色粘土+黄色微砂塊(炭・焼土粒含)
3. 暗灰色粘土(炭・焼土粒含)

第284図 土壇88



第285図 土壇88 出土遺物

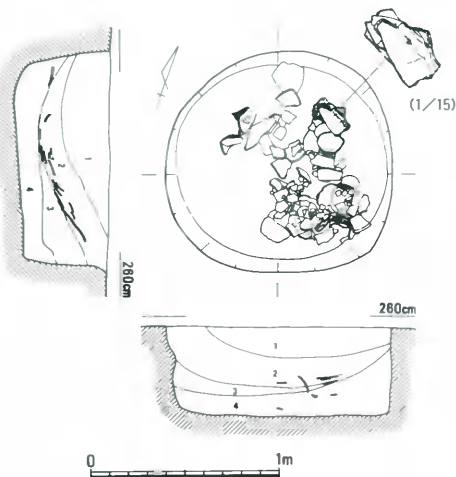
よって、また南東部は溝52によって切られてはいるが、本来は土壇79や土壇80のような長方形状を呈していたものと考えられる。検出できた長さは約220cm、幅は約140cmで、深さは52cmを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平らであった。遺物は土器および獣骨が出土している。1117は図の3層から

出土しており、ほぼ完品である。1121の底部は図上復元であり明確ではない。獣骨はいずれも小片であり種類は明らかでない。時期は百・前・Ⅲである。 (平井)

土壇89 (第286～289図、図版37・62・68)

40C区の北半部、土壇88の南西において検出した。平面形は直径約120cmの円形状を呈し、深さは検出面から約50cm残存していた。底面はほぼ平らで、壁面は垂直にちかく立ち上がっていた。埋土は四層に分離できたが、大きくは図の1・2層と3・4層とに区分できそうである。こうした形状に類似した土壇としては土壇65・82が検出できており、特別な用途が考えられるかもしれない。

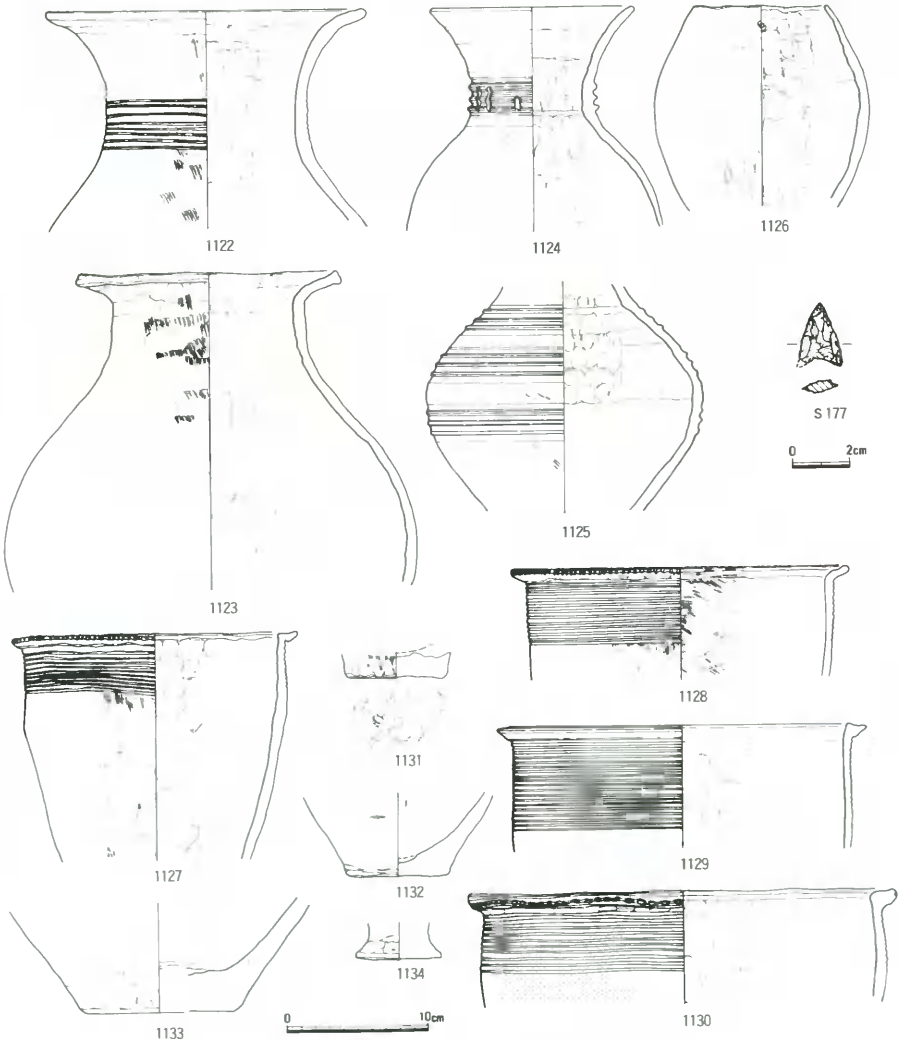
遺物はおもに図の2層の下位部分から図示したような状況で土器・石器が出土した。図示した土器のうち1122～1126・1132・1133は壺である。1127・1128～1130は甕で胴部上半



1. 淡褐色砂質土(炭・焼土粒・黄色砂塊含)
2. 暗褐色砂質土(炭・焼土多含)
3. 暗褐色粘質土
4. 暗灰色粘土(炭・焼土粒・黄色砂塊含)

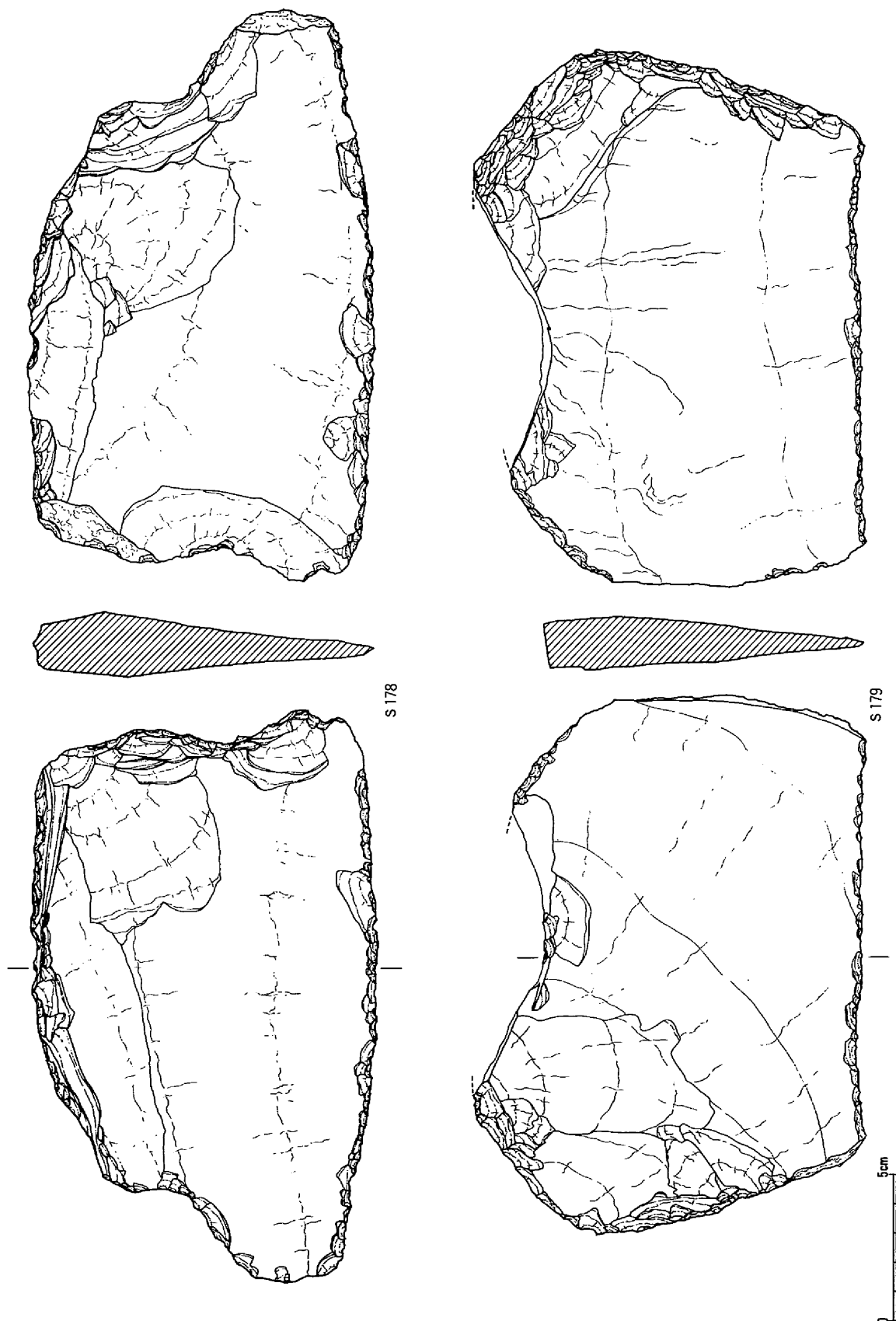
第286図 土壇89

にはヘラガキ平行沈線が施されている。石器のうちS177は石鏃である。ところで出土遺物の中で注目されるのはS178～183の石器およびそれらの出土状況である。これらの石器の出土位置は土壌内の北東部で、層位は2層中から重ねた状態で他の土器片と共に出土した。重ねりの状態については第289図に示しているが、意図的に重ねられていることは明らかであろう。しかしながらその意図については、例えば一時的な保管のための埋納で後に取り出すことを意図したと考えるにはそれらのみ単独で埋納されるべきで、破損した土器片と共に大形の土壌内から出土した点に疑問がのこる。また意図的に廃棄したと考えるにはすべての石器が使用可能であることおよびこうした状態で廃棄する理由が考えにくい。このように複数の石器が意図的に重ねられた状態で出土した例としては県内では用木山遺



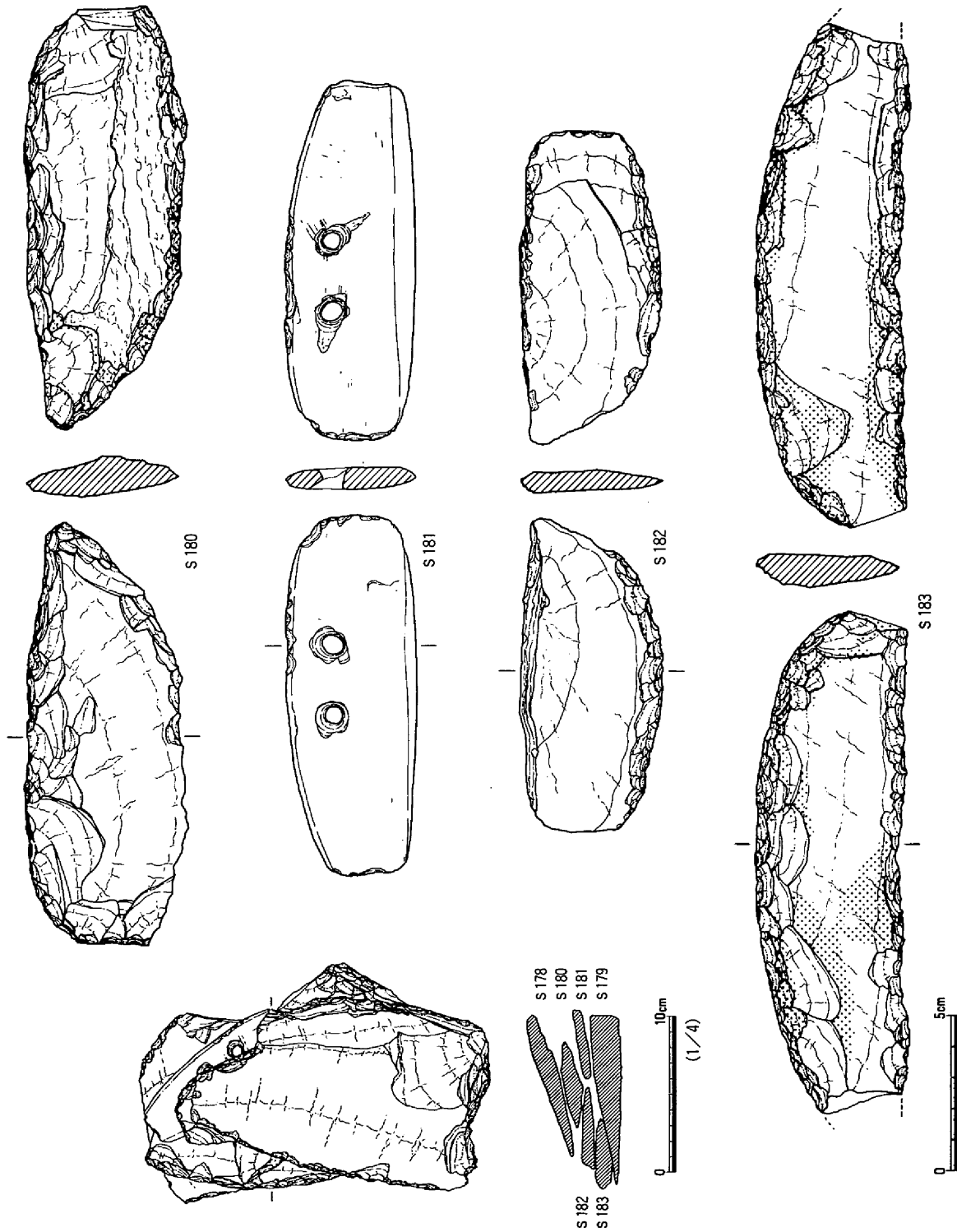
第287図 土壌89 出土遺物(I)





第288図 土塚89 出土遺物(2)

跡や百間川兼基遺跡で報告されている。なおS180・182・183についてはサヌカイト製の打製石包丁、S181は緑色片岩製の磨製石包丁と考えているがS178・179については名称・用途を明確にしがたい。

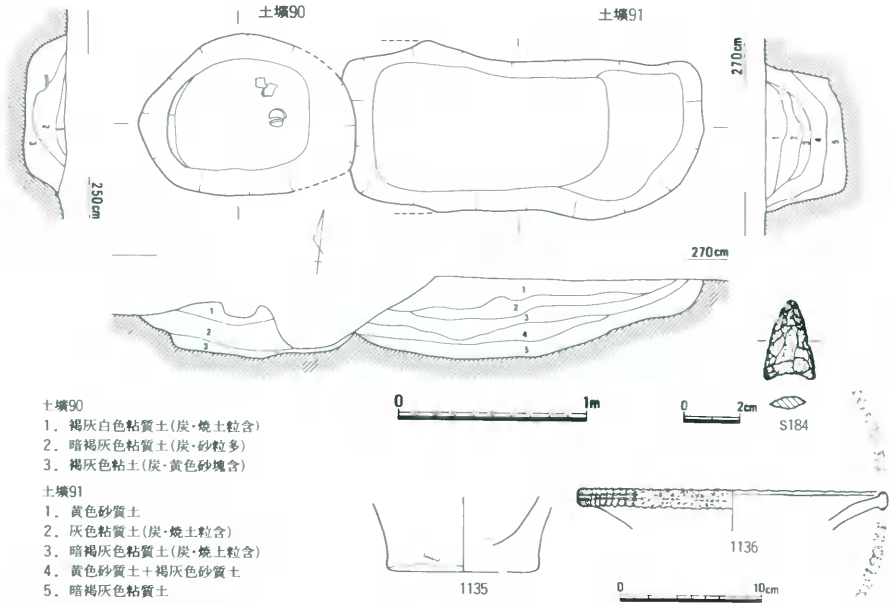


第289図 土城89 出土遺物(3)

S178については大型石包丁と呼べるかも知れないが、類似品は土城75や南溝手遺跡（総社市）の河道3から出土している。いずれも使用痕からは明らかにできなかったが根刈りに使用されたのかもしれない。時期については出土土器から百・前・Ⅲと考えられる。（平井）

土城90・91（第257・290図）

40C区の西部において検出した。土城90は91を切っており、平面形は115×88cmの楕円形で、深さは約30cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土した（1135）。土城91は長さ約190cm、幅約80cmの長



第290図 土壌90・91、同出土遺物

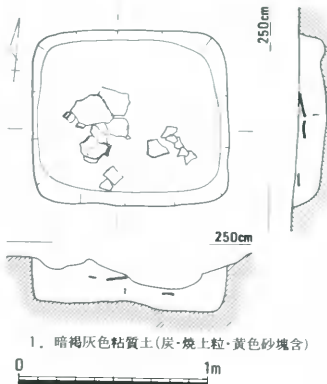
方形を呈し、深さは44cm残存していた。遺物は少量の土器(1136)・石器(S184)が出土している。時期はいずれも百・前・Ⅲと考えられる。(平井)

土壌92(第257・291図)

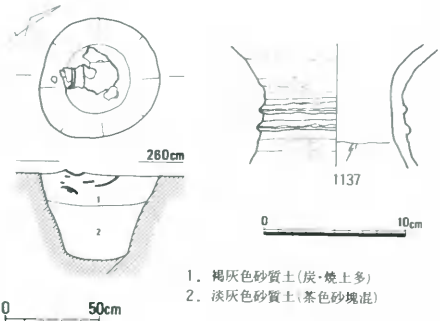
40C区の西半部において検出した。平面形は103×93cmの正方形を呈し、深さは検出面から23cm残存していた。底面には凹凸が認められ、埋土中には炭・焼土粒を含んでいた。遺物は土器片が出土しており、時期は明確ではないが百・前・Ⅲと考えている。(平井)

土壌93(第257・292図)

40C区の中央部、土壌89の南において検出した。平



第291図 土壌92

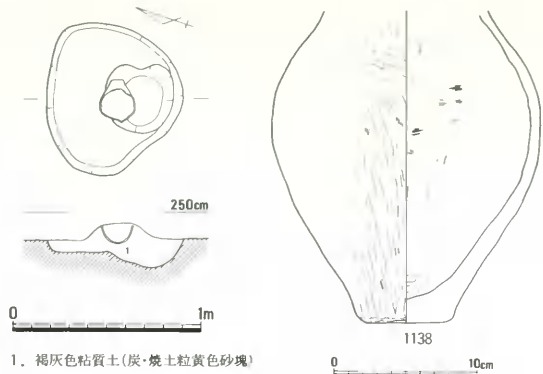


第292図 土壌93、同出土遺物

面形は68×62cmの円形状を呈し、深さは検出面から46cm残存していた。断面形は逆台形であり、柱穴とは考えず土壌として報告する。遺物はおもに上層から土器片が出土している。1137は壺で、頸部には貼り付け突帯がめぐらされている。時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)

土壌94 (第293図、図版62)

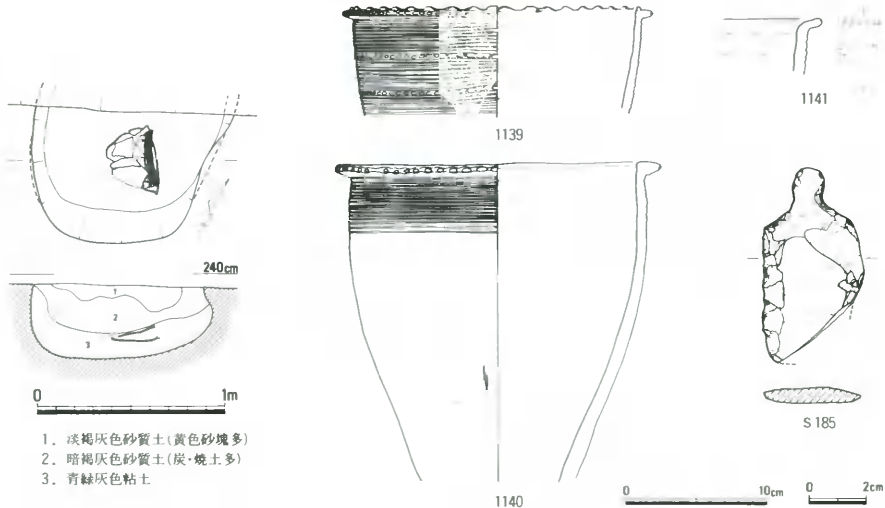
40C区の東半部、土壌93の東において検出した。平面形は約80×75cmの不整楕円形状を呈している。南側の底面には直径約35cmの円形で、深さ約8cmのくぼみが存在していた。底面までの深さは6cm残存しており、埋土中には炭・焼土粒を含んでいた。遺物は壺の口頸部を欠いた破片(1138)が出土したのみである。時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)



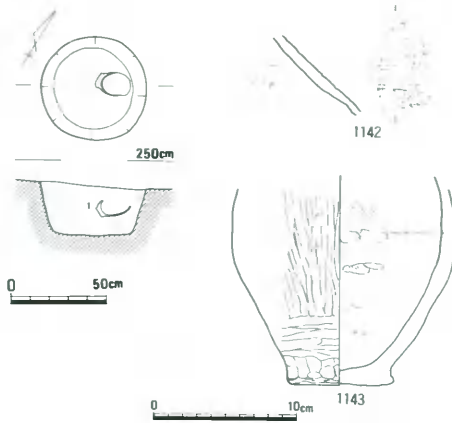
第293図 土壌94、同出土遺物

土壌95 (第257・294図、図版62)

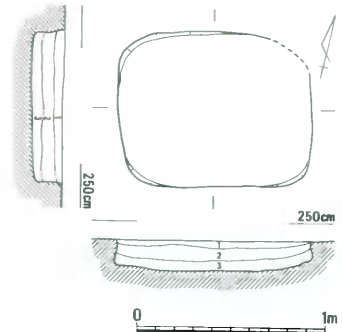
40C区の東半部、土壌94の南西において検出した。平面形は北側が溝52によって切られているため明らかではない。断面形は東西方向では袋状になっている。埋土は三層に分離できたが、大きくは図の1・2層と3層とに区分することができる。遺物はおもに3層から土器・石器が出土した。1139～1141は甕である。いずれも胴部上半にはヘラガキ平行沈線が施されている。S185は石匙と呼べる石器で欠損している。時期は百・前・Ⅲである。(平井)



第294図 土壌95、同出土遺物



第295図 土壇96、同出土遺物



1. 褐灰色砂質土(炭・焼土粒含)
2. 褐灰色粘質土(炭・焼土粒、黄色塊含)
3. 灰褐色粘質土(炭・焼土粒含)

第296図 土壇97

土壇96 (第257・295図)

40C区の東半部、土壇95の西において検出した。平面形は直径約55cmの円形で、深さは検出面から28cm残存していた。断面形は逆台形で、底面はほぼ平らであった。遺物は少量の土器片が出土した。1142・1143は壺であり、時期は百・前・Ⅲであろう。(平井)

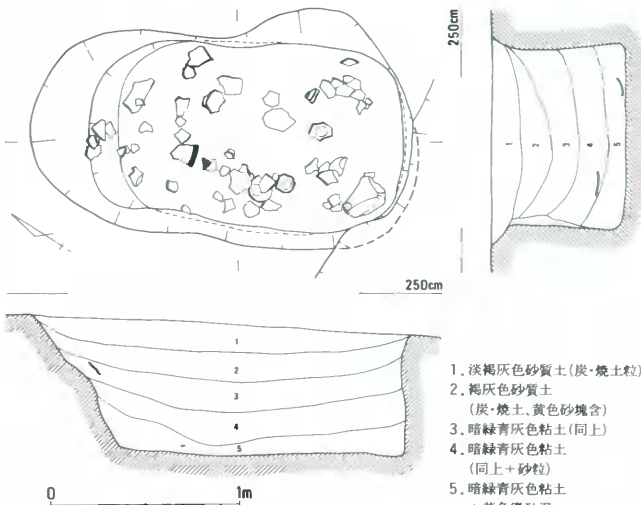
土壇97 (第257・296図)

40C区の東端部、土壇94の東において検出した。平面形は長さ103cm、幅83cmの長方形を呈し、深さは検出面から16cm残存していた。壁面は垂直にちかく立ち上がり、底面はほぼ平らであった。遺物は出土しなかったが、埋土などから時期は百・前・Ⅲと考えられる。(平井)

土壇98 (第297・298

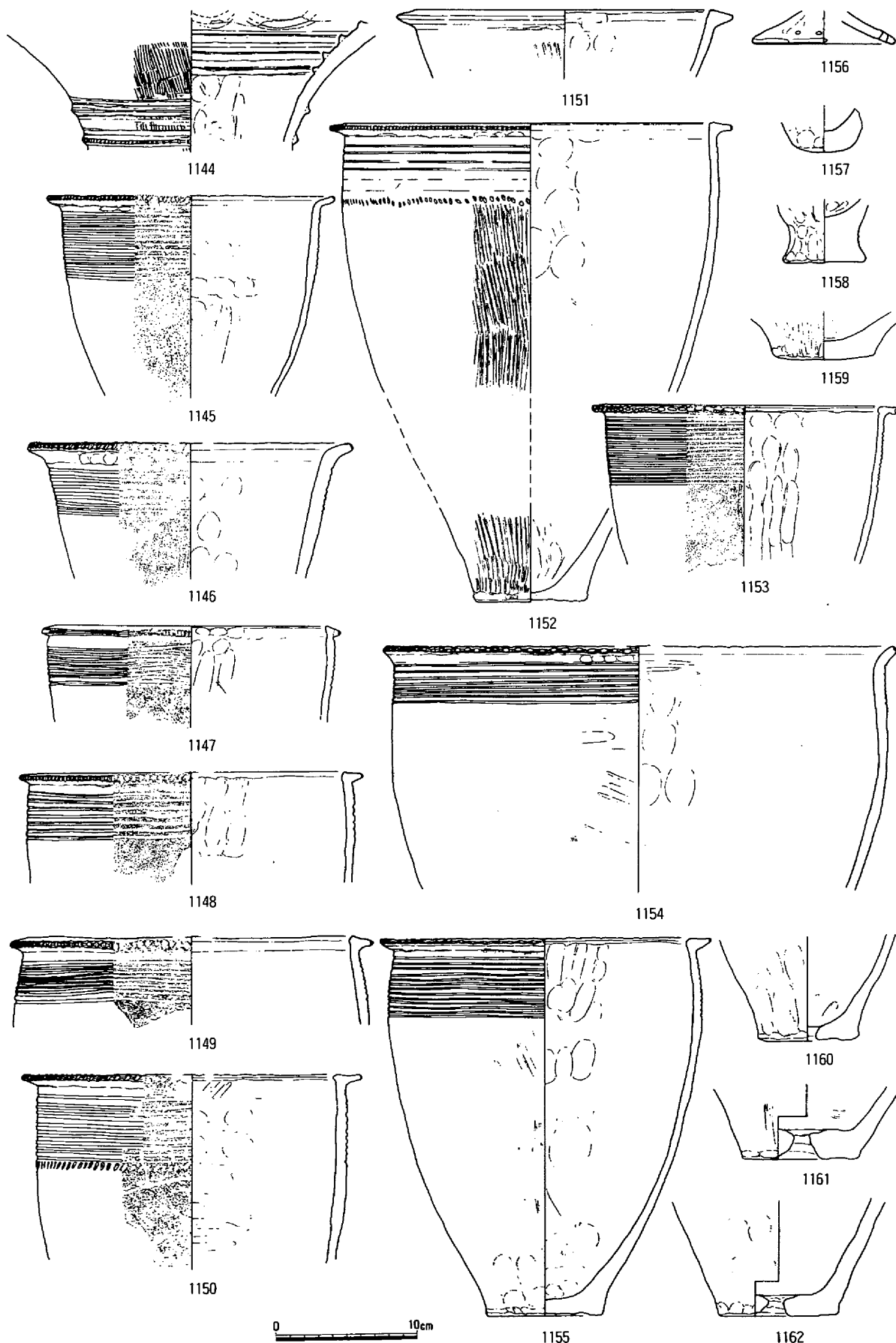
図、図版38)

40C区の東端部において検出した。平面形は南端部が溝53によって切られてはいるが、長さ約2m、幅1m前後の長方形を呈していたものと考えられる。深さは検出面から72cm残存していた。壁面は垂直にちかく立ち上がる部分が多く、底面はほぼ平らであった。埋土は水平にちかく堆積しており、炭・焼土粒を含んでいた。



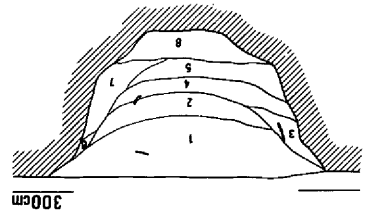
1. 淡褐灰色砂質土(炭・焼土粒)
2. 褐灰色砂質土(炭・焼土、黄色砂塊含)
3. 暗緑青灰色粘土(同上)
4. 暗緑青灰色粘土(同上+砂粒)
5. 暗緑青灰色粘土+黄色微砂混

第297図 土壇98



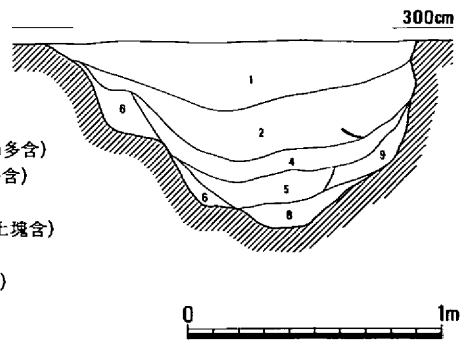
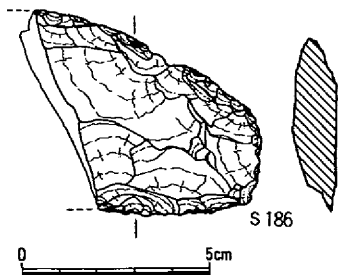
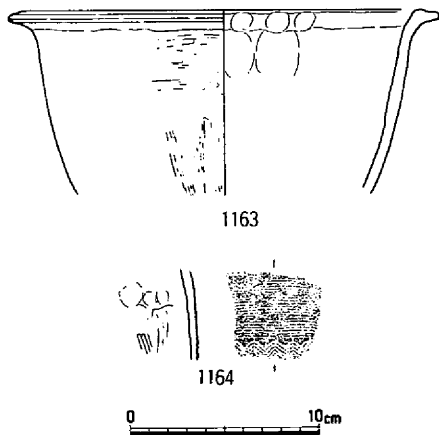
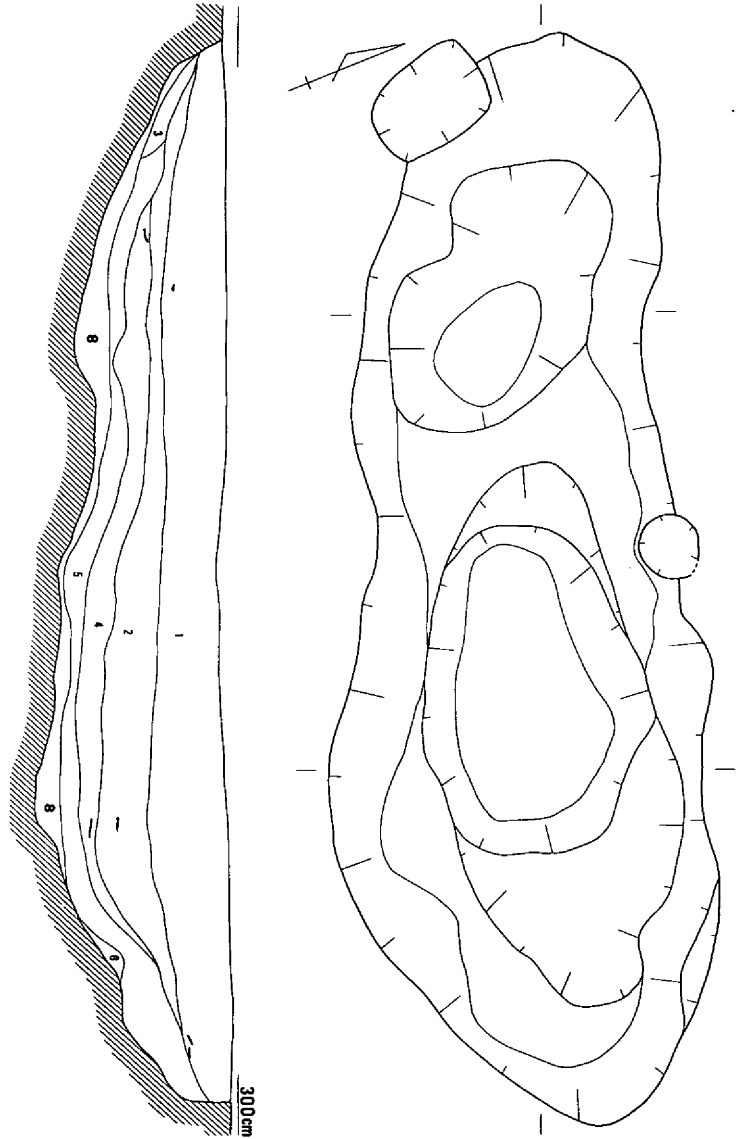
第298図 土壙98 出土遺物

遺物はおもに図の3～5層から土器が多く出土した。出土した甕のほとんどの胴部上半には多条のヘラガキ平行沈線が施されており、底部には焼成後に穴が穿たれている破片が多かった。時期は百・前・Ⅲである。(平井)



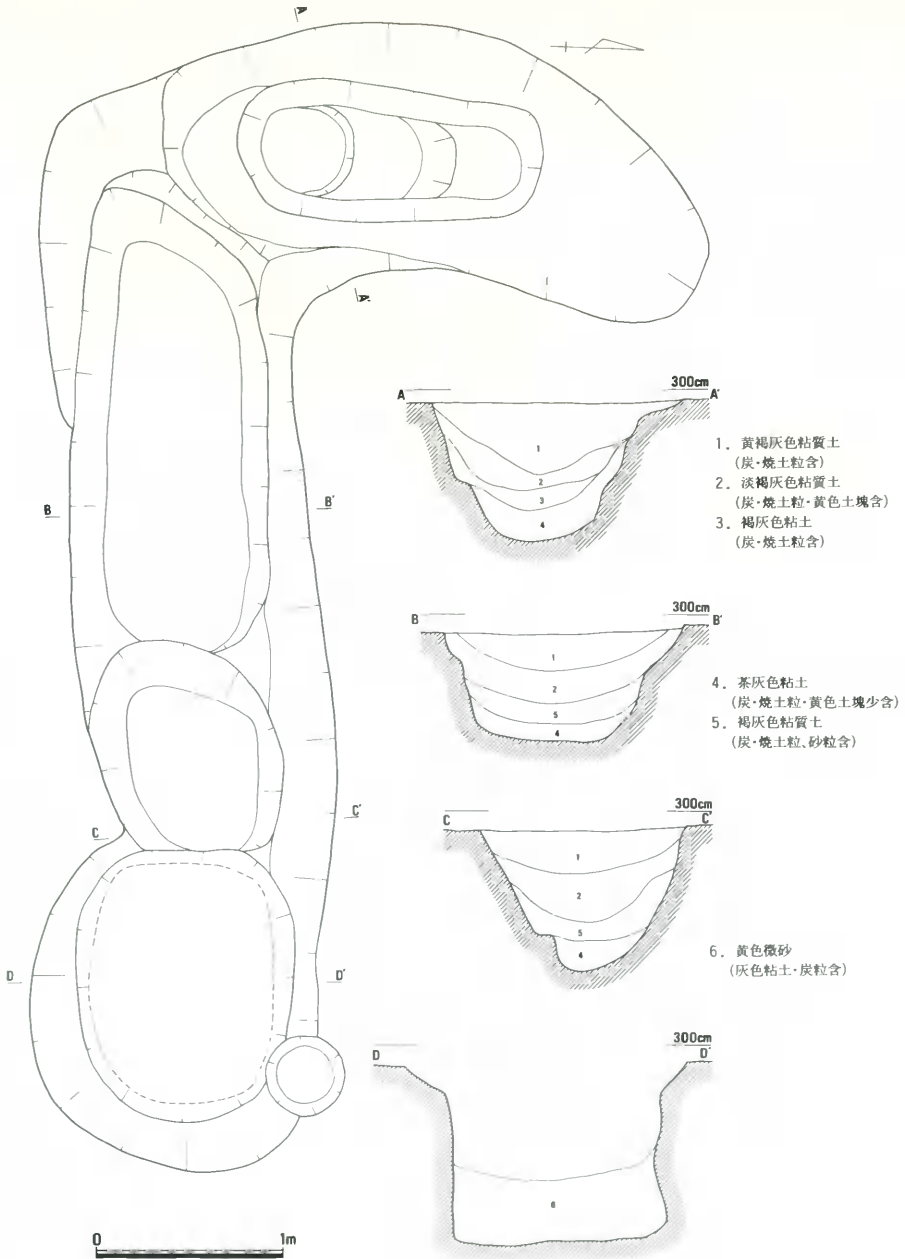
土壌99 (第299図、図版38)

38C区の北東端部において検出した大規模な土壌である。平面形は長さ約4.3m、幅1.15～1.5mの不整形な長楕円形を呈している。底面には凹凸があり、最深部で検出面から76cmを測る。埋土は九層に分離でき、ほとんどの土層に炭や焼土を含んでいた。遺物は少量の土器片や石器が出土したのみである。土器は小片のものが多かった。1163・1164は甕で、1164の外表面にはクシガキ文様が施されている。S186はスクレイパーであろうか。時期は百・中・Ⅰと考えている。(平井)



1. 淡茶灰色粘質土(焼土・炭含)
2. 淡茶灰色粘質土(焼土・炭含、Mn多含)
3. 茶灰色粘質土(焼土・炭含、Mn多含)
4. 茶灰褐色粘質土(焼土・炭含)
5. 茶灰褐色粘土(焼土・炭含、黄色土塊含)
6. 茶灰褐色粘質土
7. 茶灰褐色粘質土(炭・黄色土塊含)
8. 黄褐色粘質土(炭を含む)
9. 灰茶色砂質土

第299図 土壌99、同出土遺物



第300図 土壌100



土壌100 (第300・301図、図版38・62)

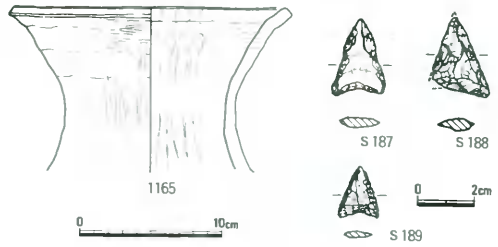
38C区の東部から40C区の西部において検出した。平面的にはL字形の溝のように検出でき、また埋土は基本的には同じような土層関係であることなど、切り合い関係を明確にすることができなかつたため一つの土壌番号にしている。しかしながら平面図に示したようなその形状や周辺に長方形あるいは楕円形状の土壌が多く存在していることから3ないし4基の土壌が切り合っていると考えるべきであらうか。深さは検出面から約50~100cm残存していた。

遺物は少量の土器や石器が出土したのみである。土器は小片がほとんどであるが、胴部上半にクシガキが施されている甕が含まれている。S187~189は石鏃である。時期は百・中・Iであろう。(平井)

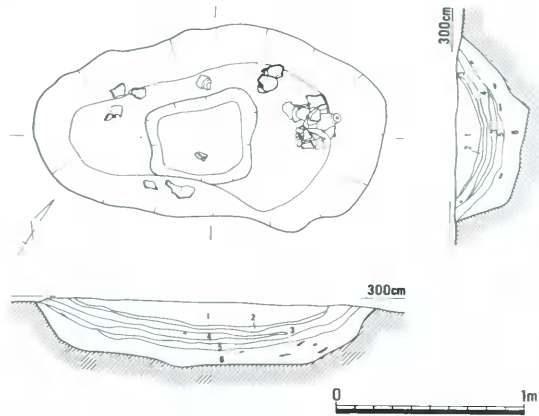
土壌101 (第302図、図版62)

38C区の東半部、土壌63の南において検出した。平面形は長軸188cm、短軸100cm前後の長楕円形状を呈し、深さは検出面から36cm残存していた。断面形は皿形で、底面には凹凸があった。また埋土は六層に分離することができた。

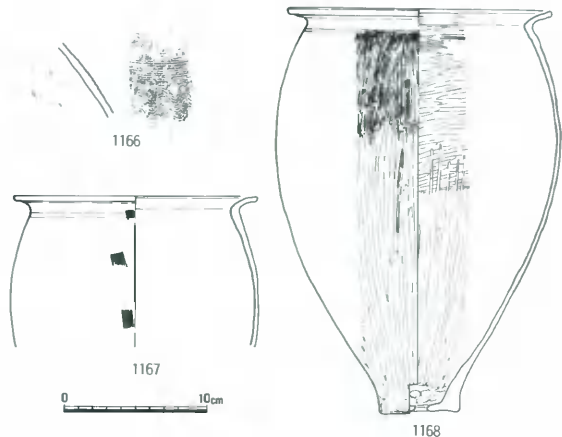
遺物はおもに図の6層から土器が出土している。1166は壺で、1167・1168は甕である。時期は甕の口縁端部に上方への拡張が認められないことや口縁部内面にヘラミガキが施されていることなどから、百・中・Iの新相と考えるべき。(平井)



第301図 土壌100 出土遺物



1. 茶褐色砂質土(炭含)
2. 茶褐色砂質土(黄色塊含)
3. 淡茶褐色粘質土(炭含)
4. 黄褐色灰砂質土(炭・焼土含)
5. 淡茶褐色粘質土(黄色塊含)
6. 暗茶褐色粘質土(炭を部分的に含む)



第302図 土壌101、同出土遺物

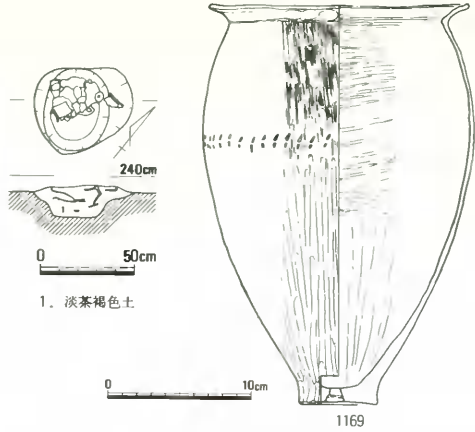
土壌102 (第303図、図版62)

38C区の中央部において検出した。平面形は52×45cmの不整楕円形状を呈し、深さは検出面から18cm残存していた。断面形は中央部が一段深くなっており、底面はほぼ平らであった。

埋上中からはほぼ一俵分の甕形土器(1169)の破片がまとめて出土した。時期は百・中・Ⅰの新相から百・中・Ⅱの古相と考えている。(平井)

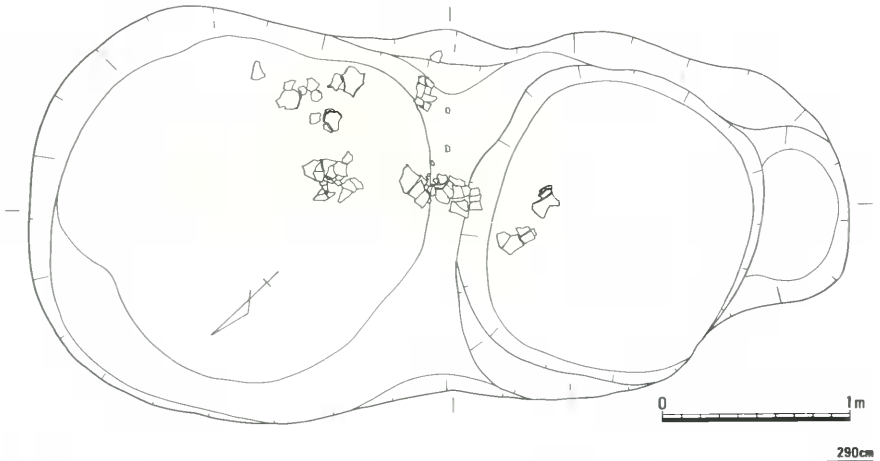
土壌103 (第304～306図、図版38・62)

38C区の中央部、土壌102の北において検出した。検出時の平面形は長軸約

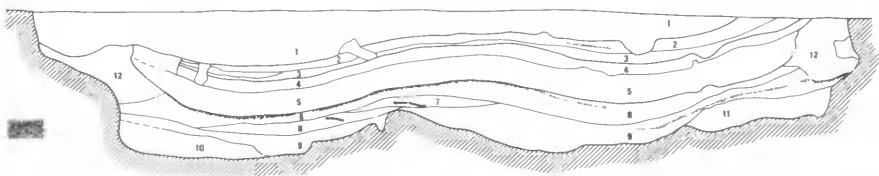


1. 淡茶褐色土

第303図 土壌102、同出土遺物



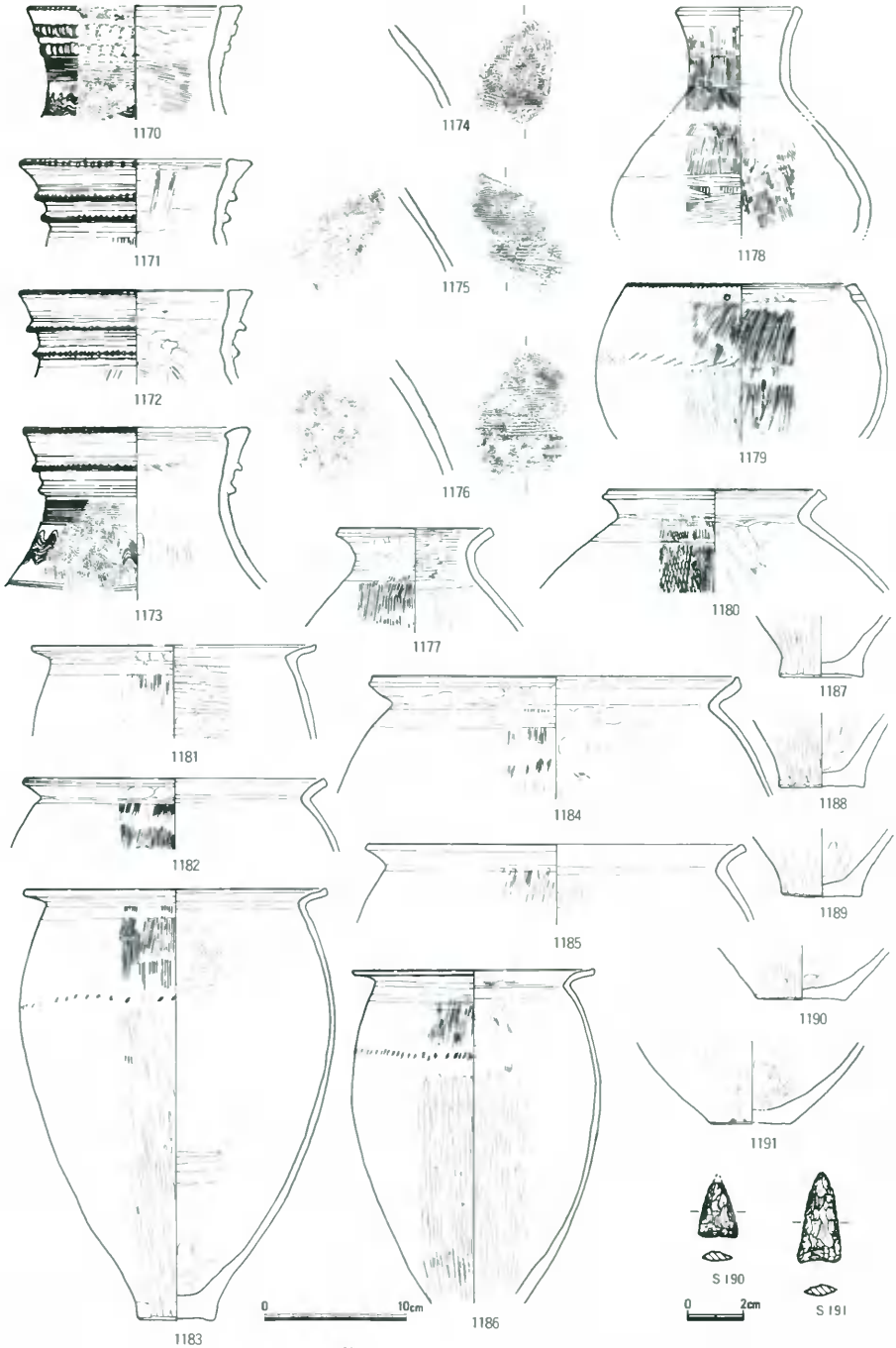
290cm



290cm

- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1. 褐灰色砂質土(炭・焼土含) | 7. 青灰色粘土            |
| 2. 暗褐色砂質土(炭・焼土含) | 8. 青灰白色粘土(炭・灰・砂粒多含) |
| 3. 淡褐色砂質土        | 9. 暗青灰色粘土           |
| 4. 黄色微砂+灰色粘質土    | (炭・焼土・灰・黄色砂塊)       |
| 5. 灰色粘質土         | 10. 青灰色粘土           |
| 6. 暗灰色粘土         | 11. 暗灰色粘土(黄色砂塊)     |
| (炭・砂粒・焼土粒・黄色塊含)  | 12. 暗灰粘土(9と同)       |

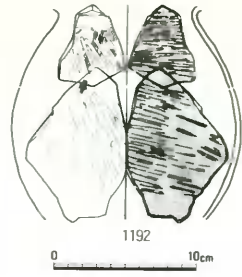
第304図 土壌103



第305図 土壌103 出土遺物(1)

4.3m、短軸2～2.2mの不整形な長楕円形状を呈していたが、掘り上がりの形状をみると、底面に図のような2か所のくぼみが存在していた。また断面図に示したような埋土の状況からは何回かの掘り直しが想定できる。したがってこの土壌は本来二つの土壌が重複、あるいは切り合って存在していたものが最終的には一つの土壌として埋没していったと考えられるのではなかろうか。

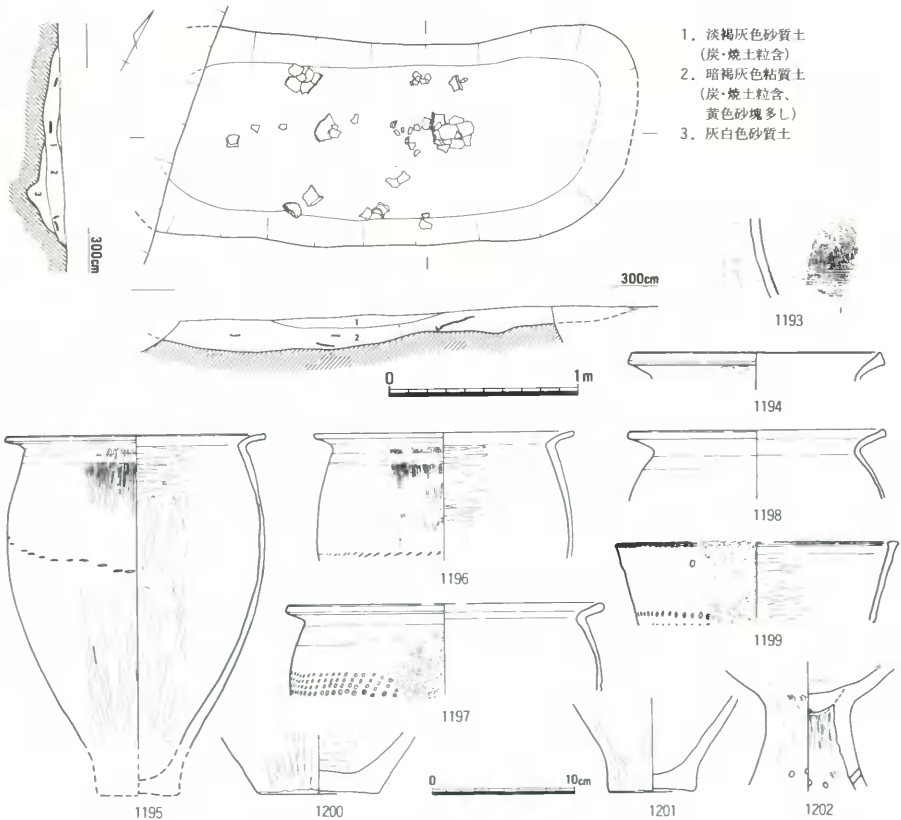
遺物は土器・石器・獣骨が出土している。図示した土器のうち1170～1178は壺で、1170・1173～1176の外面にはクシガキ文様が施されている。1180～1189は甕である。1183・1186の胴部上半には刺突文が確認できた。また1192は二つの小破片で器形は明確ではないが、内面全体と肩の一部に黒漆と思われる痕跡が観察できる。S190・191は石鏃である。獣骨は小片のため種類は不明である。時期は百・中・Ⅰの新相～百・中・Ⅱの古相と考えている。（平井）



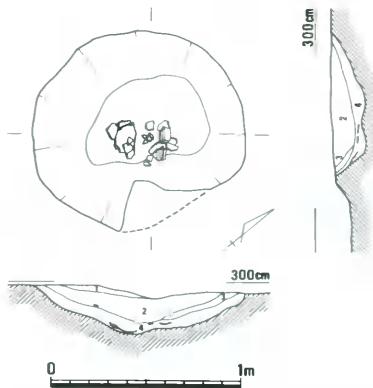
第306図 土壌103  
出土遺物(2)

土壌104（第307図、図版62）

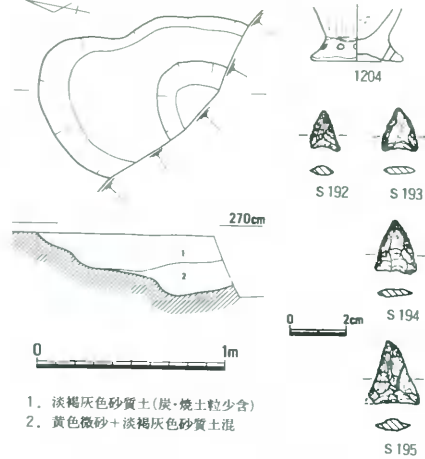
38C区の中央部、土壌103の南において検出した。平面形は西端部が削平されていたが、不整形な隅



第307図 土壌104、同出土遺物

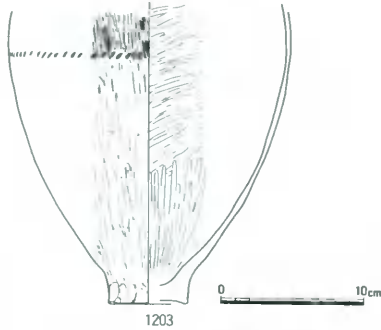


1. 茶灰色粘質土(炭・黄色土塊) 3. 2と同(黄色土塊)  
2. 淡茶灰色粘質土(炭含) 4. 2と同(炭含)



1. 淡褐灰色砂質土(炭・焼土粒少量)  
2. 黄色微砂+淡褐灰色砂質土混

第309図 土壙106、同出土遺物



第308図 土壙105、同出土遺物

丸長方形を呈しており、深さは検出面から18cm残存していた。断面形は皿形で、埋土中には炭・焼土粒を含んでいた。遺物はおもに図の2層から土器が出土した。1193・1200は壺、1195～1198・1201は甕、1199はジョッキ形土器、1202は高杯である。時期は百・中・Ⅰの新相ではなかるうか。(平井)

#### 土壙105 (第257・308図、図版62)

38C区の東部において検出した。平面形は直径約1.1mの円形状を呈し、深さは検出面から約20cm残

存していた。断面形は皿形で、埋土中には炭を含んでいた。遺物は最下層から土器が出土している。

時期は明確ではないが百・中・Ⅰの新相から百・中・Ⅱの古相と考えている。(平井)

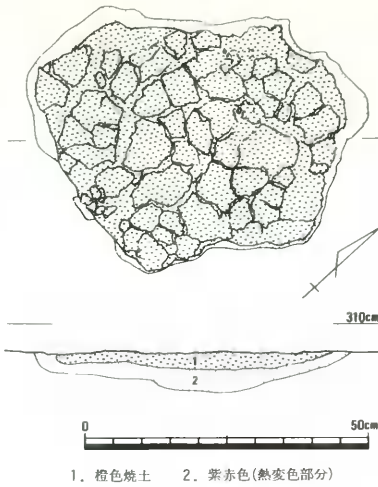
#### 土壙106 (第257・309図)

39D区の北端部において検出した。南半部が調査区外にのびるため全体の形状は不明である。深さは検出面から34cm残存していた。遺物は土器およびサヌカイト製の石鏃が4点(S192～195)出土した。時期は明確ではないが、百・中・Ⅰ～Ⅱと考えられる。(平井)

### (3) 焼土面

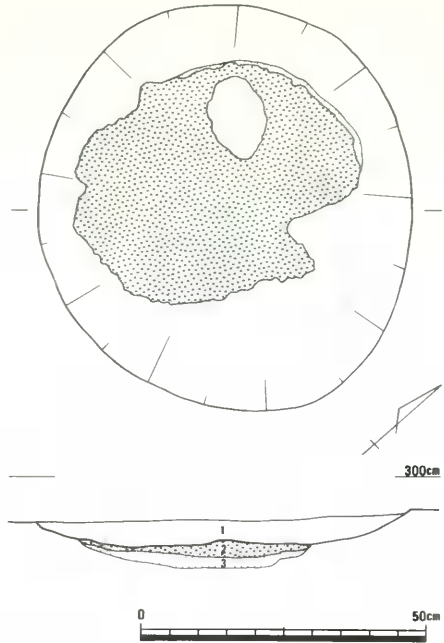
#### 焼土面Ⅰ (第257・310図、図版39)

38C区の東半部、土壙104の東において検出した。第310図に示したように、約50×40cmの範囲に橙色によく焼けた面が確認できた。上面はブロック状にひび割れており、僅かではあるが中央部が高くなっていた。また断面を観察したところ、焼土の下位に2～4cmの厚さで被熱のために紫赤色に地山が変色した部分が確認できた。したがってこの遺構はこの場所で火が炊かれた跡、いわゆる炉跡と考えられる。時期を示す遺物は出土しなかったが、検出面の高さや周辺の遺構の時期などから百・前・



1. 橙色焼土 2. 紫赤色(熱変色部分)

第310図 焼土面1



1. 茶褐灰色粘質土 3. 紫赤色(熱変色部分)  
2. 橙色焼土

第311図 焼土面2

Ⅲ～百・中・Ⅱと考えている。(平井)

焼土面2 (第257・311図、図版39)

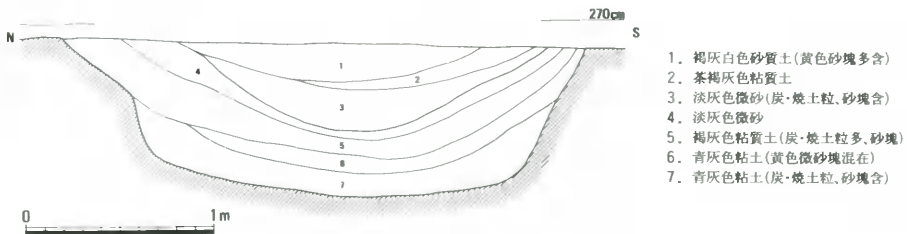
39C区の北半部、土壙66の南西部において検出した。第311図に示したように平面形が70×65cmの円形状で、深さ約5cmの浅い土壙状のくぼみの底面に橙色に焼けた面が確認できた。

また断面観察の結果、図のように被熱部分が確認できたため、いわゆる炉跡と考えてよいのではなかろうか。時期は、焼土面1と同じく百・前・Ⅲ～百・中・Ⅱと考えている。(平井)

(4) 溝

溝52 (第257・312～317図、図版39・63・64・68)

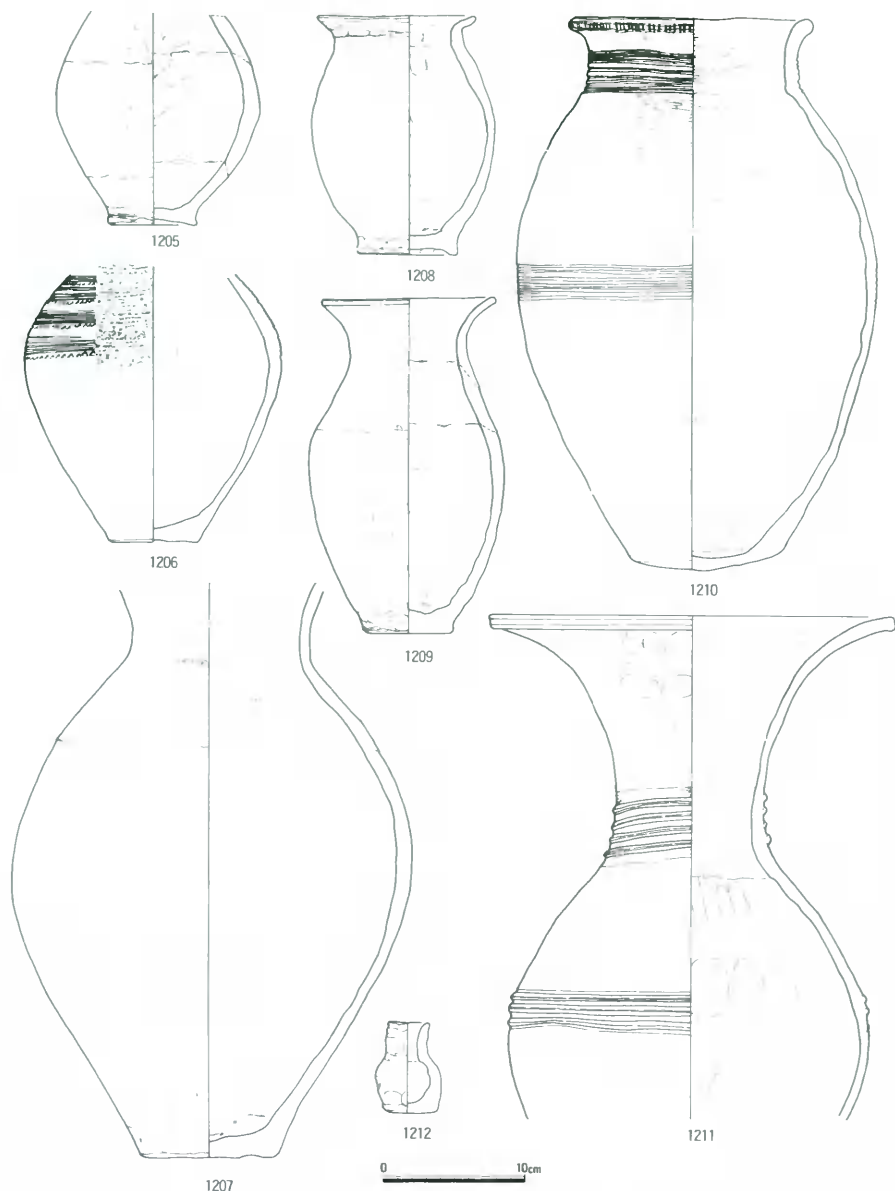
40C・D区の中央部において北東から南西にむかって検出した。幅は2.3～2.8mで、深さは検出面から80cm前後残存していた。底面の高さは海拔1.8m前後で、底面は南西にむかって徐々に深くなっ



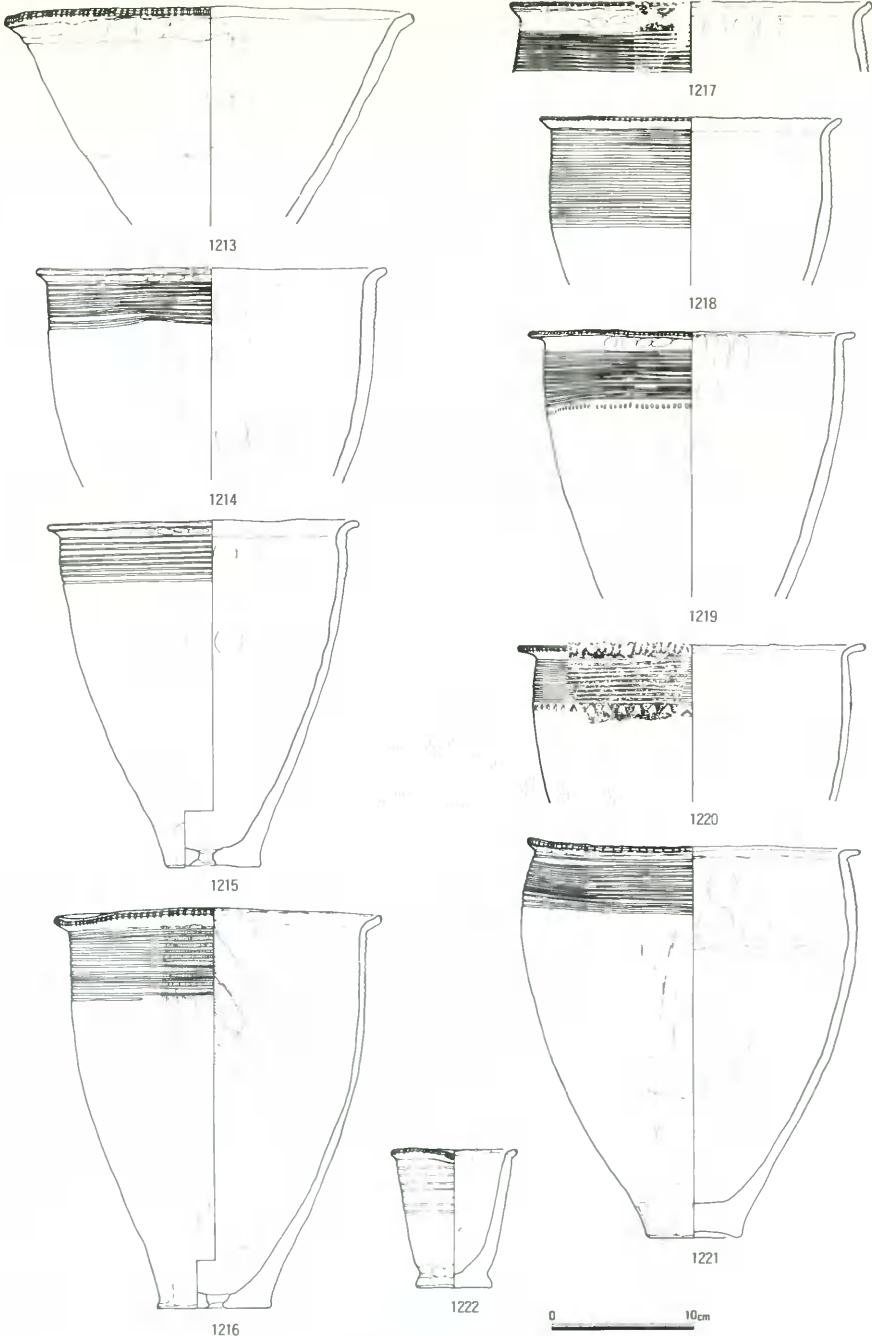
1. 褐灰白色砂質土(黄色砂塊多含)  
2. 茶褐灰色粘質土  
3. 淡灰色微砂(炭・焼土粒、砂塊含)  
4. 淡灰色微砂  
5. 褐灰色粘質土(炭・焼土粒多、砂塊)  
6. 青灰色粘土(黄色微砂塊混在)  
7. 青灰色粘土(炭・焼土粒、砂塊含)

第312図 溝52 断面

ていた。断面形は逆台形にちかく、中央部が少し深くなっている。断面観察によれば、埋土のうち三つの土層に炭・焼土が含まれており、この溝は大きくは三次にわたって埋まっていったのではないかと考えられる。遺物は多くの土器と石器が出土している。1205～1212は壺である。1206の胴部上半に



第313図 溝52 出土遺物(I)

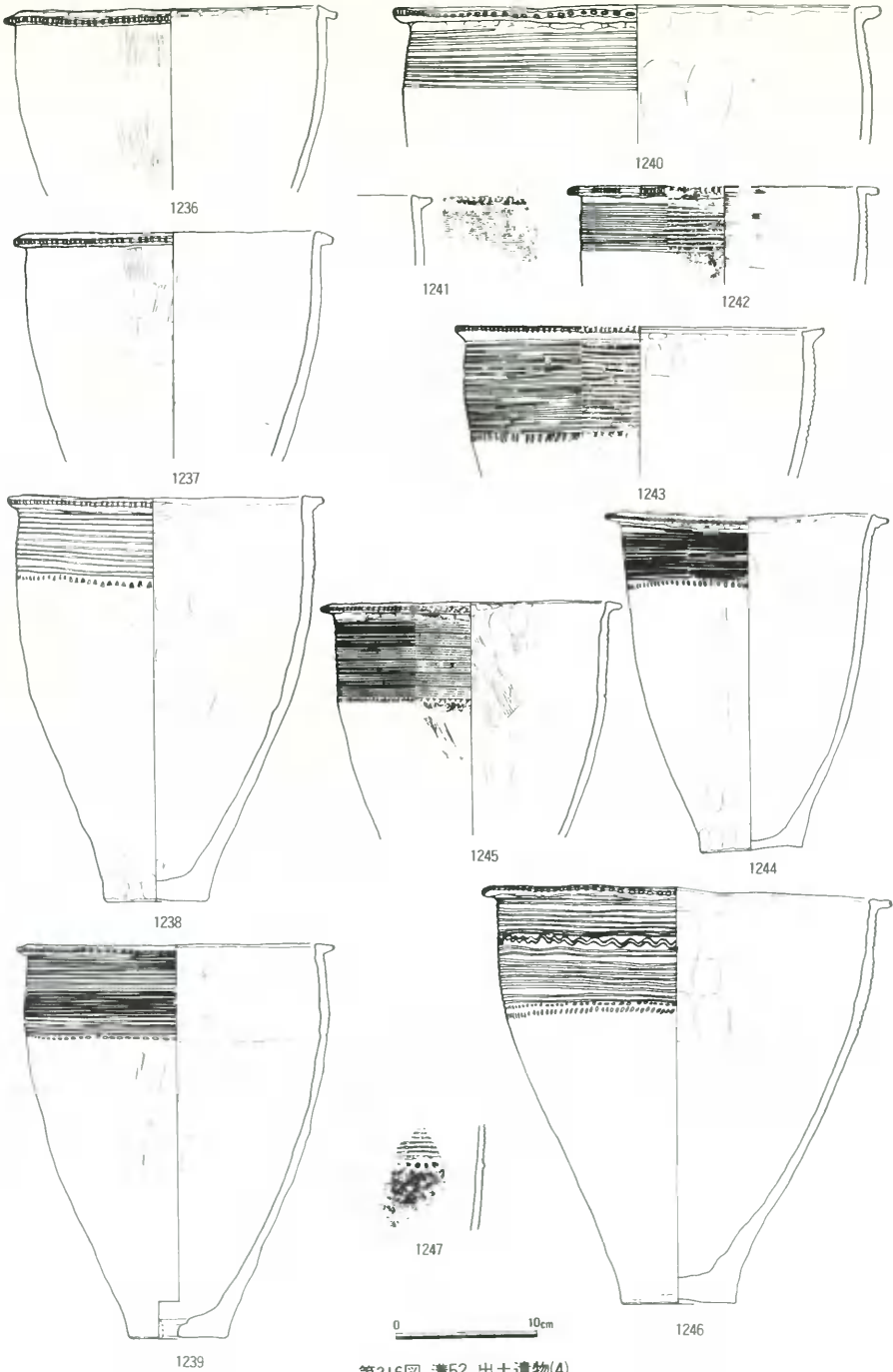


第314図 溝52 出土遺物(2)

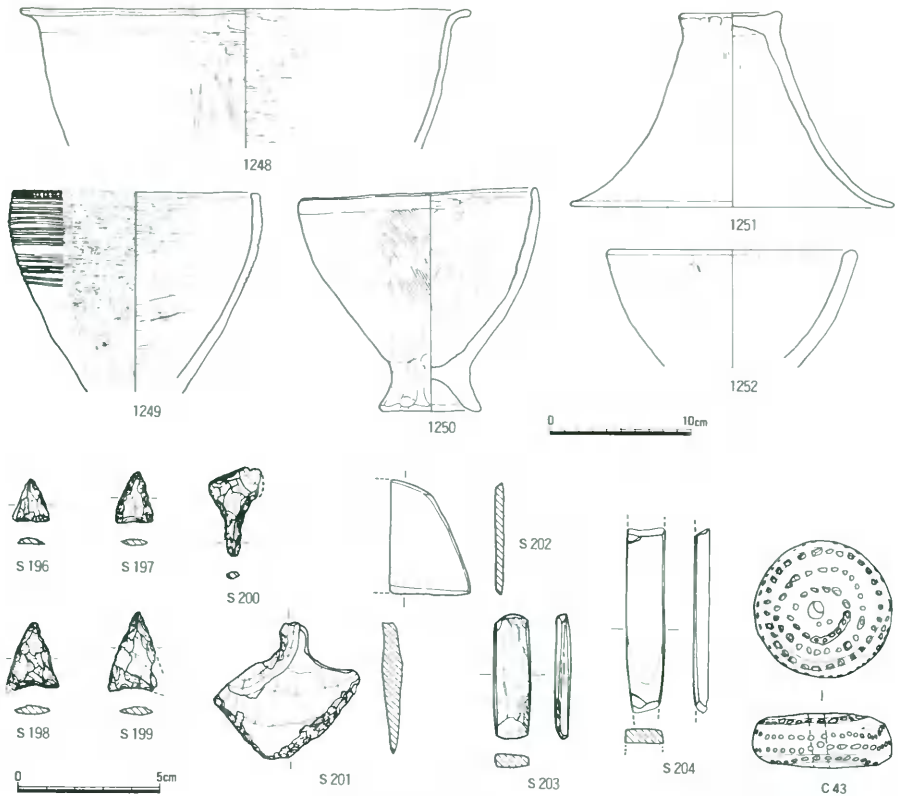




第315図 溝52 出土遺物(3)



第316図 溝52 出土遺物(4)

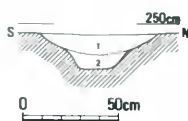


第317図 溝52 出土遺物(5)

はヘラガキ沈線と三角形状の刺突文が施されている。頸部と胴部には1209がヘラガキ沈線、1212には貼り付け突帯がめぐらされている。また底部は1205・1207が上げ底、1206・1208・1209が平底で、1210は他に比べて薄くかつ尖り底ぎみである点に特徴がある。1213～1248は甕である。口縁部は「く」の字状に外反するものと逆L字状に突帯を貼り付けたものがある。口唇部にはキサミメを施すものと施さないものがある。胴部上半は無文、多状ヘラガキ沈線、および少数ではあるが半截竹管状の工具による多状沈線（1234・1239・1240）やクシガキ文（1232・1241・1245）がめぐらされている。石器のうちS196～199は石鏃、S200は石錐、S201は石匙、S203はノミ状片刃石斧、S204は柱状片刃石斧ではなかろうか。C43は紡錘車で外面には刺突文が施されている。時期は百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰである。（平井）

溝53（第257・318図、図版39）

40C区の東半部において検出した。幅は60cm前後で、深さは約20cm残存していた。埋土は二層に分離でき、底面は平らであった。溝52との関係は明確ではないが溝53が溝52に取り付いていたのではなかろうか。（平井）



1. 淡褐色砂質土
2. 褐色粘質土  
(黄褐色砂塊含)

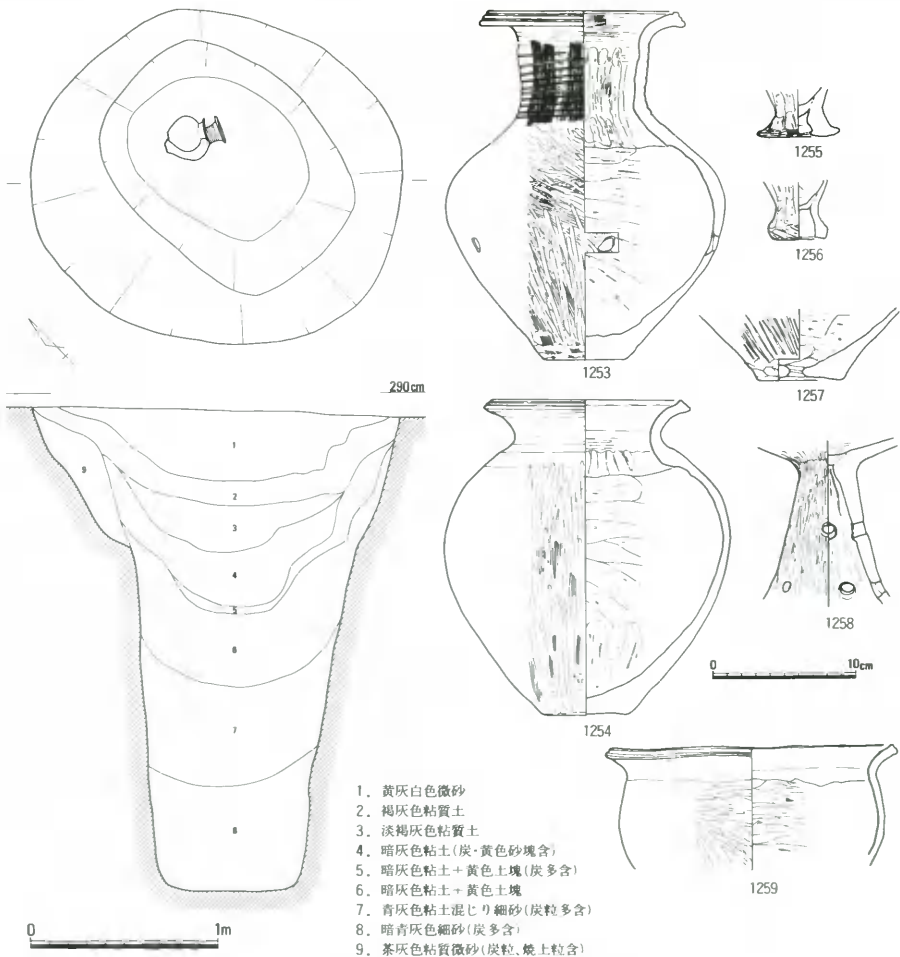
第318図 溝53 断面

## 4. 弥生時代後期の遺構・遺物

## (1) 井戸

## 井戸12 (第319-322図、図版40-1、64)

調査区の北東部に検出した素掘りの井戸で、平面形はほぼ円形を呈し長径198cm、短径175cmを測る。上端から下端にかけて徐々に幅を狭めるものであるが、南東側は下端から180cm付近から大きく開く。底面はほぼ平坦で、平面形は楕円形を呈しており、長径94cm、短径73cmを測る。検出面からの深さは252cmを測り、底面の海拔高は38cmである。井戸の底からは壺と甕が出し、百・後・Ⅱに属するものであり、井戸の時期もそれと同じ時期と考えられる。(井上)

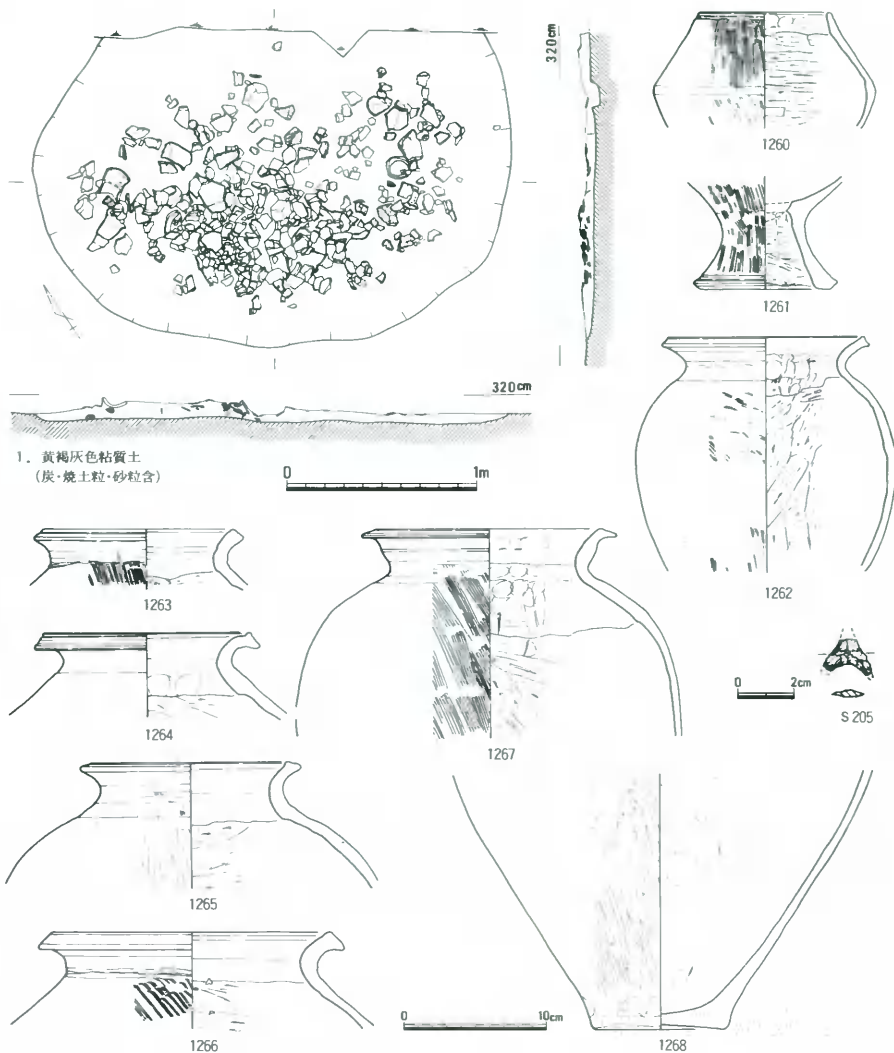


第319図 井戸12、同出土遺物

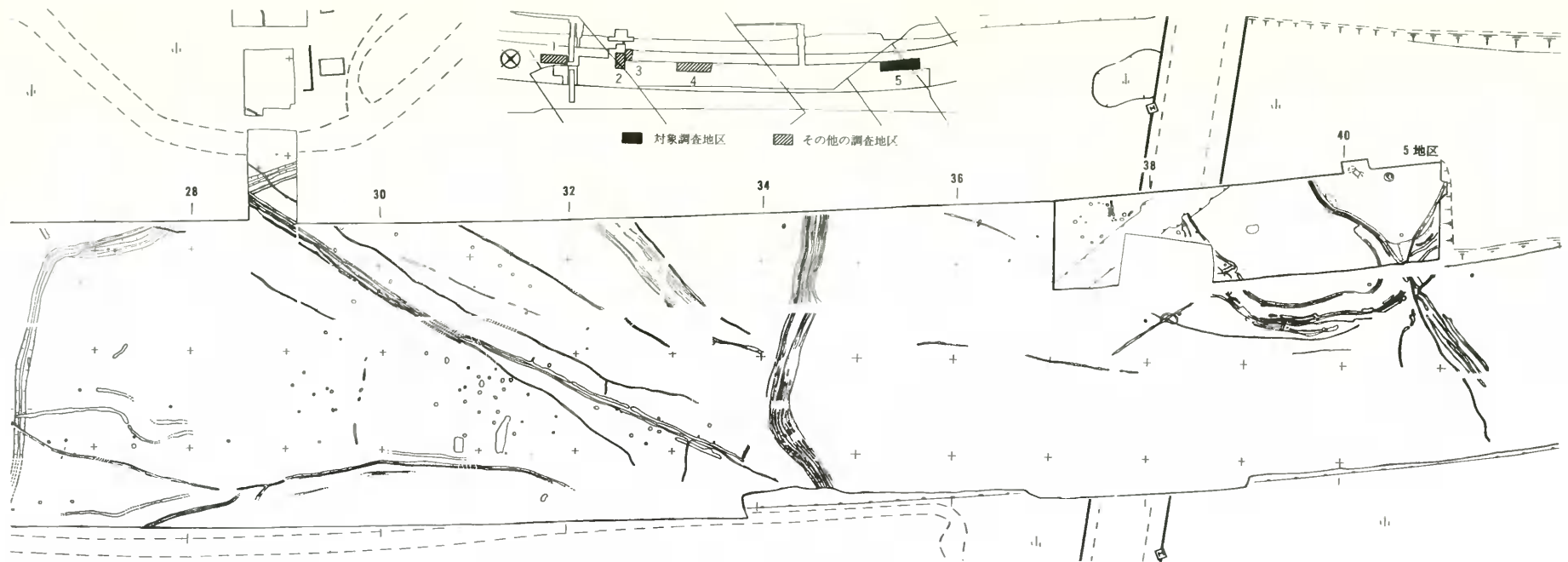
(2) 土 壙

土壙107 (第320・322・323図、図版40-2. 65-1)

調査区の中央付近で検出したもので、北東部の一部分が削平されている。そのため、全体の形状は不明であるがほぼ円形を呈していたものと考えられる。土壙の残存状態は悪く、検出面から底面までの深さは約8cmを測るのみである。土壙は浅い皿状に窪むもので、底面はほぼ平坦である。土壙の中央部からやや南西寄りにかけて多量の土器が出土した。出土した状況を見ると、床面の直上から検出



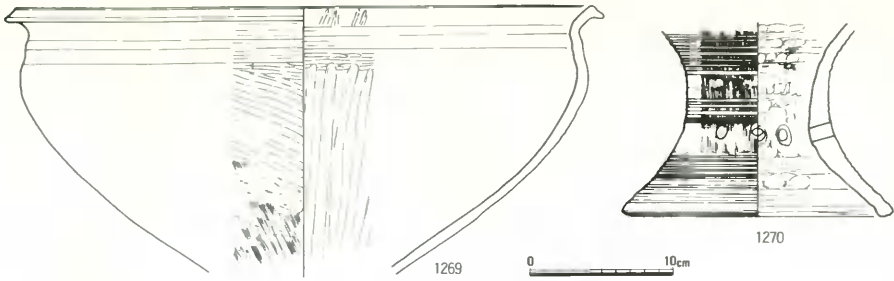
第320図 土壙107、同出土遺物(1)



第321図 対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代後期、1/1000)



第322図 37~40区遺構配置(弥生時代後期)

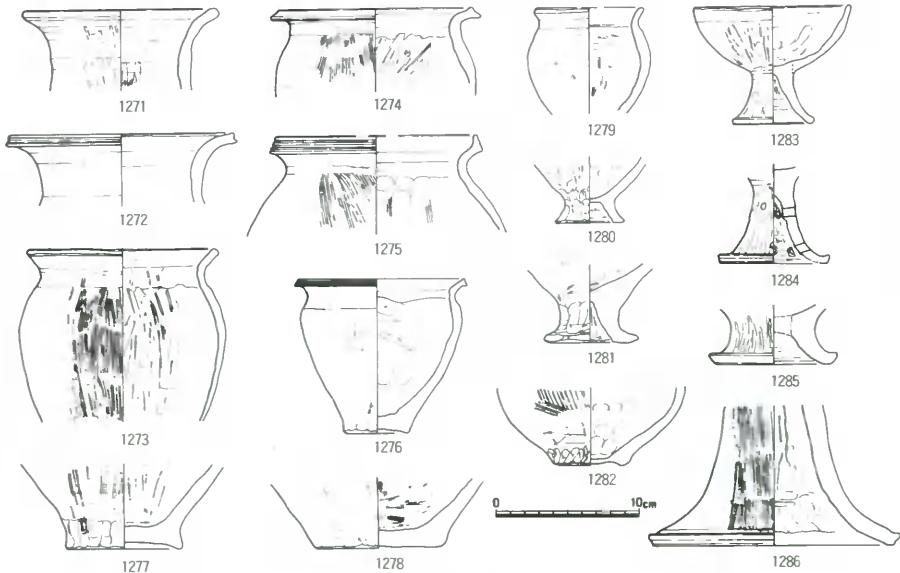


第323図 土壌107 同出土遺物(2)

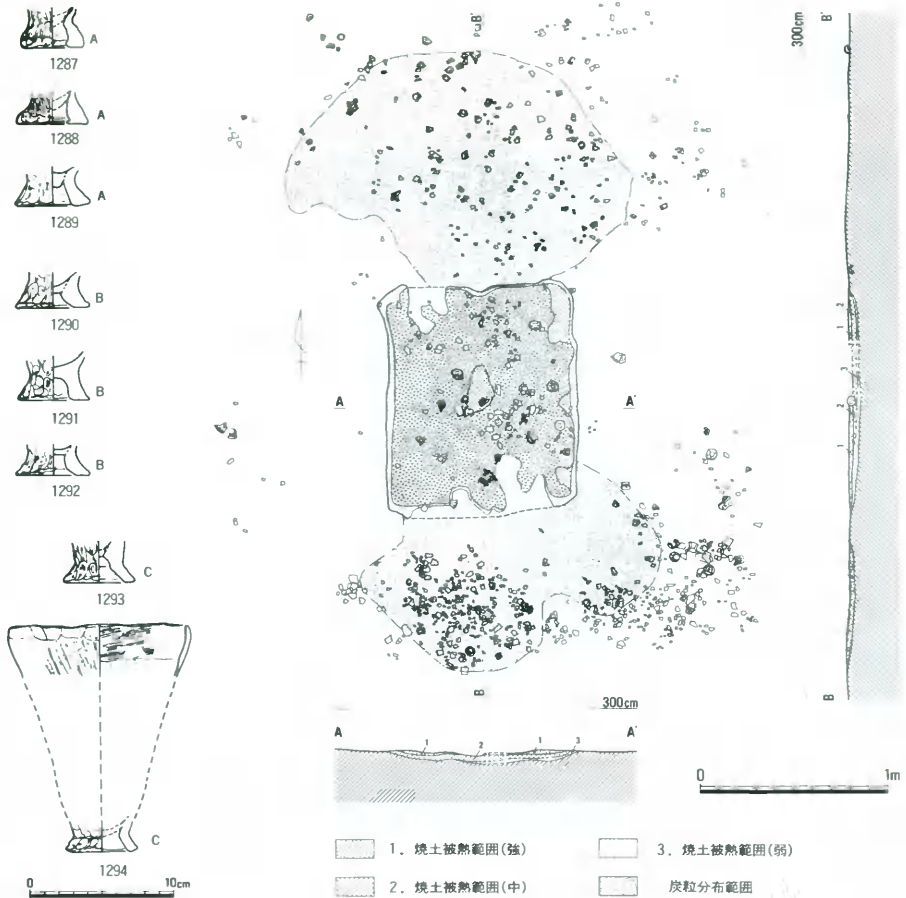
面にかけて甑まって出土したものである。出土した土器は、壺、甕、鉢、器台である。壺、甕の胴部内面は口縁部直下までヘラケズリされるものである。鉢1269は内外面共にヘラミガキが施される。土器の時期は百・後・Iに属するものであり、土壌も同じ時期と考えられる。(井上)

### (3) 製塩炉 (第322・324・325図、巻頭図版1-1、図版40-3、65-1)

井戸12の北約4mの位置に検出した。調査区の北東壁に一部かかる状態で検出したため、その部分を拡張して調査した。製塩炉はその長軸をほぼ南北に向けるもので、平面形は長方形を呈している。炉の規模は長さ124cm、幅103cmを測る。炉はその長方形の範囲内が赤色、もしくは赤褐色に変色するもので、強く火を受けた事がうかがえる。被熱部分の観察によれば、底面に粘土を張り付けた様相は見られなかった。製塩炉の短辺である北側と南側には扇状に粉炭の散布が認められる。散布の範囲は北側が炉の端から北へ126cm、東西の最大幅が183cm、南側が炉端から83cm、最大の幅が158cmである。



第324図 製塩炉周辺 出土遺物



第325図 製塩炉、同周辺出土製塩土器

同じような散布ではあるが、南側のほうが炭の量は多い。また、この炭に混じって製塩土器が多く出土している。製塩土器も炭と同じように南側に多く見られる。製塩炉と炭の検出状況からすれば、検出面は当時の生活面に近いものと考えられる。そうであるとすれば、長辺側に炭などの散布が見られない事は短辺側が炭、灰等の掻き出し口に相当するものと推定される。また、長辺側に炭、灰等が見られない事は高さは不明であるが壁が存在した事が想定されるものと考えられる。

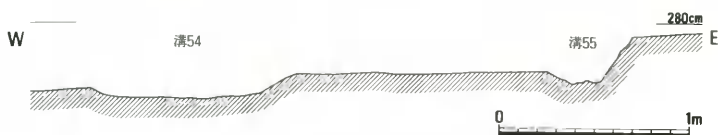
製塩炉に伴って出土した製塩土器の脚部を見ると1287・1288のように脚端部が平らで内側に拡張きみなもの（A類）、1291のように内側が丸くなるもの（B類）、1293のように端部が少し丸みをもつもの（C類）に分類できる。A類は16個確認でき、端部径は平均4.90cmを測る。B類は13個確認でき、端部径は平均5.05cmを測る。C類は1個を確認し、同じく端部径は4.8cmを測る。製塩炉の時期はこれら製塩土器や直上から出土した弥生土器などから弥生時代後期中葉と考えられる。（井上）



## (4) 溝

## 溝54・55・56 (第322・326・333図)

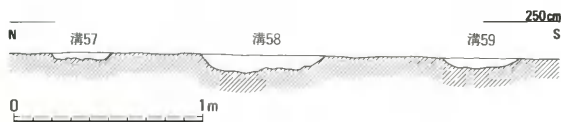
水田2の水田層を除去した後に検出したものである。溝55・56は微高地を水田に開墾したその端部に検出したもので、水田の形状に沿うように掘られるものである。そのため、溝55の南端部は水田の畦畔に沿うように西に折れ曲がる。溝の幅は約30cm、深さ約8cmを測る。溝54は溝55の西側約1mの位置に平行するように検出した。断面は浅い皿状を呈するもので幅約110cm、深さ約11cmを測る。弥生時代後期に属するものと考えられる。(井上)



第326図 溝54・55 断面

## 溝57・58・59 (第322・327図)

水田3の水田層を除去した後に検出したものである。微高地の縁に沿うように3本が平行に並ぶ状態で検出した。溝の幅は溝58が最も広く64cm、溝59が42

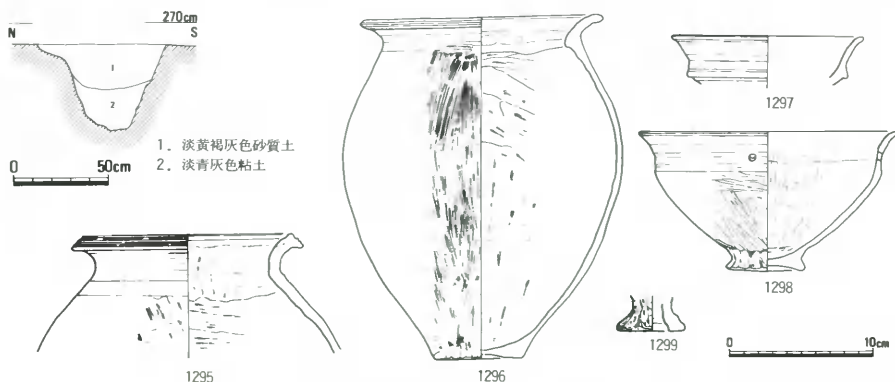


第327図 溝57・58・59 断面

cm、溝57が32cmを測る。深さはいずれの溝も浅く、断面は浅い皿状を呈しており溝58が9cm、溝59が6cm、溝57が4cmを測る。弥生時代後期と考えられる。(井上)

## 溝60 (第322・328図、図版41-1. 65-1)

調査区の南西端付近で検出した溝である。東北東から南南西方向に流れるものと考えられる溝である。溝はそのほとんどを微高地上に検出し、南西端部を水田3の耕作土除去後に検出した。溝の断面

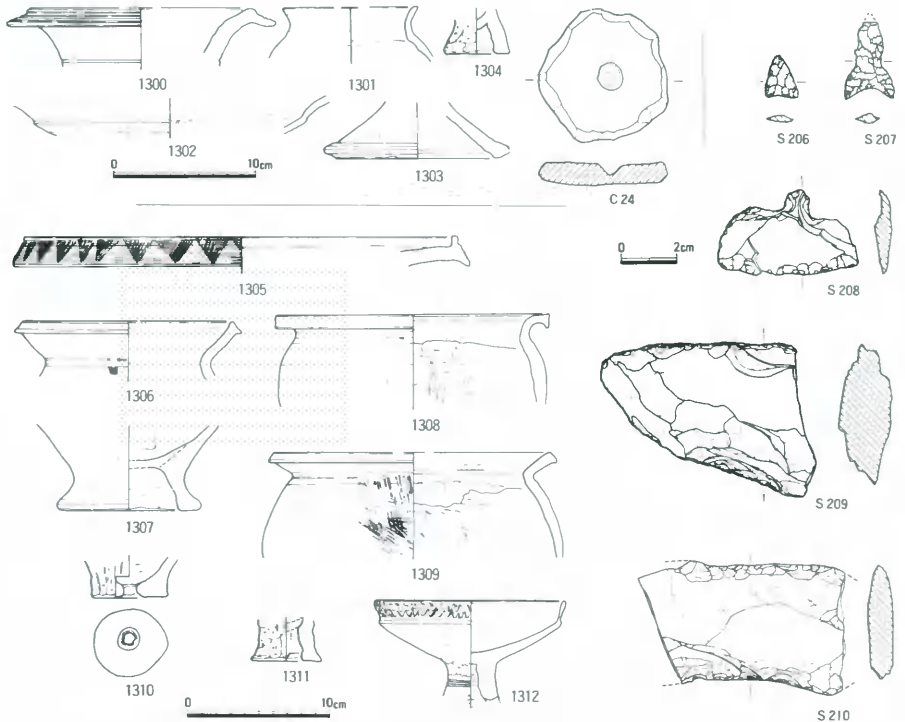
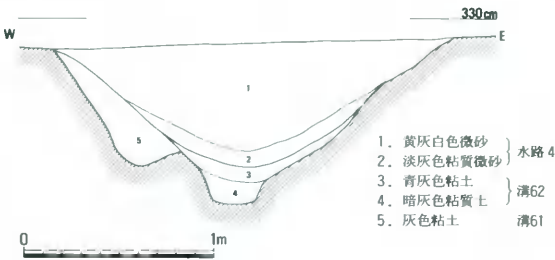


第328図 溝60 断面、同出土遺物

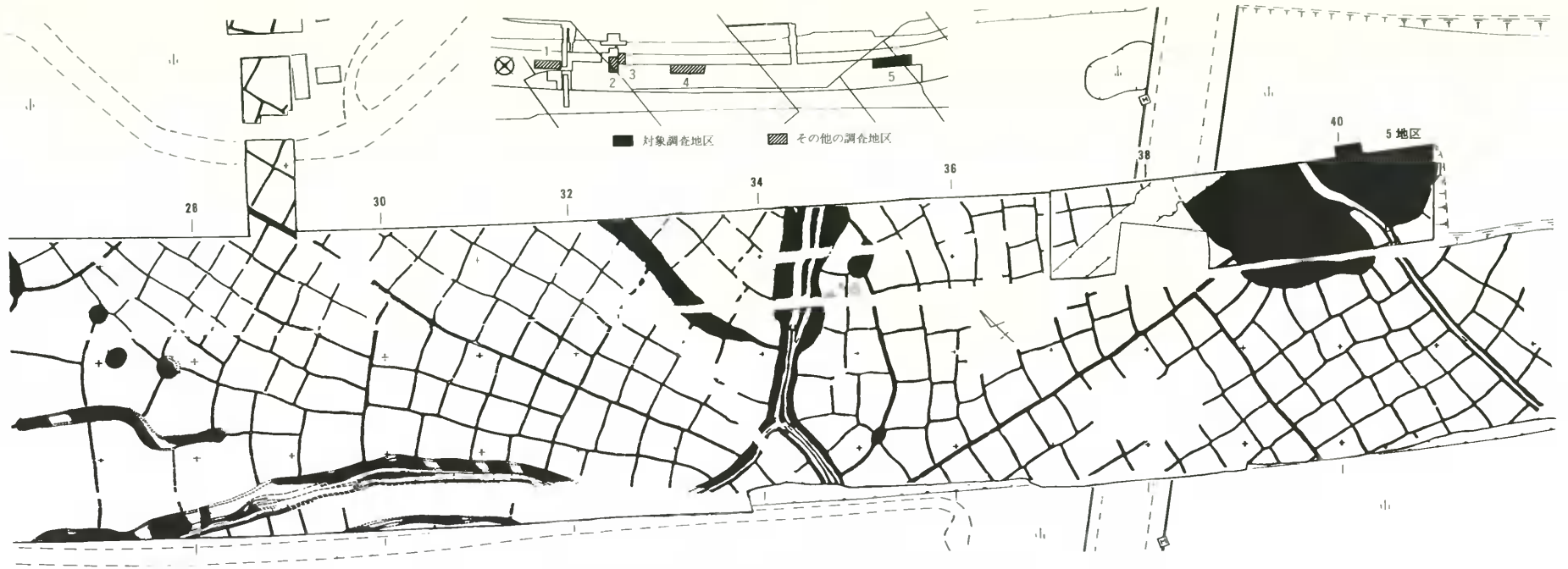
形はU字形を呈するもので、上層は砂質土、下層は粘土の上下二層の土により埋没していた。溝から出土した土器は百・後・Ⅱと考えられ、溝の時期もほぼ同じ時期と考えられる。(井上)

溝61・62 (第322・329・332・333図、図版41-1。68)

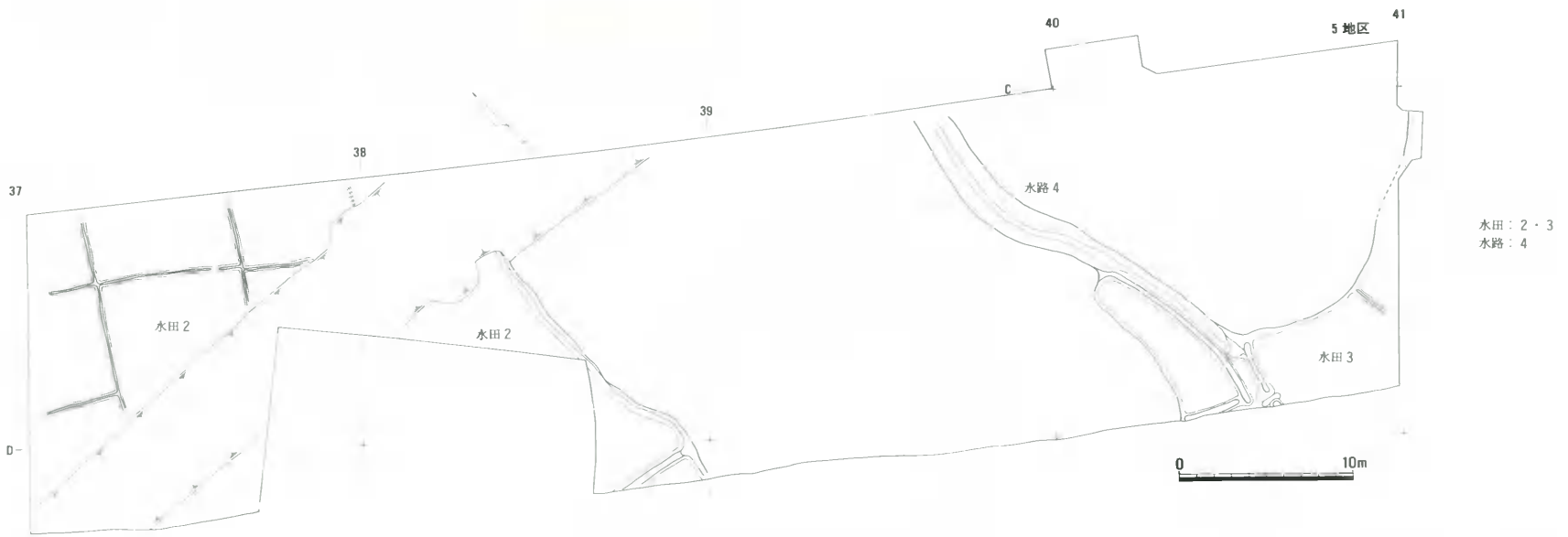
微高地上に検出した溝で、緩やかにS字状の曲線を描く。溝は北から南に流れるものと考えられるものである。溝は上端が大きく開くU字状を呈するものである。溝61は溝62の西側にそのほとんどを溝62に切られる状態で検出した。そのため規模は不明であるが、検出面からの深さは63cmを測る。溝62は微高地上では後述する水路4とほとんど重複している。断面図の3・4層が溝62の残存部分であることを考えれば本来の規模は不明であるが、上層部分はほとんど水路4と同規模であったと推定される。溝の底部は逆台形上に一段と深く掘られるものが見られる。一部途切れながらも、微高地部分においては全体に繋がっている。それも水田3が開削される部分からその形状も崩れてくる。溝は検出面からの深さは84cm、底面



第329図 溝61・62・水路4 断面、溝61・62 出土遺物



第330図 対象調査区位置および周辺遺構配置(弥生時代後期末水田、1/1000)



第331図 37~40区遺構配置(弥生時代後期末水田)

の幅約22cmを測る。この溝は上層の水路4との関係からして、溝の下流部には水田が展開するものと推測され、水田に水を引く用水路としての機能を有していたものと考えられる。溝から出土した土器は百・後・Ⅱを中心とするものであり、溝の機能が失われた時期は同時期もしくはそれよりも若干古いものと考えられる。  
(井上)

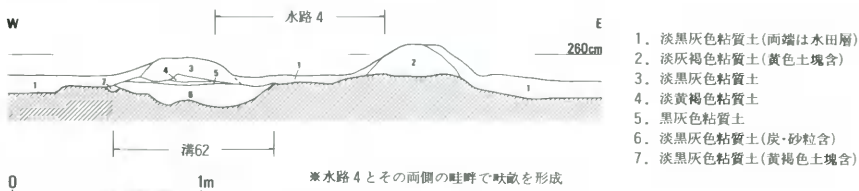
### (5) 水田・水路

#### 水田 2 (第331図)

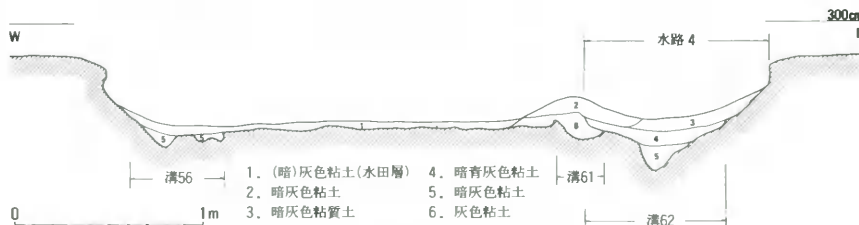
調査区の西側に検出したものである。何れも微高地上に造られたものである。検出したのは断面が半円状で幅約20cmを測る通常の大きさの畦と、その畦に囲まれる水田である。検出した水田層の厚さは約10cmを測る。調査面積が狭い事と、後世の攪乱が見られる事から一枚の水田の全体を検出する事はできなかったが、方形もしくは長方形を呈するものが整然と展開するものと考えられる。一枚の水田の規模は、一辺6.2m～8.2mを測るものである。  
(井上)

#### 水田 3・水路 4 (第331・332・333図、巻頭図版1-2)

調査区の南東部に検出したものである。何れも微高地を開削して造られたものである。水田は調査区の端部の一部分に検出したため、調査した面積は小範囲である。調査した水田の範囲は狭小であるが、用水路と水田の相関関係が見られる部分である。水路4は溝61・62をほぼ踏襲するもので、微高地上に開削された用水路である。この水路の下流域には水田3が展開するもので、調査区境には水路からの水の取り入れ口である水口が水路の両側に見られる。水路自体は両側に幅45cm～50cmを測る比較的大きめの畦畔を伴ってさらに下流まで延びるものと推定される。この水路は水田を覆い尽くす黄灰白色微砂により埋没している。この事から水路4と水田3は同時期に機能していたものである事が解る。水田2・3および水路4は弥生時代の遺構であるが、溝61・62との関係から百・後・Ⅱより新しい時期であると考えられる。  
(井上)



第332図 畝畝と水田の相関断面



第333図 水田と水路の相関断面

(6) 土器溜り

土器溜り4 (第322図)

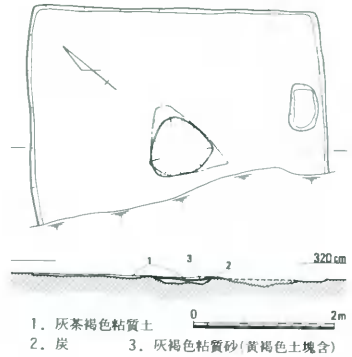
溝62の肩口に検出したものである。ほぼ南北方向に長い状態で多くの土器が出土した。出土した範囲は長軸約4m、端軸約1.2mを測る。この土器を出土した範囲を含む遺構の存在する事を考慮に入れて調査を進めたがそれらしき兆候は何等見られなかった事からすれば、溝の肩口に遺棄された土器群と考えられる。時期は溝61・62に同じと考えられる。(井上)

5. 古墳時代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居24 (第334・337図)

調査区境に検出したため南西側約半分については不明である。住居跡は方形を呈するもので、判明する一边は318cmを測る。また、住居跡は上面を削平されているため壁体はほとんど残存しておらず2cm～3cmを測るのみである。床面の中央には長径約60cmを測る円形の浅い土壇を検出し、それを中心に灰が2cm～3cmの厚さで堆積していた。南東の壁体に沿っては長辺50cm、短辺30cmを測る方形の土壇を検出した。住居跡の明確な時期は不明であるが、古墳時代前期前半と考えられる。(井上)

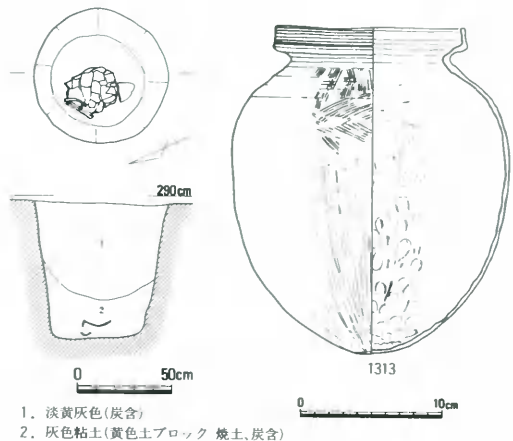


第334図 竪穴住居24

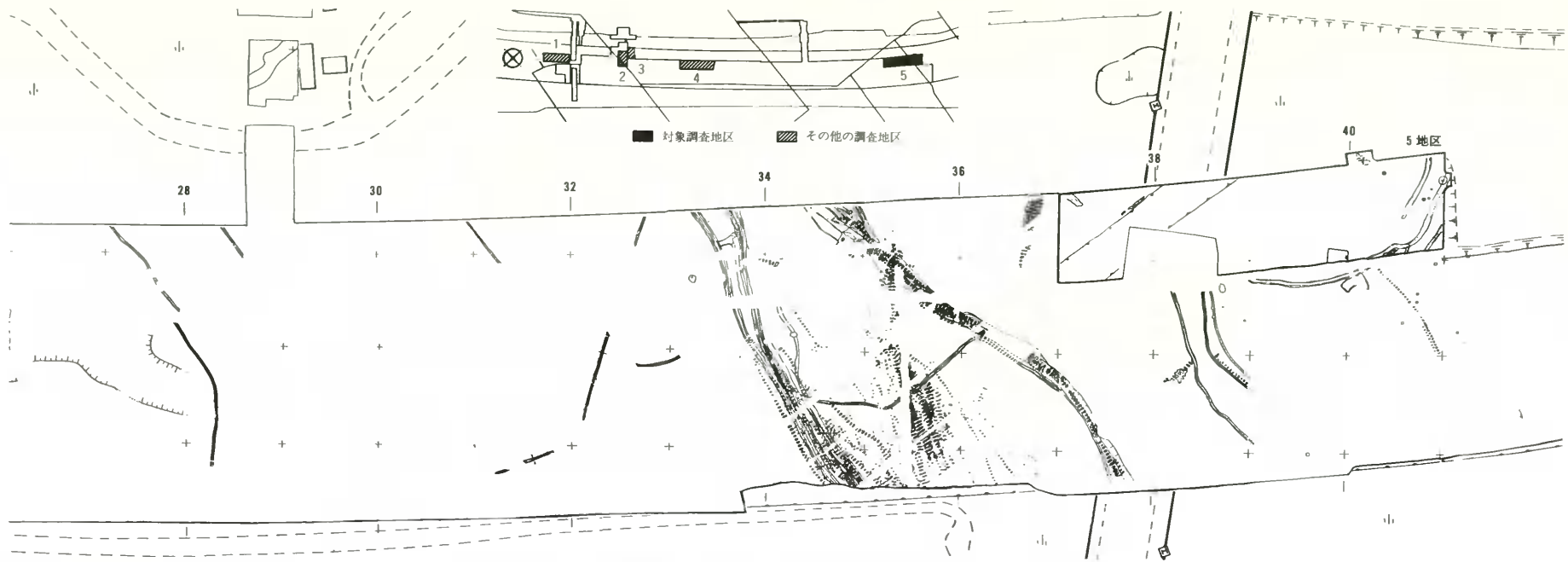
(2) 井戸

井戸13 (第335・337図、図版65-1)

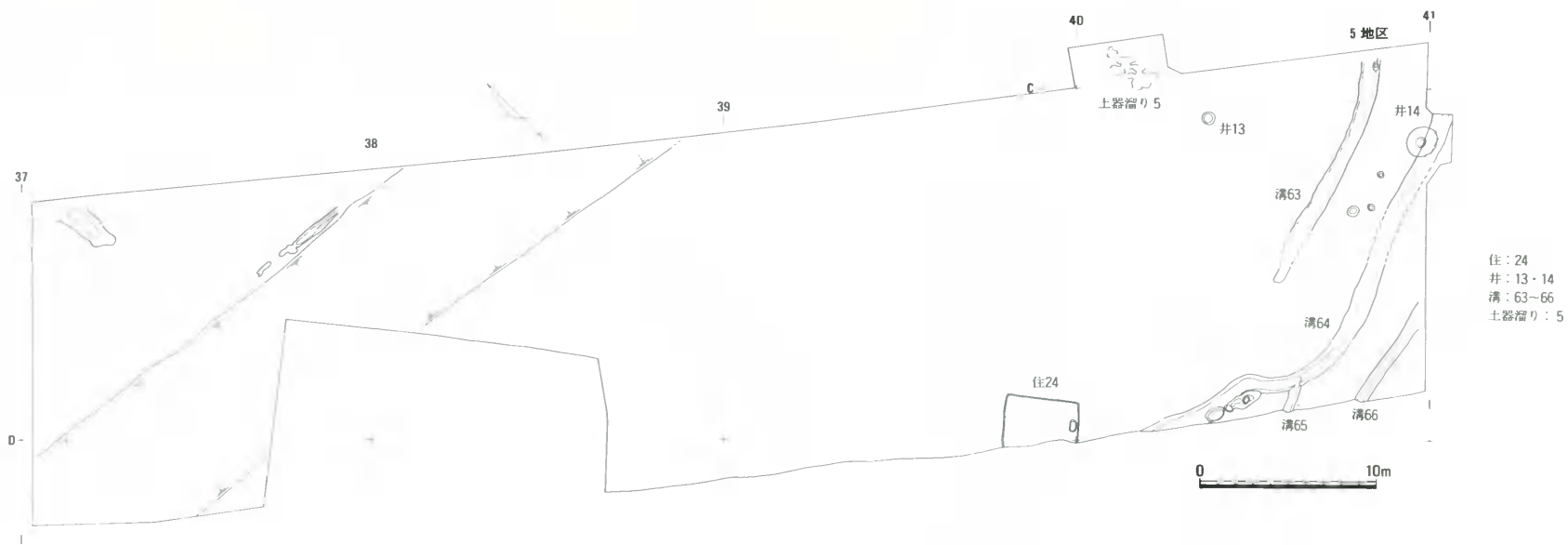
竪穴住居24の東北東約18mの位置に検出した。平面形は円形を呈するもので、直径71cmを測る。井戸の壁は垂直に近い立上がりを見せており、断面は逆台形を呈している。検出面からの深さは71cmを測る。底面は平坦で、円形を呈している。底面の直径は50cmを測る。底面の海抜高は215cmである。底面の直上で土圧でつぶれた状態の一個体分の甕を検出した。甕の口縁部外面には多条の沈線が施され、内面の上半はヘラケズリ、下半はヘラケズリと指頭圧痕が見られる。井戸の時期は百・古・1と考えられる。(井上)



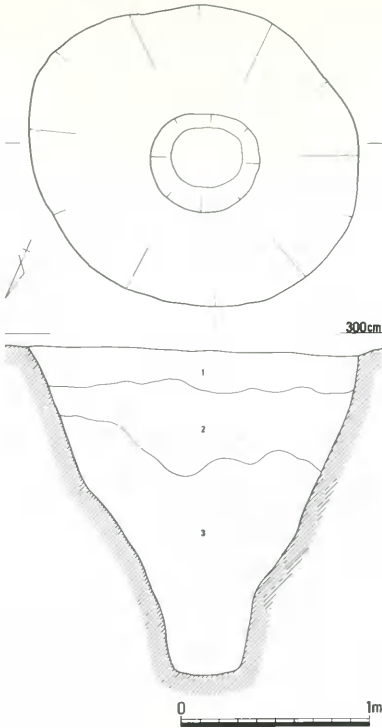
第335図 井戸13、同出土遺物



第336図 対象調査区位置および周辺遺構配置(古墳時代、1/1000)

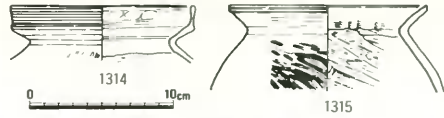


第337図 37~40区遺構配置(古墳時代)



- 1. 黄灰白色微砂
- 2. 灰色粘質微砂(炭・黄色土ブロック含)
- 3. 暗灰色粘質土(炭粒含)

第338図 井戸14、同出土遺物



井戸14 (第337・338図)

井戸13の南東約11mの位置に検出した。検出面の平面形は東西に少し長い長円形を呈しており、長径181cm、短径161cmを測る。検出面からの深さは172cmを測る。井戸の断面は、底面から約40cmまではほぼ垂直に立ち上がる。その部分からは大きく開きながら立ち上がるもので、V字に近い形状を呈している。底面は平坦で、東西に長い長円形を呈しており、長径38cm、短径32cmを測る。底面の海拔高は120cmである。井戸からは土器片が出土しており百・古・1と考えられる物であり、井戸の時期も同じと考えられる。(井上)

(3) 溝

溝63 (第337・339図、図版42-5)

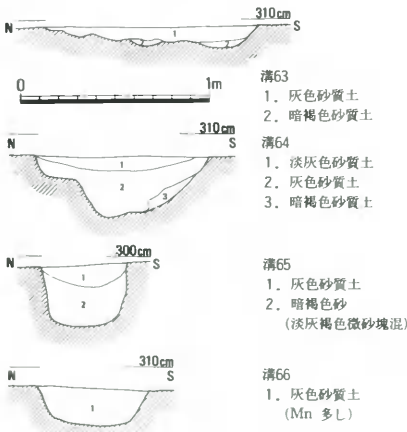
調査区の南東端部に近い位置に検出した。北東から南西方向を向くもので、少し弓なりの状態に曲がっている。溝の断面は浅い皿状を呈しており、底面は緩やかな凹凸が認められる。検出した溝の幅は112cm、検出面からの深さ12cmを測るもので、全長約13mを調査した。(井上)

溝64 (第337・339図、図版42-5)

溝63の南約3mの位置にはほぼ平行する状態で検出した。東端では井戸14を切るもので、南西方向に弧状に曲がる状態で検出した。溝の断面は碗状を呈しており、底面は僅かに丸い。検出した溝の幅は91cm、検出面からの深さ31cmを測る。溝は全長約25mを調査した。(井上)

溝65 (第337・339図、図版42-5)

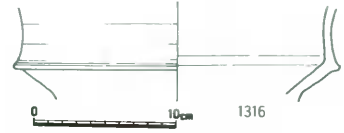
溝64の南西端部に近い部分に枝状に分岐する状態で検出した。調査区境に近い事もあって調査した全長は約2mである。溝の断面形はU字形を呈するものである。検出した溝の幅は44cm、検出面からの深さ32cmを測る。(井上)



第339図 溝63・64・65・66 断面

溝66（第337・339・340図）

溝64の南約2mの位置にはほぼ平行する状態で検出した。南から西に向けて直線的に検出した。断面形は逆台形的であるが、底面は少し丸く窪むものである。検出した溝の幅は58cm、検出面からの深さ30cmを測る。溝は全長約7mを調査した。（井上）



第340図 溝66 出土遺物

(4) 土器溜り

土器溜り5（第337図）

調査区の東部、井戸13の北約3mの位置に検出した。調査区境の側溝の掘り下げ中に製塩炉の一部を発見したため、その全体を調査するため北側に調査区を拡張した。その拡張部分の掘り下げ中に検出したものである。南北に細長い状態に土器が出上したもので、長さ約3m、幅約1.2mを測る範囲に土器を検出したものである。土器は厚く堆積するものではなく薄く平面的な状況を呈していた。しかし、そこに何等かの遺構の存在する事も考えて調査したがそのような兆候はまったく認められなかった。出土した土器は百・古・Iに属するものと考えられるものである。（井上）

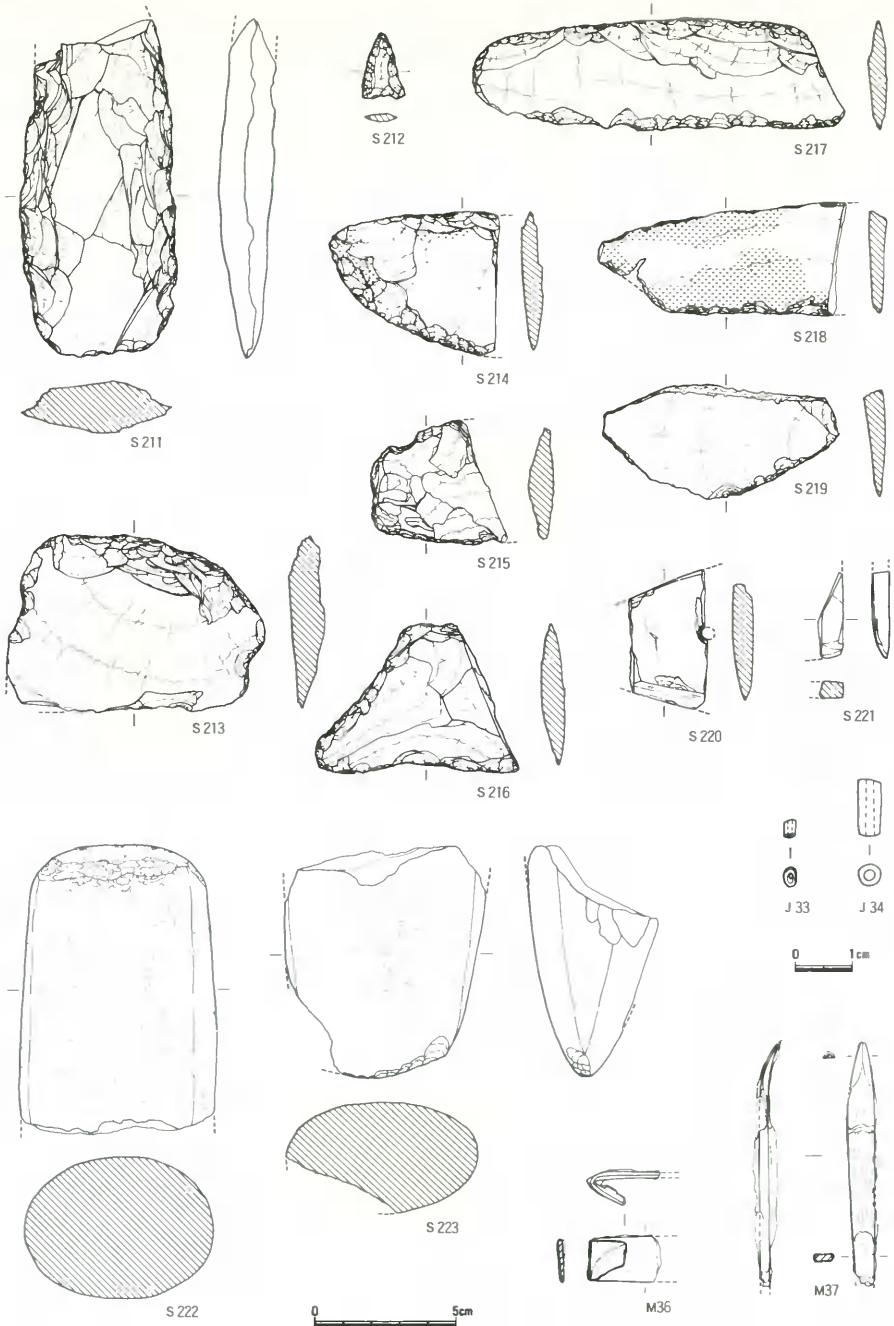
6. その他の遺構および包含層の遺物

S211は打製の石斧状の石器である。全体の形状は短冊形を呈するものと考えられるが、上端を欠損しているため全長は不明である。残存長約12cm、幅5.4cmを測る。S213は打製の石包丁である。両側に僅かであるが抉り込みが見られる。ほぼ完形品で、長さ9.2cm、幅6.1cmを測る。S214も石包丁と考えられる石器である。背部は比較的直線的で刃部は弧を描く。半分以上を欠くと考えられるものである。S215も石包丁である。背部は少し弧を描き、刃部は直線的である。側面に抉り込みが見られる。S216はスクレーパーと考えられるものである。ほぼ完形品であり長さ7cm、幅5cmを測る。S217は楔形石器と考えられるものである。横に長く端部が丸い形状を呈しておりほぼ完形品である。石器の大きさは長さ13cm、幅3.8cmを測る。S218も楔形石器と考えられるものである。一部を欠失しているため全体については不明である。S219も楔形石器と考えられるものである。ほぼ完形品と考えられるもので長さ8.4cm、幅4.1cmを測る。S220は磨製の石包丁と考えられるものである。刃部は両刃に作られており、円孔の一部が残存している。S221は磨製の偏平片刃石斧と考えられるものである。小破片であるため全体の大きさなどは不明である。S222は磨製の太形蛤刃石斧の頭部である。刃部を欠くため全体の大きさは不明である。S223は同じく磨製の石斧の刃部である。刃部に刃こぼれを示すような欠損が見られる。頭部を欠くためこれも全体の大きさは不明である。

J33は管玉である。一部を欠くものと考えられるため全長は不明であるが、直径は6mm程度と考えられる。水田の畦畔の検出中に畦畔の上面から出土したものである。J34も管玉である。J33に比べてやや大きく、長さ20mm、直径8mmを測る。

M36は鉄製の鋤先と考えられるものの一部である。元は鉄板の両側を折り曲げて装着する部分を造るものである。古墳時代初頭の包含層から出土した。M37は鉋である。少し反り返った刃部と一部に木質も残存している。古墳時代初頭の土器と相伴している遺物である。（第341図、図版71）（井上）





第34図 包含層等 出土遺物

## 第3節 小 結

第1・2節で各調査区の個々の遺構についての概要を記述してきたが、この節では特徴的な遺構・遺物や各時代ごとの遺構配置の特徴などを取り上げ、検討してみたい。ただし、本報告書で取り扱った調査地区が大きく4箇所にわかれるため、とくに遺構については個々の調査地区単位ごとの検討にならざるを得ない。また、遺物の分析や同定、鑑定をいただいた報文については、この節で扱った。

なお、百間川原尾島遺跡の既調査報告分と本報告にかかる調査地区を加えると、低水路幅60mまでと橋梁や樋門などの関連施設部分の調査報告が一段落するため、百間川原尾島遺跡調査の全体的なまとめについては別に項を設け、第4章として扱っている。

### 1. 遺構について

縄文時代後期の遺構として、土器片の集積と焼土面が5調査地区の40C区（国道2号線原尾島橋の下流約40m付近）で確認されている。百間川遺跡群のこれまでの調査では、沢田遺跡や原尾島遺跡の弥生時代前期の基盤層上面に潜り込むように検出される縄文時代晩期の土器片の存在などから、旭川の沖積作用による三角州の形成とその安定化が、少なくとも縄文時代晩期に遡ることは十分予測されていた。調査範囲での縄文時代後期後葉の時期の土器片の分布状況からは、奇しくも発見の元となった弥生時代前期後葉の溝52や土壌89によって一部を削平されているため、全容をつかむことはできないが、土器片の分布範囲と同一面での焼土面の存在は住居址の存在を十分想定でき、短期的なキャンプ地として占地されていたとみられる。その後の百間川沢田遺跡の調査でも縄文時代後期後半の土器片の散布や貯蔵穴が確認され（百間川沢田遺跡3所収）、微高地上への進出が後期に遡ることが確実視されるに至っている。また、縄文時代晩期は遺構としては確認されず、4調査地区の旧河道の中・下層から弥生前期土器と混在した状態で晩期土器の出上をみているに過ぎない。

弥生時代前・中期の遺構は、確実なものとしては4・5調査地区でしか認められていない。4調査地区では前期と考えられる不整形な土壌数基と少数の小ピット、おもに中期前葉の時期の溝が10条ほど検出されたのみで、この時期の住居域とすれば遺構密度は低い。ただ、旧河道の肩部に近い微高地の端部を河道とほぼ平行して流走する溝群の存在は、中期前葉にこの下流域に水を配した水路の可能性が高く、溝の規模や溝底のレベルさらに切り合い関係などから、短期間に幾度となく水路改修が必要であった当時の自然環境がうかがい知れる。なお、この地区では中期後半の遺構・遺物は認められていない。

5調査地区では、微高地部分に前期後葉から中期中葉の土器を伴う多数の土壌、前期後葉の溝2条や堅穴住居3軒などが検出されていて、とくに前期後葉の時期の遺構が圧倒的に多い。土壌の分布状況は、前期が微高地全体に認められるのに対して中期は微高地の西の端部にかたまっ占地されている。前期の遺構は多少の切り合い関係が認められるものの、ほぼ百・前・Ⅲの時期の比較的短期間の集落構成の一部を示していると思われる。遺構のうち土壌については、規模・平面および断面形態・深さ・主軸の方位・遺物の有無や破損の程度・同種遺構の位置関係などから、柱穴・貯蔵穴・土壌墓・ごみ穴などの機能が考えられる。ここではとくに土壌墓を取り上げてみると、長方形または隅丸長方形の平面形態を呈し主軸をほぼ南北方向に揃え、底面も比較的平らな土壌67・69・79・80がまず

候補に挙がる。ほかに多少不整長方形あるいは不整楕円形で断面船底形なども含めると、土壙63・64・70～72・74・78・88・91なども土壙墓の可能性がある。それらの位置関係をみると、竪穴住居21～23を避けた北側と東側に占地され、それぞれが適当な間隔を保って存在していることが看取される。またちなみに断面が袋状を呈すなど貯蔵穴の可能性が高い土壙は、81・82・86・92・95・97・98などと思われる。なお、この地区でも中期後半の遺構は皆無であった。

弥生時代後期では2・3調査区に遺構が集中している。この地区の竪穴住居は7軒確認されているが、住2・3（Ⅰ期）→住1（Ⅰ～Ⅱ期）→住4～7（Ⅲ期）の新旧関係が捉えられる。そして、とくに後・Ⅲ期の住4・5・7は、ともに焼失住居であることや住7を含めて後・Ⅱ～Ⅲの時期に形成されたと思われる土器溜り1を中心にして10～15m間隔で弧状に占地されていることなどから、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。後・Ⅲ期の他の遺構は、建物3・5・6、井戸4、貯蔵穴と考えられる土壙10～13などがある。また、後・ⅡとⅣ期の竪穴住居は調査地区内では確認されていないが、前者では井戸3、土壙24・25・27・29～31など3調査地区の北東部に、後者は井戸5・6、土壙17～22など2調査地区の南西部に比較的偏って認められる。これらは周辺遺構配置と関連が強いためこの微高地全体で検討する必要があり、第4章のまとめでふれたい。

4調査地区は、後期には10本の水路が集中して存在する。そのうち溝15～18は水田層下で検出（第144図断面）されている。いっぽう、微高地上の溝20・21・23がそれぞれ上部に洪水砂で埋没した水路1・2・3を伴い（第146・151図）、水路が洪水砂埋没水田1と同時存在（廃絶）であることから水路として踏襲された溝20・21・23は水田1の開始期とも一致する可能性が高い。とすれば、水田1の開田は溝20の出土土器から後・Ⅱのある時期に求められ、同時にその時の開田によってあるいはそれ以前に、溝15～18と溝20に切られる溝19が廃絶したと考えられる。また、この地区では後期末水田の調査は狭い範囲であったが、幹線水路から直接的に水田へ配水する一形態を捉えることができた。

後期の5調査地区は、微高地上の遺構とその縁辺の水田の一部が検出されている。この微高地は井戸・土壙・土器溜り・製塩炉各1と溝数本しかなく、溝62を踏襲している水路4を除いて、それも後・Ⅰ～Ⅱの時期に限られる。このため、この時期の居住の中心は調査区の北東部に想定され、居住区のはずれで製塩作業が行われていたとみられる。いっぽう、水田2・3と水路4との関係は4調査地区の水田1と水路1などの関係と同様であり、この微高地周辺の開田も溝61・62が機能してのちの後・Ⅱのある時期と思われる。そして、溝60は溝61・62以前のこの地区の幹線水路で後・Ⅰ期、溝54～59は開田の各段階での微高地と接する部分の痕跡で後・Ⅱ～Ⅲ期とみてよい。また、この地区でも微高地上の幹線水路から水田域の畝畝（2本の畦畔あるいは農道に挟まれた部分を水路とする施設）に通水し、その両側の各水田に配水する形態が、百間川沢田遺跡に続いて捉えられている。

古墳時代では、2・3調査地区は弥生時代後期と比べれば遺構密度は少ないものの、竪穴住居や井戸などの遺構が比較的まとまって見つかっている。時期的には古・Ⅰ、5世紀末～6世紀初頭、6世紀後半の3時期に大別される。古・Ⅰ期には、井戸7～9のほかには確認できていない。竪穴住居は11・14・15が中間期、同12・13・17が新期に属すが、同16・20のように両者の時期にまたがる遺物を出土するものもある。切り合い関係や位置関係からすれば16は新期に属すと思われるが、16・17・20などは近接し過ぎているため、存在時期には多少のずれがあろう。4調査区では4棟の建物や大溝29などが確認されているが、遺構密度は低い。そのうち建物12は周囲に溝を繞らせ、棟持ち柱を持つ可能性がある掘立柱建物で、通常の建物と違いを見せている。溝29は弥生時代後期末の微高地の端部に

添って、後期水田の一部を掘り込んで敷設されており、古・Ⅰ～Ⅵ世紀末まで長期間機能していた可能性が高く、その間の出土遺物も大量に出土し、なかでも5世紀末～6世紀前半の遺物が多いところから、この周辺のとくに北および北東の微高地上には古墳時代後期前半を中心とする比較的大きな居住区の存在が想定される。5調査地区の古墳時代の遺構は、竪穴住居1軒、井戸2基、溝4本などに過ぎず、時期も古・Ⅰ期に限られ、それ以降はとくに集落としては利用されていない。古・Ⅰの土器溜りが調査区の北東端に位置するところから、この時期の居住区の中心は北東側に求められよう。

古代の遺構では唯一、4調査地区で検出された奈良時代から平安時代初頭の時期の溝35がある。この溝の河床には落ち込みや井堰などの施設が確認され、その周辺から須恵器・土師器とともに石製品・金属製品・木製品・土製品・獣骨など多数の遺物が出土している。

なお、この遺構についてはやや詳しく第4章第3節で扱う。

中世の遺構は、1～4調査地区で検出されている。1調査地区は中世の土壌が1基存在するのみで、中世での微高地の範囲とその端部をおさえるにとどまった。2・3調査地区では全体的に遺構密度は薄いものの条里区画の一部と思われる溝39、建物群(13～18)と土壙墓群(1～7)が比較的集中して捉えられている。溝39と土壙墓1～4については出土遺物から鎌倉時代前半であり、ほぼ同じ時期に存在した可能性が高い。とくに建物は遺物を伴っていないため、柱穴の大きさや埋土の色調・主軸の方向などから中世のなかで扱ったもので、これらの時期の特定や建物の構成については周辺の同類遺構を含めての検討を、第4章第4節で加える。4調査地区では北西半に建物群と土壙墓・井戸、南東半に溝群が認められたが、出土土器から時期の特定できる遺構は、鎌倉時代中期頃の溝44・47と室町時代後半にかかる井戸11くらいしかない。位置関係からいえば、建物群の時期は井戸により近い時期が想定されるが、これも周辺の同類遺構を含めて検討する必要がある、第4章に譲る。

## 2. 遺物について

本報告書の整理対象になった遺物は、整理箱にして550箱を越える。第3章ではとくに遺物については遺構との関係の記述に重点を置いたため、個々は概略的にしかふれていない新資料も多い。そこで、この項ではそれらのうちからいくつかを取り上げ、やや詳しく説明を加えたい。

縄文時代では、後期後葉と晩期中～後葉の土器を得ている。とくに後期の土器は百間川原尾島遺跡では初見であり、かつ比較的まとまったブロックを形成する一群である。整理の結果接合の及ばない胴部の小破片も多いが、第251図に提示した土器は個体数および器種構成をほぼ満たしている。器種は深鉢(1027～1030・1036～1038)、鉢(1031)、浅鉢(1032～1035)、深鉢または鉢(1039・1040)がある。器種の組成比率は、口縁部1032・1033が1034・1035と接合する可能性があることと個体の絶対数が少ないため、正確に捉えるには少し無理があるが、深鉢とその他の鉢は7：3～2：1くらいの割合と思われる。外面の調整は、口縁部と一部胴部外面に巻貝による凹線文と扇状圧痕文が多くに施され、一部に巻貝条痕を顕著に残すものもある。これらの特徴は、総社市南溝手遺跡(註1)の縄文時代後期後葉の一群と同様、瀬戸内編年の福田Ⅲ式の範疇で捉えられるが、キザミメがなく凹線文内の条痕をそのまま残して扇状圧痕文を多用するなど、後葉のなかでも比較的新しい様相がうかがわれる。

弥生時代前期では、旧河道出土の赤色・黒色顔料が塗布された壺48～55、壺形木製品W4や翡翠製の勾玉J1、それに土壙出土の磨製石鏃S40や重なった状態で出土した石包丁群S178～S183などが注目さ

れる。そのなかで、とくに磨製石鏃は県下では初出土であり、大陸系磨製石器の展開を考えるうえでの意味は大きい。この種の石鏃は形態的には有茎柳葉形に分類され、突帯文期に北部九州に伝来のもの板付Ⅱ式期まで、その他の分布地域では中期初め頃まで認められ、時期が降るほどシャープさに欠けて退化が顕著になることが指摘されている（註2）。S40は茎の大半を欠損しているものの、現存長14.7cmを測り大形の部類に入る。鏃は切っ先から茎の欠損部分まで直線的に認められ、身の横断面も比較的厚めの菱形を呈すが、刃部の曲線化や関の撫で肩化などに退化の傾向も看取される。時期は伴出土器片や周辺の土壌の時期から、百・前・Ⅱ期つまり前期中葉とみて大差ない。分布は現在までに日本海側が京都府青野遺跡（註3）、瀬戸内が香川県下川津遺跡（註4）、南海側が高知県田村遺跡（註5）を東限としており、今回の発見により瀬戸内の山陽側の東限を加えたことになる。

弥生時代後期では、堅穴住居内に土器以外にも鈿・鉄鏃などの鉄器やガラス小玉（付載2参照）・管玉（付載3参照）などの玉類、刻骨などの骨製品（ニホンジカ、付載6参照）を伴う例も増え、とくに時期的には最後の石器工房址と思われる堅穴住居2から出土した鈿の存在は、鉄器普及の一端をうかがわせる。土器では、井戸と土壌の一部に完形を多く含む比較的良好な一括資料を得ている。例えば、Ⅰ期は高杯を欠くが井戸Ⅰ・2と土壌16、Ⅱ期は井戸3と土壌29、Ⅲ期は土壌33、Ⅳ～Ⅴ期は井戸4、Ⅳ期は井戸6と土壌18・20～22などがある。個々の土器についていえば、山陰系の甕240・245や讃岐系の甕280・460・461・465は、それぞれの地域との並行時期を捉え得る資料となろう。

また、特殊遺物に器の内面に水銀朱（付載5参照）が付着した把手付きの片口容器139がある。第43図に示した部分以外には、同一個体と思われる小片が3片あるのみで、口径や傾きから図のような復元形態を得た。大きさは、いずれも復元推定で片口径13cm、内法長さ22～23cm、内法最大幅15.6cm、最大高7.5cm前後を測る。製作の方法は、甕の頸部下の中央を縦に半切し、片方を利用して元の口縁部を片口部に、切断面を口縁部にして把手を加えたと思われる。把手は、器のほぼ中央の口縁部から下に半楕円形に盛り上げた形に貼り付けられ、口縁上端面から上部は欠損している。水銀朱の付着は内面から口縁端面にかけて認められるが、把手の位置の口縁端面には及んでいないことから、上部に把手が延びることはまちがいない。とすれば、対面する口縁間をアーチ状に繋げた弦状の把手であった可能性が高い。また、外面にはほぼ全面に煤が認められ、火にかけてつまり加熱を目的として使用されたことも疑いない。調整は、外面には粗いハケメのち片口端部の約4cm幅にていねいなヨコナデ、内面は片口端の一部を除き細いヘラミガキを密に施している。

朱付着遺物としては、百間川原尾島遺跡でも百・後・Ⅱの鉢2点と同Ⅱ～Ⅲの石杵1点が確認されており、土器の形態は通常の鉢ながら、「精製された朱の使用に係わる過程で用いられた道具の一つ」と考えられている（註6）。今回出土の139は、形態以外の特徴はこれらの鉢とはほぼ共通する。形態的にも類似する例として、福岡県辻垣遺跡出土の広片口三耳鉢（註7）がある。この種の鉢は、これまで徳島県東遺跡（註8）などで断片的に知られるに過ぎなかったが、この鉢によって唯一全形が明らかになり、注目される。比較のため第342図に両者を載せた。口縁部や把手の形態などの細部に相違が認められるものの、短頸の壺または甕を縦割りにして使用する製作の方法は共通している。内面の朱はもとより、外面の煤付着も類似しており、現時点では具体的な用途を即断できないものの、共通の目的をもった朱に関する専用容器であることは間違いない。また、辻垣遺跡ではほかにも同種土器が3個体前後、壺・甕・鉢を利用した朱付着土器が15個体前後出土していて、後者の土器は瀬戸内系とみられ、この遺跡がとくに朱の流通の瀬戸内各地間の交流拠点であったと位置付けている。ただ、

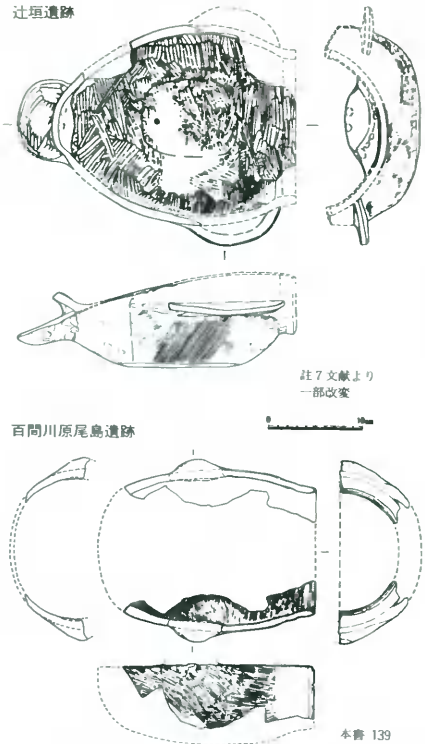
朱附着土器は在地での共伴関係では後期中頃とされているが中部瀬戸内編年では後期前葉であり、多少のズレがある。百間川原尾島遺跡では、今のところ百・後・Ⅱ期を中心とする時期しか確認されていない。

朱専用と思われる広片口鉢は吉備地方では初見であり、朱附着鉢の点数も少ない。現時点では、広片口鉢と朱附着鉢の1個体それに石杵が同一微高地の50m範囲内に存在し、ほぼ同時期で朱を介在にする共通点をもつこと、朱は精製された朱が附着していること、鉢の底部内面に磨耗痕跡（これは朱鉢に転用前か後かの判定はつきにくい）が認められること、鉢の外表面には煤が附着しているため加熱する目的があったことなどが捉えられるに過ぎない。

具体的な用途については、今少し資料の蓄積を待つ必要がある。

古墳時代では、百・古・Ⅰ期の型式を比較的良好に示す井戸9出土の一括土器がある。これは、備中地域の下田所式（註9）と呼称した一群にはほぼ併行する。ほかに井戸7・8の出土土器も同時期とみてよいが、井戸7の甕780は口縁部外面にヘラガキの平行線文を4～5条繞らせる雄町12類（註10）・オの町Ⅱ式（註9）の特徴であり、他のクシガキ沈線甕の一群よりⅠ型式古い、百・後・Ⅳ期の新相である。この甕は、百間川原尾島遺跡の水田面に密着し、洪水砂に埋没した状態で検出された甕などと同類であることから、弥生後期水田の廃絶時期を示す資料の一つとみている。

5～6世紀の遺物は、堅穴住居やとくに4調査地区の溝29で多く出土している。そのうち、溝29出土の子持勾玉J17は県内でも出土例が少なく、管見の限りでは勝栗町植月東（註11）、総社市大文字遺跡（註12）などに知られるのみである。植月東例は、低丘陵を開墾中に大石の下の空洞から出土したといわれ、上質の緑泥片岩製の全長12.5cmを測る完形の大型品である。胴部の断面はほぼ円形に近い。子勾玉は腹・背・側に計20個を配し、5世紀中頃の時期が与えられている。大文字例は、堅穴住居の埋土から出土したもので、緑色片岩製の全長10.6cmを測る完形品である。あまり精巧な作りではない。子勾玉は計11個持ち、時期は住居の共伴の須恵器から6世紀後半頃が当てられている。J17は滑石製で全長約8.9cm、断面は長楕円形を呈している。子勾玉は計11個を配し、さらに本体と子の一部に計74個（うち2個は欠損部分の推定を含む）の小円圈文を施している。全体の形は比較的整っている。J17は溝からの出土であるため、時期の確定は難しいものの、とくに子勾玉が台形状の突起になり断面も長楕円を呈すなど、形態的にはわずかに形骸化・退化を示すことから、少なくとも前者よりも



第342図 広片口鉢の比較(1/6)

後出であり、6世紀初めくらいを考えておきたい。

古代の遺物が溝35から多く出土していることは前述したが、そのうち「家」・「酒」・「下」・「大」などの墨書土器(929・935・942・948)や石製巡方S98、人形・斎串・刀形(W22~30・33・34)などの木製品や刀子・鎌(M7・M9~11)などの金属製品は、それぞれ官人層の存在や律令的祭祀との関連性を指摘できる。

中世は土墳墓に注目される遺物が多い。とくに、3調査地区の土墳墓3は副葬品に中国製青磁碗・皿(968・969)さらに湖州鏡M13をもち、土墳墓4は中国製白磁碗(970・971)・同皿(972~975)をもつ。いずれも完形である。百間川遺跡群のなかでも、これだけ副葬品の量・質がそろった土墳墓は見つかっていない。これらの磁器の年代は、太宰府の型式分類(註13)に従えば、青磁碗は龍泉窯系のI-2・b類と同皿は同安窯系のI-1・b類、白磁碗970はN-1類と同971はV-1+2類、白磁皿はいずれもⅢ類にあたる。いっぽう、邑久町助三畑遺跡(註14)では、井戸の一括遺物の中に「養和元年(1181年)」の紀年銘をもつ題籤があり、共伴する陶磁器を同様に型式分類したうえで12世紀末にあて、同時に井戸の埋没年代にしている。ただ、共伴する在地の土師質碗や瓦器碗は13世紀前半と思われ、埋没年代を13世紀前半に降らせても陶磁器の使用年代に不都合はない。本土墳墓出土の磁器類は、その初現は助三畑遺跡のそれらと大差がないと思われる。土墳墓は在地土器などの共伴がないため、副葬された時期を確定できないが、近接する溝39出土の磁器と土師質土器など(第235・236図)の共伴関係から13世紀前半と考えられる。(柳瀬)

## 註

- 註1 平井泰男他「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年
- 註2 下条信行「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要』第31号 九州大学九州文化史研究施設 1986年  
下条信行「島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州」『西川津遺跡発掘調査報告書』V 島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1989年
- 註3 「青野遺跡A地点発掘調査報告書」『綾部市文化財調査報告』第2集 青野遺跡報告書刊行会 1976年
- 註4 「下川津遺跡Ⅱ」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』(Ⅷ) 香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団 1987年
- 註5 『田村遺跡群』第2分冊 高知県教育委員会 1986年
- 註6 平井 勝「弥生土器について—内面朱付着土器—」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』97 p.p.250~251 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1995年
- 註7 柳田康雄「辻垣島田・長通遺跡」『椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会 1994年
- 註8 「名東遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.4 1992年度 徳島県埋蔵文化財センター 1993年
- 註9 柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年
- 註10 正岡陸夫他「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1969年
- 註11 今井 堯「美作勝央町植月東出土の子持勾玉」『古代吉備』第6集 古代吉備研究会 1969年
- 註12 前角和夫「前川地区は場整備事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 1994年
- 註13 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年
- 註14 馬場昌一「岡山県助三畑遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.4 日本貿易陶磁研究会 1984年

## 付載 1 百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

### 1. はじめに

この胎土分析では、原尾島遺跡の三股ヶ・丸田調査区、三ノ坪・横田調査区から出土した土器を分析し、以下の点について検討した。

- (1) 原尾島遺跡出土土器（三股ヶ・丸田調査区、三ノ坪・横田調査区）のなかで、古墳時代初頭の時期の土器の間で器種により分析値に違いがみられるかどうか。また、同遺跡で現在までに分析し蓄積<sup>(1)</sup>した資料と比較し検討する。そして、岡山県南部の足守川地域の足守加茂A・B遺跡、矢部南向遺跡<sup>(2)</sup>と讃岐地方<sup>(3)</sup>の資料との比較検討。
- (2) 原尾島遺跡出土土器のうち5世紀末から6世紀代の土師器の資料と同遺跡の時期の異なる土器の間で、胎土に差がみられるかどうか。

### 2. 分析方法および結果

分析方法は、波長分散型蛍光X線分析装置を使用して、測定資料の方法・条件・試料の調整などは現在までおこなっている方法である。

分析資料は表の72点の土器である。時期は、弥生時代中期前半から6世紀代の壺・甕・高杯・鉢・製塩土器である。

分析の結果、原尾島遺跡出土土器のうち古墳時代初頭の土器43点について、器種の違いにより胎土に差がみられるかでは、第1図K<sub>2</sub>O-CaO・第2図Sr-Rbの各散布図から、器種ごとに胎土に差はみられなかった。ただ、壺（資料番号22、41）、甕（4、26、27、29、30、42）のグループと甕（5、8）とその他のグループの3つに大きく別れた。また、今回分析した原尾島遺跡で時期の異なる土器の間での胎土分析値に違いがあるかどうかでも、ほとんど差はみられなかった。しかし、第3図K<sub>2</sub>O-CaO・第4図Sr-Rbから弥生時代後期末の甕（55、64、65）3点が同じ時期の甕と区別され、別のグループをつくった。また、5世紀末から6世紀の甕（46、47、49）3点も別のグループをつくった。

次に、原尾島遺跡内で、1994年度<sup>(4)</sup>に分析した弥生時代後期前半から後半にかけての51点の土器との比較をおこなった。この結果、第5図K<sub>2</sub>O-CaO・第6図Sr-Rbの散布図から今回分析した古墳時代初頭の甕（5、8）と弥生時代後期末の甕（55、64、65）の5点が1994年度分析の讃岐系土器の領域と重なった。

また、現在まで蓄積している吉備・讃岐両地方の土器との比較では、第3図から5、8、55、64、65が讃岐（高松平野から西部地域）の領域に入った。ただ、第4図の散布図では、これらはどの領域にも入らなかった。

古墳時代初頭の4、22、26、27、29、30、41、42の甕および壺は足守川A・Bおよび矢部南向遺跡の領域にプロットされ、71、72の弥生時代中期前半の壺は、吉備地方の領域に入らず、讃岐西部の領域に入った。また、5世紀末から6世紀代の46、47、49の甕3点がどの領域にも入らず一つのグルー



プをつくった。

### 3. まとめ

原尾島遺跡（三股ヶ・丸田調査区および三ノ坪・横田調査区）出土の弥生時代中期前半から6世紀代の土器の胎土分析をし、新たに確認・推測できたことを述べまとめとする。

- (1) 古墳時代初頭の壺(22, 41)・甕(4, 26, 27, 30, 42)の7点が他の原尾島遺跡出土土器とは別のグループをつくり、足守川流域の領域に分布した。このことより、これらの土器は、吉備地方で生産されている「ボウフラ」などに使用されている胎土と類似する。

また、弥生時代後期末の甕(55, 64, 65)と古墳時代初頭(5, 8)の5点の土器がほぼまつまり $K_2O-CaO$ の散布図では讃岐地方の高松平野部から西部地域の領域に入ったが、 $Sr-Rb$ の散布図では、どの領域にも入らなかった。このように現段階では、分析値が完全に讃岐地方と一致しておらず、讃岐地方でも地域の異なるところからの搬入とも考えられるが、現段階の資料の蓄積からはこれ以上の推測はできない。

- (2) 5世紀末から6世紀代の甕10点のうち46, 47, 49の3点が他の甕と異なり、別のグループをなし吉備地方の領域にも入らなかった。このように、この時期の土器にも胎土の異なるものがあることがわかった。

弥生時代中期前半の壺(71, 72)2点は形態・技法的に非在地産と考えられており、胎土の分析値でも吉備領域に入らなかったが、讃岐西部地域の領域に入った。このことから讃岐系とするには余りにも短絡すぎると考えられ、現段階ではこの土器に関して胎土分析からは、はっきりしない。今後この時期の資料を蓄積し改めて比較検討する必要がある。

以上のように、今回の分析で確認できたことを述べたが、比較資料の面でまだまだ不足しており、推測の域をでない分析結果となってしまった。

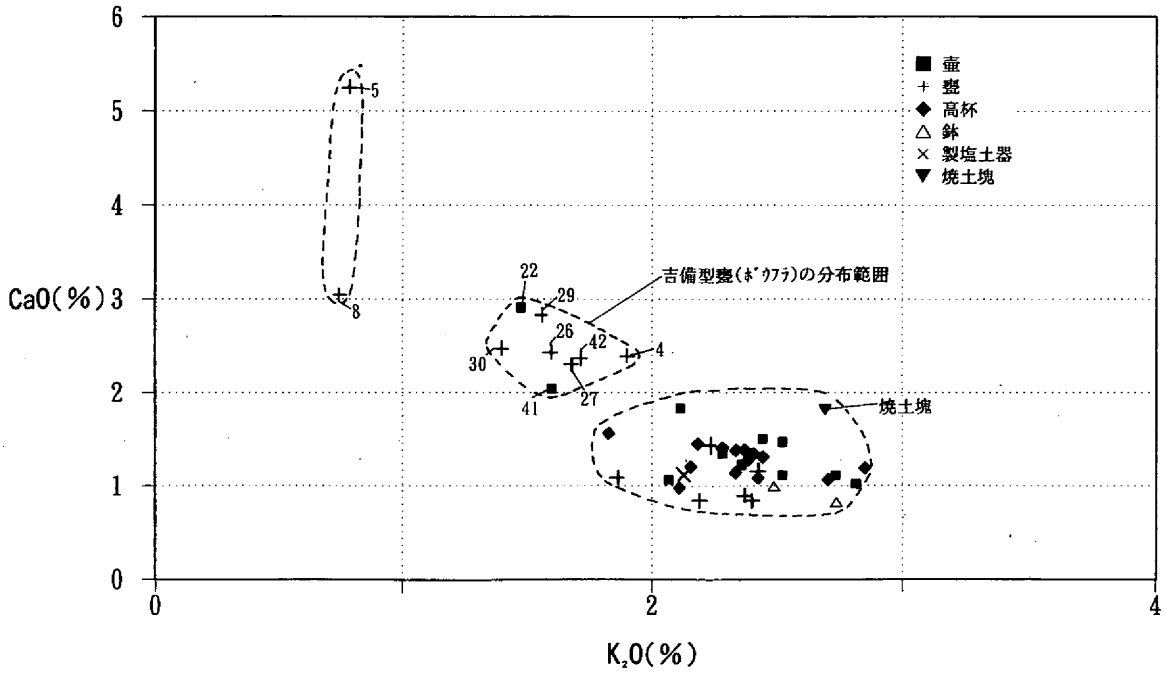
この分析をおこなうにあたり、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

### 註

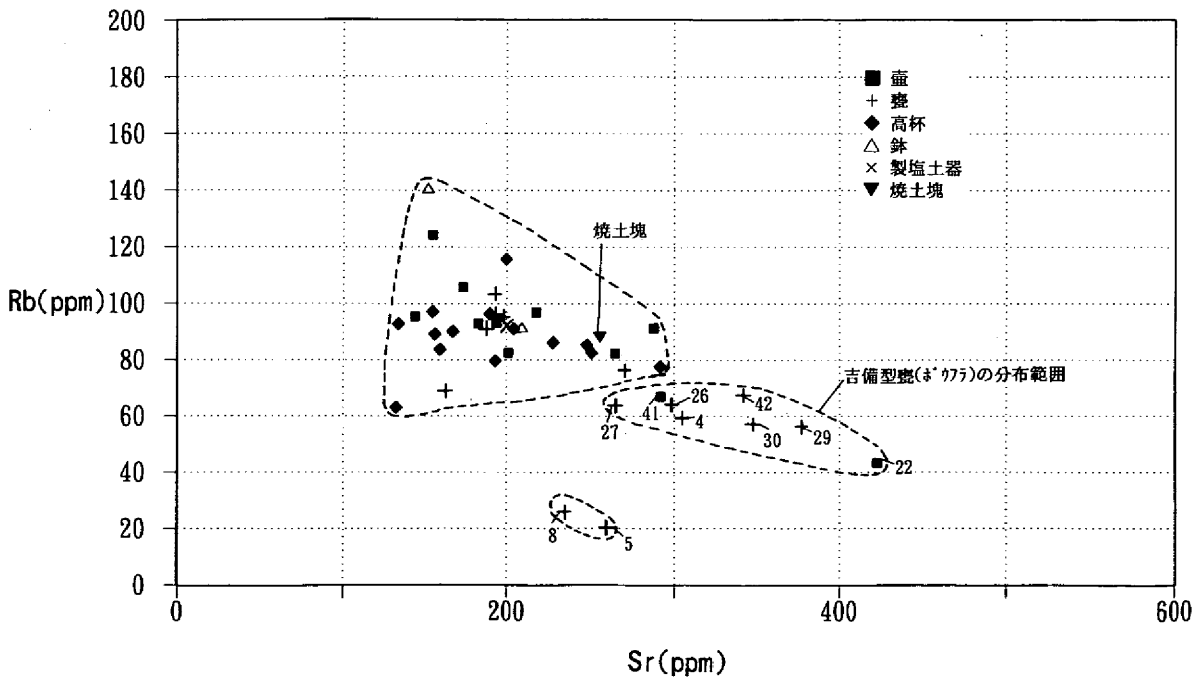
- (1) 白石 純「百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾島遺跡4』岡山県教育委員会 1995. 3.
- (2) 白石 純「足守川加茂A・B遺跡、足守川矢部南向遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会 1995. 3.
- (3) 白石 純「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊上天神遺跡(第2分冊)』香川県教育委員会 1996. 3.
- (4) 註(1)

第 1 表 百間川原尾島遺跡出土土器胎土分析一覽表 (%) ただしSr・Rbはppm

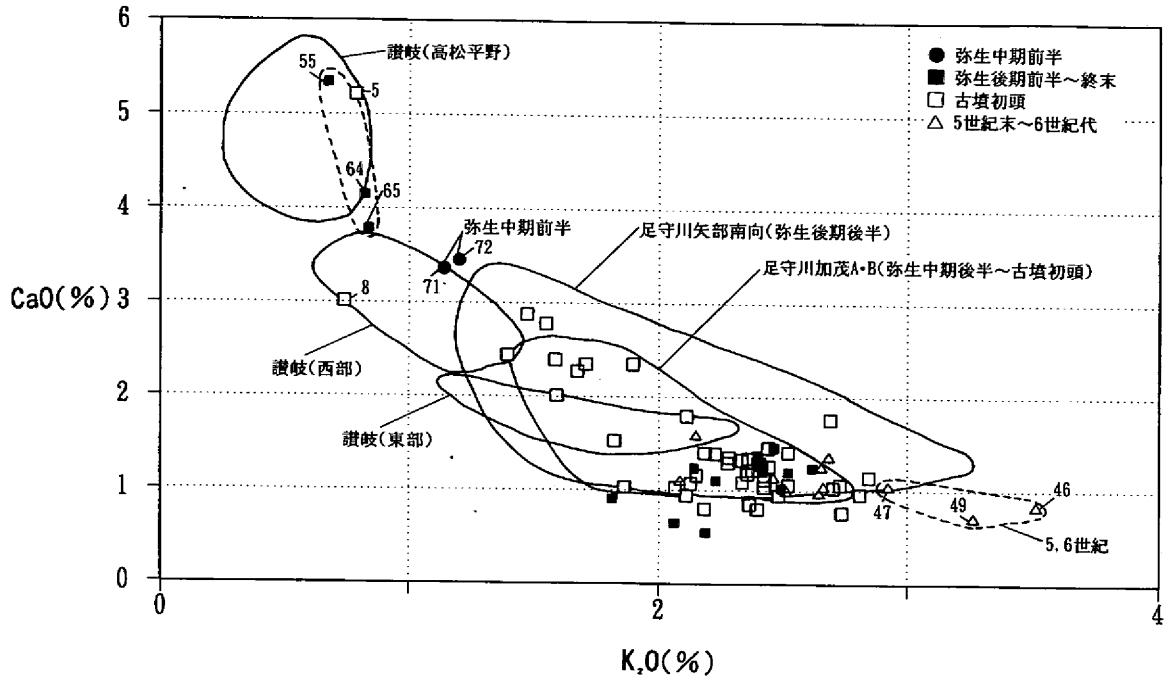
資料番号	出土地区	出土遺構	器種(部位)	時代・時期	K <sub>2</sub> O	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	TiO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	Sr	Rb
1	9C	井戸 8	壺(口縁)	百・古・I	2.11	5.43	64.03	0.75	19.14	1.79	1.35	264	81
2	"	"	鉢(口縁)	"	2.73	3.73	71.60	0.49	19.04	0.78	0.80	151	140
3	"	"	壺(頸部)	"	2.44	5.06	65.88	0.73	16.18	1.45	1.61	287	90
4	"	"	甕(口縁)	"	1.89	5.02	63.48	0.69	19.01	2.34	1.55	304	58
5	"	"	"(底部)	"	0.77	13.54	46.57	1.87	19.19	5.23	3.39	259	18
6	"	"	"(口縁)	"	2.18	3.16	74.49	0.61	13.99	0.80	0.75	192	95
7	"	"	"(口縁)	"	2.23	7.71	63.37	0.84	16.82	1.40	1.41	270	75
8	"	"	"(肩部)	"	0.73	12.54	54.65	1.66	23.53	3.02	2.70	234	24
9	"	"	高杯(口縁)	"	2.17	8.09	61.87	0.83	17.56	1.40	2.02	226	85
10	"	"	"(杯)	"	2.33	8.62	59.42	0.84	17.95	1.33	1.92	250	81
11	"	"	"(口縁)	"	2.42	8.22	66.29	0.91	19.41	1.05	2.37	159	83
12	"	"	"(脚端)	"	2.44	7.94	63.50	0.85	19.40	1.27	1.91	247	84
13	"	"	製塩土器	"	2.12	5.74	63.75	0.59	18.57	1.07	0.64	199	91
14	"	井戸 9	壺(口縁)	"	2.06	5.01	69.45	0.67	17.03	1.02	0.89	200	82
15	"	"	"(胴部)	"	2.73	3.80	69.26	0.56	16.51	1.07	0.66	216	96
16	"	"	鉢(口縁)	"	2.48	3.20	68.76	0.50	16.96	0.96	0.45	208	90
17	"	"	高杯(口縁)	"	1.82	6.68	64.86	0.87	18.64	1.53	2.29	291	76
18	"	"	"(口縁)	"	2.40	8.70	65.36	0.87	18.04	1.30	1.88	191	78
19	"	"	"(口縁)	"	2.85	8.11	64.50	0.93	19.95	1.15	2.37	155	88
20	"	"	"(杯)	"	2.71	6.70	65.57	0.60	18.38	1.04	0.75	199	115
21	"	"	焼土塊	"	2.68	6.16	64.61	0.78	17.17	1.76	2.58	254	86
22	40C	土器溜り 5	壺(口縁)	"	1.46	7.99	55.86	0.86	25.15	2.88	1.92	422	41
23	"	"	"(口縁)	"	2.81	3.53	67.20	0.65	19.28	0.97	0.68	153	123
24	"	"	"(口縁)	"	2.28	7.75	62.56	0.76	17.20	1.31	1.97	172	105
25	"	"	甕(口縁)	"	2.42	5.30	68.99	0.76	18.89	1.12	1.10	186	89
26	"	"	"(口縁)	"	1.58	6.74	60.23	0.79	21.58	2.39	1.27	298	62
27	"	"	"(口縁)	"	1.67	6.77	59.84	0.77	21.12	2.27	1.34	264	62
28	"	"	"(口縁)	"	1.85	4.16	69.09	0.77	18.91	1.02	0.68	162	67
29	"	"	"(口縁)	"	1.55	5.27	60.69	0.72	22.12	2.78	1.37	376	54
30	"	"	"(口縁)	"	1.39	6.79	58.07	0.79	22.54	2.43	1.03	347	55
31	"	"	高杯(脚柱)	"	2.10	9.23	59.86	1.05	20.95	0.94	1.54	132	62
32	"	"	"(脚柱)	"	2.15	11.54	60.35	0.86	19.04	1.16	1.54	132	92
33	"	"	"(脚端)	"	2.33	7.77	61.29	0.96	19.87	1.10	1.37	153	96
34	"	"	"(脚端)	"	2.27	6.18	66.89	0.86	17.70	1.36	1.62	188	95
35	"	"	"(脚端)	"	2.37	7.86	62.66	0.84	18.61	1.22	1.18	166	89
36	"	"	壺(胴)	"	2.51	4.06	65.12	0.69	19.83	1.06	0.41	142	94
37	"	"	"(胴)	"	2.51	7.90	58.08	0.93	20.39	1.42	1.28	181	92
38	"	"	甕(胴)	"	2.36	4.01	68.08	0.60	20.11	0.84	0.15	192	102
39	"	"	"(胴)	"	2.39	3.90	66.77	0.62	21.10	0.79	0.24	197	94
40	10B	(G-1土器溜り)	壺(口縁)	"	2.35	6.77	66.53	0.70	16.68	1.18	1.18	193	92
41	"	( " )	"(口縁)	"	1.59	6.24	60.84	0.69	22.81	2.01	1.49	291	65
42	"	( " )	甕(口縁)	"	1.70	6.40	61.45	0.74	20.43	2.33	1.45	341	66
43	"	( " )	高杯(口縁)	"	2.36	8.18	64.63	0.79	17.95	1.35	1.79	203	90
44	16C	溝29	甕(口縁)	5世紀末?	2.66	4.29	70.36	0.70	17.12	1.25	1.95	235	99
45	16CD	"	"(口縁)	"	2.65	6.17	69.53	0.77	17.81	0.97	1.84	143	93
46	"	"	"(口縁)	6世紀	3.53	2.33	75.36	0.54	16.65	0.82	0.54	146	140
47	16C	"	"(口縁)	"	2.93	2.22	68.86	0.56	21.69	1.02	0.58	175	143
48	16D	"	"(口縁)	"	2.51	3.20	69.38	0.59	20.24	1.00	0.77	225	114
49	16C	"	"(口縁)	"	3.27	3.63	69.28	0.46	18.84	0.71	0.20	145	159
50	16CD	"	"(口縁)	"	2.69	1.81	73.11	0.49	16.51	1.36	0.35	289	101
51	16D	"	"(口縁)	"	2.66	4.41	70.82	0.76	17.22	1.01	1.71	198	103
52	"	"	"(口縁)	"	2.46	5.70	65.30	0.74	16.82	1.13	1.49	217	91
53	"	"	"(口縁)	"	2.08	5.22	65.67	0.70	18.61	1.08	1.27	167	94
54	16CD	"	甕(口縁)	"	2.15	6.06	67.27	0.93	19.22	1.58	1.63	168	79
55	10C	(No151土塊)	甕(口縁)	百・後・IV	0.66	11.13	52.23	1.06	21.05	5.35	5.85	209	24
56	"	( " )	"(底)	"	2.40	6.08	65.84	0.76	16.63	1.38	1.63	226	79
57	"	( " )	"(肩)	"	2.06	5.04	73.53	0.69	18.09	0.64	1.22	108	94
58	"	( " )	"(胴)	"	2.47	6.07	65.20	0.81	17.68	1.46	1.58	253	79
59	"	( " )	"(肩)	"	1.81	4.26	61.90	0.61	21.25	0.91	0.75	177	86
60	11B	溝12	"(底)	"	2.44	7.35	65.56	0.76	17.71	1.20	1.78	171	89
61	10C	土器溜り 1	"(口縁)	"	2.53	4.28	71.48	0.70	16.55	1.19	0.95	226	91
62	"	"	"(口縁)	"	2.43	4.85	70.34	0.75	16.60	1.28	1.30	239	100
63	10B	(G-1側溝L:380)	"(胴)	"	2.42	5.16	70.84	1.53	16.80	1.26	1.03	214	93
64	10D	土塊 17	"(胴)	"	0.81	11.49	53.10	1.60	20.42	4.17	2.21	325	30
65	"	"	"(胴)	"	0.83	12.34	55.92	0.88	23.11	3.81	2.83	255	25
66	10C	土器溜り 1	高杯(脚端)	弥生後期後半	2.23	8.92	61.26	0.72	17.65	1.13	1.80	173	105
67	"	"	"(脚柱)	百・後・IV	2.49	3.96	67.93	0.61	19.86	1.02	1.77	184	89
68	"	"	裝飾壺(壺)	弥生後期後半	2.14	9.47	60.63	0.84	17.36	1.22	0.86	193	105
69	9D	井戸 4	甕(胴)	百・後・III	2.19	2.54	73.94	0.56	18.12	0.56	0.55	122	86
70	10C	土器溜り 1	高杯(口縁)	百・後・I	2.62	4.11	70.33	0.57	17.82	1.26	0.53	269	109
71	15・16CD	旧河道	壺(胴)	百・後・I?	1.13	4.74	59.07	1.22	19.39	3.38	2.14	160	51
72	"	"	"(胴)	"	1.20	5.44	58.66	1.28	19.66	3.44	2.52	147	56



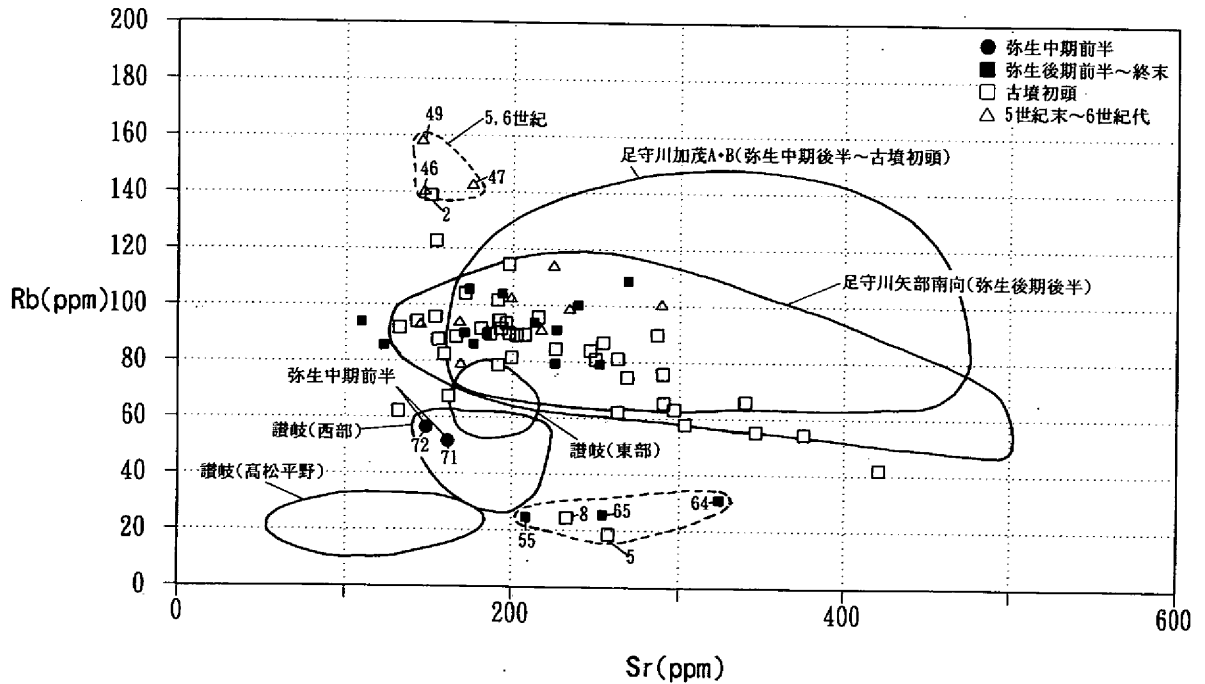
第1図 K<sub>2</sub>O-CaO散布図 古墳時代初頭の土器類の器種による比較



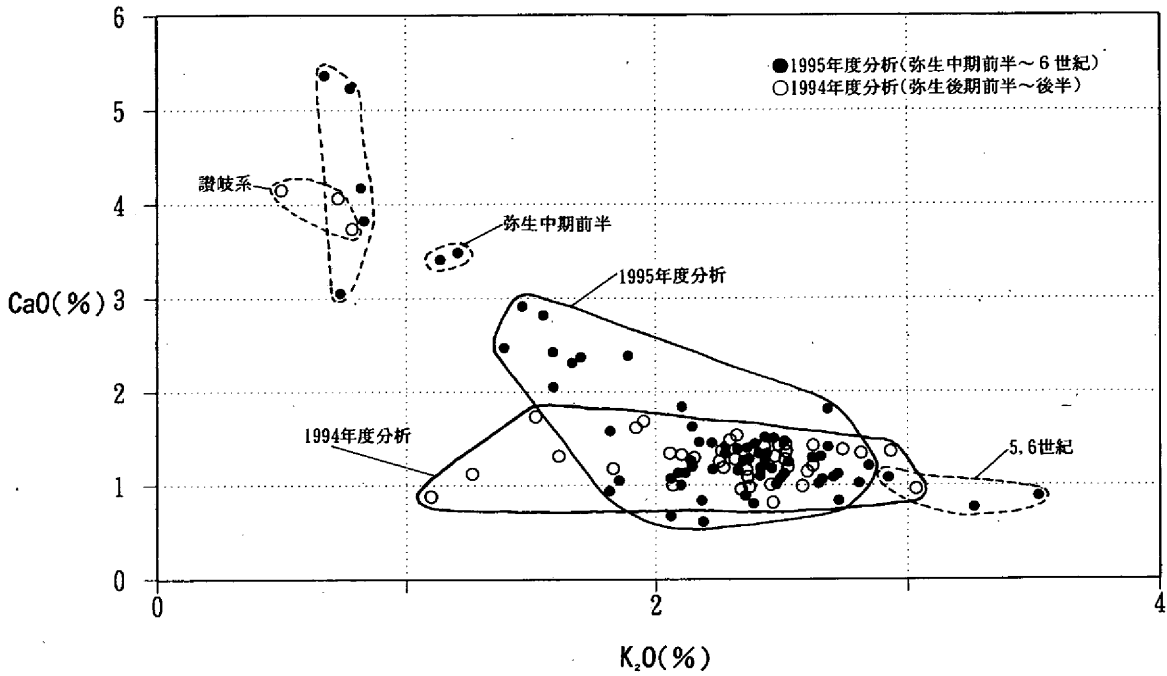
第2図 Sr-Rb散布図 古墳時代初頭の土器類の器種による比較



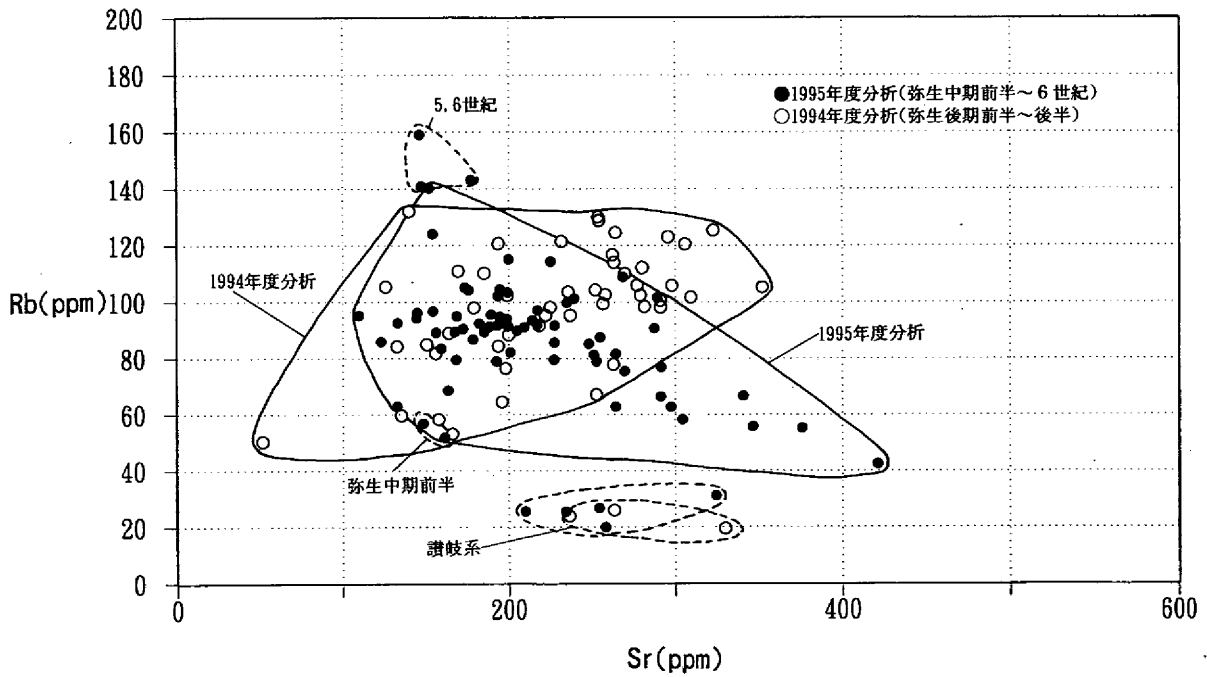
第3図 K<sub>2</sub>O-CaO散布図 時期・他地域との比較



第4図 Sr-Rb散布図 時期・他地域との比較



第 5 図 K<sub>2</sub>O-CaO 散布図 原尾島遺跡内での比較



第 6 図 Sr-Rb 散布図 原尾島遺跡内での比較

## 付載 2 百間川原尾島遺跡出土ガラス小玉およびガラス滓

株式会社ニコン・相模原製作所

蒔谷道郎

### 1. 資料および実体顕微鏡観察結果

資料の一覧を表1に示す。資料のガラス小玉およびガラス滓は岡山県百間川原尾島遺跡三股ヶ・丸田調査区9・10B～D区の竪穴住居床面、土壌あるいは井戸内下層の土中から検出され、共伴した遺物から弥生時代後期と推定されている。資料1は空色ガラス小玉であり、孔の軸方向に平行な泡の配列が観察される。また表面・孔内部に平滑な仕上げ加工の痕跡がある。資料2は空色ガラス小玉の2ヶの小片でその割れ面の形状と泡の位置から2ヶは同一の小片の破片である。資料3は空色ガラス小玉で、資料1と同様な泡の配列と加工痕が観察されるが、外形は歪で小平面である。

資料4～8は灰色の粒状多孔質体で、径数mmの小粒が多い。実体顕微鏡観察によれば多数の未熔融の白色砂粒を含有する焼結体で、多数の泡を含有する暗緑色のガラス化部分が散在している。ガラス化部分の周囲にはガラスが侵食され2次生成した微小な針状結晶が密に存在する。百間川今谷遺跡は

表1 百間川原尾島遺跡出土ガラス小玉およびガラス滓の資料一覧

資料番号	掲載番号	出土地区	出土遺構名	時代・時期	種別
1	J 3	9 C・D	竪穴住居 3	百・後・I	小玉
2		9 C・D	竪穴住居 4	百・後・III	小玉
3	J 2	10B	竪穴住居 1	百・後・III	小玉
4		9 D	土壌16	百・後・I	滓
5		9 D	井戸 1	百・後・I	滓
6		9 C・D	竪穴住居 3	百・後・I	滓
7		10B	土壌26	百・後・II	滓
8		10D	土壌17	百・後・IV	滓

か出土の「ガラス滓」と同類のいわゆる「ガラス滓」で、ガラス化があまりされず、地中埋蔵中に水に浸食され激しく風化されたものと推定される。

### 2. 分析結果と組成の推定

資料をエネルギー分散型X線分析装置（フィリップスEDAX9100およびPV9900）で分析した。分析は安立伸夫氏（株式会社ニコン・相模原製作所技術開発部）、大森厚夫氏（株式会社ニコン技術工房・分析センター）に依頼した。分析結果を表2および表3に示す。

本分析法では表面の微小部分の深さ約1μmまでの組成を半定量している。表2の分析では資料1～3の小玉の、埋蔵時の水分の影響を受けにくいと考えられる泡孔の内壁を分析した。また資料4～7のガラス滓では小玉と同様にガラス部分の泡孔の内壁を分析した。

表3の分析では組成のばらつきが大きいと予想されたため、各資料10点の分析を行いその平均値を示した。いずれの分析も組成分析値はNa以上の重元素の酸化物について合計100%になるよう計算した判定量値である。

いずれの分析値も表面の組成分析値であり、ガラスが地中埋蔵中に水に接触した表面の可溶成分が溶出し、表面組成は内部組成と異なっていることが予想される。内部組成は表面組成に較べNa<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>Oが多く、SiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は少ない。

資料1～3のガラス小玉の組成は表面の浸食による変化と本来もつ内部組成のばらつきを考慮するとほぼ同一組成系と考えられるが、資料2は微量のPbOを含有し、資料1および3はPbOを含有しない。

### 3. 着色原因の推定

表2に示す分析結果から着色原因は次のように推定される。

資料1～3の空色は主としてFeOによる着色であり、CuOは発色の主因となっていない可能性が高い。酸化条件で熔融されるとFeはFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>となり、本含有量では暗緑色となる。資料1～3は還元条件下で熔融され主としてFeOによる発色であるが、CuOが共存する可能性もある。

資料4～8のガラス部分の暗緑色はFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>による着色である。

### 4. 製造方法の推定

資料1～3のガラス小玉は実体顕微鏡によって観察される泡の配列と加工痕から、ガラスを加熱し引き伸ばし丸棒とし、冷却後切断し、中心に穿孔し、外形を荒摺り研磨し、玉としたと推定される。

先に報告した百間川原尾島遺跡出土の弥生時代のガラス小玉<sup>3)</sup>にはほぼ類似の組成と製造方法のガラス小玉がある。

### 5. ガラス滓に関する考察

資料の主成分の組成を百間川今谷遺跡出土・鹿田遺跡出土のガラス滓<sup>1)</sup>、百間川原尾島遺跡出土のガラス滓(92年度分析、93年度分析)<sup>2) 3)</sup>および津寺遺跡出土のガラス滓<sup>4)</sup>と比較し表4に示した。

資料4～8の平均値は百間川原尾島遺跡出土のガラス滓(92年度分析、93年度分析)と同様に他の遺跡出土のガラス滓と較べNa<sub>2</sub>Oが少ない。これは地中埋蔵中に水によって可溶成分が溶出した影響があり、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が多いのは溶出されない残分として多くなっていると考えられる。百間川今谷遺跡のガラス滓はガラス光沢を持ち、水による浸食が少なかった。資料4～8は百間川今谷遺跡のガラス滓に較べガラス化が進んでおらず、水に激しく浸食されており、生成時の加熱温度が百間川今谷遺跡のガラス滓より低かったと推定される。

### 6. 同一の竪穴住居内から出土したガラス小玉とガラス滓の比較検討

資料1のガラス小玉と資料6のガラス滓は同一の竪穴住居の床面より出土した。表3に示すガラス滓の多数点の分析結果から資料6は資料4～8のガラス滓の一般的組成を持つ。資料6をガラス化させると表2に示すガラス滓のガラス部分の組成分析結果とほぼ同様な組成となると推定される。

表2に示す資料1のガラス小玉の組成と資料4～7のガラス滓のガラス部分の組成を比較すると、資料1はガラス滓に較べNa<sub>2</sub>Oが少ないが、ほぼ類似の組成系である。しかしガラス滓はPおよびMnOを含有し、資料1は含有しない。ガラスの熔融および地中埋蔵中の浸食によりPおよびMnOの除去は困難であり、よって資料1のガラス小玉はガラス滓を中間原料としたものではないと推定される。

ガラス小玉とガラス滓のガラス部分の組成がほぼ類似な組成系を持つことは出発原料と製造技術が近似しており、PおよびMnOを含有する原料が異なっていると推定される。ガラス化の程度の差からガラス小玉はガラス滓に較べ高温度・長時間の熔融されている。

表 2 百間川原尾島遺跡出土ガラス小玉およびガラス滓のガラス部分の表面の組成分析結果

資 料 見掛け比重	1 空色小玉 2.4	2 空色小玉 2.4	3 空色小玉 2.3	4 滓	5 滓	6 滓
組成 wt%						
SiO <sub>2</sub>	72.5	66.9	64.3	59.2	57.2	57.4
Na <sub>2</sub> O	2.0	0.6	2.6	10.8	9.0	11.3
K <sub>2</sub> O	4.1	5.0	2.9	2.2	4.1	1.3
MgO	1.3	1.6	1.6	2.6	4.1	5.0
CaO	0.3	0.4	0.8	2.0	2.5	3.5
PbO	—	0.6	—	—	—	—
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	12.1	17.8	22.5	14.8	16.6	11.3
TiO <sub>2</sub>	0.6	0.8	0.6	0.8	0.8	0.5
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	4.1	5.4	4.2	4.7	4.4	8.7
CuO	0.9	0.7	0.4	—	—	—
P	—	—	—	0.8	0.3	0.3
S	—	—	—	—	0.3	—
Cl	2.2	0.2	0.1	1.0	0.2	0.5
MnO	—	—	—	1.0	0.5	0.2

注) FeおよびCuの化学状態はそれぞれFe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>およびCuOとして計算した。

表 3 百間川原尾島遺跡出土ガラス滓の表面の組成分析結果

資 料	4	5	6	7	8	全平均値
組成 wt%						
SiO <sub>2</sub>	56.5	63.0	60.1	54.9	58.9	58.7
Na <sub>2</sub> O	4.3	6.8	3.3	2.0	6.7	4.6
K <sub>2</sub> O	2.6	4.0	3.4	2.5	1.9	2.9
MgO	4.4	3.8	2.9	2.3	3.7	3.4
CaO	4.3	3.7	2.6	2.1	2.9	3.1
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	16.0	10.2	17.6	21.5	14.7	16.0
TiO <sub>2</sub>	0.7	0.5	0.5	1.0	0.7	0.7
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	11.0	6.9	8.9	13.3	9.6	10.0
MnO	1.9	1.1	0.6	0.2	0.9	1.0

表 4 ガラス滓の主成分平均値の比較

資 料	百間川原尾島遺跡			津寺遺跡	鹿田遺跡	百間川 今谷遺跡
	94年度分析	93年度	92年度			
組成 wt%						
SiO <sub>2</sub>	58.7	59.2	50.6	55.0	60.7	62.6
Na <sub>2</sub> O	4.6	5.7	2.5	8.9	9.4	11.5
K <sub>2</sub> O	2.1	2.4	1.5	2.4	2.0	1.3
MgO	3.4	2.2	3.3	4.6	5.7	4.9
CaO	3.1	3.0	2.3	2.7	3.6	2.6
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	16.0	12.4	20.8	15.3	9.7	9.5
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	10.0	12.2	14.7	9.6	5.1	4.2

参考文献

- 1) 三浦定俊、苅谷道郎「鹿田遺跡出土ガラス滓」『岡山大学構内遺跡発掘報告』第3冊 p463、1988
- 2) 苅谷道郎「百間川原尾島遺跡9・10Z区出土ガラス滓」『岡山県埋蔵文化財発掘報告』88 p318、1994
- 3) 苅谷道郎「百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓」『岡山県埋蔵文化財発掘報告』97 p283、1995
- 4) 山陽自動車道建設に伴う発掘調査で出土した。報告書は未刊。



## 付載3 百間川原尾島遺跡出土の管玉の産地分析

京都大学原子炉実験所

藁科哲男

東村武信

## はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということ进行调查するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法<sup>1)</sup>および貴重な考古遺跡を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法<sup>2, 3)</sup>が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例<sup>4)</sup>が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしも必要であるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭り、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析でしか得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った管玉は岡山市原尾島に位置する百間川原尾島遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての管玉5個で、出土地区、遺構・層位、時代などを表1に示す。これら5個の管玉の産地分析結果が得られたので報告する。

表1 百間川原尾島遺跡出土管玉の資料一覧

資料番号	掲載番号	出土地区	出土遺構名	時代・時期	備考
1	J 6	9 C・D	竪穴住居 4	百・後・Ⅲ	
2	J 34	37C	(黒褐色砂質土)	古墳時代	
3	J 31	40B	土壇77	百・前・Ⅲ	
4	J 32	40C	土壇79	百・前・Ⅲ	
5		8・9 A	「竪穴住居 6」	百・後・Ⅱ	『百間川原尾島遺跡 3』

## 非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしか

いという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している<sup>5)</sup>非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

### 碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県花仙山産原石を図1に示す。猿八、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1でしめされるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

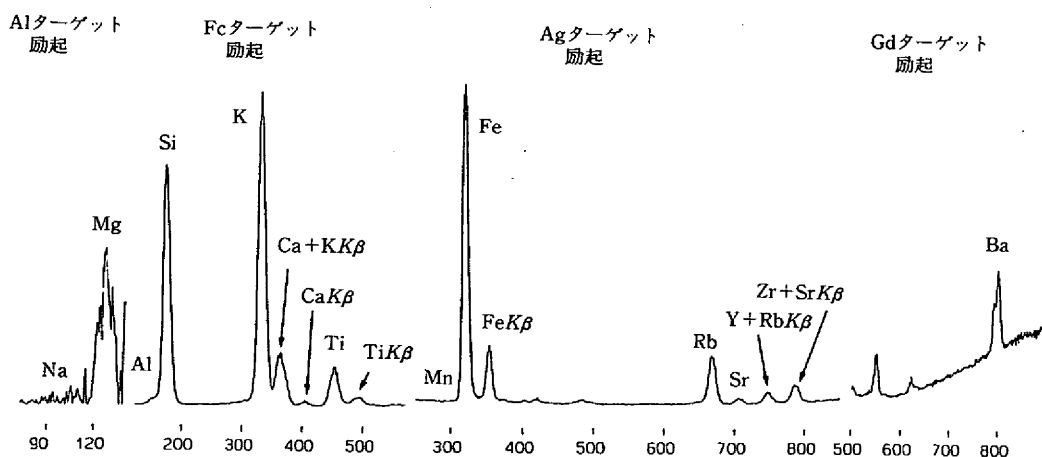


図1 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

### 碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図2に示す。佐渡島猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、算出する原石は、地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を

示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所も見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のものは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のものは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。このような良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アラクなどで採取できる。二俣原産地は(4)石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られ



表 2 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析 個数	$\frac{Al}{Si}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{K}{Si}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Ca}{K}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Ti}{K}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{K}{Fe}$ $\bar{X} \pm \sigma$
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
空知A1	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012
空知A2	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007
空知B	2	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析 個数	$\frac{Rb}{Fe}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Fe}{Zr}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Rb}{Zr}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Sr}{Zr}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Y}{Zr}$ $\bar{X} \pm \sigma$
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
空知A1	10	0.108±0.042	4.658±2.044	0.438±0.089	15.676±4.311	0.054±0.041
空知A2	3	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.930±3.179	0.349±0.251
空知B	2	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南B	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原石群名	分析 個数	$\frac{Mn}{Fe}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Ti}{Fe}$ $\bar{X} \pm \sigma$	$\frac{Nb}{Zr}$ $\bar{X} \pm \sigma$	比重 $\bar{X} \pm \sigma$
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
空知A1	10	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039
空知A2	3	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012
空知B	2	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南B 遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

$\bar{X}$  : 平均値、 $\sigma$  : 標準偏差値

女代南B : 女代南遺跡(豊岡市)で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

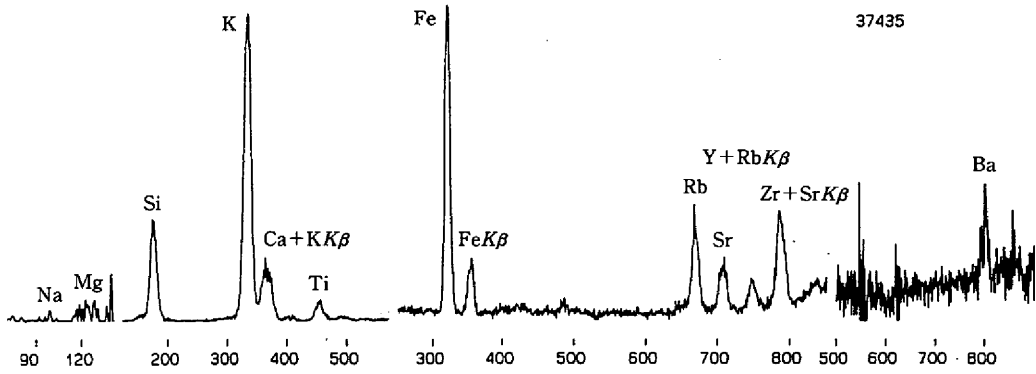


図 3 百間川原尾島遺跡管玉一 (37435) の蛍光 X 線スペクトル

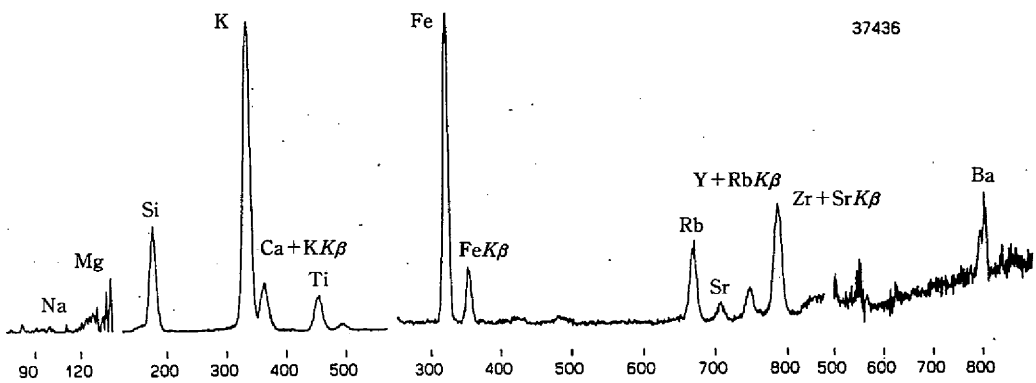


図 4 百間川原尾島遺跡管玉二 (37436) の蛍光 X 線スペクトル

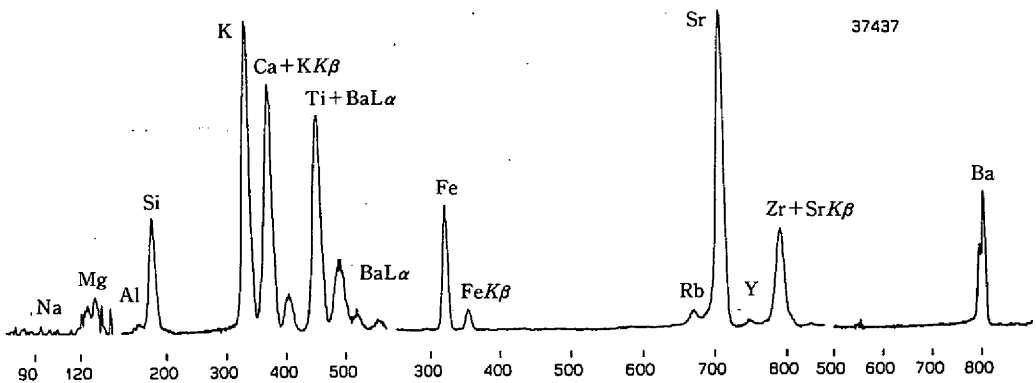


図 5 百間川原尾島遺跡管玉三 (37437) の蛍光 X 線スペクトル

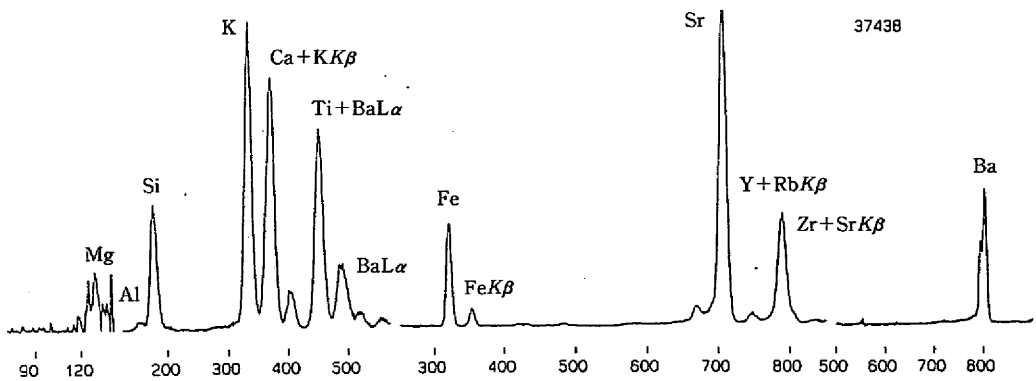


図 6 百間川原尾島遺跡管玉四 (37438) の蛍光 X 線スペクトル

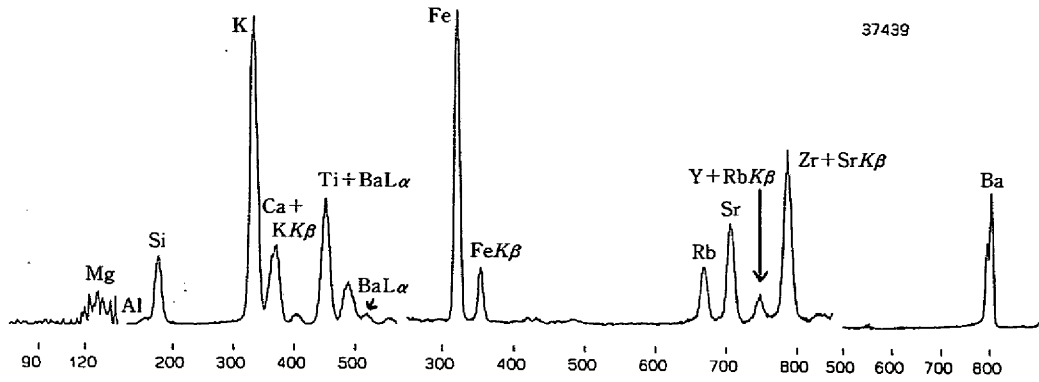


図7 百間川原尾島遺跡管玉-5 (37439) の蛍光X線スペクトル

表3 百間川原尾島遺跡出土の管玉の分析結果

試料番号	分析番号	元 素 比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
管玉 1	37435	0.046	3.492	0.118	0.061	0.344	0.358	2.506	0.897
" 2	37436	0.043	3.451	0.022	0.121	0.330	0.304	2.033	0.619
" 3	37437	0.070	3.067	0.806	0.804	0.089	0.213	1.621	0.346
" 4	37438	0.061	2.642	0.872	0.755	0.121	0.261	1.206	0.315
" 5	37439	0.065	4.970	0.234	0.439	0.188	0.255	1.504	0.383
JG-1 a)		0.084	3.849	0.749	0.215	0.127	0.269	3.831	1.029

試料番号	分析番号	元 素 比					重量 gr	比重
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr		
管玉 1	37435	0.527	0.159	0.008	0.017	0.087	0.070	2.4~
" 2	37436	0.132	0.127	0.005	0.030	0.035	0.271	2.606
" 3	37437	6.035	0.000	0.004	0.053	0.019	0.090	
" 4	37438	5.270	0.042	0.006	0.071	0.000	0.299	2.354
" 5	37439	0.655	0.067	0.007	0.070	0.018	0.286	2.444
JG-1		1.316	0.213	0.022	0.023	0.063		

a) : 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974).

1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192.

表4 百間川原尾島遺跡出土の管玉の原石産地分析結果

遺物番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率					ESR 信号形	総合判定 原石産地
		興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群		
管玉 1	37435	<10 <sup>-25</sup> %	2X10 <sup>-15</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	4 %	6X10 <sup>-5</sup> %	不明	女代南(B)遺物群
" 2	37436	<10 <sup>-25</sup> %	1X10 <sup>-14</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	0.0004 %	58 %	女代(B)形	
" 3	37437	1X10 <sup>-13</sup> %	3X10 <sup>-17</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	空知(B)形	
" 4	37438	3X10 <sup>-14</sup> %	1X10 <sup>-16</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	<10 <sup>-25</sup> %	"	
" 5	37439	0.01 %	1X10 <sup>-13</sup> %	2X10 <sup>-19</sup> %	4X10 <sup>-23</sup> %	3X10 <sup>-21</sup> %	不明	

る碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で3個は、同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は(5)、富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は(6)、愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地(7)、北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は(8)、兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表2に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

### 百間川原尾島遺跡出土の管玉と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原材産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

#### 蛍光X線法による産地分析

これら遺物の蛍光X線分析の結果(図3～7)および比重(表3)から原材料の岩石を碧玉系、グリーンタフ系の2個に分類した。(1)碧玉系と分類した遺物は管玉-1、-2で、緻密で、管玉-1は小さすぎるために正確な比重は測定できなかったが2.4以上で、管玉-2は2.6であること、および蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。(2)緻密でなく、比

重が2.45以下の管玉—3、—4、—6の管玉をグリーンタフ系として分類した。これら遺物の元素組成比および比重の結果を表3に示した。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT<sup>2</sup>検定<sup>9)</sup>により同定を行い結果を表4に示した。土岐、二俣、細入、石戸原産地は統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成からこれら産地の原石でないと推定された。また興部産地でないことは鉄の含有量から証明できる。蛍光X線分析の結果から原石産地を特定された遺物は、管玉—1が佐渡島の猿八群に、また管玉—2は豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている女代南(B)遺物群に一致した。これら遺物を猿八群および女代南遺物群の原石と同じ原産地であると結論するには以下に述べる電子スピン共鳴 (ESR) 法による結果も猿八群、女代南遺跡群に一致すればより確実な結果となる。

### ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、Varian者のE-4型X-バンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図8-1のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。図8-1では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図8-2、-3の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に、利用できる。今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣、細入産でないと言える。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図9-1に花仙山、猿八、玉谷、土岐、図9-2に興部、石戸、八代谷—4、女代(B)遺物群、八代谷および図9-3には花石、空知の各原石の代表的な信号(III)のスペクトルを示す。図10に今回分析した管玉の信号(III)のESRスペクトルを示す。管玉—1、—6に一致する原石の信号(III)は見られない。管玉—2は女代南遺物群の女代(B)形に一致し、管玉—3、—4は空知(B)形にそれぞれ一致する。このことは、ESR分析から見ると分析した遺物の原石産地がそれぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆している。さらに正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ、総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、その原産地の原石で作られた玉であると決定する (表4)。

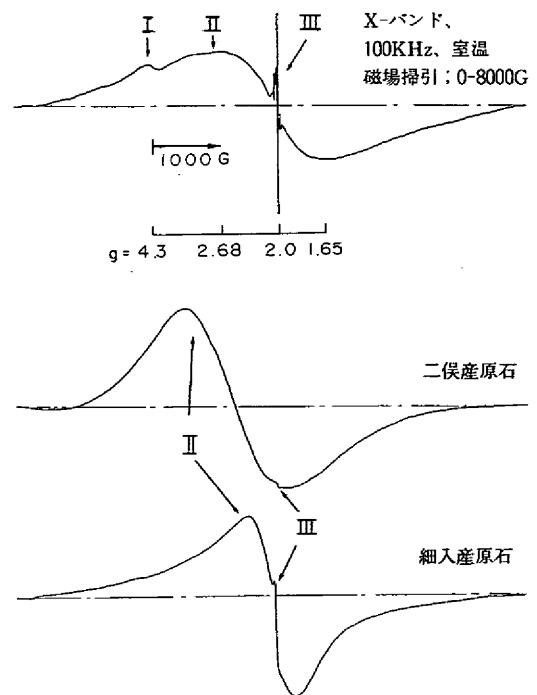


図8 碧玉原石のESRスペクトル  
(花仙山、玉谷、猿八、土岐)



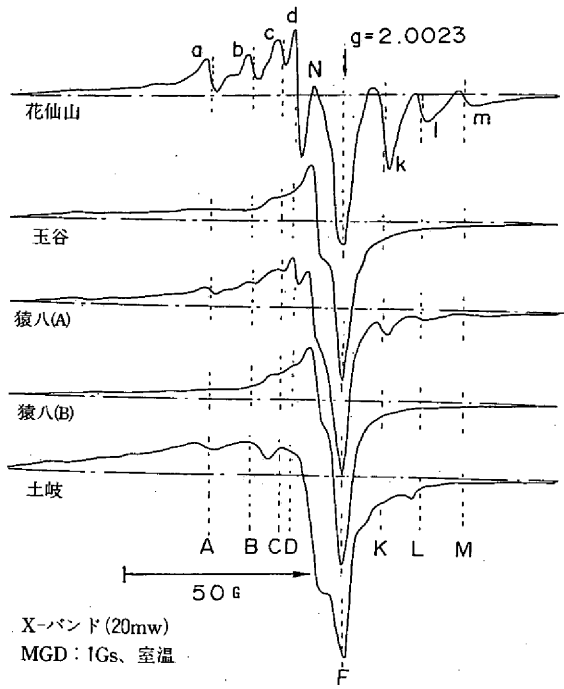


図 9-(1) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

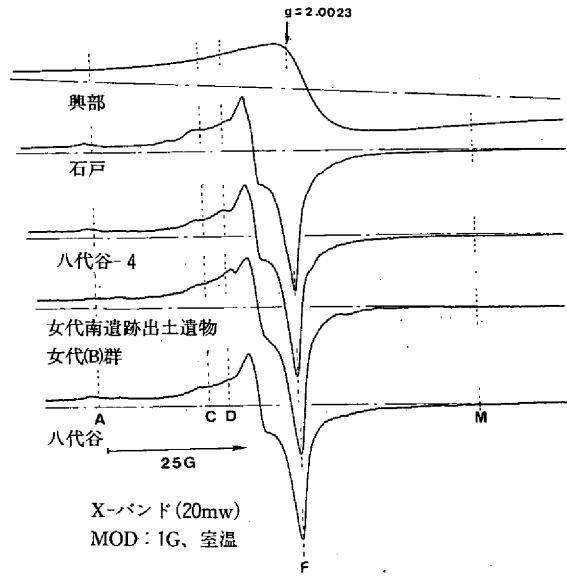


図 9-(2) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

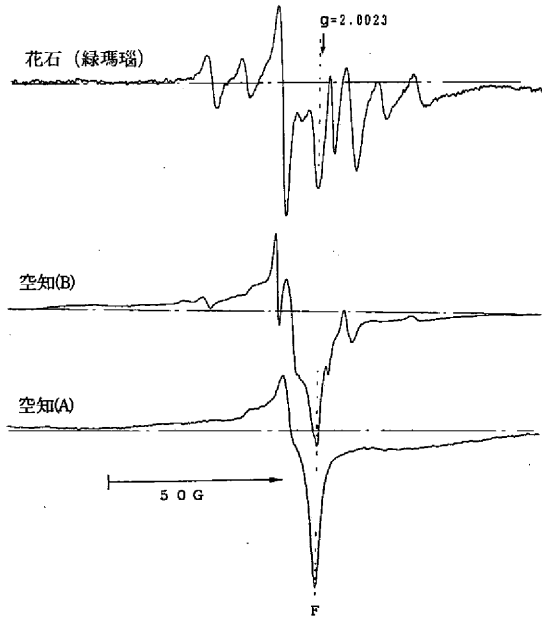


図 9-(3) 碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

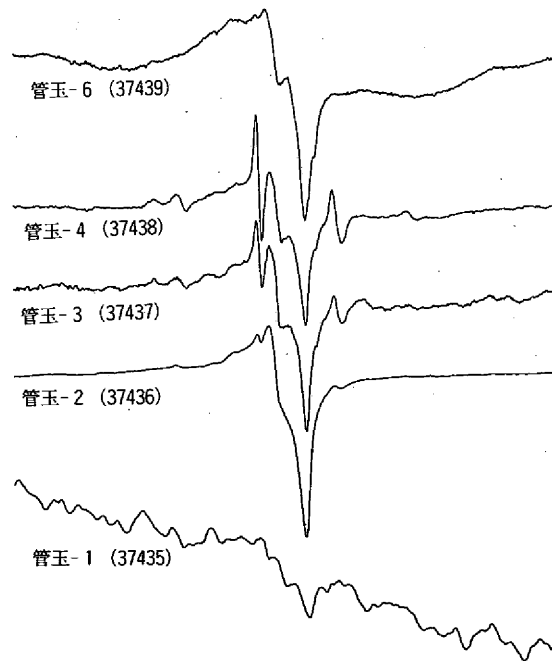


図 10 百間川原尾島遺跡出土管玉の信号Ⅲの ESR スペクトル

### 結論

百間川原尾島遺跡の弥生時代後期の管玉-1は蛍光X線分析で佐渡島猿八群に帰属されたが、ESR分析ではどこの原石産地にも一致しなかったため、この管玉の原石産地は特定できなかった。古墳時代の管玉-2は蛍光X線分析およびESR分析の両方法ともに女代南遺物群の女代(B)群に一致したため、原石産地は不明であるが、女代南遺物の中の女代(B)群と同じ産地の原石が使用されていると推定した。弥生時代の管玉-3、-4は相互に蛍光X線分析の結果は似ていて、またESR信号は北海道、富良野市の空知(B)形に似ることからこの両管玉は同じ産地の原石で作られた可能性が推定された。しかし、蛍光X線分析の結果は空知原石の組成と異なるため、両管玉の原石産地は特定できなかった。弥生時代後期の管玉-5は蛍光X線分析およびESR分析の両方法ともに一致する原石産地は見られず原石産地は特定できなかった。

今回の産地分析で原石産地が特定できた管玉はなかったが、古墳時代の管玉-2が近畿、中国、四国地方で広く使用されている女代(B)群と同じ産地の原石が使用されていると推定されたことで、本遺跡がこれら女代(B)群の原石を使用した他の遺跡との関係を考察する試料が得られた。

### 参考文献

- 1) 茅原一也 (1964)、長者が原遺跡産のヒスイ (翡翠) について (概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要6：1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』、14：95-109
- 4) Tetsuo Warashina (1992), Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. *Journal of Archaeological Science* 19: 357-373
- 5) 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59-89
- 6) 番場猛夫 (1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録、No.18：11-15
- 7) 河野義礼 (1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。  
岩石礦物鉱床学雑誌22：195-201
- 8) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9：77-90

## 付載4 百間川原尾島遺跡出土の木製品樹種同定、種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### ○ 木製品の樹種

#### 1. 試料

試料は、木製品50点（試料番号1～50）である。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表1に記した。

#### 2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製した。切片は、ガム・クロラル（抱水クロラル・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### 3. 結果

同定結果を表1に示す。50点の試料は、2点（試料番号10、20）が切片の作成ができず不明とした。また、3点（試料番号31、34、42）が保存状態が悪いため、樹種の同定に至らず、観察できた範囲で木材組織の特徴を記した。試料番号36は樹皮であった。その他の試料は、針葉樹3種類（スギ・ヒノキ属・カヤ）、広葉樹13種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・シイノキ属・ヤマグワ近似種・クスノキ・シキミ・サカキ・イスノキ近似種・ウツギ属・ムクロジ・ハイノキ属・チシャノキまたはマルバチシャノキ）が確認された。

#### 4. 考察

出土した木製品は、弥生時代前期、古墳時代、平安時代前期、室町時代のものである。これらの樹種同定結果を見ると、鋳は広葉樹（環孔材）1点と樹皮1点以外は全てアカガシ亜属である。このことから鋳の用材には、時代や形態にあまり関係なく、アカガシ亜属が多く利用されていたことがうかがえる。同様の傾向は西日本に分布する遺跡から出土した鋳の樹種同定結果にも多く見ることができ（島地・伊東、1988；伊東、1990）、強度の高いアカガシ亜属を選択していたことが推定される。弥生時代前期および古墳時代の横槌や柄にアカガシ亜属が多数見られることについても、同様のことが考えられる。

平安時代前期の木製品では、ヒノキ属が多く見られ、様々な用途に用いられていたことがうかがえる。とくに、今回ヒノキ属に同定された製品の多くは板状の加工を施すことから、割裂性の良いヒノキ属が使用されたのだろう。また、櫛は細片であったため確実な同定には至らなかったが、これまでも多くの遺跡で同様の製品に確認されているイスノキの可能性が高い。櫛の用材としては、現在ツゲ（柘植）が最も高級品とされ、イスノキはツゲに次ぐ良材とされる。いずれも材が緻密で細かい細工に適している。遺跡から出土した櫛の樹種同定結果では、最も多いのはイスノキであり、ツゲは少

ない。このことから過去においてはツゲよりもイスノキが良材と認識されていた可能性もある。この背景には、木材の入手のしやすさ等も関係していたと考えられる。

室町時代では、平安時代と同様に、板状の加工を施す木製品にはヒノキ属が多く、平安時代から継続して割裂性の高い木材を選択していたことがうかがえる。椀は全てクリであった。クリは堅いために薄手物に適する木材とされ、これまでも多くの遺跡で同様の用途に確認されている。

今回の調査では、木製品の樹種は合計16種類に及び、多くの木材が使用されていたことが明らかとなった。これらの木材の多くは、いずれも周辺部で入手可能であったと考えられる。

表1 樹種同定結果

番号	出土地区	遺構名	出土層位等	時代・時期	器種	樹種名
1	18D	溝35	中・南部下層	平安前期	斎串	ヒノキ属
2			南部落ち込み内(堰より南)	平安前期	櫛	イスノキ属
3			中部下層	平安前期	有頭棒	シキミ
4			南部落ち込み	平安前期	下駄	ヒノキ属
5			南部下層	平安前期	有孔板	ヒノキ属
6			北部下層	平安前期	紡錘	ハイノキ属
7			南部下層	平安前期	折敷の底板	ヒノキ属
8			中部下層	平安前期	有頭棒	サカキ
9			南セクション内下層	平安前期	曲物	ヒノキ属
10			南セクション内下層	平安前期	綴じ皮	不明
11				平安前期	斎串	ウツギ属
12			北部下層	平安前期	折敷の側板	ヒノキ属
13			南部下層	平安前期	折敷	ヒノキ属
14			南部下層	平安前期	折敷	ヒノキ属
15			中部下層	平安前期	弓?	カヤ
16			中部下層	平安前期	折敷の底板	ヒノキ属
17	17C・D	井戸11		室町	椀	クリ
18				室町	椀	クリ
19				室町	椀	クリ
20			第27層	室町	組紐?	不明
21			南半椀出土面より下層(27層)	室町	曲物の底板	ヒノキ属
22			第27層	室町	下駄	ハイノキ属
23			南半椀より下層	室町	曲物の底板	ヒノキ属
24			南半椀出土面まで	室町	椀	クリ
25			南半椀出土面より下層(24層)	室町	下駄	ハイノキ属
26	16・17D		溝29	下層(下部)	古墳	横槌
27	16C	下層(中部)		古墳	臼	ヤマグワ近似種
28		下層(中部・粘質土)		古墳	えぶり	コナラ属アカガシ属
29		下層(中部・粘質土)		古墳	加工木	シイノキ属
30		下層中部		古墳	柄	コナラ属アカガシ属
31		下層中部		古墳	丸鋸未製品	広葉樹(環孔材)
32		下層上部		古墳	柄	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
33		下層(下部)		古墳	柄	チシャノキまたはマルチバチシャノキ
34		下層中部		古墳	柄	広葉樹(散孔材)
35		下層(下部)		古墳	又鋸	コナラ属アカガシ亜属
36		下層中部		古墳	又鋸	樹皮
37		下層中部	古墳	加工木(部材?)	ヒノキ属	
38	18D	溝35	下層下部	平安前期	鎌	コナラ属アカガシ亜属
39	16C・D	旧河道	中層(下部)	弥生前期	壺	クスノキ
40			中層(上部)	弥生前期	きぬた	ムクロジ
41	15C			弥生前期	鋸	コナラ属アカガシ亜属
42	16D		セクション(第43層)	弥生前期	二又柄	広葉樹(散孔材)
43		セクション(第43層)	弥生前期	二又柄	コナラ属アカガシ亜属	
44		下層(上部)	弥生前期	諸手鋸の未製品	コナラ属アカガシ亜属	
45	19C	建物12		古墳後期	柱穴礎板	スギ
46	18C	溝35	北側溝セクション23~33層相当	平安前期	下駄	ヒノキ属
47	17C・D	井戸11		室町	椀	クリ
48	16C		下層上部	古墳	杭	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
49	16・17D		下層下部	古墳	杭	コナラ属アカガシ亜属
50	16C		下層中部	古墳	杭	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

## ○ 種実の種類

### 1. 試料

試料は、溝・井戸から出土した44点である。試料の時公性などについては結果と合わせて示す。

### 2. 方法

双眼実体顕微鏡で、その形態的特徴から種類を同定した。

### 3. 結果

結果を表2に示す。

### 4. 考察

今回検出された種実遺体は、渡来した栽培植物を除けば、現在でも周辺の山野にみられる種類である。

スモモ・ヒョウタン類・メロン類は栽培のため渡来した種類である。これらは、弥生時代以降の検出例が全国的にも多く、岡山県内の遺跡からも多数検出されていることから、広く利用されていたと推測される。栽培種以外では、トチノキが食用として利用されていたと考えられる。

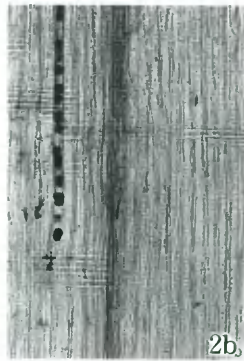
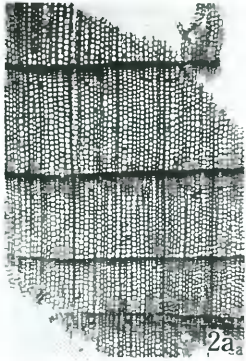
表2 種実同定結果

番号	出土地区	遺構名	出土層位等	時代・時期	種類；部位（個数）
1	18D	溝35	(南堰内)	平安時代前期	トチノキ；果皮(1)
2	17C・D	井戸11	南半	室町時代	コナラ属；虫えい(1)
3	16C	溝29	下層	古墳時代	ヒョウタン類；種子(3)
4			下層	古墳時代	スモモ；核(1)
5	40C	井戸		弥生時代後期	メロン類；種子(1)

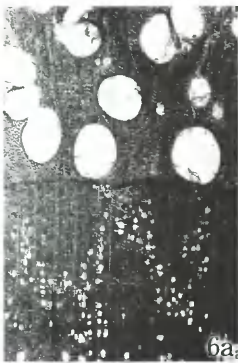
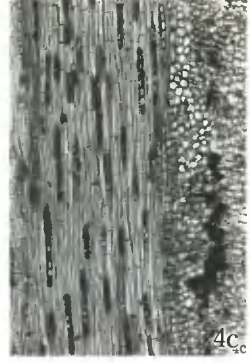
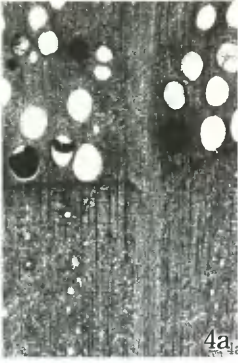
### 〈引用文献〉

島地 謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．296p.、雄山閣．

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ．木材研究・資料、26、p.96—189．



1. スギ (試料番号45) 200 $\mu$ m : a  
2. ヒノキ属 (試料番号12) 200 $\mu$ m : b, c  
3. カヤ (試料番号15) 200 $\mu$ m : b, c  
a : 木口, b : 柎目, c : 板目



4. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (試料番号50)

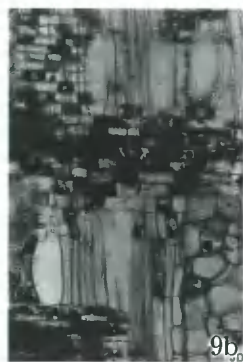
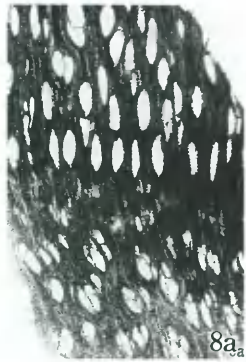
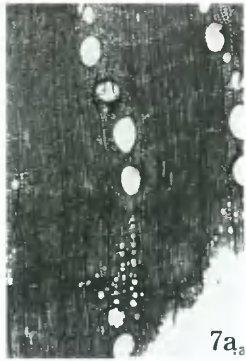
5. コナラ属アカシ亜属 (試料番号43)

6. クリ (試料番号47)

a : 木口, b : 柾目, c : 板目

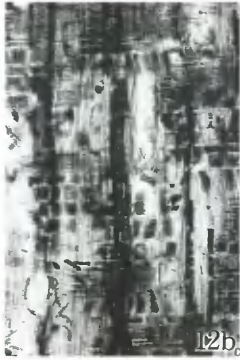
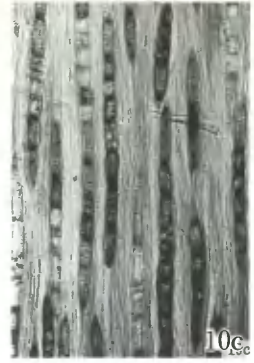
200 $\mu$ m : a

200 $\mu$ m : b, c

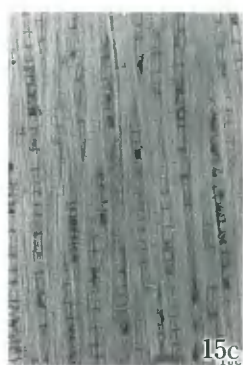
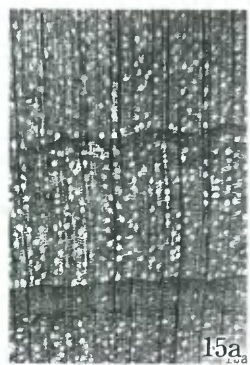
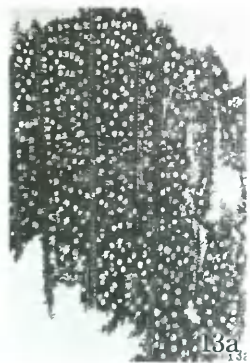


7. シイノキ属 (試料番号29) 200 $\mu$ m : a  
8. ヤマグワ近似種 (試料番号27) 200 $\mu$ m : a  
9. クスノキ (試料番号35) 200 $\mu$ m : b, c  
a : 木口, b : 柱目, c : 板目

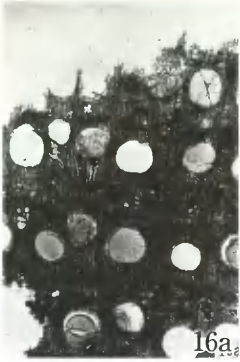




10. シキミ (試料番号3) 200 $\mu$ m : a  
11. サカキ (試料番号8) 200 $\mu$ m : b, c  
12. イスノキ近似種 (試料番号2) 200 $\mu$ m : b, c  
a : 木口, b : 柂目, c : 板目



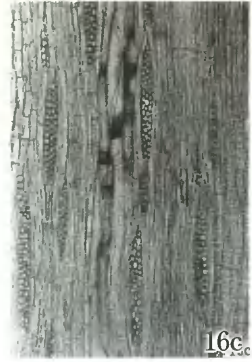
13. ウツキ属 (試料番号11)  
14. ムクロジ (試料番号40) 200 $\mu$ m : a  
15. ハイノキ属 (試料番号22) 200 $\mu$ m : b, c  
a : 木口, b : 柁目, c : 板目



16a



16b

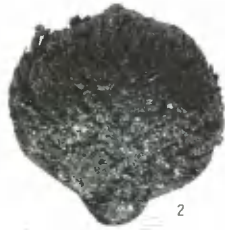


16c

16. チシャノキまたはマルバチシャノキ (試料番号33)  
 a. 木口, b. 柃目, c. 板目  
 200 $\mu$ m : a  
 200 $\mu$ m : b, c



1



2



3

1cm



4



5



1. トチノキ (試料番号1)
2. コナラ属 (試料番号2)
3. スモモ (試料番号4)
4. ヒョウタン類 (試料番号3)
5. メロン類 (試料番号5)

## 付載5 百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料の蛍光X線分析結果

百間川原尾島遺跡出土の赤色顔料については、徳島県立博物館の魚島純一氏に蛍光X線による分析を依頼し、その結果を頂いたので抜粋して掲載する。なお、分析にあたっては徳島県立博物館および同館の天羽利夫氏には格別の御配慮を得た。あわせて厚く御礼申し上げる。

表 蛍光X線分析試料と結果

掲載番号	遺構名	器種	時代・時期	結果
139	竪穴住居3	広片口鉢	弥生後期	水銀朱
51	旧河道	壺	弥生前期	ベンガラ
52	旧河道	壺	百・前・Ⅱ	ベンガラ
53	旧河道	壺	百・前・Ⅱ	ベンガラ
54	旧河道	壺	百・前・Ⅱ	ベンガラ
55	旧河道	壺	百・前・Ⅱ	ベンガラ

※ベンガラは本来のベンガラと、赤土を含むもので、蛍光X線では明確に区分することができないため、広義の意味で使用している。

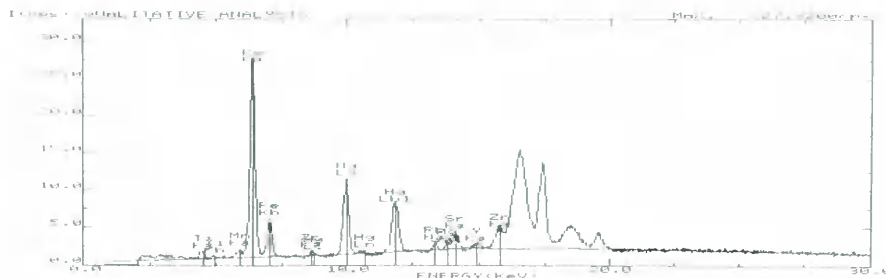


図1 竪穴住居3出土の広片口鉢<139>

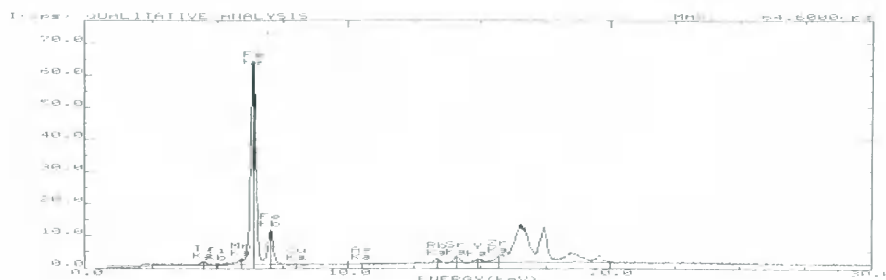


図2 旧河道出土の壺<51>

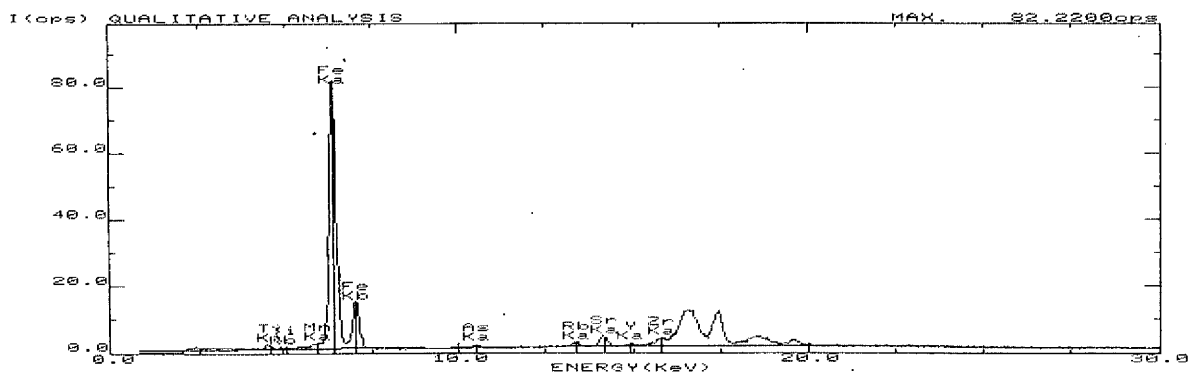


図 3 旧河道出土の壺<52>

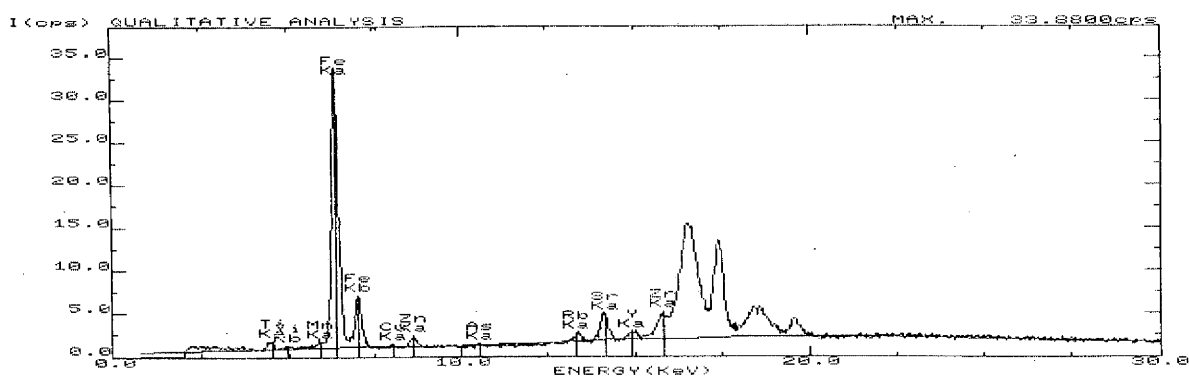


図 4 旧河道出土の壺<53>

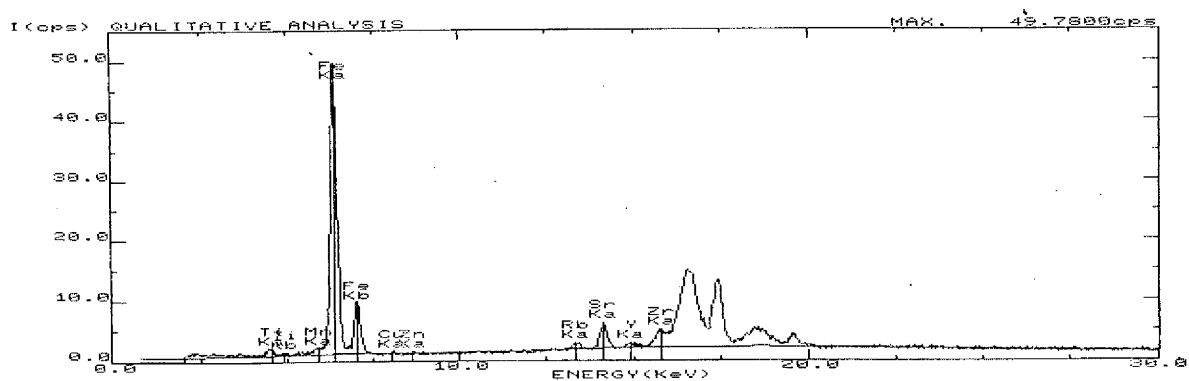


図 5 旧河道出土の壺<54>

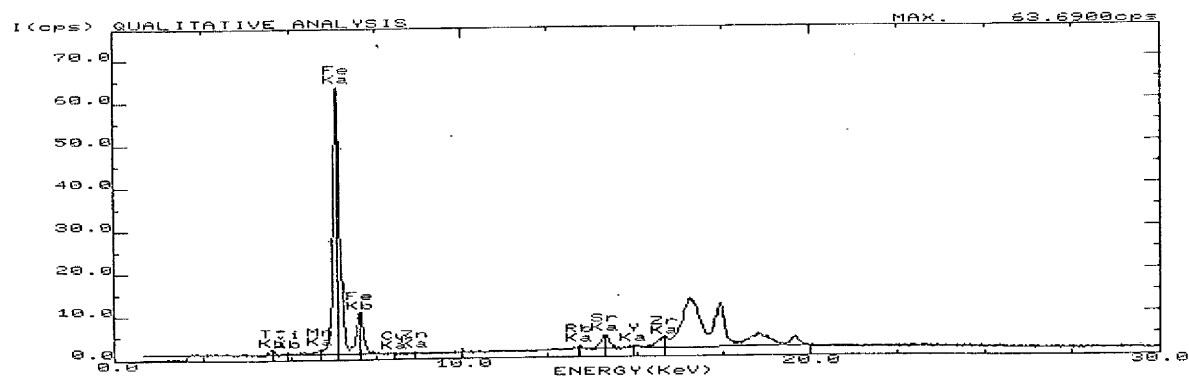


図 6 旧河道出土の壺<55>

## 付載 6 百間川原尾島遺跡出土の獣骨鑑定結果

百間川原尾島遺跡出土の獣骨については、奈良国立文化財研究所の松井章氏に鑑定を依頼し、以下の結果を頂いた。また、鑑定時には出土遺構の性格等についての有益なご教示も得た。あわせて厚く御礼申し上げる。

表 獣骨鑑定資料と結果一覧

整理番号	出土地区	出土遺構名	時代・時期	残存部位	獣名	備考
1	10C	竪穴住居 2	百・後・I	下顎 左 破片、 第3前臼歯 左	ニホンジカ	
4				後臼歯 左 破片	ニホンジカ	
31				臼歯 エナメル破片	ウシ	
5	9C・D	竪穴住居 4	百・後・III	鹿角 破片	ニホンジカ	刻骨片
28				鹿角 破片	ニホンジカ	刻骨片
29				中手骨or中足骨?破片	ニホンジカ?	掲載番号 B 8
30	9C・D	竪穴住居 3	百・後・II	椎骨	軟骨魚類サメ類	直径65mm
48	18C	溝39	平安	上顎臼歯 右	ウマ	5才前後
49				下顎後臼歯 左右、 尺骨 左 破片、 上腕骨 左 遠位 破片、 中手骨 右 近位 破片	ウシ老獣	左 第3後臼歯 摩耗顕著 ML 33.0 中手骨 近位端最大幅 64.0 同 最大厚 37.0
50				腰椎	イヌ	切断痕?
60				下顎臼歯 左右	ウマ成獣	左 第3後臼歯 ML30.5
65				第3後臼歯 下右	イノシシ	やや摩耗進む
68				第1後臼歯 下右	ウシ老獣	49と同一か?
51	18C・D	溝45	室町	肋骨 破片	不明ウシ?	

(一覧表の作成は高田)

## 第4章 百間川原尾島遺跡のまとめ

百間川原尾島遺跡は、昨年度までに「百間川原尾島遺跡1」～「同4」の発掘調査報告書（本報告書14頁、表2参照）を刊行し、それぞれに成果をまとめてきたところである。本報告書は前にもふれたように、1982（昭和57）年度以降の調査地区全体を3分割したうちの最後であり、同時に一段落する原尾島地区の調査報告として最後でもある。そして、とくに本報告分を含む「百間川原尾島遺跡3」～「同5」は3分割にした結果、各報告書に収録した調査地区がまとまりに欠ける部分も少ない。それらを少しでも補い、またつながりをもたすため、とくに遺跡として遺構密度の濃い弥生時代後期から中世を中心にして、おもに集落構成について検討を加え、まとめにかえたい。

### 第1節 弥生時代の集落

#### 1. はじめに

以下の記述にあたっては、原尾島遺跡の各地域あるいは地点を示す場合には9B区・20E区などのグリッド名を使用し、竪穴住居・井戸・溝などの遺構名は各報告書で重複するため、報告書番号を遺構の前につけ、「百間川原尾島遺跡2」の竪穴住居13は2住-13、「同4」の井戸6は4井-6などと略称して使用する。また、現在までのところ百間川原尾島遺跡は微高地が3箇所認められ、その周辺または間には低位部が拡がることが判明している。ここで便宜上、上流部から微高地1-1、低位部1-1などと呼称する。

#### 2. 前期から中期の集落

前期から中期の遺構は微高地1-3を除き希薄であり、微高地1-1では0~5・A~B区の左岸用水・新田サイフォン・新田樋門調査区の溝や船形土塋、微高地1-2でも溝や不整土塋がわずかに認められるに過ぎない。しかし、この状況は両微高地がこの時期に居住区としてほとんど利用されていないのを示すのではないことは、両微高地に挟まれて存在する旧河道（15・16C・D区）から出土する多量の土器類によって容易に推定できる。ただ、百間川原尾島遺跡の調査区の全体でも中期後半の遺構・遺物はほとんど確認されておらず、何らかの理由で後期初めまでこの地域が利用されていない可能性が強い。

微高地1-3は、約20~50mの範囲に百・前・Ⅲ期（前期後葉）の竪穴住居3軒、貯蔵穴の可能性のある袋状土塋7基、土塋墓またはその可能性のある土塋13基、それに柱穴を含み500個を超す土塋、溝2本が検出されている（第257図）。この集落は微高地全体では南の先端の一部であることや、端部が後期水田の開墾で部分的に削平されていることなどから、具体的な集落構成までは捉えることができない。しかしながら、この時期には住居区と墓域が隣接して存在することや、貯蔵穴と思われる袋状土塋が住居区の中や墓域から少し離れた地点にまとまって存在することなどが捉えられる。また、この微高地から北西に約150m離れた地点の26~32C・D区には、前・Ⅲ期の水田が検出されている。

そして、その間に当時存在していた約15m幅の河道（旧河道2）をまたぐように樋を渡した可能性の強い橋脚列が存在する（註1）など、水田を含めてこれらの集団の経営にかかる蓋然性が高い。

### 3. 後期の集落構成（Ⅰ～Ⅳ期）

この遺跡では、後期になって微高地1-1・2に集中して集落が営まれ、とくに微高地1-1に後期を通じての継続性がうかがわれる。ここでは微高地1-1・2およびその周辺の低位部を中心にして、各時期ごとの集落構成を検討してみたい（註2）。

なお、以下に使用する時期分類のⅠ～Ⅳ期は、それぞれほぼ百・後・Ⅰ～Ⅳに対応する。

#### Ⅰ期

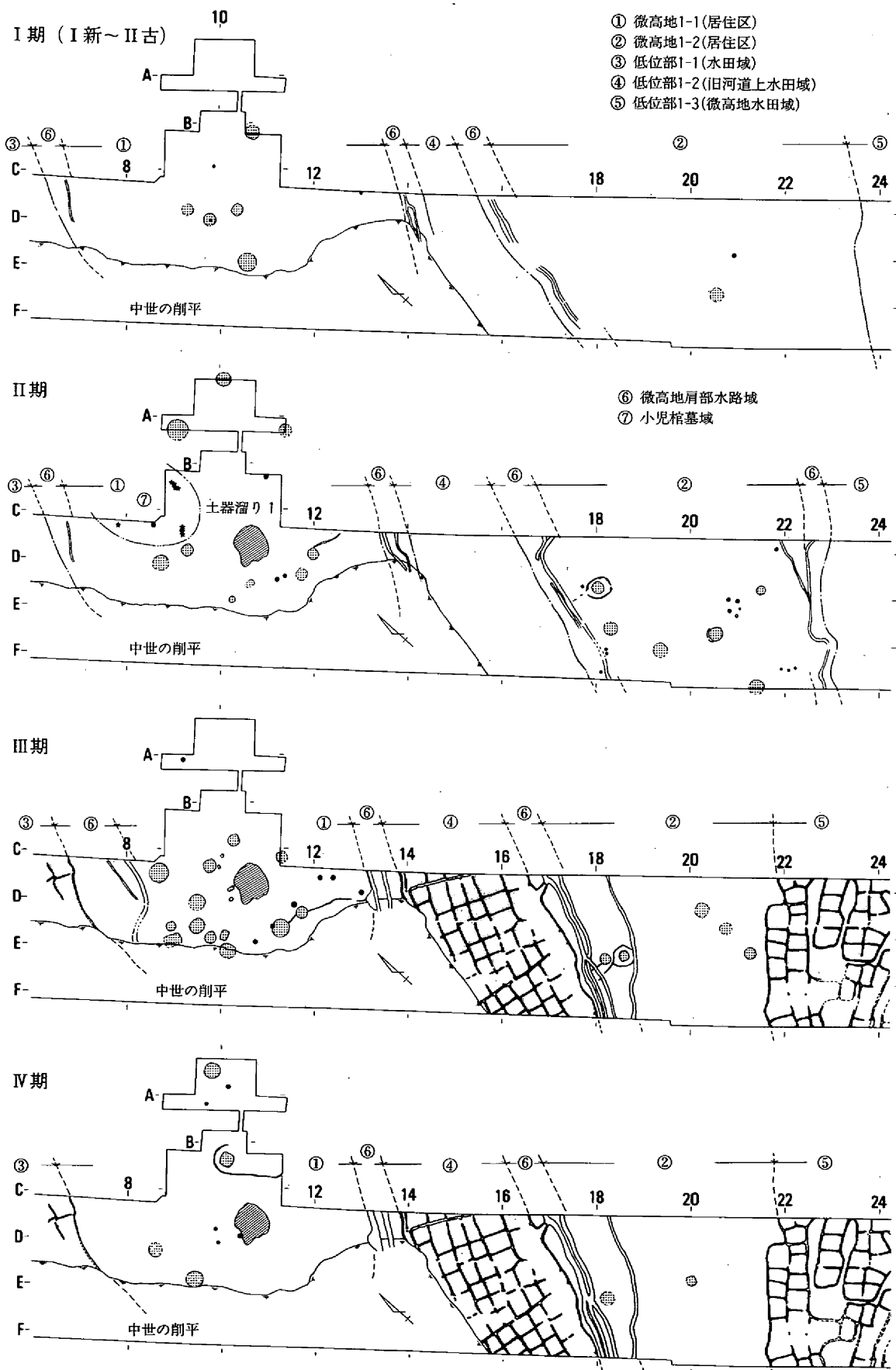
この時期の遺構は、微高地1-1で竪穴住居4～5軒・井戸3基・水路1～2条、微高地1-2では竪穴住居0～1軒・水路2条がある。これらの遺構はⅠ期の古い段階は含まず、低水路部分にはⅠ期の新段階から居住が始まったことがわかる。Ⅰ期の遺構配置図には、同時存在の時期もあった可能性のある、廃絶の時期がⅡ期の古段階の3住-2と2住-32を載せているが、微高地1-1では4～5軒の住居が微高地のほぼ中央部にかたまって占地されていたことが看取される。また、微高地1-1の別地点にあたる左岸用水路等の調査区でもほぼ同時期の住居が3～4軒確認されており（註3）、微高地1-1についていえば、幅80m前後、長さ300m前後と想定される微高地上に4～6軒の単位集団が3～4グループ存在した可能性がある。

また、微高地の肩部には縁辺に添って1～2条の水路を掘削し、南側の下流部に想定される水田に配水していたと思われる。微高地縁辺の低位部は、この時期には比較的狭い範囲に水田が営まれていた可能性が強いが、Ⅲ期以降に想定されⅣ期の末に洪水砂に覆われて廃絶した水田の拡がりや一部重複、またはそれらの開墾時に削平されているためか、遺構的には捉えられていない。

#### Ⅱ期

この時期になると、両微高地には集中して住居址が認められ、さらに日常土器も多量に出土するところから、単位集団内の成員の増加とともにムラの人口も飛躍的に増加したことがうかがえる。微高地1-1では径8mにも及ぶ範囲の土器溜りが微高地のほぼ中央部にあり、それを避けるように中・小の住居が配置されている。土器溜りから北東に20～30m離れた位置の大・中・小の3軒の住居は、周辺に未調査部分が多いため土器溜り周辺の住居群と同一の単位集団かどうかの判断はつかない。井戸は6基確認されているが、それぞれ散在していて位置関係にとくに法則性は認められない。いっぽう、土器溜りの北西部の7～9B・C区あたりには土器棺墓群が3箇所認められており、居住域に隣接して小児の墓域が決められていたとみられる。そして、土器棺の下部の穿孔の有無が群ごとに違いがあることから、造墓の主体が別であり、世帯ごとに群が設けられた可能性も指摘されている（註4）が、居住域と墓域との位置関係からすれば、例えば土器棺墓B群は墓域以南の単位集団ごとの、土器棺墓C群は墓域以北または北東部の単位集団ごとの小区画として捉えることもできよう。いずれにせよ、この時期にのみ小児の土器棺墓が伴う意味は不明といわざるをえない。微高地1-2には、6軒の住居と13基の井戸が認められている。そのうち住居の5軒は、微高地のほぼ中央部の20Eあたりを中心にして弧状に配置されているようにも捉えられ、いくつかは同時存在の時期もあったという前提のもとでは、径25～30mの広場の周りに6～8軒位の住居の存在を想定できる。また、21F付近の井戸群のうち2井-16出土の大量の日常土器やそれに含まれる完形の製塩土器や彩文土器などの存





第343図 弥生時代後期集落の変遷 (1/2500)

在は、飲食に伴う祭祀に用いられ宴の後まとめて廃棄された可能性が強く(註5)、この単位集団ごとの祭祀かこの集団を含む微高地単位の祭祀かの判定はつきにくい。微高地1-1の5井-3や5土壙-16などにみられる同様の一括廃棄例からすれば、数年に1度の割合で単位集団ごとに行われた可能性が強い。

また、微高地の縁辺には、I期と同様に1~2条単位の水路が認められ、微高地1-2では新に南東部にも出現する。各低位部には水田が広がっていたと思われるが、I期と同様の理由で遺構としては捉えられていない。しかし、微高地の端部に可耕地が求められ開田が進みつつあったことは、水路の位置関係などから疑いない。

### Ⅲ期

この時期には、微高地1-1でⅡ期にも増して住居が集中する。中央の土器溜りにはこの時期の土器も多少含むことから、継続して土器の廃棄場所になっていたと思われる。そして、この土器溜りを中心にして同心円状に中・小規模の住居、北西に少し離れて大形住居が配置され、土器溜りの北寄りに貯蔵穴、住居群の南東部に井戸が集中している。倉庫などの建物は時期の確定が難しいため図示していないが、この地域の後期建物の総数は40棟近くを数える。そして、その多くは大形住居と土器溜りを結ぶ線より北東部に集中していることから、それらのうち何棟かがこの時期に伴う可能性は強い。また、この住居群はそのうちの何軒かは火災で廃絶した住居であり、各住居の位置関係などから同時存在は多くても6~7軒とみられる。微高地1-2は急速に進む端部の開墾により、微高地上の居住域が狭められ、調査範囲内では住居の数は減少している。ただ、微高地の中心部分を広く開け、その周辺に住居を配していた状況はうかがえる。

微高地縁辺の低位部の状況は、水路の位置およびⅣ期に洪水砂に覆われて検出された水田と同時に存在していた水路が少なくともⅢ期以降踏襲されていることから、Ⅳ期とほぼ同じ景観であったと推定される。つまり、この時期に急速に開墾が進んだと思われ、その要因は人口の増加とそれに伴う労働力の増加、それに加えて鉄製鋤(鋤)先(註6)などの鉄製開墾具の普及などがあげられよう。

### Ⅳ期

この時期には両微高地ともに住居が激減し、さらに散在する。Ⅳ期にはⅢ期にも増して開田が進んだはずで、人口が減少したことは考えられない。つまり、この状況は周辺の水田の可耕地化が飽和状態になったための単なる移動・移住とも解釈されるが、共同体の変質過程の一現象とも捉えられる。

もう少し加えれば、Ⅳ期の末にこの一帯を襲った洪水で、水田だけでなく微高地上も壊滅的な打撃を被ったことは調査の結果明らかであるが、この時期が古墳出現の胎動期というより前夜であることが、この後この地域での集団再編成に拍車をかけ、新しい時代へ向かう引き金になったことは十分考えられる。

また、微高地縁辺部の水路と低位部に広がる水田のあり方については、次の項でまとめてふれたい。

## 4. 弥生水田の展開

### 前期水田

この時期の水田は、26~32C・D区で約20×120mの範囲に検出されている。この水田層は、隣接する調査区では前期中葉から後葉の土器が出土する包含層として認識されていたもので、C・D区でそ

の上面の畦畔と思われるわずかな突起の連なりが区画を示したため、水田と断定された。区画は東西に細長い長方形が基本で、地形的には微高地の窪み部分の、北から南にわずかに下りながら開く扇状地形に占地している。水路は、東肩口に3条あり、その東側の幹線水路に接続されている。この水田域は南北方向の拡がり約80m位で、デルタ状に展開すると思われ、約5000㎡前後であったと推定される。時期は百・前・Ⅲと考えられている。

#### 中期水田

中期水田は、26～32C～F区と36・37E・F区、さらに41C・D区の3箇所に確認されている。そのうち26～32区の水田は、一区画の平面形態が亀甲形を基調とする方形または長方形を呈するものの、扇状地形に添って弧を描きながら基線となる小畦畔が走り、その間を短い畦畔で繋ぐ形態は、基本的には前期水田を踏襲したものと考えられる。層的には両者は10cm前後の間層で隔てられて存在しており、微地形にもほとんど変化がなかったようで、その拡がりも前期水田とほぼ重複していると思われる。後二者は、微高地に挟まれた谷頭付近の狭い範囲に分布しているとみられるが、それぞれの一区画の平面形は前者とほぼ同じで、また水路と水田はそれぞれに有機的な繋がりをもって存在することが捉えられている(註7)。ただ、幹線水路である2溝-171・173と2井堰-2・3および枝水路2溝-174～176の関係は、前期の4旧河道-2と橋脚列および4溝-125・2溝163の関係と状況が同じであるところから、再検討の必要性が指摘されている(註1)。これらの評価は、今後詳細な資料分析と討論を待たねばならないが、いずれにせよ当時の灌漑土木工事の技術の高さをそこなうものではない。なお、水田の時期は中期前半とみられている。

#### 後期水田

この時期の水田については、後期の中で徐々にあるいは急激に耕地面積を増加させてきた様子を前項でも水路との関連などで部分的にふれたが、なんとんでもその拡がり・占地状況・水田形態・灌漑機能などが具体的に捉えられるのは、この一帯覆った洪水砂で当時のままの水田景観が厚くバックされたⅣ期末の様相である。同時存在の水田の拡がりであれば、百間川河川敷の中だけでも百間川原尾島遺跡の西端から東へ、微高地を挟みながら約3km下流の百間川今谷遺跡にまで及んでいる。百間川原尾島遺跡では、14～41D～F区の低水路部分(幅約40×約550m)と28Y～D区の排水樋門部分に検出された水田遺構は、高畑知功により「百間川原尾島遺跡2」のまとめでその形状・立地・配水の方法・区画形態・面積などについてかなり詳しく説明が加えられてお

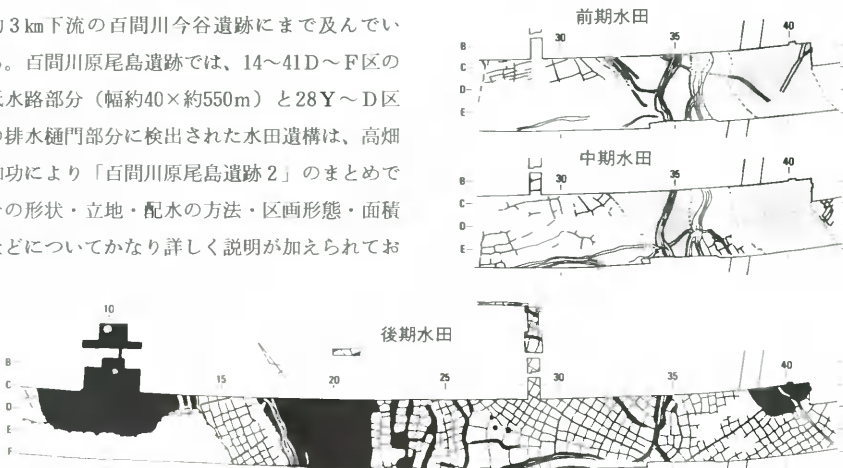


図344図 弥生水田の変遷 (1/5000)

り、さらに34・35D・E付近で検出された稲株痕跡の規模や分布状況から、田植えの方法や収穫量の推定にまで言及している（註8）。その後の調査範囲で検出された水田遺構は前調査区に継続して拡がり、基本的な評価は変わらない。ただ、あらたに微高地1-1の西側にも水田が拡がること、同微高地の東端に沿って幹線水路をもつこと、微高地1-2の西端に添う幹線水路（水路1）から直接水田に配水する形態があること、微高地1-3のほぼ中央部を流走する幹線水路（水路4）の存在と、それが水田域の畝畝に繋がることなどが判明している。

ここで、後期全体を通じての水田の展開を整理してみると、Ⅱ期のある時期に微高地の端部に開田が開始され、さらにⅢ期に急激に進み、少なくともⅣ期の初めにはⅣ期末に廃絶した水田の拡がりとはほとんど変わらない状態で経営されていたことは間違いない。Ⅳ期末の水田の形態は、2箇所旧河道上を含む低位部と前・中期水田に重なる微高地の窪み部分は比較的整然とした区画（一区画平均約60㎡前後）をもち、微高地縁辺では微高地の一部を島状に掘り残して、それらに挟まれた部分はおもに不規則な小区画に細分されるが、26F付近のように一区画が最大で約400㎡の広さをもつ場所もある。このように、微高地間に連続して水田が展開されているのは、おもに地形に規制された（地形に則した、あるいはそれを利用した）状態で開田が進行したことを示す。そして、水路の形態でみると少なくともⅢ期以降は、2～3本単位で並走する幹線水路が同時にあるいは供給に応じて機能していたとみられる。例えば、水路1は16C区で旧河道上の低位部に展開する水田の側面に配水し、かつ下流部で分岐して他の2条の水路とともに、さらに下流に並走する。この状況は、単にこの下流域の水田に配水するだけでなく、幹線水路を複数にしたうえで分岐あるいは合流させることにより水量調節が計られ、さらに上流部で水の供給源を別にすることにより水量の確保が計られていることが取敢される。また、33・34C～F区の畝畝は同様の配水機能だけでなく排水機能も有している。これらのことは、もちろん当時の灌漑技術や土木技術の高さを示すだけでなく、多大な労働力を結集させる勢力の存在や、さらに水利を同じくする広範囲の水田の維持・管理・経営を統括する中心的な集団の存在がなくてはならないことである。

そして、先にふれた微高地1-1・2での後期の集落構成のあり方は、Ⅱ期からⅢ期にかけて、つまりこの周辺で急激に開田が進んだ時期の母村的集団であった可能性が高いが、Ⅳ期水田の廃絶直前の微高地上の集落構成は非常に粗で、母村とは考えにくい。おそらく、その間に集団の分岐・分散があった結果だと思われるが、具体的な検証となると非常にむずかしい。今後とも他集落を含めた同時性や継続性、遺構・遺物の優位性等々をさらに細かく検討し、追究する必要がある。（柳瀬昭彦）

## 註

註1 「百間川原尾島遺跡4」p.p. 196～211

註2 集落の対象遺構は、堅穴住居・井戸・水路・水田を取り上げ、細かな時期確定が難しい建物についてはふれていない。

註3 「百間川原尾島遺跡1」p. 289

註4 「百間川原尾島遺跡3」p. 288

註5 「百間川原尾島遺跡2」p. 306

註6 「百間川原尾島遺跡3」M20・M39・M40

註7 「百間川原尾島遺跡2」p.p. 612～615、p.p. 664～667

註8 「百間川原尾島遺跡2」p.p. 667～682

## 第2節 古墳時代の集落

百間川原尾島遺跡での古墳時代を通じて堅穴住居の総数は、50数軒にのぼり、その大半は微高地1-1に集中している。もちろん調査区外にも多くの住居等の存在が想定されるが、ここでは既報告の住居を中心にして時期別に提示(第345図)し、その分布状況から集落構成を検討していきたい。なお、古墳時代の範疇であっても時期の明確でない遺構、および建物の大半と土壌については図示を省略した(註1)。また、使用する時期の細分は下記のとおりであり、「百間川原尾島遺跡3」の考察で使用している時期区分(註2)を踏襲し、堅穴住居等の略称は前節と同様に使用する。

### 1. 古墳時代の集落構成 (I～VII期)

#### I～II期 (百・古・I～II)

この時期は、いわゆる弥生時代後期末の大洪水から立直った時期にあたり、図示した微高地1-1ではどちらかといえば北寄りに堅穴住居が8軒+ $\alpha$ 、そして井戸は居住区端の4基を含む計5基が認められている。また、同微高地の上流部の別地点にあたる左岸用水および新田サイフォン調査区(「百間川原尾島遺跡1」所収)では狭い範囲ながら9軒もの堅穴住居が知られており、この時期には全体的に微高地中央から北に集落の中心があったと推定される。さらに、新田サイフォン調査区には一辺9m前後の隅丸方形の大形堅穴住居が2～3軒確認されており、大形住居と数軒の中小形住居で構成される規模の集団の存在がうかがわれる。

微高地1-2では隅丸方形の中小形堅穴住居が3軒と井戸が4基、そして当該高地の西端の肩部に沿う大溝(2溝-73、5溝-29)などがある。ただし、大溝は堆積状況からこの時期だけでなく古墳時代を通じて機能していたと思われる。また、井戸のうち1基を除く3基は、3軒の住居から60m以上も離れた微高地東端にあり、位置関係からすればその間に削平された住居の存在も否定できない。

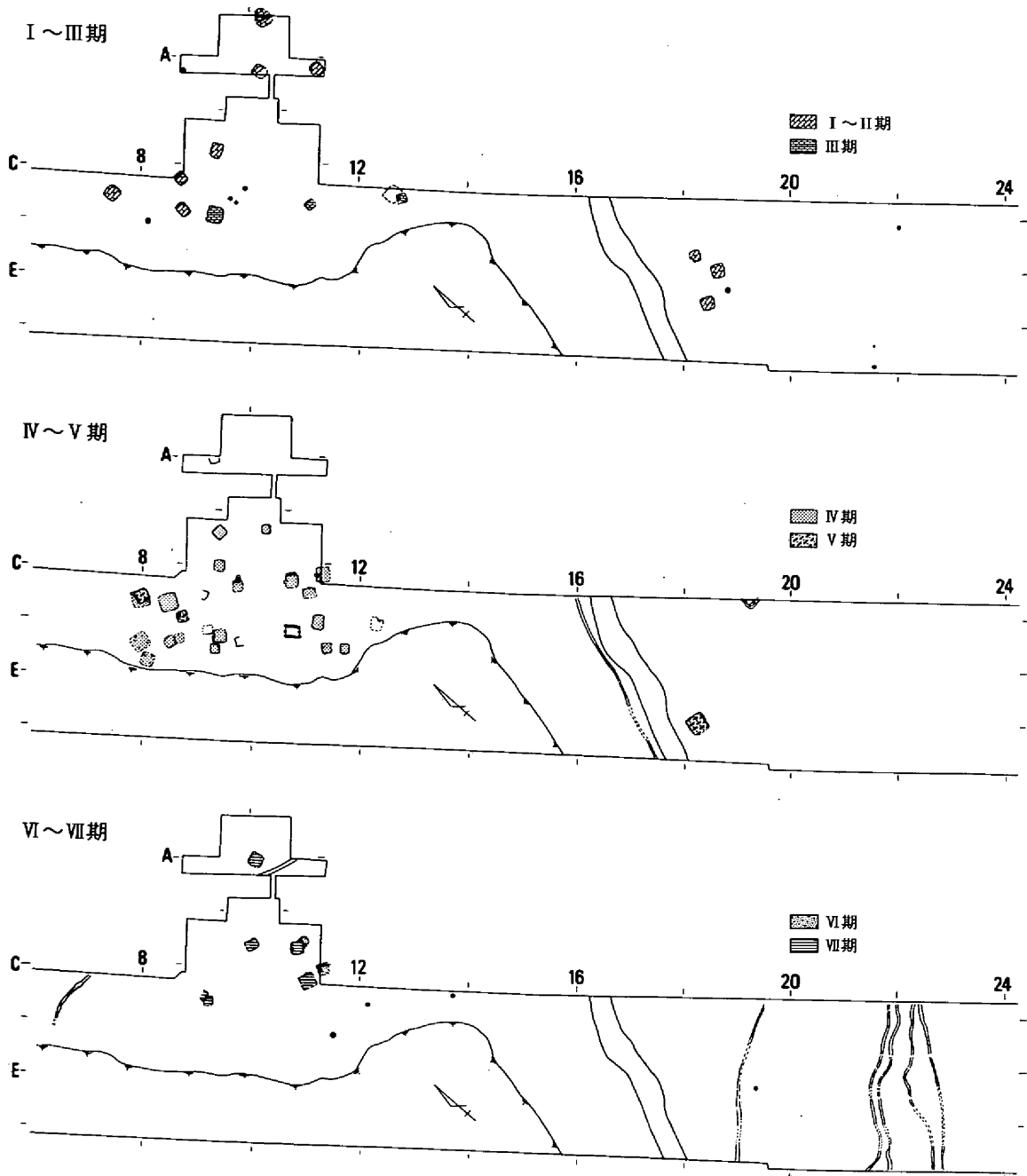
#### III期 (百・古・III)

この時期の堅穴住居は、微高地1-1では中形住居1軒と小形住居2軒の計3軒しか確認されていない。また、上流部の左岸用水等の調査区と微高地1-2では、住居・井戸ともに皆無で、それぞれの微高地の別地点または別の微高地にこの時期の集落の中心が移ったことを示す。

微高地1-1の中形住居3住-19および小形の4住-10は造り付けの竈を有し、さらに両者に甗が伴出している。このことは、この時期が古墳時代を通じて盛行する造り付け竈と甗の初現であり、朝鮮半島からの新たな文化を採り入れた一大画期として捉えられる。この時期には韓式系土器あるいは初期須恵器が伴ってもおかしくはないが、今のところ近辺を含めて確実な例はない。

#### IV期 (5世紀後半～6世紀初頭)

この時期は、微高地1-1で堅穴住居が18軒+ $\alpha$ とIII期に比べて急激に増加する。しかし、これら全部が同時に存在していたのではなく、ほぼ同規模の住居が接近してあるいは一部重複して存在するなどの位置関係から、8～9軒の住居が2期あるいは3～5軒の単位で3～2グループが2期にわたって営まれたとみられる。住居の規模は一辺が4m前後の小形がほとんどを占め、あとは一辺6m強(推定含む)の中形が3軒ほどで、一辺8m以上の大形は調査区内では確認されていない。建物は集落の南寄りの10D区に1軒(4建-8)のみ検出されている。この建物は3間×2間の規模をも



第345図 古墳時代集落の変遷(1/2500)

ち、桁行方向の柱穴掘り方は布掘りであった。倉庫とみられる。井戸はこの集落のほぼ中央部に位置する大形の5井-10が、IV~V期を通じて機能していたと思われる。

堅穴住居は全体的に削平頻度が高いものの、造り付け竈を有する住居が半数以上にのぼることは確実であり、この時期にはかなり普及が進んでいたことが看取される。

いっぽう、微高地1-2は堅穴住居・井戸ともに皆無であり、微高地1-1と対照的である。

V期(6世紀前半~中頃)・VI期(6世紀後半)

V期は堅穴住居が微高地1-1で中形2軒、微高地1-2で大形1軒しか認められておらず、両微高地ともに大溝の西側に並走する5溝-28(2溝-72)と19C区の棟持ち柱を有する建物(5建-12)を除き、他の遺構もほとんどない時期である。VI期は微高地1-1で堅穴住居が小形2軒と井戸1

基、微高地1-2では井戸1基と21区の溝2条のみで、Ⅳ期と比べて全体に過疎になった感がある。

両期のこの現象が、ただちに集団の規模の縮小化あるいは分村化を示すのかどうかは、削平の頻度などにもよるため、必ずしも明確ではない。

#### Ⅶ期（6世紀末～7世紀初頭）

この時期は、微高地1-1で小形竪穴住居5～6軒と井戸1基、微高地横断する溝(3溝-35=38)1条およびその周辺の調査区北寄りに掘立柱建物約20棟などが存在する。また、上流の左岸用水等の調査区でも竪穴住居2軒が確認されている。微高地1-2では、19区と22区に計3条の溝が確認されたのみである。

掘立柱建物は総柱の3建-43が倉庫、そのほかは居住建物と思われる。そして建物群は、東西方向の3溝-35=38によって北側に4～5棟、南側に14～15棟と分断されているようにみえる。これらは主軸方位や位置関係からすれば建物群全体が同時に存在したとは考えられず、かといって溝を境に各群に画一性や統一性が認められるともいえない。建物の軸線方向で共通性を捉えれば、とくに溝に関係なく3～4棟単位で4グループほどで構成されていたとみられる。そのため、溝の性格は集落を区画するというより微高地を横断して別水系の用水を確保させる水路であった可能性が強く、遺物からは建物が建てられた頃には3溝-38がかなり埋まっていた(註3)という指摘とも符合する。

この時期には竪穴住居と掘立柱建物とが併存する集落の姿が浮かび上がるが、一時期の同時存在という観点からすれば、竪穴住居3軒+掘立柱建物3～4棟くらいではなかろうか。ともあれ、この時期から建築様式とともに居住空間の違う建物を生活の場に採り入れたことは間違いなく、この時代の集落の変遷における一大画期として捉え得る。

## 2. おわりに

以上、古墳時代をⅦ期にわけて、微高地1-1・2を中心に各期の集落の変遷を概述した。これまで微高地1-1の調査区のうち北側約半分の範囲については、「百間川原尾島遺跡3」の考察で集落の変遷がまとめられている(註4)。本稿ではその前・後の調査部分の成果を加えて再編し、若干の考察を加えたものであるが、各期における集落構成や古墳時代を通じての集落の消長などの評価は、基本的には前結果ととくに変わっていない。

本稿は紙面の都合等もあり、おもに遺構についての最低限の事実関係の提示以上の論及までには至っていない。百間川原尾島遺跡では古墳時代の中だけでも、時期が新しくなる遺構(とくに住居)ほど両微高地ともに削平頻度が高く、当時のままの事実が抽出されていない恨みもあるが、もう少し具体的な集団の構成や集団間の優劣の関係、今のところ確認されていない古墳期の水田と集団との関係の追究等、今後の検討課題も大きい。

(柳瀬昭彦)

### 註

註1 建物は「百間川原尾島遺跡3」p. 297の第340図参照。

註2 「百間川原尾島遺跡3」p. 295・296

註3 「百間川原尾島遺跡3」p. 298

註4 「百間川原尾島遺跡3」p.p. 295～298 なお、この中の第339図凡例中の(Ⅱ期)を(Ⅲ期)に、また298頁の建物番号をそれぞれ2を加えた番号に訂正をお願いしたい。

## 第3節 古代の遺構・遺物

### 1. はじめに

百間川原尾島遺跡の古代の遺構は少なく、その理由としては後世の地下げ等、大規模な土地改変が考えられている。唯一検出した遺構である『百間川原尾島遺跡5』の「溝35」は、溝底に井堰や落ち込み列を配することや、木製模造品等の特殊な遺物を出土することで注目されるものである。ここではまず、遺構・遺物を再検討し、ついでそれら諸要素の意味するところについて考えてみたい。

### 2. 遺構について

溝は北から南に流走する。埋土は大きく三層に分けられ、断面観察では中層段階で溝幅が最大規模となる。下層段階は、溝底の井堰の広がりから東肩が1～2m西に寄っていたと考えられ、その溝幅は10～12mに推定される。

**立地** 微高地に位置し、弥生時代後期～古墳時代の集落上にあたる。溝が人工的なものか否かの判断は難しいが、微高地の比較的高所に位置することから、洪水等で形成された自然河道ではなく、人工的に掘削されたものと考えたい。また、弥生時代後期の水田や古墳時代の大溝等は、弥生前期の自然河道上の低位部を掘削して労働力を軽減したと考えられるのに対し、微高地上を新たに開発する労働力は多大なものであったと推察される。

**井堰・落ち込み列** 溝底には、井堰と落ち込み列が各2箇所認められた。これらは埋土の状況と、杭の頂部の欠損が中・下層の境である標高300cm前後にはほぼ揃うことから、いずれも下層段階で埋没したことが判る。また、杭は溝底の一段低い洗掘部に遺存しているのに対し、杭穴の多くは標高300cm以上に集中し、中層の下面に位置する。このことから杭穴は、井堰廃絶後の中層段階以降に杭が流出したり、腐朽したものと考えられる。なお、各々の規模等については報告に詳しいので、ここでは次の構造的特徴を指摘したい。

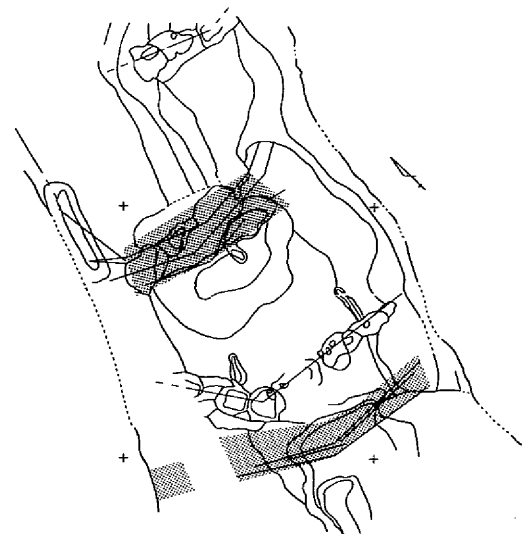
a. 杭の打ち込み方向は、真直ぐのものが過半で、斜めのものにも特にまとまりはみられない。

b. 杭や杭穴の連なる箇所があり、そうした列が幾重かに並ぶ。

c. 井堰と落ち込み列は、溝を横切るように設けられるが、平面形は単純な直線ではなく、井堰1が「L」形、井堰2と落ち込み列2が「V」形を呈し、いずれも上流側に開く形態をとる。

d. 井堰2は、杭列の上流側に横木と草木や砂を組合せているが、井堰1には認められない。

以上の事実から、井堰は「直立型堰」(註1)に分類され、落ち込み列もほぼ同様の構造であったと考えられる。井堰1の中央部は、繰り返して修



■ 杭と杭穴の集中する部分

第346図 溝35の杭列と杭穴概念図



理・補強が行なわれたものか、杭列や杭穴列が顕著である。また、dのような構造は、時期の大きく遡る例であるが大阪府池島遺跡（註2）や山賀遺跡（註3）等にみられる。さらに、規模は異なるが岡山市津寺遺跡（註4）の奈良時代に廃絶したとされる護岸施設にも類似する構造がみられる。

検出した井堰と落ち込み列は、落ち込み列2(1)→井堰2→井堰1の順に機能していたものと考えられる。ただし、井堰1と2は同時に存在していた可能性もあり、その際には井堰1は開放していたのかも知れない。また、現代にもみられる「草堰」のような季節・臨時的な使われ方をしていたとも考えられる。なお、溝の肩部や周囲は、後世の攪乱を激しく受けている。このため、分水路等については不明で、平面形態の問題とともに井堰の具体的な機能を明確にし得ない。

### 3. 遺物について

出土遺物には、官衙関連として墨書土器、墨入れ、石銚があり、祭祀関連として木製模造品とその他の木製品、金属製品がある。

**須恵器・土師器** 奈良時代の土器（911～914、916～923、951、952）は、すべて須恵器であるが、遺存状態が悪く器面の荒れたものが多い。その他の土器は平安時代に属すが、中でも924～926、928～935の須恵器と936～948の土師器は、いずれも「底部押圧技法」を用いるなど、成・整形技法上の差異はない。これらの杯は口径の12cmと13cm前後にまとまり、皿にも大小がある。岡山市鐘鋳場1号窯との類似が指摘され（註5）、溝からの出土ではあるが、平安時代初頭の比較的まとまった資料として注目される。また、後述する律令的祭祀をとり行なった時期を示すものでもある。

**墨書土器** 5点出土している。「酒」、「下」、「大」については明瞭に読める（註6）。「酒」は内容物を記したのであろうが、このように底部内面に墨書するものは珍しい。「下」は、以下に字句の続く可能性があり、「上」に対する「下」として場所等を示していると考えられる。「大」については、数量の大小を示すか、「大〇」等の略字の可能性はある。

さて、ここで特に注目されるのが928の墨書である。これを「官家（註7）」としてミヤケと読むと、国府津や国津あるいは郡津と考えられる百間川米田遺跡出土の「上三宅」墨書土器（註8）との関連が指摘できる。つまり、「上三宅」は8世紀後半に比定されることから、近接した時期の約3.5km離れた場所にミヤケと呼ばれる官衙施設が存在したことになる。また、墨書土器における「家」字の他の用例からも、少なくとも行政の拠点を象徴する意味があると考えられる。

**木製模造品** 人形、斎串、武器形の刀・鎌があり、いずれも薄い板材を加工した祭祀具である。

人形木製品の使い方は、「一撫一吻」によって我が身の罪穢や悪気を人形に移し、溝や川に祓い流すというものである。出土した4点の全長は、完形品のW23が26.7cm、W24が17.8cmで、欠損品のW22は40cm以上を測り、大きさに隔りがある。これは異なる規模の人形を組み合わせて使用したためと考えられる（註9）。形態的には、頭頂部の表現に円・山・台形等の差異がみられるものの、頸部に入れるV字形の切欠きにより、頬がやせ怒り肩となる点が共通する。また手足については、W25が側面から切込みを入れて腕を表すのに対し、W23・24は切欠きで表現する点で共通する（註10）。なお、他例に多くみられる墨書等による顔の表現はない。

斎串には、山形県俵田遺跡（註11）の出土状態から明らかなように、人形等のまわりに立てて結界を表した使用例がある。これは外部の悪気を遮断するとともに、人形が負った罪穢を外に漏らさない役割を果たしたと考えられる（註12）。図示したものは4点であるが、このほか細片であったため紹介

できなかったものが数点ある。形態的には、上端を圭頭状にし下端を剣先状につくる。また、上端の斜辺から切込みを入れるものと入れないものの両者がある（註13）。

武器形木製品は、武器としての機能から、祭祀の場にある罪穢や悪気を断つために用いられたと考えられる。本来は実用品であったと考えられるM7の刀子やM9～11・W32の鎌、W42の丸木弓も同様の用いられ方をしたのであろう。刀形木製品は、W33の1点のみ出土している。刀身と茎からなるが、刃の表現はない。下端を尖らせるのは、地面に突き立てるためであろう。また、鏃形木製品はW34の1点が出土しているが、大振なことと、茎が扁平な点でやや疑問が残る。なお、下端の欠損近くに円孔を一つ開けている。

#### 4. 律令的祭祀について

前項で検討した遺物のうち、木製模造品や刀子・鎌・弓等は、祓に用いられた品々と考えられる。さらに、共伴する墨書土器や石鈿等の官衙関連遺物や、平安時代初頭という時期を勘案すると、「8世紀初頭に公布された大宝令の神祇令とよぶ篇目によって規定され、実施された国家的祭祀（註14）」である律令的祭祀、中でも重要な大祓に関連する可能性が高い。この大祓は、都城や国土を穢や災い、罪から守り、天皇の寿命を全うするためのものであり、『養老令（大宝令）』の「神祇令」に規定がある（註15）。また、その具体的な内容は、10世紀に成立した『延喜式』の規定から判る（註16）。

こうした大祓に関連する遺構・遺物は、平城京・長岡京・平安京の各京内で数多く知られており、中には文献資料に著された祭場と考えられる遺跡も確認されている（註17）。また、京外や地方においても、平城京外の稗田遺跡（註18）、長岡京外の大藪遺跡（註19）、西山田遺跡（註20）、但馬国府関連の兵庫県川岸遺跡（註21）、出羽国府関連の俵田遺跡等が知られている。これらは、祓所そのものが見つかった俵田遺跡例を除くと、ほとんどが側溝や堀、川といった水に関係した遺構に祭祀具が二次的に祓い流されての検出である。また、稗田遺跡が朱雀大路から延びる下ツ道と人工河川の交わる地点に位置することや、俵田遺跡の祓所に近接する溝が道路の側溝である可能性が指摘されていることから、大祓のなされた場所は、すべて側溝や堀、川そばの路上あるいはその近くと考えられ、その路は京内や国府につながるものであったと推定されている。

#### 5. おわりに

百間川原尾島遺跡における大祓の主体として考えられる備前国府の比定地については、江戸時代以来多くの先学によって論攷が著されているが、いまだにその決着をみていない（註22）。しかし、歴史的な環境からしても旭川東岸の旭東平野におかれていたことは明らかであろう。そして、今節で述べた平安時代初頭の官衙関連や大祓の資料もそれを裏付けるものである。つまり、大溝の河辺の路上に臨時の祓所が設けられ、大祓がなされたと推定されるが、それはその路が備前国府に通じていたからにはほかならない。この大祓は宮都から波及したものであり、『延喜式』にみられる規定に準じていたと考えられる。溝出土の資料であり、欠失品等も予測されるため軽々に論じ得ないが、他例と比較して祭料に違いがみられる点など、地方における大祓の一形態を示す重要なものである。（高田恭一郎）

#### 註

註1 広瀬和雄「堰と水路」『弥生時代の研究』第2巻 雄山閣出版 1988年

- 註2 『池島遺跡試掘調査概要・I』大阪府教育委員会 1982年
- 註3 「山賀(その1)」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1983年
- 註4 「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98 岡山県教育委員会 1995年
- 註5 武田恭彰氏の御教示による。  
武田恭彰「古代土器生産についての一予察(1)」『古代吉備』第11集 古代吉備研究会 1989年  
同 「岡山県に於ける古代土器様相の再検討」『古代吉備』第14集 古代吉備研究会 1992年
- 註6 墨書土器の釈読については狩野久氏に依頼し、多くの御教示を頂いた。
- 註7 「官家」墨書土器の出土例には、大阪府城山遺跡の7世紀後葉の「富官家」がある。報告では日本書記等の「官家」の用法には混乱がみられ、必ずしも屯倉あるいはその発展形態と同一視できないとしている。「城山(その3)」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター 1986年  
なお、直木孝次郎は「富官家」の「官家」をミヤケと読み、7世紀後半の用例として重視し、ミヤケの表記は、御宅・三宅・三家→官家→屯家・屯宅→屯倉の順に用いられたとしている。  
直木孝次郎「官家と屯倉」『橿原考古学研究所論集』第十二 吉川弘文館 1994年
- 註8 「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』52 岡山県教育委員会 1982年
- 註9 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 1985年
- 註10 「木器集成図録(近畿古代編)」『奈良国立文化財研究所史料』第27冊 奈良国立文化財研究所 1985年  
これによる分類では、W22がBⅡ、W23とW24がBⅡa、W25がAⅡとなる。
- 註11 「俵田遺跡第2次発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第77集 山形県教育委員会 1984年
- 註12 註9に同じ
- 註13 註10「図録」に同じ  
これによる分類では、W27がC(?)Ⅳ、W28とW29がCⅠ、W30がCⅢとなり、C類は一部が7世紀第Ⅲ四半期に出現、8～9世紀に展開するとされる。
- 註14 井上光貞「古代沖の島の祭祀」『日本古代の王権と祭祀』東大出版会 1984年
- 註15 『養老令』卷第三「神祇令」第六〔大祓条〕「凡て六月、十二月の晦日の日の大祓には、中臣、御祓麻上れ。東西の文部、祓の刀上りて、祓詞読め。訖りなば百官の男女祓の所に寄り集れ。中臣祓詞宣べ。ト部、解へ除くこと為よ。」、〔諸国条〕「凡そ諸国に大祓すべくは、郡毎に刀一口、皮一張、鍬一口、及び雑の物等出せ。戸毎に麻一条。其れ国造は馬一匹出せ。」
- 註16 『延喜式』卷一神祇一四時祭式上六月晦大祓条には、繊維製品・海産物・農作物等以外の祭料について、人形・刀・弓・篋・鍬を用いることが規定されている。
- 註17 註9に同じ
- 註18 「稗田・若槻遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1980年度』奈良県立橿原考古学研究所 1982年
- 註19 『大藪遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会 1973年
- 註20 「長岡京跡右京第104次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 長岡京市埋蔵文化財センター 1984年
- 註21 「16. 川岸遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』兵庫県教育委員会 1987年
- 註22 伊藤 晃「備前」『新修国分寺の研究』第四巻 吉川弘文館 1993年

## 参考文献

- 泉 武「人形祭祀の基礎的考察」『考古学論攷』第8冊 奈良県立橿原考古学研究所 1982年
- 金子裕之「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所研究論集』Ⅵ 奈良国立文化財研究所 1980年  
同 「都城と祭祀」『沖の島と古代祭祀』吉川弘文館 1988年
- 黒崎 直「斎串考」『古代研究』10 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室 1976年
- 水野正好「福德—その心の考古学」『奈良大学文化財学報』第1集 奈良大学 1982年  
同 「馬・馬・馬—その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2集 奈良大学 1983年  
同 「招福・除災—その考古学—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 1985年

## 第4節 中世の村落

### 1. はじめに

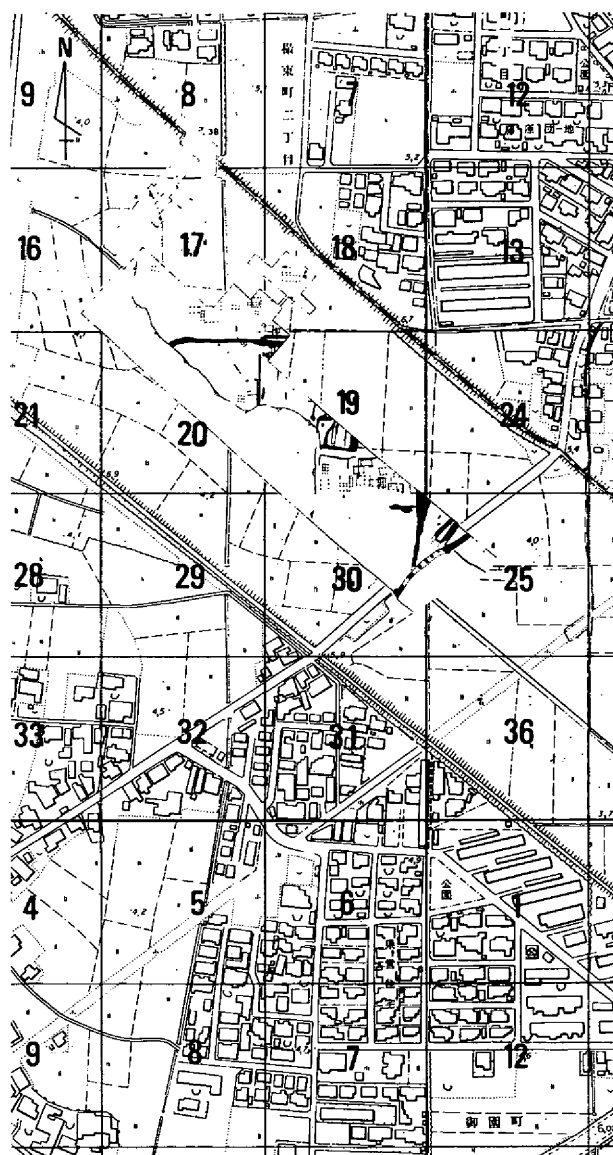
昭和52年（1977年）から始まった百間川原尾島遺跡の発掘調査によって、数多くの成果がもたらされている。中須賀・丸田・三股ケの各調査区にまたがって検出された中世集落跡もその一つである。12000㎡にわたって無数の柱穴をはじめ、掘立柱建物や溝・井戸・土壇など各種の遺構が集中していた。これほど広範囲にわたる中世集落跡の調査例は少なく、重要な資料と考えられる。ここでは、これまで発表されてきた成果（註1）と今回報告した成果を合わせ、あらためて原尾島中世村落（註2）についてのまとめを行いたい。

### 2. 原尾島村落の消長

原尾島村落は11世紀後半から始まるようで、初期の遺構として井戸9（Ⅲ）がある。出土した土師器碗は器形や調整手法から鹿田編年のⅠ-1期に該当するとみられ（註3）、11世紀後半に位置づけられている。一方、村落の廃絶した時期は16世紀前半ではないかと推測される。これは二つの事実による。一つは、村落が廃絶することになった直接の原因ではないかと考えられる、大規模な河川の氾濫によって形成された河道の存在である。この河道は村落の南西に位置するが、15世紀代後半とみられる備前焼Ⅳ期の甕を出土している溝78（Ⅳ）を破壊していた。いま一つは、村落内の溝は東西あるいは南北の流走方向をとるが、これと流走方向を異にする溝の存在である。溝90（Ⅱ）からは内耳鍋と明の染付皿が出土し、16世紀前半と考えられる（註4）。また、溝75（Ⅳ）は河道と平行し、出土した備前焼すり鉢はⅣ期末かⅤ期の初頭と思われ、16世紀前半とみられる。これらの溝は村落の廃絶後の遺構である可能性が高く、建物13・18（Ⅴ）もこの時期のものではないかと推測される。

このように、原尾島中世村落の成立と廃絶の時期は判明したが、この間の村落の継続性が問題となる。平井泰男によってまとめられた原尾島遺跡出土の中世土器の中では時間的な断絶は認められない（註5）。とくに、この期間内での編年がほぼ確立している備前焼でみると、Ⅰ期からⅤ期まで連続して出土がみられる。調査の初期には、北部の中須賀調査区出土の土器が12世紀末から13世紀代のものを主体とするのに対して、南部の丸田調査区の土器は14世紀から16世紀にかけてのものが多かったことから、両調査区の集落は同時には存在しないとされていた（註5）。しかし、その後の調査の進行によって、北部でも15世紀の井戸10（Ⅲ）や井戸16（Ⅳ）が検出されたことから両地区の集落は同じであり、時代とともに拡大したものと考えられるようになった。

ところで、原尾島中世村落は成立時から条里制地割によって規制を受けていたと考えられる。北部の村落内を東西に走る幅300cmの溝39（Ⅴ）（溝25（Ⅱ）・52（Ⅲ））は第347図に示すように、現存の条里地割の坪境の線とほぼ一致している。溝39は13世紀の後半には埋没したようであり、原尾島村落の前期の遺構とみられるが、周辺の建物の棟方向や土壇墓の中心軸の方向は溝39と平行あるいは直交していて、全体として条里制地割に沿う形となっていた。さらに言えば、三股ケ調査区にあたる新田サンフォン調査区で検出された12世紀後半の東西溝D-2（Ⅰ）は、溝39の1町北の坪境に近接していて、このあたりが原尾島村落の北端と推定される。前期の原尾島村落は方1町半程度の広さはあっ



第347図 原尾島中世村落周辺現存条里坪割 (1/5000)  
 (「百間川原尾島遺跡2」より)

たものと考えられる。

### 3. 前期の原尾島村落

平安時代末期から鎌倉時代前半にかけて機能していたとみられる溝39(V)の周辺では、十数棟の掘立柱建物と12基の土墳墓が検出された。建物の時期を決定するのは難しいが、建物54・55(Ⅲ)の柱穴からは13世紀前半の土器が出土し、後述するような柱間からみた構造上の特徴からみても、溝39の北側の建物は、建物14(V)を除いて、鎌倉時代前半までのものと考えたい。11世紀の井戸9(Ⅲ)もこの地区に所在し、建物58(Ⅲ)が隣接していた。土墳墓からは舶載の青磁・白磁が出土していて、その年代観から墓の時期は12世紀末から13世紀前半と判断される(註6)。以上のようなことから、溝39周辺の遺構の状況は原尾島村落の前期の様相を表していると考えられる。

さて、そこで改めて溝39の北側の建物をみると、15~30mの間隔をもって主な建物が配置されていることがわかる。すなわち建物48・49・53・58(Ⅲ)がそれぞれあり、より小形の建物がそれぞれ付属していた。また、土墳墓については、4基が集中

していた例もあるが、これを一所とみれば、やはりある間隔を置いて孤立しているといえる。この土墳墓と建物の関係は、建物58と土墳墓2~5(Ⅲ)を除いて、明瞭ではない。しかし、土墳墓周辺の多数の柱穴の存在から、隣接して建物があったものと推測される。したがって、これらの土墳墓は橋田正徳の説く前期屋敷墓(註7)である可能性が高い。このように考えてくると、柵や溝のような明瞭な区画は確認されなかったものの、溝39の南北両側に屋敷地が整然と並んでいたものと想定される。このように、原尾島中世村落は平安時代後期に集村化の流れの中で成立した条里集落といえる。

それでは、そこに居住した人々はどのような階層に属していたであろうか。前述したように、主な建物はほとんどが小形の建物を付設していて、一個の独立した経営主体であったと考えられる。主な建物の床面積を測ると、建物49が25㎡、建物53は36㎡、建物58が47㎡であった。これに対して、橋本久和が研究対象として紹介して(註8)以来、中世村落の典型としてしばしば取り上げられる大阪府宮田遺跡のA地区の建物A-6の床面積は底部分も含めて36㎡、建物A-7は27㎡を測る。この宮田遺跡については、橋本や原口正三はA地区がB地区より優位を占める社会的な格差を認め(註9)、さ

らには主従的な関係にまで言及している。原口はA地区の居住者を名主層と暗示している(註10)。このことからすれば、原尾島村落の主要な建物の居住者は名主層といえる。

この問題については土壙墓も重要な資料となる。土壙墓の副葬品をみると、土壙墓3(V)では湖州鏡や舶載の劃花蓮華文青磁碗や青磁皿、土壙墓4(V)では舶載の白磁碗・皿合わせて6点という優秀なものがある一方、土壙墓2(V)では舶載の白磁碗1点と地元の土師器小皿1点、土壙墓1(V)では刀子1点、さらには土壙墓2~5(Ⅲ)では副葬品はないというように大きな格差が認められた。土壙墓2~5は建物58と関係する可能性が高いことから、名主層の中にも階層差のあったことが知られる。とくに、土壙墓3・4の副葬品は岡山県内出土の類例資料と比較してもっとも優秀である。また、原尾島村落からは舶載の磁器類がかなり出土していることも注意される。土壙墓3と4が主軸を直交させるものの、近接していることから、その周辺に在地領主の屋敷地を想定することはできないだろうか。

#### 4. 後期の原尾島村落

室町時代に入ると、原尾島村落の様相は大きく変わる。それは、屋敷地を取り囲む溝あるいは堀の出現による。原尾島村落の東を画すると考えられる溝45(V)は幅390cm、深さ110cmを測り、その断面形は整形な逆台形を呈して堀と呼ぶにふさわしい。この溝は第347図にあるように、条里地割に合致し、現小字名の「二ノ坪」「三ノ坪」が往時の坪付けを遺存したものとすると里境の溝となる。溝45はその規模や形状から判断して溝89(Ⅱ)に続くと考えられている。しかし、溝89は、下流方向である南に向かうにつれて流路を西に振り、里境の線からはずれていく。この流走方向に合うのは、人形等の祓所関係の遺物を出土した古代の溝35(V)の最終段階と考えられる溝47(V)である。溝45からは遺物がほとんど出土しなかったが、溝47と溝89からは13世紀代の遺物がかなり出土した。溝89からは14世紀末の土器も出土していて、特徴のある形状からも溝45と溝89の連続が確実視されるとすれば、13世紀には溝47から溝89へと流れていた溝が、14世紀代に溝45から溝89へと掘り直されたと考えざるをえない。溝45・89では、底部で落ち込みが不規則に連続したり、所々に間仕切り状の土手が内側に張り出したりして、かなり人為的な造作がなされていた。間仕切り状の土手は樋を入れるための造りのようで、溝45・89は農業水路としての機能も有していたのではないかとみられる。

溝45から西へ1町(108m)離れた坪境の線は、ちょうど溝76(V)・30(Ⅱ)の上に位置している。溝76のすぐ西には平行して溝77(N)・29(Ⅱ)が走っていた。溝76と重複して、より新しいと考えられている溝78(N)からは備前焼Ⅳ期の甕が出土し、15世紀代後半とみられることから、溝76は14~15世紀の室町時代の遺構とされる。溝76を北に延長していくと、溝38(V)の西端の屈折部分に当たる。溝76と溝38の間は近世以降の溝によって破壊され、溝38の年代も明瞭ではないが、二つの溝は連続していたのではないかと考えたい。溝の幅は60cm前後で、深さは15cm程度と浅い。溝38も溝37(V)と重複関係にあった。溝38から今度は南に1町離れたあたりには、溝42~44(V)が検出されている。溝42~44は溝45に切られ、溝47へ続くとされ、出土遺物等からも13世紀後半の遺構とされている。しかし、この溝群を境として、南側には柱穴がほとんど検出されず、北側の建物群が室町時代のものと考えられることから、室町時代にあってもこの付近が境界として意識されていたと思われる。このように、溝45と溝76と溝38によって区画された幅1町の敷地があり、さらに、溝42~44付近のあり様を考慮すれば、方1町の区画が浮かび上がる。

この方1町の区画の中に、内郭とでも呼ぶべき、さらに溝によって方形に区画された敷地が検出されている。方形区画は三つあり、一つは溝83・87・91（Ⅳ）に囲まれたもの、二つは溝88（Ⅱ）・94（Ⅳ）に北端を画されたもの、三つは溝96（Ⅳ）・40・41・45（Ⅴ）で北半を限ったものである。この三つの区画がそれぞれ独立した屋敷地かどうかは問題となる。まず各区画内の建物をみてみたい。最初の区画内には建物は報告されていない。しかし、調査時点での写真（註11）では平行する柱穴列が2条表現され、柱穴間には対応関係が認められるようである。柱穴の規模は不揃いで、並びにも乱れが認められるが、梁間230cm、桁行1010cm程度の細長い建物が推定される。さらに、この区画の北東部分では大形の柱穴が検出されていて、調査区外にかけて建物の存在していた可能性がある。溝88で囲まれた敷地内には建物16（Ⅱ）・17（Ⅱ）の2棟が検出された。建物16は3間×2間の総柱建物で倉庫と考えられる。建物17では建物の南西隅で西壁に接して備前焼の大甕が埋置されていたようで、2間×1間の構造にもかかわらず梁間が450cmと広く、住居とは考え難い。何らかの作業場ではなかろうか。最後の区画は東西幅が36mともっとも広い。溝96・40と接するように位置する建物19（Ⅴ）をこの区画に伴う建物と考え、建物の重複関係から判断して、建物22・26～28（Ⅴ）は区画内の建物として、建物19と同時あるいは近接した時期と推測される。これらの建物の構造は一般的で、住居と判断される。このようにみると、各区画の様相は異なり、単純に三つの屋敷地が並んでいるとはいえない。むしろ、機能を異にする区画が並んでいるとみられ、全体としてより大きな屋敷地を形成していたと考えられる。

あらためて、方1町の区画に目を向けると、最初の溝83他に囲まれた敷地はその中央に位置している。溝の規模をみると、溝87が幅150～200cm、深さ48cmであるのに対して、溝94は幅63cm、深さ12cm、溝96は幅63cm、深さ21cmを測り、大きな差が認められる。また、最初の区画には、溝85（Ⅳ）によって二分されているとはいえ、2基の井戸があるが、他の区画には、より面積が広いにもかかわらず、1基の井戸しか存在していない。このことからすれば、最初の区画は特別な地区であったのではないかと思われてくる。

他の二つの区画は後に一つの区画に改められたようである。それは、溝94・96を跨ぐ建物18（Ⅱ）・20・21（Ⅴ）の存在による。さらに建物25（Ⅴ）もこの一群に含まれる。建物19に近接した時期の建物群とこの建物群の構造を比較すると、後者では、建物18の総柱建物を除いて、いずれも3間の桁行の1間が長く、他の2間が等しいという構造で一致している。これに比べて前者ではどちらかといえば等間に近い。このことは百間川米田遺跡の村落でも考察したように（註12）、時期差を示していると思われる。井戸30（Ⅱ）と井戸11（Ⅴ）からはともに呪符木簡が出土し、もとは一個体ではなかったかと思われるような雷文帯青磁碗の破片も両井戸から出土し、地区の一体性が強い。このような建物の重複関係や地区割りの変更は方1町の区画溝の重複とも関係し、方1町の区画がかなりの期間存続していたことを示している。

それではこの方1町の区画はどのように考えられるであろうか。区画の東に重要な農業用水路である溝45が存在することから、区画内の住人が農業経営において指導的な役割を果たしていたものと思われる。小山靖憲は「私宅（館）の周辺に堀や土居をめぐらし、涌水や小流をそこで還流させることによって水量や水温の一定の調整を行う開発・再開発の基地とし、旧来の安定的耕地と不安定耕地の再編を可能にするのである（略）。かかる機能をもつ堀の内の設定によって荒野の中に新たな村落が創出されることもあったし、旧来の集落の再編が行われることもあった。それが村落の重要な再生産

機能を果たしつつづけた場合いわゆる領主型村落として定着するのである。」と述べている(註13)。このように、この方1町を堀の内屋敷として、広瀬和雄の建物群類型でいうところのD型(註14)と捉えることはできないであろうか。総柱建物は建物18しか検出されていないが、区画の半分は未発掘であり、中央の特別な区画も未調査部分を残している。検出された主な建物の床面積は、建物18を東に底をもつ4間×3間と考えれば85㎡となり、建物21は52㎡、建物25は48㎡を測る。大形の建物が並んでいるといえよう。ここでは方1町の方形区画を堀の内屋敷として考えておきたい。きわめて優秀な副葬品を出土した土壙墓3・4がこの区画内に存在していたことは注意される。在地領主層の順調な発展をここに見出すべきであろうか。

方1町の区画の外にも、井戸10(Ⅲ)・16(N)の15世紀代の遺構があり、建物14(V)のような、建物20(V)と同じ柱間構成をもつ建物が存在していた。名主層の屋敷地も堀の内の外に広がっていたのは確かで、原尾島村落は方2町程度の規模はあったものと想定される。しかし、16世紀に入り、不幸にも、この原尾島村落を突然に洪水が襲うこととなる。人々は安全を求めて移住を余儀なくされたようである。室町時代、15世紀の遺物を出土した井戸10(Ⅲ)・16・17・18(N)・11(V)・30(Ⅱ)のすべてが板や石の杵材や曲物を留めていなかったことは印象的である。

(岡本寛久)

#### 註

- 註1 江見正己他『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39 1980年、正岡陸夫他『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 1984年、宇垣匡雅他『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 1994年、平井勝他『百間川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 1995年
- なお、本文中の遺構名の後ろに付したカッコ内のローマ数字は上記の報告書の略号である。(Ⅲ)は『百間川原尾島遺跡3』に掲載されていることを示す。
- 註2 百間川原尾島遺跡の中世集落は、平安時代後半から始まった集村化の中で、農業の経営主体者であった百姓層によって形成されたものと考えている。
- 註3 山本悦世「吉備系土師器碗の成立と展開」『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告6 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年
- 註4 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 1982年
- 註5 平井泰男「中世の遺構・遺物について」『百間川原尾島遺跡2』岡山県教育委員会 1984年
- 註6 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年、鈴木重治「中世墓に副葬された青磁碗の検討」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1982年
- 註7 橋田正徳「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ 日本中世土器研究会 1991年
- 註8 橋本久和「中世村落の考古学的研究」『大阪文化誌』通巻2号 大阪文化財センター 1974年
- 註9 原口正三「大阪府高槻市宮田遺跡再論」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社 1982年
- 註10 原口正三「古代・中世の集落」『考古学研究』通巻92号 考古学研究会 1977年
- 註11 平井勝他『百間川原尾島遺跡4』図版31-3
- 註12 岡本寛久「中世米田遺跡の構造と変遷」『百間川米田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74 1989年
- 註13 小山靖憲「初期中世村落の構造と役割」『講座日本史2 封建社会の成立』東京大学出版会 1970年(小山靖憲『中世村落と荘園絵図』東京大学出版会 1987年 所収)
- 註14 広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学6 変化と画期』岩波書店 1986年



## 出土遺物一覽（觀察）表

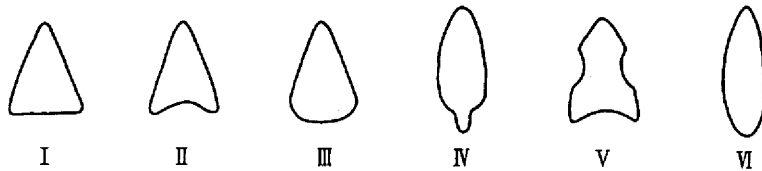
1. 土器觀察表
2. 石製品一覽表
3. 玉類一覽表
4. 木製品一覽表
5. 金屬製品一覽表
6. 土製品一覽表

## 新旧遺構名称对照表

## 凡 例

1. 土器観察表の実測番号は、実測時の整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。
2. 土製品、石製品、金属製品、木製品、玉類一覧表の番号は整理番号であり、掲載番号が本報告書掲載図の番号にあたる。
3. 遺構名の欄は新（報告書作成時）遺構名であるが、（ ）を付すものは旧遺構名である。
4. 各一覧表の時代・時期は遺構の時期を示しており、必ずしもその遺物の時期を示すものではない。
5. 石製品の形式は、石鏃についてのみ以下の分類を行なっている。

I. 平基式 II. 凹基式 III. 凸基Ⅰ式 IV. 有茎式 V. 抉り入り式 VI. 凸基Ⅱ式



6. 土製品の形式は、土錘についてのみ以下の分類で行なっている。

- |                    |  |
|--------------------|--|
| A. ずん胴で穴が中央を貫通     | I 長80mm以上、幅30mm以上、若干不正形<br>II ① Iよりも細目、長80mm近い<br>II ② 長70mm程、幅30mm未満、中形<br>II ③ 長70mm未満、幅30mm未満、小形<br>III 長60mm未満、幅30~35mm、長丸<br>IV 長60mm程、幅50mm程 |
| B. 上下の口部分が細い中太の紡錘形 | I 中太で長い大形品<br>II 先細で長い<br>III 中太で短い<br>IV 先細で中位の長さ<br>V 先細で短い  |
| C. 楕円形、長軸にそって溝がある  |  |
| D. 球形で溝と穴がある       |  |
| E. 両端に穴のある腕骨形      |  |

7. 新旧遺構名称対照表の新名称は報告書作成時に付したもので、旧名称は発掘調査時のものである。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
1	1445	旧河道	縄文土器	深鉢	38.8			外面竹管文。内外面条痕のちナデ。
2	1435	旧河道	縄文土器	深鉢				外面竹管文・爪形文。波頂部キザミ、爪形文と同じ原体か？
3	1431	旧河道	縄文土器	深鉢				端部～外面一部にかかるキザミ風刺突。
4	1433a	旧河道	縄文土器	深鉢				口唇部キザミ。内外面貝殻条痕。外面朱か丹塗りの痕跡。
5	1433b	旧河道	縄文土器	深鉢				内外面貝殻条痕文。外面爪形文。
6	1430	旧河道	縄文土器	深鉢				口唇部キザミ。外面煤付着。内外面二枚貝条痕。
7	1429	旧河道	縄文土器	深鉢				波頂部キザミ大きい。外面横方向に条痕、平裁竹管文。
8	1443	旧河道	縄文土器	深鉢	31.5			外面二枚貝条痕のち半裁竹管文。
9	1444	旧河道	縄文土器	深鉢	29.6			波頂部キザミ。外面二枚貝条痕。
10	1446	旧河道	縄文土器	深鉢	34.2			波状部キザミ。内外面条痕のちナデ。
11	1460	旧河道	縄文土器	浅鉢	17.0			波状面キザミ。
12	1432	旧河道	縄文土器	鉢				
13	1426	旧河道	縄文土器	深鉢				口唇部刺突痕。
14	1434	旧河道	縄文土器	深鉢				貼付突帯(深いキザミ)
15	1425	旧河道	縄文土器	深鉢				貼付突帯にキザミが深く入る。
16	1428	旧河道	縄文土器	深鉢				削り出し突帯にキザミ。
17	1440	旧河道	縄文土器	深鉢		3.4		外面ケズリ痕、光沢。
18	1441	旧河道	縄文土器	深鉢		3.0		調整不明瞭。
19	1442	旧河道	縄文土器	深鉢		2.3		外面ケズリのち二枚貝条痕。
20	1439	旧河道	縄文土器	深鉢		3.6		内面単位のわかる工具ナデ。
21	1437	旧河道	縄文土器	浅鉢		6.8		
22	1438	旧河道	縄文土器	浅鉢		8.6		
23	1462	旧河道	縄文土器	浅鉢	44.8			波状部に段。外面ナデのちミガキのちケズリ。
24	1459	旧河道	縄文土器	浅鉢	41.0			内外面ナデのちミガキ。
25	1448	旧河道	縄文土器	浅鉢				外面ミガキ・二枚貝条痕。
26	1454	旧河道	縄文土器	浅鉢				径2.5mmの孔1つ(全径4ヶ所?)、孔の痕跡。
27	1453	旧河道	縄文土器	浅鉢				外面ミガキ・二枚貝条痕。全体に煤付着。
28	1455	旧河道	縄文土器	浅鉢				外面一部波状部分。内外面黒斑。
29	1461	旧河道	縄文土器	浅鉢				内外面条痕のちミガキ。外面黒色物付着。内面焼きむら？
30	1456	旧河道	縄文土器	浅鉢				内外面ヘラミガキ、黒斑。
31	1450	旧河道	縄文土器	浅鉢				外面使用時の磨耗？
32	1451	旧河道	縄文土器	浅鉢				波状部突起。
33	1449	旧河道	縄文土器	浅鉢				内外面ヘラミガキ。
34	1457	旧河道	縄文土器	浅鉢				内面ていねいなナデ。
35	1458	旧河道	縄文土器	鉢				外面ミガキのち貝殻条痕。内外面煤付着。
36	1424	旧河道	縄文土器	浅鉢				外面条痕のちミガキ。
37	1427	旧河道	縄文土器	浅鉢				口縁下の内外面に1条の沈線。
38	1447	旧河道	縄文土器	浅鉢				内面ヘラ工具による段。
39	1452	旧河道	縄文土器	浅鉢				内面ヘラ。
40	683	旧河道	縄文土器	鉢				内外面ヘラミガキのちナデ？
41	668	旧河道	弥生土器	壺	16.7			口縁部歪み。外面4本のヘラガキ。
42	664	旧河道	弥生土器	壺	13.6			口唇部歪み。口頸部は外湾して上外方にのびる。外面全体に黒色塗布。
43	689	旧河道	弥生土器	壺	14.6	8.7	29.7	胴部に削り出し突帯。底面ヘラミガキ。
44	695	旧河道	弥生土器	壺	33.3			内外面黒色塗布。外面幅広く粗いミガキから太く短いミガキ混在。
45	667	旧河道	弥生土器	壺	37.0			外面削り出し突帯沈線2本。
46	1436	旧河道	弥生土器	壺				全体に煤付着。径2mmの孔2ヶ所。
47	687	旧河道	弥生土器	壺	12.2			外面斜め方向にヘラミガキ。
48	681	旧河道	弥生土器	甕				外面ヘラガキの下に丹塗り部分。
49	1476	旧河道	弥生土器	壺				外面ヘラガキの木葉文。
50	685	旧河道	弥生土器	壺	8.8			内外面黒漆塗布部分。内面ナデ痕跡が強い。
51	1465	旧河道	弥生土器	壺				内面削り出し突帯。
52	1466	旧河道	弥生土器	壺				外面ミガキ？工具ナデ？凹線・竹管文。
53	1467	旧河道	弥生土器	壺				外面ミガキ。内面工具ナデのちミガキ。
54	1464	旧河道	弥生土器	壺				外面ミガキ？ミガキ状効果、工具ナデか？
55	1463	旧河道	弥生土器	壺				透し孔。内外面ヘラミガキ。
56	692	旧河道	弥生土器	壺		13.2		内外面とも煤付着。底部楕円形、ナデ。
57	690	旧河道	弥生土器	甕	30.4			外面口縁部に深いキザミ。繊維痕跡顕著。内外面ハケメ。
58	682	旧河道	弥生土器	甕				貼付突帯突帯の上にキザミ。
59	680	旧河道	弥生土器	甕				外面3条の沈線の間に2段の楕円刺突。
60	669	旧河道	弥生土器	甕	23.3			口唇部キザミ、5条のヘラガキ沈線。
61	686	旧河道	弥生土器	甕	25.0			外面口縁部キザミ。
62	666	旧河道	弥生土器	甕	32.8			内外面工具ナデ。口縁部ナデ。黒斑。
63	660	旧河道	弥生土器	甕	20.8			外面ハケメ7本/1cm。繊維痕。内面指圧痕。

掲載番号	番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴・備考
					口径	底径	器高	
64	659	旧河道	弥生土器	甕	17.4			
65	678	旧河道	弥生土器	甕	22.2	8.6	22.2	外面ハケナデほとんど痕跡残さず。底面ナデ。
66	691	旧河道	弥生土器	甕		8.4		外面粗いハケメ。内面工具ナデか？
67	679	旧河道	弥生土器	甕				外面工具により下から上へのケズリののち段部分に刺突文
68	688	旧河道	弥生土器	鉢	18.5			口唇部所々にキザミ。
69	693	旧河道	弥生土器	鉢	30.9	9.4	6.6	外面ハケメののちていねいなヘラミガキ。内面工具ののちヘラミガキ。
70	665	旧河道	弥生土器	鉢	21.7			内面黒色顔料（黒漆？）塗布。
71	656	旧河道	弥生土器	小型鉢	5.2	3.9	4.2	径2mm孔1ヶ所のみ残存。内底部赤灰色。
72	672	旧河道	弥生土器	蓋	6.8			丹塗り部あり。底部ナデ状のケズリののちミガキ。
73	675	旧河道	弥生土器	蓋	10.1		1.3	孔1つ。内外面ていねいなミガキ。
74	673	旧河道	弥生土器	蓋	9.3		2.9	孔2つ。内外面手ナデ。全体的に煤附着痕跡？
75	674	旧河道	弥生土器	蓋	11.5		2.4	孔2つ。内外面ていねいなミガキ。全体的に煤附着痕跡。
76	684	旧河道	弥生土器	壺				外面ハケ状工具による文様、波状文。
77	677	旧河道	弥生土器	甕	16.5			口唇部キザミ。
78	670	旧河道	弥生土器	甕	16.8	8.9		内外面ハケメ、細かく浅い。
79	676	旧河道	弥生土器	甕	16.5			外面胴部に刺突文。
80	661	旧河道	弥生土器	甕	6.8			底面ナデ。内面ナデアゲ。内底面押圧。
81	658	旧河道	弥生土器	甕	17.8			口唇部少し厚すぎる。
82	662	旧河道	弥生土器	甕		5.0		底中央に穿孔。
83	663	旧河道	弥生土器	甕		8.4		底中央に穿孔。
84	1477	旧河道	弥生土器	壺	28.8			外面焼きむら。
85	694	旧河道	弥生土器	甕				外面ハケメ、ナデにより消されている？。内面指ナデアゲ。口縁部より欠損。
86	657	旧河道	弥生土器	鉢	11.2	7.6	11.6	口縁部に径4mmの孔2ヶ所。脚部に径2.5mm孔1ヶ所、胴部に板状工具刺突文。
87	636	土壇1	弥生土器	壺	12.0			口縁部に孔2ヶ所。
88	634	土壇1	弥生土器	壺				外面ヘラミガキののち3本の沈線。
89	633	土壇1	弥生土器	壺				外面接合部沈線ののちヘラミガキ。
90	637	土壇1	弥生土器	壺		8.8		若干上げ底。
91	630	土壇1	弥生土器	甕	18.7			口唇部刺突文。頸部削り出し突帯上に径2mm竹管文。
92	632	土壇1	弥生土器	甕				外面4本の沈線。
93	631	土壇1	弥生土器	甕				口唇部キザミ。肩部ヘラガキ線刻文。
94	638	土壇1	弥生土器	甕		7.0		底部工具ナデ焼きむら。
95	635	土壇1	弥生土器	蓋	10.6			外面線刻文あり。孔（貫通）2ヶ所。
96	706	土壇4	弥生土器	甕	20.0	5.8		器面全体的風化。底部ナデ。
97	699	溝8	弥生土器	甕	19.0			
98	697	溝9	弥生土器	甕	19.3	5.3	27.1	外面ハケメののちヘラミガキ。内面指圧ナデ。
99	1392	竪穴住居1	弥生土器	鉢	20.0			外面黒斑。
100	1391	竪穴住居1	弥生土器	壺		7.5		外面一部焼きむら。底面ナデののち粗いヘラミガキ。
101	1390	竪穴住居1	弥生土器	甕		5.6		底面きれいな平坦面、ミガキ状ナデ一部煤附着。
102	1394	竪穴住居1	弥生土器	壺		4.8		底面黒斑。水澆し粘土風。
103	1395	竪穴住居1	弥生土器	器台		18.5		
104	1393	竪穴住居1	弥生土器	高杯				外面一部煤附着。透し孔3ヶ所、全径4ヶ所？
105	1396	竪穴住居1	弥生土器	製塩土器	14.6	4.7	4.7	円盤充填。外面粗いケズリ。内面ていねいなナデ、ハケ。
106	1397	竪穴住居1	弥生土器	製塩土器		3.6		外面粗いケズリ。
107	1400	竪穴住居1	弥生土器	製塩土器		4.8		外面ヘラケズリののち押圧痕。
108	1398	竪穴住居1	弥生土器	製塩土器		5.3		中心に絞り痕。
109	1399	竪穴住居1	弥生土器	製塩土器		4.9		
110	160	竪穴住居2	弥生土器	甕	14.2			外面ハケメ？ミガキ効果。
111	147	竪穴住居2	弥生土器	甕	14.0			外面ハケメ工具ナデ風。
112	153	竪穴住居2	弥生土器	甕	19.4			外面工具痕の中に繊維痕跡。
113	161	竪穴住居2	弥生土器	甕	13.5	4.6	21.7	底面磨滅？（ヘラミガキ？）
114	154	竪穴住居2	弥生土器	甕		8.4		外面部分的にヨコナデ。底部ナデ。
115	159	竪穴住居2	弥生土器	鉢	13.2			外面ヘラミガキ。内面ナデ。
116	165	竪穴住居2	弥生土器	小壺	6.6			孔2ヶ所。外面細かなハケメ？。内面かきとり風。
117	157	竪穴住居2	弥生土器	蓋	4.3		3.4	外面ナデ。手捏ね。
118	148	竪穴住居2	弥生土器	鉢	13.0	3.3	6.4	底面ナデ。内面粗いヘラ。
119	146	竪穴住居2	弥生土器	台付鉢	12.8	6.8	12.0	余り粘土あり（底部）
120	150	竪穴住居2	弥生土器	高杯	22.0			内外面ヘラミガキ。
121	152	竪穴住居2	弥生土器	高杯	22.6			口縁部ヨコナデ痕が深い。内外面綾杉状ヘラミガキ。
122	158	竪穴住居2	弥生土器	高杯	12.6			外面ナデののちヘラミガキ。
123	151	竪穴住居2	弥生土器	台付鉢	18.5	10.2	9.1	外面ヘラミガキの下に若干ヘラケズリ痕残る。
124	149	竪穴住居2	弥生土器	高杯		9.0		外面ヘラミガキ。
125	162	竪穴住居2	弥生土器	台付鉢？		19.0		孔（貫通）現存3ヶ所。
126	156	竪穴住居2	弥生土器	鉢	34.8			内外面ヘラミガキ。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
127	163	竪穴住居 2	弥生土器	器台		20.2		透し孔(貫通) 1ヶ所。
128	155	竪穴住居 2	弥生土器	甕		14.5		外底部磨滅している。内底部ナデ。
129	164	竪穴住居 2	弥生土器	甕		7.0		底部ヘラミガキ磨滅。
130	138	竪穴住居 3	弥生土器	甕	12.4			外面ハケメ。
131	140	竪穴住居 3	弥生土器	鉢	14.2		6.1	内外面有機物付着。外面ヘラケズリ。
132	139	竪穴住居 3	弥生土器	小鉢	16.9			外面ヘラケズリ痕。内面押圧ナデ?
133	142	竪穴住居 3	弥生土器	高杯	20.7			内外面ヘラミガキ。
134	141	竪穴住居 3	弥生土器	高杯	20.3			水漉し粘土風。内外面ヘラミガキ。
135	143	竪穴住居 3	弥生土器	長頸壺	19.0			突帯刺突文。内外面ハケメ。
136	137	竪穴住居 3	弥生土器	甕	15.7			外面2~3本単位の粗いハケメ、右下がり窪み。
137	136	竪穴住居 3	弥生土器	台付鉢	8.2	3.1	7.9	内面一部ハケメ。
138	144	竪穴住居 3	弥生土器	台付鉢				脚内部ケズリの工具痕。
139	145	竪穴住居 3	弥生土器	片口鉢	13.0			外面に貼付把手(破損)。内面および口縁部上端に朱が付着。
140	132	竪穴住居 4	弥生土器	長頸壺	22.0			内面口縁部に絞り痕。
141	135	竪穴住居 4	弥生土器	甕	20.2			外面ヨコナデ痕。
142	128	竪穴住居 4	弥生土器	鉢	10.6	3.7	10.2	外面ハケ、ヘラミガキののち化粧土。底面ナデ。
143	133	竪穴住居 4	弥生土器	高杯	23.0			表面剝離。
144	130	竪穴住居 4	弥生土器	直口壺	11.5	3.5	13.3	底面ナデ。内面部分的に横方向のハケメ。
145	134	竪穴住居 4	弥生土器	高杯	13.0			
146	129	竪穴住居 4	弥生土器	鉢	16.4	3.5	7.8	水漉し粘土風。外面器面荒。底面ヘラミガキ。
147	131	竪穴住居 4	弥生土器	高杯				外面放射状のヘラケズリが部分的。
148	1403	竪穴住居 5				7.6		底部ハケメ。内底部ナデ。
149	1411	竪穴住居 5	弥生土器			8.0		底部ナデ。
150	1415	竪穴住居 5		高杯	23.5			水漉し粘土。口縁部暗文風にヘラミガキ。
151	1405	竪穴住居 5		高杯	12.2			内外面ヘラミガキ。
152	1413	竪穴住居 5		高杯		12.2		全体剝離気味、調整不明瞭。透し孔全径4つ。水漉し粘土。
153	1412	竪穴住居 5		高杯		10.8		全体剝離気味。透し孔全径4つ。水漉し粘土。
154	1404	竪穴住居 5		鉢	15.9	3.9	6.2	口縁部歪み。工具痕あり。底部調整不明瞭。内底部ユビオサエナデ?
155	178	竪穴住居 6	弥生土器	直口壺	9.6			水漉し粘土。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。
156	166	竪穴住居 6	弥生土器	甕	12.9	4.9	20.4	底部ナデ(一部ミガキ?)
157	175	竪穴住居 6	弥生土器	甕	13.6			口縁部黒斑。
158	174	竪穴住居 6	弥生土器	甕	16.0			内面ヘラケズリ。
159	177	竪穴住居 6	弥生土器	鉢か甕		3.0		内面に赤色顔料?底面ナデ。
160	176	竪穴住居 6	弥生土器	高杯	15.8			水漉し粘土風。口縁部暗文。
161	171	竪穴住居 7	弥生土器	甕	13.8			外面平行タタキののちタテハケメ(表面剝離)
162	172	竪穴住居 7	弥生土器	甕	18.6			外面ヨコナデののちタテハケメ。
163	186	竪穴住居 7	弥生土器	鉢	14.6	4.5	7.7	外面ミガキ?ナデ?。内面工具によるナデ。
164	185	竪穴住居 7	弥生土器	小鉢	10.8	3.5	5.6	内外面ナデ。
165	169	竪穴住居 7	弥生土器	製塩土器		3.4		内底部ナデ。
166	183	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	17.8			水漉し粘土。口縁部暗文風ヘラミガキ。
167	187	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	19.1			水漉し粘土。口縁部暗文風ヘラミガキ。
168	170	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	16.1			内外面ヘラミガキ。
169	184	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	12.6	8.8	7.0	透し孔3つ残。水漉し粘土。内外面ヘラミガキ。
170	182	竪穴住居 7	弥生土器	高杯	17.5			脚部透し孔跡1ヶ所残。水漉し粘土。
171	168	竪穴住居 7	弥生土器	高杯		11.5		透し孔2個残。水漉し粘土。
172	167	竪穴住居 7	弥生土器	高杯		10.0		外面ハケメののちヘラミガキ、透し孔1個残。水漉し粘土。
173	702	竪穴住居 9	弥生土器	裝飾高杯?	18.9			口縁部ヘラミガキの鋸歯文めぐる。長頸壺かもしれない。
174	703	竪穴住居 9	弥生土器	甕	15.2			
175	704	竪穴住居 9	弥生土器	甕	13.7			
176	705	竪穴住居 9	弥生土器	製塩土器		4.2		底部ナデ。
177	104	井戸 1	弥生土器	長頸壺	12.2	6.9	26.5	外面半裁竹管文2個一対で1ヶ所、板状工具による刺突文4個一対で1ヶ所。
178	106	井戸 1	弥生土器	長頸壺	12.1	6.7	25.3	水漉し粘土風。刺突文の中に細いキザミ条痕跡(177も同)。底面ハケメ。
179	108	井戸 1	弥生土器	長頸壺	11.6	7.0	22.5	頸部沈線一部螺旋状。胴部下の1ヶ所に焼成後穿孔。底面ナデ。
180	105	井戸 1	弥生土器	壺	12.0	6.8	22.7	全体に表面荒、砂粒多し。底面軽いミガキ凹凸。
181	115	井戸 1	弥生土器	長頸壺	13.5	7.5	28.9	外面部分的にハケメ。
182	127	井戸 1	弥生土器	壺		6.2		砂粒が非常に少ない(水漉し粘土?)。底面ナデ。
183	124	井戸 1	弥生土器	壺	9.2			内面細いタテハケ。
184	118	井戸 1	弥生土器	長頸壺	10.7			内面ナデ。
185	121	井戸 1	弥生土器	甕	13.5			水漉し粘土風。
186	119	井戸 1	弥生土器	壺	13.0			器面剝離。
187	123	井戸 1	弥生土器	甕	13.0			外面ヨコナデ。
188	122	井戸 1	弥生土器	甕	12.6			外面強いハケメ。

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
189	113	井戸 1	弥生土器	甕	14.7			外面少し粗めの幅広いハケメ。
190	112	井戸 1	弥生土器	甕	18.0			外面タタキの残存。
191	126	井戸 1	弥生土器	甕	14.2			外面3本単位くらいの粗いハケ状工具痕跡。
192	111	井戸 1	弥生土器	甕	18.0	7.7	32.7	外面口縁部ヨコナデ顕著。
193	114	井戸 1	弥生土器	甕		5.3		外面非常に細かいハケメ。
194	107	井戸 1	弥生土器	壺		6.5		刺突文。底面ヘラミガキ?内底部ヘラケズリののち押圧痕。
195	116	井戸 1	弥生土器	台付鉢	14.6			頸部に孔1ヶ所。底面ヘラケズリ。
196	110	井戸 1	弥生土器	台付鉢	19.5	13.4	23.9	外面ハケメののちヘラミガキ。
197	117	井戸 1	弥生土器	台付鉢		9.7		内面底部ヘラミガキ。
198	109	井戸 1	弥生土器	鉢	44.5			外面ハケメ。内面ヘラケズリののちヘラミガキ。
199	125	井戸 1	弥生土器	製塩土器		4.7		外面指紋痕跡。
200	198	井戸 2	弥生土器	甕	12.0			外面粗いハケ。内面ナデ、ヘラケズリ。
201	201	井戸 2	弥生土器	甕	12.8			口縁部ヨコナデ、工具アタリ痕。
202	195	井戸 2	弥生土器	甕	11.6			被熱で赤色変化。
203	189	井戸 2	弥生土器	壺	8.6	6.2	21.4	外部ハケメののちヘラミガキ?。内面ヘラケズリ。
204	188	井戸 2	弥生土器	長頸壺	14.6	8.5	36.4	外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。内底部ナデ?
205	194	井戸 2	弥生土器	甕	10.9			外面ハケメののちヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
206	197	井戸 2	弥生土器	甕		4.8		内面黒色。内底部剝離。
207	199	井戸 2	弥生土器	甕		4.6		全体二次焼成、赤色変化。胎土もろく剝離。内底部ヘラケズリののちナデ。
208	1320	井戸 3	弥生土器	壺	25.0	8.7	51.4	口唇上部に半裁竹管の刺突文か?。口縁部鋸歯文(内部の線刻の方向が逆)。
209	1308	井戸 3	弥生土器	壺	17.1			口縁部ナデによる凹凸。
210	1289	井戸 3	弥生土器	壺	19.4	6.4		二次焼成?外面ハケメ。内面比較的ていねいな工具によるケズリ。
211	1285	井戸 9	弥生土器	壺	12.6	4.5	24.2	外面煤。
212	1310	井戸 3	弥生土器	壺	17.6	7.2	35.4	口唇部に半裁竹管文の組み合わせ刺突文。鋸歯文。頸部下にキザミメ付突帯。
213	1303	井戸 3	弥生土器	小壺	3.6	2.6	4.6	手捏ね。
214	1287	井戸 3	弥生土器	甕	14.4			歪みのため不明。
215	1284	井戸 3	弥生土器	甕	22.6	7.5	42.2	底部ナデ。
216	1292	井戸 3	弥生土器	甕		5.1		内外面工具ナデ。底面ナデ。
217	1291	井戸 3	弥生土器	甕		3.6		外面ハケ。上げ底風。
218	1296	井戸 3	弥生土器	甕	20.0			外面ハケメ(工具ナデ?)このうち一部ナデで磨滅か?
219	1307	井戸 3	弥生土器	甕	20.2			外面ハケナデのようなハケメ5~6本/1cm、のち細かいハケナデ。
220	1297	井戸 3	弥生土器	台付鉢	20.8			底面ナデ。内底部ヘラミガキ。
221	1309	井戸 3	弥生土器	甕	16.7	5.3	28.0	全体に煤付着。土器上部に歪み。外面ハケメの痕跡?。底面穿孔。
222	1286	井戸 3	弥生土器	高杯	26.0			口部歪み。口縁部分的に黒斑。
223	1288	井戸 3	弥生土器		12.4			口径傾き?
224	1304	井戸 3	弥生土器	高杯		13.5		水漉し粘土風。透し孔。
225	1294	井戸 3	弥生土器	蓋	16.9		11.9	高杯として使用ののち蓋として使用(煤付着)。
226	1293	井戸 3	弥生土器	蓋	14.6		9.5	外面煤付着痕。内外面共に部分剝離。
227	1295	井戸 3	弥生土器	鉢	41.5	9.2	23.9	底面ナデ?(わずかに砂粒の動き)。内底部一方方向ヘラミガキ。
228	1300	井戸 3	弥生土器	鉢	11.2			剝離気味で調整不明瞭。
229	1299	井戸 3	弥生土器	鉢	12.4	4.1	7.7	全体剝離している。
230	1298	井戸 3	弥生土器	鉢	14.3			外面ミガキと思われるが原体が条線を多く含む。
231	1301	井戸 3	弥生土器	甕・壺		4.9		外面ハケメののちナデ。内面ヘラケズリ。
232	1302	井戸 3	弥生土器			3.4		内面ナデ(工具のアタリ跡)
233	1290	井戸 3	弥生土器	台付?鉢				脚部手ナデ(ユビオサエ痕?)
234	1306	井戸 3	弥生土器	製塩土器		5.0		底面工具切り離し痕。
235	1305	井戸 3	弥生土器	製塩土器		3.3		
236	253	井戸 4	弥生土器	壺	17.3			口縁部4条の凹部。外面ナデののちヘラミガキ。
237	243	井戸 4	弥生土器	甕	14.3			外面ハケメののち下半にヘラミガキ。表面剝離(二次焼成)。
238	237	井戸 4	弥生土器	甕	14.5	6.2	26.2	頸部に刺突文3つ。底部ヘラミガキ。内面炭化有機物(オコゲ)付着。
239	262	井戸 4	弥生土器	甕		6.0		底部ヘラミガキ。
240	238	井戸 4	弥生土器	甕	14.1	4.9	24.8	底部ナデ?工具痕あり。内面炭化物付着。胎土は淡乳白色。山陰からの移入か。
241	252	井戸 4	弥生土器	甕	16.9			口縁部ヨコナデ。
242	251	井戸 4	弥生土器	甕	15.0			口縁部ヨコナデ。
243	245	井戸 4	弥生土器	甕	13.6			外面一部ループ状、ハケメののちヘラミガキ。内面一部強いケズリ。
244	246	井戸 4	弥生土器	甕	14.0			頸部剝離痕あり。内面ナデ、ヘラケズリ。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
245	240	井戸4	弥生土器	甕	15.2	5.1	25.9	口縁部1ヶ所線刻。噴きこぼれ痕?。底部穿孔。240に類似。
246	241	井戸4	弥生土器	甕	14.8			剝離痕あり。水澆し粘土風。外面磨滅している斜めハケメ。
247	250	井戸4	弥生土器	甕	15.0			口縁部ヨコナデ。
248	268	井戸4	弥生土器	甕	15.9			外面ハケメ。内面ヨコヘラケズリ。
249	239	井戸4	弥生土器	甕	15.2	6.1	25.2	口縁部ヨコナデ条痕。外面、底部ハケメ。
250	244	井戸4	弥生土器	甕		4.7		底部ナデ。内面炭化物付着痕。
251	242	井戸4	弥生土器	甕		6.0		水澆し粘土風。底部平坦面、ていねいなハケメ。内部炭化物。
252	255	井戸4	弥生土器	甕		4.3		外面ハケメ。底部ナデ、ハケメ。内面ヘラケズリ。
253	272	井戸4	弥生土器	甕		4.8		底部ハケメ。
254	265	井戸4	弥生土器	甕?		8.5		底部ハケメののちミガキ。
255	263	井戸4	弥生土器	甕		7.8		底部ケズリ。
256	260	井戸4	弥生土器	甕		3.9		底部ナデ。
257	264	井戸4	弥生土器	甕		5.1		底部ハケ、中に細い線。
258	266	井戸4	弥生土器	甕		5.5		底部工具ナデ。
259	261	井戸4	弥生土器	甕		5.6		底部工具ナデ。
260	247	井戸4	弥生土器	台付鉢	13.1			水澆し粘土。絞り痕。
261	269	井戸4	弥生土器	台付鉢				水澆し粘土。脚柱部差し込み痕、絞り痕。
262	254	井戸4	弥生土器	台付鉢		12.9		脚部穿孔、全径4個。脚柱部差し込み痕。
263	249	井戸4	弥生土器	台付鉢				水澆し粘土。絞り痕。
264	270	井戸4	弥生土器	台付鉢				水澆し粘土風。底部ナデ、ハケメ。内面放射状に工具痕。穿孔(有孔4つ?)
265	259	井戸4	弥生土器	高杯				水澆し粘土風。透し孔有孔3個、全径4個?
266	257	井戸4	弥生土器	高杯		11.1		水澆し粘土風。透し孔残3ヶ所、全径4ヶ所。
267	248	井戸4	弥生土器	高杯				水澆し粘土。透し孔1ヶ所。
268	271	井戸4	弥生土器	高杯				水澆し粘土。透し孔有孔2つ、全径4個?
269	258	井戸4	弥生土器	高杯		13.4		水澆し粘土風。透し孔有孔3つ(端部2つ)、全径4つ?
270	267	井戸4	弥生土器	台付小型鉢	11.5	6.8	7.7	底部軽い押圧、ナデ。
271	256	井戸4	弥生土器	鉢		4.2		水澆し粘土風。胴部から底部に続いてヘラミガキ。
272	193	井戸5	弥生土器	甕		13.9		外面ハケメ。内面ヘラケズリ。
273	192	井戸5	弥生土器	甕	16.2			くの字口線。
274	191	井戸5	弥生土器	高杯				透し孔3ヶ所。
275	190	井戸5	製塩土器			3.6		底面ナデ。
276	2	井戸6	弥生土器	壺	17.1			主に内外面細かいヘラミガキ。頸部下に浮文。
277	10	井戸6	弥生土器	壺	21.7	7.1	33.0	外面ヘラミガキ。胴部外面下半に煤多し。底部磨滅。
278	4	井戸6	弥生土器	壺	19.2	6.8	33.7	底部穿孔、ハケメにも似た条線をもつ工具でヘラミガキか。
279	9	井戸6	弥生土器	甕	14.4			外面ハケメ。
280	5	井戸6	弥生土器	甕	14.4	4.3	24.0	胎土に角閃石・金雲母を含む(讃岐産か)。調整不明瞭。
281	8	井戸6	弥生土器	甕	16.2	6.0	25.1	部分的に噴きこぼれ痕跡。底部煤剥落痕、ヘラミガキ。
282	1	井戸6	土師器	甕	14.1			口縁外面にクシガキ沈線。肩部に刺突痕2ヶ所。口縁~肩部噴きこぼれ痕跡。
283	6	井戸6	弥生土器	鉢	13.1	4.2	7.3	水澆し粘土。底部オサエナデ、高台気味。
284	3	井戸6	弥生土器	高杯		12.3		水澆し粘土。透し孔4つ。
285	379	土壇5	弥生土器	長頸壺	21.6			口縁端面に鋸歯文。外面ハケメの単位不明瞭。
286	369	土壇5	弥生土器	壺	16.4			肩部下外面ヘラミガキ。
287	380	土壇5	弥生土器	甕	16.0			全体磨滅して不明瞭。
288	370	土壇5	弥生土器	甕	16.6			外面ヘラミガキ。
289	378	土壇5	弥生土器	甕	12.4			外面ヘラミガキ、粗いハケ。
290	383	土壇5	弥生土器	甕	16.6	5.0		底部若干上げ底、ナデ?、赤色変化。内面磨滅のため調整不明瞭。
291	372	土壇5	弥生土器	鉢	9.9	3.2	10.0	左右向かい合わせに2つずつの穿孔。底部ナデ。
292	388	土壇5	弥生土器	高杯	12.6	15.0	10.5	透し孔4個。
293	386	土壇5	弥生土器	高杯	22.3	14.7	12.3	
294	375	土壇5	弥生土器	高杯	25.5			全体剝離。口縁部暗文風ヘラガキ。
295	382	土壇5	弥生土器	高杯		12.7		透し孔4個。
296	374	土壇5	弥生土器	鉢	11.4	3.6	9.3	底部ナデ。底の中央部に穿孔あり。
297	373	土壇5	弥生土器	鉢	11.8	3.2	8.0	底部近くに刺突文1つ。底部押圧ナデ。
298	385	土壇5	弥生土器	鉢	30.7	5.9	16.0	底部上げ底、ヘラケズリ。
299	416	土壇6	弥生土器	壺	9.9			内面ていねいなヘラケズリ(胎土に砂粒含まない)、部分的にミガキ効果。
300	404	土壇6	弥生土器	甕	13.8			
301	405	土壇6	弥生土器	甕	13.6			外面ハケメ。内面ナデののちヘラケズリ。
302	424	土壇6	弥生土器	甕	14.2			外面ナデののちヘラミガキ。
303	409	土壇6	弥生土器	甕	15.0			口頸部ヨコナデ浅い窪み。
304	407	土壇6	弥生土器	甕	15.7			外面調整不明瞭。
305	414	土壇6	弥生土器	甕	13.5			外面ハケメ12.3本/10mm。内面ナデののちヘラケズリ。
306	406	土壇6	弥生土器	甕	15.7			外面ヨコナデ痕顕著。

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
307	415	土壇 6	弥生土器	甕	15.2			口縁部に多少の歪み。
308	408	土壇 6	弥生土器	甕	12.8			外面ハケメ。内面ヘラケズリ。
309	417	土壇 6	弥生土器	甕	15.2			外面タタキ痕。内面押圧痕。
310	413	土壇 6	弥生土器	甕	16.8			内面細かな少ない移動痕。
311	426	土壇 6	弥生土器	甕		3.9		外面指圧痕。底部一定方向にヘラミガキ。
312	411	土壇 6	弥生土器	甕		4.0		底面ヘラミガキ。
313	410	土壇 6	弥生土器	甕		5.5		底面ナデ。
314	427	土壇 6	弥生土器	高杯?	16.0			水澆し粘土。内面ハケメ10本/1cmのちヘラミガキ幅2mm。
315	418	土壇 6	弥生土器	高杯		11.6		透し孔4ヶ所。脚柱部ナデ、ヒビ割れ痕。
316	428	土壇 6	弥生土器	小鉢	4.6	0.4	2.2	水澆し粘土。内外面ナデ。手捏ね。
317	420	土壇 6	土師器	手焙形土器	8.5			底部ヘラケズリののちナデ。底部外面に葉脈痕。内部壁黒色。
318	431	土壇 7	弥生土器	甕	15.7	6.3	26.5	外面一部ループ状ヘラミガキ。
319	421	土壇 7	弥生土器	甕?		4.2		底部ナデ凹凸。器面調整不明瞭。
320	425	土壇 7	弥生土器	甕	14.8			底部ナデ痕。内面一部軽い押圧。
321	435	土壇 7	弥生土器	甕	13.8	5.3	23.9	外面上部粗いハケメ、以下全体にセンイ状線頭著なミガキ。
322	433	土壇 7	弥生土器	甕	14.7			外面ハケ。
323	434	土壇 7	弥生土器	甕	15.3			器面調整不明瞭。外面ハケ工具アタリ。
324	423	土壇 7	弥生土器	甕	14.2			外面縦斜めハケ。
325	432	土壇 7	弥生土器	甕	15.0			刺突文2個残存。中に細かい刻み状痕跡。
326	429	土壇 7	弥生土器	台付直口壺	5.8			器面光沢を持つ。孔(貫通)3ヶ所。
327	436	土壇 7	弥生土器	鉢	49.9			内面ヘラケズリ痕残存。
328	430	土壇 7	弥生土器	高杯				水澆し粘土。透し孔(貫通)。脚柱内上部に深い孔。
329	464	土壇 8	弥生土器	台付直口壺	6.7	13.0	18.4	胴部下方に1ヶ所のみ焼成後穿孔。
330	439	土壇 8	弥生土器	甕	12.4			外面煤付着。
331	440	土壇 8	弥生土器	甕	24.4			内面深いケズリ痕。
332	455	土壇 8	弥生土器	甕	14.3			水澆し粘土。338の胎土と酷似。器面摩擦のため調整不明瞭。
333	451	土壇 8	弥生土器	甕	13.9			外面工具のアタリ痕。二次焼成による煤付着。非常に細かい長石・石英等含む。
334	450	土壇 8	弥生土器	甕	15.9			水澆し粘土風。煤付着。非常に細かい長石・石英等含む。
335	452	土壇 8	弥生土器	甕	17.5			内面に修復粘土痕。
336	462	土壇 8	弥生土器	甕	15.2	5.0	23.9	外面のハケ工具2種の工具使用か? 底部ナデ。
337	454	土壇 8	弥生土器	甕		5.5		外面細くて浅いハケメ。底部上げ底。
338	456	土壇 8	弥生土器	甕		4.3		水澆し粘土。調整不明瞭。
339	453	土壇 8	弥生土器	鉢	23.5	6.2	9.6	調整不明瞭。赤色変化。
340	458	土壇 8	弥生土器	高杯	19.0			水澆し粘土。内外面ヘラミガキ。
341	457	土壇 8	弥生土器	高杯		10.4		透し孔4つ?。
342	463	土壇 8	弥生土器	高杯	20.5	11.5	10.3	透し孔3つ? 口縁部歪みあり。
343	461	土壇 8	弥生土器	高杯		11.9		水澆風胎土。透し孔4つ?。調整不明瞭。
344	459	土壇 8	弥生土器	高杯	20.6	10.8	11.4	透し孔(貫通)4ヶ所。脚柱部内面わずか絞り痕。
345	362	土壇 9	弥生土器	台付直口壺	6.4			水澆し粘土風。
346	366	土壇 9	弥生土器	小高杯	6.3	5.0	3.7	透し孔3つ。手捏ね。完形。
347	354	土壇 9	弥生土器	甕	13.3			内面強いヘラケズリ。移動痕ほとんど細い線。
348	355	土壇 9	弥生土器	甕	15.6			移動痕は細い線。
349	360	土壇 9	弥生土器	甕	13.8			外面ヘラミガキ? 剝離気味。
350	359	土壇 9	弥生土器	甕		5.1		底部ナデ。内面炭化物付着痕。
351	361	土壇 9	弥生土器	鉢	23.3	6.3	13.4	外面表面剝離気味。底部ナデ。口縁内部ヨコナデ痕比較的顕著。
352	365	土壇 9	弥生土器	鉢	26.8	7.6	17.8	二次焼成。底部未調整っぽい工具の押圧痕。内底部ナデのちヘラミガキ。
353	363	土壇 9	弥生土器	高杯	19.5			剝離。
354	364	土壇 9	弥生土器	高杯	17.2			化粧土の剝落痕。
355	356	土壇 9	弥生土器	鉢	12.7			水澆し粘土。内面不明瞭。
356	367	土壇 9	弥生土器	製塩土器		5.6		充填部全体磨滅。
357	368	土壇 9	弥生土器	製塩土器		5.2		
358	345	土壇11	弥生土器	鉢	15.2			外面調整不明瞭。
359	349	土壇11	弥生土器	甕	13.9			口縁部ヘラガキ平行線文。
360	350	土壇11	弥生土器	甕	15.8			
361	348	土壇11	弥生土器	壺	19.5			口縁部ヘラガキ平行線文。
362	357	土壇11	弥生土器	甕		5.5		底部ナデ。
363	344	土壇11	弥生土器	甕		6.0		外面剝離部分あり。底部ナデ・ハケメ。内面調整不明瞭。
364	339	土壇11	弥生土器	高杯				透し孔2個残存。
365	340	土壇11	弥生土器	高杯				水澆し粘土。透し孔4個残存。
366	346	土壇11	弥生土器	鉢	38.0			内面ケズリ残る。
367	292	土壇12	弥生土器	壺				口縁部ヨコナデ。
368	299	土壇12	弥生土器	小壺	4.2	5.7		水澆し粘土風。
369	287	土壇12	弥生土器	甕	14.9			口縁部ヨコナデ。数本の細い凹部。



## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
370	286	土壇12	弥生土器	甕	14.6			口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ、かなり平坦面。
371	291	土壇12	弥生土器	甕	14.3			口縁部ヨコナデ。内面平滑なヘラケズリ。
372	288	土壇12	弥生土器	甕				全体磨滅。口縁部ヨコナデ。
373	289	土壇12	弥生土器	甕				全体磨滅。口縁部ヨコナデ。
374	290	土壇12	弥生土器	甕	16.2			全体調整不明瞭。
375	293	土壇12	弥生土器	甕		6.0		外面磨滅ヘラミガキ?内面炭化物付着。
376	294	土壇12	弥生土器	甕		5.5		底部ナデ。底部内面工具痕。
377	300	土壇12	弥生土器	高杯	19.6			水澆し粘土。器面調整不明瞭。
378	298	土壇12	弥生土器	台付鉢				水澆し粘土風。外面ミガキの下にしわ痕。
379	295	土壇12	弥生土器	高杯				水澆し粘土。透し孔痕1ヶ所。
380	297	土壇12	弥生土器	高杯		8.7		水澆し粘土風。透し孔痕2ヶ所残存。
381	296	土壇12	弥生土器	高杯				水澆し粘土風。透し孔痕2ヶ所残存。
382	403	土壇13	弥生土器	壺	19.7			器面剝落。
383	389	土壇13	弥生土器	高杯	21.6			水澆し粘土。口縁部ヘラガキ暗文状。
384	401	土壇13	弥生土器	高杯	13.0			水澆し粘土風。内面ヘラミガキ。
385	396	土壇13	弥生土器	高杯		17.2		
386	399	土壇13	弥生土器	製塩土器		3.4		底部ナデ。
387	398	土壇13	弥生土器	製塩土器		3.8		底部ナデ。
388	273	土壇14	弥生土器	壺	22.1			口縁部4~5条のクシガキ波状文、鋸歯文。
389	307	土壇14	弥生土器	壺	11.6			口縁部円形浮文上竹管文。内面クシガキ波状文。
390	306	土壇14	弥生土器	壺	11.5			口縁部円形浮文上竹管文。内面調整不明瞭。
391	277	土壇14	弥生土器	鉢	28.0			内面調整不明瞭。
392	285	土壇14	弥生土器	甕	15.0	4.4	19.6	外面ハケメ。底部ナデ。内面ナデ。
393	279	土壇14	弥生土器	小型鉢	14.0	5.4	10.8	水澆し粘土。底部ナデ。内底部調整不明瞭。
394	278	土壇14	弥生土器	高杯	18.4			水澆し粘土風。調整不明瞭。
395	275	土壇14	弥生土器	台付鉢	11.4	3.8	6.9	水澆し粘土風。器面剝離痕。底部ナデ。
396	274	土壇14	弥生土器	製塩土器		4.7		底部ナデ。
397	280	土壇14	弥生土器	柑	10.0			胴下半に穿孔1ヶ所。
398	282	土壇14	弥生土器	直口壺	8.9			水澆し粘土。外面ヘラミガキ。
399	281	土壇14	弥生土器	鉢	15.6			水澆し粘土風。口縁部ヨコナデ。
400	313	土壇15	弥生土器	甕	15.3			口縁部ヨコナデ。外面ナデ。内面ヘラケズリ。
401	314	土壇15	弥生土器	鉢				口縁部ヨコナデ。外面有機物付着、調整不明瞭。
402	333	土壇15	弥生土器	台付直口壺	9.9			水澆し粘土。外面細かいヘラミガキ(かなり剝離)
403	100	土壇16	弥生土器	壺		12.5		外面ヘラミガキ。底部ケズリののちナデ。
404	65	土壇16	弥生土器	長頸壺	16.0	7.2	48.1	口縁部内外面におよび頸部下に竹管文めぐる。粘土紐接合痕(4ヶ所)
405	53	土壇16	弥生土器	壺	12.3	5.7	21.1	浮文剝落痕3ヶ所。口縁部下方拡張、小円孔多数。底面ヘラミガキ。
406	64	土壇16	弥生土器	壺	12.5			頸部内外面ナデ。外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
407	48	土壇16	弥生土器	長頸壺	15.2	7.7	31.3	外面ヘラミガキ。底面ナデ。内面ヘラケズリ、オコゲ。
408	55	土壇16	弥生土器	長頸壺転用甕	14.9	5.8	27.0	外面粗いハケメ、煤付着。内面ヘラケズリ。口縁端部に肥厚なく、キザミメ。
409	59	土壇16	弥生土器	長頸壺	13.6			外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
410	72	土壇16	弥生土器	壺	18.9			外面ハケメ。
411	87	土壇16	弥生土器	長頸壺	10.0			外面ハケメ。
412	86	土壇16	弥生土器	長頸壺	12.3			外面ハケメ。
413	57	土壇16	弥生土器	台付壺		10.6		外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリののちナデ。脚部に刺突痕。
414	58	土壇16	弥生土器	長頸壺	12.4	7.6	23.1	外面細くて粗いヘラミガキ。底面ナデ。
415	66	土壇16	弥生土器	長頸壺	13.6			頸部の沈線は螺旋状。外面粘土の凸あり。粘土接合痕(3ヶ所)
416	56	土壇16	弥生土器	壺		9.1		外面ハケメののちヘラミガキ。底面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
417	79	土壇16	弥生土器	壺	13.2			外面ハケメののちヘラミガキ、光沢をもっている。
418	74	土壇16	弥生土器	壺	12.2			全体磨滅。外面粗く浅いハケメ。
419	63	土壇16	弥生土器	壺	13.6	8.1	30.7	外面下半煤付着。底部ヘラミガキ。
420	1478	土壇16	弥生土器	長頸壺	22.5	15.8	70.7	口縁部4ヶ所に逆U字の棒状浮文、一部に刺突文。底面ナデ。完形。
421	99	土壇16	弥生土器	台付無頸小壺	4.8	3.1	7.9	脚部ユビオサエ痕。外面ナデ。内部手ナデ。
422	84	土壇16	弥生土器	鉢	13.8			内面ケズリののちミガキ。
423	88	土壇16	弥生土器	甕		8.8		底部オサエナデののち軽く表面ナデ。
424	54	土壇16	弥生土器	壺	11.1	5.7	18.1	外面細かいハケメ。底面ナデ。内面ヘラケズリ。
425	82	土壇16	弥生土器	壺	13.0			外面ヘラミガキ。
426	76	土壇16	弥生土器	甕	17.5			外面ハケ原体のアタリめくれ。
427	70	土壇16	弥生土器	甕	12.9			外面ハケ状工具でヘラミガキ。
428	89	土壇16	弥生土器	甕	13.5			内面指頭指圧痕かなり強く顕著。
429	75	土壇16	弥生土器	甕	16.3			

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
430	60	土壇16	弥生土器	甕	20.2			外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。炭化物付着。
431	73	土壇16	弥生土器	甕	21.0			内面絞り痕あり、ヘラケズリ。
432	52	土壇16	弥生土器	甕	14.3	5.3	28.5	外面ハケメ。底面ナデ。内面ヘラケズリ。表面に剝離部分。
433	77	土壇16	弥生土器	甕	12.8			
434	50	土壇16	弥生土器	甕	12.4			外面器面荒れ調整不明瞭。
435	81	土壇16	弥生土器	甕	13.9			外面粗く浅いハケメ。
436	80	土壇16	弥生土器	甕	16.2			外面一部ハケメ。
437	69	土壇16	弥生土器	甕	15.9			
438	83	土壇16	弥生土器	甕	16.4			外面ハケメ。下にタタキ残存か？
439	101	土壇16	弥生土器	甕	11.1			外面ハケメ。内面ナデアゲ。
440	62	土壇16	弥生土器	甕	11.4			外面非常に細かいハケメ。内面かなり剝離。
441	71	土壇16	弥生土器	甕	14.6			外面粗いハケメで浅いハケメ。
442	61	土壇16	弥生土器	甕		5.4		底面上げ底、粗いヘラミガキ。
443	49	土壇16	弥生土器	台付鉢	10.0	4.2	6.2	外面・底部ナデ。内面ケズリのちナデ。
444	78	土壇16	弥生土器	高杯	20.3			口縁外部暗文風ヘラミガキ。
445	102	土壇16	弥生土器	高杯	22.2	13.2	17.4	透し孔6個残。
446	103	土壇16	弥生土器	高杯	26.6	15.3	18.1	透し孔3個残。
447	85	土壇16	弥生土器	台付鉢	15.1			調整が全体的に粗い。外面ヘラミガキ。
448	51	土壇16	弥生土器	高杯	12.9	7.4	10.0	透し孔(貫通)19ヶ所。
449	68	土壇16	弥生土器	器台	13.5	13.8	11.1	全体歪んでいる。口縁外面に格子状線刻文。外面底部磨減気味。
450	67	土壇16	弥生土器	器台	22.8	21.3	23.5	体部と裾部に方形透し(数不明)、破片で図上復元。
451	94	土壇16	弥生土器	製塩土器		3.8		底部指圧ナデ。内面細かいハケメ。
452	96	土壇16	弥生土器	製塩土器		4.8		外面指紋痕跡。
453	93	土壇16	弥生土器	製塩土器		4.0		外面強いナデによる凹部。内部ナデ。
454	91	土壇16	弥生土器	製塩土器		3.5		外面ケズリ。内・底部ナデ。
455	97	土壇16	弥生土器	製塩土器		5.0		外面ケズリユビオサエ痕。
456	95	土壇16	弥生土器	製塩土器		5.0		外面比較的丁寧なナデ痕。
457	98	土壇16	弥生土器	製塩土器		4.3		底部ナデ。
458	92	土壇16	弥生土器	製塩土器		5.0		内・底部オサエナデ。
459	90	土壇16	弥生土器	製塩土器		6.4		外面ケズリ。
460	337	土壇17	弥生土器	甕	14.4	4.3	24.3	外面噴きこぼれあり。胎土に角閃石を含み、チョコレート色(讃岐産か)。
461	338	土壇17	弥生土器	甕	17.1	5.4	28.8	底部ミガキ。胎土に角閃石を含み、チョコレート色(讃岐産か)。
462	336	土壇17	弥生土器	杯(鉢)	17.3	2.9	7.6	底部ヘラ調整後ヘラミガキ。
463	335	土壇18	弥生土器	甕	15.3	5.7	27.6	刺突痕3ヶ所。底部ヘラガキ。
464	331	土壇18	弥生土器	甕	14.9			口縁部ヨコナデ。外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
465	334	土壇18	弥生土器	甕	15.2	4.7	25.3	外面若干折り返し痕。底部ヘラミガキ。胎土が460、461と同類。
466	330	土壇18	弥生土器	甕	16.0	6.4	26.5	外面噴きこぼれ痕。底部ナデ?不明瞭。内底部調整不明瞭。
467	332	土壇18	弥生土器	甕		5.4		底部ヘラミガキ。内底部に押圧。
468	315	土壇19	弥生土器	高杯				水澆し粘土。透し孔1ヶ所。
469	302	土壇20	弥生土器	甕	16.9			口縁部ヨコナデ。外面調整不明瞭。
470	301	土壇20	弥生土器	甕	14.0			口縁部ヨコナデ。
471	303	土壇20	弥生土器	甕	14.5	5.8	22.2	外面ナデ、ヘラミガキ。底部磨減。内面ナデ、砂粒移動ほとんどなし。
472	320	土壇20	弥生土器	甕	15.0	5.9	25.1	円形刺突文3個1対。噴きこぼれ痕。底部ヘラガキ。
473	308	土壇20	弥生土器	壺		9.0		底面工具ナデ。
474	309	土壇20	弥生土器	高杯	19.6			水澆し粘土。全体剝離。
475	304	土壇20	弥生土器	台付鉢	15.8			水澆し粘土。口縁部ヨコナデ。
476	319	土壇20	弥生土器	高杯		10.1		水澆し粘土。透し孔4個?
477	305	土壇20	弥生土器	高杯		13.5		水澆し粘土風。透し孔2ヶ所。
478	316	土壇20	弥生土器	台付小壺				水澆し粘土。
479	317	土壇20	弥生土器	台付鉢		4.2		水澆し粘土風。底部ナデ。
480	321	土壇21	弥生土器	蓋	17.0			口縁部ヨコナデ。
481	327	土壇21	弥生土器	甕	20.0			口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。
482	329	土壇21	弥生土器	甕	12.1			外面ハケメ。内面粗いヘラケズリ。
483	326	土壇21	弥生土器	高杯	17.6			水澆し粘土風。透し孔3ヶ所(端部)全径4ヶ所。
484	325	土壇21	弥生土器	高杯	20.5			水澆し粘土。内外面ヘラミガキ。
485	323	土壇21	弥生土器	高杯	13.3			水澆し粘土。透し孔3ヶ所(端部)全径4ヶ所。
486	322	土壇21	弥生土器	高杯	13.2	12.1	86.0	水澆し粘土。透し孔4ヶ所。
487	328	土壇21	弥生土器	鉢	11.9	5.2	9.0	外面・底部ナデ。底部に凹凸。
488	324	土壇21	弥生土器	鉢	14.8	3.9	7.0	水澆し粘土風。全体磨減して調整不明瞭。底部平坦面。
489	353	土壇22	弥生土器	壺	25.2			口縁部鋸歯文。
490	342	土壇22	弥生土器	壺	16.7			内面に移動痕少し。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
491	341	土壇22	弥生土器	甕	15.4			外面粗いハケメ。内面工具のアタリ痕。
492	347	土壇22	弥生土器	甕	14.5	5.2	22.4	外面ハケメののちヘラミガキ。底部上げ底気味。
493	352	土壇22	弥生土器	甕	13.7	6.0	25.0	外面噴きこぼれ痕。底部ケズリののちナデ。内面移動痕少ない。
494	343	土壇22	弥生土器	高杯	13.7			水澆し粘土。
495	1328	土壇24	弥生土器	甕	14.6			外面煤付着。
496	1327	土壇24	弥生土器	甕	15.5			内面快るようなヘラケズリ工具痕。
497	1326	土壇24	弥生土器	甕	16.0			口縁部焼きむら。内面快るようなヘラケズリ工具痕。
498	1323	土壇24	弥生土器	甕	12.3	4.5	20.2	外面細かいハケメ。底部ユビオサエ。
499	1332	土壇24	弥生土器	甕	17.8			外面細かいハケメ14本/1cm。
500	1324	土壇24	弥生土器	甕	14.8			口縁部段状にくびれ。
501	1325	土壇24	弥生土器	甕	15.6			土器の色肌色+α。
502	1331	土壇24	弥生土器	甕	18.5	5.1	15.2	調整不明瞭。
503	1335	土壇24	弥生土器	甕	11.8			
504	1334	土壇24	弥生土器	甕	12.2			
505	1322	土壇24	弥生土器	甕	12.3	4.5	14.3	口唇部歪み。底部上げ底気味?
506	1330	土壇24	弥生土器	甕		6.7		外面細いハケメ20~21本/1cm。外面・底面煤付着。
507	1321	土壇24	弥生土器	甕		4.0		外面底部ユビオサエ痕。外面細かく薄いハケメ条線。
508	1329	土壇24	弥生土器	甕		5.5		水澆し粘土。砂粒少量?外面強いハケメ8~9本/1cm。
509	1333	土壇24	弥生土器	高杯		17.7		脚部透し孔4ヶ所。脚柱内部細かなケズリ痕。
510	1213	土壇25	弥生土器	長頸壺	13.6	5.9	25.8	底部ナデ。肩部に刺突文。
511	1216	土壇25	弥生土器	甕	15.8			内部指圧痕跡。
512	1214	土壇25	弥生土器	台付鉢	20.2			内外面ヘラミガキ。
513	1215	土壇25	弥生土器	甕	14.6			外面粗いハケ。
514	1217	土壇25	弥生土器	甕	17.0			外面ヘラミガキ。
515	1221	土壇25		甕		3.8		底部ナデ。
516	1222	土壇25		高杯	28.1			口縁外面暗文風ヘラミガキ。
517	1219	土壇25	弥生土器	高杯		12.7		透し孔4個、径7~9mm。
518	1218	土壇25	弥生土器	鉢	18.4	3.6	8.1	底部ナデ。内部調整不明瞭。
519	1220	土壇25		鉢	12.3	3.6	8.2	底部ナデ。
520	1201	土壇26	弥生土器	長頸壺	13.8			全体的にぼってつとした土器。口縁部線途中消え。
521	1212	土壇26	弥生土器	長頸壺	20.3	8.2	39.1	口縁部に竹管文1ヶ所(3ヶ)。
522	1211	土壇26	弥生土器	長頸壺	20.3			頸部に2本一対の沈線螺旋状。頸部下に刺突文。ヘラケズリ移動痕目立たず。
523	1195	土壇26	弥生土器	名頸壺	21.2			頸部下に刺突文。輪郭目立たず中に10本くらい細い線あり。
524	1196	土壇26	弥生土器	長頸壺				頸部に刺突文(ハケメの原体による)、中に18本/2cmの細い線。
525	1101	土壇26	弥生土器	器台	34.1	34.1	33.5	透し孔3ヶ所あり。口縁部・底部に鋸歯文。
526	1207	土壇26	弥生土器	壺	22.6			外面ヘラミガキ。内面胴部ナデののちユビナデアゲ。
527	1208	土壇26	弥生土器	鉢	38.3			外面底部ヘラミガキが密でほとんどハケメ消滅。
528	1210	土壇26	弥生土器	鉢	43.4			外面ハケミガキ。内面間隔粗いハケメ、数本に1本深いナデアゲ。
529	1204	土壇26	弥生土器	小壺	7.6	3.1	8.7	二次焼成による表面剝離部分。
530	1203	土壇26	弥生土器	高杯	17.4			水澆し粘土風。外面口縁部不明。
531	1202	土壇26	弥生土器	高杯	11.7			水澆し粘土。脚部透し孔4ヶ所。脚柱内部絞り痕。
532	1206	土壇26	弥生土器	高杯		14.8		脚部透し孔4ヶ所、うち粘土付き1ヶ所。脚柱内部ナデのみ。
533	1209	土壇26	弥生土器	鉢	16.8	5.0	7.9	口縁部外面に刺突痕。外面ほとんど不明(所々にミガキ)。
534	1171	土壇27	弥生土器	長頸壺	15.0			細かな移動痕多く砂粒少ない。頸部下に刺突文。
535	1176	土壇27	弥生土器	鉢	17.8	8.3	20.5	底面ナデ。内底部ヘラミガキ。
536	1178	土壇27	弥生土器	甕	14.3			543と同一か?外面全体的に煤付着。
537	1180	土壇27	弥生土器	甕	16.0			外面ハケメ。内面ヘラケズリ。
538	1172	土壇27	弥生土器	甕	12.0	4.1	15.5	調整不明瞭。底面オサエナデ。
539	1174	土壇27	弥生土器	甕	18.2			外面口縁部アタリ痕。外面細かなハケ状をもつミガキ?
540	1173	土壇27	弥生土器	甕	16.8			外面ミガキ工具の中に細い線入り。
541	1168	土壇27	弥生土器	鉢	19.8			外面ハケメののちミガキ、あまりはっきりしない。
542	1175	土壇27	弥生土器	甕		5.4		全面煤付着。外面細かなハケナデ?底面使用のため磨滅。
543	1179	土壇27	弥生土器	甕		5.4		536と同一か?。全体に(底部以外)煤付着。
544	1170	土壇27	弥生土器	高杯	25.9			水澆し粘土風。金雲母含む。口縁部暗文風ヘラミガキ。
545	1169	土壇27	弥生土器	高杯		17.4		水澆し粘土風。脚部透し孔4ヶ所。底部煤付着及び二次的焼。
546	1167	土壇27	弥生土器	小鉢	9.8	2.7	5.4	外面ナデ。内面ハケメののちナデ。
547	1160	土壇28	弥生土器	甕	10.5	4.1	17.2	外面・底部に黒斑。
548	1161	土壇28	弥生土器	甕	11.6	3.9	13.7	水澆し粘土風。器形歪んでいる。外面黒斑。
549	1166	土壇28	弥生土器	甕	12.2	4.8	16.2	外面一部煤付着、中に細い線ハケナデ風。底面にえぐり痕。
550	1156	土壇28	弥生土器	小鉢	10.3	3.4	7.1	外面下部黒斑。若干ハケメ見える。
551	1164	土壇28	弥生土器	甕	13.2	4.8	20.3	外面下部煤付着。底部磨滅して調整不明瞭。

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
552	1162	土壇28	弥生土器	甕	13.9	4.9	24.7	外面胴部煤付着。内面ていねいなヘラケズリ。若干上げ底ナデ。
553	1163	土壇28	弥生土器	甕	15.9	5.6	23.1	外面煤付着。底部付着無し。
554	1157	土壇28	弥生土器	鉢	16.4	6.7	13.5	水漉し粘土風。外面黒斑。
555	1159	土壇28	弥生土器	小鉢	15.9	6.4	5.2	口縁部内側に黒斑。
556	1165	土壇28	弥生土器	台付鉢	11.4	8.0	7.8	水漉し粘土風。脚部・口縁部黒斑。
557	1155	土壇28	弥生土器	高杯	17.4			透し孔頂全周に3個?。外面黒斑。
558	1337	土壇29	弥生土器	壺	14.3			
559	1341	土壇29	弥生土器	壺	13.7	8.0	27.9	外面黒斑。
560	1362	土壇29	弥生土器	壺	15.5	8.3	32.2	外面一部ハケメ残存。内面細かい移動痕なし。内底部焼きむら、淡灰黄色。
561	1345	土壇29	弥生土器	短頸壺	13.7	5.0	14.1	口縁部孔1ヶ所のみ。左右対称か?。若干上げ底気味。
562	1356	土壇29	弥生土器	甕	10.5	3.8	13.3	外面胴部煤付着。
563	1357	土壇29	弥生土器	甕		3.5		内外面一部褐色。
564	1354	土壇29	弥生土器	甕	14.8	4.9	30.1	噴きこぼれ痕。大きな砂粒少ない。内面中心・外面一部に黒斑。外面煤。
565	1343	土壇29	弥生土器	甕	16.7	5.7	29.5	底面工具ナデ?
566	1347	土壇29	弥生土器	甕	19.4	7.0	31.0	外面中に細い線のあるハケメ、浅くて粗いハケメののちハケナデ状。
567	1353	土壇29	弥生土器	甕	14.3	5.6	23.1	口縁歪み。外面煤付着。内面に細かい砂粒移動。
568	1359	土壇29	弥生土器	鉢	17.5	5.9	16.2	外面に工具痕。内面部分的にヘラケズリ痕。
569	1352	土壇29	弥生土器	甕	15.0	4.8	22.6	内外面煤・黒斑。
570	1336	土壇29	弥生土器	甕	13.1			外面煤付着。
571	1355	土壇29	弥生土器	甕	14.4	4.9	20.0	内面の中心・外面の一部褐色。
572	1349	土壇29	弥生土器	甕	14.8	4.6	21.6	歪んでいる。口唇部・胴部・底部外面煤付着。剝離、赤色変化。
573	1360	土壇29	弥生土器	甕	15.1			外面煤付着痕、ハケメ。内面ヘラケズリ(ミガキ効果)。
574	1358	土壇29	弥生土器	甕	15.4	4.7	13.6	外面煤付着、厚い部分あり。底部穿孔(焼成後)。
575	1368	土壇29	弥生土器	高杯	16.7			口縁部暗文風にヘラミガキ。
576	1367	土壇29	弥生土器	高杯	21.2			口縁部折り返しのある暗文風ヘラミガキ。
577	1346	土壇29	弥生土器	高杯	21.6	14.0	12.1	脚部透し孔4ヶ所。脚柱内部絞り痕顕著。
578	1369	土壇29	弥生土器	高杯	31.4			ソケット部剝離。
579	1361	土壇29	弥生土器	高杯	25.1	16.0	15.9	脚部透し孔4ヶ所。
580	1370	土壇29	弥生土器	高杯				脚柱のみ。
581	1366	土壇29	弥生土器	高杯		15.0		透し孔4つ。
582	1365	土壇29	弥生土器	高杯	14.8		9.5	水漉し粘土風。透し孔2つ。磨耗のため調整不明瞭。
583	1371	土壇29	弥生土器	高杯		17.0		透し孔4つ。
584	1364	土壇29	弥生土器	蓋	17.9		11.5	水漉し粘土風。内面口縁に沿って煤。高杯の脚柱部と製作技法同じ。
585	1350	土壇29	弥生土器	鉢	14.3	4.2	8.9	外面工具によるナデ(ミガキ状効果が得られている)。
586	1342	土壇29	弥生土器	鉢	21.5			内面全体・外面一部黒斑。表面に凹凸。
587	1351	土壇29	弥生土器	鉢	13.4	5.3	10.4	外面黒斑。
588	1348	土壇29	弥生土器	鉢	44.9	12.1	21.0	全体に黒っぽい。
589	1344	土壇29	弥生土器	器台		28.0		長方形透し孔。
590	1363	土壇29	弥生土器	器台		31.0		円形透し孔9つ。
591	1338	土壇29	弥生土器	製塩土器		3.7		底面黒斑。
592	1339	土壇29	弥生土器	製塩土器		4.7		底面黒斑。
593	1340	土壇29	弥生土器	製塩土器		3.8		外面焼きむら。
594	1378	土壇30	弥生土器	甕	15.3		5.5	外面アタリ痕。
595	1381	土壇30	弥生土器	鉢				刺突文。
596	1382	土壇30	弥生土器	小型台付鉢	9.1	4.6	6.6	内底部一方向のヘラミガキ。
597	1383	土壇30	弥生土器	小型台付鉢	9.8	6.4	8.0	内底部ナデ。外面焼きむら?
598	1384	土壇30	弥生土器	高杯		10.8		外面部分的にハケメ痕。
599	1386	土壇30	弥生土器	甕		5.2		外面ミガキの中に細い線あり。底面煤。
600	1385	土壇31	弥生土器	壺	11.8			頸部に径11mmの竹管文。
601	1380	土壇31	弥生土器	甕	13.1			
602	1389	土壇31	弥生土器	甕	12.5			口縁部凹凸。内面黒斑。
603	1379	土壇31	弥生土器	甕	15.8			
604	1377	土壇31	弥生土器	高杯	29.4			
605	1376	土壇31	弥生土器	鉢	33.2	8.9	21.5	外面黒斑。内面煤付着。
606	1387	土壇31	弥生土器	製塩土器		3.4		中心に工具のアタリ痕。
607	1420	土壇32	弥生土器	甕	15.5	5.0	26.5	底部ハケメののちナデ。底部内面ユビオサエ。
608	1481	土壇32	弥生土器	甕	15.1			
609	1419	土壇32	弥生土器	甕	14.5			口縁部歪みのため傾き不確実。
610	1416	土壇32	弥生土器	甕	17.0	5.8	16.7	水漉し粘土。底部ナデ。内面全体褐色。
611	1417	土壇32	弥生土器	甕	18.1			

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
612	1421	土壇32	弥生土器	甕	13.2			外面噴きこぼれ痕。
613	1423	土壇32	弥生土器	高杯	18.7			水漉し粘土。全体剝離、調整不明瞭。
614	1422	土壇32	弥生土器	高杯				水漉し粘土風。透し孔1個残存。剝離気味。
615	1318	土壇33	弥生土器	長頸壺	19.6	7.8	37.1	全体に磨耗。口縁部2個の孔あり。
616	1319	土壇33	弥生土器	甕	18.9	9.0	41.7	内面ほとんど砂粒を含まないためか移動痕ほとんどなし。
617	1313	土壇33	弥生土器			11.7		水漉し粘土。外面底部一部褐色。
618	1315	土壇33	弥生土器	甕	19.9			外面ハケメ10本/1cm。水漉し粘土。
619	1317	土壇33	弥生土器	甕	14.5	5.7	23.9	若干口径歪み。底面磨減、ヘラミガキ。
620	1312	土壇33	弥生土器	台付甕	14.0	12.5	41.1	外面底部・脚部煤付着。調整不明瞭。
621	1311	土壇33	弥生土器	甕・壺			6.0	水漉し粘土。底面押圧ナデ。
622	1314	土壇33	弥生土器	小鉢	4.3	3.3	3.7	水漉し粘土。外面底部一部・底面褐色。手握ね。
623	1316	土壇33	弥生土器	高杯	18.8	10.3	9.5	内底部重ね焼き痕?。漉し粘土。口縁外面暗文風ヘラミガキ。
624	1269	土壇34	弥生土器	甕	13.4	4.5	25.7	底部ナデ。
625	1267	土壇34	弥生土器	小壺		1.8		器面調整不明瞭。
626	1265	土壇34	弥生土器	高杯	15.6			
627	1266	土壇34	弥生土器	高杯		10.5		透し孔4個。
628	1268	土壇34	弥生土器	台付鉢	11.0	3.3	5.8	
629	1283	土壇35	弥生土器	長頸壺	18.4			口縁部に線刻の山形文一ヶ所のみ。
630	1282	土壇35	弥生土器	壺	19.6			全体的に磨減。外面ハケメのち下半にヘラミガキ。
631	1228	土壇36	弥生土器	甕	13.5			底部ユビオサエ。内底部ユビオサエ。
632	1227	土壇36	弥生土器	甕	16.0			
633	1223	土壇36	弥生土器	高杯		6.4		水漉し粘土。透し孔4ヶ所。
634	1224	土壇36	弥生土器	高杯		12.8		水漉し粘土。透し孔3ヶ所残。
635	1225	土壇36	弥生土器	小鉢	7.6		6.2	水漉し粘土。押圧痕。
636	1181	土壇38	弥生土器	長頸壺		7.8		頸部下に刺突文、沈線は螺旋状か?。外面胴部焼きむら。外面底部ヘラケズリ。
637	1182	土壇38	弥生土器	壺	14.7	7.3	34.0	外面ヘラミガキ。底面タタキ痕あり。内面ヘラケズリ、上部ヘラミガキ。
638	1199	土壇38	弥生土器	台付直口壺	6.8			水漉し粘土。内面絞り痕、オサエ痕。
639	1198	土壇38	弥生土器	甕	14.1			外面ナデのちハケメ。内面ていねいなケズリ。
640	1187	土壇38	弥生土器	甕	15.6			水漉し粘土風。外面ヘラミガキ、煤付着。内面ていねいなケズリか?
641	1200	土壇38	弥生土器	高杯		11.2		水漉し粘土。脚部透し孔。脚柱内部絞り痕。
642	1184	土壇38	弥生土器	高杯	20.0			内外面ヘラミガキ。脚部内面絞り痕。
643	1185	土壇38	弥生土器	高杯	22.9			水漉し粘土。調整不明瞭。
644	1186	土壇38	弥生土器	高杯	20.7	11.5	11.0	水漉し粘土。透し孔4つ。二次焼成か?赤っぽい。
645	1197	土壇38	弥生土器	鉢	16.1	4.6	8.7	ミガキが主体。
646	1183	土壇38	弥生土器	鉢	39.6			水漉し粘土。外面ハケメ。
647	1374	土壇40	弥生土器	長頸壺		8.2		頸部下に刺突文、中に工具の刺突文。外面底部黒斑?
648	1373	土壇40	弥生土器	高杯		11.7		水漉し粘土。透し孔4つ。底部外面黒斑。
649	1372	土壇40	弥生土器	台付鉢	9.6	6.9	8.0	脚部黒斑。下半外面ケズリ。
650	1375	土壇40	弥生土器	鉢	40.4			外面粗いハケメ。内面ヘラケズリのミガキ効果。
651	1246	土壇41	弥生土器	甕	16.3			外面ハケメ。
652	1249	土壇41	弥生土器	蓋	11.7		5.3	頂部に平たいつまみ。
653	1248	土壇41	弥生土器	高杯	29.2			
654	1245	土壇41	弥生土器	高杯				透し孔2個残存。
655	1247	土壇41	弥生土器	鉢	16.2			内面ケズリ痕、押圧痕。
656	1189	土壇42	弥生土器	甕	13.6			内外面煤付着、黒斑。外面ハケメ。内面ヘラケズリ。
657	1188	土壇42	弥生土器	台付鉢	16.9	9.8	14.6	口縁部左右一対の円孔。脚部4つ?の透し孔。
658	1238	土壇43	弥生土器	甕	14.4			
659	1239	土壇43	弥生土器	甕	15.4			外面ハケメ。
660	1241	土壇43	弥生土器	鉢	15.9			水漉し粘土。器面磨耗のため調整不明瞭。
661	1243	土壇43	弥生土器	台付直口壺	6.4			内面指頭押痕顕著。
662	1244	土壇43	弥生土器	高杯		12.8		4つの透し孔。
663	1240	土壇43	弥生土器	鉢	33.0	10.9	15.3	調整不明瞭ながら内外面ともにケズリののちミガキ?。底部ナデ。
664	1190	土壇44	弥生土器	甕	14.5	6.2	27.0	全体歪む。胴部煤付着。外底面ヘラミガキ。
665	1191	土壇44	弥生土器	広口小壺	6.9	2.6	7.1	水漉し粘土。外面黒斑。口縁部内外面に暗文風ヘラミガキ。
666	1193	土壇45	弥生土器	甕	14.0			外面ハケ、ミガキ(ハケ状2~3本中に細いハケミガキ)。
667	1192	土壇45	弥生土器	甕	13.0			外面煤付着、黒斑。
668	1194	土壇45	弥生土器	鉢	24.2	6.0	14.9	外面ハケメのちヘラミガキ。内面ヘラミガキ。
669	1237	土壇47	弥生土器	壺	17.7			
670	1231	土壇47	弥生土器	壺	15.0			内部ヘラケズリ、細かい線多し。
671	1230	土壇47	弥生土器	甕	11.2			
672	1236	土壇47	弥生土器	甕	15.2	4.9	23.4	底部ナデ。

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
673	1229	土壇47	弥生土器	壺		5.8		
674	1233	土壇47	弥生土器	製塩土器		3.5		底部ナデ。内部工具ナデ。
675	1232	土壇47	弥生土器	製塩土器		3.7		底部ユビオサエ、ナデ。内部工具ナデ。
676	1235	土壇47	弥生土器	製塩土器		3.4		底部ユビオサエ、ナデ。内部調整不明瞭。
677	1234	土壇47	弥生土器	製塩土器		3.4		底部ユビオサエ、ナデ。内部工具ナデ。
678	1277	土壇48	弥生土器	壺	17.4			口縁拡張部の両端部にキザミメ、中に工具の細かい線が数本。
679	1278	土壇48	弥生土器	高杯	19.4			水澆し粘土。器面荒れ調整不明瞭。
680	1273	土壇49	弥生土器	甕	44.8			外面粗いハケメ。
681	1272	土壇49	弥生土器	甕	6.0	6.4	28.3	底部粗いヘラミガキ。内部ヘラケズリ、移動痕少ない。
682	1270	土壇49	弥生土器	甕	13.0	4.6	21.8	外面ハケののちヘラミガキ。底部ナデ。器面部分的に調整不明瞭。
683	1271	土壇49	弥生土器	台付直口壺				水澆し粘土。孔の痕跡1ヶ所。
684	1260	土壇50	弥生土器	甕	15.0			外面ハケののちヘラミガキ。
685	1261	土壇50	弥生土器	甕		3.5		水澆し粘土風。
686	1264	土壇50	弥生土器	製塩土器		3.5		底部押圧、ナデ。
687	1263	土壇50	弥生土器	製塩土器		3.0		底部押圧、ナデ。
688	1259	土壇50	弥生土器	台付鉢	11.8	5.5	8.8	水澆し粘土風。口縁部糊圧痕跡?。底部押圧ナデ。
689	1262	土壇50	弥生土器	台付鉢?		5.6		水澆し粘土。
690	1410	土壇52	弥生土器	甕	16.1			器面一部磨耗。
691	1414	土壇52	弥生土器	高杯				透し孔全径4つ。脚柱部先端に工具の差し込み痕。
692	1407	土壇52	弥生土器	製塩土器		4.2		円盤充填。底部ナデ。内面に黒斑あり。
693	1401	土壇52	弥生土器	鉢	15.0	4.0	9.8	全体調整不明瞭。底部ナデ。
694	1402	土壇52	弥生土器	鉢	24.0	8.0	14.4	底部ヘラミガキ。内面ヘラケズリののち粗いヘラミガキ、部分的にケズリ痕。
695	1406	土壇53	弥生土器	壺	16.6			口縁部鋸歯文。頸部のヘラガキ沈線は部分的に螺旋状。頸部下に刺突文。
696	1408	土壇53	弥生土器	高杯				
697	1409	土壇53	弥生土器	高杯		10.0		裾部に直線文。
698	700	土壇54	弥生土器	甕	15.8			胎土に角閃石。
699	696	土壇54	弥生土器	鉢	17.4	7.6	14.0	口縁部に補修痕。底面ヘラケズリののちナデ。
700	655	土壇55	弥生土器	甕	13.9			外面ハケメ。
701	641	土壇55	弥生土器	甕	14.1			外面全体磨減。頸部に工具痕。
702	640	土壇55	弥生土器	甕	13.6	5.8		外面ハケメ4本/10mm、細い2本線部もあり。
703	648	土壇55	弥生土器	甕	13.9			口唇部歪み。外面ハケメの中に繊維痕跡。
704	653	土壇55	弥生土器	直口壺	6.2			水澆し粘土。外面細かいヘラミガキののちナデ。底部押圧ナデ。
705	650	土壇55	弥生土器	高杯	16.7	10.9	8.8	調整不明瞭。透し孔4つ。
706	642	土壇55	弥生土器	台付直口壺		11.0		全体に剝離。孔4つあり。外面波状文。
707	649	土壇55	弥生土器	高杯		10.0		外面透し孔1つ残。
708	654	土壇55	弥生土器	高杯		13.8		水澆し粘土。調整不明瞭。透し孔4ヶ所中3ヶ所残存。
709	628	土壇56	弥生土器	直口壺	7.8			水澆し粘土。内面赤灰色化粧土部分的に剝離。
710	627	土壇56	弥生土器	甕	17.3			調整不明瞭。
711	626	土壇56	弥生土器	鉢	22.0			外面ヘラミガキ。細いハケ痕、ヘラケズリが痕部分的に見られる。
712	646	土壇57	弥生土器	甕	11.7			外面ハケメののちいねいなヘラミガキ。
713	644	土壇57	弥生土器	甕	13.8			
714	643	土壇57	弥生土器	甕	15.3			外面若干絞り痕。
715	645	土壇57	弥生土器	台付鉢	11.0	4.8	9.3	外面に工具ナデ。底部粘土埋め込み痕。
716	647	土壇57	弥生土器	鉢	10.6	3.3	10.7	外面胴部粗いハケメ。
717	652	土壇57	弥生土器	高杯	26.3			
718	651	土壇57	弥生土器	高杯	26.0			全体的に器面荒れ。
719	718	土壇58	弥生土器	長頸壺	17.3			
720	721	土壇58	弥生土器	甕	19.4	9.0	35.5	噴きこぼれ痕。外面ハケメの中に細い繊維痕跡顕著。内面大きな砂粒が少ない。
721	710	土壇58	弥生土器	壺	13.9	7.3	25.4	外面ヘラミガキ。底面未調整に近い。
722	722	土壇58	弥生土器	甕	11.6	4.1	19.3	外面全体に煤付着。内面炭化物付着。
723	716	土壇58	弥生土器	甕	15.0	4.3	16.0	製塩土器と同じ胎土か? 732と似る。
724	711	土壇58	弥生土器	甕	13.7			復元実測。
725	717	土壇58	弥生土器	高杯	10.9	8.3	8.3	透し孔4ヶ所。内底部に押圧痕? 調整不明瞭。
726	720	土壇58	弥生土器	高杯	23.1			透し孔3ヶ所? 調整不明瞭。
727	719	土壇58	弥生土器	高杯		17.0		透し孔2ヶ所残存。脚柱部下に5本の沈線。
728	709	土壇58	弥生土器	鉢	15.3	5.2	7.5	内外面ナデ。
729	715	土壇58	弥生土器	鉢	18.1	5.0	8.2	調整不明瞭。
730	712	土壇58	弥生土器	製塩土器	12.6			外面タテに重ねるようにヘラケズリ。内面ナデ。
731	713	土壇58	弥生土器	製塩土器		4.6		調整不明瞭。内面ナデ。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
732	714	土壇58	弥生土器	製塩土器		4.6		調整不明瞭。外面ヘラケズリののち押圧ナデ。
733	1280	溝15	弥生土器	甕	15.2			
734	1281	溝15	弥生土器	甕	15.4			
735	1279	溝15	弥生土器	台付直口壺	6.2	11.9	13.3	水漉し粘土。孔4ヶ所。
736	615	溝17	弥生土器	甕	17.5			外面ハケメの中に細かい繊維痕?。口縁部下に工具のあたり。
737	620	溝18	弥生土器	甕	14.8			調整不明瞭。
738	619	溝18	弥生土器	甕		4.4		底部ハケメ。内面ナデののちユビオサエ凹凸あり。
739	622	溝18	弥生土器	台付小壺	3.4			胴部に貼付帯。
740	621	溝18	弥生土器	鉢	15.1	8.3	3.5	内外面剥離ヶ所多し。表面凹凸部分。
741	613	溝18	弥生土器	器台	21.6	30.6		口縁上端部半裁竹管による組み合わせ文。口縁部外面に鋸歯文。透し孔9つ?。
742	603	溝21	弥生土器	甕	18.3			外面ハケメの中に細かい繊維痕。
743	604	溝21	弥生土器	甕		4.3		底面上げ底ナデ、強い指圧痕跡。
744	605	溝21	弥生土器	高杯	15.8		7.6	透し孔4ヶ所残存。内外面ヘラミガキ。
745	600	溝21	弥生土器	鉢	15.6	5.3	9.3	調整不明瞭。
746	618	水田層	弥生土器	長頸壺	18.1			頸部下に刺突文、中に細かい工具線。
747	611	水田層	弥生土器	甕	17.0			調整不明瞭。
748	602	水路2	弥生土器	壺	17.6			外面部分的に横方向のヘラミガキ。
749	708	水路3	弥生土器	甕	14.2	6.0	28.5	口縁部に歪み。外面工具ナデによる細かい条線。底面工具ナデ。歪み。
750	610	水路2	弥生土器	壺				二重に縁あり。内面指圧痕。
751	608	水路2	弥生土器	甕	13.6			内面ほとんど砂粒の移動痕なし。
752	601	水路1	弥生土器	甕	13.5	3.3	17.8	外面ハケメ5~6本/10mm。底面ナデ。
753	701	水路3	弥生土器	高杯	11.1			透し孔4ヶ所。内外面ヘラミガキ。内面付着物。
754	609	水路2	弥生土器	広口小壺	9.0	3.1	8.8	調整不明瞭。
755	31	竪穴住居11	土師器	製塩土器	5.2			剥落して不明瞭。押圧痕跡。
756	1128	竪穴住居12	須恵器	杯身	12.6		4.0	底面左ヘラケズリ。内面仕上げナデ。
757	1130	竪穴住居12	須恵器	杯身				内外面ヨコナデ。
758	1137	竪穴住居12	土師器	鉢	33.8		19.3	外面押圧、ハケ。底部の辺りに接合痕。
759	1127	竪穴住居13	須恵器	杯身	16.0		3.8	底面左ヘラケズリ。内面仕上げナデ。
760	1153	竪穴住居14	須恵器	杯身	9.8		4.9	内外面ヨコナデ。底面ヘラケズリ。
761	1275	竪穴住居15	土師器	器	16.4			
762	1274	竪穴住居15	土師器	器	14.8			口縁部下外面工具痕のあたり。内外ともハケメ。
763	1276	竪穴住居15	須恵器	杯身	12.5			
764	1150	竪穴住居16	須恵器	杯身	11.2		5.0	右回りロクロ使用。内外面ヨコナデ。底面ヘラケズリ。
765	1149	竪穴住居16	須恵器	杯身	12.3		3.8	左回りロクロ使用。内外面ヨコナデ。底面ヘラケズリ。
766	1140	竪穴住居16	須恵器	甕	20.8			口縁部外面クンガキ波状文。外面胴部・内面口縁部自然釉。
767	1141	竪穴住居16	須恵器	甕	11.4			口縁部白色自然釉付着。外面タタキ痕。
768	1142	竪穴住居16	土師器	甕	15.6			外面粗いハケメ。内面ナデののち工具ナデ。
769	1143	竪穴住居16	土師器	甕	16.2			外面粗いハケメ。内面口縁部ヨコナデ。
770	1138	竪穴住居16	土師器	高杯	17.5	10.7	10.9	内外面調整不明瞭。内底部オサエナデ。
771	1151	竪穴住居16	土師器	碗	8.7		5.7	外面タタキメ残。内面回しながらナデ?(押圧ナデ)
772	1139	竪穴住居16	土師器	製塩土器	18.4		13.7	外面タタキ痕、指圧痕。
773	1152	竪穴住居16	土師器	把手付甕	21.5		19.5	外面頸部以下煤付着痕。内外面ともに粗いハケ。
774	1146	竪穴住居17	須恵器	杯身				
775	1147	竪穴住居17	須恵器	杯蓋				内外面ヨコナデ。
776	1154	竪穴住居20	須恵器	杯蓋	13.1		4.4	ロクロ左回し。内外面ヨコナデ。底面ヘラケズリ。
777	1148	竪穴住居20	須恵器	杯身	10.4			内外面ヨコナデ。底面ヘラケズリ。受け部自然釉付着。
778	36	井戸7	土師器	甕	13.0	2.0	19.0	外面ハケメののちヘラミガキ。頸部ナデ痕顕著。
779	32	井戸7	土師器	甕	13.5	4.0	22.0	刺突文2個一対。外面・底部粗にヘラミガキ。
780	33	井戸7	弥生土器	甕	16.4	5.8	25.3	刺突文2個一対。外面粗いヘラミガキ。内底部中央強い凹み。
781	37	井戸7	土師器	甕	14.1		22.8	3個一対の刺突痕。内底部押圧痕。
782	47	井戸7	土師器	壺	15.6			底部ヘラミガキ。内面ヘラケズリの下に押圧痕顕著。
783	42	井戸7	土師器	甕	13.6			外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
784	41	井戸7	土師器	甕	14.5			噴きこぼれ痕。外面ナデののちヘラミガキ。内面ヘラケズリ。
785	35	井戸7	土師器	甕	14.3	4.1	24.8	刺突文4個一ヶ所。外面ハケメののちヘラミガキ。内部ヘラケズリ、オコゲ痕。
786	34	井戸7	土師器	甕	14.1	4.4	22.0	刺突文3個一対1ヶ所。外面細かいハケメののちヘラミガキ。
787	40	井戸7	土師器	甕	14.3	4.2	24.2	外面ハケメののちヘラミガキ。内部ヘラケズリののちナデ。
788	47	井戸7	土師器	甕		3.8		肩部外面煤の下にタタキ痕残。肩部ハケ、その以外ヘラキミガキ。
789	39	井戸7	土師器	甕		2.5		外面ヘラミガキ。内面ヘラケズリののちナデ。
790	44	井戸7	土師器	甕		6.1		底面わずかにヘラミガキ。内面底部炭化物多し、押圧痕。
791	46	井戸7	土師器	甕		4.5		外面噴きこぼれ痕。内面底部押圧痕。

掲載番号	番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴・備考
					口径	底径	器高	
792	43	井戸7	土師器	甕		4.3		外面煤付着。内部炭化物付着。
793	45	井戸7	土師器	甕		4.5		底部ヘラミガキ。内底部炭化物付着。
794	38	井戸7	土師器	甕		1.7		水澆し粘土分多し。くの字口縁の可能性大。
795	213	井戸8	土師器	長頸壺	15.8			口縁部ヨコナデ。外面ハケメ。内面ていねいなケズリ。
796	207	井戸8	土師器	壺		8.0		底部ナデ、未調整っぽい。底部内面工具ナデ。
797	205	井戸8	土師器	甕	16.9			口縁部ヨコナデ。
798	206	井戸8	土師器	甕	14.8			口縁部ヨコナデ。
799	203	井戸8	土師器	甕	15.8	4.7		底部ヘラミガキ、ほぼ平坦。内面炭化物付着。肩部ハケ、それ以外ヘラミガキ。
800	212	井戸8	土師器	甕	16.2			外面調整不明瞭。胎土に角閃石を含むチョコレート色(讀較産か)
801	210	井戸8	土師器	甕	16.1	4.4	28.6	胴部外面粗いタタキ、3段階形成(中部瀬戸内島興部か)。底部ナデ。
802	202	井戸8	土師器	甕	15.8	3.9	23.8	口縁部ヨコナデ。胴部外面粗いタタキ(中部瀬戸内島興部か)。底部ナデ。
803	211	井戸8	土師器	甕	14.9		10.5	口縁部ヨコナデ。胴部外面粗いタタキ(中部瀬戸内島興部か)。内面ハケメ。
804	209	井戸8	土師器	高杯	17.8			外面ミガキ、ヨコナデ。内面ミガキ。
805	208	井戸8	土師器	鉢	14.9	2.9	9.4	水澆し粘土風。底部ヘラミガキ。
806	236	井戸9	弥生土器	長頸壺	17.4			口縁部ヨコナデ。外面ナデのちミガキ。内面工具ナデ。
807	217	井戸9	土師器	壺	16.3	6.0	62.0	底部ナデ?内面ヘラケズリ。細かい線が多い。焼きむらあり。
808	233	井戸9	土師器	直口壺	8.7			水澆し粘土風。外面ヘラミガキ。
809	235	井戸9	土師器	甕	14.7	4.5	23.6	底部ヘラミガキ。内面炭化物剝離痕。
810	214	井戸9	土師器	甕	15.8			口縁部ヨコナデ。外面ハケメのちヘラミガキ、全体に疎。内面ケズリ。
811	215	井戸9	土師器	甕	14.2	4.1	23.4	外面ヘラミガキ。底部ヘラミガキ。内面ケズリのち手ナデ。
812	229	井戸9	土師器	甕	12.9			表面一部剝離。
813	221	井戸9	弥生土器	甕	14.7			内面ナデ、ヘラケズリ。
814	220	井戸9	土師器	甕	15.9			口縁部ヨコナデ。外面細かいハケメ。
815	224	井戸9	土師器	甕		3.2		外面押圧、ナデ。底部ナデのち一部ヘラミガキ。
816	234	井戸9	土師器	高杯	18.6			水澆し粘土。内・外面ヘラミガキ。
817	216	井戸9	土師器	高杯	22.0	16.2	7.3	外面ヨコヘラミガキ。表面化粧土。透し孔4ヶ所。
818	227	井戸9	土師器	台付鉢	11.3			水澆し粘土。内底部工具痕。弥生土器の可能性。
819	230	井戸9	土師器	高杯				透し孔3ヶ所。
820	218	井戸9	土師器	鉢	7.5	1.7	6.5	外面ハケメのちヘラミガキ、底部にも及ぶ。
821	225	井戸9	土師器	小型鉢	11.6		7.3	底部、内底部押圧痕。内面蜘蛛の巣状にハケメ。
822	226	井戸9	土師器	鉢				底部剝離。
823	219	井戸9	土師器	台付鉢	16.2	6.0	9.8	外面ハケメのちナデ。底部ナデ。
824	232	井戸9	土師器	台付鉢		8.3		底部ハケメ。
825	223	井戸9	土師器	製塩土器		2.6		外面タタキ痕を残す。内面、底部手ナデ。
826	222	井戸9	土師器	製塩土器		4.3		脚部ケズリ、ナデ。弥生土器の可能性。
827	27	井戸10	須恵器	提瓶	8.7			内外面わずかに自然釉(ゴマ状)が残る。
828	28	井戸10	須恵器	杯蓋	12.0			外面回転ヘラケズリ。
829	29	井戸10	須恵器	壺	14.7			内外面ヨコナデ。
830	25	井戸10	土師器	甕	20.7			肩部内面タタキアテ具痕のちナデ。
831	1133	土壌59	土師器	甕	31.0			口縁部歪む。口縁内面にヘラ記号3本、細かなハケ状ヨコナデ痕。
832	1158	土壌59	土師器	甕	18.4			外面下部煤付着痕。内面下部押圧痕。
833	1135	土壌59	土師器	ツバ付甕				内外面とも赤色変化。
834	1131	土壌59	須恵器	杯蓋	12.6		3.9	外面自然釉付着。内外面ヨコナデ。底面ヘラケズリ。
835	1129	土壌59	須恵器	杯身	12.2			口縁部自然釉付着。
836	1136	土壌59	須恵器	高杯	14.1	8.4	8.0	外面ナデのちヘラケズリのちナデ。
837	1132	土壌59	須恵器	高杯		9.6		
838	310	溝25	須恵器	杯身				
839	629	溝28	須恵器	杯身	13.1			底体部自然釉。底面ヘラケズリ。
840	571	溝29	土師器	埴				調整不明瞭。外部黒斑。
841	566	溝29	土師器	直口壺	7.3			口縁部に円孔2個。外面丹塗り。
842	553	溝29	土師器	甕	3.5			内面ヨコナデアゲ。
843	572	溝29	土師器	甕	12.4			口縁外面クシガキ沈線。
844	573	溝29	土師器	甕	14.7			口縁外面クシガキ沈線。
845	563	溝29	土師器	甕	14.8			外面胴部粗いハケメ。
846	562	溝29	土師器	甕	16.4			外面胴部粗いハケメ。内面ナデ。
847	569	溝29	土師器	甕	14.6			外面胴部ハケメ。
848	570	溝29	土師器	甕	17.0			全体磨滅。外面白っぽく焼きむら。
849	564	溝29	土師器	甕	18.0			外面胴部ハケメ。内面胴部ナデ。
850	565	溝29	土師器	甕	18.0			外面胴部ハケメ14本/2.5cm。内面ナデ。



## 1. 土器観察表

掲載番号	番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴・備考
					口径	底径	器高	
851	554	溝29	土師器	甕	13.8			外面胴部粗いハケメ3~4本/10mm。
852	555	溝29	土師器	甕	15.8			外面口唇部にユビオサエ痕。
853	558	溝29	土師器	甕	20.0			調整不明瞭。外面わずかにハケメ。
854	567	溝29	土師器	甕	20.9			外面ハケメのちヨコナデ。
855	577	溝29	土師器	甕	19.8			外面工具ナデが全体にされて、粗いハケメがほとんど消滅。
856	598	溝29	土師器	甕	18.8			外面胴部ハケメ、煤付着。内面胴部ヘラケズリのちナデ。
857	599	溝29	土師器	甕	19.9			外面タタキ痕のちランダムに工具ナデ、ミガキ状工具痕も見られる。
858	560	溝29	土師器	甕	20.0			内面一部にタテアタリ痕。
859	559	溝29	土師器	甕	16.6			外面胴部ハケメ。内面胴部わずかにアタリ痕。
860	561	溝29	土師器	鉢	21.0			外面胴部ハケメ7~8本/10mm。
861	574	溝29	土師器	甕	24.6			外面ハケメ不規則3~5本/1cm、タタキに似る。内面ナデ顕著。
862	576	溝29	土師器	鍋	27.7			外面粗いハケメ、一部ほとんどナデで消される。
863	551	溝29	土師器	碗	12.0		5.5	内外面黒漆。内部底面暗文不明瞭。内面ヘラミガキ。漆容器か？
864	552	溝29	土師器	杯身	13.0		5.7	内外面回転ナデ。水漉し粘土風。外面黒漆？。外面口縁部ヘラミガキ。
865	575	溝29	土師器	高杯	13.1			内外面回転ナデ。水漉し粘土。全体が歪んでいる。
866	556	溝29	土師器	高杯		10.0		内外面回転ナデ。水漉し粘土。外面指押圧。
867	557	溝29	土師器	高杯		8.8		内外面回転ナデ。水漉し粘土。
868	581	溝29	須恵器	杯蓋	11.9		4.3	内外面回転ナデ。外面全体にオリブ黒ガラス釉。内面使用のためか滑らか。
869	544	溝29	須恵器	杯蓋	12.4		5.9	内外面回転ナデ。外面重ね焼き痕。自然釉付着部。
870	582	溝29	須恵器	杯蓋	12.8		4.6	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ左。外面使用のためか滑らか。
871	524	溝29	須恵器	杯蓋	13.2		4.5	内外面回転ナデ。外面口縁部自然釉。
872	583	溝29	須恵器	杯蓋	13.5		4.8	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ左。内天井面滑らか。
873	522	溝29	須恵器	杯蓋	14.4		4.2	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ。
874	585	溝29	須恵器	杯蓋	14.7		4.8	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ左。使用痕か？表面滑らか。
875	543	溝29	須恵器	杯蓋	14.7		5.9	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ。外面ヨコナデのちケズリ。
876	523	溝29	須恵器	杯蓋	14.8		4.7	内外面回転ナデ。内面底部に当て具痕。
877	586	溝29	須恵器	杯蓋	14.8		5.2	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ左。内天井部に当て具痕。
878	584	溝29	須恵器	杯蓋	15.2		5.3	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ左。外底面窯印。当て具痕。自然釉付着。
879	545	溝29	須恵器	杯蓋	14.5		4.8	内外面回転ナデ。外天井部ヘラケズリ。
880	595	溝29	須恵器	高杯	10.0	8.2	9.3	内外面回転ナデ。透し孔(台形)4つ。
881	594	溝29	須恵器	高杯		9.5		内外面回転ナデ。透し孔(台形)3つ。自然釉付着。
882	546	溝29	須恵器	高杯		8.5		内外面回転ナデ。
883	547	溝29	須恵器	高杯		9.1		内外面回転ナデ。外面焼きむら。
884	538	溝29	須恵器	杯身	10.6			内外面回転ナデ。外面胴~底部自然釉〔オリブグリーン(ガラス釉)灰かぶり〕。
885	592	溝29	須恵器	杯身	12.0		4.2	内外面回転ナデ。外底面ヘラケズリ右。外底面窯印。灰付着。
886	537	溝29	須恵器	杯身	12.3		4.9	内外面回転ナデ。外面焼きむら、一部幸沢煮のある自然釉付着。
887	588	溝29	須恵器	杯身	12.4		4.5	内外面回転ナデ。外底面ヘラケズリ右。
888	536	溝29	須恵器	杯身	12.3		5.2	内外面回転ナデ。
889	591	溝29	須恵器	杯身	13.6		5.1	内外面回転ナデ。外底面ヘラケズリ左。底面一部自然釉付着。
890	590	溝29	須恵器	杯身	12.8	16.0	5.0	内外面回転ナデ。外底面ヘラケズリ右。外面自然釉付着。
891	534	溝29	須恵器	杯身	14.2		4.7	内外面回転ナデ。内底面仕上げナデ。外底面ヘラケズリ右。外面自然釉付着。
892	589	溝29	須恵器	杯身	14.0		4.8	内外面回転ナデ。外面自然釉付着。釜印の一部残。
893	587	溝29	須恵器	杯身				内外面回転ナデ。
894	548	溝29	須恵器	杯身	13.1		4.6	内外面回転ナデ。内面焼きむらか？煤付着痕？
895	535	溝29	須恵器	杯身	11.5		4.2	内外面回転ナデ。外面口縁部に重ね痕。
896	540	溝29	須恵器	杯身	11.2		3.9	内外面回転ナデ。底部ヘラギリのちナデ。
897	542	溝29	須恵器	杯身	11.6		3.9	内外面回転ナデ。外底面ヘラケズリ。外面口縁部重ね焼き痕。
898	541	溝29	須恵器	杯身	11.6		4.3	内外面回転ナデ。内面凹凸。
899	593	溝29	須恵器	壺	6.8			内外面回転ナデ。外底面ヘラケズリ左。重ね焼き痕あり。肩部自然釉光沢を持つ。
900	579	溝29	須恵器	甕	18.7			外面タタキのちヨコナデ。
901	580	溝29	須恵器	甕	19.4			
902	578	溝29	須恵器	甕	14.4			

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
903	533	溝29	須恵器	甕	19.2			外面口縁部に自然釉1/2かかる。工具のあたり痕。
904	532	溝29	須恵器	甕				内外面口唇部自然釉付着。内面口唇部に溶片付着物。クシガキ波状文。
905	616	溝31	土師器	直口壺	9.2	1.4	12.6	外面全体にナデでハケメが消去。
906	612	溝31	土師器	甕	14.7			外面縦線痕顕著。口唇部歪み。
907	623	溝31	土師器	小型鉢	9.5			
908	625	溝31	土師器	高杯	13.3			調整不明瞭。水漉し粘土。
909	624	溝31	土師器	高杯				外面化粧土の残りあり。透し孔1ヶ所。水漉し粘土。
910	606	溝34	須恵器	甕				外面クシガキ波状文。内外面自然釉付着。
911	溝35	須恵器	蓋	18.8		2.4		つまみ。
912	509	溝35	須恵器	蓋	16.2			内外面回転ナデ。
913	508	溝35	須恵器	蓋	15.4			内外面回転ナデ。つまみの一部残。
914	510	溝35	須恵器	蓋	15.0			内外面回転ナデ。
915	485	溝35	須恵器	蓋	13.1	7.8	1.8	内外面回転ナデ。外面口縁部重ね焼きによる焼きむら。蓋を覗に転用。
916	497	溝35	須恵器	杯身		9.8	3.7	内外面回転ナデ。
917	513	溝35	須恵器	高台杯	14.9	12.3	4.6	内外面回転ナデ。高台貼付ののちナデ。
918	507	溝35	須恵器	高台付碗		11.9		内外面回転ナデ。高台貼付ののちナデ。
919	515	溝35	須恵器	高台杯		10.2		内外面回転ナデ。高台貼付ののちナデ。
920	514	溝35	須恵器	高台杯		9.6		内外面回転ナデ。高台貼付ののちナデ。
921	482	溝35	須恵器	杯身	18.8	15.9	3.5	内外面回転ナデ。外面砂粒の移動方向は反時計回り。底面ヘラ切りののちナデ。
922	512	溝35	須恵器	長頸壺	12.0			内外面回転ナデ。内面口縁部・外面肩部自然釉。
923	506	溝35	須恵器	双耳壺		10.9		内外面回転ナデ。耳部は貼付、ヘラ形成後円孔。
924	475	溝35	須恵器	杯	12.2	7.5	3.3	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。外面口縁部焼きむら。
925	477	溝35	須恵器	杯	12.2	8.5	3.2	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。外面口縁部焼きむら。
926	468	溝35	須恵器	杯	11.2	8.2	3.2	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。
927	483	溝35	須恵器	杯	12.1	7.9	4.0	底面ヘラ切りののち若干ていねいなナデ。
928	487	溝35	須恵器	杯	13.4	9.2	3.8	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。外面「□家」墨書。
929	488	溝35	須恵器	杯	12.6	8.1	3.6	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。外底面墨書。
930	499	溝35	須恵器	杯	14.0	8.7	3.7	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。口縁部に重ね焼き痕。
931	467	溝35	須恵器	杯	12.7	7.8	3.7	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。口縁部3/4自然釉。
932	498	溝35	須恵器	杯	12.6	9.0		内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。口縁部に重ね焼き痕。
933	504	溝35	須恵器	杯	12.1	5.8	3.5	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。
934	503	溝35	須恵器	杯	12.2	7.8	3.5	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。
935	489	溝35	須恵器	杯	11.9	7.2	2.6	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内底面「酒」墨書。
936	473	溝35	土師器	杯	11.6	7.6	3.3	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
937	470	溝35	土師器	杯	12.1	8.0	3.8	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
938	469	溝35	土師器	杯	12.4	8.0	3.2	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
939	472	溝35	土師器	杯	12.2	8.7	3.4	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
940	474	溝35	土師器	杯	12.5	8.9	3.4	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
941	484	溝35	土師器	杯	13.1	8.6	3.4	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
942	490	溝35	土師器	杯		10.1		内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。外底面「下□」墨書。内面赤色顔料。
943	491	溝35	土師器	杯	13.0	3.4	7.2	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
944	495	溝35	土師器	杯	14.4			内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
945	492	溝35	土師器	皿	17.0	14.6	2.5	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。
946	478	溝35	土師器	皿	16.7	14.4	2.0	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。

## 1. 土器観察表

掲載番号	番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴・備考	
					口径	底径	器高		
947	496	溝35	土師器	皿	14.1		1.6	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。内外面赤色顔料。	
948	486	溝35	土師器	皿	14.6	11.3	1.7	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。外底面「大」墨書。内外面赤色顔料。	
949	476	溝35	須恵器	杯	13.7	6.6	4.2	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデとユビオサエ痕。	
950	481	溝35	須恵器	杯	14.4	5.6	3.8	内外面ヨコナデ。外底面ヘラキリののち押圧。内底面ナデ。外面口縁部重ね焼き痕。	
951	505	溝35	須恵器	杯身	14.5	7.7	5.0	外面ヨコナデ。底面ヘラ切りののちナデ。	
952	494	溝35		杯身	14.0	7.0	4.9	内外面とも回転ナデ。底面ヘラ切りののちナデ。中央に粘土痕。	
953	493	溝35	土師質	杯身	12.0	6.1	3.9	内外面とも回転ナデ。	
954	500	溝35	瓦	平皿				外面平行タタキ、布目。須恵質。	
955	516	井戸11	土師質	小皿	6.7		1.3	水澆し粘土。	
956	517	井戸11	土師質	小皿	6.7		1.5	水澆し粘土。全体に火を受ける。	
957	518	井戸11	土師質	小皿	7.3		1.4	水澆し粘土。外面ユビナデ。底面ユビオサエ。	
958	519	井戸11	須恵質	小皿	9.4	6.3	1.7	水澆し粘土。底面ヘラギリ痕。	
959	525	井戸11	瓦質	鍋	22.5			左右取っ手に穿孔。表面凹凸あり。全体に煤付着。	
960	528	井戸11	備前焼	甕				外面口縁部自然緑釉が厚く付着（一部に）。	
961	526	井戸11	備前焼	壺	9.8			内面口縁部自然釉（白色灰緑色）厚く付着。	
962	530	井戸11	備前焼	播鉢		20.0		外面口唇部・内面口縁部自然釉付着。	
963	527	井戸11	備前焼	播鉢か捏鉢				外面口縁部白いゴマ状に自然釉付着。	
964	531	井戸11	備前焼	播鉢				外面自然釉付着。	
965	521	井戸11	青磁	碗	15.8			外面口縁部雷文帯。胴部線描蓮弁文。内外ともヒビ割れ痕貫入？	
966	529	井戸11		丸瓦				内面布目痕。外面斜格子痕、タタキ。	
967	1250	土墳墓 2		白磁碗	16.5	6.0	7.0	施釉部分あり、若干オリブ灰がかかった灰白。	
968	1258	土墳墓 3		青磁碗	16.3	5.0	7.5	高台以外全部釉薬。蓮華文 2 個、蓮華の華文 1 ヶ（片彫り）	
969	1257	土墳墓 3		青磁小皿	10.8	4.3	2.2	内底部槽によるジクザク文様、ヘラ片彫り花文状。	
970	1253	土墳墓 4		白磁碗	14.9	5.4	6.9	施釉部分あり、ごく薄い釉のたれ部分が全体にまわる。	
971	1251	土墳墓 4		白磁碗	16.0	5.9	6.7	施釉部分あり、わずかに施釉に褐色砂粒が見られる。	
972	1252	土墳墓 4		白磁皿	10.0	4.4	2.7	施釉部分あり、ガラス質内外とも粗く貫入あり。	
973	1254	土墳墓 4		白磁皿	9.9	3.7	2.9	施釉部分あり、沈線状に段をもち、釉が厚く線状に見られる。	
974	1255	土墳墓 4		白磁小皿	9.9	3.9	3.0	施釉部分あり、段をもった部分、釉が深く入っている。	
975	1256	土墳墓 4		白磁小皿	9.9	3.6	2.7	施釉部分あり、釉部にわずかに褐色砂粒。	
976	26	溝36	土師質	高台付碗		5.8		水澆し粘土。	
977	1125	溝39	瓦器	碗		4.5		内面暗文風ヘラミガキのち格子状の暗文。外面も暗文あり。	
978	1124	溝39	瓦器	碗	12.9			外面若干圧痕が残る、ナデ。内面ナデの暗文。	
979	1123	溝39	瓦器	碗	13.0			内面暗文の下に若干ハケメが見られる。	
980	1126	溝39	瓦器	碗		4.9		内面暗文あり。	
981	17	溝39	土師質	高台付碗	13.2	6.2	4.1	表面水澆し粘土。内底部ナデ。	
982	16	溝39	土師質	高台付碗	13.9	5.5	4.5	水澆し粘土（金雲母無し角閃石多い）。内底部わずかに凹凸あり。	
983	1102	溝39	土師質	高台付碗	14.6	5.9	4.4	調整不明瞭。	
984	15	溝39	土師質	高台付碗	14.3	5.6	4.5	水澆し粘土。	
985	1103	溝39	土師質	高台付碗	14.8	68.5	4.7	表面かなり荒れている。内外面ナデ。	
986	19	溝39	瓦器	小皿	8.5	4.9	2.1	内面ていねいなナデののち暗文。底部ナデ。	
987	20	溝39	瓦器	小皿	10.3	4.6	2.4	内面暗文風。底部平坦面。	
988	1118	溝39	土師質	小皿		9.6		内面ヘラミガキ。外・底面ナデ。	
989	1117	溝39	土師質	小皿		82.5	5.8	1.3	底面ヘラギリ。外面ヨコナデ。内面工具によるナデ。
990	18	溝39	土師質	皿	12.3	9.4	2.6	水澆し粘土。底部回転ヘラギリ。	
991	23	溝39	土師質	小皿	7.5	6.2	1.5	水澆し粘土。底面回転ヘラギリ痕。	
992	21	溝39	土師質	小皿	8.1	6.5	1.6	水澆し粘土。底面ヘラギリ、板目痕のこる。外面有機物付着。	
993	22	溝39	土師質	小皿	8.1	7.3	1.4	水澆し粘土。底面ヘラギリ、板目痕のこる。	
994	24	溝39	土師質	小皿	7.5	4.3	1.2	水澆し粘土。底面糸切り痕。	
995	1107	溝39	土師質	脚台		6.3		底面中心ヘラギリ跡。全面ナデ。	
996	1108	溝39	土師質	脚台		6.4		底面中心ヘラギリ未調整。全面ナデ。	
997	1116	溝39	青白磁	碗				一部釉のたれ（厚い）部分あり。	
998	1115	溝39	白磁	碗				外面釉のたれ部分あり。	
999	1114	溝39	白磁	碗				使用のためか釉表面光沢を失う部分あり。	
1000	1472	溝39	白磁	碗	15.5			内外面ナデ。釉付着。	
1001	1471	溝39	白磁	碗	16.3			内外面ナデ。釉付着。	
1002	1113	溝39	青磁	碗		5.2		外面釉（ガラス質オリブグリーン）、猫描き。内面ガラス釉表面光沢無し。	
1003	1475	溝39	白磁	碗		6.7		底面ケズリ、ナデ。	

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
1004	1473	溝39	白磁	碗		6.3		底面ケズリ、ナデ。
1005	1474	溝39	白磁	碗		6.1		底面ケズリ、ナデ(中途半端)
1006	13	溝39	亀山焼	甕	21.6			内面あて具痕の丁寧なナデ痕。
1007	1111	溝39			18.7			口縁部若干自然釉付着、工具アタリ痕あり。胴部ヘラ記号あり。
1008	1110	溝39	亀山焼	こね鉢		10.1		底部糸切り痕、重ね焼き痕あり。内面使用?かなり磨滅。
1009	1105	溝39	東播系	こね鉢	27.0			外面東播系。内面ヨコナデ、煤付着痕あり?
1010	1122	溝39	土師器	土鍋				外面煤付着。内面ハケメ。
1011	12	溝39	土師質	土鍋	33.3			内外面とも粗いハケメ。
1012	1119	溝39	土師質		44.4			外面オサエのちハケメ。内面工具ナデ。
1013	1104	溝39	土師質	土鍋	35.0			口縁に押圧痕めぐる。内外面ハケメ。使用のためか煤付着。
1014	14	溝39	土師質	土鍋	30.5			内外面とも粗いハケメ。
1015	11	溝39	土師質	土鍋	32.4	3.2	14.4	内外面とも粗いハケメ。若干上げ底か?
1016	1121	溝39	瓦	平瓦				外面布目痕あり。内面格子状施す。
1017	511	溝35	瓦器	小皿	8.9			外面底部指頭圧のちナデ。表面凹凸あり。
1018	471	溝35	土師質	高台碗	11.6	4.7	3.7	内面一部重ね焼き痕あり。
1019	393	包含層等	弥生土器	甕		4.0		底部焼成前穿孔。内底部オコゲ痕。
1020	850	土器溜り2	弥生土器	甕		6.7		外底部に線刻画?
1021	311	包含層等	須恵器	杯蓋				
1022	312	包含層等	須恵器	甕	15.4			頸部表面工具アタリ痕。
1023	480	包含層等	土師器	碗				調整不明瞭。
1024	479	包含層等	土師器	碗				器面丹塗りの施し。
1025	501	溝35	備前	搦鉢				外面自然釉一部付着。
1026	502	溝35	備前	搦鉢				
1027	972	土器溜り3	縄文土器	鉢				口縁部外面巻貝による凹線文。
1028	966	土器溜り3	縄文土器	深鉢				口縁部外面巻貝による凹線文と扇条痕。
1029	964	土器溜り3	縄文土器	深鉢	28.5			口縁部内外面巻貝による凹線文と扇条痕。
1030	965	土器溜り3	縄文土器	深鉢				口縁部と体部外面巻貝による凹線文。
1031	975	土器溜り3	縄文土器	鉢				
1032	974	土器溜り3	縄文土器	鉢				口縁部外面巻貝による凹線文。
1033	973	土器溜り3	縄文土器	鉢				口縁部内面巻貝による凹線文。
1034	976	土器溜り3	縄文土器	浅鉢				口縁部外面巻貝による凹線文と扇条痕。
1035	967	土器溜り3	縄文土器	浅鉢		3.1		口縁部外面巻貝による凹線文と扇条痕。
1036	963	土器溜り3	縄文土器	深鉢				口縁部と体部外面に巻貝による凹線文と扇条痕。
1037	971	土器溜り3	縄文土器	深鉢	25.9	6.7		口縁部外面巻貝による凹線文。
1038	970	土器溜り3	縄文土器	深鉢		5.8		外面スス。
1039	969	土器溜り3	縄文土器	深鉢		7.5		
1040	968	土器溜り3	縄文土器	深鉢		4.6		
1041	752	土壇62	弥生土器	甕	24.3			口唇部キザミ痕(無しの箇所も)。外面ハケナデ。ヘラガキ沈線は螺旋?。
1042	746	土壇62	弥生土器	甕?		7.2		外面ていねいなヘラミガキ。底部上げ底気味、粗いヘラミガキ。内部オコゲ痕。
1043	751	土壇63	弥生土器	甕	21.1			外面アタリ痕。ハケメにダブリが目立つ。
1044	774	土壇64	弥生土器	把手付鉢				把手状貼り付け。光沢を持つが腰が不明瞭。
1045	770	土壇64	弥生土器	甕	18.9	6.9		調整不明瞭。
1046	761	土壇64	弥生土器	甕		4.8		内外底面すべてに工具のアタリ痕。
1047	762	土壇64	弥生土器	台付鉢		8.3		外面粗いハケメ。底部ケズリ痕。
1048	764	土壇64	弥生土器			7.8		底面ナデ。
1049	818	土壇65	弥生土器	甕	23.4	7.0	27.4	内面押圧、ていねいなナデ、砂粒の移動痕跡。
1050	788	土壇66	弥生土器	甕		9.9		底面ナデ。
1051	791	土壇66	弥生土器	壺	25.0			口縁端線状のキザミ。内面上端に突起突帯、その下に楕円状の貼付突帯。
1052	789	土壇66	弥生土器	甕	21.3			内面炭化物付着痕、工具ナデ。
1053	812	土壇67	弥生土器	壺	19.7			口縁端部にX条のキザミ。
1054	814	土壇67	弥生土器	甕				外面クシガキ多条文。
1055	815	土壇67	弥生土器	甕				外面クシガキ多条文。
1056	816	土壇67	弥生土器	甕				外面クシガキ沈線文多条。
1057	805	土壇67	弥生土器	甕	20.0			口唇部浅いキザミ。外面ヘラガキ沈線文多条。
1058	796	土壇67	弥生土器	甕		5.1		外面ヘラミガキ。底面中心に窪み。
1059	797	土壇67	弥生土器	甕		8.3		外面凹凸あり。内面一部ハケ。
1060	776	土壇68	弥生土器	甕	20.9			外面太くて浅いハケの中に細い線。内・外底部刻離。
1061	754	土壇70	弥生土器	甕	29.0	11.3	48.6	外面ハケメ4本/10cm。底部オサエナデ。内面摩擦痕薄い。下部器壁の荒れ。
1062	756	土壇70	弥生土器	甕	7.0			外面タテヘラミガキ?。底面ナデ。
1063	755	土壇70	弥生土器	甕	5.0			底面ナデ(ヘラミガキが見られる?)。
1064	781	土壇71	弥生土器	壺				内面貼付突帯(円形文、平行線文)。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
1065	782	土壇71	弥生土器	甕				口頭部2条の凹部。外面煤付着。
1066	778	土壇71	弥生土器	甕	23.0			口唇部キザミ痕。外面ヘラガキ沈線多条。内面ナデ。
1067	779	土壇71	弥生土器	甕	19.5			口頭部2条の凹部。外面ヘラガキ沈線多条。
1068	777	土壇71	弥生土器	甕	29.9			調整不明瞭。外面ヘラガキ沈線多条。
1069	768	土壇71	弥生土器	甕	21.4			外面ヘラミガキ単位中に細かな線。
1070	763	土壇71	弥生土器	甕		7.8		底面ナデ。
1071	811	土壇72	弥生土器	甕	18.4			口縁下に焼成前円孔1個。口唇部キザミメははっきりしない。外面ヘラガキ沈線多条。
1072	838	土壇73	弥生土器	壺	8.4	7.0	19.9	2条の沈線2ヶ所。底面若干上げ底、ナデ。
1073	828	土壇74	弥生土器	壺				貼付突帯3本残存。外面ナデ痕。
1074	823	土壇74	弥生土器	壺		9.0		貼付突帯1本。内面ていねいな指圧ナデ。
1075	824	土壇74	弥生土器	壺		6.0		胴部に穿孔1ヶ所。調整不明瞭。
1076	822	土壇74	弥生土器	壺		8.5		底面ナデ。上げ底。内面ケズリののちていねいなナデ。
1077	819	土壇74	弥生土器	壺	13.0	7.1	23.0	底面使用痕。
1078	821	土壇74	弥生土器	小壺	3.6	2.9	6.9	2条の沈線(工具のオサエ痕の連続?)。上げ底、手捏ね。
1079	829	土壇74	弥生土器	壺				肩部外面貼付突帯4本。外面ヘラミガキ。
1080	827	土壇74	弥生土器	甕				外面工具ナデ、8条のヘラガキ沈線文(2条目と6条目が不完結?)
1081	830	土壇74	弥生土器	甕	21.8			口唇部にキザミメ痕かすかに残る。ヘラガキ沈線多条。内面押圧痕。
1082	826	土壇74	弥生土器	甕	18.0			口唇部にキザミメ。ヘラガキ沈線多条。
1083	820	土壇74	弥生土器	甕	36.6			口唇部にキザミメ。外面ヘラガキ沈線多条。噴きこぼれ痕あり。
1084	760	土壇75	弥生土器	長頸壺				頸部外面ハケののちヘラガキ沈線文(螺旋状)。内面ユビナデ。
1085	841	土壇76	弥生土器	甕		8.0		外面赤色変化。上げ底。
1086	825	土壇77	弥生土器	甕	14.4			調整不明瞭。
1087	854	土壇78	弥生土器	甕				口唇部キザミメ。ヘラガキ沈線文。
1088	855	土壇78	弥生土器	甕	19.9			口唇部キザミメ。ヘラガキ沈線文。
1089	840	土壇78	弥生土器	甕		6.0		上げ底。
1090	856	土壇79	弥生土器	壺				肩部外面に6本単位のヘラガキ沈線2ヶ所。その間に三角刺突文2列。
1091	849	土壇79	弥生土器	甕				口唇部と突帯の先端にキザミメ。
1092	847	土壇79	弥生土器	甕				キザミとヘラガキ沈線多条。
1093	848	土壇79	弥生土器	甕				キザミとヘラガキ沈線多条。
1094	853	土壇79	弥生土器	甕		7.7		内面ナデ、オコゲ付着。
1095	851	土壇79	弥生土器	甕		11.7		外面ナデ痕跡。
1096	867	土壇80	弥生土器	壺	19.3			内面貼付突帯が2条。
1097	868	土壇80	弥生土器	壺	24.5			貼付突帯が内外面とも数条、外面の1条には先端にキザミメ。外面ナデ。
1098	857	土壇80	弥生土器	甕	18.8	7.6	23.0	底部穿孔。
1099	860	土壇80	弥生土器	鉢	36.4			口唇部下に工具のあたり痕跡、貼付突起。内面にミガキ?
1100	865	土壇80	弥生土器	甕		9.0		底面ナデ。内面ナデ、磨耗により砂粒目立つ。
1101	859	土壇80	弥生土器	甕		6.8		内外面に工具痕。
1102	858	土壇80	弥生土器	甕		5.8		外面ハケメ6本/10mm。内面に工具痕。
1103	869	土壇80	弥生土器	甕	21.6	7.8		口唇部キザミメ。外面ハケメののちヘラガキ沈線9条。内面ナデ(ミガキ状効果)。
1104	766	土壇81	弥生土器	甕	22.2			口唇部キザミ。外面ハケ状ミガキ。
1105	772	土壇81	弥生土器	甕	26.3			口唇部キザミメ。ヘラガキ沈線6条。外面全体に粗いハケメののち細かいハケメ?。
1106	888	土壇82	弥生土器	甕	24.1			ヘラガキ沈線多条。外面ていねいなナデ?
1107	884	土壇82	弥生土器	甕		9.3		底面ナデ。
1108	769	土壇83	弥生土器	台付壺		11.0		内・外・底面ヘラミガキ。
1109	757	土壇83	弥生土器	壺	14.8			外面細かなハケメののちナデ(繊維痕跡?)。
1110	759	土壇83	弥生土器	甕		6.9		外面ナデ(若干面取り状)。底面ナデ。
1111	862	土壇84	弥生土器	甕				口唇先端刺突文、ヘラガキ沈線文。内面工具ナデ(工具のあたり)。
1112	863	土壇84	弥生土器	甕				外面キザミメ、ヘラガキ沈線多条、三角刺突。内面工具ナデ。
1113	861	土壇84	弥生土器	壺	19.0			調整不明瞭。
1114	864	土壇84	弥生土器	甕	21.6			外面黒色変化(押圧痕)。
1115	866	土壇85	弥生土器	甕				調整不明瞭。
1116	773	土壇88	弥生土器	壺	31.5			口縁端部1本の沈線の上をキザミメ。
1117	758	土壇88	弥生土器	台付鉢?	9.5	5.6	7.5	口縁部内~外円孔全径4ヶ所。脚部外~内円孔全径4ヶ所。底面指ナデ。
1118	765	土壇88	弥生土器	甕	18.2	5.4	24.9	外面ところどころハケメ。内面オコゲ。

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
1119	775	土層88	弥生土器	甕	20.0			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線多条。外面細かなハケ調整か？
1120	780	土層88	弥生土器	鉢	10.9			口唇部キザミ。
1121	767	土層88	弥生土器	甕	21.6	9.5		口唇部キザミ。ヘラガキ沈線多条。底部剝殻痕。
1122	793	土層89	弥生土器	壺	22.3			頸部に8条のヘラガキ沈線。外面非常に細かなハケナデ。
1123	802	土層89	弥生土器	壺	17.9			口唇部押圧で敵っている。
1124	800	土層89	弥生土器	壺	13.8			頸部3本の三角突帯の上に棒状浮文部分5ヶ所、2本一對1ヶ所1つ。内面押圧痕。
1125	801	土層89	弥生土器	壺				外面全体ナデののち3条の突帯が肩部から胴下半にかけて3ヶ所。
1126	809	土層89	弥生土器	無頸壺	9.2			口縁下に径0.5cm円孔1ヶ所のみ残存。(外~内)
1127	803	土層89	弥生土器	甕	20.2			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文9条。外面ハケナデ細かすぎて目立たない。
1128	799	土層89	弥生土器	甕	23.2			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文多条。外面ナデののち細かいハケナデ。内面ハケメ。
1129	798	土層89	弥生土器	甕	23.0			外面調整不明瞭。ヘラガキ沈線文多条。内面ナデ、所々へこみ。
1130	808	土層89	弥生土器	甕	29.4			口唇部キザミ (円形刺突)。口縁下部ヘラガキ沈線多条。
1131	787	土層89	弥生土器	甕		6.6		底面ナデ。
1132	794	土層89	弥生土器	壺？		5.9		調整不明瞭。
1133	804	土層89	弥生土器	壺		10.4		底面ナデ。
1134	813	土層67	弥生土器	甕		6.0		調整不明瞭。底部ナデ？表面ミガキのような光沢、さらに凹凸。
1135	807	土層90	弥生土器	甕		8.4		調整不明瞭。
1136	806	土層91	弥生土器	壺	21.3			口縁端面に2条の沈線、その上から線状のキザミ。肥厚部上下端にもキザミ。
1137	810	土層93	弥生土器	壺				頸部に貼付突帯2本。
1138	784	土層94	弥生土器	壺		5.3		外面煤。底面押圧ナデ。内面擦痕。
1139	792	土層95	弥生土器	甕	20.2			口縁上部に突起。端部先端に円形刺突、多条沈線の間にも2列の円形刺突文。
1140	790	土層95	弥生土器	甕	21.0			口唇部先端に円形刺突。外面口縁下に多条のヘラガキ沈線。その下擦痕。
1141	783	土層95	弥生土器	甕				口縁部内・外面煤付着。
1142	786	土層96	弥生土器	壺				肩部にヘラガキ、木葉状文。内面工具ナデ。
1143	785	土層96	弥生土器	壺		6.5		外面ヘラミガキ。底面わずかに上げ底ナデ。
1144	893	土層98	弥生土器	壺				頸部外面に2条の突帯(1条の先端部に細かいキザミ)。口縁内面に弧状の突帯3条。
1145	879	土層98	弥生土器	甕	20.0			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文多条。外面工具痕。内面押圧痕。被熱により灰褐色。
1146	876	土層98	弥生土器	甕	22.2			粘土組接合痕。内面ナデオサエ。
1147	875	土層98	弥生土器	甕	19.0			口唇部キザミ (無文部あり)。ヘラガキ沈線文多条。
1148	873	土層98	弥生土器	甕	21.7			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文。
1149	874	土層98	弥生土器	甕	23.0			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文。
1150	877	土層98	弥生土器	甕	23.6			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文。刺突文。
1151	892	土層98	弥生土器	甕か鉢	20.6			口唇部キザミ。ヘラガキ沈線文。刺突文。
1152	885	土層98	弥生土器	甕	25.5	7.6		ヘラガキ沈線 (本数不明)。底部穴あるか？
1153	878	土層98	弥生土器	甕	19.2			外面円形刺突文。ヘラガキ沈線文多条。内面でいねいなナデ。
1154	887	土層98	弥生土器	甕	35.4			口唇部円形刺突、ヘラガキ沈線文多条。外面工具によるナデ (条線見える)。
1155	872	土層98	弥生土器	甕	23.1	8.0	26.5	口唇部キザミ(刺突風)。ヘラガキ沈線文多条。噴きこぼれ痕。
1156	891	土層98	弥生土器	蓋		9.7		円孔2つ。調整不明瞭。
1157	890	土層98	弥生土器	小壺		3.8		調整不明瞭。
1158	889	土層98	弥生土器	台付鉢？		5.5		底面ヘラミガキ？
1159	883	土層98	弥生土器	壺？		6.7		底面ナデののちヘラミガキ。
1160	881	土層98	弥生土器	甕		5.7		底部穿孔。内外面ナデ。
1161	882	土層98	弥生土器	甕		7.9		底部穿孔。内面工具ナデ。
1162	880	土層98	弥生土器	甕		8.2		底部穿孔。底面ヘラケズリののちナデ。
1163	748	土層99	弥生土器	甕	20.4			外面ナデかていねいなヘラミガキで単位不明。
1164	747	土層99	弥生土器	甕				外面クシガキ多条沈線文、クシガキ波状文。
1165	750	土層100	弥生土器	壺	18.9			口縁部に歪み。内部に指跡部分的。
1166	745	土層101	弥生土器	壺				外面クシガキ多条沈線文2列、クシガキ波状文。
1167	744	土層101	弥生土器	甕	17.3			調整不明瞭。
1168	749	土層101	弥生土器	甕	18.4	5.3	28.4	底部穿孔。内部炭化物付着。
1169	817	土層102	弥生土器	甕	17.9	5.1	28.2	胴部に2列の刺突文。底部穿孔、ナデ。
1170	902	土層103	弥生土器	壺	15.0			口唇部キザミ。外面口縁指頭押圧貼付突帯2条、クシガキ波状文。

## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
1171	916	土壇103	弥生土器	壺	13.4			口唇部キザミ。外面頸部貼付突帯。先端キザミ・ナデ痕。
1172	915	土壇103	弥生土器	壺	13.2			口唇部キザミ。外面頸部貼付突帯。先端キザミ・ナデ痕。
1173	914	土壇103	弥生土器	壺	15.7			外面胴部クシガキ沈線、波状文。
1174	913	土壇103	弥生土器	壺				外面クシガキ沈線、波状文。内面ナデ（若干押圧あり）
1175	912	土壇103	弥生土器	壺				外面クシガキ沈線、波状文。内面ていねいな細かいハケメ（ハケナデ?）
1176	911	土壇103	弥生土器	壺				外面クシガキ沈線、波状文。内面ていねいな細かいハケメ（ハケナデ?）
1177	896	土壇103	弥生土器	壺	10.6			外面ヘラミガキ7~8本/1cm。
1178	903	土壇103	弥生土器	壺	8.4			外面ハケ状工具アタリ痕。
1179	905	土壇103	弥生土器	無頸壺	18.2			外面口唇部のキザミメと胴部の刺突文の工具は同一か?
1180	895	土壇103	弥生土器	甕	15.0			外面ハケメのちミガキ?
1181	894	土壇103	弥生土器	甕	20.0			外面ハケメ、中に細い繊維痕跡顕著。内面ハケメのちヘラミガキ。
1182	898	土壇103	弥生土器	甕	20.8			外面ハケメ。内面ナデ。
1183	917	土壇103	弥生土器	甕	21.0	5.2	51.5	外面胴部刺突文。1186と基本的に同じ。
1184	897	土壇103	弥生土器	甕	25.8			外面ナデでハケメ消去。内面ナデ。
1185	899	土壇103	弥生土器	甕	26.2			外面ハケメ（工具痕）。内面凹部。
1186	918	土壇103	弥生土器	甕	17.0			外面細かいハケメ、刺突文。下部ハケメのちミガキ?中に細いハケメ。
1187	901	土壇103	弥生土器	甕		5.8		上げ底気味。底面ナデ。内面ていねいなナデ（ミガキ?）
1188	907	土壇103	弥生土器	甕		5.9		外面ヘラミガキ。底ナデ（痕跡）。
1189	909	土壇103	弥生土器	甕		5.7		外面ハケメか工具によるナデ。底面ナデ。
1190	900	土壇103	弥生土器	壺	6.2			上げ底気味。内底部ユビオサエ痕。
1191	910	土壇103	弥生土器	壺	5.7			外面ハケメのちていねいなヘラミガキ（少々ハケメ残る）
1192	919	土壇103	弥生土器	壺				外面黒漆付着部分的。内面全体に黒漆、漆壺か?。
1193	837	土壇104	弥生土器	壺				クシガキ波状文。
1194	835	土壇104	弥生土器	甕	17.4			口縁部肥厚。
1195	842	土壇104	弥生土器	甕	18.2			内面ヘラミガキ。胴部に刺突文が蛇行。
1196	836	土壇104	弥生土器	甕	18.1			外面ハケメのちナデ。刺突文。
1197	844	土壇104	弥生土器	甕	22.0			胴部に4列の刺突文。
1198	845	土壇103	弥生土器	甕	17.8			調整不明瞭。
1199	843	土壇104	弥生土器	鉢	18.7			口唇部キザミ。円孔1ヶ所。刺突文が2列。
1200	831	土壇104	弥生土器	壺		8.2		底面ナデ。外面ヘラミガキ。内面ナデ、押圧痕。
1201	833	土壇104	弥生土器	甕		7.5		外面ヘラミガキ（ハケメ跡）
1202	834	土壇104	弥生土器	高杯				径3.5cm外~内透し孔2個一対、4ヶ所残存。
1203	753	土壇105	弥生土器	甕		5.2		外面比較的幅広いハケミガキ。底裏部まで二次的に火を受けている。
1204	846	土壇106	弥生土器	台付鉢		6.0		透し孔2個一対3ヶ所?。
1205	986	溝52	弥生土器	壺		5.9		内面工具によるナデ?工具痕。
1206	983	溝52	弥生土器	壺		6.0		大粒の長石を粗に含む。肩~最大幅部にヘラガキ線文と三角刺突文。
1207	985	溝52	弥生土器	壺	10.7	6.7	17.0	大粒の石英・長石を粗に含む。口縁全体ひずみ。
1208	984	溝52	弥生土器	壺	11.6	5.6	23.8	大粒の長石を粗に含む。口縁部にひずみ。表面荒れて凹凸。
1209	977	溝52	弥生土器	壺	16.3	11.2	39.2	胎土に大粒の長石含む。口唇部キザミ。頸部と胴部にヘラガキ線文。
1210	978	溝52	弥生土器	壺		9.1		内面ユビオサエのちハケメ?。工具ナデ?
1211	1027	溝52	弥生土器	小壺	2.7	3.2	6.4	外面ユビオサエとナデ。底面ナデ。手捏ね。
1212	979	溝52	弥生土器	壺	28.5			外面口縁部表面凹凸。頸部に4条、胴部に3条の三角突帯。ナデ。
1213	990	溝52	弥生土器	甕・鉢	28.5			表面全体凹凸。口唇部キザミ。口縁部歪み。
1214	999	溝52	弥生土器	甕	24.2			ヘラガキ沈線多条。外面細かいハケメ。内面指ナデアゲのち工具ナデ。
1215	1019	溝52	弥生土器	甕	21.4	6.5	24.5	ヘラガキ沈線多条。内外面上・底部煤付着。底部穿孔1つ。
1216	1020	溝52	弥生土器	甕	20.8	8.0	28.4	口唇部キザミ。口縁下部ヘラガキ沈線螺旋状。底部穿孔。内外面ハケメ。
1217	1004	溝52	弥生土器	甕	25.0			口唇部刺突文。ヘラガキ沈線多条。内面ナデアゲのちナデ。
1218	1015	溝52	弥生土器	甕	20.8			内外面ナデ。
1219	992	溝52	弥生土器	甕	22.5			内外面共に煤付着以外は剥離痕多し。
1220	1017	溝52	弥生土器	甕				口唇部キザミ。口縁下部にクシガキ多条沈線。胴部に三角刺突文。
1221	1022	溝52	弥生土器	甕	22.8	6.0	28.3	口唇部キザミ。口縁下部にクシガキ多条沈線。内面押圧とナデアゲ。
1222	1029	溝52	弥生土器	小鉢	8.6	5.1	9.8	口唇部キザミ。口縁下部にクシガキ沈線7条。底面ナデ。内面ナデアゲ。

掲載番号	番号	遺構・土層名	種別	器種	法量 (cm)			特徴・備考
					口径	底径	器高	
1223	1005	溝52	弥生土器	甕	20.4			口縁ひずみ。外面雑なミガキ?
1224	1008	溝52	弥生土器	甕	22.5			内面工具によるナデ。
1225	997	溝52	弥生土器	甕	19.5	7.3	23.7	外面上部工具痕。底部穿孔1つ。内外面に煤の痕跡。
1227	1006	溝52	弥生土器	甕	12.5			外面ナデののちミガキ。
1228	996	溝52	弥生土器	甕	15.0	6.5	18.6	全体に歪み。内外面に煤の痕跡。底部指による窪み。
1229	1018	溝52	弥生土器	甕	20.3			口唇部キザミメ。口縁下部にヘラガキ多条沈線。内面押圧ナデの上にミガキ。
1230	1021	溝52	弥生土器	甕	15.1	5.5	17.5	口唇部キザミメ。口縁下部にヘラガキ多条沈線。口唇部のキザミはほとんど目立たず。
1231	1002	溝52	弥生土器	甕	15.4			口縁部下ヘラガキ多条沈線。胴部刺突文。内面ヘラミガキ。
1232	1010	溝52	弥生土器	甕	17.1			口縁部下クシガキ多条沈線。外面細かなハケナデ。
1233	1009	溝52	弥生土器	甕	22.0			口縁部下ヘラガキ多条沈線。外面ハケナデ。内面ナデアグののちナデ。
1234	991	溝52	弥生土器	甕	22.5			全体に煤。外面工具痕。口縁部下ヘラガキ沈線。
1235	989	溝52	弥生土器	甕	20.0	6.6	27.6	外面タテハケメ? 工具の条線? 口縁部下ヘラガキ沈線。
1236	1013	溝52	弥生土器	甕	20.8			口唇部にキザミメ。内面ていねいなナデアグ? ハケのミガキ効果?
1237	1012	溝52	弥生土器	甕	20.5			外面ハケメ。口唇部キザミメ。内面ほとんど痕跡無し。
1238	994	溝52	弥生土器	甕	21.5	7.0	28.5	表面荒れが激しい。口唇部キザミメ。口縁部下にヘラガキ多条沈線、三角形刺突文。
1239	995	溝52	弥生土器	甕	22.5	6.6	27.7	口唇部と胴部に刺突文。口縁部下ヘラガキ線文、細かなハケナデ。底部穿孔。
1240	988	溝52	弥生土器	甕	33.2			口唇部に小円形刺突。口縁下部に螺旋状ヘラガキ沈線。
1241	1011	溝52	弥生土器	甕				口唇部キザミメ。口唇部下にクシガキ多条沈線。内面ヘラミガキ?
1242	1001	溝52	弥生土器	甕	22.0			口唇部キザミメ (部分)。口唇部下にヘラガキ状沈線。内面ヨコハケナデ。
1243	1014	溝52	弥生土器	甕	25.7			口唇部キザミメ。口縁部下ヘラガキ沈線、下に刺突文。
1244	993	溝52	弥生土器	甕	19.6	7.1	23.7	口唇部キザミメ。口唇部下にヘラガキ多条沈線と刺突文。外面ヘラミガキ効果。
1245	1000	溝52	弥生土器	甕	19.5			口唇部キザミメ、クシガキ多条沈線、三角刺突文。外面擦痕。内面浅いイタメ条痕。
1246	988	溝52	弥生土器	甕	28.5	7.8	29.0	口唇部円形刺突文。口唇部下半裁竹管多条文 (一部波状)、その下に刺突文2列。
1247	1003	溝52	弥生土器	甕				胴部ヘラガキ多条沈線と小円形浮文列。内面ナデ?
1248	1024	溝52	弥生土器	鉢	31.5			表面に凹凸。内外面ヘラミガキ。
1249	1026	溝52	弥生土器	鉢	17.0			内外面ミガキ。口唇部キザミメ。口縁部下に半裁竹管多条文。
1250	982	溝52	弥生土器	鉢	16.4	6.9	15.9	外面粗いハケメ。全体に歪み。
1251	981	溝52	弥生土器	蓋	22.2		13.9	調整不明瞭。
1252	1025	溝52	弥生土器	鉢	17.2			大粒長石を粗に含む。内外面ユビオサエ。
1253	723	井戸12	弥生土器	長頸壺	13.1	5.5	24.4	胴部穿孔1ヶ所。内底部に凹凸、ユビオサエ痕?
1254	728	井戸12	弥生土器	壺	13.0	5.8	22.0	外面底部に粘土を削り取った様な箇所。内面に炭化物付着。
1255	731	井戸12	弥生土器	製塩土器		5.6		底部ナデ。
1256	732	井戸12	弥生土器	製塩土器		3.7		底部平坦面。
1257	730	井戸12	弥生土器	鉢?		5.9		外底部上げ底、指頭圧痕顕著。外底部孔の端部はきれいにナデ。
1258	733	井戸12	弥生土器	高杯				透し孔9ヶ所。
1259	729	井戸12	弥生土器	鉢	19.6			内面ヘラケズリののち工具ミガキ。工具アタリ痕。
1260	727	土壇107	弥生土器	無頸壺	9.0			外面粗いハケメ。
1261	741	土壇107	弥生土器	台付鉢?		9.0		外面太く粗いハケメ (部分的)。脚部内面ケズリ。
1262	740	土壇107	弥生土器	甕	13.7			外面ていねいなハケメ (後に一部ミガキ?)。
1263	735	土壇107	弥生土器	甕	12.0			外面1266と同じ工具使用か?
1264	736	土壇107	弥生土器	甕	14.3			調整不明瞭。外面ヨコナデ。
1265	737	土壇107	弥生土器	甕	13.5			外面工具ナデののちヘラミガキ、あまり顕著ではない。
1266	734	土壇107	弥生土器	甕	19.3			調整不明瞭。外面粗いハケメ3~4本単位でハケメ。
1267	739	土壇107	弥生土器	鉢	15.8			外面斜めハケメ6本/1cm位。
1268	738	土壇107	弥生土器	甕		9.1		外面少し粗いミガキ。底面工具によるナデ、内面粗いケズリ。
1269	743	土壇107	弥生土器	鉢	40.8			外面太いハケメののち粗いハケメ。
1270	742	土壇107	弥生土器	器台		17.5		透し孔 (推定6個)。
1271	933	製塩炉周辺	弥生土器	長頸壺	13.2			内外面ヘラミガキ。
1272	927	製塩炉周辺	弥生土器	壺	15.7			内外面ナデ。
1273	920	製塩炉周辺	弥生土器	甕	13.0			内面胴上部絞り痕。
1274	925	製塩炉周辺	弥生土器	甕	13.4			内面ヘラ痕跡顕著。
1275	926	製塩炉周辺	弥生土器	甕	14.0			外面ハケメ?
1276	921	製塩炉周辺	弥生土器	鉢	10.6	4.0	10.9	底面ナデ、上げ底、火を受けて赤色変化。
1277	929	製塩炉周辺	弥生土器	甕		7.6		底面粗いナデ。内面工具によるナデ。



## 1. 土器観察表

掲載 番号	番号	遺構・土層名	種 別	器 種	法 量 (cm)			特 徴・備 考
					口径	底径	器高	
1278	930	製塩炉周辺	弥生土器	壺		8.8		底面ナデ。内面工具による粗いナデ?粗いハケメ?
1279	924	製塩炉周辺	弥生土器	小壺	7.5			
1280	924	製塩炉周辺	弥生土器	台付鉢		2.4		外面押圧、ナデ。製塩土器の作りに似る。
1281	931	製塩炉周辺	弥生土器	台付鉢		5.1		内外面押圧、ナデ。
1282	928	製塩炉周辺	弥生土器	壺		4.4		外面ハケメ。下部タタキのちハケメ?底面ナデ。
1283	922	製塩炉周辺	弥生土器	高杯	10.5	5.6	8.3	外面胴部粗いハケメ。脚部ナデ?。内面ナデ、押圧。
1284	923	製塩炉周辺	弥生土器	高杯		7.4		外面径5mmの透し孔5個ずつ2ヶ所に点在。
1285	934	製塩炉周辺	弥生土器	台付鉢?		7.9		外面ミガキ。内面ナデ。
1286	935	製塩炉周辺	弥生土器	器台		16.6		外面ハケメ。内面絞り痕あり。
1287	937	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		3.9		外面ケズリ。底面ナデ。内面ナデ。
1288	938	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		4.8		外面ケズリ。底面ナデ。内面ナデ。
1289	936	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		5.2		外面ケズリ。底面ナデ。内面ナデ。
1290	941	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		5.1		外面ケズリ、指押圧(痕跡見られる)、黒色。底部押圧で歪む。
1291	940	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		4.9		外面ケズリ、指押圧、ナデ、灰赤色変化。
1292	939	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		5.0		外面ケズリ、指押圧、ナデ、褐灰色。
1293	942	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器		5.0		外面ケズリ、指押圧、ナデ(痕跡見られる)、褐灰色。
1294	943	製塩炉周辺	弥生土器	製塩土器	12.2	5.0		口縁部工具で削り取った感じ。
1295	946	溝60	弥生土器	甕	14.6			外面ハケメ痕。
1296	962	溝60	弥生土器	甕	16.0	6.0	24.0	外面ハケメ(中に細かい繊維状痕跡)。若干底上げ気味?
1297	950	溝60	弥生土器	高杯	13.0			内外面ヨコナデ。
1298	944	溝60	弥生土器	台付鉢	17.8	5.0	9.8	口縁部下に孔。内面底部一定方向へラミガキ。若干上げ底。
1299	958	溝60	弥生土器	製塩土器		4.7		内底部絞り痕跡、粘土付着、ナデ。外面一部灰黄色変化。
1300	955	溝61	弥生土器	長頸壺	15.5			
1301	956	溝61	弥生土器	甕	9.2			外面炭化物付着。内面煤付着痕?
1302	954	溝61	弥生土器	高杯				水漉し粘土風。
1303	953	溝61	弥生土器	高杯		11.0		底面ケズリのちナデ?
1304	959	溝61	弥生土器	製塩土器		4.5		器面磨耗により調整不明瞭、砂粒目立つ。
1305	957	溝62	弥生土器	器台	30.2			口縁部鋸歯文。
1306	951	溝62	弥生土器	壺	14.6			外面頸部にハケメ。
1307	945	溝62	弥生土器	台付鉢		9.2		内面工具アタリ痕。
1308	948	溝62	弥生土器	鉢	19.0			外面ハケメのちへラミガキ。
1309	947	溝62	弥生土器	甕	19.4			外面斜めハケメ。内面ナデのちへラケズリ。
1310	961	溝62	弥生土器	甕		4.9		底部穿孔(内1.1mm、外1.6mm)。
1311	960	溝62	弥生土器	製塩土器		4.9		外面一部褐色変化あり。内底面ナデ。
1312	952	溝62	弥生土器	高杯	13.3			水漉し粘土風。口縁部クシガキ波状文。脚注部に透し孔。
1313	724	井戸13	土師器	甕	13.6	4.0	22.9	口縁部クシガキ沈線文。底部一定方向へラミガキ。内底部押圧痕顕著。
1314	725	井戸14	土師器	甕	12.6			
1315	726	井戸14	土師器	甕	13.7			外面へラミガキの中に細かい線。
1316	949	溝66	土師器	壺				調整不明瞭。

## 2. 石製品一覧表

掲 番 号	番 号	出 土 地 区	土 壤 ・ 土 層 名	時 期 ・ 時 代	器 種	形 式	計測最大値 (mm)			重 量 (g)	石 材	残 存 備	考
							長	幅・径	厚				
S 1	176	15・16C・D	旧河道・上層	弥生・前期	石鏃	V?	14.5	12.0	3.2	0.5	サヌカイト	完形	
S 2	175	16D	旧河道・第4層	弥生・前期	石鏃	V	22.5	14.0	3.9	0.6	サヌカイト	完形	
S 3	177	15・16C・D	旧河道・上層	弥生・前期	石鏃	V	21.5	18.0	3.2	0.9	サヌカイト	完形	
S 4	217	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石鏃		21.5	12.5	1.5	0.4	サヌカイト	完形	磨製
S 5	171	16D	旧河道・中層	弥生・前期	石鏃		30.5	13.0	1.0	2.5	サヌカイト	完形	
S 6	170	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石鏃		37.0	9.5	5.0	1.3	サヌカイト	完形	
S 7	242	16D	旧河道・上層	弥生・前期	石鏃		39.5	27.0	9.5	6.9	サヌカイト	欠損	
S 8	183	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石槍		74.0	38.5	15.0	28.0	サヌカイト	ほぼ完形	
S 9	184	16D	旧河道・中層	弥生・前期	石槍		70.0	30.0	16.5	23.0	サヌカイト	欠損	
S 10	169	15・16C・D	旧河道・中層	弥生・前期	石包丁		75.5	75.0	14.0	75.5	サヌカイト	欠損	打製
S 11	221	15・16C・D	旧河道・上層	弥生・前期	楔形石器		10.0	25.0	4.1	1.3	サヌカイト	完形	槍転用?
S 12	213	16C・D	旧河道・下層	弥生・前期	楔形石器		21.5	26.5	4.0	3.0	サヌカイト	欠損	
S 13	216	16D	旧河道・中層	弥生・前期	楔形石器		27.0	33.5	7.5	7.3	サヌカイト	完形	
S 14	212	16C・D	旧河道・下層	弥生・前期	楔形石器		53.0	54.0	18.0	14.3	サヌカイト	完形	
S 15	181	16D	旧河道・第24層~29層	弥生・前期	スクレイパー		47.5	29.5	10.0	7.9	サヌカイト	ほぼ完形	
S 16	219	16D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		58.5	27.0	14.5	15.0	サヌカイト	完形	
S 17	174	16C・D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		31.5	26.0	5.7	3.7	サヌカイト	完形	
S 18	173	16D	旧河道・下層	弥生・前期	スクレイパー		34.5	21.5	6.9	4.6	サヌカイト	欠損	
S 19	214	16C・D	旧河道・下層	弥生・前期	スクレイパー		73.0	37.5	10.7	21.9	サヌカイト	欠損	
S 20	180	16D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		84.0	41.5	10.5	24.7	サヌカイト	完形	
S 21	185	16D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		49.5	38.5	7.5	9.6	サヌカイト	完形	
S 22	178	16D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		69.0	47.0	11.5	27.3	サヌカイト	完形	
S 23	215	16D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		61.0	44.5	8.0	19.1	サヌカイト	完形	
S 24	222	15・16C・D	旧河道・上層	弥生・前期	スクレイパー		55.0	41.5	6.0	14.9	サヌカイト	完形	
S 25	186	16D	旧河道・中層	弥生・前期	スクレイパー		60.0	31.5	7.4	16.6	サヌカイト	欠損	
S 26	182	16D	旧河道・第24層~29層	弥生・前期	スクレイパー		61.5	51.5	11.5	26.8	サヌカイト	欠損	
S 27	172	16D	旧河道・下層	弥生・前期	スクレイパー		56.0	56.0	7.5	21.2	サヌカイト	欠損	
S 28	179	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石斧		51.5	61.0	10.0	37.8	黒色頁岩	欠損	磨製、刃部
S 29	189	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石斧		86.0	54.5	39.0	203.1	ホヒン岩	欠損	磨製、基部
S 30	438	16C	旧河道・第1~5層	弥生・前期	石斧		107.0	60.0	28.0	280.2	安山岩	完形	磨製
S 31	439	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石鏃		76.0	56.0	18.0	114.8	閃緑岩	完形	両端打ち欠き
S 32	437	16C・D	旧河道・中層	弥生・前期	石鏃		45.0	61.5	32.0	105.8	閃緑岩	欠損	両端打ち欠き
S 33	440	16D	旧河道・下層	弥生・前期	石鏃		87.5	86.0	29.0	301.9	閃緑岩	完形	
S 34	442	16C・D	旧河道・中層	弥生・前期	砥石		125.5	80.0	78.0	837.8	砂岩	欠損	
S 35	441	16D	旧河道	弥生・前期	石皿		252.0	145.0	101.0		花崗岩	欠損	
S 36	160	16C	土壌 1	弥生・前期	石鏃		26.0	10.0	5.0	1.1	サヌカイト	欠損	
S 37	161	16C	土壌 1	弥生・前期	スクレイパー		89.5	56.5	14.5	80.0	サヌカイト	完形	
S 38	164	17・18D	土壌 2・上層	弥生・前期	石鏃	V	19.0	14.0	2.7	0.5	サヌカイト	ほぼ完形	
S 39	163	17・18D	土壌 2・上層	弥生・前期	石鏃	II	25.5	19.0	5.7	2.7	サヌカイト	完形	
S 40	162	17D	土壌 2	弥生・前期	石鏃		146.0	21.0	9.0	32.0	水緑色片岩	欠損	磨製
S 41	187	18D	土壌 3	弥生・前期	石鏃	V	14.0	10.5	2.3	0.2	サヌカイト	完形	
S 42	158	17D	溝 3 断面	弥生・前期	石鏃	V	18.5	13.5	3.0	0.6	サヌカイト	欠損	
S 43	167	17D	溝 9	弥生・前期	石鏃		140.5	33.0	9.5	43.0	サヌカイト	完形	
S 44	168	17D	溝 9	弥生・前期	石鏃	II	18.5	15.5	3.0	0.7	サヌカイト	欠損	
S 45	443	17C	溝 9	弥生・前期	石鏃		93.5	73.0	27.0	251.9	安山岩	完形	
S 46	223	18D	溝 10 断面	弥生・前期	楔形石器		24.0	25.5	7.0	4.4	サヌカイト	完形	
S 47	426	10B	竪穴住居 1	百・後・II	楔形石器		24.5	39.0	8.5	7.5	サヌカイト	完形	スクレイパー転用
S 48	8	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	II	18.0	17.0	2.8	0.4	サヌカイト	ほぼ完形	縄文か
S 49	9	10C	竪穴住居 2・下層	百・後・I~II	石鏃	II	22.0	15.5	3.8	1.2	サヌカイト	完形	
S 50	10	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	II	28.5	17.0	4.5	2.0	サヌカイト	ほぼ完形	
S 51	11	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	II	30.5	16.5	3.8	1.9	サヌカイト	完形	
S 52	1	10C	竪穴住居 2・貼床面	百・後・I~II	石鏃	I	22.5	21.0	4.0	1.8	サヌカイト	ほぼ完形	
S 53	2	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	I	28.5	14.5	4.5	1.9	サヌカイト	ほぼ完形	
S 54	3	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	I	32.0	15.0	3.5	1.6	サヌカイト	ほぼ完形	
S 55	12	10C	竪穴住居 2・貼床下	百・後・I~II	石鏃	II	32.0	15.5	4.0	2.2	サヌカイト	ほぼ完形	接合
S 56	4	10C	竪穴住居 2・下層 II	百・後・I~II	石鏃	I	31.0	16.5	3.5	2.3	サヌカイト	ほぼ完形	
S 57	5	10C	竪穴住居 2・上層	百・後・I~II	石鏃	I	40.0	19.0	4.5	3.2	サヌカイト	ほぼ完形	
S 58	6	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	I	46.5	18.5	5.1	3.8	サヌカイト	完形	
S 59	21	10C	竪穴住居 2・貼床面	百・後・I~II	石鏃		16.5	14.0	2.3	0.5	サヌカイト	欠損	
S 60	23	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃		31.0	21.0	5.5	2.9	サヌカイト	欠損	
S 61	22	10C	竪穴住居 2・貼床上面	百・後・I~II	石鏃		32.0	16.0	3.0	1.3	サヌカイト	欠損	
S 62	7	10C	竪穴住居 2・貼床上面	百・後・I~II	石鏃	I?	49.5	15.0	6.6	4.2	サヌカイト	完形	
S 63	20	10C	竪穴住居 2・上層	百・後・I~II	石鏃		41.5	14.0	6.0	3.4	サヌカイト	欠損	
S 64	15	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	IV b	25.0	11.0	2.8	0.7	サヌカイト	ほぼ完形	
S 65	18	10C	竪穴住居 2	百・後・I~II	石鏃	IV b	32.0	14.5	4.0	1.7	サヌカイト	ほぼ完形	

2. 石製品一覧表

掲載 番号	歌号 番号	出土地区	土壌・土層名	時期・時代	器種	形式	計測最大値(mm)				重量 (g)	石材	残存備	考
							長	幅	径	厚				
S66	17	10C	竪穴住居2・貼床面	百・後・I~II	石鏝	Ⅱb	34.0	12.0	5.0	1.5	サヌカイト	ほぼ完形		
S67	19	10C	竪穴住居2・上層	百・後・I~II	石鏝	Ⅱb?	48.0	17.5	6.1	4.9	サヌカイト	ほぼ完形		
S68	13	10C	竪穴住居2・下層Ⅱ	百・後・I~II	石鏝	Ⅱa	28.0	18.5	3.5	1.5	サヌカイト	完形		
S69	16	10C	竪穴住居2	百・後・I~II	石鏝	Ⅱb	30.0	15.0	4.5	1.5	サヌカイト	ほぼ完形		
S70	14	10C	竪穴住居2	百・後・I~II	石鏝	Ⅱa	22.0	19.0	4.5	2.1	サヌカイト	欠損		
S71	33	10C	竪穴住居2	百・後・I~II	楔形石器		26.0	30.5	11.0	11.0	サヌカイト	完形		
S72	405	9C・D	竪穴住居2	弥生・後期	楔形石器		33.5	24.0	5.6	5.1	サヌカイト	完形	スクレイパー転用?	
S73	24	10C	竪穴住居2・貼床	百・後・I~II	楔形石器		19.5	12.0	3.5	1.0	サヌカイト	欠損		
S74	25	10C	竪穴住居2・中層	百・後・I~II	スクレイパー		54.5	24.5	6.3	8.8	サヌカイト	ほぼ完形	小型	
S75	41	10C	竪穴住居2	百・後・I~II	楔形石器		57.0	38.5	15.7	38.9	サヌカイト	完形		
S76	26	10C	竪穴住居2・覆土	百・後・I~II	砥石		48.5	31.5	54.3	42.7	安山岩?	欠損		
S77	27	10C	竪穴住居2	百・後・I~II	砥石		50.0	25.0	18.5	38.3	砂岩	欠損		
S78	28	10C	竪穴住居2	百・後・I~II	作業台(砥石)		510.5	197.0	73.0		安山岩?	欠損	p-3の礎石2個	
S79	53	9C・D	竪穴住居3・覆土	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	34.0	15.5	4.0	2.3	サヌカイト	ほぼ完形		
S80	54	9C・D	竪穴住居3・貼床内	弥生・後期	スクレイパー		25.5	32.5	9.5	7.9	サヌカイト	欠損		
S81	55	9D	竪穴住居4・貼床直上	百・後・Ⅲ	石鏝	Ⅱ	50.0	13.5	7.1	3.6	サヌカイト	ほぼ完形		
S82	56	9D	竪穴住居4	百・後・Ⅲ	石鏝		28.0	14.5	5.0	1.7	サヌカイト	欠損		
S83	107	9C・D	竪穴住居4	百・後・Ⅲ	石鏝		62.0	51.5	36.0	171.6	花崗岩	完形		
S84	108	9C・D	竪穴住居4	百・後・Ⅲ	砥石		72.5	38.0	16.5	51.6	*流紋岩	欠損		
S85	449	9C・D	竪穴住居4	百・後・Ⅲ	砥石		302.5	141.0	209.0		*アップライト	欠損		
S86	111	9D	井戸4・第5層	百・後・Ⅳ	石皿		123.0	78.0	15.0	283.5	*頁岩	完形		
S87	110	10C	土壌9	百・後・Ⅱ	砥石		142.0	41.5	29.0	241.9	ノ	欠損		
S88	66	10D	土壌13	百・後・Ⅱ	スクレイパー		46.0	26.5	6.0	8.2	サヌカイト	欠損		
S89	73		土壌17	百・後・Ⅱ	スクレイパー		42.5	31.0	9.5	12.0	サヌカイト	欠損		
S90	188	18D	土壌58	弥生・後期	石鏝		37.0	15.0	4.1	2.2	サヌカイト	ほぼ完形		
S91	154	16C	溝16	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	17.0	17.0	2.9	0.5	サヌカイト	欠損		
S92	153	16C	溝16	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	28.5	22.0	4.9	1.6	サヌカイト	ほぼ完形		
S93	151	16C	溝17	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	17.0	12.5	2.6	0.4	サヌカイト	ほぼ完形		
S94	152	16D	溝17	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	19.0	14.5	3.7	0.8	サヌカイト	ほぼ完形		
S95	233	16D	溝17	弥生・後期	石鏝		25.0	6.0	3.0	0.5	サヌカイト	完形		
S96	122	10C	竪穴住居16	古墳・後期	砥石		82.0	21.0	28.0	97.1	*細粒砂岩	欠損		
S97	113	9C	井戸9	百・古・I	砥石		136.0	59.0	62.0	773.2	花崗岩	完形		
S98	448	18C	溝35	平安前期	石鈚		30.5	29.0	5.5	9.3	*蛇紋岩	欠損	巡方	
S99	159	16C	(No.58溝)→包含層等	弥生・前期	石鏝	Ⅱ	18.5	14.5	3.0		黒燧石	完形		
S100	200	17D	包含層等	" "	石鏝	Ⅱ	19.0	10.0	2.9	0.3	サヌカイト	欠損		
S101	80	10C	包含層等	" "	石鏝	Ⅱ	17.0	16.5	3.1	0.6	サヌカイト	欠損		
S102	195	17-18C・D	包含層等	弥生・前期	石鏝	Ⅱ	14.0	11.0	2.7	0.3	サヌカイト	欠損		
S103	204	17-18C・D	包含層等	弥生	石鏝	Ⅱ	18.5	13.0	3.0	0.7	サヌカイト	ほぼ完形		
S104	126	11C	(No.141柱穴)→包含層等	弥生・後期	石鏝	I	21.0	13.0	2.7	0.6	サヌカイト	ほぼ完形		
S105	71	9D	(No.467)→包含層等	百・後・I	石鏝	Ⅱ	26.0	20.5	4.5	1.9	サヌカイト	完形		
S106	85	10C・D	包含層等	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	27.0	14.5	5.3	1.9	サヌカイト	ほぼ完形		
S107	134	11B	包含層等	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	29.5	17.5	3.9	2.0	サヌカイト	欠損		
S108	150	16C・D	(No.34溝)→包含層等・下層	弥生・後期	石鏝		31.0	16.5	4.8	2.3	サヌカイト	欠損		
S109	60	10C	(No.63)→包含層等	百・後・Ⅲ	石鏝	I	18.5	12.5	3.4	0.7	サヌカイト	完形		
S110	90	10B	包含層等		石鏝	I	18.5	14.0	3.1	0.8	サヌカイト	ほぼ完形		
S111	123	10C	(No.29柱)→包含層等・埋土	弥生・後期	石鏝	I	22.0	12.5	3.3	0.7	サヌカイト	完形		
S112	65	9B	(No.154)→包含層等		石鏝	I	20.5	17.0	3.2	0.8	サヌカイト	完形		
S113	132	10B	包含層等		石鏝	I	25.0	16.0	3.4	1.1	サヌカイト	完形		
S114	130	10B	(No.365)→包含層等		石鏝		19.5	15.5	3.0	0.9	サヌカイト	完形		
S115	124	10B	(No.289土壌)→包含層等	弥生	石鏝	I	27.0	14.0	3.0	1.1	サヌカイト	欠損		
S116	93	10C	包含層等	弥生・後期	石鏝	I	38.0	22.0	3.5	3.3	サヌカイト	完形		
S117	129	10B	(No.303柱穴)→包含層等	弥生	石鏝	Ⅱ	31.5	19.5	3.1	1.9	サヌカイト	完形		
S118	68	10D	(No.441)→包含層等	百・後・I	石鏝	Ⅱ	39.0	21.0	5.3	4.0	サヌカイト	完形		
S119	202	18C	包含層等		石鏝	Ⅱ	25.0	12.0	2.8	0.7	サヌカイト	ほぼ完形		
S120	99	10C	包含層等	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	32.0	15.0	2.9	1.5	サヌカイト	ほぼ完形		
S121	95	10C	包含層等	" "	石鏝	Ⅱ	29.0	17.5	3.3	1.8	サヌカイト	欠損		
S122	94	9B	包含層等	" "	石鏝	Ⅱ	34.0	13.5	5.5	2.7	サヌカイト	欠損		
S123	128	11C	(No.185柱穴)→包含層等	弥生・後期	石鏝	Ⅱ	36.0	19.0	4.9	4.0	サヌカイト	ほぼ完形		
S124	157	17D	(No.54柱)→包含層等・上層		石鏝		26.0	16.0	4.5	1.5	サヌカイト	完形		
S125	198	17D	包含層等	弥生・前期	石鏝		34.0	17.5	7.5	3.7	サヌカイト	完形		
S126	199	17-18C・D	包含層等	弥生・前期	石鏝		24.5	11.0	4.5	1.3	サヌカイト	欠損		
S127	82	10C	包含層等		石鏝		31.0	9.5	3.4	0.9	サヌカイト	欠損		
S128	196	17-18D	包含層等	弥生・前期	石鏝		30.0	11.0	5.8	1.7	サヌカイト	ほぼ完形		
S129	69	10D	(No.441)→包含層等	百・後・I	石鏝	I	34.5	11.0	5.1	1.7	サヌカイト	完形		
S130	67	10D	(No.441)→包含層等	百・後・I	石包丁		30.5	33.5	7.5	9.8	サヌカイト	欠損	打製	
S131	59	9C	(No.31土壌)→包含層等	弥生・後期	石包丁		87.0	54.5	24.0	118.1	*頁岩	完形	打製	

百間川原尾島遺跡 5

掲番号	番号	出土地区	土壌・土層名	時期・時代	器種	形式	計測最大値 (mm)			重量 (g)	石材	残存	備考
							長	幅・径	厚				
S132	103	9・10D	包含層等		石包丁		87.5	40.5	12.7	62.4	*粘板岩	完形	打製
S133	75	9・10C・D	(近現代溝1)→包含層等	弥生	石包丁?		58.5	41.0	7.5	18.1	サヌカイト	欠損	
S134	89	9B	包含層等	弥生	石包丁		103.0	42.5	8.0	54.1	サヌカイト	欠損	打製
S135	78	10D	(近現代溝3)→包含層等	弥生	石包丁		76.0	42.5	7.8	41.8	*粘板岩	完形	
S136	131	11B	包含層等		石槍		96.0	38.5	14.5	41.4	サヌカイト	ほぼ完形	
S137	57	10C	(No.8溝)→包含層等・上層	縄文?	石鏃		92.5	51.0	14.0	67.9	サヌカイト	欠損	打製
S138	115	10B	包含層等	弥生	石斧		53.0	64.5	38.0	130.7	*ヒン岩	欠損	磨製刃部
S139	72		(No.467)→包含層等	百・後・I	スクレイパー		45.5	35.5	8.6	12.6	サヌカイト	欠損	
S140	406	9C・D	竪穴住居2→包含層等	弥生・後期	楔形石器		49.0	27.0	4.5	7.9	サヌカイト	欠損	スクレイパー転用
S141	404	9C・D	竪穴住居2→包含層等	弥生・後期	楔形石器		60.5	33.0	11.0	23.9	サヌカイト	完形	スクレイパー転用
S142	127	10C	(No.182柱穴)→包含層等	弥生・後期	石槍		49.0	30.5	6.5	10.8	サヌカイト	完形	
S143	63	10D	(No.110)→包含層等	弥生	スクレイパー		47.0	30.5	4.3	6.2	サヌカイト	完形	
S144	194	17・18C・D	包含層等	弥生・前期	スクレイパー		66.0	40.0	7.0	20.8	サヌカイト	ほぼ完形	
S145	58	10C	(No.8溝)→包含層等・上層	弥生	楔形石器		46.0	36.5	12.6	26.8	サヌカイト	完形	
S146	87	10C・D	包含層等	弥生	スクレイパー		25.0	20.5	5.7	2.6	サヌカイト	欠損	
S147	190	18C	溝35→包含層等	古墳	紡錘車		42.0	22.5	19.5	21.7	滑石	欠損	
S148	70	9D	(No.462)→包含層等	百・後・II	馬形		65.0	27.5	8.0	17.7	*滑石?	完形	
S149	135	10B	包含層等	弥生	砥石		71.5	23.0	13.5	34.9	頁岩	完形	
S150	105	9・10D	包含層等	弥生	石包丁		59.0	52.0	10.0	34.7	*粘板岩	完形	磨製
S151	116	10D	包含層等		硯		51.0	34.0	12.4	32.0	*頁岩	欠損	
S152	61	10C	(No.63)→包含層等	百・後・III	砥石		39.0	26.0	11.0	21.3	*石英?	完形	ベンガラ
S153	86	10C	包含層等		砥石		26.0	20.0	11.0	9.4	頁岩	欠損	
S154	109		包含層等	弥生	砥石		61.5	55.0	38.8	183.3	*花崗岩	完形	
S155	125	11C	(No.55柱穴)→包含層等	百・後・III	砥石		39.0	37.0	29.6	50.6	*アップライト	完形	
S156	137	10C	包含層等		砥石		61.0	63.5	47.5	247.1	*アップライト	完形	
S157	136	10B	包含層等	古墳・後期	砥石		102.0	77.0	51.0	583.2	*ヒン岩	完形	
S158	397	38C	土壌61	百・前・III	石核		227.0	160.0	32.0	1676.8	サヌカイト		
S159	396	38C	土壌61	百・前・III	石核		195.5	148.5	41.5	1220.8	サヌカイト		
S160	253	38C	土壌61	百・前・III			58.5	12.5	11.5	15.6	*緑色片岩	欠損	
S161	256	39C	土壌63	百・前・III	石鏃	II	26.5	19.0	4.0	1.5	サヌカイト	完形	
S162	257	39C	土壌63	百・前・III	石鏃		27.0	16.0	4.2	1.4	サヌカイト	欠損	
S163	272	39C	土壌65	百・前・III	石鏃	II	23.0	14.0	3.9	0.7	サヌカイト	完形	
S164	268	39C	土壌67	百・前・III	石鏃	I	18.5	15.0	3.2	0.7	サヌカイト	完形	
S165	269	39C	土壌67	百・前・III	石鏃	II	27.0	17.0	4.4	1.5	サヌカイト	完形	
S166	270	39C	土壌67	百・前・III	石鏃		55.5	36.5	5.5	10.8	サヌカイト	欠損	
S167	263	39C	土壌71	百・前・III	石鏃	II	15.0	12.0	2.4	0.4	サヌカイト	欠損	
S168	262	39C	土壌75	百・前・III	石包丁		209.0	165.0	28.0	947.3	サヌカイト	完形	
S169	429	40B	土壌77	百・前・III	石斧		132.0	77.0	58.0	979.5	ヒン岩	欠損	磨製、基部
S170	277	40C	土壌78・79	百・前・III	石鏃	II	16.0	16.5	3.2	0.7	サヌカイト	欠損	
S171	278	40C	土壌78・79	百・前・III	石鏃		24.5	12.5	4.2	0.7	サヌカイト	完形	
S172	282	40B	土壌80	百・前・III	スクレイパー		86.5	50.0	9.5	45.0	サヌカイト	完形	
S173	265	39C	土壌81	百・前・III	石鏃	II	27.0	21.5	4.3	1.7	サヌカイト	完形	
S174	264	39C	土壌81	百・前・III	石槍		51.5	39.5	9.0	22.3	サヌカイト	欠損	
S175	281	39C	土壌84・85	百・前・III	石鏃		31.5	13.5	3.5	1.0	サヌカイト	完形	
S176	280	39C	土壌84・85	百・前・III	石鏃		35.0	11.0	3.0	1.1	サヌカイト	完形	
S177	267	40C	土壌89	百・前・III	石鏃	II	22.5	15.5	4.2	0.8	サヌカイト	完形	
S178	402	40C	土壌89	百・前・III	石包丁		198.5	116.0	21.0	463.7	サヌカイト	完形	打製、大形
S179	401	40C	土壌89	百・前・III	石包丁		181.5		17.0	502.4	サヌカイト	完形	打製、大形
S180	400	40C	土壌89	百・前・III	石包丁		151.0	45.5	11.0	114.6	サヌカイト	完形	打製
S181	450	40C	土壌89	百・前・III	石包丁		115.0	42.0	7.0		緑色片岩	完形	磨製
S182	398	40C	土壌89	百・前・III	石包丁		100.0	45.0	6.5	41.7	サヌカイト	完形	打製
S183	399	40C	土壌89	百・前・III	石包丁		135.0	52.0	13.0	103.7	サヌカイト	完形	打製
S184	271	40C	土壌90・91	百・前・III	石鏃	II	28.0	18.0	4.4	1.7	サヌカイト	完形	
S185	266	40C	土壌95	百・前・III	石鏃		68.5	35.5	5.5	14.2	サヌカイト	完形	
S186	254	38C	土壌99	弥生・中期	スクレイパー		64.0	54.0	12.3	37.9	サヌカイト	欠損	
S187	258	38・39C	土壌100	弥生・前期	石鏃	II	26.5	18.0	3.0	1.4	サヌカイト	完形	
S188	259	38・39C	土壌100	弥生・前期	石鏃	II	28.0	20.0	4.5	1.7	サヌカイト	完形	
S189	261	38・39C	土壌100・下層	弥生・前期	石鏃	II	18.0	14.0	2.3	0.4	サヌカイト	完形	
S190	284	38C	土壌103	百・中・II	石鏃	I	19.0	13.5	3.5	0.9	サヌカイト	完形	
S191	285	38C	土壌103	百・中・II	石鏃	II	32.0	15.5	4.0	1.6	サヌカイト	完形	
S192	274	39C	土壌106		石鏃	II	14.5	10.5	3.0	0.2	サヌカイト	完形	
S193	273	39C	土壌106		石鏃	II	15.0	12.5	2.4	0.4	サヌカイト	完形	
S194	276	39C	土壌106		石鏃	II	19.0	14.0	3.2	0.6	サヌカイト	欠損	
S195	275	39C	土壌106		石鏃	II	22.5	17.5	4.5	1.1	サヌカイト	欠損	
S196	302	40C	溝52・上層と下層	百・前・III	石鏃	I	15.0	12.5	2.0	0.3	サヌカイト	完形	
S197	299	40C	溝52	百・前・III	石鏃	II	18.0	13.0	2.5	0.6	サヌカイト	完形	

掲載 番号	番号	出土地区	土層・土層名	時期・時代	器 種	形式	計測最大値 (mm)			重 量 (g)	石 材	残 存 備 考
							長	幅・径	厚			
S198	301	40C	溝52・上層	百・前・Ⅲ	石鏝	Ⅱ	23.5	18.0	3.5	1.2	サヌカイト	欠損
S199	300	40C	溝52・上層	百・前・Ⅲ	石鏝	Ⅱ	28.5	17.0	3.4	1.3	サヌカイト	欠損
S200	304	40C	溝52・上層	百・前・Ⅲ	石鏝		31.5	18.0	5.0	1.8	サヌカイト	完形
S201	303	40C	溝52	百・前・Ⅲ	石匙		48.0	51.0	7.5	12.3	サヌカイト	完形
S202	297	40C	溝52	百・前・Ⅲ	石鏝か石包丁		28.0	41.0	3.0	5.1	※頁岩	完形?
S203	296	40C	溝52	百・前・Ⅲ	扁平片刃石斧		44.5	13.0	5.5	5.1	頁岩	完形
S204	295	40C	溝52	百・前・Ⅲ	方柱状石斧		65.5	14.0	5.0	9.6	凝灰石	完形
S205	252	39C	土壇107	百・後・Ⅰ	石鏝	Ⅱ	13.0	17.0	3.0	0.4	サヌカイト	欠損
S206	293	39C	溝61・62	百・後・Ⅱ	石鏝	Ⅱ	14.5	12.0	2.0	0.3	サヌカイト	完形
S207	294	39C	溝61・62	百・後・Ⅱ	石鏝	V	22.5	17.5	4.0	1.2	サヌカイト	欠損
S208	290	40C	溝61・62	百・後・Ⅱ	石匙		50.0	30.0	6.6	7.9	サヌカイト	完形
S209	292	39C	溝61・62	百・後・Ⅱ	楔形石器		76.5	55.0	19.7	75.3	サヌカイト	欠損
S210	291	40C	溝61・62	百・後・Ⅱ	石包丁		73.5	48.0	9.0	45.4	サヌカイト	欠損
S211	381	40C	包含層等		石鏝		119.5	55.5	20.5	148.6	サヌカイト	欠損
S212	283	39C	(P-116・117)→包含層等	百・前・Ⅲ	石鏝	Ⅱ	23.0	15.0	3.0	0.9	サヌカイト	完形
S213	377	39C	包含層等		石包丁		91.0	63.0	13.0	78.9	サヌカイト	完形
S214	337	39C	包含層等	弥生	石包丁	Ⅱ	60.0	51.0	7.3	27.1	サヌカイト	欠損
S215	317	39・40C	包含層等	弥生	石包丁		48.0	44.5	8.5	20.3	※粘板岩	欠損
S216	306	38・39C	包含層等	弥生・後期	スクレイパー		72.5	53.0	10.0	28.4	サヌカイト	欠損
S217	393	39C	包含層等		石包丁		130.5	40.0	6.0	44.3	サヌカイト	完形
S218	357	40C	包含層等		石包丁		87.5	40.5	7.0	30.4	サヌカイト	欠損
S219	324	40C	包含層等	弥生	スクレイパー		82.5	40.5	8.0	22.7	サヌカイト	完形
S220	361	39C	包含層等		石包丁		28.0	49.0	7.0	15.4	※千枚岩	欠損
S221	431	39C	包含層等		扁平片刃石斧		31.0	8.5	6.0	2.1	頁岩	欠損
S222	430	38・39C	包含層等	弥生・後期	石斧		102.0	70.0	51.0	652.1	※ヒン岩	未製品
S223	307	39・40C	包含層等	弥生・後期	石斧		81.5	71.0	45.0	249.5	※砂岩	欠損

## 3. 玉類一覧表

掲載 番号	番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器 種	計測最大値 (mm)			重 量 (g)	材 質	残 存 備 考
						長・高	幅・径	内径			
J1	29	16C	旧河道・中層	弥生・前期	勾玉	16.8	8.8・5.3	2.9	1.1	翡翠	完形
J2	20	10B	竪穴住居1	百・後・Ⅰ～Ⅱ	小玉	3.0	4.1	1.5	0.07	ガラス	完形
J3	5	9C・D	竪穴住居3・覆土	百・後・Ⅱ～古・Ⅰ	小玉	2.7	3.7	1.5	0.06	ガラス	完形
J4	17	9C・D	竪穴住居3・覆土	百・後・Ⅱ～古・Ⅰ	管玉	147.0	4.1	4.0	0.29	緑色凝灰岩	欠損
J5	3	9D	竪穴住居3・床面	百・後・Ⅰ	小玉	3.5	3.5	1.0	0.07	ガラス	完形
J6	2	9D	竪穴住居4・第1層	百・後・Ⅲ	管玉	7.6	3.2	1.3	0.07	緑色凝灰岩	欠損
J7	28	17D	竪穴住居9	弥生・後期	小玉	3.0	4.2	1.3	0.08	ガラス	完形
J8	12	10B・C	土壇6	百・後・Ⅲ	勾玉	16.3	10.3・4.5	3.0	0.92	翡翠?	完形
J9	4	9C	竪穴住居11	古墳・前期	小玉	1.0	2.0	1.0	0.01	ガラス	完形
J10	10	9C	井戸10	古墳・後期	白玉	2.6	4.4	1.3	0.09	滑石	完形
J11	11	9C	井戸10・上層	古墳・後期	白玉	4.0	6.2	2.8	0.21	滑石	完形
J12	26	16C	溝29・下層	古墳・後期	白玉	3.8	6.5	2.0	0.23	滑石	完形
J13	25	16C	溝29・下層	古墳・後期	白玉	2.0	7.5	2.0	0.11	滑石	完形
J14	24	16C	溝29・下層	古墳・後期	白玉	4.0	6.0	2.0	0.18	滑石	完形
J15	30	16D	溝29	古墳・後期	白玉	4.3	4.8	1.8	0.15	滑石	完形
J16	31	16D	溝29	古墳・後期	丸玉	7.0	8.8	2.0	0.6	土	完形
J17	27	16D	溝29・上層	古墳・後期	小特勾玉	88.9	51.5	5.8		滑石	完形
J18	19	10C	(No.99)→包含層等	百・後・Ⅱ	小玉	4.0	4.2	1.8	0.1	ガラス	完形
J19	21	10C	(No.334)→包含層等	弥生	管玉	6.6			0.06	ガラス	欠損
J20	6	10C	溝25・26?→包含層等	古墳・後期	白玉	3.3	4.3	2.0	0.1	滑石	完形
J21	7	10C	溝25・26?→包含層等	古墳・後期	白玉	3.7	4.0	1.0	0.13	滑石	完形
J22	8	10C	溝25・26?→包含層等	古墳・後期	白玉	3.2	5.0	1.8	0.13	滑石	完形
J23	13	10C	包含層等	古墳・後期	白玉	3.3	5.0	1.9	0.14	滑石	完形
J24	14	10C	包含層等	古墳・後期	白玉	4.3	5.2	1.7	0.16	滑石	完形
J25	15	10C	包含層等	古墳・後期	白玉	2.0	3.0	1.3	0.03	滑石	完形
J26	16	10C	包含層等	古墳・後期	白玉	2.0	5.0	1.8	0.06	滑石	完形
J27	18	10B	包含層等	古墳・後期	白玉	2.5	5.2	2.0	0.1	滑石	完形
J28	9	10C	溝25・26?→包含層等	古墳・後期	白玉	2.0	4.0	1.0	0.05	滑石	完形
J29	22	18C	溝29	古墳・後期	白玉	270.0	5.7	2.2	0.1	滑石	完形
J30	23	17C	溝29	古墳・後期	白玉	3.0	5.0	2.0	0.1	滑石	完形
J31	34	40B	土壇77	弥生・前期Ⅲ	管玉	9.4	4.5	(2.0)	0.1	緑色凝灰岩	欠損
J32	35	40C	土壇79	弥生・前期Ⅲ	管玉	25.7	4.4	2.2	0.3	緑色凝灰岩	欠損
J33	33	38D	水田2	弥生・後期	小玉	3.2	3.4	2.0	0.02	ガラス	完形
J34	32	37C	包含層等		管玉	10.0	4.2	2.0	0.27	緑色凝灰岩	完形

4. 木製品一覧表

掲載番号	番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	計測最大値 (mm)			樹種	残存	備考
						長	幅・径	厚			
W1	129	16C	旧河道・中層	弥生・前期	広縁	400.0	203.0	29.5		ほぼ完形	
W2	128	16C	旧河道・下層	弥生・前期	広縁	308.0	194.0	31.5		欠損	
W3	97	15C	旧河道	弥生・前期	広縁	348.5	90.5	6.5~10.0	コナラ属アカガシ亜属	欠損	
W4	93	16C・D	旧河道・中層	弥生・前期	壺	106.0	底: 35.0		クスノキ	ほぼ完形	
W5	126	15C・D	旧河道	弥生・前期	有孔板					欠損	
W6	104	16D	旧河道・下層	弥生・前期	諸手織の未製品	629.0	118.0	49.0	コナラ属アカガシ亜属	欠損	
W7	103	16D	旧河道・第43層	弥生・前期	二又柄	549.5	49.5		コナラ属アカガシ亜属	ほぼ完形	
W8	102	16D	旧河道・第43層	弥生・前期	二又柄	439.0	50.0		広葉樹(散孔材)	ほぼ完形	
W9	94	16C・D	旧河道・中層	弥生・前期	碇	187.0	131.0	112.0	ムクロジ	欠損	
W10	90	16C	溝29・下層	古墳	又鋤	480.5	40.5	4.0~7.5	樹皮	欠損	
W11	87	16D	溝29・下層	古墳	又鋤	369.0	52.5	8.5~13.5	コナラ属アカガシ亜属	欠損	
W12	82	16C	溝29・下層	古墳	丸織未製品?	274.0	200.5	30.5	広葉樹(環孔材)	欠損	
W13	70	16D	溝29・下層	古墳	匙?	117.0	25.0	7.5		欠損	
W14	79	16D	溝29・下層	古墳	横縁	79.0	352.0	7.5	コナラ属アカガシ属	欠損	
W15	77	16・17D	溝29・下層	古墳	横縁	363.0	52.0		コナラ属アカガシ属	ほぼ完形	
W16	91	16C	溝29・下層	古墳	加工木	440.5	64.5	45.0	ヒノキ属	欠損	部材か?
W17	86	16D	溝29・下層	古墳	柄	451.5	34.5	29.0	チシヤノキまたはマルバチシヤノキ	完形	
W18	81	16C	溝29・下層	古墳	柄	498.0	47.0	21.5	コナラ属アカガシ属	ほぼ完形	
W19	89	16C	溝29・下層	古墳	柄	411.0	27.0	16.5	広葉樹(散孔材)	欠損	
W20	83	16C	溝29・下層	古墳	柄	296.5	31.5	32.0	コナラ属コナラ亜属クスギ節	欠損	
W21	80	16D	溝29・下層	古墳	加工木	286.5	45.0	18.5	シノキ属	欠損	
W22	113	18D	溝35・下層	平安・前期	人形	385.5	56.0	4.0		欠損	
W23	112	18D	溝35・下層	平安・前期	人形	267.0	41.0	3.0		完形	
W24	111	18D	溝35・下層	平安・前期	人形	178.0	33.0	1.5		完形	
W25	110	18D	溝35・下層	平安・前期	人形	150.5	41.5	2.0		欠損	
W26	17	18D	溝35・下層	平安・前期	斎串	131.5	19.0	1.5		欠損	
W27	20	18・19D	溝35・下層	平安・前期	木札	168.0	13.5	2.3		完形	
W28	3	18D	溝35・下層	平安・前期	斎串	153.5	22.0	1.5		完形	
W29	4	18D	溝35・下層	平安・前期	斎串	157.5	15.0	2.0	ヒノキ属	ほぼ完形	
W30	18	18D	溝35・下層	平安・前期	斎串		18.0	2.0		欠損	
W31	109	18D	溝35・下層	平安・前期	鎌	276.0	133.0	19.5		ほぼ完形	
W32	92	18D	溝35・下層	平安・前期	鎌柄	301.0	23.5	19.0	コナラ属アカガシ亜属	欠損	
W33	16	18D	溝35・下層	平安・前期	刀形	279.5	16.0	4.5		完形	
W34	5	18D	溝35	平安・前期	鎌形	205.5	28.0	5.0		欠損	
W35	29	18D	溝35・下層	平安・前期	曲物	55.0	165.0		ヒノキ属	完形	
W36	1	18D	溝35・下層	平安・前期	櫛	40.0	45.0	4.0		欠損	
W37	6	18D	溝35	平安・前期	櫛	46.0	58.0	6.0	イスノキ属	欠損	
W38	10	18D	溝35・下層	平安・前期	有孔板	226.0	49.5	3.0	ヒノキ属	欠損	
W39	34	18C	溝35・下層	平安・前期	折敷	386.0	143.0	19.0	ヒノキ属	欠損	綴じ皮付。
W40	37	18D	溝35・下層	平安・前期	折敷の底板	597.0	151.5	11.5	ヒノキ属	欠損	続いている。
W41	36	19D	溝35・下層	平安・前期	折敷の底板	391.0	157.0	5.0	ヒノキ属	欠損	続いている。
W42	39	18D	溝35・下層	平安・前期	弓?	427.5	22.0		カヤ	欠損	
W43	8	18D	溝35・下層	平安・前期	有頭棒	174.5	42.0		シキミ	欠損	
W44	24	18D	溝35・下層	平安・前期	有頭棒	149.0	19.0		サカキ	欠損	
W45	33	18D	溝35	平安・前期	串?	285.0	15.5		ウツギ属	ほぼ完形	
W46	32	18D	溝35	平安・前期	斎串?	172.0	6.5	4.0		欠損	
W47	21	18・19D	溝35・下層	平安・前期	加工木	183.5	9.5	7.0		完形	
W48	22	18C	溝35・下層	平安・前期	紡錘	206.0	67.0	41.5	ハイノキ属	ほぼ完形	
W49	35	18D	溝35	平安・前期	下駄	105.5	107.0	64.5	ヒノキ属	欠損	連歯。
W50	52	17C	井戸11・第16層	室町	呪符木筒	161.5	23.5	2.5		ほぼ完形	
W51	51	17C	井戸11・第19層	室町	呪符木筒	142.5	24.0	3.0		ほぼ完形	
W52	53	17C	井戸11	室町	呪符木筒	128.5	10.5	1.5		欠損	
W53	127	17C	井戸11	室町	呪符木筒	95.5	16.0	2.0		欠損	
W54	50	17C・D	井戸11	室町	碗		口: 134.0		クリ	欠損	
W55	49	17C・D	井戸11	室町	碗		底: 72.0		クリ	欠損	
W56	125	17C・D	井戸11	室町	碗		底: 90.0		クリ	欠損	
W57	58	17C・D	井戸11・第16層?	室町	曲物の底板	83.0	61.0	6.0		欠損	
W58	56	17C・D	井戸11・第27層	室町	曲物の底板	197.0	49.0	8.0	ヒノキ属	欠損	
W59	59	17C・D	井戸11・第16層?	室町	加工木	115.5	17.0	8.5		ほぼ完形	
W60	60	17C・D	井戸11・第27層?	室町	下駄	197.5	105.5	28.0	ハイノキ属	欠損	連歯。
W61	61	17C・D	井戸11・下層?	室町	曲物の底板	321.0	131.0	8.5	ヒノキ属	欠損	

## 5. 金属製品一覧表

掲載 番号	番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器 種	計測最大値 (mm)				重 量 (g)	材 質	残 存	備 考
						長	幅	径	厚				
M1	63	10B	竪穴住居1			ヤリガンナ?	56.0	14.5	3.0	6.6	鉄	欠損	
M2	8	10C	竪穴住居2			ヤリガンナ?	88.0	15.5	2.5	11.9	鉄	欠損	
M3	64	11C	竪穴住居5・覆土1~床1			鎌	37.5	15.5	4.0	3.5	鉄	欠損	
M4	61	10B	竪穴住居12			鎌?	67.0	33.0	2.5	17.1	鉄	欠損	
M5	69	10C	竪穴住居15			刀子	47.8	9.0	3.2	3.0	鉄	欠損	
M6	100	9C	井戸10			耳環(金)	29.0	6.8	26.6	26.6	鍍金	完形	鉄地金銅張
M7	78	18D	溝35・下層	平安・前期		刀子	130.0	9.5	2.5	6.0	鉄	欠損	
M8	77	18D	溝35・下層	平安・前期		手斧	83.0	15.5	0.7	31.1	鉄	欠損	
M9			溝35・下層	平安・前期		鎌刃	163.0	25.0	2.0	28.3	鉄	ほぼ完形	
M10	79	19D	溝35・下層	平安・前期		鎌刃	216.5	2.8	2.3	43.1	鉄	ほぼ完形	
M11			溝35・下層	平安・前期		鎌刃	132.0	24.0	2.0		鉄	欠損	
M12	6	10B	土墳墓1	中世		刀子	342.3	25.3	7.6	103.6	鉄	完形	
M13	108	11B	土墳墓3	中世		鏡	131.0	縁:2.5~3.5		181.3	青銅	完形	湖洲鏡
M14	84b	16C	土墳墓8			釘	24.5	2.0	2.0	0.3	鉄	欠損	
M15	84a	16C	土墳墓8			釘	20.5	3.0	2.3	0.4	鉄	欠損	
M16	15	9・10C・D	溝39・上層	中世		鎌	96.5	23.3	8.4	12.2	鉄	完形	
M17	25	9・10C・D	溝39・上層	中世		鎌	33.5	7.3	7.5	3.0	鉄	欠損	
M18	14	9・10C	溝39・上層	中世		刀子	131.0	18.0	3.0	21.7	鉄	ほぼ完形	
M19	16	9・10C・D	溝39・上層	中世		紡錘車		37.0	4.0	6.8	鉄	欠損	
M20	34	9・10C	溝39・上層	中世		釘	65.3	8.6	6.0	7.1	鉄	欠損	
M21	20	9・10C・D	溝39・上層	中世		釘	49.0	7.0	7.0	11.7	鉄	欠損	
M22	21a	10C	溝39・上層	中世		釘	43.0	5.0	1.0	4.8	鉄	欠損	
M23	37	10C	溝39・中層	中世		釘	62.7	6.9	4.0	4.1	鉄	欠損	
M24	32a	9・10C・D	溝39・上層	中世		釘	32.5	8.8	5.5	3.6	鉄	欠損	
M25	45	9C	包含層等	弥生・後期		斧?	31.5	45.7	3.7	16.6	鉄	欠損	
M26	50	10B・C	包含層等	"・"		鎌	37.9	14.8	2.0	2.6	鉄	欠損	
M27	72	10B	包含層等	"・"		鎌	54.5	19.5	4.0	5.1	鉄	完形	
M28	47	10C	包含層等(土器溜り1)	"・"		鎌	44.3	25.8	3.0	7.4	鉄	欠損	
M29	49	9C	包含層等	"・"		鎌	52.8	13.0	4.2	5.1	鉄	欠損	
M30	44	9・10B	包含層等	古墳?		刀子	56.1	10.5	3.5	4.5	鉄	欠損	
M31	43	10C	(No281)→包含層等	弥生・後期		鑿?	29.0	10.0	3.3	2.6	鉄	欠損	
M32	88	16C	(P-57)	中世?		環座金具				2.0	鍍金	欠損	
M33	82	18・19C・D	包含層等・上層	中世		釘	45.8	6.3	6.0	12.9	鉄	欠損	
M34	81	18D	包含層等・上層	中世		釘	177.5	23.0	16.5	98.1	鉄	完形	
M35	80	18D	包含層等・上層	中世		釘	215.5	26.8	12.0	121.8	鉄	完形	
M36	94	40C	包含層等			鋤先	25.0	16.3	3.0	3.3	鉄	欠損	
M37	92	40C	包含層等			ヤリガンナ	80.0	9.8	3.8	8.8	鉄	欠損	

6. 土製品一覽表

掲載番号	番号	出土地区	遺構・土層名	時代・時期	器種	形式	計測最大値 (mm)			重量 (g)	残存	備考
							長	幅・径	厚			
C1	75	16D	旧河道・下層	弥生・前期	紡錘車		54.0		14.0	32.8	欠損	黒色物塗布
C2	90	9D	井戸4		紡錘車		48.0	44.0	9.5	20.6	未製品	弥生土器壹片転用
C3	25	9C・D	土填16	百・後・Ⅱ	分銅形土製品						1/4残	
C4	52	10B	竪穴住居12	6C後半	土錘	B I	72.0	13.0		33.9	ほぼ完形	
C5	51	10B	竪穴住居12	6C後半	土錘	B II	58.0	22.0		24.6	ほぼ完形	
C6	55	11C	竪穴住居17	6C末~7C初	土錘	B M	41.0	12.0		5.3	欠損	
C7	23	9C	井戸10・下層		土錘	B M	53.0	12.0		5.9	完形	
C8	67	18D	溝35・第34層	平安・前期	土錘	B M	26.0	10.0		1.9	欠損	
C9	65	18D	溝35・29~34層	平安・前期	土錘	B V	31.0	10.0		2.6	完形	
C10	63	18D	溝35	平安・前期	土錘	B V	45.0	11.0		5.0	完形	
C11	62	18-19D	溝35・下層	平安・前期	土錘	B V	48.0	14.0		8.9	完形	
C12	68	18D	溝35	平安・前期	土錘	B M	52.0	14.0		10.3	完形	
C13	64	18D	溝35	平安・前期	土錘	B M	50.0	13.0		8.1	ほぼ完形	
C14	60	18D	溝35・下層	平安・前期	土錘	B M	56.0	14.0		9.4	完形	
C15	66	18D	溝35	平安・前期	土錘	B I	56.0	16.0		14.7	欠損	
C16	69	17C	井戸11	室町	円板状土製品		37.0		10.0	19.1	完形	備前焼片転用
C17	86	17C	井戸11	室町	円板状土製品		38.0		12.0	19.4	完形	亀山焼片転用
C18	87	17C	井戸11	室町	円板状土製品		40.0		11.0	18.9	完形	備前焼槽鉢片転用
C19	71	17C・D	井戸11・第24層	室町	円板状土製品		46.0		17.0	34.2	完形	備前焼片?転用
C20	85	17C	井戸11	室町	円板状土製品		46.0		8.0	21.4	完形	備前焼片転用
C21	70	17C	井戸11	室町	円板状土製品		51.0		11.0	39.5	完形	備前焼片転用
C22	73	17C・D	井戸11	室町	円板状土製品		53.0		20.0	56.3	完形	瓦質土器片
C23	72	17C・D	井戸11	室町	円板状土製品		54.0		16.0	49.7	ほぼ完形	瓦質土器片
C24	84	17C・D	井戸11	室町	円板状土製品		66.0		11.0	58.0	完形	備前焼槽鉢片転用
C25	21	9・10C・D	溝39・上層	中世	土錘	C	91.0	53.0		191.5	欠損	
C26	16	10C	溝39・上層	中世	土錘	B I	72.0	75.0		368.4	欠損	
C27	20	9C・D	溝39・上層	中世	土錘	B I	69.0	21.0		32.5	欠損	
C28	12	9・10C・D	溝39・上層	中世	土錘	A III ③	54.0	26.0		24.2	欠損	
C29	14	10C	溝39・上層	中世	土錘	B III	37.0	16.0		8.6	完形	
C30	15	10C	溝39・上層	中世	土錘	B III	42.0	11.0		6.4	完形	
C31	13	10C	溝39・上層	中世	土錘	B III	46.0	14.0		8.4	欠損	
C32	10	9・10C	溝39	中世	土錘	B V	44.0	11.0		4.7	一部欠損	
C33	17	9C・D	溝39・上層	中世	土錘	B V	45.0	10.0		3.5	ほぼ完形	
C34	49	10・11B・C	溝39	中世	土錘	B V	47.0	12.0		6.3	ほぼ完形	
C35	19	9・10C	溝39・上層	中世	土錘	B V	46.0	12.0		5.8	完形	
C36	11	9・10C・D	溝39・上層	中世	土錘	B M	43.0	13.0		5.8	欠損	
C37	18	9C・D	溝39・上層	中世	土錘	B III	23.0	12.0		3.0	欠損	
C38	74	18D	(No.22溝)→包含層等	古代?	土錘	C	42.0	25.5	21.0	19.0	欠損	
C39	56	10B	包含層等	古代	土錘	C	32.0	31.0		26.2	ほぼ完形	
C40	54	10B	包含層等	7C後半	土錘	B M	59.0	12.0		7.6	完形	
C41	53	10B	包含層等	7C後半	土錘	B I	32.0	16.0		6.2	欠損	
C42	22	9C	包含層等	百・古・I	土錘	B I	45.0	25.0		31.5	欠損	
C43	80	40C	溝52	百・前・Ⅱ	紡錘車?				19.5	49.5	完形	
C44	89	40C	溝61・62水路		紡錘車		46.0	8.0		20.1	未製品	弥生土器片転用



新旧遺構名称対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
旧河道	No.90	16C・D	岡・高・阿	1988
土壌1	No.59	16C	岡・高・阿	1988
土壌2	No.74	17・18D	岡・高・阿	1988
土壌3	No.100	18D	岡・高・阿	1988
土壌4	No.97	19C	岡・高・阿	1988
溝1	No.105	16C	岡・高・阿	1988
溝2	No.58	16C	岡・高・阿	1988
溝3	No.57	16・17C・D	岡・高・阿	1988
溝4	No.61a・b	17C・D	岡・高・阿	1988
溝5	No.76	17C	岡・高・阿	1988
溝6	No.64	17C・D	岡・高・阿	1988
溝7	No.77	17C・D	岡・高・阿	1988
溝8	No.78・79	17C・D	岡・高・阿	1988
溝9	No.80	17C・D	岡・高・阿	1988
溝10	No.81	17・18C・D	岡・高・阿	1988
溝11	No.82	18C	岡・高・阿	1988
竪穴住居1	No.310	10B	岡・山	1984
竪穴住居2	B-1住	10C	柳・岩	1983
竪穴住居3	A-3住	9C・D	柳・岩	1983
竪穴住居4	A-4住	9C・D	柳・岩	1983
竪穴住居5	No.335	11C	岡・山	1984
竪穴住居6	G-2住	10B	柳・岩	1983
竪穴住居7	D-4住	9C	柳・岩	1983
竪穴住居8	No.68・83~85・95	17・18D	岡・高・阿	1988
竪穴住居9	No.104	18C	岡・高・阿	1988
建物1	建物2	9B	柳・岩	1983
建物2	建物3	9・10B	柳・岩	1983
建物3	なし	10B	岡・山	1984
建物4	なし	10B・C	岡・山	1984
建物5	なし	10・11B・C	岡・山	1984
建物6	なし	11B	岡・山	1984
建物7	なし	10・11B	岡・山	1984
建物8	No.103	18C	岡・高・阿	1988
井戸1	No.461井戸	9D	柳・岩	1983
井戸2	No.190井戸	9B	柳・岩	1983
井戸3	No.351井戸	10・11B	柳・岩	1983
井戸4	No.463井戸	9D	柳・岩	1983
井戸5	No.113井戸	9C	柳・岩	1983
井戸6	No.23井戸	10C・D	柳・岩	1983
土壌5	No.213土壌	10B	柳・岩	1983
土壌6	No.216土壌	10B・C	柳・岩	1983
土壌7	No.217土壌	10B・C	柳・岩	1983
土壌8	No.400土壌	10C	柳・岩	1983
土壌9	No.75土壌	10C	柳・岩	1983
土壌10	No.27土壌	10C	柳・岩	1983
土壌11	No.96土壌	9・10C	柳・岩	1983
土壌12	No.56土壌	10C	柳・岩	1983
土壌13	No.435	10D	柳・岩	1983
土壌14	No.55土壌	9C	柳・岩	1983
土壌15	No.32土壌	9・10C	柳・岩	1983
土壌16	No.460土壌	9D	柳・岩	1983
土壌17	No.52土壌	10D	柳・岩	1983
土壌18	No.44土壌	10D	柳・岩	1983
土壌19	No.60土壌	10D	柳・岩	1983
土壌20	No.43土壌	10D	柳・岩	1983
土壌21	No.42土壌	10D	柳・岩	1983
土壌22	No.53土壌	10D	柳・岩	1983
土壌23	No.250土壌	10D	柳・岩	1983
土壌24	No.343	10B	岡・山	1984
土壌25	No.71	10B	岡・山	1984
土壌26	No.70	10B	岡・山	1984
土壌27	No.47	10B	岡・山	1984
土壌28	No.43	10B	岡・山	1984
土壌29	No.178	10B	岡・山	1984
土壌30	No.302	10・11B	岡・山	1984
土壌31	No.261	11B	岡・山	1984

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壌32	No.190	10B	岡・山	1984
土壌33	No.204	10B	岡・山	1984
土壌34	No.147	10B	岡・山	1984
土壌35	No.165	10B	岡・山	1984
土壌36	No.83	10B	岡・山	1984
土壌37	No.110	10B	岡・山	1984
土壌38	No.51	11B	岡・山	1984
土壌39	No.122	10B	岡・山	1984
土壌40	No.146	10B	岡・山	1984
土壌41	No.88	10B	岡・山	1984
土壌42	No.52	10B	岡・山	1984
土壌43	No.87	10B	岡・山	1984
土壌44	No.54	10・11B	岡・山	1984
土壌45	No.57	10B・C	岡・山	1984
土壌46	No.101	11B	岡・山	1984
土壌47	No.84	10・11B	岡・山	1984
土壌48	No.161	10C	岡・山	1984
土壌49	No.148	10C	岡・山	1984
土壌50	No.145	10C	岡・山	1984
土壌51	No.357	10C	岡・山	1984
土壌52	No.387	11B	岡・山	1984
土壌53	No.378	11B・C	岡・山	1984
土壌54	No.73	17D	岡・高・阿	1988
土壌55	No.71	17D	岡・高・阿	1988
土壌56	No.67	17・18D	岡・高・阿	1988
土壌57	No.63	18D	岡・高・阿	1988
土壌58	No.101	18D	岡・高・阿	1988
溝12	No.94	9~11B・C	柳・岩・岡・山	1983・4
溝13	No.379	11B・C	柳・岩・岡・山	1983・4
溝14	No.163	11B・C	岡・山	1984
溝15	No.50	15・16C・D	岡・高・阿	1988
溝16	No.49	16C・D	岡・高・阿	1988
溝17	No.48	16・17C・D	岡・高・阿	1988
溝18	No.47	16C・D	岡・高・阿	1988
溝19	No.52	16・17C	岡・高・阿	1988
溝20	No.33	16・17C・D	岡・高・阿	1988
溝21	No.32	17C・D	岡・高・阿	1988
溝22	No.60	17C	岡・高・阿	1988
溝23	No.94	18C・D	岡・高・阿	1988
溝24	No.96	19C	岡・高・阿	1988
水田1	水田	15・17C・D	岡・高・阿	1988
水路1	No.33	16・17C・D	岡・高・阿	1988
水路2	No.32	17C・D	岡・高・阿	1988
水路3	No.94	18C・D	岡・高・阿	1988
土器溜り1	土器溜り	10C・D	柳・岩・岡・山	1983・4
土器溜り2	土器溜り	10B	岡・山	1984
竪穴住居10	住1(PRI)	9・10B	柳・岩	1983
竪穴住居11	No.22住	9C	柳・岩	1983
竪穴住居12	No.8	10B	岡・山	1984
竪穴住居13	No.14	10・11B	岡・山	1984
竪穴住居14	No.42	10C	岡・山	1984
竪穴住居15	No.140	10C	岡・山	1984
竪穴住居16	No.22	10C	岡・山	1984
竪穴住居17	No.24	10・11C	岡・山	1984
竪穴住居18	No.28	11B	岡・山	1984
竪穴住居19	No.27	11C	岡・山	1984
竪穴住居20	No.26	11C	岡・山	1984
建物9	なし	17・18C・D	岡・高・阿	1988
建物10	No.70	18D	岡・高・阿	1988
建物11	No.66	18・19C	岡・高・阿	1988
建物12	No.31・51	19C	岡・高・阿	1988
井戸7	No.29井戸	9C	柳・岩	1983
井戸8	No.401井戸	9C	柳・岩	1983
井戸9	No.402井戸	9C	柳・岩	1988
井戸10	No.17井戸	9C	柳・岩	1983
土壌59	No.9-b・c	10・11B	岡・山	1984

百間川原尾島遺跡 5

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝25	No15	9・10B・C	柳・岩	1983
溝26	No16	9・10B・C	柳・岩	1983
溝27	No21溝	9・10B・C	柳・岩	1983
溝28	No45	15・16C・D	岡・高・阿	1988
溝29	No29	16・17C・D	岡・高・阿	1988
溝30	No102	18C・D	岡・高・阿	1988
溝31	No38	18C	岡・高・阿	1988
溝32	No36	18・19C	岡・高・阿	1988
溝33	No37	18・19C	岡・高・阿	1988
溝34	No35	19C・D	岡・高・阿	1988
溝35	No10	18・19C・D	岡・高・阿	1988
建物13	No19柱穴群	10C	柳・岩	1983
建物14	なし	10B	岡・山	1984
建物15	なし	10B	岡・山	1984
建物16	なし	10B	岡・山	1984
建物17	なし	11B・C	岡・山	1984
建物18	なし	11C	岡・山	1984
建物19	なし	15・16C・D	岡・高・阿	1988
建物20	なし	15・16D	岡・高・阿	1988
建物21	No39	15・16D	岡・高・阿	1988
建物22	No40	16D	岡・高・阿	1988
建物23	No42	16C・D	岡・高・阿	1988
建物24	なし	16D	岡・高・阿	1988
建物25	No41	16・17C・D	岡・高・阿	1988
建物26	No44	16C	岡・高・阿	1988
建物27	なし	16・17C	岡・高・阿	1988
建物28	No43	16・17C・D	岡・高・阿	1988
柱穴列1	なし	17C	岡・高・阿	1988
柱穴列2	なし	17C	岡・高・阿	1988
柱穴列3	なし	17C	岡・高・阿	1988
柱穴列4	No28	17C	岡・高・阿	1988
井戸11	No15	17C・D	岡・高・阿	1988
土壌60	土2	2C	井・平	1984
土壌墓1	No16土壌墓	10B	柳・岩	1983
土壌墓2	No18土壌墓	9D	柳・岩	1983
土壌墓3	土壌墓2	11B・C	岡・山	1984
土壌墓4	土壌墓1	10・11C	岡・山	1984
土壌墓5		11C	岡・山	1984
土壌墓6		11C	岡・山	1984
土壌墓7		11C	岡・山	1984
土壌墓8	No14	16C・D	岡・高・阿	1988
土壌墓9	No13	16C	岡・高・阿	1988
溝36	No12溝	9C	柳・岩	1984
溝37	No5	10・11B	岡・山	1984
溝38	No6	10・11B・C	岡・山	1984
溝39	No8溝・No4溝	9~11B~D	柳・岩・岡・山	1983・4
溝40	No11	15・16C	岡・高・阿	1988
溝41	No12	15・16D	岡・高・阿	1988
溝42	No22・25	17・18D	岡・高・阿	1988
溝43	No24	17・18D	岡・高・阿	1988
溝44	No23	17・18D	岡・高・阿	1988
溝45	No21	17・18C・D	岡・高・阿	1988
溝46	No27	18C	岡・高・阿	1988
溝47	No10	18C・D	岡・高・阿	1988
溝48	No19	18C・D	岡・高・阿	1988
溝49	No18	18C	岡・高・阿	1988
溝50	No16	19C・D	岡・高・阿	1988
溝51	No20	19C	岡・高・阿	1988
土器溜り3		40C	井・平	1984
竪穴住居21	H-3	39C・D	井・平	1984
竪穴住居22	H-4	39C	井・平	1984
竪穴住居23	H-5	39・40C	井・平	1984
土壌61	P-3	38C	井・平	1984
土壌62	P-5	39C	井・平	1984
土壌63	P-7	39C	井・平	1984
土壌64	P-50	39C	井・平	1984
土壌65	P-69	39C	井・平	1984

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
土壌66	P-58	39C	井・平	1984
土壌67	P-65	39C	井・平	1984
土壌68	P-49	39C	井・平	1984
土壌69	P-47	39C	井・平	1984
土壌70	P-48	39C	井・平	1984
土壌71	P-46	39C	井・平	1984
土壌72	P-62	39C	井・平	1984
土壌73	P-104	39C	井・平	1984
土壌74	P-87	39C	井・平	1984
土壌75	P-34	39C	井・平	1984
土壌76	P-106	39C	井・平	1984
土壌77	P-88	40B	井・平	1984
土壌78	P-105	39C・40B	井・平	1984
土壌79	P-102	40C	井・平	1984
土壌80	P-114	40B・41C	井・平	1984
土壌81	P-53	39C	井・平	1984
土壌82	P-121	39C	井・平	1984
土壌83	P-51	39C・D	井・平	1984
土壌84	P-112	39C	井・平	1984
土壌85	P-113	39C	井・平	1984
土壌86	P-97	39D	井・平	1984
土壌87	P-107	39C	井・平	1984
土壌88	P-56	40C	井・平	1984
土壌89	P-61	40C	井・平	1984
土壌90	P-67	39C	井・平	1984
土壌91	P-66	40C	井・平	1984
土壌92	P-63	40C	井・平	1984
土壌93	P-64	40C	井・平	1984
土壌94	P54	40C	井・平	1984
土壌95	P-59	40C	井・平	1984
土壌96	P-55	40C	井・平	1984
土壌97	P-57	40C	井・平	1984
土壌98	P-118	40C	井・平	1984
土壌99	P-6	38C	井・平	1984
土壌100	P-9	38・39C	井・平	1984
土壌101	P-4	38C	井・平	1984
土壌102	P-70	38C	井・平	1984
土壌103	P-123	38C	井・平	1984
土壌104	P-95	38C	井・平	1984
土壌105	P-8	38C	井・平	1984
土壌106	P-96	39D	井・平	1984
焼土面1	焼土遺構1	38C	井・平	1984
焼土面2	焼土遺構2	39C	井・平	1984
溝52	溝25	40B・C	井・平	1984
溝53	溝26	40・41C	井・平	1984
井戸12	井戸2	40B・C	井・平	1984
土壌107	土壌2	39C	井・平	1984
製塩炉	製塩炉	40B・C	井・平	1984
溝54	溝28	38C	井・平	1984
溝55	溝27	38C・D	井・平	1984
溝56	溝21	38D	井・平	1984
溝57	溝22	40C	井・平	1984
溝58	溝23	40C	井・平	1984
溝59	溝24	40C	井・平	1984
溝60	溝18	40・41C	井・平	1984
溝61	溝20	39・40C	井・平	1984
溝62	溝19	39・40C	井・平	1984
水田2	なし	37・38C・D	井・平	1984
水田3	なし	40・41C	井・平	1984
水路4	溝17	39・40C	井・平	1984
土器溜り4	土器溜り2	39C	井・平	1984
竪穴住居24	H-1	39・40C・D	井・平	1984
井戸13	井戸3	40C	井・平	1984
井戸14	井戸1	40・41C	井・平	1984
溝63	溝16	40C	井・平	1984
溝64	溝13	40・41C	井・平	1984
溝65	溝14	40C	井・平	1984

新旧遺構名対照表

報告書遺構名	調査時遺構名	調査区	担当者	年度
溝66	溝15	40C	井・平	1984
土器溜り5	土器溜り1	40B	井・平	1984

担当者欄の文字は柳=柳瀬、井=井上、岡=岡本、平=平井、山=山本、高=高田、阿=阿部の略語である。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ひゃっけんがわほらおじまいせき							
書名	百間川原尾島遺跡 5							
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査							
巻次	11							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	106							
編著者名	柳瀬昭彦・高田恭一郎・岡本寛久・平井泰男・井上 弘							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3 Ⅷ 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700 岡山県岡山市内山下2-4-6 Ⅷ 086-224-2111							
発行年月日	西暦 1996年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 〃 〃	東 経 〃 〃	調査期間	調査 面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひゃっけんがわほらおじま 百間川原尾島	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市  ほらおじま 原尾島	33201		34度 40分 12秒	133度 57分 23秒	三股ヶ・低水路 2～4-C・D 19840402～0522	1000	旭川放水路 （百間川） 河川改修に 伴う事前調 査
						三股ヶ・丸田・橋 梁P R Ⅱ 9・10-B・D 19830421～1025	720	
						丸田・低水路 10・11-B・C 19850107～0322	330	
						丸田・低水路 16～19-C・D 19880818～ 19890331	1405	
						三ノ坪・横田・低水路 37～40-B～D 19840523～ 19850111	1502	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物	特 記 事 項			
百間川原尾島	集落 生産遺跡	縄文時代後期	土器溜り 1カ所	縄文土器、弥生土 器、土師器、須恵 器、備前焼、輸入陶 磁器、石製品（石包 丁・石槍・石鏃・石 斧・小形方柱状石斧・ 扁平片刃石斧・石錘・ 砥石・石製巡方）、木 製品（壺・広鏃・横 鏃・鋤・斧柄・人形・ 斎串・刀形・鏃形・ 櫛・曲物・呪符木簡・ 碗・底板）、金属器 （鏃・鏃・刀子・湖 州鏡・輸入銭）、土製 品（土錘）、玉類（子持 勾玉・勾玉・管玉・ 白玉・ガラス小玉）	弥生時代前・中期の 集落を検出し、土器・ 石器の良好な一括資 料が出土			
		弥生時代 前・中期	旧河道 1条 竪穴住居 3軒 土壇 9基 炉址 2基 溝 13条	弥生時代後期の母村 的大集落を検出し、 遺構の配置と変遷を 捉えた				
		弥生時代後期	竪穴住居 9軒 建物 8棟 井戸 7基 土壇 55基 製塩炉 1基 溝 262条 土器溜り 1カ所 水田 3カ所 水路 4条	弥生時代後期の製塩 炉を検出				
		古墳時代	竪穴住居 12棟	弥生時代後期末の水 田と水路を検出し、 幹線水路から水田へ の配水形態を確認  弥生時代後期の竪穴 住居から内面に水銀 朱の付着した把手付				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
			建物 6棟 井戸 6基 土壇 2基 溝 14条 土器溜り 1カ所		の片口容器が出土 古墳時代の大溝から 大量の土器・木製品 とともに子持勾玉が 出土
		古代	溝 1条		古代の大溝から墨書 土器、石製巡方、木 製模造品等が出土 し、周辺での大祓が 推定される
		中世	建物 14棟 井戸 1基 土壇墓 9基 溝 16条		鎌倉時代の土壇墓か ら人骨とともに湖州 鏡と輸入陶磁が出土 室町時代の屋敷地を 区画した村落を検出



1. 2~4C区土層断面  
(北から)



2. 17C区土層断面  
(南から)

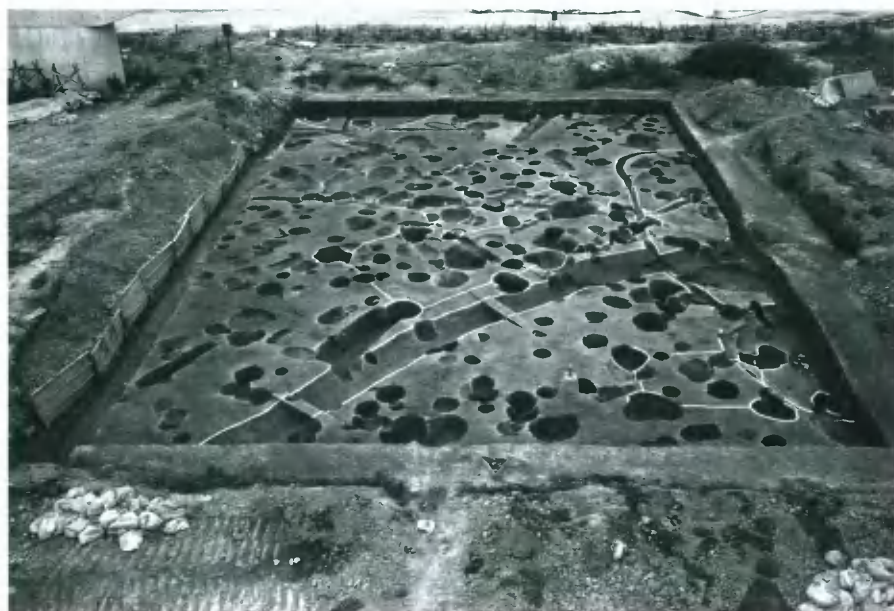


3. 39C区土層断面  
(南西から)

図版2



1. 9・10B～D区弥生時代後期遺構全景（北東から）



2. 10・11B・C区弥生時代後期遺構全景（南西から）



1. 16~19C・D区中世遺構全景（北から）



2. 37~40B~D区弥生時代前・中期遺構全景（南西から）



図版4



1. 旧河道 (南西から)



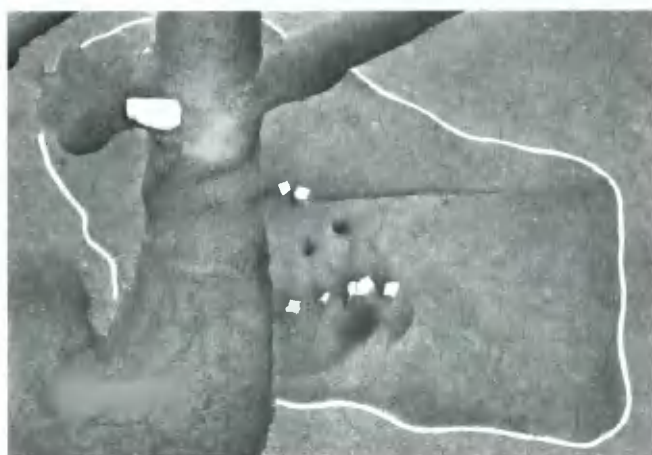
2. 旧河道 断面 (南から)



3. 旧河道 出土遺物



1. 土壇 1 (南東から)



2. 土壇 4 (西から)

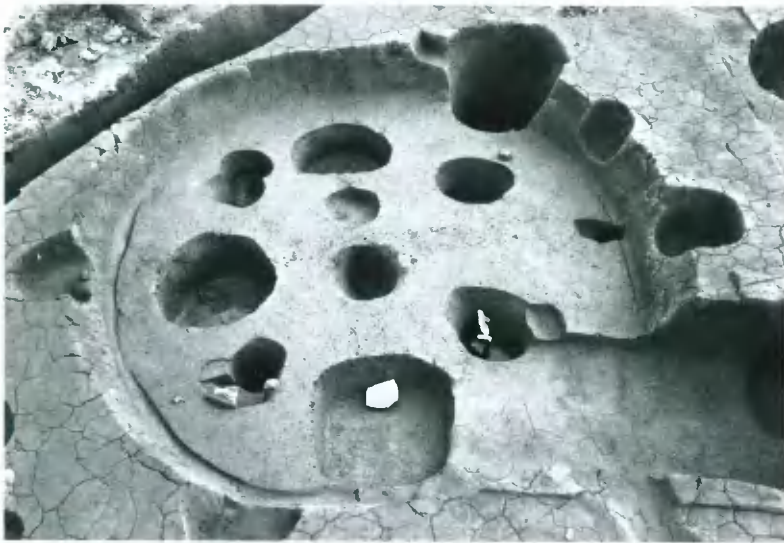


3. 17~18C・D区弥生時代  
前・中期遺構 (北東から)

図版6



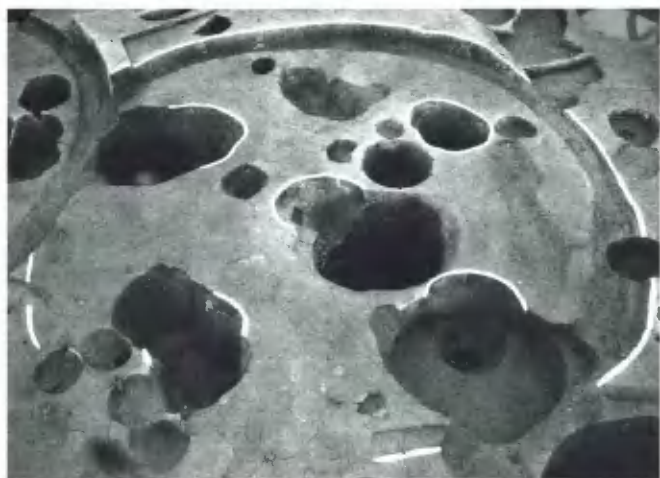
1. 竪穴住居 1 (北東から)



2. 竪穴住居 2 (北から)・同柱穴 2 (西から)・同 3 (南東から)



1. 竪穴住居3・4 調査風景  
(北西から)

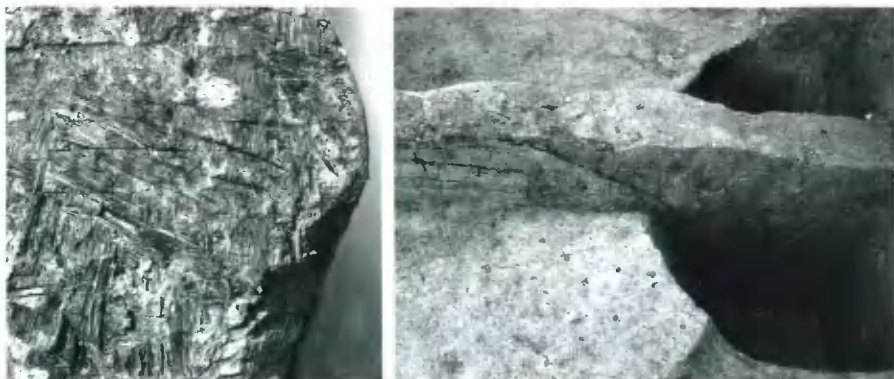


2. 竪穴住居3 (南西から)

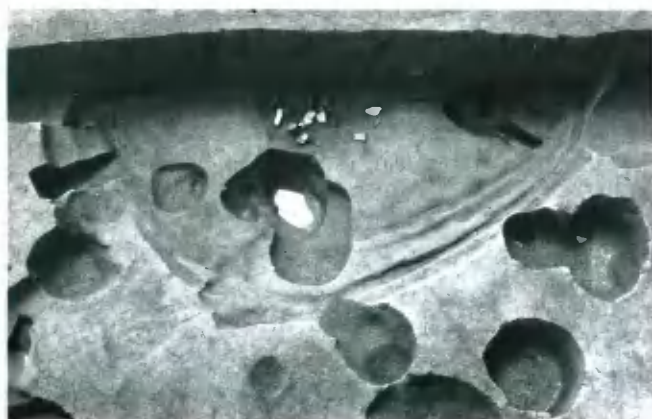


3. 竪穴住居4 (北西から)

図版8



1. 竪穴住居4 床面炭化物・同中央穴と貼床断面（北東から）



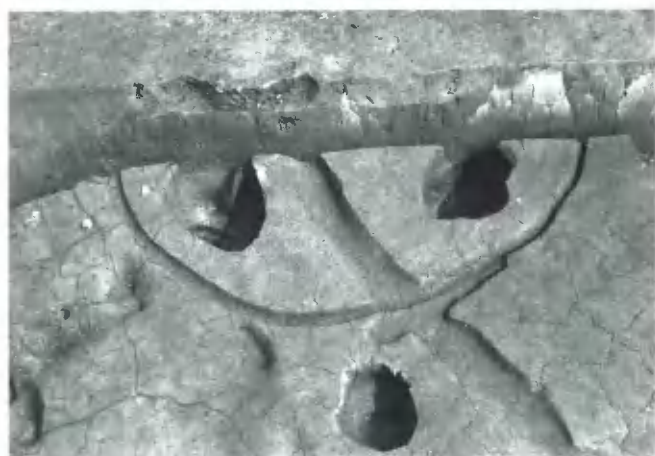
2. 竪穴住居5（北西から）



3. 竪穴住居6（北東から）



1. 竪穴住居7 (東から)

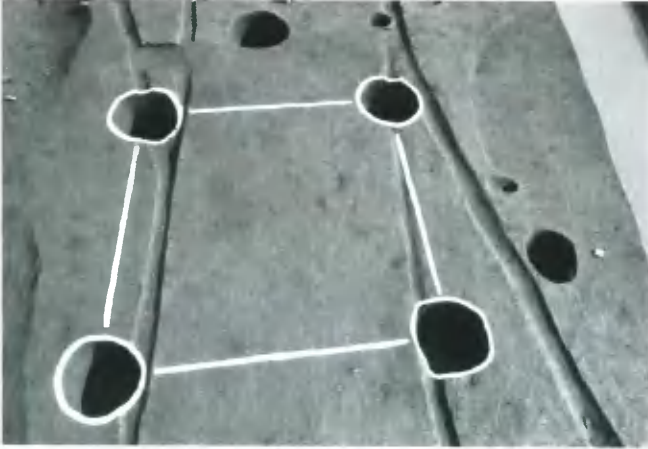


2. 竪穴住居8 (南西から)

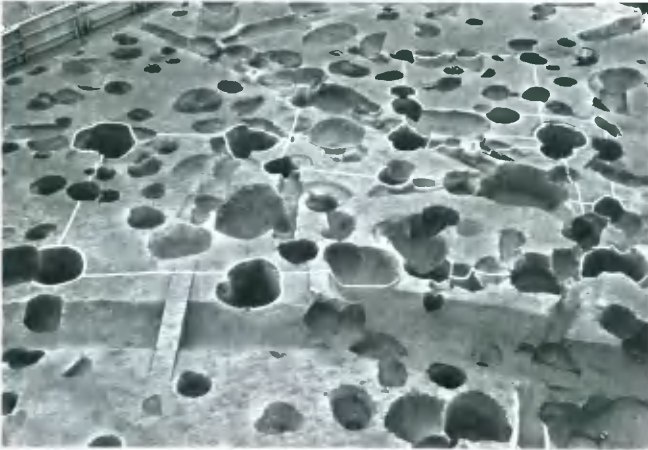


3. 竪穴住居9 (北東から)

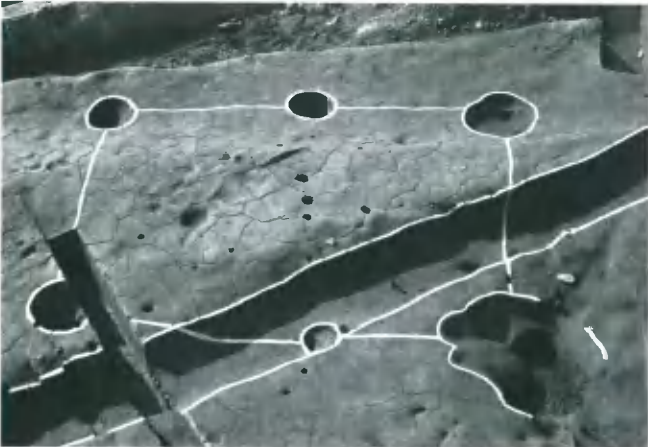
図版10



1. 建物2 (南から)



2. 建物5・7 (南から)



3. 建物8 (南東から)

1. 井戸1 断面 (南から)



2. 井戸1 (東から)・同遺物出土状況 (北西から)



3. 井戸2 断面 (北西から)・同 (南東から)



図版12



1. 井戸3 (南東から)



2. 井戸4 (南西から)



3. 井戸5 断面 (南から)



4. 井戸6 (南東から)

1. 土壙5 (北西から)

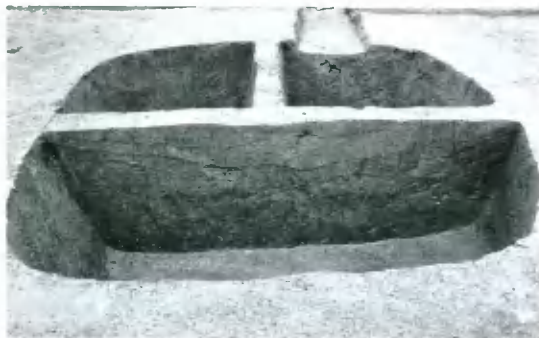


2. 土壙6 (北西から)・同出土勾玉 (南西から)

3. 土壙8 (北西から)



図版14



1. 土壇10 断面 (西から)



2. 土壇11 (北から)



3. 土壇12 断面 (南から)



4. 土壇13 断面 (南西から)



1. 土壙16 (南から)・同 (東から)



2. 土壙18~21 (南西から)



3. 土壙23 (南東から)

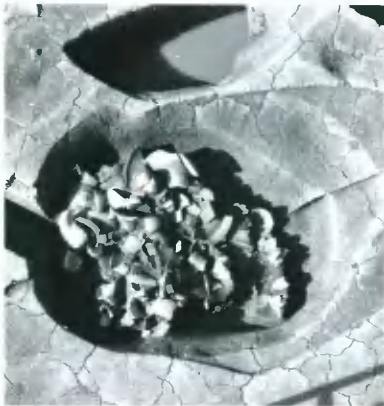
図版16



1. 土壌24 (南西から)



2. 土壌25 (南東から)



3. 土壌26 (南から)



4. 土壌27 (南東から)



5. 土壌28 (東から)

1. 土壙29 (南から)



2. 土壙30 (北西から)



3. 土壙31 (北東から)



4. 土壙38 (南東から)



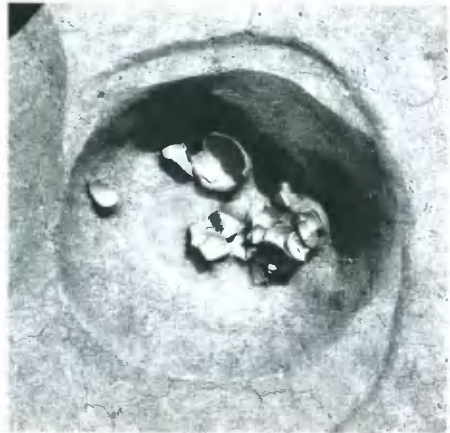
図版18



1. 土壙43 (東から)



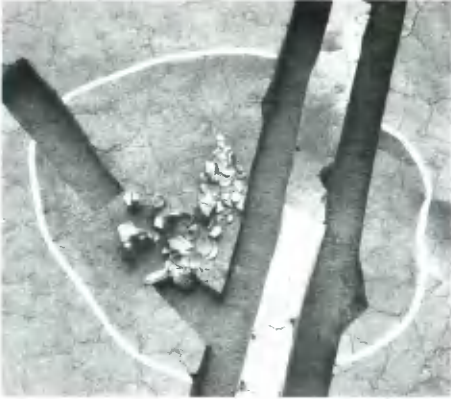
2. 土壙44 (北から)



3. 土壙45 (北から)



4. 土壙53 (南東から)



1. 土壙55 (北から)



2. 土壙57 (北から)



3. 土壙58 (東から)



4. 溝16~21 (北から)



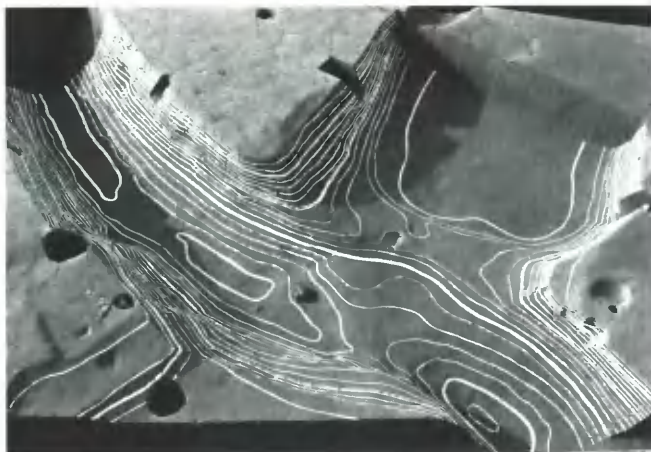


1. 水田1 全景（北から）



2. 水路1・水路2・水田1（北東から）

1. 水路1と水田1の連結部  
(水口) 微地形 (北東から)



2. 水路2 (溝21) 断面  
(南から)



3. 水路3 (溝23) 断面  
(南西から)

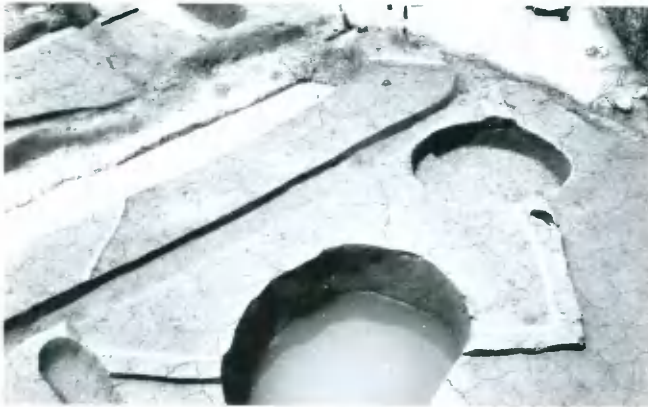




1. 土器溜り1 (東から)



2. 土器溜り2 (南東から)



3. 竪穴住居11 (北東から)



4. 竪穴住居12 (南西から)・同の竈部分 (東から)



1. 竪穴住居14~16 (南西から)



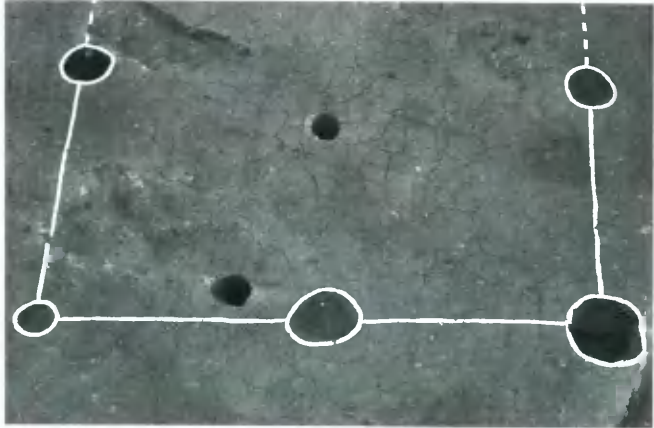
2. 竪穴住居14の竈部分 (南西から)



3. 竪穴住居17 (南から)



4. 竪穴住居20・土壙墓5・  
土壙墓6 (南東から)



1. 建物10 (西から)



2. 建物12・同柱穴の礎盤 (西から)



1. 井戸7・同遺物出土状況（上4層上位・下5層中位）（西から）



2. 井戸8・同遺物出土状況（南から）



1. 井戸10 (南東から)・同出土 井側



2. 溝29・同断面 (南から)



1. 溝35 調査風景 (南から)



2. 溝35 (北から)





1. 溝35南堰 (北から)

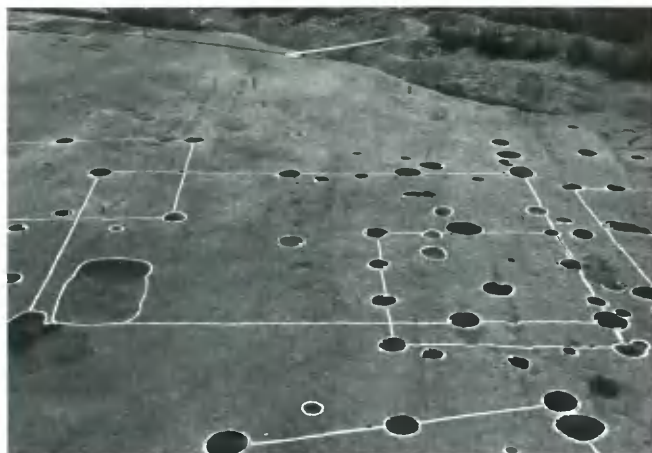


2. 溝35南堰 横断面 (西から)

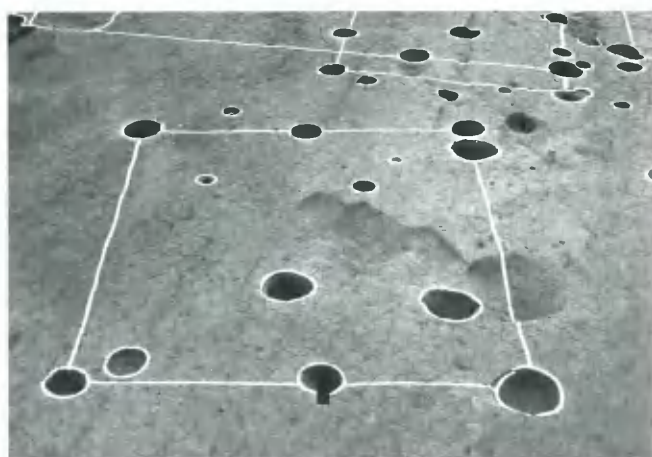


3. 9・10B・C区中世全景  
(南西から)

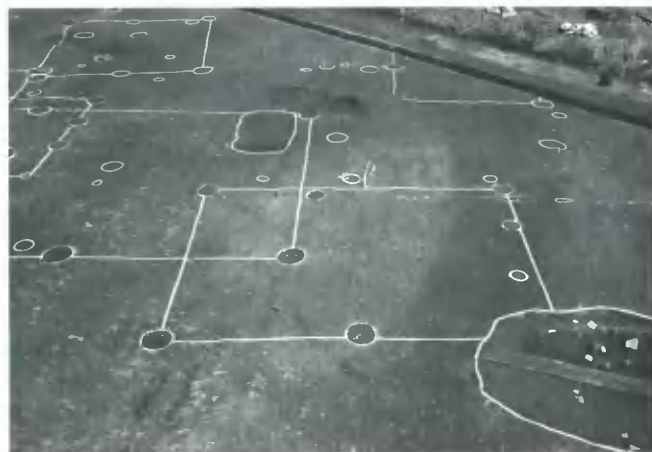
1. 建物23・25・土壙墓9  
など（北から）



2. 建物26（北から）



3. 建物27・28など  
（南から）

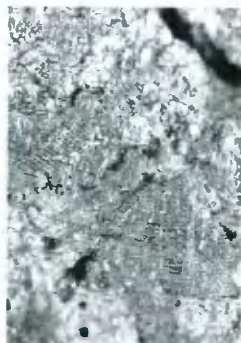




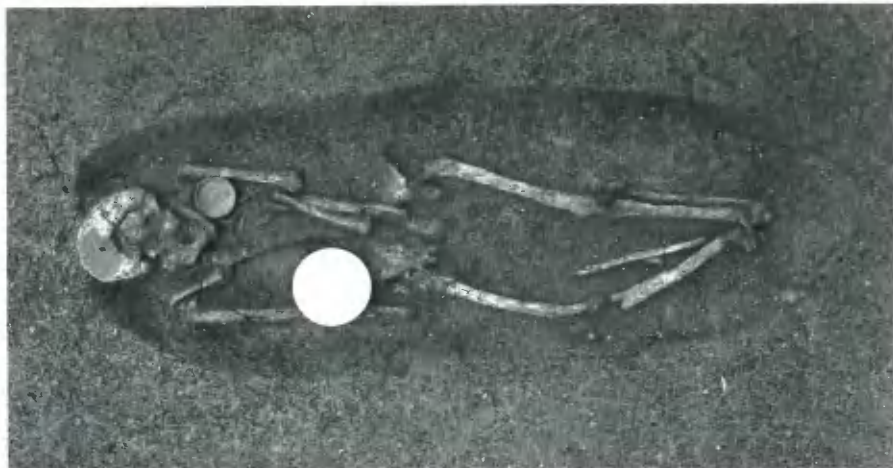
1. 井戸11 (南西から)・同遺物出土状況 (南東から)



2. 土壙60 (西から)



3. 土壙墓1・同底面の織物痕跡 (西から)



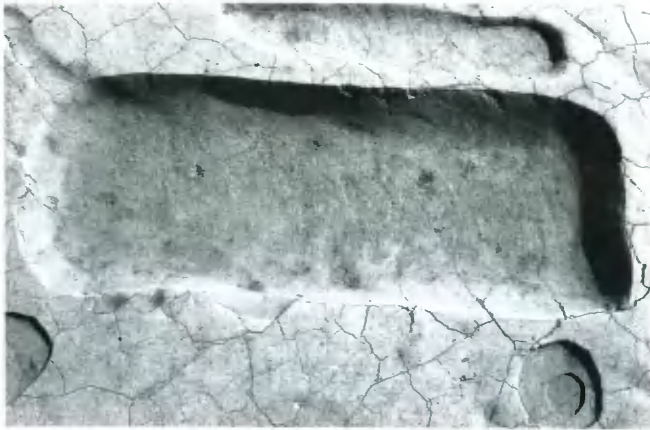
1. 土壙墓2 (北から)



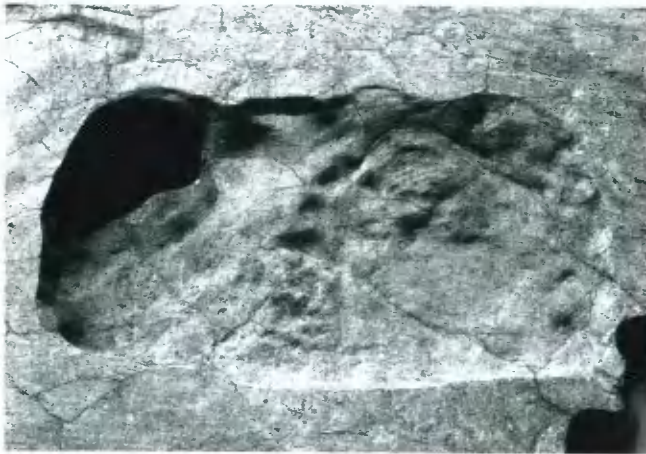
2. 土壙墓3 遺物出土状況  
(南から)



3. 土壙墓4 (東から)・同遺物出土状況 (西から)



1. 土塚墓8 (北から)



2. 土塚墓9 (東から)



3. 溝39・同断面 (東から)



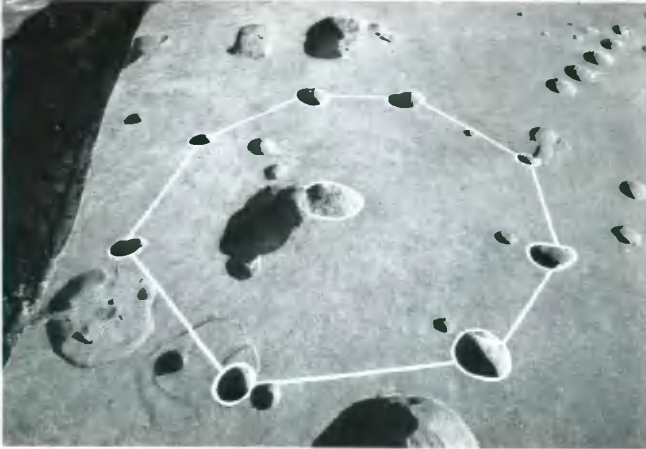
1. 溝45 (北から)・同断面 (南から)

2. 土器溜り3北西半  
(南東から)

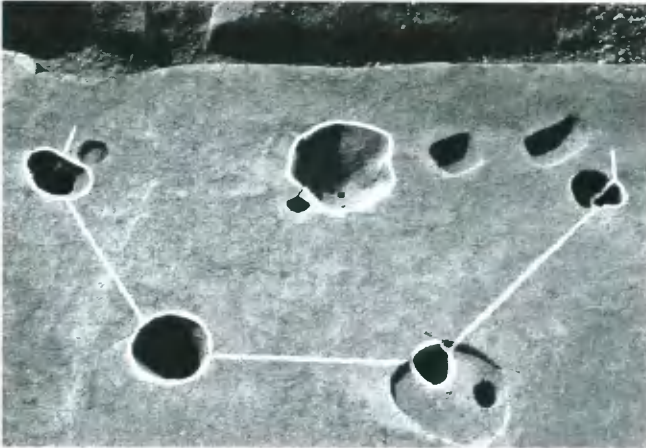


3. 土器溜り3南東半  
(北西から)

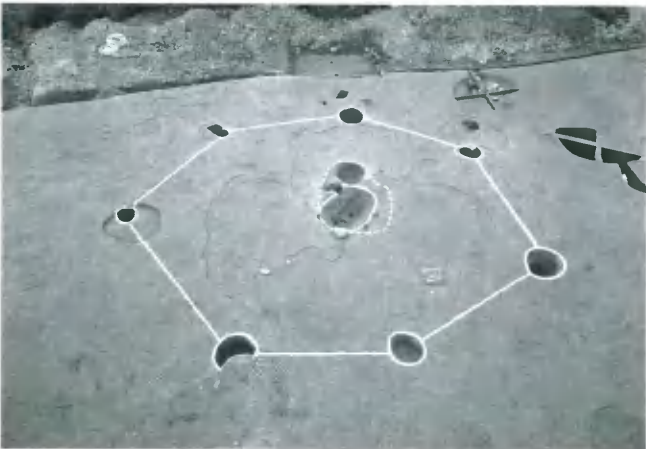




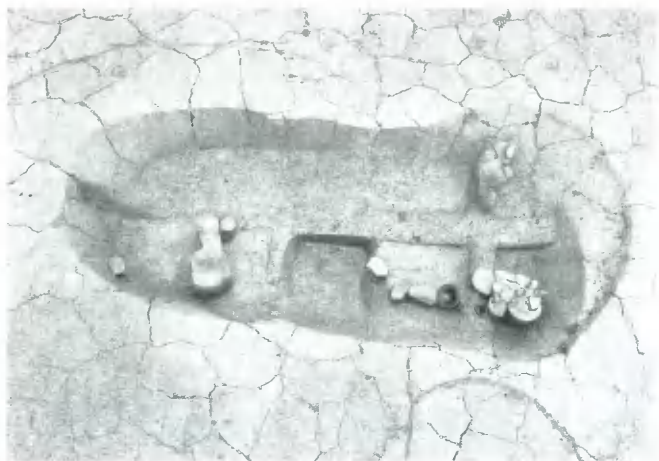
1. 竪穴住居21 (南東から)



2. 竪穴住居22 (北東から)



3. 竪穴住居23 (東から)



1. 土壙64 (南から)



2. 土壙62 (南東から)

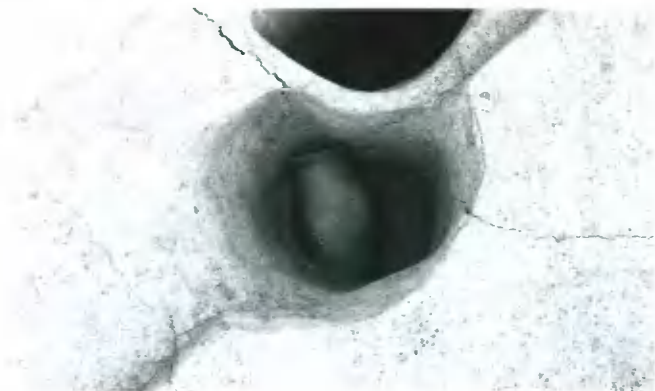


3. 土壙65 (南から)



4. 土壙69 (東から)





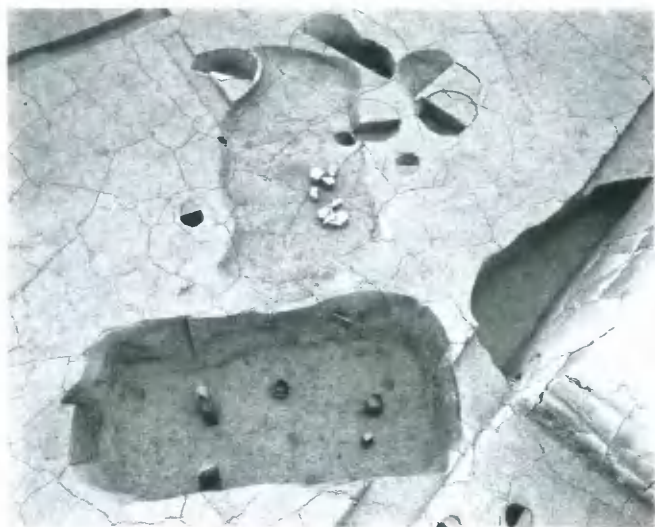
1. 土壙73 (西から)



2. 土壙74 (西から)



3. 土壙75 (東から)



4. 土壙76・78・79 (東から)



1. 土壙80 (西から)



2. 土壙84・85 (南西から)



3. 土壙89 (南西から)・同石器  
出土状況 (北から)・同作業  
状況



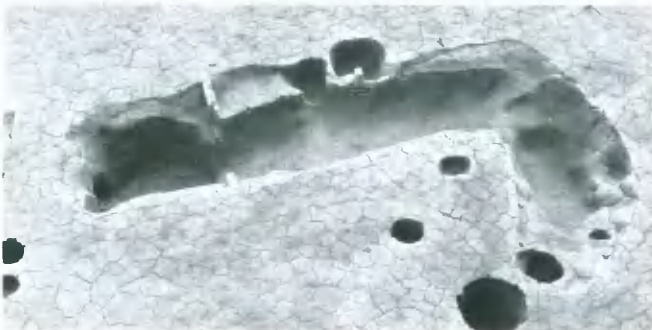
図版38



1. 土壌98 (南西から)



2. 土壌99 (南から)



3. 土壌100 (北から)

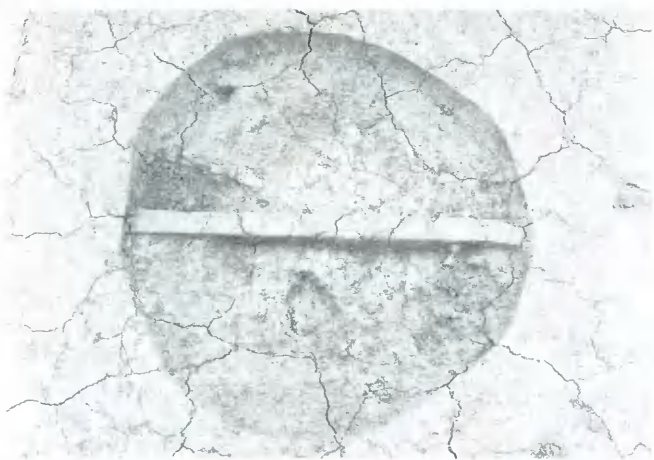


4. 土壌103 (北西から)

1. 焼土面 1 (南西から)



2. 焼土面 2 (北西から)



3. 溝52・53 (東から)



図版40



1. 井戸12 (西から)



2. 土壙107 (南西から)



3. 製塩炉 (西から)



1. 溝57~62 (西から)



2. 水田2北半・同南端 (南西から)



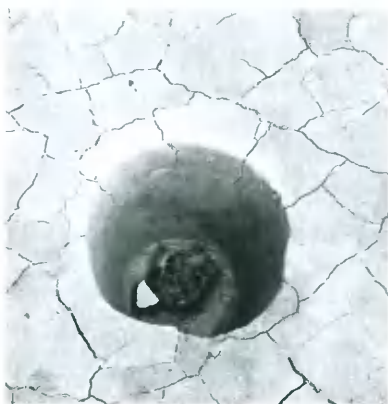
3. 水路4・水田3 (北から)



1. 土器溜り4 (西から)



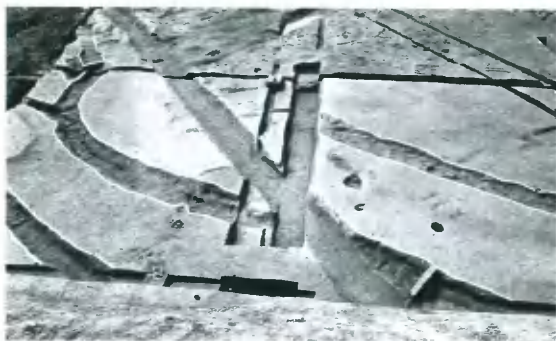
2. 竪穴住居24 (北東から)



3. 井戸13 (南東から)



4. 井戸14 (北から)



5. 溝63~66 (南東から)



6. 土器溜り5 (南西から)



1



2



7



6



9



10



3



23



24



30



32



25



38



40





44



43



47



69



68



72



74



75



50



51



52



54



73



53



55



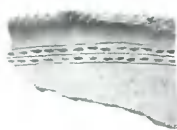
48



49



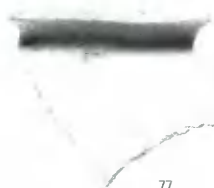
45



59



67



77



79



102



105



117



119



135



144



133



146



152



153



156

旧河道、竖穴住居 1~6 出土遺物

图版46



177



178



179



180



181



194



204



198



203



208



215



211



212



225



226



221



213



224



227



236



238



240



243



245



249



262



277



278



280



281



283



321



292



296



336



293



326



342



329



339



344



354



349



352



346



351



392



394



390



317



402



404



405



408



407



420



414



418



432

土壙16 出土遺物



460



461



462



463



465



466



464



472



485



471



492



486



490



493



图版52



498



510



521



522



526



535



538



525



547



548



555



552



551



554



556



562



587



561



585



569



564



567



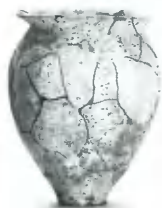
574



584



565



571



577



579



588



590



615



616



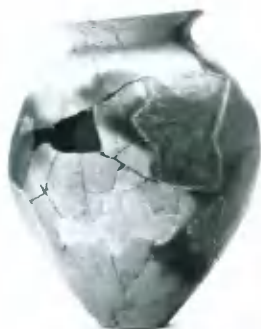
619



620



623



639



636



638



644



657



664



668



681



695



682



728



724



725



721



723



705



735



746



731



732



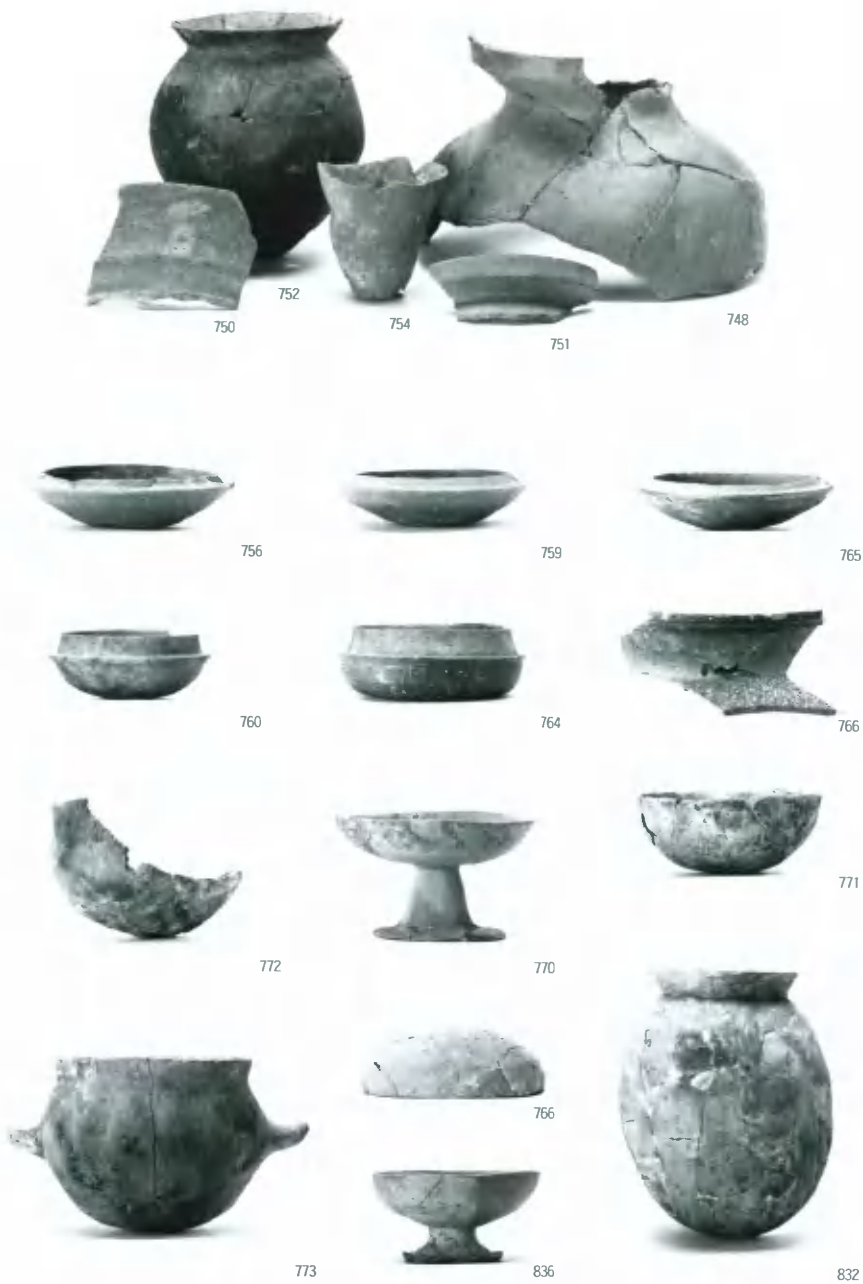
740



741



749



水路1~3、竖穴住居12~14・16、土壙59 出土遺物



780



781



785



778



779



786



795



802



801



811



809



817



823



863



864



865



871



876



867



872



877



880



875



878



581



869



898



882



890



899



883



891



894



869

J 17



913



931



940



917



920



936



944



921



937



945



926



938



946



927



939



949



950



928



935

家  
酒  
下  
大



929



942



948





M12



970~975



M13



969

968



981



984



982



990



1015



1208



1029



1030



1036



1049



1052



1077



1061



1074



1078



1072



1104



1127



1140



1124



1138



1165



1168



1169



1183



1186



1194



1203



1206



1209



1210



1207



1205



1212



1213



1211



1219



1216



1221



1215



1225



1226



1251



1228



1230



1244



1234



1239



1250



1253



1254



1255



1256



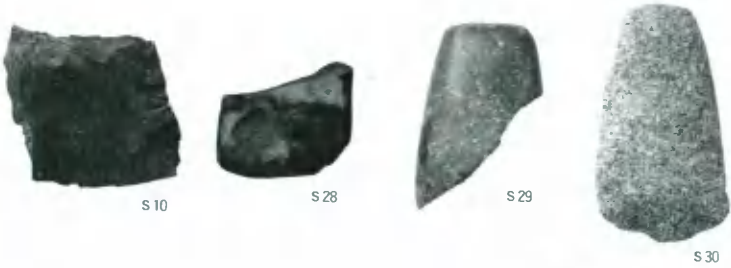
1258



1. 製塩炉、土壙107、溝60・井戸13 出土遺物



2. 旧河道 出土石製品



S 10

S 28

S 29

S 30



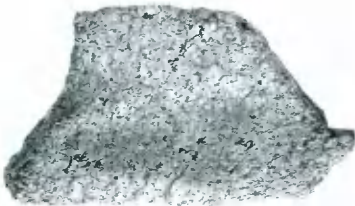
S 32

S 31

S 33



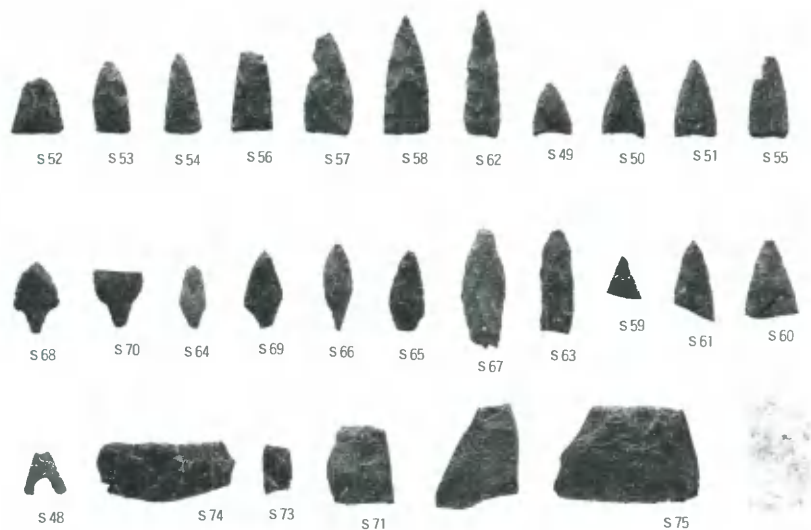
S 34



S 35



S 40



1. 竖穴住居 2 出土石製品



2. 38~40区土壇 出土石製品





S 168



S 169



S 222



S 182



S 181



S 183



S 180



S 179



S 178



S 204



S 203



S 202



S 201



S 210



W 1



W 2



W 3



W 4



W 18



W 10



W 11



W 15



W 19



W 17



W 14



W 16



W 20

木製品（弥生時代～古墳時代）（約1/5）

図版70



木製品（奈良時代～中世）（約1/5）



約2/5



M6



M10



M9



M7



M8

約2.5



M32



M16



M19



M24



M22



M21



M23



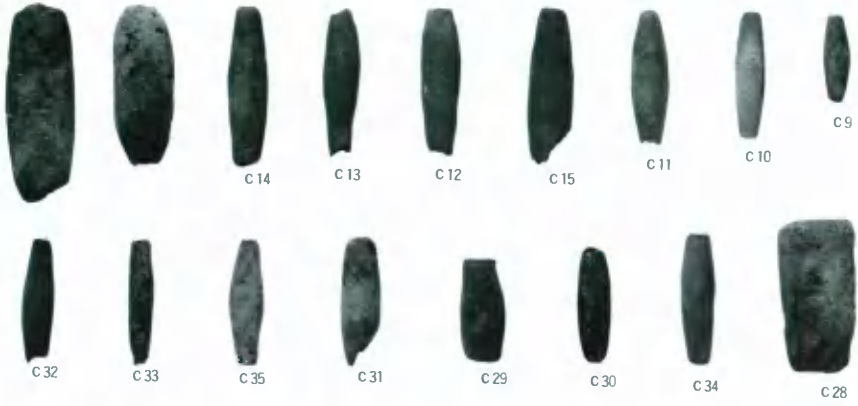
M20



M18

約2.5

图版72



岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106

## 百間川原尾島遺跡 5

旭川放水路（百間川）改修  
工事に伴う発掘調査 XI

1996年3月20日 印刷

1996年3月31日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発 行 建設省岡山河川工事事務所  
岡山市鹿田町2-4-36  
岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印 刷 友野印刷株式会社  
岡山市高柳西町1-23